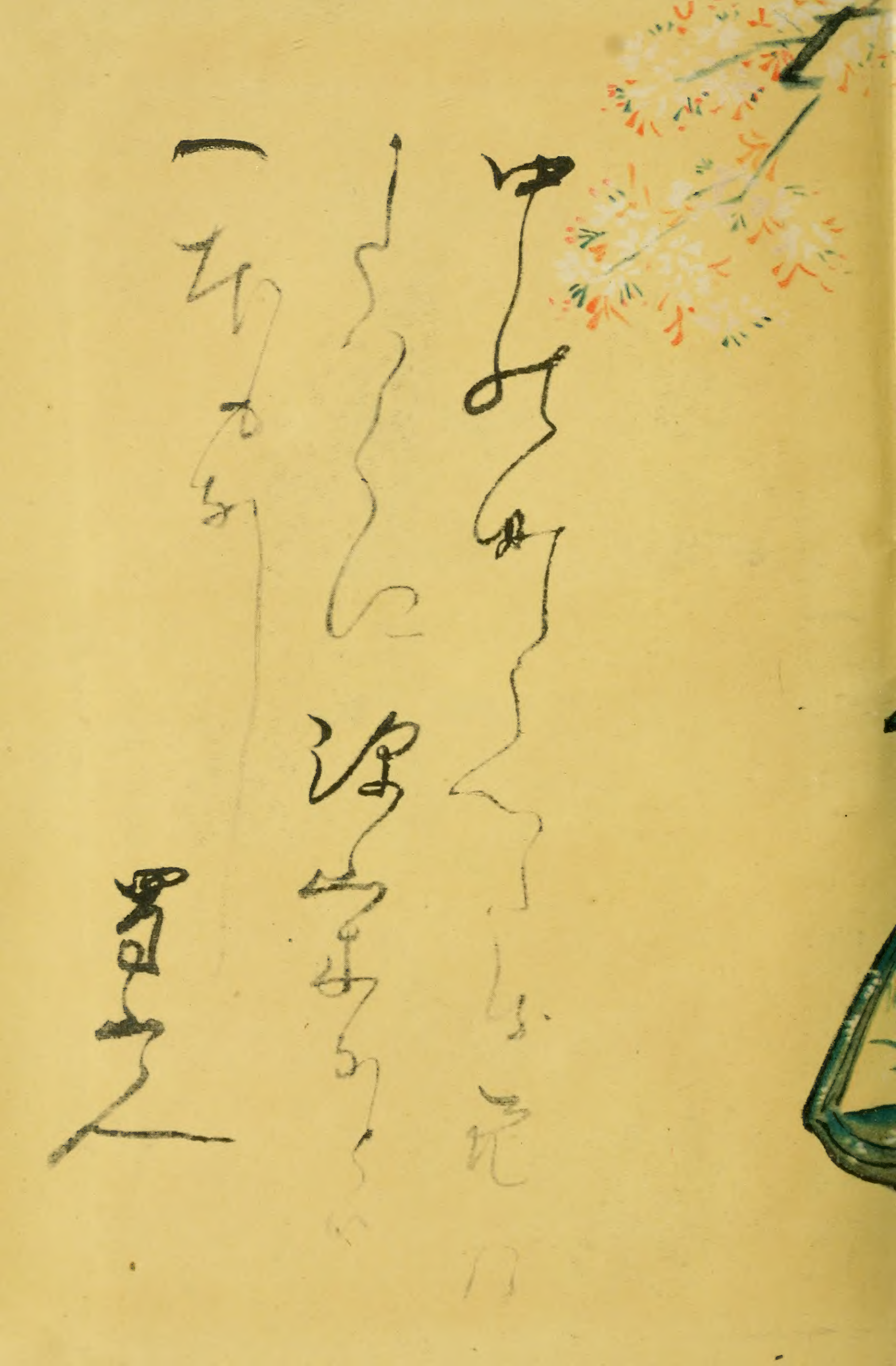
PL
777
.5
T3
v.7

Takagi, Kōji
Sharehon taikei

East
Asiatic
Studies

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY



Digitized by the Internet Archive
in 2009 with funding from
Ontario Council of University Libraries

http://www.archive.org/details/sharehontaikei07taka

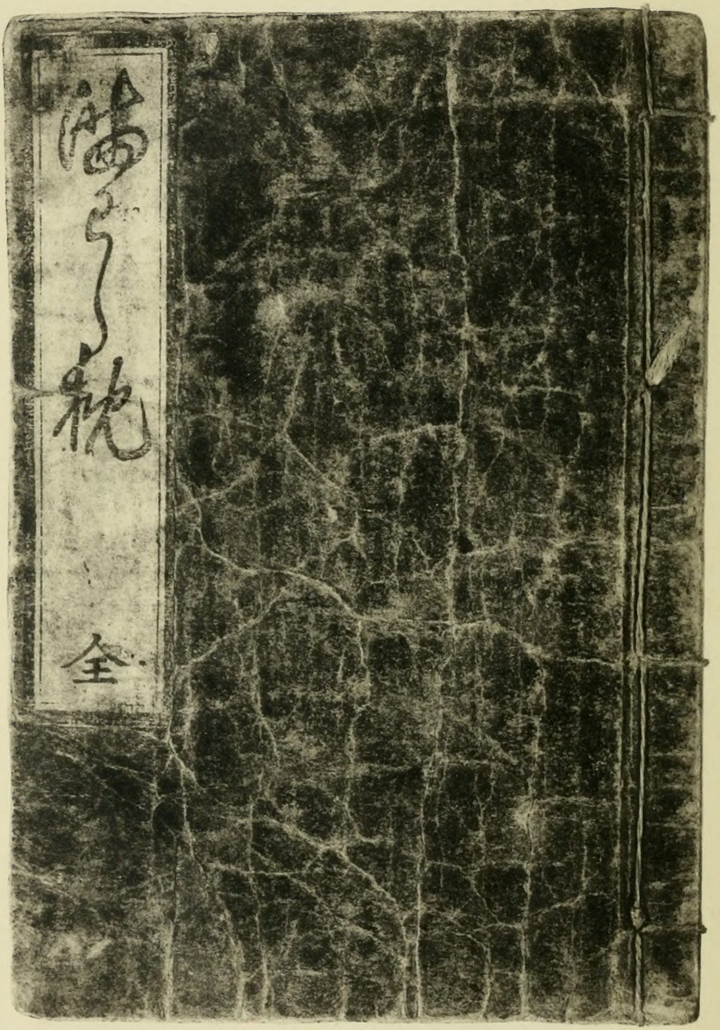
洒落本大系

第七巻

PL
777
.5
T3
V.7

LIBRARY
SEP 24 1966
UNIVERSITY OF TORONTO

1128122



まわし枕の表紙

錦之裏の內容

洒落本大系第七巻目次

解題……………………一―六五
女郎買糠味噌汁……………………解題一……本文一
青樓五ッ雁金……………………四……三
曾我糠袋……………………六……五九
夜半茶漬……………………九……七九
吉原楊枝……………………一二……一〇一
自惚鏡……………………一四……一二七
廓大帳……………………一七……一六三
志羅川夜船……………………一九……一九三

通氣粋語傳……二一……二一九
中洲之華美……二三……二四九
南極驛路雀……二六……二七九
雙床滿久羅……二八……三一三
戯作四書京傳豫誌……三〇……三三三
傾城買四十八手……三二……三六五
繁千話……三四……四〇一
田舍談義……三七……四二七
格子戯語……三九……四五三
意學丸呑傾城眞之心……四二……四八五
染抜五所紋……四四……五一五

文選臥坐……四七……五四一

仕懸文庫……四九……五六五

傾城諺種……五二……六〇三

娼妓絹籭……五四……六四五

南品傀儡……五六……六七七

青樓晝之世界錦之裏……五八……七〇一

睟のすじ書……六一……七二七

北廓鷄卵方……六三……七五五

目次終

解題

山口剛閲
高木好次記

▲女郎買之糠味噌汁　原本　縱五寸二分　横三寸七分

赤蜻蛉作　天明八年刊

書名は自叙に「世人みな醉らば何ごとその糟を喰つて其汁をすゝらざる（中略）予れまた女郎買の糠みそ汁を喰つて其糟臭き新酒のほろ醉きげんに臂をまげて枕とし樂また其中にあり」と云へるにて承知出來よう、本書は又一名「浮世假宅夕ロ舌」と云ふ、内容が中洲の假宅を取材して居るに因める結果である、

作者赤蜻蛉は何人か傳を詳にしない。序の山東京傳の傳記は、本大系第六卷所載「令子洞房」の項を參照ありたい。

本書の對象となつた中洲は洒落本には屢々見るところである、「中洲雀」（本大系第二卷所載）

「大抵御覽」(同、第三卷所載)「中洲之華美」(本卷所載)等が即ちそれである、中洲の歷史に就いては「中洲雀」の項を參照ありたい。

天明七年十一月九日曉卯の刻過に吉原角町から出火して廓中殘らず燒失した、例として花川戸あたりへ假宅すべきであつたが、花川戸まで類燒して居るので止むを得ず遠く大橋側、深川新地、八幡前、高輪、中洲等へ假宅したのである、然し「中洲之華美」によれば、最初淺草寺前の並木に一旦假宅したのが、後に三ッ股即ち中洲へ移轉したと記して居る、これも事實であつたらうかと想ふのである。

安永四年町家の完成を見た中洲は、忽ちにして殷賑の極に達して、よく兩國の繁榮の株をもとり、輕い岡場所として中洲情調を誇るに至つた、然るに突然假宅の出現によりその情調が破壞された、本格的な重々しい吉原遊里と氣輕く簡易な岡場所の空氣とが交叉して、こゝにまた別な境域を作る樣になつた、つまり兩者がぴたりと適合しきれない、一方では喧騷な、一方では寂寥な空氣に、興味を持つた作者の仕事が本書となつたのである。

本書は千犬、頭谷、英江と云ふ正風體の大通三人と醫者の呑庵とが、中洲の丸藤と云ふ酒樓で馬鹿騷ぎをする發端と、秋色庵蘭支を訪れた千犬、頭谷の二人が連つ立つて、もふ丸藤へは

行かずして濱狹へ行つて遊ぶ、隣座敷では役者氣取りで登樓した不通客の入つた四人一座、遂にその不通客の正體を暴露する秋色庵の段とより成つて居る。

本書の構想は、先づ發端及び秋色庵の段との區別からして既に不用意を示して居る、本格的吉原の遊を脫して、輕い岡場所氣分を吉原の假宅の中から味得しようとする、發端だけの場合の方が無難である、これが又相當に描寫されて居るのである、秋色庵の段に於て吉原で遊ばれなかつた役者を、不通客の役者氣取りの登樓によつて、格式にとらはれない、岡場所としての中洲本來の空氣に、假宅移轉後の情調を出さうとした動機は諒解に苦しまぬところであるが、表現法に於て缺るところのあるのが遺憾な結果を齎して居る。

醫者の呑庵をして蘭語の單語を用ゐさせ、千丈をして唐音で唄を謡はして居るのは、「和唐珍解」(唐來三和作、天明五年刊、本大系第六卷所載)の影響下の作品と推測されるのである、作者もこれを使ひ得る學識のある人であり、それを得意とする程の人物でもあつたのである。又

どふもぬしなぞのやうにミへのないきやくしゆれありいせんなんでもいひたいまゝをいゝなんしてさわきたいよふにさわぎなんすがよふおすよいつそミへをなんしたりをつな身をなんす客衆（きやく）れおかしうおすよ通（つう）といふも外でもありいすまい人にあたる事もいゝなんせず

ミへもかくもあまへでおもしろく遊ぶなんすがつふといふものでありいしよう
と云ふ點を、これより後に出る役者氣取りの不通客とを對象して考へるとき、作者の通に對
する定義も承知されるのである。

▲青樓五ッ雁金（せいろういつゝかりがね）　原本　縱六寸 橫四寸二分

梅月堂梶人作　天明八年刊

書名は浪花五人男の一人、雁金文七とその相方の遊女淸川との情事の取材に因める命名であ
らう。

作者梅月堂梶人は、梅暮里谷峩の初號と云はれる、同人の傳記は、本大系第八卷所載「傾城
買二筋道」の項を參照ありたい、本文終りに林月堂とあるがこれは梅月堂の間違ひであらう。
跋の浮梁軒は何人か詳らかでない。

本書の構想は浪花五人男の一人、雁金文七が淸川と云ふ遊女に馴染んで契りを深めて通つて
行つたが、家の不首尾や茶屋の勘定未支拂で廓へも來られなくなつた、淸川は角左衞門と云ふ
客から强ひられて居る、角左衞門には五人男の一人雷庄九郎が付いて悪智恵をかつて居る、淸

川は文七の茶屋の拂をしようと二十兩の金を角左衞門に無心する、或晩角左衞門が來た、文七も來た、角左衞門は卽座に身請けしようとするが、淸川の留保もあつて遂に庄九郎の才量で指を切つてその場を合せる、文七は隣座敷でことの次第を聞いて居て淸川の仕打ちを怒る、がその一切は庄九郎に五人男の他の三人市右衞門、平兵衞、千右衞門等が計畫して角左衞門をかいた事が知れて文七も靜まる、切つて渡した指は庄九郎の足の豆である、軈て身請けの時には一旦無事に廓を去り、土堤八丁へ差しかゝると庄九郎を除いた四人が駕籠を襲ふ、その騷ぎに供について行く庄九郎が淸川を奪つて逃げようと謀むと云ふのである。

本書は實情描寫、心理描寫に重きが置かれて居て、構想は相當纒つて居る、然るに背景、情調に至つては均衡を失して見るべきものがない、これは、この作者の特性であつて他の何れの作品に於ても同じ傾向である、戀しい男の身の上を思つて、せつない苦境にたつ熱烈な遊女の心情と、友人のために心慮をくだく朗かな友情とを描かんとしたものである、そして相當成功して居る、文體は概して流暢に運ばれて居る、これが作品をして價値づけて居ることは實に大きいのである。

本文中に

かのうつされたしミつたがからだ中にはいまわつてにへゆをかけてもさつてやでもぬける
こつちやァねへ（中略）どふでひとつからだてしら玉もちと庄左衛門がかうやくをうるよふな
むまい事にれいかねへ

と云ふさつてやは虱うせ薬の本舗で當時有名であつた、庄左衛門が膏藥は詳かでない。

かりたくにいるおりからほかにきやくと云れなし

と云ふ假宅は、何れの場所へ出來たのであるか到底知られないが、天明七年十一月の吉原大火の結果大橋側、深川新地、八幡前、中洲、高輪等へ出來た中の何れかである。

本書の後編として寛政二年に「染抜五所紋」（本卷所載）を刊行して居る。

▲曾我糠袋　原本　縦五寸二分 横三寸六分

唐洲作　天明八年刊

書名「曾我糠袋」は山東京傳の序の「建久の昔。曾我の曹子になれたる。虎少將が華麗を。今葭原に鳴名たる。散茶に比して矛盾たる佳言」や、作者の自序に「我も昔は信田の狐。今は迷ひの雲晴て。眞如の月に醉を醒し書くもさがなき作者の智恵しぼり出したる一冊を。曾我糠

袋と題し一たとあるにて知られよう。

作者唐洲は、山東京傳の別號と云ふ、同人の傳記は本大系第六卷所載「令子洞房」の項を參照ありたい。

刊年に就いては、本書には只申のはつ春とのみで外に明記はないが、天明八年の申年であることには相違ない。

曾我の史實が戯曲小說類に取材されたのは從來夥しい數に達する、當時の洒落本、黃表紙等にも、新春狂言の吉例として曾我の上演の刺戟を受けて、かなり澤山に取材されて居る。

本書の構想は曾我の兄弟、時致と祐成とが、朝日奈を伴つて吉原へ出かけて丁字屋へ登る、祐成には虎少將と云ふ馴染がある、時致は中の町で知り合ひになつた村琴と云ふのがあり乍ら、新造で我慢して居る、これは一丁目に馴染があつて事の面倒とならうを避けたのである、村琴はぞつこん時致を思つて、その時は又考慮を拂ふとして自分の思ひをかなへようとする、朝日奈は久山と云ふのを相手に遊ぶと云ふだけのものである。

本書の構想には別に見るべきものはない、遊女の魂膽手管が描かれて居るわけではない、時致と村琴との交渉に於て、かすかに時致の發展振りをほのめかして居るに過ぎない、作者の意

圖したところは、曾我をかりて吉原情調を穿んとしたのである、京傳の叙にても「恁地一箇に。五衙を帖で。傾城の言語恐ば喋より溢が如し」と云つて居るにても其の動機を知るに難くない、五丁町に於ける妓樓の穿ちのみでなく、淺草觀音から吉原までの道中の光景も要を得た描寫である、つまり本書は背景が最も優れた出來である、情緒の濃かさも本作者の非凡な觀察の表現によろしきを得たものである。

藝者や遊女に實在の者を登場させたのは、何時も本作者の得意とするところである、行き屆いた細微な觀察がよくその特性を描き得るによつて、斯く優越感の誇りを紙上にたゞよはすのである。

本文中に、

此中風流雅詞京傳が總籬といふ書にくわしければ。こゝに略す

とあるのは天明七年刊の「通言總籬」本大系第六卷所載）を指すのである、こゝに京傳と卒直に云ふところを見ても、唐洲と云ふのが京傳自身の弟子の如く粧ふのが、期せずして暴露されて居るものであらう。

▲夜半(よは)の茶漬(ちやづけ)　原本　縦五寸二分 横三寸六分

山東鷄告、山東唐洲作　天明八年刊

書名の「夜半の茶漬」は本書の内容が一客と女郎の腹(ハラ)によくはいりし如き茶話(チヤワ)なれば。夜半(ヨハ)の茶漬(ヅケ)と題號(ダイゴウ)し」てと京傳の序にあるによつて知られよう。

作者山東鷄告、同唐洲は山東京傳の別號であると云ふ、その傳記は本大系第六卷所載「令子洞房」の項を參照ありたい。跋を書いた玉むちとは何人か詳かでない。

本書の構想は、或客が妓樓へ上つて一小冊を見て居る、それを新造が見付けて客に讀んで貰ふ、その書は題して「美濃近江寐物語」といふことになつてゐる、これは淨瑠璃などによく假用せられる美濃と近江の國境にある、寐物語の里の地名を趣向にとりいれたものであるが、その内容は美濃と近江と云ふ二人の男の寐物語りを、作者が隣座敷に居て聞いて居たものを筆記したのである。

先づ近江が一町目の話をする、近江は去る出入の屋敷の人と一緒に、一町目の或妓樓へ登つた、主客の相方の遊女は近江に思ひを寄せたと見えて、思ふ様にゆかぬのでぶり〳〵する、客

が知りあいの客ヽ座敷へ立つた後で近江はその遊女を床へ引きづり込で打のめし、そこらあたりも散らばるところへ、客の聲がするので近江は櫺子傳ひに逃げてしまふ、客が來たので遊女は氣轉をきかしていきなり客の胸ぐらとつて泣き出す、そして、宵から名代の客人があつたが、行く氣がなくて貴方に盡して居たら、貴方の出かけたにつけ込んで來てこんなにぶつた、と云ふて其の場を濁した、そこへ近江が大部騷しい樣だと知らぬ顏で入つて來た、その客が近江聞けよ斯んな譯だとはなすと云ふ。

次には美濃の番、二丁目に深く契つた遊女があつたが、二十か三十の端金で二階もせかれて居るので、ふさいで居るところへ、用があるから中の町まで來る樣にと呼びに來た、下のてれん茶屋へ行つた所が既に來て居る、二階へ上つて會つたが何の用もない樣子、まして小指を紙でまいて居るのでむつと來てなじつたところが、夜具をして貰ふので中橋の客人にやつたと云ふ、そこで大きく出て一應話があれば高利の金を借りてもしてやるものをと云ふと、遊女が實は指を切つては居ない、さあ夜具をしてくれと云ふ、美濃もぐつと來たがへこまず、夜具もやらうが切れ文をつけてやると云ひ、果ては交した起請を火に入れんとするを、茶屋の女房が飛び出して、夜具も既に出來て居る、只美濃の氣を引いて見るためゝ狂言だと云ふ、

近江は指の話で思ひ出した事がある、知り合に文車と云ふ男がある、神田邊の客に犬悅と云ふのがあり、去る座敷持ちに馴染んで行くが、供で行く文車とその遊女とが色になつた、犬悅はその遊女に指を切れとせまつた、切らねば犬悅は來ぬと云ふ、犬悅が來ねば文車と色事が出來ぬから、遊女は文車に切る氣で覺悟した、何うしたものかと文車から近江に相談があつたので近江が一策を立てる、又知人の町の內の者と犬悅の行く家の或新造とが色になつた、その新造がその男に大惚れで指を切らうと云つた事を利用して金五兩で新造に指を切らせ、それを犬悅の相方が切つたふりに犬悅の前で狂言を書いたので、文車と遊女とは引續き色が出來たが、やがて指を切つた新造が感付いたと見えて、かの地色に自分の指を持つて來て見せてくれと云ひ出して大困りだと云ふが、その後は聞かないと云ふ。

京傳の序に於て「女郎をころす祕密の傳は此一册にとゞめたり」と記して居る、卽ち女郎買の魂膽を描くことに本書の目的が存する。

【新】わつちにちよつとおみせなんしナ【新】まちやこれハ手めへたちのいろをするあなを書たものだ

とも發端に述べて居るほどである「モシなか／＼新ン手をだすもんだね」「なんと女郎けへ

もこわへせけへになりやした」と云ふ通り、手管魂膽の六ヶしいのが出て來る、その穿ちが本書の生命である。

まことにはくじやうの世の中。これを思へバ女郎のうそもみな客のいつはりよりいづるところきやくほどうそれつかぬけいせいの一句よく此じやうにかなひと遊女に味方するも京傳なればこそである。

吝嗇の人ハかならず。此里へ入べからず。さりとて傾城ハ金でかふものにあらず。意氣地にかゆるものとこゝろへべし

とは作者の思想を率直に吐露したものである。本書には後編ではないが「遊ふべの茶から」（艶示樓主人作、寛政十二年刊、本大系第九卷所載）が刊行されて居る。

▲吉原楊枝

原本　縱五寸二分　橫三寸七分

山東京傳作　天明八年刊

吉原楊枝は、普通の齒磨楊枝より房の長い、吉原で專ら用ゐられた物の名稱で、其吉原楊枝の精靈が現はれて、傾城買ひの極意を說くと云ふ構想に依り、書名としたものである。

作者山東京傳の傳記は本大系第六卷所載「令子洞房」の項を參照ありたい。

古き器物が精靈となつて現はれる說話は、既に御伽草子中に「付喪神」があり「化物草紙」中の古銕子の精靈の話がある、古楊枝を折らず其まゝにして置くと化けて來ると云ふ思想は、江戸時代に行はれたらしく、現存の童話にも、或家の內儀が獨りで留守して居ると、古楊枝の精が「おかみさん、おひとりか、おひとりなら踊りませう」と唄ひながら現はれたと云ふのがある、之等に據つたものであらう。

京傳は前に、「令子洞房」（天明五年刊）を發表し、大に傾城買ひの穿らを述べて居るが、之は多く初心者の心得を說いたものである、之に對し本編は、遊女と客との人情の機微を穿つたもので、兩者の間の戀にも種々なる形態と變化ある事を說いて居り、前書に比し更に一段深い戀愛觀、夫は京傳に依つて代表された江戸通人の一般的感想が精細に披瀝されて居るのだ、遊女から客への戀の變遷を敍し、最初は男ぶりと樣子に惚れ、次に氣性と手とに惚れ、次に心だてに惚れ、最後に眞情に惚れる、揩、夫も、遊ぶだけの金がなく逢へなくなれば心變りせぬと限らず、竊據は緣がなければ添ひとげられぬと道破した點など、眞に色道の經驗家でなければ言へない所である、又

女郎のこのむ所に客と地色との大キなるわかち有リ。金の有色男の客もつとめといふ文字あれバいや也錢のなきぶ男な地色も。まぶといふ文字有れバおもしろしと說いてあるのも、遊女の遊戲的な戀の一面、勤めと云ふ事に一種の壓迫を感ずる心理を、よく透徹的に洞察し得たと云ふ可きではあるまいか。（山崎麓記）

本書の書名に就いて「戲作評判花折紙」（享和二年刊、本大系第十一卷所載）の中には、「婦佐楊枝」と稱して居る、これは所謂「吉原楊枝」の房の長きものを「房楊枝」と云ふよりの稱呼であらう、然しこの「婦佐楊枝」の名稱は未だ他見しない、恐らく世間での通稱は矢張り「吉原楊枝」であり、只特にこの「戲作評判花折紙」に於てのみ「婦佐楊枝」と云つたものであらう、其の理由が奈邊にあるか知る由もないが、「婦佐楊枝」の書名の由來は以上の如くである。

▲自惚鏡（うぬぼれかゞみ）　原本 縱五寸二分 橫三寸六分

振鷺亭作　寛政元年刊

書名の「自惚鏡」は淨波梨鏡の我國での稱であつて、これさへあれば遊里の事はすつかり照し出されると作者も云ひ、序を寄せた萬象亭其他も稱へて居るのによつて知られよう。

作者振鷺亭の傳記は「御膳手打翁曾我」（寛政年間刊、本大系第九卷所載）の項を參照ありたい。萬象亭は、「眞女意題」（天明元年刊、本大系第四卷所載）の作者森羅萬象と同一人、傳記は其の項を參照ありたい。跋の寶候多藏、諸譯不知人は何人か詳かにしない。

本書の內容は序及跋にて云はれて居る通り、北廓の遊里を取材し、それも相當細い穿ちを行つたものである、息子株、牽頭醫者、武者、夾客、色客と云ふ洒落本には隨所に見られる人物を拉し來つて、それに各階級の遊女、禿を配して各々の特性を描寫せんとしたものである、卽ち息子株の項に於ては、素直な息子は大きに持てる、牽頭醫者は氣の輕くて女郎にもきらはれず一ト通り待遇される、武左客は振られて腹を立つて歸らうとするが、遊女が手の有る者にてうまく云ひくるめられて結局は體よく冷遇される、きをいは弔歸りに遊びに寄つたが、好過されないので立腹して太平樂をならべる、色客は遊女との間に互に惚れた弱みの口舌をする等の光景が描寫されて居る。

本書は、作者振鷺亭の洒落本に於ける處女作である、山東京傳の「客衆肝照子」（天明六年刊、本大系第六卷所載）「傾城䲔」（天明八年刊、同上）に於ける手法を學んで遊の諸相を穿つて居る、振鷺亭は短的に從來の洒落本描寫の典型を加味してそれを描寫したのである、その出

來映は必ずしも稱揚すべきものではないにしても、彼の斯界に打つて出た最初の作品としては意義あるものである。

萬象亭が本書に序を寄せ、その門出を祝ふた、しかし振鷺亭の今後の作品にも多く見受けるが振鷺亭が京傳の作風に歸依したらうことは、萬象亭と振鷺亭との關係に於て興味あるものと云はねばならぬ、元來萬象亭と京傳とは仲のよい間柄であつた、しかるに兩者の間に於て、洒落本の內容に對して相容れないものがあつたために不和となつた、京傳は平氣を粧ふて、敢て對外的に聲明らしくとり計ふわけでもなく、所信に向つてひた押しに進んだのであるが、萬象亭に至つては、自己の作品「田舍芝居」（天明七年刊、本大系第六卷所載）に於て强く京傳に當つて居る程である、この萬象亭が、振鷺亭を引き立てようとしたことはその底意が何處にあつたかを考へさせられる、有爲な新進作家を自己の味方につけようとするは勿論であらうが、あれ程京傳に對して敵愾心を抱いたのは、洒落本の作風にことよせて自己の失ひつゝある文壇の地位確保の魂膽であつたらうと、すると京傳には敵對する心持ちがあつても、他の作者には左程でなかつたであらうと想はれるのである　又本書は「傾城買四十八手」（本卷所載）や「睟のすじ書」（本卷所載）に影響して居る。

▲廓大帳（くるわのだいちやう）　原本 縦五寸一分 横三寸六分

山東京傳作　寛政元年刊

書名の「廓大帳」は作者の自序にも「此一帖。名をよんで廓大帳。大帳勿論大帳の。唱にかへゞ。小廓の妓へいあな川岸ョ」と記して居るにてその由來が分るのである。

作者山東京傳の傳記は本大系第六卷所載「令子洞房」の項を參照ありたい。序の笹葉鈴成は狂歌師に福林堂鈴成といふのがあるが同一人ではあるまいと想ふ。

本書の刊年は卷末の廣告に天明九酉春とあるので卽ち、寛政元年と分る。

本書は先づ茶番の光景から始る、鶴聲、烏口、稻鶴。舞鶴、園鶴、五町、三味子、おゑん、忠兵衛の一行が眞崎へ遊びに行つての餘興に茶番を演じたのである、その遊興も女郎買の新手や廓中の噂、世間の話の中に日暮も近づいて歸つて來る、皆々迎へられて稻鶴の座敷へ入り、土産などを分けてやがて床がおさまる、烏口の相方は新造の舞鶴であるが、床をあけてなか〱來ない、傍輩の連中が來て話してくれるがそれも歸つてしまつたので、徒然のまゝみせ三味線をとつて爪彈で唱つて居ると、それに和して隣部屋で口舌をして居る、その馬鹿々々しさに氣附い

た時、舞鶴が來たので立腹のまゝ枕で打たんとする折柄皆々集つて來る、と云ふ構想である。

遊女の物見遊山を取材したのは特に本書の異彩とするところである、駕籠の鳥として甚しい拘束の中にも客に伴はれて出られる事もあつたのである、物々しく大勢の附添ひはあるが、彼女等にとつては嬉しい事の中でも全く特別なものであつたらう、歸樓した時留守居格の遊女等が羨しがつて騷ぐ光景を見ても、その如何なるものであつたかは想像するに難くない、作者はこのあまり注目を引かれなかつた點を取材し、眞崎稲荷、茶番の流行を巧みに配材して、加ふるに例の細い觀察を表現して居る、構想と云ひ背景と云ひよく纏つた作品である。

【鶴】扇屋へもう見せがでるでへねへか【五】二三日あとからでます【まひ】ゑちぜんやもでんすねへ【三味】よほどでるうちがありやす

と云ふて居るのは、天明七年暮の火事で假宅して居るのが、だん／＼本普請をして店を出すのを云ふのである、未だ吉原が出來揃はない、一軒ふへ二軒建つて吉原の形態が整つて行く頃を對象としたのである。

本書を通じて今更乍ら京傳の細い觀察に氣付く、それを描寫することに於て非常な優越を感じて居る、京傳の作品の生命はこの穿ちにある、そこで

コレ豊ぽうこゝによしハらつうの。知らねへけりやァならねへことが有ルぜ。てうじやのしんぞうハ。それたばこぼんをひかねへにョ。こいつハきがつかなんだ。ソシテ角トの蔦やで唄をうたひだすと。いつでもかね四ッた。かどの玉やじやァ。いくらのこつて居ても。ひけまへに見せをひかせるョ

と得意がるのである。

▲志羅川夜船　原本　縦五寸五分　横三寸二分

山東京傳作　寛政元年刊

書名の「志羅川夜船」は「白河夜船」の洒落である。

作者山東京傳の傳記は本大系第六卷所載「令子洞房」の項を參照ありたい。

本書は目錄にても分る通り、武左の初會、素見の高慢、西河岸の世界から成つて居る、武左の初會では二人の侍が觀音參詣を口實にして吉原へ繰り込んだ、同役の知つた人の茶屋から、茶屋の心安い家へと登つたが結局體よく振られる、素見の高慢では息子株を連れた起風と云ふ男が、高慢を一抔ならべ乍ら息子に素見の仕方を實地に敎へる、西河岸の世界、こゝは元來吉

原廓中で最も品のよくない遊女屋のあるところで、遊女のよくないのは勿論、遊客も勢ひそれに類するものが多かつたのである、源、政、久兵衛の三人が揃つて遊びに行く、去る家へ上る、源は花代、政は新造雪の戸、久兵衛は月の戸と定る、こゝへ仲の町の茶屋の若い者も家で寝た顔をして明朝の迎ひに行く仕度を整へて上る、先の三人客は面白おかしく穿ちをして騒いで遊ぶと云ふ構想なのである。

本年「廓大帳」(本卷所載)にて大店の描寫をなした作者は、本書にては全く反對の試をなした、即ち、小店で遊ぶ侍客、素見だけで遊ぶ客、格落ちのする西河岸の世界を描して、その目的を叶へて居るのである、作者の主眼とする點は西河岸の世界にあつたことは内容吟味によつて知り得るところであるが、自叙に於ても亦これを明かにして居るのである、即ち、「今や一個の通子あつて、青樓の西岸に遊び。閨中の少婦が。愁を知らざるをしる。予其趣を一帖に述。初に武左と素見の二篇をくはえ」たと云ふて居るのである、景物的に附録された、武左と素見の二篇も相當なものであるが、西河岸の描寫に至つては格別力が籠つて居るのである、その觀察の細緻にしてよく穿ち得たのは、全く作者の力量の秀て居ればこそである、大盡様のお供をして大籬へ行きつけた作者が、自腹をいためての遊では或は格安な世界ではなかつたか、或はそ

うした經驗が、本作品をして眞實性に富ましめ、高く價値すけるものであらう。

千兩の黄金も。三十二文の孔方も。悉皆一物にして。上は三浦屋高尾。賴兼が城を傾け。下はぼちや／＼のお千代。折介が鼻を傾く　都戀に上下ゝ隔なし、況賣色に於をや。中三の生る畠もなく。川岸妓の釣る池もなく。その流れの源ハ一ッなり

と自叙に云ふ作者は、全く斯うした信念のもとに遊んで居たであらう、自分がお供をして行く主人は立派な傾城を買ふ、自分には新造位なところを當がはれる、自分獨りでもとても全盛の傾城を相手にする術はない、これが當時の作者の境遇である、その心情たるや右の如く考へざるを得なかつたのであらう。

本書は矢張り「廓大帳」と同じく燒跡本普請が落成して木の香新しい情調を活寫して居る。

▲通氣粹語傳　原本 縱五寸二分 橫三寸七分

山東京傳作　寛政元年刊

書名「通氣粹語傳」は内容が「水滸傳」中の人物を借りて洒落本に仕立てゝあるので斯く洒落たのである、作者の自序及附言にても斷つてある通りである。

作者山東京傳の傳記は本大系第六卷所載「令子洞房」の項を參照ありたい。

本書の構想は水滸傳の世界を當時の女郎買の事に比較して書いたものであることは前述の通りであるが、去る屋敷の用人の息子鷲尾戸忠右衛門、表徳を林沖と云ふのが花の師匠の牽頭坊主花和尙と向島の武藏屋で遊んだ歸りに、矢文で船宿の息子張順を呼び寄せて向ふ岸へ渡り、藏前の米屋山東屋及二郎表徳を宋江といふ者の別莊を訪れる、或日宋江は中の町の松屋の亭主朱貴を共に連れて吉原へくる、久紋龍進吉と云ふ角力に會ふ、それから長字屋の梁山の屋敷、宋江と梁山と口舌がある、梁山は起請を宋江に渡さうとするが受けとらぬので久紋龍があづかる、こゝに神田邊に高休と云ふ男が居て梁山に惚れて何とかして宋江を突き出させようと、時遷小僧を賴んで久紋龍から彼の起請を奪ふように依賴するが時遷は失敗してしまふ、高休は梁山に賴まれた夜具をしなくてはならぬので、醫者の疲は病身を鯛丸屋へやつて呉服を持參させ、途中酒屋の二階で蒙汗藥をのましてこつそり籠ぬけをしてくる、その男が後で正氣になり跡を追つて來て取り戻さうとするが却て高休に突きとばされると云ふのである、この外に向島武藏屋の主人の兄武太郎の妻が、乞食の藏前の王婆の取持ちで密通をして武太郎を毒殺せんとするのを花和尙に見破られると云ふのが加味されて居る。

本書は作者が計畫した上中下三編の一部であるので、どれ迄構想が纏るかは今斷定し得られない、作者は附言に於て「四方の通子閲たうへで、作者の畠で。議論したまへ」とまで云ふて居るから相當自信をつけて居たのであらう、如何に飜案し出すか見給へといふ氣持が多分に露はれて居る。

本書は構想の展開のみでなく背景や眞實性や情調にも用意が拂はれて居る、また隨所に笑を起さしめるべき點まで作られて居る、是非續編が見たいのであるが豫告だけにとゞまりて刊行された樣子はない、或は從來の作風と些か變るところが却て不評判となつて其の機を失してしまつたのかも知れない。

本文の中に碑文谷仁王尊の繁榮が記されて居る。

▲中洲之華美　原本 縱五寸二分 橫三寸八分

內新好作　寛政元年刊

書名「中洲之華美」は「中洲之煙火」の洒落である、本書の內容は吉原の假宅が出來た時の描寫である、假宅も吉原の本普請が出來るまでの束の間のものであるので、はつと開いて直ぐ

消えてしまふ煙火のその華かさにたとへたものである。

作者内新好の傳記は本大系第六卷所載「一目土堤」の項を參照ありたい。

刊年は自叙には「中の中呂」とあり、卷末には「于時天明己酉歳甫月二日」と記してある、前者の「中の中呂」はこゝでは天明八年四月のことである、よつて後者との關係は、原稿の出來たのは天明八年の四月であつたらうが、刊行されたのは、天明九年の新春物としてであつたらう、際物としてならば既に「女郎買糠味噌汁」が天明八年に刊行されて居る、案ずるに「中洲之華美」(本卷所載)も際物として執筆されたのが、「女郎買糠味噌汁」に先を越された結果發表の機を失して年を越さざるを得なくなつたのではあるまいか、この意味で茲では寛政元年(正月二十五日に寛政と改元)とした。

本書の構想は、天明七年十一月に吉原遊廓が燒亡して、花川戸あたりまで類燒したので、その折の假宅の一部が淺草觀音前の並木へ出來た、それが都合上中洲へ移轉した、中洲の世界では諸客群集して非常な賑ひである、如來と云ふ客が蓮花と云ふ遊女を相手に遊んで居るが、火鉢で卵を燒いたのがはねて如來の白毫にあたり、如來は思はず姿を現はした、吉原の朝日如來の化身である、そこで實は並木の地獄を追ひ拂つたらまた中洲に移つて盛んになつた、いよ

〳〵濟度せんと遊客に身を化して來たのであると云ふ、一同有難がつて禮拜をするが一人蓮花は打しほれて居る、その蓮花こそ高尾の亡靈であつた、未だに成佛出來ずに居たが、如來の御力にて極樂淨土へ行くことが出來たと云ふのである。

本書は「女郎買糠味噲汁」と同じく中洲の繁榮、それも、岡場所の輕い雰圍氣のところへ、本格的遊女が移つて來て、未だそれが融合することなく、何となくしつくりしない空氣の描寫に主眼があつたのである、當時兩國の盛り場の株を奪つた中洲の殷賑は實にすばらしきものであつた、吉原のない當時の觀樂境は先づ中洲に指を屈するのである、作者がこの中洲を對象にしたその動機は上述の如きであつた、が、朝日如來をして妓樓の名をつらねしめるあたりに作者が有する中洲の知識の得意さを見るのである。

「女郎買糠味噲汁」に於て缺けた淺草並木の記述は、その儚い存在であつた假宅の光景を描き得て、文化史上によき資料を殘してくれたものである、吉原で知られた朝日如來と高尾とを結んだ構想は、「女郎買買味噲汁」よりは遙かに手際よく描かれて居る、これは兩者の力の相違が構想上に及ぼして居るのである。

▲南極驛路雀（なんごくえきろすゞめ）　原本　縦五寸一分　横三寸七分

逸我作　寛政元年刊

書名「南極驛路雀」の「南極」は「北國」に對する「南國」の洒落である、卽ち品川遊里を意味する、「驛路雀」は「吉原雀」に對して品川の遊里が驛路に面してあつたので斯く云ふのである、雀の群集する意で、こゝでは集つて來る諸客を指すのである。

作者逸我の傳は未詳である。跋の內新好の傳記は本大系第六卷所載「一目土堤」の項を參照ありたい、逸我と內新好とを同一人ではあるまいかと疑はれる向きもある、文體から見てもそう考へられないこともないのである。

本書の構想は仁義禮智信に分れ、二男一妓會、附り濫觴、二匠の初會、附り見立と出立、二武の五會、附り心得の祕事、口舌の手叓、附り惡吐の卷物、一男五娼會、附り六韜三略の卷がそれである、が全體を通じては、兼吉、歌集、葉立の三人が相談をして品川へ出かけようと云ふ、茲に又、三五郎、萬吉と云ふ二人連が品川新州と云ふ妓樓へ上る、見立をして片哥、若浦と定まる、又茂點、喜牛の二人が石橋の茶屋萬屋から新州へ上る、葉立は新州の梅里と長い間の契

りで、夫婦氣取りで居る、內中の者も皆心安くし、今では茶屋から來ず若い者吉兵衛が萬事切り盛りして、葉立をせく客のある時にはお針部屋に居る樣にする、ところが今夜も久と云ふ坊主客が來て葉立の事を惡しざまに云ひ切れてしまへと云ふ、梅里も腹が立つて久の丈の短いのを南瓜が雪隱へからんだようだと譬へたので、久が立腹して棕梠箒で梅里を一つ打つたので梅里もまけて居ず二つ打ち返した、これから大いざになつて久は切れてかへつてしまふ、梅里は其の後へ葉立を寄ぶ、葉立は藝者を上げて面白く騷ぐと云ふ構想である。

本書の構想は纏りが惡い、甚だ雜然として居る恨がある、然しこれは作者の目的が構想に重きを置いたのでなく、品川遊里の背景、情調を描寫すると云ふにあつたためであらう、兩者兼ね行ふことの出來ないわけではないが、不用意の中に片手落ちがしたのであらう、背景、情調の點に至つては可成り細い觀察が表現されて居る。

【かね吉】此內ひら長屋ハ普請をして大ぶ二階家が出來やしたねへ【葉】ウンアレデ高輪ハ大によくなつた

こちらへ付て徑に歩びや二丁ほど近い　高なハ十八丁海かわの方へ付て行けハ二丁ほと近し

藝者ハ橋むかふてなけれバ遊ハれぬゆへ橋をこして行をしやれて越とはかりいふ

等共の一例に過ぎないが、作者の得意とするところはこゝにあつたと想はれるのである。

【哥】（中略）コゥ此みな見な冬の日にやァよまれねへ三丈あまり有らァ。（中略）此くらひのやつが猪の頭から出ると目くろ在郷へ氷雨をふらして品川の海へ出るぜへ

遊女からの手紙の長いのを猪の頭（井ノ頭）の池から出ると云ふ蛇にたとへたのである、今日ならは例に出ないであらうが當時は眞しやかに信せられて居たのである。

本文中に出て來る俳優の親玉は五代目の市川團十郎、松本幸四郎は四代目、半四郎は四代目岩井半四郎、門之介は二代目市川門之助である。

▲雙床滿久羅　原本　縱五寸二分 横三寸六分

山手山人作　寛政元年刊

名書「雙床滿久羅」は「廻し枕」の洒落であるが、これにつき作者は自序の末に「此書ハ以紀ノ國屋小春に紙屋治兵衛の色客外三人の回し客ノ床の内ヲうがつゆへに此冊のげだいとなす」と斷つてある。

作者山手山人は落款にて左英とも稱したことは知られるがその他は詳かでない。

本書は自序にても云へる通り、甲驛即ち新宿の遊里を對象にした作品である、作者が描寫せんとした動機は「其遊意を見るに。青樓に異として。名代不入の客。幾人の限りなし。妓の言葉ぬっ青樓の方言に似て。また深川の里言にひとし。云々」と云ふ自序に明かである、構想にて以紀ノ國屋の小春がその色客紙屋治兵衛其の他烏口、久左の二人、居續の客一人都合三人を順々廻しをとつて歩く、結局治兵衛を中心に於ての働きであるから他の客はそこ〳〵にあしらはれるのである、この構想の中にてこゝぞと云ふ描寫はないが、八と云ふ鳶の者が連の一人と揃つて番頭氣取りで遊びに來て居るが、厚遇されないのを立腹して太平をならべる、それを連がとめる、すると八が着なれない親分の羽織を借りて着て居ながら、餘計な口を出すな引つこんで居れといつて打ち合ひの喧嘩になることと、同じく廻し部屋に居る久左が隣座敷から聞へる夕霧の淨瑠理を聞いて、すつかり伊左衛門氣取りになつて結局振られてしまふのと、又烏口が一人寂しく廻し部屋に待ちぼけをくらはされて居るとその部屋へ年は二八で色水淺黄の如く、黒髪を左右へ亂して口から青々たる息を吹いて居る女が入つて來た、烏口は恐しさに夜着引かぶつて居ると枕元の硯壺や其の他の食物を手摑みにして食つて居たが、食ひ終つて立つた拍子に烏口の上へ倒れたので烏口は氣絶してしまふが、これは病氣の女郎が隣の部屋へ入れら

れて、しかも食事もろく〳〵與へてなかつたので斯く忍んで來たものである、と云ふ話がある、比較的面白い部である。

本書では序にて立派に甲驛と斷つてありながら、本文中には大坂より申の方に當つてある色里蜆川としてあるが、これは登場人物に例の紙屋治兵衞、紀の國屋小春の情事を取材したので、わざと斯く大坂と稱したのである、紙治小春を登場させたのは噌炙された點を利用する積りであつたので、他に何人を以てしても差支へないのである。

▲戲作四書京傳予誌（げさくししよきやうでんよし）　原本　縱五寸　横三寸六分

山東京傳作　寛政二年刊

書名「京傳予誌」は「經典餘師」（溪世尊作、天明元年序）の洒落である、「戲作四書」と付けたのは、「經典餘師」が大學、論語、孟子、中庸の四書を採錄し、本文に俗解を附し、讀方を假名にて頭書したものであるが、これはその四書に準じて大樂、豐後、中、通用の四つの戲作を集めたものであるところからの命名である。

作者山東京傳の傳記は本大系第六卷所載「令子洞房」の項を參照ありたい。

本書に集められた四書の內容は大槩は、月雪花をおさきにつかひ色と酒とに樂んで足ることを知らないのを戒める、通用は、質物の通用物の事にして非道い苦面をしての女郎買を示す、豐後はこれによつて凡て江戶藝者の根性を穿ち、中はおつりきな所をさとすと目錄に斷つて居るのでも知られよう。

作者は「經典餘師」が、初學者のために素讀と難解とに供されたものである本義を借用して、初めに堅くるしく一寸漢文で大意を記し、以下平易にそれを敷衍して書いて居る、この形式に滑稽味を出さうと努めたものである、當時はあたかも田沼意次の失脚に替つて松平定信が老中となり、文武々々の奬勵に大童で居たのであるから、その奬學の際物として戯作者一流の皮肉を發輝したのでもあらう。

世を擧げて浮ついて居たので、本書に取材された事どもは非常な流行を極めて居た、物見遊山、歌舞音曲の賑ひ、通の世界の發展、豐後節の蔓延、引いてはいかゞはしき男女關係、駈落ち、心中等の事件が發生するのである、これに對して心ある爲政者の取締の手の下るのも必然である。

然し作者は上意を畏く遵奉して本書を物したのではない、茶にした氣持ちで訓諭を與へる風

に見せかけて、その實それ等の繁榮を穿つにあつたのである、既に作者は寛政元年春「孔子縞于時藍染」（三冊）の黄表紙を發表して寛政の改革を揶揄し、次いで本書の出た寛政二年春に、「藍返行義霰」（三冊）「玉磨青砥錢」（三冊）等を出して其の徹底を期して居る、これ等黄表紙に比較すれば本書の如きは微温なものであるが、洒落本の世界にこの種の傾向を發見することは嬉しい極みである。

昨日まで日本一の涼の場處ともてはやされ貴賤群集したる地も今日ハ忽一河の流れと變ず

とあるのは中洲が寛政元年十月から大川筋普請の時取拂はれたのを云ふのである、彼等にとつてはその寂しさも一としほであつたに違ひない。

▲傾城買四十八手　原本　縦五寸二分 横三寸六分

山東京傳作　寛政二年刊

書名の「傾城買四十八手」は傾城買の四十八手を書いた本と云ふ意である。

作者山東京傳の傳記は本大系第六卷所載「令子洞房」の項を參照ありたい。

本書の内容は書名の四十八手に反して、しつぽりとした手、やすい手、見ぬかれた手、そは〳〵する手、眞の手の五手しかないのである。しつぽりとした手はおとなしい息子とあどけない中三の初會である、一座客が惡しくされたに引きかへ遊女に思はれる息子株の一德を描寫したものである。やすい手は山の手の通客と小見世の座敷持との馴染の世界、遊女をかいて遊ぶのを色男とのみ考へて居る客と、小見世に居るを耻かしかりて子供の頃は何處の大見店に居たと問はず語りをする遊女とである、見ぬかれた手は家中者と大見世の部屋持との取組であるが、座敷には名代客がある、色男ではなく三會目の客だので、家中客を見くびつて、先づそちらを勤めて床花をせしめてから、あまり相方の來ぬので立腹して歸らうとする家中客をまた引きとめると云ふ、そは〳〵する手は中三の女郎が茶屋の二階で色男に逢ふ仕内を書く豫定であつたが後編に讓つてある、眞の手は大見世の遊女を女房にしようと云ふ客と又女房にならうと云ふ遊女との取組みである、客は傾城に眞があつて身代もいれあげてしまふ、遊女も其の客のためならどんな苦面でもして金をこしらへ、外の客も段〳〵切れて終には獨り客となつてしまふと云ふのである。

本書は一場面を描いては後に評を加へてその說明を補足して居る、この評に中々見るべき點

が多い、鋭い洞察が表現されて居るのである、一貫した構想のないのは取材の點のしからしむるところでやむを得ないが、個々に見る場合にはちやんと要點はつまんである、穿ちも見られる。

本書に云ふ手は何れも遊女を中心に於てのものである、作者は斯る手あることを示して以て傾城買の教科に資せようとした、自跋に「一言(いちげん)の妄作(しやれ)といへども。悟道(ごだう)のはしたるべし」と云ふのはこの點を指すのであらう。

本書の構想の組立は振鷺亭作「自惚鏡」（本叢所載）の影響を受けた點もあらうかと想ふ、「自惚鏡」そのものが既に京傳の作の刺戟によりて物されたであらうことは同項の條下にても述べたところであるが、「自惚鏡」の出現によりて京傳が動いた結果が又形を替へた作品として本書が物されるに至つた動機となつたのであらう、この意味のもとに兩書を繋ぐ點が少くないのである。

▲洞房(とうぼう)妓談(きだん)繁千話(しげちわ)　原本　縦五寸三分　横三寸七分

山東京傳作　寛政二年刊

書名の「繁千話」は自叙にも云ふ通り「繁野話」からの思ひ付きである、「繁野話」は後「繁夜話」と誤つて居る、近路行者作で「英草紙」の後編である、明和三年の刊行。

作者山東京傳の傳記は本大系第六卷所載「令子洞房」の項を參照ありたい。

本書の構想は中三の遊女に空琴と云ふのがある、中々手のある女で色男を呼びとげて忍び會ふて居るが、その色男が何も承知にて空琴が他の客へ出ることで口舌を起す、空琴は他氣はない證據を見せるとてその客の隣へ連れて行く、その客は初會で、馬骨と云つて半至通である、何んでも知つたかぶる、その中醫者の息子犬悦と云ふ友人も來る、それから二人でさん〴〵知つたか振りを發揮してやがて床へ廻る、馬骨獨りとなつたが間もなく空琴か來た、狸寐入をして居ると空琴はまた出て行かうとするので起きた振りをして止めて話し込む、隣座敷では色男が新造と唐紙の引手のとれた穴から覗いて居る、空琴はその色男に當てゝ話すが馬骨は我身に受けて一杯を云ふ、それから知名の士を友人扱ひにして話す、空琴も可笑しさをこらへてあの人は何うかこの人は何うかと質問する、馬骨は何れも心安立であることを云ふ、その中空琴は魚街はどうかと尋ねると馬骨が知つて居ると云ふのでついと立つて行く、ほどなく入れ替つて番頭新造が來て魚街さんを御存じの樣子だから空琴さんは出されないと斷りに來る、馬骨は今更

つまらぬ結果になり、犬悅に必らずかいて見せると云つた元氣もどこへやら鳥に笑はれ乍ら戻ると云ふのである。

本書は半至通の馬骨が中心に構想が展開されて居る、氣障な半至通に對する反感が本書となつて現はれたのである、色男を隣部屋に隱して置いて半至通を嘲弄する空琴の手管もそれのために外ならない。

卷末の自跋に於て作者は、馬骨ハ一人の名にして一人の名にあらずと云うて居る、半可通の典型として曝露された馬骨は。世に多くあるこの種の輩の代名詞として用ゐたのである。廓に常日頃入りびたつて居た作者にとつては諄々しく見せつけられて居たのであらう、その氣障に對する爆彈の意味で本書が物されて居る、作者の主張はよく表現されて居るのである。

【月】鳥待さんそりやァなんだへ【鳥】いたこを書いた本ざんす【月】そつからちつとよんでお聞せなんしナ云々

從來は隣座敷から聞えて來る淨瑠璃や唄に因んで、身上を語り合ふと云ふ手法が盛んに用ゐられて居るが、本を讀ましての展開は作者の思ひ付きである、占の本・或は酒落本を讀まして事件を運ばす法も後には出て來た。

作者の動機が半可通の罵倒にあつたのだが、矢張り作者は穿ちに對する感興を忘却して居ない、番頭新造と茶屋男正助との話にしろ、さては馬骨の並べる知識だとて平凡では出來ない點である、細緻な洞察に長じて居る作者故によくなし得るものなのである。

▲田舍談義　原本　縦五寸二分　横三寸六分

竹塚東子作　寛政二年刊

書名の「田舍談義」は内容が田舍寺の談義を對象として居るのから出たのであるが、その内容も「田舍芝居」(萬象亭作、天明七年刊、本大系第六卷所載)の模倣であるところから、この點までその眞似振りを出したのである。

作者竹塚東子は又竹塚の翁とも號して居る、千住近在の農夫であつた、始め法橋越谷吾山の門に入つて俳諧を學んだが後戲作に轉換し、黄表紙の作等少くない、本書は恐らく彼の處女作であらう、序跋の山東京傳の傳記は本大系第六卷所載「令子洞房」の項を參照ありたい。

本書は全く「田舍芝居」の構想をそのまゝ失敬して居る、只芝居と談義とを置き替へたに過ぎない、田舍の方言を描寫してそこに可笑味を求めた「田舍芝居」の態度がそのまゝ用ゐられ

て居る、「田舍芝居」と本書とはその動機に於て相異はあるが出來上つたものには殆んど變りはない、卽ち葛飾の金田村に法福寺と云ふ寺がある、そこで談義が始る、それに群集する村人の世間話、談義場の光景等を其地方の方言で描出したのである、「田舍芝居」に配された戀の場面も本書に用意されて居る、若い男女の純心なさゝやきと、後家と僧侶のたゞれた戀とが物されて居る、然も若い男女の取材に當つては「田舍芝居」にある、戀の邪魔する男が糞溜へ落されるところを「田舍談義」では、相手の男が早く女に會ひたいばかりに急いで、近道をしたために糞溜へはまつたとあるが、これほと忠實に眞似て居るのである、「田舍芝居」の作者が山東京傳に對する反感から著作した動機には何等關係なく、その變つた世界の對象から可笑味を引き出さうとする點に共鳴した結果が本書となつて現れたのである。

「田舍芝居」は萬象亭と京傳とが從來の交友を絕つ程の問題を起した作品として有名であるが、私はこの作品によつて問題の決定は見たものゝ、萬象亭が「田舍芝居」を著作するに至つた動機に遡ると既に萬象亭と京傳との間は面白くなくなつて居たものと解するのである、京傳は何等氣付なかつたであらうが京傳の躍進に對する萬象亭のひがみは、正比例して率を高めつゝあつたのである、それがたま〳〵「田舍芝居」によつて爆發したまでのことに過ぎない、

京傳が序と跋とに於て東子を引き立て、作品の宣傳をして居るのは、單に兩者の仲の濃かであつたためであつて、萬象亭に對する反駁と考へるのはどうかと思ふ、何故となれば京傳は既にそんな事を問題にする必要のない地位の保持者となりすまして居るのである。

本書は、本格的洒落本でないのは「田舍芝居」と同樣であるが、こゝに採錄したのは本書のもつ歷史的意義からである、大田蜀山によりて試みられた洒落本對象の世界の展開が「變通輕井茶話」(本大系第四卷所載)から「田舍芝居」へ、三度本書及び「面美多通身」(廓集交廓通交作、本大系第十卷所載)へと移つたのが、やがて滑稽本の「膝栗毛」(十返舍一九作、享和二年より刊)へと流行く道程の作品であると云ふ點と、萬象亭と京傳との交渉に於ける尊き一資料となり得る點とが卽ちそれである。

▲格子戲語(かうしけご) 原本 縱五寸二分 橫三寸八分

振鷺亭作　寬政二年刊

書名の「格子戲語」は「孔子家語」の洒落である。

作者振鷺亭の傳記は本大系第九卷所載「御膳手打翁曾我」の項を參照ありたい。序の濱町亭

は何人か傳未詳である。注及跋の關東兵衞は關東米と同一人で、その傳記は本大系第九卷所載「玉の牒」の項を參照ありたい。跋の豈候多丸の傳も詳かでない

本書の構想は格子の宅へ顏艶、支向、志路の弟子が集つて女郎買の話から、世間話をするやら、遊人仲間の集りだけ其の道に關係のある話をして歸る、志路は廓へ入つたが廻り座敷に獨り寂しく時を移して居るが、何時までも自分の相方が來ぬ故おくの間へ忍び込むと、そこでは色男と女郎が話し合つて居る、二人は長い間の深い契りをこめたものであるが、だん／＼不首尾が重つて遂ひ心中する氣になる、すは死なんとするところへ志路が飛び出してとめる、と思ふとうなされなんすなと茶屋の迎ひに起された。

本書は「孔子家語」の名を洒落ただけあつて、そこに笑を求めんとしてゐる、青表紙の堅くるしい講義に引きかへて、分りよい卑近な話しを描いたところに、家語を戲語と云ふだけのことはある、然しこれは當時の戲作には常套的手法である。

おもふに夜毎の客に情のあるハ眞あるといふべからず。眞を盡すハたゞ一人にとゞまる。夫ををしなへて傾城に眞なしと心得たるハ大きなる誤ならんか

と作者は遊女の眞情に對する意見を持つて居る、次いで

遊にうぬ惚なくバ迷わずなづまず　自女郎の淺深を探り程よく遊び程よく樂む。孔夫子もこれを可なりとし給わんか

と述べて居る、作者の遊びに對する態度を窺ふことが出來るのである。

この作者は「自惚鏡」に於ても然りであつたが、山東京傳の作風を餘程私淑して居るのである、本書の自序の如き京傳の「客衆肝照子」（天明六年刊、本大系第六卷所載）の自叙に準じて書いたものである、その語法まで全くよく類して居る、作者が本文中に細い穿ちを行つて居るのも京傳の作品の影響を受けること多きものである。

本書の對象の世界となつたのは、始め格子の家に三人の弟子が集つた時には主として深川の遊里であり、志路の遊びに出かけたのは吉原となつて居る、「自惚鏡」に於ては吉原のみが對象となつたが本書に至つて相半ばした、しかして格子を説明する下りに「御當地に長となつて深川の遊を是とす」と云ふて居る、この格子と稱するものは作者自身の假名ではあるまいか、と云ふのはこの作者は初め吉原にも遊んだのだが後はとんと深川ばかりに限定する樣になつてしまつた、それが今作品の對象とする世界及作中の片言にて想記せしめられるのである、同作者の寛政六年刊「教訓いろは醉故傳」と云ふのを未だ見て居ないのでこれは除くとして、其の後

の作品は凡て深川の取材になつて居るのである、何故斯う轉換したか、以上の推則を是として考察する時は、京傳との關係を再び見直す必要となる、京傳は「仕懸文庫」（本卷所載）を除く殆んどは吉原ばかりを根據に洒落本を書いた、と云つても過言でないほどの對象の世界が限定されて居たのである、そこが京傳の作風に私淑した作者が吉原描寫を避けて深川へと移つた原因の一つであらう、又吉原と深川とはその格式に於ても大きな相違がある、一面その轉換の理由に、本格的吉原よりもあまり格式にとらはれない深川により以上の感興を起した結果もあつたであらう。

振鷺亭の作品に關東兵衛の出て來たのは本書を以て初めとするのである、弟子でも持ちたいといふ見榮がそろ〳〵出て來たのであらう。

▲意學丸呑 傾城眞之心　原本　縦五寸一分 横三寸六分

寛政二年刊

書名の「傾城眞之心」を「かたぎ」と讀ましたのは「氣質」の洒落であらう。

作者は何人か全然未詳である。

刊年も明記はない、只從來寬政二年とされて居るので暫くそれに從ふより外仕方がない。

本書の構想は彼の「夕霧阿波鳴渡」(近松門左衛門作、正德元年九月、竹本座初演)の大坂新町扇屋夕霧が藤屋伊左衛門と契つた情事を取材したものである、夕霧は親の病氣の藥代を稼ぐために廓へ身を沈めた、そこへ伊左衛門が馴染んで來て深く契る、伊左衛門には遊び敵阿波大盡が居て金の威光で夕霧をとらうとする、夕霧は伊左衛門に心中立して大盡を振る、大盡怒つて身請けすると云ふので夕霧と伊左衛門とは逃げて庭へ飛び下りる、そこには大盡がかまへて居た、それは伊左衛門の父親であつた、親の慟きで身請けもすんで晴れて夫婦になると云ふのである。

本書は何れかと云へば心理描寫に近いものであらう、構想の展開に興味のあるのはそれがためである、世間に膾炙した夕霧伊左衛門を借りて來たのもこの意味を伺ふことが出來る、其故に穿ちに至つては見るべきものがない、人情本味の尠くない內容である、內題の上に割註で書いた「意學丸呑」の由來もその動機の奈邊にあつたかを物語るものである。

構想の中にて夕霧が家を飛び出して廓中へ入る經路が、あまりに眞實性を伴はない恨みがある、も少し說明がほしかつたのである、初め敵役で居て後味方に廻る人物の出て來るのは戲曲

の影響から來たものであらう、洒落本の一主潮が筋、構想の展開、心理描寫にある樣になると斯うした傾向が多くなり、茶番狂言の流行がこれを助長することも少くないのである。
　本書の原本には異種があると云はれて居る、がその如何なる程度のものであるかは未見の書であるから的確に明示することは出來ない、採錄した原本の丁數の打ち方から推則するに止るのである、卽ち自序のところが序三、四となつて挿繪が序五、六とあり次いで本文の一が起きて居るので或は序に一二の丁のあるものも存するのではないかと想ふのである、又本書の刊行が寛政二年であると云はれるので彼の寛政改革の出版物に關する禁令に怯えて、他人からの序を去り、作者の署名をも除いたのではあるまいかとも考へさせられるのである。

▲染抜五所紋（そめぬきいつところもん）　原本　縱六寸二分 橫四寸三分

　梅月堂梶人作　寛政二年刊
本書は「靑樓五ッ雁金」（天明八年刊、本卷所載）の後編である、主人公文七を紺屋の息子とし、又文七の遊び仲間雁金組の五人に因んで斯く名付けたものであらう。
作者梅月堂梶人の傳記は「靑樓五ッ雁金」と「傾城買二筋道」の項を參照ありたい。

本書の刊年は只戌孟春とあるのみであるが、前編との關係上寛政二年であることは疑ひないのである。

「青樓五ッ雁金」の後を受けた本書の構想は、いよ〳〵清川は角左衛門に身請けされる、もふ一度文七に會つて行きたいと思ふが、業欲な母親にさまたげられてそれもならぬ、それでは自殺しようとしたがそれも傍輩衆にとめられて果さない、無情な母親に手を縛られ猿ぐつわをはめられ、用意の駕籠に乘せられて廓から馳け出されてしまふ、用甫道へさしかゝるとそこへ雷庄九郎が出て母親や駕籠のものを追ひまくつて清川を救ひ出したが、さて早く歩む樣にとせきたてられるが小しも運ばない、煩えて居るとそれは文七の居續をした床の中での夢であつた、目が覺めてこのことを文七に物語り、文七も家では女房にも別れてしまひ今更清川と別れると云ふわけには行かない、どんな事があつても添ひとげねばならぬと話し會つて居る所へ市右衛門に庄九郎とが來合せる、又その後へ角左衛門が來る清川は角左衛門がしまつて置いた身であるから急に座敷をあけねばならぬと云ふ騷ぎになると云ふのである。

作者は卷末に於てこの續編を明春卽ち寛政三年に刊行すると稱して居るが、既に最初作者の意圖した點は夢の中に於て成されて居るので、これ以上の構想を展開させることは、眞實考へ

ては居ないであらう、右の如く明春を期したのも、一時的逃避としてゞはあるまいか。

前編に於けると同じく心理描寫に作者の主眼點があつたので、其れ以外には矢張り見るべきものが尠い、構想としては先づ相當と云ひ得るであらう、文體も例の如く滑かである、背景は、ほとんど注意されて居ない、その代り性格は、この作品の身上であるだけに見所が多からう、主人公の清川文七のそれは云はずもがなとして、昨日は敵となり今日は味方として活躍する庄九主郎の存在がはつきりし、惡心の母親は後世の人情本に出る型で、子供を食物にしようとする性格の人間がよく浮き出されて居る。

本書及前編の二部作を洒落本史上から見る時には、嘗ては「傾城買虎之卷」（田螺金魚作、安永七年刊、本大系第三卷所載）に於ける心理描寫、實情描寫の先驅もあつたが、其の後ハ久しく斯る作風に接するを得ず、穿ちや魂膽の描寫に洒落本の主潮を見出すのであつた、本作者の出現によつて再び構想に重きを置くところの心理描寫の一石が投ぜられ、やがてこの波紋が從來の態度と押しつ押されつして遂に人情本の發生を促すに至つたのである。人情本の搖籃期の作品としても「傾城買虎之卷」と本篇と、「北廓鷄卵方」（本卷所載）と寛政十年以後に刊行を見た「傾城買二筋道」（本大系第八卷所載）の三部作とは見逃すべからざる存在である。

▲文選臥坐　原本　縦五寸二分　横三寸六分

狂爾、湖舟、谷我作　寛政二年刊

書名の「文選臥坐」の「文選」は梁の昭明太子統編の書名であるが、本書の內容が三部作を集めたものであるのに因んでの命名である、尙山東京傳は序にて「爰に何某等が述し三編の妄言あり。其趣遠州濱松にひとしく。廣いやうにて又狹し。故に同國掛川の產なる。文選臥坐と題す。これや臥に狹く坐る廣からん」と記して居る。

作者狂爾の傳は未詳。湖舟も亦同じい。谷我の傳記は本大系第八卷「傾城買二筋道」の項を、序の山東京傳の傳記は本大系第六卷所載「令子洞房」の項を參照ありたい。

本書は狂爾、湖舟、谷我が各一編づゝの洒落本を書いた、それを山東京傳の序をつけて刊行したものである、內容は東北の雲談、北廓の奇說、河東の艶詞の三部より成立して居る、東北の雲談の構想は、東北の地御假家橋の別莊に若隱居して居る、大げん屋新太郎の許へ雪の日に煙草屋宗左衞門が訪れて來た、それに次いで深川の花共三四郎、淸三、與太郎の三人連が來合せ、また醫者の丁けいも來た、種々御馳走になつて歸つたが間もなく永德と云ふ人から茶碗の件で急用の

手紙が屆いた、新太郎の女房は吉原者故ちよつと嫉妬氣味で出かけるのをとめるが、儲かると聞いてそんならばと出してやるがそれは丁けいと新太郎とが書いた狂言で、舟宿で待ち合せてそれから遊びに出かけるのである、北廓の奇說は國侍の藤馬竹右衛門と云ふのが怪野と云ふ女郎を買つて遊ぶ、國侍故怪野もむしろ半至通よりはましとからかい氣分で待遇して居る、國侍は何のてれることもなくその生地をむき出しにして可笑しく遊ぶ、出番をはづして來たのだから次の人に札を渡して一寸歸つて行く、がこれは或通人が國侍に化けたのであつて、今度は一座の中に入つて遊び直してまた一ト趣向しようと云ふのである、河東の艷詞は深川の石場の富倉に馴染のある文好が、近頃せかれて居るので仲町の濱本へ行つてお梅と云ふのを呼ぶ、お梅は文好のとこへ出たがふさいで居る、文好が尋ねても答へずはては酒をあふる、實はそれは文好と富倉の馴染の事も承知しながら、一度文好に出て見たいと思つて居た矢先であるので、嬉しいに違ひないが何かのきつかけで打ち明けようと云ふ仕組みである、遂に心のたけも話して文好を手に入れると云ふのである。

この三部作は各々別な人によつて作られて居ながら、よく從來の洒落本の典型にはまつて居る、各々僅かな短篇であり乍ら何れも纏つた構想であり、その動機も見事達成されて居る、狂爾

は遊び人仲間の集ひをうまく描寫し、湖舟は如何にして笑はせんかと苦心し、谷我は得意の心理描寫で然し僅かな紙數で鮮かに目的を達して居るのである。

▲大礒風俗 仕懸文庫（しかけぶんこ）　原本 縦五寸二分 横三寸七分

山東京傳作　寛政三年刊

書名の「仕懸文庫」は本書の中に「しかけぶんこといふれ子どものきがへを入てもたせて來るふんこ也大いそにてきものをしかけといふ事人の知る所なり尤しかけぶんこを持せる事は細丁にかぎるゆへに此冊子のげだいとす」と記してある。

作者山東京傳の傳記は本大系第六卷所載「令子洞房」の項を參照ありたい。

本書は大礒風俗と書名にも割註してある通り大礒遊里を描寫したものであるが、この大礒は當時洒落本に於て共通的假名である深川の事である、構想は曾我の狂言の取材である、卽ち大礒遊里に明るい小林の朝比奈が、青樓客卽ち吉原通ではあるが、大礒に暗い曾我十郎を案內して大礒へ出かける、團三郎がお供をする、舟で繩町の鶴か岡屋へ行く、子供お虎・おたん、お鶴を呼んで遊ぶ、朝比奈の一行が日暮に歸ると入替つて五郎が來る、五郎は舞鶴屋と云ふ妓家

のおてふと云ふ子供と契つて居る、おてふは五郎に一寸逢ひに來る、おてふは梶原源太に呼はれて出て居た、そは〳〵して落ちつかぬおてふを見て、梶原が立腹して大騷ぎとなるので皆〻で歸してしまふ、おてふは直ぐに五郎の座敷へ出る、五郎は廓通ひの金にもつまつて居る、おてふの働きで間に合せて居るものゝ何うもつまらぬので、二人で逃げる事にすると云ふのである。

本書は大礒風語と最初うたふだけに風俗描寫に努力を拂つて居る、卷末の追加に於て既に許多の書によりて大礒の地の妓客の情は至れり盡せりである、然るに世は移る、古今の人情は變らないが風俗は變轉極りない、そこで再び穿鑿して一冊を出すのであると云ふて居る。

朝比奈を大礒通とし十郎の不通と對立させたのも、案内役として細緻な穿ちを說明せんとした配慮である、實に徹底した觀察が表現されて居る、しかしその殺風景に墮するを救ふべく五郎とおてふとの情事で大礒の遊女の魂膽を見せた、敵役梶原源太の配置も一面曾我狂言に忠實ならんとし、一面おてふと五郎の實意をくつきりとさせようとした用意からである。

寛政二年十月に松平定信の改革の一政策として出された、出版物中特に酒落本に關する禁令は、扉裏に「大礒廓中光景、鎌倉遊子傳記」と特記せしめ、叙にてその意を敷衍强張し、跋にては「不佞京傳。嘗好色淫蕩を著述すといへども。實は前に美味あることを述て。後に毒あるこ

とを示し。戒を垂がため也」と辨解に努めしめて居る、目錄まで讀本の組織に仕立て、袋には教訓讀本として勸善懲惡の保護色をかけて賣り出したのである、（同年刊の「絹籭」「錦之裏」も同じ）これは旣にその禁令の出た頃は刊行準備も進んで居り、中止するに於ては大きな經濟的打擊を版元の蔦屋重三郞が蒙ることゝなるので、その切り拔け策として作者に强要した結果斯うした打開策が講ぜられたのであらう、しかし斯うした結果は作品の價値にもあらうが、大した評判となつて賣行良好の眞最中に、幕府當局の知るところとなり、書物は絕版を命ぜられ、版元、作者、地本問屋行事二名等は各處刑された、作者は五十日の手鎻の刑に處せられた、三年三月の出來事である。

作者はこれですつかり怯えて以來洒落本界から姿を消してしまつた、蓋し惜まれつゝ筆を絕つた彼にしては寧ろ幸であつたかも知れない、作者はこの時初めて同年刊行の本書と「絹籭」「錦之裏」の三部の洒落本の原稿料として都合百四十六匁を得て居る、當時は未だ原稿料の名はないが肴代として得たものである、これ等三郞の作品は洒落本史上に大きな劃線を引き、當時の戯作界の主潮に大きな波紋を投じて急轉換をよぎなくした、記念すべき存在として問題にされるのである。△本書は天保八年に「新秋宴語辰巳の月」と改題して刊行された、これには爲永春

水增補と署名してある、本書再刻の舊板木を利用して其の前後を補綴したものである、不手際のところも尠くないが、とにかく人情本に及ぼした影響の大きかつたことを知るのである。

▲傾城諺種　原本　縦六寸三分　横四寸四分

泥田坊梦成作　寛政二年刊

書名の「傾城諺種」は本書内容が、傾城に關することを俗諺より說き初めて居るので、斯く名付けたのである。

作者の泥田坊梦成はまた蘿塚散人とも號するが、その何人なるかは詳かでない、又跋によれば其の居を虹酒亭とも稱して居た樣である。

刊年は只辛亥のはつ春としか記してないが。辛亥は寛政三年に當るのである。

本書の內容は俗諺二十七より成つて居る、卽ち橋の渡し人かなくてハ渡られぬ、傾城の誠と鷄卵の四角ハない。挑灯に釣鐘、沙彌から長老にはなれぬ、賣物には花を飾れ、合せ物は放れ物、人に鬼はない、永い正月はない、蒔ぬ種は生へぬ、荷つたら棒が折れる、水の流と人の行末、天道さま次第、形は産しか心は産ぬ、我慢は貧から、一生は夢の如し、七日搜して人を疑へ、

天秤捧れ上へ反る、鬼に鉄棒、一つ寸の虫にも五歩の魂、椋樹は三年磋いても白くならぬ、雪の翌日は私夫の穿鑿、上手の手から水がもる、魚心あれば水心、毒を喰ば皿迄、人を遣ふのではなくて人に仕はるに、蓼喰虫も好々、泥を打ては顔へはねると云ふのである、この諺を初めにあげて傾城に闘する作者の意見を述べたものである、其れ故に纒つた構想は見られず、小説と云ふべきものでは全然ないのである、洒落本としては非本格的なものである、然し當時でもこれを廣義に洒落本として取り扱つて居た、しかく本格的洒落本に有縁の作品である。

本書にはまた「俗談諺種」と云ふ外題となつて居るのがある、これには刊年が只亥のはつ春としてあり、本大系に採錄した原本にある辛の字は除かれてしまつて居る、しかし兩者を検討して見ると明かに「傾城諺種」の名を「俗談諺種」と改めたものであることが分る、そして本文中にも隨所に手が入れてある、それも「傾城諺種」の版木を入木して使用したものであつたことも明かに承知される、然るに當時の出版物の廣告を見ると「傾城諺種」の卷末には本外題と同じいものゝ新板を告げて居るが、本卷所載の「格子戯語」には「俗談諺種」の廣告が載つて居る、しかしこの「格子戯語」の本大系採錄本は再版本であらう、何故斯く改題しなくてはならなかつたのか、玆にも寛政改革の影響を見るのである、洒落本を好色本の一種と考へられた

ために「傾城諺種」であつては、その法網を脱するに困難を感じた結果ではあるまいか、辛亥初春の刊行にするには既に寛政二年の中に出來て居た、それを突如の禁令に怯えて早速改訂版を出す必要にせまられたのであらう、これは今日の出版界に於てもしば〳〵相遇する現象であつて、その間の經過を察するに難くないのである、「傾城」を「俗談」に改題することによつて先づ難を免れて居る、しかし內容そのものがさまで注意を喚起する程のものでないために問題とならずに終つたのでもあらう。

▲娼妓絹籭　原本　縦五寸二分　横三寸七分

山東京傳作　寛政三年刊

書名「娼妓絹籭」は「將棋絹篩」(福島順棊著)の洒落である、內題にはこの上に「手段詰物」を冠してその意を明かにして居る。

作者山東京傳の傳記は本大系第六卷所載「令子洞房」の項を參照ありたい序の柳浪館主人の傳は未詳。跋の曼鬼武は、感和亭とも云ふ、通彌前野蔓助、元小笠原侯の臣、黄表紙の作も相當多く京傳との關係も厚かつた樣である。又京傳艸廬食客煙花浪子は傳未詳であるが、或は京

傳の匿名ではあるまいかと想はれる。

本書は大阪新町の遊里を對象とした作品となつて居るが、實は江戸吉原の假名である、その廓近くの箕輪に新町の女郎屋槌屋治右衛門の寮がある、抱の女郎梅川が番頭新造梅春を看護に添はせて病氣療養に來て居る、病身であり乍ら戀人龜屋忠兵衛の身を案じて居る、忠兵衛と梅川とは深い契りをこめた仲であるが金がこまつて二階もせかれて居る、或る梅春の働きで寮番に金を與へて下座敷へ隱して置く、梅川は手水の風で忍んで來る、梅川は忠兵衛の子を宿した、寮へ引込で墮胎する事になつて居るが勘當の身では手の付け樣がない、馴染んで來る八右衛門が簱へ梅川を連れて行く機會を幸ひと、逃げて忠兵衛の實父孫右衛門が二口村に居るからそこに落ちつかうと相談する、これを次の間で聞いて居た梅春の働きで、首尾よく逃げおほせた、と思ふは梅川の夢であつたと云ふのである、この外忠兵衛が八右衛門の手先につかはれた地廻りと喧嘩する描寫がある。

作者は寛政二年刊「傾成買四十八手」（本卷所載）にて種々の手を描き分けた、その中に眞の手を後編に讓ると記して居るがそれが本書によつて達成されたものらしい、忠兵衛に對する梅川の實情描寫が本書の生命である、つまり義理と情の二道に動きがとれず、詰つてしまつ

たところに將棋に假托した所以がある、それを打開するのに魂膽手管の必要がある、その心慮をくだくのを細に入り微に亘つて描寫したものである、このよく穿れた實情描寫は後のこの種の洒落本及人情本に大きな影響を與へて居る。

遊女梅川が姙娠する事を取材して居る、既に作者はの「傾城買四十八手」の眞の手で懷姙した遊女がそれを客に向つて話して居る、それを一層眞劍な戀の現はれとして描寫すると共に、實情描寫の哀愁の度を增さしめるために扱つたのである、しかしこの取材は間もなく模倣されるに至つた、即ち、梅暮里谷峩作、享和二年刊の「夢汗後編妓情返夢解」（本大系第十卷所載）がそれである、そして谷峩一流の才でもつと〳〵煩悶を深くして大きな効果を擧げて居る。

本書は同年刊の「仕懸文庫」「錦之裏」（本卷所載）と共に絕板を命ぜられた、その事件の詳細は「仕懸文庫」の項を參照ありたい。

▲南品傀儡（なんぴんあやつり）　原本　縱五寸二分　橫三寸五分

靑海舍五人作　寬政三年刊

書名の「南品傀儡」は自序にも云へる如く、「南京操」の洒落である、南品は吉原を北州は又國

と稱するに對して品川を南極、南驛と稱する類の一である。

作者青海舍主人の傳は未詳である、築地萬年橋に居住したと云はれて居る。序の放蕩山人の傳も亦詳かでない。跋の京傳門人兎角亭龜毛も未詳。

本書の構想は、侍の森傳吾に小嶋多仲の兩人が茶屋から宿へ乘り込む光景と、坊主客塔なる者が駕籠で妓樓へ行つて遊ぶのと、豐と云ふ下町の町人風の男が目黑參りから品川へ廻つた遊びを描いたものである、構想として纒るところは少ない、背景は相當に描けて居る、情調も出て居る。

放蕩山人の序に北州卽ち吉原の魂膽は既に他書によく鑿つてあるが、南驛の意味は未だ盡されて居ない、人の疝氣を我頭痛に疾むと云ふことだが、品川のことを描いて人旁の有と無いとの人情を說いたものがこれであると記して居る、人旁の有無にて其の客を辨することは本文中にも川柳點を引いて「イ(にんべん)のあるとないとが品の客」と云ふて居る、卽ち人旁のあるのは侍、ないのは寺、寺衆を指すのである、品川の顧客の主なるものはこの侍と坊主であつた、この二階級によつてほとんど品川遊里の生計が立つたと稱しても過言ではなかつたのである、侍客の武左なことは言ふまでもなく、坊主客の執拗さも遊女等には鼻について居た、それに引きかへ、

目黑參りや川崎詣での歸るさに立寄る、町人連中のあつさりした遊びは、遊女等の求めて止まなかつたものである、町人の數は多くはなかつた、「婦美車紫鹿」（道郎苦先生作、安永三年刊、本大系第二卷所載）の中には、

【大和】ハイなる程坊主が五分武家方が三分町人ハ二分ほかこざりませぬそこで女郎があつかいにくひ武ざと是れしたり武家と坊主とくろめてゐるから深川なぞとハ違てあそひいゝほうでござります

と比較が出してあるので數的に諒解出來よう、品川の酒落本と云へば必ずこの侍と坊主客が出て來る、出て來ないとその特色が充分描けない恨みがあるほど、切りはなす事の出來ないものである。

本書は品川遊里に於ける魂膽を描かうとは努めて居ない、本文の中の註にも「品川へ行く人情をうかつのミ也」と斷つてある、只輕い意味で品川の輪廓を示して案内に供した程度の作品である。

▲青樓晝之世界錦之裏　原本　縱五寸三分 橫三寸七分

山東京傳作　寛政三年刊

書名の「青樓晝之世界錦之裏」の由來は自序に「妄作の茶表紙も。年々歲々穴相似て。歲々年々趣向新しからざれバ。一ッぐつと捻つて。青樓の晝の世界。夜の景色の花美とは。うつて變つた案じの小册。此奴は一ッ新織ならめと。其儘錦の裏と題す而已」と云ふて居るので知られる。

作者山東京傳の傳記は本大系第六卷所載「令子洞房」の項を參照ありたい。

本書の對象にしたのは吉原の五ッ時から七ッ時迄で、今日の午前八時から午後四時までの光景を描寫したものである、作者は時代を後一條天皇の頃にとり、場所を攝洲神崎の廓として居る。吉田屋のお職に夕霧と云ふ神崎一の全盛の遊女が居る、客藤屋伊左衞門は廓通ひが嵩じて勘當となつたのを、夕霧が隱して置いて面倒を見乍ら逢つて居た、これを遣手に見つけられて大騷ぎとなり、伊左衞門は若い者等にぶちのめされる、斯る時、次の間の長持の中から藤屋の京都の出店の番頭算右衞門が飛び出して急を救ふ、この番頭の働きで勘當も許り身請もすんで、夕霧伊左の二人は目出度祝言する運びとなるのである、これに於て作者は前年刊行した「傾城買四十八手」の「そは／＼する手」の延長を描かうとしたのであるが、本書構想として整つて

居るのはこの邊だけである、これはほんの景物的につけたもので作者の意圖した點は他にあるのである。

本書にて作者の最も努力したのは、如何に吉原を精細に穿かうかと云ふにある、勢ひ遊女の生活にも及ぶが夜の事は他の書にも澤山見られるので、遊女等の時間である晝の世界の生活の內幕を曝露して居る、夕霧伊左衞門に托した色客に對する配慮もその生活の一端である．一ヶ月の中大部分を吉原で送つた作者の經驗的事實が、健筆にのせられて詳細に表現されたのである、その眞實性の豐富さ、情緒の濃厚さ、背景の躍動さは、他にその比を見ぬ、全く彼にして創めてよく書き得るものである。

各の時報をなすのに時計の圖が記されて居るのは洒落本に於ては始めての試みである、やがて「青樓夜世界闇明月」（寛政十一年刊、神田あつ丸作、本大系第九卷所載）に用ゐられ、黄表紙、滑稽本等に流行を見る端を發したのである。

本書は刊行後間もなく所謂發禁の厄に會ひ、洒落本界に大きな問題を起した書である、詳細は本卷所載「仕懸文庫」の項を參照ありたい。

尙序文のところにある印は出版許可の檢印で、一旦無事に市場へ出て禁止されたを物語るも

のである。

▲睟のすじ書　原本 縦五寸二分 横三寸七分

鷺見屋潆樂作　寛政六年刊

書名の「粹のすじ書」は江戸にて通と云ふことを浪華では粋と云ふ、その粋の發生地浪華の遊里の遊びのあらましを書いたものであるので斯く云ふのである、粋の當字である。

作者鷺見屋潆樂は大坂の狂歌師であるが傳を詳しかにしない、跋の花道暫も未詳である。

本書に大坂の遊里新町、島の內、新地、新堀、新屋敷等を對象とした作品である、拾貫目つかひ、五貫目つかひ、壹貫目つかひ、百目つかひ、三拾匁つかひの五種別になつて居る、必ずしも確然と區別されたものでなく五貫目つかひの中に三貫目より二貫五百目二貫目までの客を包含して居るのである。この種別は何等は何圓と云ふのと同じく金遣ひの客の等級である、各項の終りが何れも幕となつて居て、評註がしてある、これは作者の意見のまゝであつて、凡例に於て一すじがきとはいへど戯場のすじにはあらず唯かたちとしなのとりあひ注の趣をかる而已」と云ふのはこゝらを指すのである、戯場の筋は脚色即ち構想を云ふのであらうが、作者

はそれを描いては居ないと斷つて居るのである、また凡例に「近世の書はおの／＼閨中をいふて春畫のせりふをつくせりこれは座敷のミにして閨のあなをいれず」と本書の內容を明示して居る、

本書は振鷺亭作の「自惚鏡」（本卷所載）山東京傳作の「傾城買四十八年」（本卷所載）と關係がある、遊女により客とによつて遊びの違ふのを書き別けた、「自惚鏡」からそれの方式をかへて傾城買の手を書いた「傾城買四十八手」、それから脫して金遣ひの點から客の等級を書き分けた本書と形體に於て一貫したのを見受けるのである。

本書は客、幇間花車、遊女、場所等により、その各ゝの言葉遣ひの相違にも注意が拂はれて居る。

　此こと葉は花車にかぎりていふなり

　北のしんちは申の下へナをつける

　すべて北はことばあたらし

などと得意に斷り書きをして居る、蓋し國語學上得難い研究資料となつたのである。

【客】（中略）これなんぞまへ【ヶ】なにまひじや【まい】なんなりと げいこうたふ但し哥へいたこ出じま也

と潮來節のことが、出て居るがこれは既に江戸で流行を見たのが、大阪まで傳播して行つたものあらう。

▲北廓鷄卵方 原本 縱六寸一分 横四寸二分

百一誌作　寛政六年刊

書名の「北廓鷄卵方」は本書が吉原を對象とし、且「傾城の誠と鷄卵の四角はない」の俗諺から本書にはその傾城の誠を取材したものであるから斯く名付けたのである。

作者百一誌の傳は未詳。序の韓信堂色人、跋の花屋而柳の傳も詳かでない。

刊年は只寅の春とあるばかりであるが、從來寛政六年と云はれて居るので、今はそれに從つて置く。

本書の構想は龜田屋の遊女松風と客雨杏とは互に深く契り合つて居たが、雨杏があまりふさいだ樣子であるので松風もふさいだ氣持になつて行つた、或日雨方が衝突したがそれは雨杏に許婚の娘があり、親戚から早く結婚する樣にと迫られて居る、雨杏は思ひを寄せた松風が忘られずその處置に困つて遂にふさぐのであると知れた、そして雨杏は此方から何等か沙汰をするま

では人も寄こすなと云つては歸つてしまつた、其の後久しく何の音沙汰もなかつた、松風は妹女郎梅の香に慰められながら晴れやらぬ思ひで日數を送つて居た、こゝにまた雪枝とて龜田屋へ來つけの客が柳枝と云ふ客が連れて來た、雪枝は遊女村風と馴染であつた柳枝は松風を相方とし、種々と廻り氣な口をきいて松風をからかつたので、遂に手非道く振られてしまふ、雪枝、柳枝が歸つた後矢張り可愛い雨杏の身の上を案じて居ると、飛脚が來て雨杏からの便りを置いて行つた、雨杏は常州に居る、その手紙によると何うも家の方が不首尾で困るがさりとて何う解決の方法もない、結局自分を捨てゝ斯く非常手段を講じたのであるから別に案じないがよい、何れその中に出て行くからと書いてあつた、これで松風はほつと安堵すると云ふのである。

本書は傾城の誠を描かんとしたのであるから勢ひ心理描寫に傾むいて居る、構想に重きが置かれて居る、雨杏と松風が戀愛に生きようとする強い信念が活寫されて居る、妹女郎の梅の香が姉女郎の松風を何かと世話する友情も眞にこまやかに描かれて居て、なごやかな情緒が溢れて居る、柳枝の出しやばりもよくある性格にて眞實性があつて生きて居る。

本書創作の動機は卷末の廣告に明確に表示して居る、即ち「いにしへより滑稽劇談の書夥しといへども皆戀をかひて人の埴を失ふ今ややつはり戀をかひて義理實情のおもしろミをありは

す」と而して本書はその序曲である、未だ眞に描かんとしたところまで達して居ない「その實義の根元ハ後編續の譯知識にて御覽被下かし」と斷つてあるが惜しいかなその後編の刊行を見ないのである。

本書は彼の實情描寫即ち心理描寫の中興の祖であるとまで稱へられる梅暮里谷峩が「傾城買二筋道」（本大系第八卷所載）を發表する四年前の作品である、梅暮里谷峩は既に梅月堂梶人の名の許に「靑樓五ッ雁金」「後編五所紋」（本卷所載）の作を刊行して以來約十年の間沈默を守つて居たが「傾城眞之心」（本卷所載）や本書によつて刺戟さるゝところ尠からず、いよ〳〵心理描寫を標示して立つに至つたのである。本書はその沈默數年間を結ぶ作品として意義あるものなのである。

女郎買糠味噌汁

序

五ッのまちを三ッまたにうつせしはかの融の大臣のをごりもはだしでおかよひなさるにちかの塩竈ちかころ塩屋かしらねどもこんな世界は唐にもなかず此川なかにぱつと花火の時ならぬさかりを何がし一まきの冊子にしるせしとて書肆予に其題号をこふ艶なるまきをけがさんへといなむにゆるしなければゆふべの口舌水にしてとみにほの神のはらう云爾

山東京傳述

自叙

世人こな酔らば何ぞその糟を喰つて其汁をすゝらざるとの珍芬翰ハ毛通人の寐言にしてのたまくになれとの教なり予ハまた女郎買の糠こそ汁を喰つて其糟臭き新酒のほろ酔きげんに臂をまげて枕とし楽また其中にありと火燵へころりと轉寐の夢ともなくうつゝ共なき遊ひの始終さめての後に覺しまゝを所〳〵かいつまんで秋色庵の閑窓に欠びしながら書付侍る

天明らけき八ッの
はつ春

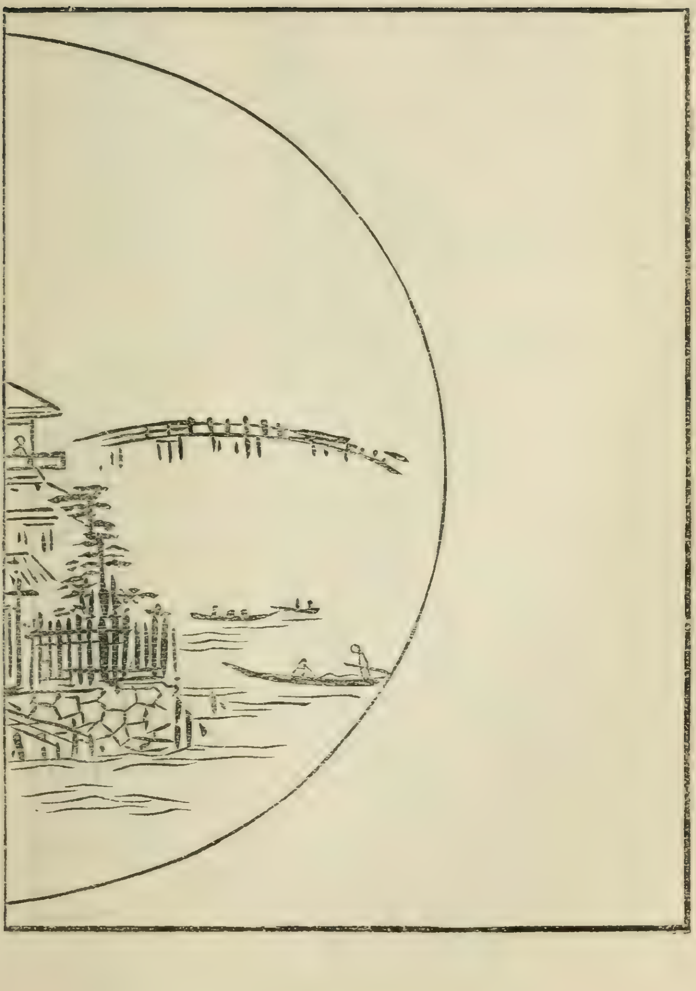
赤蜻蛉著

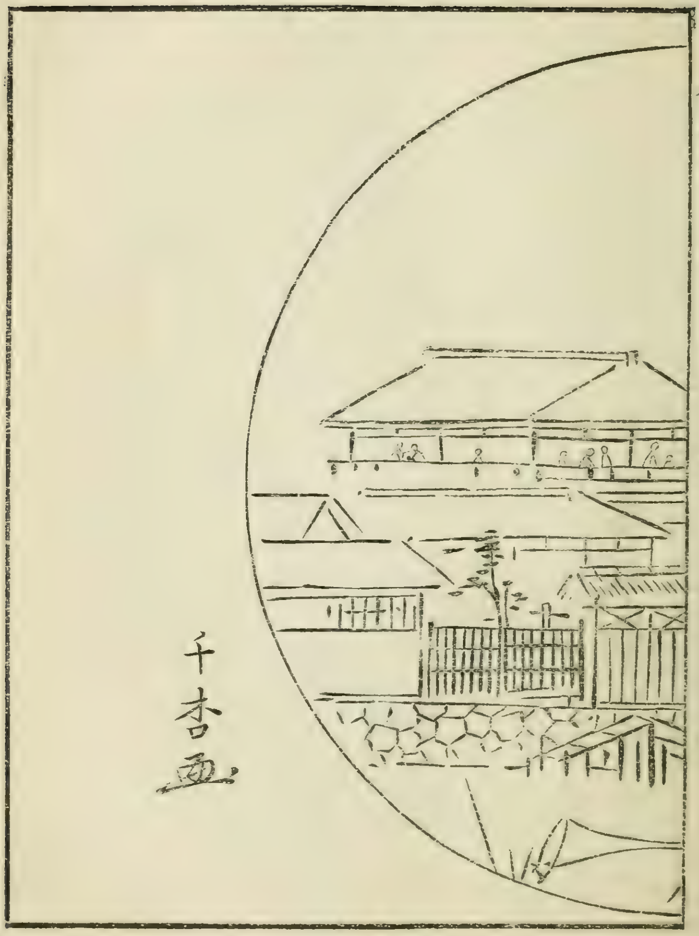
女郎買之糠味噌汁

○發端

日落張流三派連とからうたにつらねしだい江もそれ中洲の新地とて地ごく極らくふた道のはんくわはいふもさらなりけり然るに名高き五丁まち去りし頃祝ゆふの災にかゝり名におふ娼家とふざいにりさんせしに此處風流の士なればかりに青樓をいとなみ遊客をひきけるなかに濱荻やとなんいへる娼家ありしかるに彼樓のせまきをいとい諸客おゝくれ丸藤といへる酒樓にあつまりはまおきの佳人をむかへゆふらくをなしにけるけふしも此處へいりきたるれ千丈頭谷英江などいへる正風ていの大通三人あとにつゞいて醫者のどん庵燒こそ酒の一杯きげんあたりもひゞく大おんじやうにて七かう／＼とよびかけどや／＼とおしこむ

【ていしゆ七兵へ】これ／＼けふはめづらしくどなたもおそろいでよふおいでなさりやしたまづ／＼お二階へッレおのぶおミよおきさかづきをあげもふしや（あいとこたへて娘おミよはんにちやを二ツのせてもつてくる）【娘おミよ】どな




千杏画

たもよふお出なさりやしたまづおちやをおあがりなせへし【四人】あい／＼【ゑい】これおそよさんけふハまだこゝんなが酒がたりねへからいつもそうにさわぎやせんはやく酒をもつてきなそしてじかうをよんでくれな　あやといつてはしごと／＼ばらく／＼てじ糸へくる類ちやうしがでゝくる　【七】さあ／＼どなたもおあかんなさりやしときにづこく／＼さんこのごろァこゝにもとんだうつくしいものがござりやすちつとおよびなさりやし【谷】そうだろう／＼けふこゝんながこゝへきたもそのしたごゝろさどふもうつくしいやつときいちやァこいつァこたへられぬ　とあたまをたゝきこぶしを一ッたゝきヒイといつてハまたたゝくとふくこのつう人ヒイといつてあたまをたゝく有　【谷アン】わつちやァフロウよりウェインがいゝおそよさん一ッつぎな　をつとよし／＼と一ッのんで千夫へさすフロウとハ女の事ウエインとハ酒の事いづれもおらんだことべなりこのいしやおらんだがくとミへたり　【千】これハとんだいゝさけだのからくりだと　むだをいふなから谷へさす　【谷】わつちやァ此ごろァ目がわるいからきんしゆだがかふなつちやァやぶれかぶれだ壹ッのめとべつとのミどふもいへぬ　と又あたまをツたゝくこたよりさけにてさかつきてくう／＼まハしむしやうにしやれる　【呑】これ英江さんわつちやァロードゲシクトになりやしたろうふねゴロウトにせつなふござへすもふウヱインハやめにしてちつとヒスクでもあらしやしよふ　ロートゲシクトハおほのあかき事也ヒスクハ魚なりいづれも蘭語也　【亭】さあ子供衆をおよびなさりやしたが酒斗のんでいちやァねつからはじまりやせんせんさんどふでござりやす【千】そんならよばふぢやァねへか【三人】よかろう／＼【千】げいしやゝたれぞよんでくれな二ちやうつゞミが賑でよかろふ

【亭】しよふちう〳〵と立てゆく ほどなく二ちやうつゞみまる次岸次きたる【マルキシ】どなたもよふおいでなせいしたとんだおさむうござりやす トいゝながらひばちこつゞみをほうじる【千】おちかづきのため一トツあげやしよふ【マル】ちとおされりもふしやしよふ【千】まづ〳〵【英】ときにあのまる次さんわこや岸のおきくぼうによくにてだぜ目もとなら口もとならそのまゝだよ【谷】なァに川岸の山もとのおもよといふもんだよ【娘こよ】いゝゑ英江さんのおつせいすとをりこやざしのおきくさんによくにてゞござい すわつちらもそふおもいやして此ごろもこんなにそうもふしやした【英】それこやちがやァしめいおいらが目ハおそろなものよァ、つがもねへしかしおきくぼうに似ちやァおや〳〵どふしよふの【呑】おやまるぜ〳〵サァちつとひいてくんな これより二ちやうつゞみにて六さわぎしばらくしておいらんきたるふざんこつるぎ江川住の戸どなたよふおいでなんした と四人ならぶ【テイ】サァおさかづきをなさりやし とこれより杯初り谷より千どんゑいとすゝむ【テイ】こなさんちつと火ばちのそばへおよりなせいしだいぶおさむうござりやすづこくさんおさわぎなせいし【英】さわぐなといつてもさわぎやすよ頭こくさんてんびんぼうを三人しておどろふぢやァねへか【谷】よふござゐしよふサァ岸次さんひいてくんな【キシ】アイ哥【千】てんびんぼう【谷】とちめんぼう【エイ】上野にごぼんぼう【セ】三尺ぼう【づ】六尺ぼう【おいらん】をや〳〵いつそおつなこをなかれすゝどふもおかしくつてなりいせんよ【谷】そふわらつちやァどふもおどられねへ

これからきつねつりにしよふサァつうな／＼きつねをつうなこん／＼ちきちやァ、つつた／＼どふも七かうお身がミよふだよ（トミな／＼わらいおいらんもうきたつかくべつにぎやかなりほじなくとこもまわりミな／＼なる）【マルチシ】どなたもごきげんさまよふと（いつてかへる）【江川】サァおやすミなんしよよくさわぎなんすぞぬしたちやァミもふしたよふでありいすきんじよかへ【英】アイずいぶんきんじよさこのごろァこゝもとんだにぎやかだねおめいがたも町にいるよりやァおもしろかろふ【江川】ナァニわたしともァはやくてふへかへりとふおすよいつそもふぢこくとやらのやふでぼう／＼へていしてなんだかきさでありいすもつとこつちへおよりなんしよ（トこれよりひつそとなりむしやう□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□にいちやつく又となりざしきで□）【ふさん】モシヘ頭こくさんとやらわたしらァこよひはいゝ年わすれをしいした焼んしてからこんやのやうにわらいゝした事ハおぎんせんとんだおもしろふありいしたぬしたちやァこのきんじよだといゝなんすがどのおやしきだへ【谷】アイやしきハゑんほうのきんじよさ【ふさん】そふちやになんすならきゝいすまいあのねわたしらが内のかふしからミていゝすりやァむかふの方を大名さんがたがとをりなんすがとんだ大ぜいな人でありいすよきんじよへちよつとでなんすにもあのとをりかへ【谷】いんにやあれでも又しのびのときァちがふのさ【ふさん】そふでおつしよふあのとをりの人であそびなんそにおいでなんしちやァミんなのいどころがありいすまい此ごろもどこのかね若と

のさんがお馬てとをんなんしたがねいつそうつくしうありいしたわたしやァいつそもふミとれいしたうつかりとしいしたがどふぞならふ事ならみでもあげいしたいもんでありいす及はぬ事とれ思ひながらいつそもふ とはぎしりする 【谷】 ヲャくとんちき大さわぎだそのおやしきなきいていきなせいァ、目がいたくなつてきたもふしづかにしてねやしよふ【ふさん】ねかしもふすこつちやァごぜいしないくすぐりいすにへもつとおはなしなんしよどふもぬしなぞのやうにミへのないきやくしゆへありいせんなんでもいひたいまゝをいゝなんしてさわきたいよふにさわぎなんすがよふおすよいつそミへをなんしたりをつな身をなんす客衆へおかしうおすよ通といふも外でもありいすまい人にあたる事もいゝなんせすミへもなくもちまへでおもしろく遊びなんすがつふといふものでありいしよふ などゝむしやうにかきのめすむかふざしきから千へしんめいたいのしやれふうにこあうしうなまりのこへいろにてどすごへをはなへぬけて 【千】アンダカいしたちやァおかなくくぜつとやらをおつぱじめなすつたのコ。リ。ャふとのめいもあるもんだつチャ【ふさん】なんとへねつからわかりいせんよもつといつておきかせなんしな【千】唐いんにて 好一朶鮮花。有潮向一日。落在我的家。我情緣。不出門。那對着那鮮花。呵々【ふさん】おや〳〵ほんの唐人のねごとゝかいゝすもんでおざんしよふミつ荻さん江川さんきゝなんしたかおつな事をいわつしやるよ とミな〳〵わらふ千又ミつたぎたつゝき 【千】コ。リ。ャいしにちくとむしん

があるきいてくれめすか「ミつ荻」なんとおすへむしんがあるとへぬしのむしんならなんでもきゝいしよふ「千」スンダライふべしコ。リ。ヤくられれがおかなくしこつたからいきびいたくらせやれ「ミつ」なんとへいきびとへいちびからの事かへ「千」いんにや此事いしと（みつを□□□□□□きかし）□□□□□（りをたつく）「ミつ荻」ヲヤついぞねへいろ／＼なむだをよくいゝなんすちつとほんの事をおはなしなんしなぬしたちやァどんだけいしやでありいすいつそすきんしたよもつとこつちへおよりなんしなさむうありいすれな「千」わつちやァ酒によつていつそあついからもつとそつちへよつてねなよ「ミつ荻」とんだあいそづかしをよくいゝなんすぬしがのけといゝなんすほどのきいすまいかふしたらどふなんす（とふところから手を入て□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□いめるかたでぶおびだとく）「千」わつちを□□□□□（はだかにして）どふするつもりだいつそさむい風でもごいちやァならぬだいじのからだだよ「ミつ」そのだいじのからだをちつとかふしてあげいしよふとくいつく「千」アイタ、、これぢやァかんにんならぬわへ「ミつ」かんにんならざァどふともしなんしわつちもかんにんなりいせん「千」どふして「ミつ」かふして（とこれよりひつそとなるあとは□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□いらなみ／＼文句ふさいきでは）「呑アン」セールトロンコ／＼ァ、しまいのコツヒイで壹ッがすぎたそふな（とげつふう／＼といゝながらむねをなでる）「仕の戸」ぬしもとんだとふじんだねそんな事をいゝなんしちやァわつちともにやァ一ッもわかりいせんそんな事れながさきとやらへでもいつていゝなんすりやァ

よふおすにこんなところでいゝなんしちやァきゝわけいすものがなくつていゝちからがありいすまいすきいせんじれつとふおす　とあちらをむいてたばこをのむ【呑】そんならもふいゝやすめいァ、ウヱインわいやだがスマツカがなんぞくいたい【住の】それいふまいといゝながら又いゝなんすほんの毛とふじんだねスマツカとハなんの事だへ【呑】むまいものゝ事さ【スミ】ヲャ〳〵ぬしたちがむまいものといゝなんすものハ大かたしゝやぶたでありいしよふそしていぬなぞもくいなんしよふね【呑】なんでもくふのさ【スミ】ェ、モいつそけがらハしいきがついてミいすりやァなんだかぬしやァおつなにをいがしいすよいつそむねがわるくなりいした　とむしやうにつはをはきひんしやんとすねる呑アンへづつと廻のきで【呑】どふもそふおめへのつん〳〵してわつちをこなすところがありがていきがたかくつてとんだ風流だ　とむしやうにひとりでのとこむむかふから【英】さあミんなかへろふぜしくぢつちやァならぬよ千丈子も頭谷子もふおきやよ【江川】なぜそのよふにいそぎなんすなもつとかふしておいでなんしよ【エイ】わつちもかふしていたいハ山〳〵だがどふもやしきハもんがやかましくつてならぬからははやくかへらにやァならぬよ【江川】なぜそのやうにやかましくいゝすねェ【英】なにもんばかりじやァねへそふたい屋敷ハいろ〳〵の作ほうがあつてをりめたゞしいものよ身のじゆふになるハまちの事だよわつちらもどふぞ一年ばかりもまちにいてミたいよ【江川】わたしともハお

やしきへいつてミたふおすよいつやらもね米屋をこわしいしたじぶんちやうへもきいすとつてミんながさわぎいしたによつてもふ／＼いつそこわくつてねわたしとしいした事がうわざふりをはきいしたまゝすわつていゝしてミんなにいつそわらハれいしたその時なんぞれおやしきがやァどふしていなんしたへ【英】ナニあんな事にややしきでとんぢやくするもんだ又やしきへゆびでもさしてミたがいゝぶつたぎつてしもふばかりだわつちらあァとふぞくればいゝと思つてまつていたのさ【江川】それおミなんしそふいふときやァおやしきがよふありいすれぬしの所へわたしやァいつてミたふおすよ【エイ】おめへのよふなものがきてミなさいおゝかぶりだサァ／＼かへろふぜミんないゝかげんにいちやつきやよかへるぜ／＼【二人】おい／＼【江川】英さんれどふもかへしもふしやァしいしねい　トいつておびをひつたくつてこしへまく【英】これさよこしやよもふどふもいられねへ　とおびをひつはりやうそのうち千夫ヨ谷へこしらへてくるゑいもをごゑむりにとりしめながらでるどんあんれ大ふさぎのやうすなり　【江川】そんならどふもふしてもかへりなんすかへ又いつきなんす【エイ】いつでもきやしよふ【女郎三人】そんならあしたは【三人】あしたれどふもこられやせん二三日中さ【女郎】どふもおなごりをしいがおさらハへ【四人】又おふ迄ハさらバだアチ、チン／＼どこのか鐘がごん／＼〇秋色庵の段

史記

こゝに秋色庵蘭支とて風雅でもなくしやれでなく世を秋風のくさのいほ庭もおちばに冬がれのききやうかるかやおミなめしまがきがもとにのこるきくふりおくゆきにうづもれてけしきさびしきかんそふにひとりこちたるひるさがり蘭しさんおやどにとおとなふ人ハ千丈頭谷の雨子

【蘭支】頭谷さん千丈さんかサァ〳〵おはいり〳〵いつもごさかんでいゝのわつちどもァせきりやうとしているのミでおもしろい事といつちやァつゆほどもございせんなんぞあたらしいはなしでもあるならちつとおはなしなせへし【頭】ときにらんしさん此ごろの丸ふじのりくつァどふつけなすつた千丈子にけさちらときいた斗りでどふもわかりやせんくわしい事がきゝとふござへす【ランシ】そふでございしよふでいぶいりくんだこつたから一朝一セきにやァはなされやせんよまづかいつまんでいゝやしよふならおのぶがいゝよふがそふでございせんわたしどもがしよふをあしくおぼしめすならこゝばかりがちや屋でもございすめいからをきにいつたところへおいでなせいしとさそふいふところへきやくのほうからあやまつていく馬鹿もねへもんさこれ斗りでわたしともァもふ丸ふじへゆくきハございしねへ千丈さんとふおもいなさる【千丈】さよふさわたしとももふゆくきハございしねへなんの事ァねへこれからまるふじをやめては

まをきへゆくがいゝしやァごぜいしねへか【ツコク】そふならそふしやしよふけふハわつちもひまだからひゝや山をさそつてはまをぎとでやしよふもし七がやかましくいつたらそりやァそのときの事さ【千丈】なんにやかましくいゝもしやすめいもしいつたららんしさんおめいわけを付なんすか【ラン】そりやァわつちにまかせなよいゝよふにいゝやしよふときにじよふしうわつちがいふこつたかごふはしまつちやァどふもつまりやせんよなるほどけいせいけいこくの名を古人がつけたはづてごぜいすそれおめいたちもわつちらもそふおうに四角なもしもよミならつてりかふそふに子曰の口まねもしやして世上の遊冶どもをそしるものがかふぢやァどふもなりやせんよまだおめいがたァむすこかぶでおもしろざかりだから人もゆるしやしよふがわつちどもァどふもゆるしやせんよもふ思ひきつてしまいやしよふ【千】それぢやァどふもわつちどもがさきへたちやせんかふなつちやァ何もかもうつちやつてしめいなせいし【谷】そうさ學もんもするときァするまた和といふものもあるもんだなんでもこれからこしらへなセいしわつちやァもふこたへられぬと ヒイといつてぁたまをたゝく【ラン】そんならまついつてミやしよふあァどふもつまらぬか といゝながらこしらへミな／＼つれたち出るほどなくはまをぎへいたりいつものとをり丸次さし次かつゝミ哥にてさわく内よりしらせたるゆへまるふじのていしゆくるらんしなにかわけをつけてかへすこれより一トしほにきやかにてたいのものなところミな／＼花をはづむ【ヤリテ】ミな負へかつてから申あけますこゝハことのほか手せまにもござりますから

此あいだ此四五けんとなりのうちをかりをきましたどふぞあれへいらつしやりましてにぎやかにおさわきなさつてくださりませとねかひまするサァ〳〵ミなさんおつれもふしな「三人」よかろふ〳〵さァいつてひろい所でさわがふ〳〵（といつれもおいらんをせをいミちゆきといふミにてとなりへなりこミ又おもしろくさわくほどなくとこにてミな〳〵ねるとなりさしきにへおこうそづきんにてかほをかくせしやくしやとミへしものふたり木戸ばんとミへしものひとりわるしやれのすはらしき男ひとり四人いちざにて何かむしやうにしやれのめす）「木戸」うし鯉てふさんなぜかこんやハ酒をあがりやせんわつちばかりかふのんぢやァつまりやせんしかし此ごろァしばいもやすんじやァいるしあすいちにちねよふとさへおもやァすむがそれぢやァめくられねへでかんじようがわるいす「りてふ」これさそんなげびハいゝつこなしさ（ととんたミへほうにてさけものまずつん〳〵してたかくとまつている）「ワルジヤレ」コゥ中村やさんわつちどもァくちやァまづいがほんにどげへいつてもやすかァされやせんよミそぢやァねへがこのなかずでも勘さんといつちやァかほのうれたもんさけふもそれづゝといつゞけのけへりかけにどこへしけこんでひていをいぢらしてそれからひまぢやァあるしぐつとねやした目かさめてミたらりてふさんがきていなんしてこいといゝなさるからきやしたたゆふさんにやァはじめておつきやいもふしやすこんなやろうたがこれからお心やすくとかなんとかかたくでちやァはじまりやせんはゞかりながらおちかづきのため一トツあけやしよふ（とぐつとあをつきりにてさしいろ〳〵しやれるうちおいらん四人でるさしきを一へんミまへしかミのふたりさかるしはらくしてやゝ一きたり勘へなにかさゝやく）「カン」てめいたちァをつな事をいふもん

だこのかりたくでやくしやハいやたのなんのかのとそんなことァ町ていゝなせいこのとちじやァはじまりやせんそしてわつちどもがつれだつてきて女郎しゆがさがつたといわれちやァ此拗さんのかほがたちやせんなんでもふたりともにだしなせいいやだといゝなすつちやァあれのまくがはじまりやすぜ（とにらミつけるやりてもあれられてハこまるゆへしたへいつてとふ わけをつけしかまた女郎でるそれよりさかづきもすミとこへまかる）「女郎いさめ」もふづきんをとりなんしなよくこんな所へきなッんしたうへのきものをぬいでねなんしよ傳九さん「傳」そんならきものをぬぎのあをばとしやしよふしかしこんやハとんださむいす「いさめ」もしへあのりてふさんといゝなんすきやくじんハねつからミもふした事がありいせんありやァ新下りかへ「傳」なァにありやァしろうとしゆさけふ中村やからつれだつてきたのさ「いさめ」ほんにそふかへわたしどもァぬしたちとおなじこつたとおもいしたなんでもとんだミへぼうだねあれでもつうかへ「傳」何ねつからわからんてやィさ（とこれより何かむし やうにいちやつく）○（むかふのざしきで ハおしまがこへで）「おじま」ヱヽモいつそぢれつてへぞよふ（とおゝごへでいつてこんなにしかからにとあらうかとはなうたでゝとたちう わざとなやうぶからひきずりねとしきながらうんしなどおざしきへきてはなす）「おじま」ふざんゐミつをぎさん江川さんきいておくんなんしわつちがこんやのきやくじんハとんだばけものでありいすしよてざしきでミいすりやァやくしやのよふでありいすからとんだいろおとこでありいしよふと思ひしてとこへまわつてミいしたらいつそかほハねしやくどふのなゝことやら

のよふでねくろいかほにとんだあばたかありいすよそして又きでもきいていゝすりやァよふおすがとんだミへぼうでぐぢ〳〵ばつかりしていゝしてねつからすきいしねへいつそじれつとふむすよ【ふざん】そりやァとんちきだねそれでもこつちへきていなんしちやァすミいせんいゝかげんにつきやつてねなんしな【おじま】いゝへもふ〳〵どふおつせいしてもわつちやァまいりいす事ァいやでありいすと（なきごへになる）【ミな〳〵】それぢやァどふもわるいこんやぎりとおもつてかんにんしてねなよ（とこな〳〵なだめるおじまへなくかれするうち八こへのとりが）こけつこう〳〵火のよふじんさつしやりましよふ引

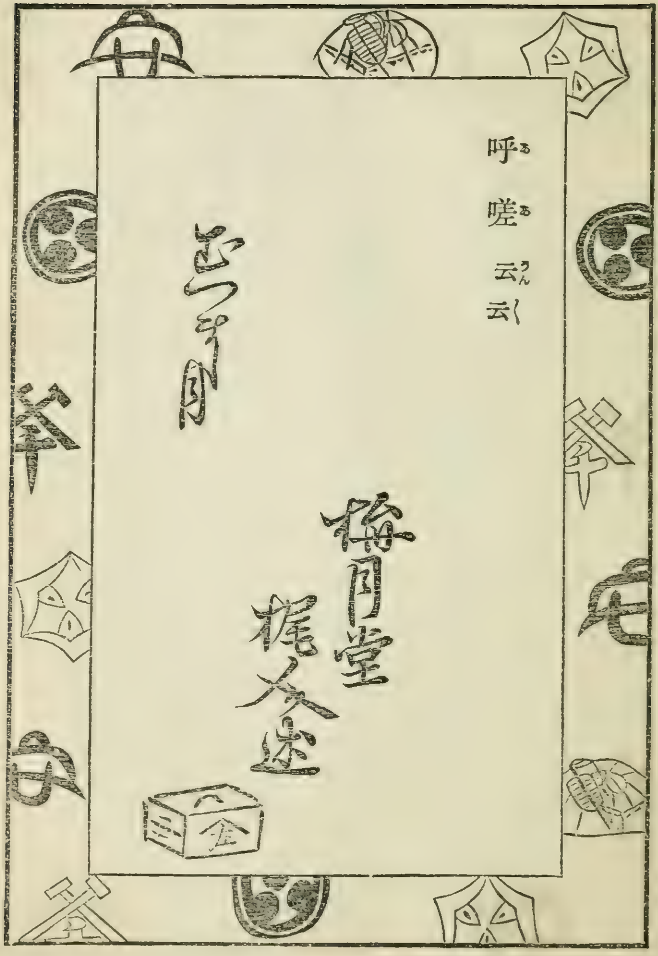
青樓五以爲金

青楼に入てひとゝなるとも人間わづか五十間大門口から呑込で五丁町を五臓におさめこせすがゞきの三味弦には心を空にし一寸先は廓の三十日の闇もなく禿頭の夜光の玉も

魂とともにひかりを失ひ最中月も竹邑が丸きがうへに丸かれと堅所は山屋豆腐の耳を刵で鼻につくほど喰べ豈其軟かき事を覺へざらんや異見の眼玉は食へども其味を知ねは

颯颯押押堤八丁土手腹に竹輿をのりすて自負にれ晒の手巾乾土木履籬に立て足れつくとも二階へ上らば唯一本のやりてのために脊中も見すべし大盡の襟元につくあれば色男

の繻袢で咽をしめるあり胸三寸にはたらきあらバ必しも母堂の臍くり金を窺ことなかれ親の恩深き事大海の如し夫れ南是れ亦北國五ツ雁金と題して水道尻の穴窄不倿此小册を努こいだすこと


呼嗟云々
梅門堂

青樓五ツ雁金

題辭

天　てんれ初會のざしきの新ぞうかい
ふざけきやくのあてぶりおどり

地　ちれあいかたの部屋のちやづけに
きやくのうわさのしんのあめ

人　ひとれいきぢの男だてくだけてミれれ
ぜんあくのなき五人一座

其壹

天筆和合樂壽福開延滿先かき始の初會ざしきの三人一座せかいハまぢりミせいづれもとしハ三十になるやならず衣裳つきハいろハかわれど三人ともに上着ハついのふとりの紋つき下着ハゆうきじまはおりハ小もんりうもん黒うらのけぬきあわせ帯ハ新おりはかたもちものハ丸角ゑち川雨家のしこミあいかたのいせうつきたいがいごすいりやう

市右衛門 新ぞうかい尤なじミ　そゞ琴 としは十八か九

千右衛門 これハ初會ざしきもち　山ざと としハ二十一か二

平兵衛 これも初會へやもち　さく花 としハ十九か廿

ざしきもよほどことすみてしろかたむかん三寸まへ【千】もふ酒ハいかねへから市さんひさしぶりでぬしのおどりがミてへの【げいしや】これハよふござりましよふそういつてもおいらん市さんのあてぶりおどりハ多之介さんよりおかしくつてきめうでござります【市】なんだきめうだきめうとりにてしらふじ源太おいらハしらふでけんだサア一ッけんいこう【げい】まいりませうまけたものがおどりつこでいきませう【市】こいつハおもしろのぎよでんだからきつねでいこうサアいくぜ【げい】まいりやしよう【市】おいでなせへシヤン〳〵〳〵【げい】これハわたしがかちかいな【市】是ハわたしがまけかいな【花】市さんはやくおどりなんしへ

「市」おどる／＼おどるへいけひさしからすといふからすこしやらかそう「平」あしくしやれすとはやくやらねへかィ「市」やるとも／＼やるともこうおいりとしよふなんとおれがおどりをきりにして座敷のうち出しとしよふ「千」それもよかろふ「げい」市さんよしわらとんびにしやセうねぅたへそうした黄菊としらぎくのおなじつとめのその中に「市」なんと道中やるもんだろふぅたへほかのきやくしゆわすて小舟ながれもあへぬもミぢばの目だつふよふのわけへだてたゞなでしことかミかけていつかくるわをはなれてしおん「そら」あれちよつとミなんしあんなふざけたまねをしなんすわなばからしいぅたへそうしたこゝろのおにゆりとおもへば思ふほどきもせきちくになるわいな「市」もふ／＼ごめんだいきがきれておどれねへ「そら」いまのわたしかかミなりさんのおなりなんす時のまねでおざんすよほんにかミなりさんといへばぬしたちもしつていなんす庄九郎さんか中の町にきよ川さんの角左衛門さんといつしよにきておいでなんすとき「市」あのやしきものゝ角左衛門か角左衛門とわよくつけたあいつがつらもなりもとんとづく錢のセんだいつうほうといふもんで四角ばつているセ「そら」そのよふにわるくおつセへすなきよ川さんのきやく人だ「市」わるくいつてもいゝのさこつちにも文七といふ一チ座があるからどふも庄九郎がきたがわからねへこつちのうちへなじんでくるか「そ

青樓五ツ雁金

礫川亭

ら」ァノ角左衛門さんと一座てぬしたちのおいでなんせんうちいなつまさんのところへたしか二三度もおいでなんしたろふ「千」ァノあく玉がついてきてハたいへんだとんだ口がわるふごぜんやセうね「そら」あいさいつそにくい口をおきゝなんすとさ文さんの事をわるくおつせんすからおいでなんすたんびにきよ川さんがはらをおたちなんしてしやくをおこしなんすわきできいておりんしてもほんににくらしうおざんすもしへほんに文さんハのちにおいでなんすかへ「千」モゥおしつけきやセうどふしても此ころハうちがわるいからねたつらでぬけてくるからひけすぎにもなりやしよふ「そら」うれしいねへ「千」おめへハ文七がくるのをそのよふにうれしがるがあしでもつけたか市さんコリャうさんだゼ「市」うさんだところかからてんぢくに天にあらばひよくのとり地にあらばれんりのゑだ「そら」よしておくんなんしきよ川さんと言おれき／＼がついておいでなんす「平」それハそうと千さんそのきやく人といつしよにきてハいよ／＼庄九郎ハむこふづらとミへたの「千」そうさ此中もきけば文七かところへごうぎにしやくりの手紙をやつたといふ事たそれにつけても文七がこぬうちきよ川さんにあいてへもんた中の町からかへりなすつたかきかセてくんなセへまだおめにハかゝらねへがうわさにきいたきよ川さんなにかのれいもいゝたし文七が事についてはだん／＼はなしてたのミてへ事もある

から【そら】モゥおかへりなんしたもしれんせんでへぶおもてざしきがにぎやかになりんした【千】かならずおめへがたが庄九郎にあいなすつてもわたしらが來ている事ハさたなしにしてくんなせへこのころあいつはこゝのわるいことがあつて（トきせるのすい口でむねのところをたゝき）それだからおなじともだち中でもこつちらへくるなぞハたがいにかくしやつてくるからそれともろうかなぞでいんがとあつたら百年めきよ川さんのきやく人ときていてハなをの事なりたけあわぬよふにしてへもんだ【平】そうさあいつがつらを見るといめへましい市さんなぞハ氣がいゝからなんともおもわねへがおいらハあいつにあふと一ばんいふきだ【市】ゆふきよりしまちりめんにしてしよじだんまりのかくしうらハがくむくがいゝいさくさがあつちやあきよ川さんもしにくしのちに文七がきた時むづかしでもできてハたがいにわるいなんとそうじやあるめへか【茶や男】さよふさきよ川さんの客人と御一座でハむづかしいときに市さんまづこゝハちよつとおかたづけといたしませうまたのちほど文七さんがおいでなすつたらともかくもちとあちらへサァおめへがたも三味せんをしまいなせへこれあの子さく花さんのところへおつれもふしてくんなせへいゝ子だ【かむろ】もしへあつちらへお出なんしへ（トかむろがあんないに三人ハまづかんとうのつれ小べんそれ〳〵さく花が部やへおちつく）【茶】まづこゝですこしのうちおはなしなさいましたゞいま山がたさんのおざしきでハおまんまがはじまり

ましたから通をとふして【千】しよふち〳〵おめへたちハもふいかねへかミんなとまりのすハしれている【茶】市さんハしたでござりますよおむかいハれいのとふりでよふござりませうね【市】よし〳〵文七か來たらはやくよこしてくだせへ【茶】【げい】さよふなら御きげんよふ【三人】ごくろう〳〵　これたきつかけにひきとる入かわつてきよ川きたるこの所きよ川千右ヱ門文七がはにていろ〳〵とはなしあれどもこれハのちに山かたがざしきにてくわしくあらわす

其　貳

地も木も我が大君の國なればいつれか鬼のすミかなるらん　鬼もやわらぐ北里の二かたがつぎの間にハだし物のざんぶつにたしなミの七色ざぜんまめなづけのこうのもの大ぜいハ五とくにとゝまききやくのうわさと　口まセぐつとのみこむきいたふうはしにもかゝらぬよたんぼうかミわけてよぶ手くたのむま事しがなききやくハ茶づけのごとし　【山】やまじや淸川さんのちやづけ茶わんとはし箱をもつてきておきやそしてのきよ川さんがさく花さんのところにいなんすからいつておはなしがすみんしたらきておまんまをおあがりなんしといつてきやそつとよまた大きなこへをしていふのじやあねへよそら琴さんそのくろいものはなんざんすへ【そら】これかへこれハあのいぢきとやらいふもんでおざんす【山】おやばからしうおざんすいぢきとやらいふものハこのよふにたべんすことをもふしんすでハおざんせんかへいろけのねへなでおざんすねへそういつてもそらことさん市さんもよつほどいろけハおざんせんねへ【さく】いろけ

がなくつてもよふおざんすとさそのいろけのねへ所にまよいなんしたものを【そら】ごしよふだからよしておくんなんしへあんな奴(やつこ)になにまよいんすものか【山】さましてたんとおあがりなんしおまんまをもつてあげんせうおだしなんしへ【そら】モゥたべんすめへおなかも身(み)のうちとやらもふしんすから【山】身(み)のうちといへばあのわたしがでた千さんとやられ文さんとしんるいでもありんすかいつそしんミらしくおつせへしたどれもとんだおひとからでぢよせへねへふうでおざんすねへ【さく】あふかたわたしがきやく人もおめへさんのきやく人もたしか二丁目あたりへなじんでいきなんすよどふもミたよふでおざんすうぬぼれらしいがもしきなんすならよんで見とふおざんす【山】なに来(き)なんすもんだほんのこんやれつきあいで文(ふん)さんのことできよ川さんになにかはなしがあつてきなんしたのサ共事はさつきざしきのうちにそら琴(こと)さんにはなしておきんした【そら】あいさその事を市さんにそうもふしんしたらじよせへもねへあのこたちだからぬかりハあるめへが初會(しよくわい)のきやく人と玉子(たまこ)ハかへしきわがかんしんたからよくあつためてかへしなせへといへとおつせへしたそれだからおまへさんがたもよくあつためておあげなんしへ【山】どふいたしんせうついうつかりとその玉子(たまこ)をたべんしたたちものざんしたものをどふいたしんせう

トぎゝふさんにさわくすべて女郎のたちものするへこのさとばかりでなくほか〳〵にてもよくすることとなりわが身のことにするにもあらずおや兄弟のためにするにもあらずぁふかたきやくのためにする

事多しへさこきよりハ千右エ門がせつなろたのミにせんかたなく文七が身のうへをあんしてむねもはろの夜のしん〳〵とふろ雨のあしおゆむろうかもわたる身よゝさきだつものハなミだなりよふ〳〵山がたがざしきに来りせうじをあけて入るふりも【き】山がたさんもさく花さんもきいておくんなんしどふいたしんせう トわけもいわずにひとりなき【山】どふじなんしたマァわけをおはなしなんしそのよふにないてはかりおいでなんしてハわかりんせんひざともたんこうでおざんす【き】ほかの事でもおざんせん文さんの事でおざんすがかなしいわけになりんしたそのわけハぬしのきやく人の千さんとやらがおつせへすにハこの頃文さんハうちをばかぶりなんすしやしきもしくぢりなんすそのうへァノおかみさんもだしなんしたとさそれにつけてもいろ〳〵といままでのふしだらにもしいゝわけがなけれハふりやうけんなこゝろもでよふかと思ひすごしてこのごろでハおつかさんもすぐれなんセんとさそれといふのもミんなわたしからおこつた事とうらミらしくもいひなんセずいままでおめへもくろふをしてはぢもかゝせず文七をよんでくんなすつた心をむにしてなんにもしらねへよふにこのよふなむりな事をたのむのもさぞわからねへやつだと思ひなさるだろふがこういふわけだからわたしらもたいてへいけんもしてミたがともだちやおやのいけんじやあとまらねへどうぞ文七がかわいかあはてないわかれにもしめへから二月と三月もしんほうするよふにとふざかつてやつてくんなセへすこしのうちでもしんぼうすりやあまたうちもでいゝからなんぼとふざかつてもたがいにじやうが

ありやあ又どふでもなると男なきになミだをこぼしておつセへすからァイとハいつてまいりんしたがどふいたしんセう【山】なるほどそういふわけならむりにとやこうとしなんしても文さんのためにもなりんすめへしたがこんやざしきのきやく人がもつてくるやくそくてハありんセんかそれがきたらマァあのかたでもつけなんしたら又どふかあんじもおざんセう【き】それにこんやハァノ角左衛門づらか庄九郎をつれて來ていろ〳〵なむりばかりもふしんすもふ〳〵いやで〳〵なりんセんかかの事ハありんすしいま又角左ヱ門をつきだしてハミんな文さんかさセる事だとわるくかんでもつけるとわるいからいやでもあろふがしんぼうしてよびなセへ文七をつきだしたなそといつたらおめへのためにもぶん七がためにもなるよふな事もあるめへもんでもねへしかし庄九郎がついてきてはそうゆふきやうけんもできめへとおつセんしたがほんにあの庄九郎へセじてたいてへくろふをする事じやあおざんセんなんでもこんやわゼひ〳〵こゝろいきをわけさセねばならねへ文七をつき出してしまへそうしてもらわねばおれがぶしがたゝぬのかほかたゝぬのともふしんすがミんなこれハ庄九郎つらがしやくつていわセる事でおざんす文さんをつきだすくらいならあんなやぼやあく玉にきがねハしんセん（トなミだを袖ではらいながら）もとわといへば文さんをいままでの様によびもふしてへからこのよふにくろふをいたしんすひるもはね出

やのわけできがねをいたしんした吉さんでハものもいひにくし何かゞいたしにくふおざんすからおぢさんをよんでこんや文さんがきなんしたら大なり小なりかけもかたがつくだろふからどふぞこのふミをそふ〳〵とゞけてぜひ〳〵きなんすよふにいつてやつてくんなんしわたしがほうにもちつとこゝろあたりの事もあるからぶさたにハいたしんすめへからこゝのところを吉さんによくはなしてくんなんしともふしんしたらいま迄あのよふにはでにしてきさしつた文さん十五や二十ハうちでもさいそくをするきでもありますめへが山の手のかけのわけがさつはりとつかねへからよんところなく文さんにももふしたそうさそれでどふもかけのかたのつくまでハきにくひといつてよこさしつたがそうゆふわけならわたしがとこからもよくそのわけをかいてなんにもこゝろづかひなくきさつしやるよふにいつてあげやしよふとうけやつていきなんしたがまたおじさんハかほだけのうつくしいとこがありんすへしかしこのよふにあめわふつてまいりんすし文さんハきなんセんかしらもちろんこんやきなんすとアノあく玉がきておりんすからわたしがこゝろづかひハいたばいでおざんすがまた角左衛門がやくそくのものをこんやもつてくるはづたからすこしもはやく文さんにわたしして文さんの手からはね田やのわけをかたつけて今までのよふにあいとふおざんすさりながら千さんとやらがアノよふにおつセへしたからきゝ

わけぬのもぎりたゝずわづか五日か六日あわぬといつてこのよふにまいにち／＼うか／＼としておりんすものを二月と三月とおつセへすが一ト月もあわずにいるとこがれじにゝしにんすいつそしぬのがましでありんしよふ トまたかきくもるなミだのあめきゝいるものも身につまされしばしことばもなかりしがかゝるおりからかむろの【めなミ】おいらんに庄九郎さんがおいでたんしとマァおいでなんしへ【き】この子ハたゝんだな人の氣もしらねへよいままいりんすといつてきやそら琴さんその酒をこれへついでおくんなんし ト茶呑ちやわんのあたつきり目をねむつてひといきにのミ むねをたゝきなミだをはらひ モウ／＼色男(いろおとこ)ハよびんすめへ命(いのち)がつゞきんせんそのうへにきいておくんなんしあの角(かく)左衛門つらがおれがこゝろのすむよふにしたら身(ミ)うけをしてすぐに身どもがやどのつまじやいまだミどもハどくしんじやてともふしんすわな文さんとわかれてそうでもなつたらどふいたしんセうそれをおもふとかなしゆうおざんす【山】ソゥくよ／＼と思ひなんすな文さんかお出(いで)なんしたらまたしよふもよふもおざんしよふぬしたちがそういひなんしてもそのよふに二月だの三月だのとゝふざかるよふにもなりんすめへから氣(き)をゼうぶにおもちなんしモゥ文さんもきなんすたろふからいやでもおざんセうがいまのうちざしきへおいでなんしてかの事をしゆびよくおしまいなんしへ トいさめるもなだめるもひごろなかよきほうばいとし【き】文さん來(き)なんす事を庄(せう)九郎づらがしつておりんすからざしきへまいりんすとなんのかのといつてめつたにハさしきをだす事でハおざんセんいつそ

の事文さんがきなんしてからまいりんせう【山】それでハわるふおざんす文さんかきなんすとまたはなしがながくなりんすからざしきのきやく人がはらでもたつて見なんしかの事をしゆびよくするにハわるふおざんせう【き】それでも文さんがきなんしたおりかほだしをしすハもしもはらでもたちなんしてハわるふおざんす【山】それハわたしどもがいゝよふにわけをいつてはらをおたちなんせんよふにいたしんすから文さんのことに心(こゝろ)づかいをしづにざしきへおいでなんしへ【き】そんなら文さんの事ハおめへさんがたにおたのミもふしんすにへぶんさんがおいでなんしてもかならずざしきへしらせずにおひておくんなんしかミなりががんづくとまたごろつきだしてかの事をしゆびよくするにわるふおざんすどふでいつもはやかへりだからしゆびさへよければあとハかまわずじきにまいりんすおりあしくアノいなづまさんもきやく人だからなをかミなりがおこりんす（トはなすおりからかミなりこへに）【庄】きよ川さん〳〵（トよぶこへにふせう〳〵にたちあかりいかんとせしがたちもどり）くどふおざんすかそんならはらをおたちなんせんよふにおたのミもふしんすにへ（トあとハたかいに耳に口あんまり小こへゆへなにをいつたか作者もしらす）

其三

人ハ武士なぜ傾城にいやかられ（きよ川のさしきにハ里のなさけもあさきうらくろはぶたへのもんつきにしたきハくん／ないしまはおりハはないろらしや黒こはくのはさミおびさもいかつけにとがりこへ）【角
左ヱ門】庄九郎とめやるなミともハもふかへりもふすかよふなところになかいハいたさぬ【き】
なんでそのよふにはらをおたちなんしたマァしたにお出なんしおけへしもふす事ハなりんせん
【庄】これハそうでありそうなものだ【角】なんではらをたつたとハこゝなとぼけもののめがい
ままでどこになにしておつたいまた身どもをとこへもいれず【き】どこに何をしておりんすも
のか山形さんのところにおまんまをたへておりんしたちつとのうちハしんほうしていておくん
なんしてもよさそうなもんでおざんすわたしが心をしらねへよふにわるくハあやまりんすから
なんであろふと床のうゑゝおいでなんし【角】イヤ〳〵いくまい左やうないつわりことをもふし
たとて誠にするものかあふかたてまへおやしきへ出入いたす文七がうせたであろふしるまいと
思ふかよつく存じてまかりあるだていこふふかましやそうな庄九郎おミはなんとおもやるさよ
ふではあるまいかな【庄】なるほどおまへさんのおつしやるが御尤でござりますきよ川さん
わるいりやうけんだセさつきも中の丁でいふとをりァノしミつたれをつき出してしまやァ角左
ヱ門さんの氣もすめばおめへもうじなくて玉のこしたうしにむまをのりけへるといふもんださ
もなくつてハこんりんならくたからの山へいつたとてもいままでつくした手もむなしくもとへ

たちけへるよふになつてミなせへくやんでもうらんでもけへりハしねへそこでかのうつされたしミつたれがからだ中にはいまわつてにへゆをかけてもさつてやでもぬけるこつちやァねへしめへにハしミつたれ虫にくひころされるぜなんでも命がもののたねたはやくうんといゝなせへとふでひとつからだでしら玉もちと庄左衛門がかうやくをうるよふなむまい事にハいかねへからどふともこうともふんぎりなせへ【き】モゥこうなつたからなにもかもかくす事ハおさんせんなるほとぬしもよんで文さんもよぼふといふハわたしがわるふおさんすが庄九郎さん文さんの事ハセんからおめへさんもきいてしつていなんすとおつセんしたてハおさんセんかなんほ今までおつきあいなんセんとつてあんまりておさんすそのよふに文さんの事をわるくおつセへしてももとハといへはわたしがわるふおさんすからわたしをおろしなりともして角左エ門さんの氣のすむよふにしておくんなんしなんぼいま文さんをつきたセとおつセへしてもいまそうしやああんまり欲にかゝつてものするよふてほかへきこへてもはつかしゆうおさんす文さんかあのよふになりなんしたももとハといへはミんなわたしからでおざんすかりたくにいるおりからほかにきやくと云ハなしなにをするにもかをするにもきよ年こつちらへまいりんしても此ざしきから夜具までもミんな文さんでおさんすものをセめてハ茶屋のかけのかたでもわたしがつけてき

れいに兄だいぶんのさかづきでもしてきれてしまいんすどふやら茶やのさがりのかたをつけて
ハやつはりみれんをのこしてすると思ひなんしやうか是ばつかりハわたしがかいふんでおざん
すそれだによつてちつともはやく茶やのかたをつけとふおさんすどふで文さんハよべんわけに
なりんした【角】それハはやそれにいつわりのなき事ならきつといたしたせいしを見たうへで
ハどふで身どもがおさんした金子十五や二十ハやりもふそう身どもなぞハやくそくにいつわり
ハもふさぬこのうへけしてほか〳〵にあくしよふのないよふに庄九郎やくだくをきめておくり
やれ（トセきこんでたすきんからかわはらせこ入のさんとくよりミヽをそろへて二十両）【庄】まづこの金ハわたくしにおあづけなさいましきよ川さ
んどふやらこうしてハ金ぜきのよふでこゝろもちがよくねへがぬしのおぼしめしだいまいつた
よふにしたくハはやくわけなせへこればかりじやあねへよことによるとあしたがあさつてでも
のりてへ時に玉のこしだコレサその様にだんまりでいる事ハねへわなわるいところでミへばる
ぜたゞしハ金がいらねへのか此庄九郎が見ていてハしにくひのかはてそのくらいな事ハあふめ
にミてやるわなそのよふにうつむいてなミだ斗りこぼしてだんまりでいてハなんの事わねへこ
うとく寺めへか廣こうじてわたくしぎ兩親にはなれましてとかいてある口上がきへ手をついて
いよふとゆふミでげびるわななんでもはやい事がいゝどふだ〳〵（トセかされてもほかにミセべき手くだもなければいかゞハせんとこゝろひとつてと）

つおひつそれにぜひなければならぬ二十兩△となりのあきアやにへ文七がせんこくきたれどきよ川がかほ出しせねばあんじられよふすいかゞとたちぎくおりから庄九郎がいろ／＼とのあくげんにこらへかねきよ川かざしきへふミこまんとへおもへども出入やしきの角左エ門袖にすがりことめろへそらことなだめる山がた【山】マァおまちなんしそれでハ一も二もおざんせんどふもそうしなんしてハわたしどもがきよ川さんにたのまれたかいがおざんせんぬしもきゝわけていながらはらのたちなんすハもつともでもありんすがちつとの内しんぼうしていなんしへ　トさゝやくきでもついこわだかとなりへもれておどろくきよ川それとがんつく庄九郎【庄】なんたとなりハあき部やだと思つたがでへぶどたばたとするがどろぼう猫でもへゑつたかくらゐものもあるめへにたゞしハこゝがうらやましいかうらやんだところがねこに小判だどふしてなじミにはがたつものかこゝにハ庄九郎さんといふいちもつのいぬがいるぞ【角】なんじやとなりへねこがはいつたドリヤ身どもがぼいまくつてミせもふそう　トたちあかるすそをきよ川おさへ【き】ゆるしておやりなんしいま見でまいりんしよふわな庄九郎さん角左エ門さんの見ていなんすまいでこのほりものをけしておくんなんし　トすそをおさへし手をまくれば角左エ門これにておちつく【角】庄九郎か様な事とハそんセんから身どもハもぐさもぢさんいたさぬおミがところにハござらぬかな【庄】清川さんまことにこのほり物をけすきかいひりやうけんだそうでもしづハおさまるめへ【き】これでぬしの氣がすむならちつともはやくけしておくんなんしへ　トいわれてせきたつ角左エ門むねへどき／＼【角】サア／＼庄九郎またもやぎよいのかわらぬうちじやミどもが心をやすめておくりやれ【庄】そのやうにおセ

きなさる事ハござりやせんなんのほりものをけしたくらいであんまり氣のすむ事もありやすめへそのくらゐなことでハこの庄九郎ならふせうちだ【き】なんほいぢめいひとつて庄九郎さんあんまりでありんすへ【角】シテ〳〵庄九郎おミかりよふけんハいかゞだな〳〵（トひさをたゝいてしやちこはる）【庄】りよふけんとつて外にふかいこともございやせんがよくつもつてごろふじやしほり物をけさしたとつても清川さんがけしなすつたとつてもこれがはでゝもミへでもごぜへやすめへツレともこれでおめへさんのきがすんでかの事ハさせずともこの子の身うけをしておやりなせへますか【角】イヤハヤそれハなんともふしてもこのくらゐな事でハなるまい【庄】ツレごろふじやしそういふもんだからとてものことにおめゝさんのいのふにおちつくよふにかのことをさセてしまやァ物がはやくすむといふもんでござへますはて一日でもこの子がこゝにながくいなされバやつはりおめへさんのごそんてございますそしてまたどのよふな事かできよふもしれねへ【角】なる程おミかそういつてミればそうかいの爰においてハこゝろづかいじや夜もよふねられんじやてかの事をしておくりやるかよくきめておくりやれそれさへすめば明日にもはや茶屋のてい主とだんかうしてきめもふすぞや【き】庄九郎さんかの事とおつせへすがなんの事でおざんすどふでコゥなりんしたからなんであろふといたすめへもんでもおざんせんがその身う

けの事ばかりはおぼし召(めし)はありかたふおざんすがマァミやわセておくんなんしなるほどこの中うちからそのよふな事をおつセんしたがセうだんだとおもつてまだはなしもいたしんセんけふのあすのとおつセんしてはあんまりきうでとくしんさセるまがおざんセん【庄】とくしんさセるとはだれにとくしんさセるのだァノなじミかなじミはモゥだんぎりなはずたが【き】なじミといふ人はしりんセんがそうだんといふはわたしがかゝさんさなんぼくがいに身はしづめてもげんざいうミのおやでありんすものをわたしがどのよふなしやわセになればとつても一ト通(とふ)りはそうだんしてとくしんさセたそのうへでこのごあいさつはいたしんしよふ【角】シテ身どもへのしんぢうはナ、なんでミせやるのぢや【き】ハテやかましくおつセへすこの文さんのほり物をけそうともふしんすのさ【角】ツノほりものはさしおいてほかにしてもらいたいじやてな【き】シテどふすればよふおざんすへ【角】ゆびをきつてもらいたい　トいわれてきよ川へんとうなくたいうつむいていたりしがよふ〱とこゝろをさだめ　【き】づいぶんゆびもきりかねはいたしんセんがとふして今それができる物でおざんすそのどふぐもなくつて【庄】そんならゆびもいよ〳〵きるきか【き】ヘテあらほどまでに思つておくんなんすものをなにしにうそをもふしんセう【庄】そのばでいやとはいわさぬ　トふところよりとりいだすかゝみそりにすゞのこうばこ見るよりきよ川へひつくりとなりざしきはまたがたひし　【庄】角(かく)左エ門さんおめへさんか見ておいでなすつてはこの子

も氣がおくれてわるいからおめへさんハとこへはいつてミすに寐ておいでなセへまし　トいわれてのろき角左エ門

【角】たゞ何事もミな庄九郎おミにまかセもふす　トとこへはいれは庄九郎屛風をとつてひきまわせハきよ川ハいまハにけるもにけられずとなりてもしや文七がまことゝ思ひてうらまんかと思へばなほも氣ハおくれしばしなミだにときうつれバ庄九郎ハそばなるてふしをとりちやわんにつき

【庄】清川さん酒でものミなセへそのやうにふさぐ事ハねへこれさへすれば何もかもむまくいくといふもんだ　トいわれて清川かたあけよふ／＼と酒をのミ

【き】角左衞門さんはりものをけそうといふもゆびをきる様になつたもとわといへばミんなぬしをよびもふしてへばつかりかならずわるく氣をまわしてあいそをつかしておくんなんすなへ何事もままにならぬがうき世のならひとあきらめてそばにいなんすならたのんだ事をわすれずにかならずたんきをおこしなんセんよふにしておくんなんしへ　トとなりへあてゝいふ事もわがミのうへとこゝろへて

【角】なんのミどもがわるぎになりもふそうこのうへハ思ひハいやますともあいそのつきよふ事がござらぬずいぶん屛風のそばによつてきいておりもふすたのんだ事ハ先刻庄九郎にわたしておきもふした庄九郎どふでござるなまだかな

【庄】清川さんなにをくぢ／＼そうミれんでハいかねへもんだどれこのゆびか　トむにむさんゆびをおさへこたばこ箱かミそりあてゝはつしりとまくらでたゝけばふところより手ばしこくかミとりだしてゆびへまきべうぶをとつてあくるまもはやほどちかき七ツのひやうしぎカッチ／＼／＼／＼／＼

【茶や】角左エ門さんおむかいでござりますたゞ今七ッでござりますおしたくをはやくなさいましいつもよりあふきにおそくなりましたいつもハ八ッ半でござりますがついかごをよひにわすれましたか[illegible]夫

だけおそくなりました【角】おそくなつてハ成もふさぬ夜があけてハ役がらがすまぬあいにく今日ハとふばんだもちつとおりたいところだが身どもハすぐさまかへりもふす庄九郎おまへのこつて何かの事ばんじよろしくたのミぞんする【庄】左やうならわたくしハおあとにのこつて何かのそうだん身うけの事がまたかんぢんかのものをおわすれなく　トさしいだせバ角左エ門ハにこ／＼わらつてとりあげ【角】おこゝろざしの一トしなじゆのふいたす　トいたゞいてふところへ入る　庄九郎づいぶんきづとがめいいたさんよふにくすりでもつけてかいほうしておくりやれはせうふうにならんよふにたのミますぞや身どもハ明後日ならでハまいられんがそれまでしまつてまいるからほよふしてたも　トミれんたら／＼したちかゝる【き】けさハいつそよつておりんすから中の丁へハまいりんせんしたまでもまいられそうもおつせんかんにんしておくんなんしへ【角】なんといたしておくらずともよふござる庄九郎もこれにおいやれミどもばかりいきもふす【庄】左様ならごめんをこふむつて是におりますまたおことばをそむくもおそれだから【角】そんならおさらば／＼　トおにのうでてもとりしやうにいさミすゝんでいでてゆく　△文七ハきよ川がよふすいかゞとたちきくおりからゆびまできりしくやしさむねんさかんしやくもいままでハこらへ／＼が角左エ門がいくまおそしとからかミたけはなしとんでいづればきよ川ハ【き】文さんか　トとりつきすがるをものもいわずつきたおせハくしかうがいもミだばら／＼ミだしかミを手にからミそばにありあふたはこぼんとつて引よせふりあぐる手を庄九郎しつかとおさへ【庄】マテ／＼文七はらのたつのハもつともだがこれにハだん／＼わけがあるセかづときけ　トたはこぼんをもぎとれは【文】庄九郎われにハたんといひぶんがある

五一

ぞモウこふなつてハ百年めだあく玉ならあく玉のよふにねをつよくしろ何の事たいまになつてわけもへちまもいるものか【き】マアく文さんおちついてひとゝをりわけをきいておくんなんしそのよふによふすもきかずにかんしやくをおこしなんしてハあんまりむちやでござんすわなそしてあたりへきこへてもがいぶんがわるふおざんす【文】がいふんもとふぶんもいるものかわれにいまつきだされてハわれにハかまわぬおれががいぶんだわへわれも庄九郎もかくごをしろ

ト文七ちさわくそのおとにきゝつけかけくる一座の三人

【千】セくな文七庄九郎きやうげんハどふだむまくいつたか【庄】ヲレカむかふづらのかたきやくでまんまとむまくやりあふせたきよ川さんさつきの二十兩ちつともはやくはね田やへ

トなげだせバ文七もかんしやくのなかおれがしてしばらくだんまり

【庄】きよ川さんさぞ此中うちからはらがたつたであろふけふハあかしてしよふかこんやハはなしてしよふかと思つたがそれでハおめへが文七への心もしれずうちまくでした時ハなんぼでもそれかれにミれんがでゝどこぞのはしでハ角左エ門にかんづかれでもして見なせへ今までしてきたかたきやくがむだになつてアノ夢市といふまことの惡玉におむまでものりけへられておてちんになつた時にハ文七がためにもならずきよ川さんのためにハなをならずと思つたからこの三人とそうだんして氣にいつたをさいわいに角左エ門をだきこんでこゝろに思わぬあく玉ハかんにんしなせへきよ川さんわたしがなじミのいなづま

さんもこの事ばかりハちつともしらねへ【千】文七ととふざかつてくんなせへとたのんだもおめへの心をひこふためひとつにハ文七もこの頃ハかんぢんのセうばいも手につかずうか〳〵としているがこつちでおもつているよふにさきでもおもつている事やらまよつている時ハしれねへもんだから一度もこぬをさいわいにまじめになつてたのんだらこれてよふすもわかろふしまんざらなわけならば出入屋しきの役人とはりやつてあすんだ處がとゞのつまりハためになるめへと思つたからたのんでミたのさわたしに出なすつたァノ山かたさんとやらにおめへのこゝろをだん〳〵きいてかんしんした【き】それミなんし文さん外日でさへそのよふにわたしがおまへにこつている事ハしれているでハおざんセんかなんぼこの頃五六日とふざかつたとつてうたぐつておくんなんす事ハおざんせんもちろんこんやのわけだとつても山がたさんにくわしくはなしておきんしたがそれとも間をミてちよつとおまへにあつたうへこうゆふわけだとはなしたうへとおもひんしたがとてもの事にどふぞなるならこれをもつていつておまへにわたしてはやくあんどさセよふとおもひんしたがどふもざしきハはづされずこふなつてミればかミともほとけともおもいんすが庄九郎さんぬしさんハよつほとにくふおざんしたモウ〳〵なんの事もおもわずにいつそ思ひきつてさがろふと思ひんしたがいや〳〵そふしてハこらほとまでにしてこれが

なければはねだやへもすまぬと思ひんしたからしんぼうしておりんしたそのうちのくやしさくるしさもしへモゥいまゝでのよふに文さんをよびもふしてもよふおざんすかへ【千】よふなくつてどふするもんだこれからわわたしらがうけやつてどふともするからあんじなさるな【き】それはうれしゆうおざんすが庄九郎さん角左ヱ門さんがもつていきなんしたゆびのわけはどふいたしんしよふ【文】どふするもんだきつてしまつたゆびたものをなんぼ庄さんがぜんだまになつたとつてもつてきてつがれはしめへしいつその事ほり物をけせばよかつたぜ【庄】ほり物はけさずともそのゆびをついでミセよふ　トきよ川か手をとつてこゆびのかミをほどけばむきず　【文】どふしたわけで此ゆびのつめにもきづのつかぬのは【き】角左ヱ門さんのもつていきなんしたアノゆびはへ【庄】あのゆびのがくやはこゝ　トはんくつとつてむしをいだし　みんなきいてくんなせへあんまりばかげたはなしだからたかくわいわれねへがわさわいも三年たてばやくにたつとやら此中ひさしぶりて目ぐろから大師かわらへいつたときごふぎなまめをかゝとにふミだしやしたそいつをはりでついて水をとつたあとのかわをはさんだがとんだいゝゆびのミかわりだからこれこそうぬぼれをいふたねになろふと思つたからすゞのこうばこをかつていれてミたところがきめうなんでもだましてやろふとおもつているうちいんがときのふ角左衛門がいふには庄九郎おミはなんとおもやるかしらねへが此

山きよ川が二十両のむしんをいつたがこんやもつていつてやるやくそくだかそのかわりにァノ文七めがほりものをこんやけさせよふと思ふといふからこゝでこそこの玉をつかつてやろふと思つたからまじめになつてモシほり物をけさせるもいゝがそれよりはゆびをきらせなせへしそれでわおめへさんもよつほといろ男だといつたらぐつとあつくなつてそんならどふでこんやいくやくそくだからどふぞしてゆびをきらセてくれろそうすればあれがすぐ身うけもしてやるといふくらいにいりがきたからなんでもわたしがきつときらしてあげやセうとうけやつたらうれしがつてあさから大さわきよそこでおれも三十二文いたんですゞめを一羽かつて血をしぼつてかのゆびにくるんだところがほんにミせたかつたどんなやつがミてもゆびにちつともちがいなしよそこでもつてきてきよ川さんにうちあけてこうゆふしだらだからこうしなセへといほうとおもつたが角左ヱ門がそばについてゝちつともはなさずあいつがよふなやきもちやきはねへ耳こすりでもするとわるくかんをつけてならねへからそれもならずなんでもおめへをあのよふにひどくとりあつかつてすこしおろしあんべいにするをうれしがるがアレハへんだセ【さ】アイナそうでありんす茶やの人とはなしをするのを見てもいろ〳〵とやかましくつてなりんせんそういつてもさつき文さんがなにかとなりでおつセへした時庄九郎さんがねこだとおつセへしたら

ねこならおれがおつてやろふといつてたちなんした時ハほんにこまりんしたモゥかなわぬと思ひんしたからほり物をけそうともふしんした【庄】そのほり物をけそうとおめへかいつたおりハおれもこまつたよふ／＼ゆびをきるにむりこぢつけにこぢつけたがくるしかつたなんでも思ふとを小りにむまくいつたからおめでてへどふでァ、ゆふぼんくらわこんなめにあふわあたりめへだしたが弐ばんめの大づめがすむまでハだんまりのひやうしまくだセ【文】コゥゆふわけならなにもおれがあのよふにセく事はねへあんまりセいてはづかしいおめへかたもなんぼおれがうちをかふつて五六日あわねへといつたとて此きやうげんをかくしてしてくれる事もねへこんやきたおりにはなしてくれゝばいゝ【市】ソゥするといまゝでしくんだおいらがきやうげんにはながねへコゥいふわけをしくんたもともとわといへばぬしにはぢをかゝセまいとおもつたからたいてへそんながくろふをした事じやァねへ【き】くろふといへばさしあたつてくろふな事がありんすァノ角左エ門さんかあさつてまてしまつていきなんしたがあさつてきてわたしが身請のそうだんをしてひよつとうちへつれていこうとおつセへしたらマァどふいたしんしよふかそれかいつそきになつてなりんせん【庄】それもこつちのきやうげんのやまだわなつれていこふとゆふならちつともはやくそれにしてしまうがいゝ【文】こらほどまてにしていま角左エ門に

つれていかれてハどふもおれが男がたゝねへからおめへかたにぬかりわあるめへか此そうだんはとてもの事にばらしてくんなセへ【庄】これをばらしてつまるものかいま此子をうちへつれていくにハ五百と六百もミゝをそろへているがそのくめんがぬしのいまのからだでできるかなんぼぬしがこふやのたんなさんでくろぞめのおはぐろかねハたんとあろふがそれじやあ此子の身うけハできねへからセかずとおいらにまかセなセへぬしにはぢをかゝセるよふな事ハしねへから【き】そうならどふあつてもいつたんわたしが身のうへハ【庄】角左エ門にまかセたうへ【千】はなをかざつてくるわのなごり【平】四ッ手をやめてびやうちのだい丁しりめにかしかんばん【市】土手八丁を四まへかた【文】かゝれながらもうけだす大じん【庄】おかごわきにもおつぼねにもついて行のハ庄九郎【き】ソリヤほんまでありんすかへ【庄】ほんまとうその中たんぼ【四人】はつととび出すかりかねぐミ【庄】なるこのおとのがら〳〵にふいをめかけてさらうわかミなり【き】なにから何までうれしうござんす庄九郎さん【文】ともたち中とハいひながらそらほどまでにおもつてくれるミんなのこゝろざしなんにもいわねへかたしけねへ【庄】なんのれいにおよぶものかそれハそうとおめへがたもちつとのうちでもねゝへか此そうどふでちつともねゝへやつさ【き】マァよふおざんすわなどふでけふハけへしもふしんセん

いまのよふになつてみなんしこのうへとめもふしたくつてもとめもふすことハなりんセん女し

たちもおけへしもふしんセんからけふばかりハおちついていておくんなんしへ【千】なるほと

こふくだけて五人一座をしねへもわるいからなんとそうながしにしよふミんなはどふだ【市】

これハよかろふゆらの助さまだちとおめをさますよりちとおめをやすめよふ【庄】まづ御てい

主やくだきよ　さんからさきへ寐なせへおいらも部屋へひきとろふかおらが女房ハかほだしも

しねへどこにいるか女房ども　トざしきのせうじもほのぐと はやあけわたるはるのしののめ　女房どもく　一ばんがらすか おもやのやね　カ、

アくく

林月堂

かぢんと

此小冊のきやくいづれもとこなし

このとこハ居つゞけのひるのせかいハ

來春のこう編に御らんに入たく

目出度し

天明申の春

青樓五ッ雁金

所謂謀計ハ蜜なるを善とすとや、客に手段の透間なければ、遊婦に殺の手管あり。そも此書の佳功なる。清川の流れにたゞよひ。雁金のかり寐の夢。むすぶえにしの淺からぬ中を流るゝ友千鳥。敵となり實事師と成て。功幕の一趣向韓信も爪をくわへ。張子房も舌を卷く。嗚呼後世恐るべしきのふの信友けふの向坐。斗り難きは人心なり。しかじ一たんの利ハ得る共通人といわれて乏しからんより。不粋と侮ハれて山吹色の艷男こそ樂しミ其中にあらむかと。一段上の軍慮も不意氣人の味方をなして野暮天の奥の手を誌事しかり

浮梁軒書

曾我糠鑑

曾我糠袋叙

唐洲なる人の作せし。這箇の。草稾を閲るに。建久の昔。曾我の曹司になれたる。虎少將が華麗を。今葭原に鳴名したる。散茶に比して矛盾なしたる佳言。素其情濃にして。殆妙なり。恁地一箇に。五街を帖で。傾城の言語恐れ牒より溢が如し。須此道の豪傑。此書を等閑にせば。寶の山に手をむなしくするに等かるべし。苟堅なる御老母是を玩索して。傾城の實をしらば鬼王が諫言既にやんぬべし

山東京傳誌

自序

物いへバ唇寒きの。一句をおもへバ。あつたら口へ秋の風。あたまをわらせて考るに。愼へきは色の道なり。玄宗皇帝も。天にあらバ。比翼茣蓙の。むつごとをはじめ。漢の武帝は。十日の居續に雨となるのちくるひをはじむ。されバ先の辻番で聞とも知れかたきは戀の道也。然りといへども五明の華扇。雞舌の雛雈。松葉の瀬川。靑簾のもとに客を待てまつのくらゐに桃華の顔。馴し廓の八文字。蹴出し褄の紅に肌の白きをもて情をいどミ。閨中一ツ滴の泪を流す時は。中天竺のきめ頭巾も。魯國の祖父客もいかで心を動かさざらむや我も昔は信田の狐。今は

迷ひの雲晴て。眞如の月に醉を醒し書くもさがなき作者の智恵しぼり出したる一冊を。曾我糠帒と題してきいたふうの。鼻の先をちよとあらひおとす事しかり

申のはつ春

唐洲述

曾我糠袋

唐洲著述

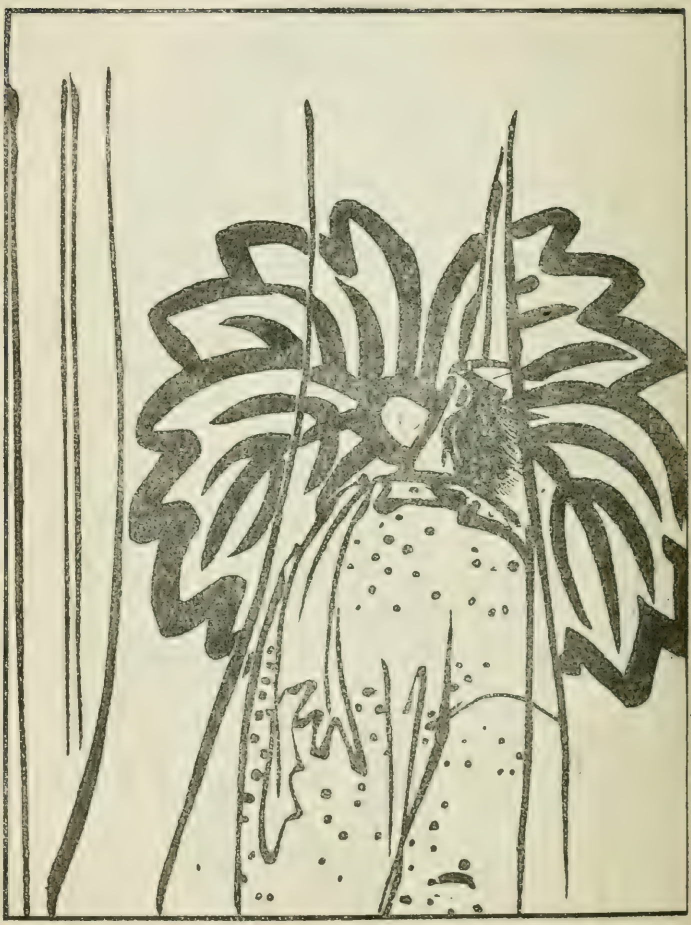
年〻歳〻曾我の趣向。かはらぬ春に。兄弟諸とも。敵工藤を討取らん心願ありて。東都にあらぬ鎌倉に。老若男女繁榮の。利現妙なる霞が岡。壹寸八分の八幡宮。奥山の風景世にすくなく。宙を飛ぶ源水がこまは。けしの介が目に這込。鯲が弁舌水の如くにして。見物の山をひたし。貴賤賑ふ其中に

祐成ハ黒仕立にて。もへぎ茶宇のはかま。さめざやの大小。時宗ハくろ羽ふたへに八丈の羽おり。小豆茶宇のはかま。黒かも壹人ツヽ連て菅の笠のふかきをかたふけ。おく山の方より裏門の方へさしかヽる。むかふより。朝比奈。小もんのはおりに小もんの小そて。くろどんすの帯脇さし壹ツ本。天地金の扇をはち付かせながら

【朝】コレ〳〵祐さんどけへ【祐】けふハはたけ山の下やしきへ茶によばれて。それからふら付

出したのさ。【時】朝さんお久しふござゐやす【朝】時さんかゑゝ所で御目にかゝつた。ぬしにれでへぶ咄しが有るから。あひてへと思つたが。此ごろにおやぢが三日三夜の居つゞけをもよふすといふて。そのあんじでわつちもいそがしかつた。マァおきぼうがとけへでもいきやせう。（三人つれ立うら門を出なにはや來り）【朝】いつ見てもとんだ美しひの【おきぬ】ちつと逢ふのさ【時】（笠を取ながら）おきさん。おことばにもあづからぬねヱ【絹】ヲヤ〳〵時さんかへ。ほんにそふじやつたね。いつそ此ころれとんとものわすれしてむちやじやわひの【時】久しくわづらつたむすめれどふした。扨きつひ大小だの。アしばるのまくの大小が五町があんじのだの（なにはやの門に）【乞食】一ッ錢下さりまし【絹】出たのがないとをらつしやい【朝】（金さらさのさげのたばこ入からきせるを出しながら）けふはゑゝ刻限だせ。青樓れ妙だろう。ホンニきのふれあふぎ屋の墨河が會日で參りやした所が。かへりかけに二階で少將があれふといふから。二階へいつた所が少將がいふにれ。此ころれ久しく時さんが御出なんせんか。どふしなんしたといふから。久しくわづらつて夫で來ねへのさとゑゝかげんに合せてゐたら。その病氣あやしふざんす。此間きゝいした事もありいすし。ぜんてへ時さんはぬしもしつてのとをり。譯のあるきやく人でざんすから。今さら外へ御出なんしちやァ。內しよの手まへもありイすし中の町へもかほが出されヱせんとまじめになつていふからわつちもこまりきつ

曾我様袋



七

たのよ【時】あいつもせつくまへが引かゝつてゐるから。そんな事をいふのさ【祐】なんと時ぼう朝さんにあふて只も歸られめへ。ちよつと中の町でのんでけへろふか【朝】わつちもひまだから。御ともいたしやしやう【祐】しかしあすの朝ハだいぶ用があるす【時】今夜歸るがよう御ざいやす【朝】夜かへるとあくる朝の心もちがゑゝョ。【祐】そんならそうしていきやせう【朝】てへげへな用なら撥していかつせ名さや日も西へかたふき、[illegible]馬ハ雲をまハつて、からすもねぐらをたづね、人のかげぼうしながくしてやしきの武左ハにしへおもむき、今戸のけふりほそくして。六さんばしへつく猪牙かずたしらず。サアいきやせうといふまぐれおきさんこの間に【絹】ハイ御きけんよふ三人なにハやを立出てふきおくる西風に。八丈の下着ひらめき。竹門田町たうちすぎて。ふうけいをながむるに。表ノ門ンのくもにしになおたて雨にのび、雁のとびかふありさまかまくら第一の名所まことに妙なるけしきなり【朝】ア、絶景〳〵。【祐】ぜつけいとハ唐繪かきの名だ。時に朝さん。此間馬道で。こなと屋の女ぼうにあひやした。とんだ河東をよくかたるのふ【朝】フゥそりやァおいとゝいゝやせふが【祐】そうさ〳〵【朝】あれハ琴もそうおうに彈やす【時】いく田か八ッはしかね【朝】いく田だそふさ【祐】今ハみんないく田さ。山戸松亭も名をゆづゝたね。合せものでハ。松亭と。とうきだよ。むかふより江戸げいしや【豊國】【豊重】祐さんどうなさいやした【祐】おきやくと來たか。【艶】さやうでござりまあす【朝】此ころハ舟ハ出るか【濱】けふも向ふ嶋へ豊梅さんや豊桝さんが來てゐました【時】ムウさッき駒かたで豊國にあふたッけ【艶】豊重さんも一ッ所でござりましたろう【濱】もふ私どもハ

おわかれ申ます。ちつと私どものほうへも入らつしやいまし【時】内によくいつてくんな【豊】へイ御きげんよふ【朝】豊濱もあんまりしほ屋がすぎるノゥ豊艶がほうがいゝぜ【祐】アレデモとんだ枇杷葉湯だぜ むかふより。侍二人。花色ちりめんのはおり。ぐん内しまの小袖壹人はくろつむぎの小袖くろちりめんのはおりちんくはしよりをしどうがねのはまつた。ゐあいぬきのさしそうな大小きんちやくの付たはなかみふくろを入ゑもんさかをあがりながら【一人】コレ山本氏。貴公のけいせいはとんだ美だの。あれはうらをかへしてやらぬか【山本氏】ナァニそはでみると大あばただよ。貴公のほうがゑゝョ【一人】わつちが姉は。葉むらやの花むらといふものだ【山】花むらよりは御門がおそくなつた。六ッ半にはいかふかの【一人】なんでもいそぐがゑゝよ 南無一ツぺんふり込ミでやい二歩の宋花三歩のむしん。あざの出突ろをようこぶ連人こあしをはやめていそぎ出し。三人ほどなく大門に入れこ。中届判ひたは尾花やといふ茶やへ行。時宗は茶屋は別とミへて。むかふかわの二三げん下に粧屋といふへはいるけわい屋の下女【もと】時さんよふ御出なさりました 下女かつてのモシへ方へ行キ 時さんが御出なさりました といひながら。時宗が大小をとりかたなかけにかけおもてのすだれを一まひあけさかつきだいすゞりふたをもち來る【茶やの女房おさく】【同じく娘おかつ】けふはよく入らつしやいました【時】お久しう御ざいやす【さく】どふか御びやうきのやうに。徳藏が申ました。御こゝろよふござりますか。【時】よつほどの内引ッこんで居やした ほどなくすいものもすし久しぶりで女ぼうむすめへしうぎをやる【さく】ありがたふござります わかひもの徳藏出【德】少將目をおしまひ申てまいりませふ。【さく】時さんどういたしませふね【時】けふは朝さんや兄貴のつき合て來たからモゥ一ッ丁目へはいきやすめへ【さく】さやうならいつそ御ついへでござります又こんと入ラッしやいまし。

徳蔵ゑゝョ【時】壹丁目へわけるりとことりいきやしやう。そして平次とおさよをよんでくんな。【かつ】ハイ徳蔵どんやおさよ殿ッと平次さんを（かつ手のほうで）【徳】あい〳〵【さく】モシ時さん〳〵此間少將さんに大にうらそられましたモウ大こまりをいたしましたノウおかつ【かつ】夕アもしんぞうしのお見にまりましたっけ（げんばんより與八三味せん箱をもちそたゝ上り口につき出して）【與八】ハイたゞ今。（といふこ引ちがへて平次おさよ）【さよ】ヲャ〳〵時さんよふ御出なさりました。おさくさん。夕アの事があたりましたモシ時さん夕ァあふきやで御うわさがござりました（平次上りて）【平】コレハだんなよふ（と平おじぎをする）【時】おさよほうくるたびにふとるぜ。うまいものでもくふそふた【平】あんまりいろをするからでござります。此間もわたくしにみを付ました（おさよわらひながら三味せんはこより三味せんをとり出さんとするを）【時】コレ〳〵すぐにいくよ。さきでひきなせヱ【さく】さやうならもふ入らつしやいまし。輔さんなら大かた。調子屋で御ざりませふ。徳蔵御供に出やァさやうなら御きげんよふ【時】いつてまゐりやせう【さよ】おさくさん。さよなら（尾はな屋の見世にててうし屋の全盛とらすけなゝあさひなけいしやおきなくらざいる）長唄へふじや浅間のけふりはおろか。ゑじのたく火はさわべのほたる。やくやもしほのそをこがすヱ、そうじやナァ、おまへのゑくほにさゝ濡て。私がうらの池にして朝夕のむのがわしやゑいわいナア（三味せんのてうしたそろへうきな春の夕けしき時宗へ〳〵おさよなつれ）朝さんおまちかねでございやしたろふ（尾花やの女ぼう）【おやす】時さんよふ御出被成ました【時】お久しふございやす

コレハ全盛御きげんよふ【とら】よふ御出なんした【藏吉】時さん久しぶりでちつと上ませふ【時】おせへたく\【みな】わつちがおあいをしやせふ 是より又大呑と成 【朝】アレく\アノ千とせやのまへのふり袖が花あふぎだの【時】內しよでおかどゝいつた時とれ見ちかへたのふ。ばんしんがミつぞのといふものだからしよさいれあるめへ墨河もつき出しのゐしやうのだてもんのむぢハよつぽどひねつたよ。【とら】今一丁目から。おいでなんすが松葉屋のワかなさんでござんすよ。朝さんぬしやァ見てへといゝなんした。ちよつと見なんし【朝】ドレく\なるほどうつくしひ。一ト太刀うらミてへれへ。【平】きれいなものでござります【祐】アノあとのれたれだ【安】からいとさんでござります【時】いつもじミなり斗ッするのふきれいでゐゝせ【安】大の手とりでござります【時】東江りうれとんだ見事だのふ【朝】瀧川がしんぞう出しほどにきやかな事れなかつた。まづまき繪のきものとれめづらしひイヤでへぶあふき屋が出てくるれへ。七こしもうつくしひものになつた。かた哥がなにかひねつたなりだぜ。あとが扇のにとうちだの。きれいく\【時】アレく\てうじやの唐琴も出て來たれへアレ見さつせへ。玉やの紫夕とつる屋の梅枝が。行あたつたからおかしひ【藏】ふたりゐゝ女郎しゆだねへ【平】ゆびをおりながら から琴さんだの。瀨川さんだのたが袖さんだの。ミさ山さんだのといふれミる御きやくが直に死やす

（といつてかほをしかめる）〔時〕平次ハとんだしハだぜとしハいくつだ〔さよ〕二百ばかりでござりませふ〔平〕とんだ事をいふ。今をさかりのたいこもちをつらめへて。ごふくやの傘じやァあるめへし。二百だの三百だのと（ミな〳〵わらふ）〔とら〕サァモゥお出なんし〔安〕御かへりが今夜だからモゥいらつしやいまし。朝さんと時さんハしんぞうしゆにいたしませふ〔時〕うつくしひのがいゝよ〔安〕（わらひながら）かしこまりました。（十郎五郎先に立つ。平次あとに付女げいしやハおいらんと壹ツ所にこ。朝ひなハとく蔵かもつている三味せんのはこをとりながら）けんばんの男にでもなろふか〔なミ〕なぜへ〔朝〕八文ッ、でも大キィよ（是ハけんばんより中の丁まで三弦はこのもち代八文ツヽなり）〔徳〕とんだ人のわるひ事をおつしやる（ミな〳〵てうしやののれんをくゞると新ぞう）〔あや哥禿きくの〕祐さんよく御出なんしたね〔祐〕あや哥さんかねを付ていつそよくにやつたよ。（二階へ上るかふろ）〔きく〕朝さんやくそくの物をもつて來ておくんなんしたかへ。〔朝〕かんにんしやついわすれた（二階上り口におゐらん村琴）〔村琴〕祐さんいつそきれいでざんすよ〔祐〕お久しふございやす〔朝〕むら琴さん〔村〕アイなんでざんすへ〔朝〕おめへハ小鳥がすきだから。いゝほうしろをあげやせふ〔むら〕ほんにおくんなんしへ〔朝〕平次平次とらけんでのまさねェければならねへぜ〔平〕サァ〳〵〔朝〕〔二〕シャシャン〳〵マテ〳〵シャン〳〵〔平〕まけてのミ勝べのませる世の中に。何とて我ハとしをとらけん。女房よろこべ平次ハおきやくにかつたハェ、〔朝〕ごうはらな事をしたなァ（若イもの久兵衛ふり袖しんぞう。いそ山玉つろ萬りあさいな時宗さかつきことおれる。そも〳〵とらおさしきのその）

ありさま。錦繍(きんしう)の夜具(やぐ)へ。かふろがあたまよりかゝやき。たんすの金(かね)ものへ。おやぢが目だまよりひかり。衣桁(いこう)のうちかけへあいよりも青(あを)く。花よりもなをくれないに。そらだきはなに入ツてよく人のたましいをうばふ。床に一ッふくの山ン水をかけ。花へ白梅のちくあらへにして。のころ雪(ゆき)とあやしむ。三ンてうの三味せんてうし高く。平次がしやれに贅(へたな)店がへをなす。此中區法雅詞京傳(ふうりうがしきやうでん)が紀爾(そうまおさ)といふ書にくわしければ。こゝに略(りやく)す。實(まこと)に入相のかねに花へちらねど。引ケ四ツの鐘(かね)に人へちつてこあんまのこゑさびしく。三味せんのてうしかすかにして。床へえなく〱細りぬ時宗へひとりまへり坐敷(ざしき)に酔(ゑい)をさまし寂寞(せきばく)としている所へ

【とら】通りながら 時さんおやすミなんしたかへ【時】イ、エ

【とら】ちつとはなして参りィせふ。モシ〱時さん。村琴さんをぬしやしつておいでなんすかへ【時】ァィ此まへ長さき屋で。ちよつとおちかづきになつてから。いづゝ屋でたび〱御目にかゝりやした【とら】そんならぬしハなぜむら琴さんの所へ御出なんせんェ【時】おいらんとんだ事をおつしやる。どふしてわつちがしんぞうしゆでもつよすぎやす【とら】なるほどしんそうしゆをおあげなんすも。一丁目の事があるから。ずいぶんむりてもざんすめへが。むら琴さんがぬしをよびたいかして先キぬしのうハさをなんしたから。おはなし申てミいすのさ。又中の町でもせう〱ゐンか。ぬしの女郎しゆをおかいなんしたはなしを。おきゝなんしたら。一丁目で大事が出來ィしやうヤァのちにきいせうまだはなしがざんすよ といなすてゝやうじではをかち〱いわせながら出て行十郎が床ニて 【とら】モシお休なんしたかへ。久しひものさァおやすミなんし【祐】ェ、やかましひ。ねるなといつてもねゝへでとうする物だ。時ぼうに噺(はなし)したか。【とら】ナァニ茶ばかりいつてしれつたふさんすからやめにして参りいした。むら琴さんハいつて

あどけなふざんすねへ。【祐】又手めへのやふなかハはおりが。大いそにたくさんあるものか【とら】皮はおりにハだれがしいした。モゥわるひ口をきかずともつとこつちィおよりなんしホンニぬしのおいでなんしたのハ十日の日でざんすよとらつほりとから□□□□□□□□□□□□むなのむつごと□□□朝日奈がとこハあいかたのしんぞうあや哥ミせ三味せんを。おつたてたやうにかゝへ。かんさしのさきで門太郎かなごゐをひく。あさひたよふけたこゑにて哥へとてもかくてもうき世ハゆめよ。さめてあしたのくもばかり。しやばじや〳〵とすてことばにも【あや哥】いつそいゝこゑでさんすよ。【朝】コレあやぼう袖をとめてべつしてうつくしくなつた。一ばんなひひてくんなさるならかたしけあげや町の。なめしにでんがくをおこるぜ【あや哥】そふいふ事もある事てざんす。きつひげびそふなこつたのといふ所へミさ山が禿せきのきたり【せきの】朝さんへおいらんがよろしくとさ【朝】又よろしくといつてくりやコレ〳〵そけへいくのハいそじしやァねへかコレ〳〵千山さんによろしく申てくりや【あや哥】コレサせきのやそつちへそう申しや。さつき升ミなと屋に。來賀さんがきていさしつたとそういや【せきの】そういゝィせふと日て行入ちがつてひさ山かけ来りかミを壹まいしおくんなんしな。そしてね。万菊さんとあやづるさんか。よろしくとさ【朝】おめへハこんやハお茶か【ひさ山】きやく人ンざんすハ【朝】是ハそさうを申やした。でへぶ御ぜんせいだね。ちつとだきつかせねへ【ひさ山】こんやハいろ男で。いつそとつくりへあしをツヽこ

ミィすハ。ヲャぬしのもん所ハ。つるの丸だから。わつちらが内のきやく人にハいゝねすじむかふのた郎がとこのうちハ。しんぞうねいきを生じ。さびしきおりから村琴がしんぞうむら濱のこゑとして【濱】時さんへお淋しふざんすならおいらんが來ておはなしなんしと【時】アィ今いきやせう。今じぶんにモゥ八ッだろうといひながら村ことがざしきの入り口から【時】おいらん何ンでございやす【琴】時さんかへこゝへ御出なんし【時】アィ今夜ハおいらんのおきやくハへ【琴】引ヶまへに歸してしまひィした。あんまりさひしふさんすからよびにあげ申ィした。わるひ時におじやまおゆるしなんしへ【時】ナアニとんだ事を。しほ屋じやァねへがしんぞう買ハきれいなもいさ【琴】少將さんでもきれいでざんすかへ【時】アィねる事ハきつゐきらひさ。時に此間ひろめたゐりやすハ。よくかいたねへ【琴】ゐゝ文句でざんすねへ。たしか夏の月と申シいしたむら琴ハ中の町で時宗にちかづきになり。その後もたび／＼一座せし事ゆへ。時宗がわかしゆぶりに死ぬほどのぼせたれども一丁目のせう／＼が事があるゆへ色にしてよハんとおもひきつて【琴】時さんおゆるしなんしと時宗が手をじつとにぎる【時】コレハおいらん何をなせへす【琴】時さんどうぞわつちが所へ來ておくんなんし【時】おいらんわつちを。小ぞうだと思つて。おつうおかけなさいやすね【琴】なみだくみて是ほど迄申ィすにうたがひなんすかへ。そりやァ少將さんの事を知ッておりィすし。もし一丁目でむつかしくいひなんしたらどうともしィすハな【時】おめへ何ンぞといふと壹丁目／＼といひなさるが。なるほど一丁目へも久しくいきやすが事としなによつたら。切れ

てしまつてぬしの所へ來めへもんでもねへが。いゝかけんなじふんにつき出されちやァ。壹丁目へもつらが出されずなんぼわつちでも。そんなにかるはづミにも切ﾚられやせん。【琴】そらほどわつちを。うたがひなんすもむりでもおざんすめへが。よくかんかへても見なんし。わうちだつも。こういふ事がしれたときハ。中の町へもつらが立たず。ない所の手まへハなをわるふざんす。よしぬしが二階をとめられなんした時ハ。とらさんの所へ祐さんが外ならず御出なんすし。とらさんともさうだんして。ぬしのくろうにかけず。とうともしいす。その時に壹ッ丁目をおきれなんすりや。よふざんす。せう〳〵さんのほうも來てさへおくんなんすりや。わつちがどう共しゐしやう　と。實にけいせいの。まことへめづらしく。三ふくついのじゆらうじんもうつゝをぬかししかミ火ばちの三ツあしもよだれをながすはや寺〳〵にかねのこゑ。けわひ屋尾はな屋　【茶屋】ハイおむかひで御ざります　といふこゑに祐成したくをして　【祐】朝さんをおこしてくりや【若者】かしこまりました　羽おりをきせながら　【とら】今の事をおたのミ申イすよ　茶やのこゑに時宗おどろき祐成かいるさしきへ來て　【時】朝さんハどうした【朝】ろうかご　今いくよ。ア、よいから今迄とんとしらなんだ。口がねばつてわるひ。コレ德藏壹ッついてくりや【德】是ハタァのかんさましでござります【朝】なんでもいゝよヲットあり〳〵【とら】およしなんし。どくでざんすよ【朝】死ンでもゐゝのさ　長哥夏の月の晦　へしめちからなきしんぞうを。たいた夢見てわらふてさめて。わしや醉やせぬにあれぐにや〳〵と【祐】夏

の月ハミやうだ（鶴ひながしんさう）【綾哥】すかねへよゥ（引のミな〳〵はしごをおりろ。）おさらバへ。くゞり戸ぐわらり。
かの呉文がわかれの詞に。まだ明ケはてぬ夜なれバ。笠にかくれず頭巾にしのバず。月ハ眉に
似てかのがかほばせを思ひ出し。蚊ハ道に二ッ三ッ鳴て。三弦の残聲いと細く〳〵夢かうつゝか
春のあけぼの

待宵

新妓婦志

唐洲述

全近刻

通油町

蔦屋重三郎版

夜半茶漬

江戸京傳叙

山東鶏告
山東唐洲
兩筆著

夜半（よわ）の茶漬（ちやづけ）

序

誰そや此夜中に扃たる門を擲くは。行暮たる修行者か。たゞしけんどん蕎麥の門違か。同氣もとむる鷄唐の兩子一巻を懐にして來り。予に校合をせよといふ。三人寄て文珠にあらぬ。ふたり一坐へきりかけし。紋日を逃る智恵ぶくろ。はたくといふは本屋の禁句。きんく万部の書をつむとも。女郎をころす秘密の傳は此一冊にとゞめたり。客と女郎の腹によくはいりし如き茶話なれば。夜半の茶漬と題号して。世に行ふといふことを。廻し行燈へ樂書すことしかり

山東京傳述

天明八戊申春

○かけ合の序

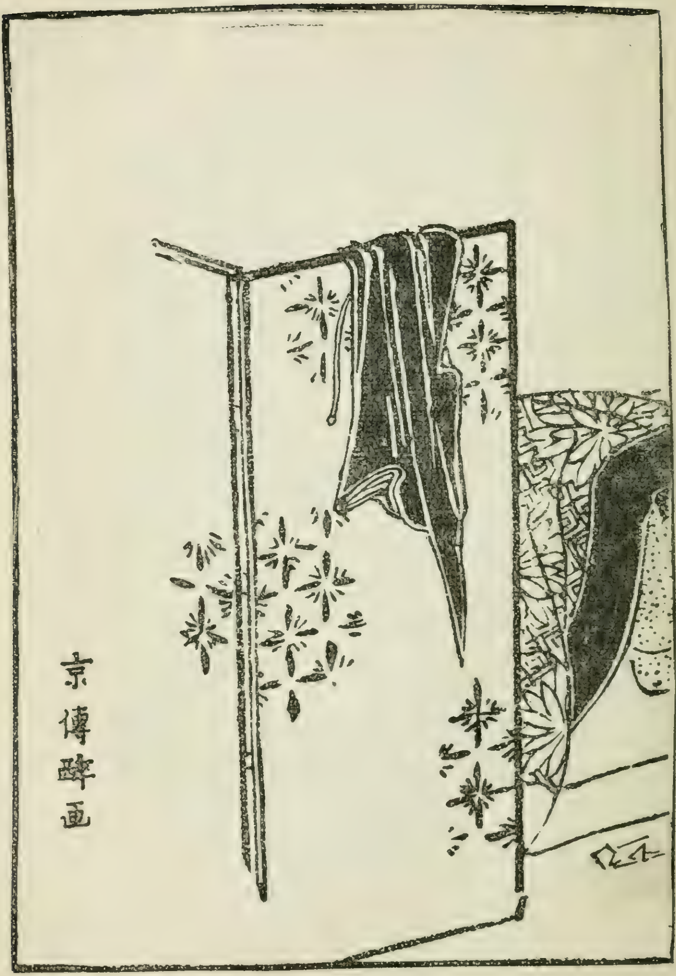
●けいこう
▲唐刕

●けいせいに。かはゆがられて。うんのつき▲いはんや。まとあるに。をいてをや●しかりといへとも。まことがなくば。おもしろくも。なんともなし▲あるもかなり●なきもかなり▲あると思へばあり。なきとおもへばなし●こゝにおいて。あそびの。たることをしれと▲●此一冊のはじめにしるす

夜半の茶漬

○發端

番所才兵衛がともし火ハ。堤八丁の澪標ともいゝなん。五十間の砂利に青海波のさまを見せ。衣もん坂より大門へ入来る人を小舟と見立しハ。こがれよるとの心にやと面白し。四郎兵へがかためし關のとぢも。そら行雁のたよりかと見れバ心うかるゝ物から。家〳〵の鬼簾の青き見わたせバ。風にしらふる松原か。爪音のかすかに聞ゆるも。胸ときめくわざなり。行かふ契婦が挑灯ハ。用水の桶にくらべ。駒下駄のからり〳〵ハならくの底までもひゞき。釜のふたする赤鬼が心をもとらかすべし。けだしつまの七重八重にうきおもひをつゝむぞかし。黒仕立ハ晦日に月のでぬすがた。女郎のまことをワがものにしたるにやとおかし。きのじやに四季のはなをさかせ。見世に夜の錦をかざる。下りいすといふ禿の聲。はや座敷〳〵もおさまるよとおもへバ。いつのまに大門ハとざしぬ。引四ッの拍子木せわしく。一度に見せを立鳥のひしはまぐ



七

りにやよびつれ あつまるらん。 されがしけれど淋敷ものにおもひなさるゝ。更渡夜やあんま針。ねむそふな三下り。 ワけれ聞へぬむつごとに明て行よやむらがらす。かわいく の一盛

名代の客たいくつのあまりかゝ入の間より小冊を出し見てゐる所へ名代のしん來り

【新】 ソリヤァなんざんすへうらなひの本なら。 わつちにまち人を見ておくんなんしおかゝんす【客】 そんなもんじやァねへ。 けふ觀音の地内で見あたつたからかつてきた【新】 わつちにちよつとおみせなんしナ【客】 まちやこれれ手めへたちのいろをするあなを書たものだ【新】 いやだね つれへョなんだかよんでお見せなんしへ【客】 そんならあんどんをかきたてや

しんぞうへかんざしてかきたてあんどうのかみへ。つつさしてふき

【新】 サァ早くおよゝなんしな其文曰

○美濃近江寐物語

それ屁ハころしてひるにしかず金ハいかしてつかふにしかす。いきた金とてものいつたためしなく。死だ金とて幽靈にもならねど。たゞころすといかすとハ。かの屁玉と金玉程のたがひハあるなり。ころすいかすとハなんぞ。出駕の帳の紙かつをふやし。帳場のぬり札のばせきをふさげ。角ト屋敷を棒に振て伯父にもつたる兩替屋が下モやしきにをしこめられずんバ共いきしにハしるべからず。耆婆扁鵲といふとも。金銀の脈ばかりハしれがたきものなるそかし金をい

かしてつかふといへハ倹約する事とのみ心得たるもあれど。此廓に入ッてけんやくといふことなし吝嗇の人ハかならす。此里へ入べからす。さりとて傾城ハ金でかふものにあらず。意氣地にかゆるものとこゝろへべし。あそびつくして悟るも可なり。酔ふてくるうて遊ふもよしと庭のたき火の元旦より蛤うり來る大三十日まてよしハらをうちとさためたる二人の遊客あり。一人ハ美濃一人ハ近江とてひとつほたて貝のもの喰ひあふ友にして。桃えんに義をむすびみの口上書にも。たがひのことつたえハのかれす。斷金の交りをなしけるか一日秋の夜の長きに宵のにばなのさまたげて。ねそびれたる余りに。美濃は枕をかたよせて。コレ近江子公ハ一町めに。いろができたそふだのちつと新ッ文句を聞てへのナァニいろ事もてへそうた。いさゝかなことさ。いさゝかな事もすさまじい。くひかくしハつみがをもいによッンナラはなしやしやうが。はなすもうぬぼれ。咄さぬもはにかむやうなり。むさしあふみじやねへか。かゝる時にや人ハ死ぬらんだ。名ハいはすとせうちでござへしやうが。なか〳〵小手めへにこてのきいた女郎さ。せんてへあの女郎の所へ。わつちかはむく屋敷からためになる客がいきやすか此間も其客と一所にいつた所が。わつちはいつもあける振袖で座敷にしやれて居るうち。女郎のつらつきがとふもあして。何かむしやうに茶碗ざけをあをつたり悉か手玉の石をとつて。らうかへな

け出したりして。何か心のうちでワつちにあたるあんばいさ。其客人ハいさゐせうちせぬといふものだから。ワからぬかほつきをして居るそふするうち客が小べんに立たから何かなしに女郎をつかまへて。でへぶおかしなたちまわりだか。どふしたのだといつたら。うつちやつてをきなんし。わつちか勝手でするしうちさと。つんとして居る。わつちもぐつとしやくにさわつたから。ぶみのめそふと思ふうち。客かかへつてきたから。そしらぬかほでよそ事のやうに其客にむかつてのはなしに。モシ今おいらんのとこにもはなしやしたか。わつちやこんやハとんだかんしやくな事のあつた晩さ。此ごろいさゝかな戀路かできやしたか。さつきそいつに中の町であつたところが。だれにかしやくられたそうで。くずと見せるしやうふの餅を見るやうにむしやうにぶり〳〵するからふみのめそうと思ふうちゑんりよな人がきやしたから。それなりにしてこゝへきやしたなんとワからねへ女郎だねへといつたら。客ハすこたんといふものだからほんの事だと思つてフゥありかてへふみのめしてやればよかつた。くやしいことをしたと。うぬがあひかたのうわさをすることも知らねへで。あげぎせるで居る。女郎もそらつたばけたかほでいふにやァ。それたかたしかに其女郎しゆも。おめへはんのしやうわるをしなんすのを。聞だしたからの事でおだんしやう。それハ女郎衆が尤さと。又よそごとに云うちが妙さ。

そふこふするうち床をおさめて。客ハおもて座敷のちかづきの客の所へあそびに行。茶屋ハもとよりうす〳〵しつて居ることとなり。坐しきの新造(しんぞう)ハとりもちのこと故ミな〳〵はつして行跡て女郎をつかまへて。床のうちへひきずりこんで。物もいはずに髪(かミ)をむしつて。くしかふがへをおつぺしよりの。ひざの所へひきよせて。枕で三ッ四ッよこつつらをくらわせて出てくる。女郎ハおきあがつてすそをひきとめる。拍子(ひやうし)におくりもの丶。角(かく)びらをひつくりかへして。そこらハ紙(かミ)くずのたまごばりをこしらへた様に。らんちきのさいちうへかの客の聲(こゑ)がするから。わつちハれんじづたへにをく座敷へにげてしまつた跡へ。客が來て見た所が其様子故。あきれてものもいはずに居る。こ丶を女郎がでへぶでかしたよ。てへけへの女郎だと化(ばけ)のかわをあらハす所だが。ぐつと平氣で。その客の胸(むな)ぐらをとつてひきよせ。モシおめへはんハうら見な人でおだんす。なぜわつちを此様ニしなんしたと云。なを客ハあきれててめへ氣が違(ちが)やァしねへか。此ざまァマァなんのことだと。はやかんしやくのめつきを屁(へ)ともおもはず。氣もちがふはづさ。何をかくしんしやう。宵(よひ)から名代の客人がおだんしたが。あつちへハゆく氣も無ひから。おめへさんにことわりもしやしなんだ。其客がこのごろぢうおめへさんのことをせいていやしたが。今夜もおめへさんのきなんした事を聞て。もらへとなんだいをいひかけたを。新造

衆にいゝかげんにくるめさせて・おきいしたが・今おめへさんがおもて坐敷へいきなんした・あとへつけこんで・わたくしをこんなにぶちんした・これもそんなおめへさん故でおだんす・これからあの客づらへたてひきだから・おめへさんをよびとげねばなりひせん・おめへさんもそふ思つて居ておくんなんしと・ひざへもたれのなき聲をだしかけたから。客は其一ッ句でぐつところされて。そふいふわけならをれもたてひきだから。りつぱにしてきてやらうといふさいちうへわつちハねまきのまへをび。新造の床から来たかほで。てへふさう〳〵しかつたがなんだへと。屏風のうちへかほをだしたれば。その客がいふには。近江か聞ねへ。こう〳〵云わけたハな。とんだ客があるものだ。それハとんだ事ね。おいらんどこもいたみハしやせぬかと。しらをきるうちがふてへしうちさ。うぬかをもいれぶつてをいて。いたみハしねへかもすさまじいねと。のり地ではなせば。美濃がなるほどこいつハおもしろ狸だハへ。わつちが二丁めのせけへもふじに成りやした。それにまわし方がかけびにか出たから。そのまゝぞえで。二十か三十のはした金を。ない所からやかましくいつて。二かいがふさがつて居るから。ワつちもとんだうつてゐるのさ。きのふきやうに用があるから。中の町までこいとよびによこしたから。七ッまへから下モのてれん茶やへいつた所が。もふ来て居る様子故。二かいへあがつて見

た所が。手あぶりの火をあつちへやつたり。こつちへやつたりしてゐたが。こゝへ來なんしとまねくから。コレたいそうらしい。きゆう用たァなんの事だといつた所が。いゝへじつハ用もねへが。あんまりあいてへからよひにあげんしたのさといふから。べらぼうめほんに用があるかと思つて。まじめなようを流して來た。いゝきぜんじやァねへかといふうち。小ゆびのかミでまいてあるを。ふつと見付たから。コゥてめへゆびをどうした。コレハタァほたて貝をおろすとつて。やけどをしいした。ムヽそりやあぶねへ事だ。藥でもつけたかと。わざとそしらぬあいさつをしたればモシヘじつけふよびにあけたハ。此ゆびのわけさ何をかくしんしやうわつちやゆびをきりんしたと。平氣で云から。ワつちもぐつとしやくにハさわつたが。様子の有りさうな事だと思つて。わつちもおなじく平氣で。ムゥそれに付て用とハ何のことだ。されバさ。マァもつとそばへおよんなんし。おめへも見なんすとをり。ワつちも夜具をしねへけりやァなりんせんが。新造をだして間もねへ事で。みんな客人にも手をおわせたから。つえにも柱にもと思ふハ。まだ中橋の客人ばかりておざんすが。つね〴〵おめへとこふ云ワけをしつていやすから。こんどゆびを切ッたら夜具をしてやらうト。なんだいをいひかけて。ぎりづめできれいににげるあいさつたから。ふびんと思つておくんなんし。夜具のかはりにゆひをきりんし

たと。なき聲でいふから。わつちかいふにやァ。コレワりやけがられしいこんじやうじやァねへか。何屋の誰とたいそうな名を。付て居る女郎の様にもねへ。わづか五十か六十の夜具のかはりにゆびを切るとれ。あんまりはかねへこんじやうだ。ゆひを切るくらゐなら。なぜおれがところへいつてよこさねへ。たとへかけが殘て居る程のしぎなれば。高利の金をかりてなりとも。そうはさせねへあんまりワりやァをれを見くびつたな。コレへなんぼしやつつらがうつくしくつても。女郎のくびにほれる美濃じやァねへ。心いきにこれほどでも。おもしろい所かありァ。命でもやるわへと。例のわつちが流儀で。くちぎたなく情のある文句をだしかけた所が。女郎のいふには。ホンニそふいひなんせばワつちがはやまつたれわるかつたが。それもおめへの身のうへをさつしてかばう心からさ。かならずにくいと思つておくんなんすな。そんなら此事をいつてやつたら。つがふもしてくんなんす氣でおざんしたかへと。云から。しれた事だどふでもする氣たわへといつたら。又ツりャほんの事かへとくどく聞から。べらぼうめしれた事だわへといへば。聞キねへホンニうれしい心いきでおざんす。そんならモウあさぎの頭巾をぬいでおめにかけんしやうと。小指の紙をすつぽりとぬいて見せた所が。ゆひれなんの事もなく。サア今いひなんした通リ。ほんに實があらば高利とやらの金をかりてなりとも。こんどの

夜具をしておくんなんし。それができねば今云通り。あの客人にゆびを切つて夜具をしてもらわねばなりいせん。かたわものにするもしねへもおまへの心しだいておざんすと。いはれた時ハ。わつちもぐつとへこんで。ア、あんまりつよみをいはねばよかつたと思つたが。こいつハこゝでへこんでハ心を見られるト思つたから。ム、それでてめへの狂言がきこえたわへ。此ごろおれに秋風だから。けへりがけのだちんに。りづめで夜具をさせて。突だそうと云あく心ンか。それとしつてもいひかけられたしやうがにやァ。たてひきだこんやぢうに夜具をこしらえてやらう。しかしそれにきれみをそへてやるからそうおもへ。それが出來たらモゥおれに用はあるめへ。早くけへりやァがれ。そばに居るもけがられしい。とふミのめした所が。おめへもくちのやうにもねへ。きれる人に夜具をしてもらうやうな女郎でもおざんせん。そんならあつちの客人に指を切てやるまでも無く。おめへときれゝば得心だから。見事こしらえてくれんす。夜ぎはびらうどにしやうか。にしきにしやうか。ゆるりとあそんでおいてなんしと立てゆくから。勝手にどこへでもうしやァがれと云ながら。うちかけのすそのうへゝあぐらをかいたものだから。ゆきたくてもゆかれねへハさ。それからわつちか紙入の中から。例のきしやうを出して。すでに火ばちへぶちこんで。くさぶえの下坐て物がたりにならうといふところへ。茶

屋の女房がとんで來て。ひつたくつてまきおさめ。かならずはやまつた事をなさりやすな。これハミんなおいらんが。おまへの心をひいて見る狂言の大帳さ。夜具ハすつぱり中橋の客人の方から出來てきて。今晩敷ぞめでござりますと。跡ハ笑になつてしまつたが。モシなか〳〵新ン手をだすもんだねとはなせバ。なる程あの傾も極の字が黒くなりやしたと。いづくも女郎買のはなしほどのりのくるものは無く。二人は目を皿の様にして。はなしやむべくもなく。近江がモシ美濃さん共指で思ひだした。ワつちがゆびの中買をした咄をしなんだが。わつちがしつて居る江戸がみに文車といふものがあるが。神田へんの客に犬悅といふものが有て。さる座敷もちにこの春からなじんてゆくが。いつでも此文車をつれてゆき〳〵した所が。いつしか文車に此女郎がほれていろ事になつたのさ。犬悅は共事をゆめにもしらねへで居るが。此ちう此客が口舌のうへでゆびを切レといつた所が。すのこんにやくのとのがれたがるあいさつだから。ぐつとあつくなつて。おれもいひかけたからハ。きらすばモウゆくまいといひだしたが。此客がゆかねへけりや文車もいろができねへから。女郎に云には。コウ手めへこんどゆひをきらねへけりや犬悅さんがきれるといはつしやるから。こゝはをれがためをおもつて居てくれろと。賴た所が。女郎は文車にほれて居るといふものだから。なるほど犬悅さんに切る氣はないが。

おめへに切るきできりんしやうととく心して。きるといふにきわまつた所が。文車がわつちが所へ來て相談するにやァ。モシ近江さん。こんどこう／＼云事がござりやすが女郎もじつが有てきらうといひやすが。こゝをおめへ／＼ときらせてわつちが。あんまりちゑかござへせんから。こゝがおめへのちゑをかりるばたが。指をきらせずに。丸くおさめる工夫ハあるめへかといふから。なる程そこにいゝ案じがあるめへものでもねへが。其客もそふいふ心がゝりになつては。きらずハせうちしめへが。こゝに一ッおもしろい案しがある。どうぞ其女郎に金を五兩ださせねへ。それが狂言のすぢになる。これはおれがしつた廓のうちの者だが。さる新造と色事をして居る所が。其新が大ぼれにほれて。指をきらうといつたを。きらせてハくひつきになると思つて。そうするにもおよばねへと。にげ口上をいつて置た事をちらときいたが。こいつにのみこませて其新造にゆびをきらせて。身がはりにたてるしゆこうハどうだ。此地いろめがひんこうといふものだからゆびが五兩になれべ。此物まへうかみあがるから。とんな事でもする氣だ。其新造もほれてきるゆびだから。ほれた男のうかみあがる事なら。それとしらずにきつてもしんじつはとゞくといふものだ。さすればつミにもならねへ。そこで其ゆびを大悦大じんにあてがへべ。公がはたらきも情も見よるといふものたが。こいつはどふだといつたら、そ

れハ妙按でござりやす。そんなら五両と其指とひきかへにしやうと。うれしがつてかへつた。それからわつちが其地色にのみこませて。とう／＼新造にゆびをきらせて。代金五両をとつてやつて。犬悦が方へはいつ いつかにいよ／＼切るからこいと。女郎のほうからよびにやらせて。來た所がゆびきり道具をとりあつめて。おさへてはざしきの新ぞう。きりては文車。犬悦が見ている前でゆびのかわをすこしかけて切た所が血がすこしでる。かねて例の身がはりのゆびを床柱へくつつけておいて。ヲヤゆびがどこへかとんだとそこらをさがし。とこばしらに付ているゆびを見付だしたかほで。うまく一ッはい身がはりをくわせたのさ。犬悦もめのまへでされた狂言だから。すつぱりかゝれて。そのうへならず其指をさけにひたしてのんでしまつたのさ。此坐敷もちも此しんぞうもひとつ内の女郎だが。二かいでさへ此狂言をしらねへで。此ごろわつちらがうちでふたりゆびをきつた。女郎しゆがござんすと。わつちがまへでうわさするをしじうしらをきつてしまつたが。指をきつた新ぞうが。虫がしつたそうで。かの地いろにいふにやァ。わつちがゆびョどふしなんしたもつて來てミせなんしといゝだして。わつちハこまりやしたとはなしたが。それからどふしたかあとハきかねへ。なんと女郎けへもこわへせけへになりやしたと。五分もすかぬ手がらばなしの。あとだれてくさぞうしなら。ゆめさめや

うと云ばな。ふたりはよう〳〵ねつきければ。いびきの音とからすの聲の下坐にて。あかつき
のまくれあきぬ

○

ある夜此二人のものがたりを。壁(かべ)ひとへこなたにてよもすがら聞ぬ。まことにはくじやう
の世の中。これを思へば女郎のうそもみな客のいつはりよりいづるところ。きやくほどう
そへつかぬけいせいの一句よく此じやうにかなひ。ぐわんそ花紫が

たのめてもよそに心をかよはしの
わたりくらぶる人ぞうらめし

と詠しけるもむべなりと。こゝに書捨て。川竹の流れのたきつ瀬に。その耳をそゝぎぬ

夜半の茶づけ大尾

後序

此みちの不通に此道を釋ハ。繪にかける女郎の胸づくしとつて。うらみいふにひとしく。此ミちの不通此書を見るとも。紅毛人の口舌を聞が如くなるべし。通と不通の本阿彌は。此兩子にあらずして誰ぞや。野暮の見るもんじやァねへ。とをらんセ〱

玉むち來賀無禮亭にをいて跋す

吉原楊枝

吉原楊枝叙

白澤ハ横腹に眼が有れども。五百羅漢の二階にかくれ。鱓八ッの目有リといへども。小船丁の鄽に釣さる。京傳かの蒼頡が四の眼にもあらず。たつた二ッの天眼通を以て五街を見渡し。鄽方燈のもとのくらきを照らす事。晦日に月の出たるどく。奥州が挑燈よりも隈なし總角に棒があたるとも。豈五丁町を暗闇とせむ。於皇此道の明るひかな

天明八戊申春　笹葉鈴成

自序

いつもはつ音の心地ぞと　よまれし鳥の手からかな。なくにさへわられゞいかにほとゝきす。いかに別れに聞くとても。明のからすの憎まるゝに。汝れ口ゆへ我れ筆ゆへなくて七ッのくせ事を。また書すてて。憎まれなむ。一筆烏のかわひとなけよ。

京ばし住

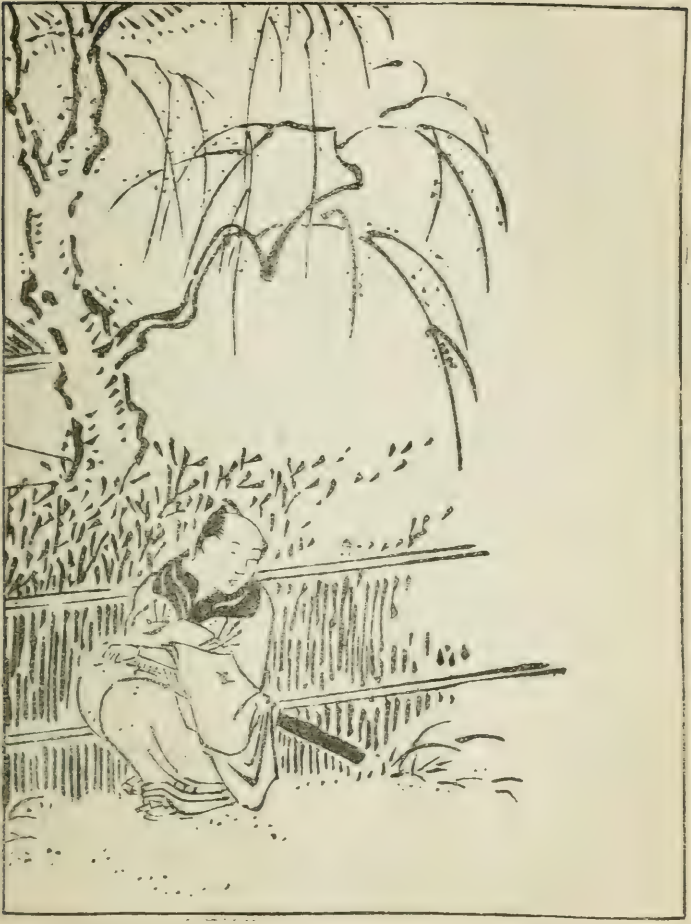
吉原楊枝

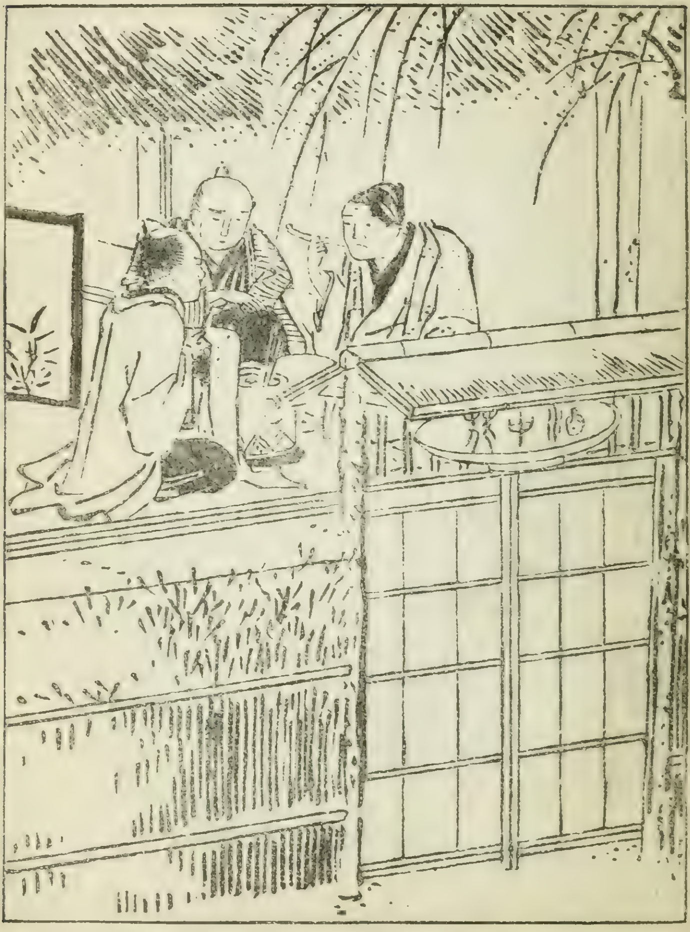
山東京傳著

人として愼しむへきハ。色と欲との二ッなりと尤至極なりと。されと色と欲とハ木娘に川竹をつぎたるごとく大キに異なり三粒嚢の投長半に大ふり袖の名有り。むへ山のけいせいハ。夜鷹にまんぢうの役をけし阿花獨樂に大門と傾城を畫しより。博奕打と女郎買とハ。一ッ畠に生ずるものと心得たるハ晝三ハ三分で買ハるゝものとおもひ。江戸の豆腐の喰ハれぬ事をしらぬやつの云ふ所なるべし。爰に表德を磁石とて。阿房と果報のひあわひに生れ出たるものあり。身代ハ拍子木て飯時をしらせ。革のへりの疊を敷くくらしなれと。天性氣どうらくなる生れ付にて左ほどの身代をきらひ。今年廿五の曉かけて、柳橋の別莊に若るんきよして。三ヶの月のさらに殘りて眉に似たるを見てハ。あいかたのかほばせを思ひ出し。流しもとの竈馬の音を聞てハすがゝきのでうしかと心うかれ。唯北にあそぶのミ一年中のわざとすれバ。磁石とよぶも尤なり。世間の人ハ酒に醉ッて吉原へ行に。此磁石ハ吉原に醉ッて。呑まぬ酒をのむ。一日かの廓のかへりがけ。淺草くわんおんの寺内を通りけるに常に見なれぬ風雅のいほりの有けるに心

を付て見れバ。垣の内に一ト本の柳をうえ。枝折門に盃の額をかけ酒中花といふ三字を書たり。かの五柳先生をしたひ。東籬菊杷。悠然望二南山一といへるしうちか但し生花屋のかんばんなるか。何にもせよかわつた物すき也。此菴主にこそやうすあらんと垣の小かげに身をよせて内をうかゞひけるに廿八九の女ぼう白ねりのきれではちまきをし。つやなしのあいうへ田に。くろしゆすの半ゑりのちとやれたる小袖にくろどんすの帯をわきのほうにてむすび。ゑんのはしに出て手飼のさるの蚤を取つているやうす色の青き所から髪の毛のうすひ所。いかなるぼんくらに見せてもそれしやのあがりとミへる姿。さしづめ矮狗て有りさふな場を猿とハひねつた物ずきと思ふ内。向ふよりくるふたり連。壹人ハ竹にすゞめのぼたもちほと有る黒はぶたへの小袖にくろちりめんのわた入はおり。らんうかぶりのきめつきんに。こいこうしの足袋。今一人ハ黒ちりめんの小袖に黒たんごの羽織よしハらほんだのきのふあたり結ふた髪。かた手にすそをつまんでしきせ小袖に鳴津あられのへりとりむくを見せかけ。かた手に鰒をさげて來る。又こなたよりハ▲結城しまの小袖におなじ羽おり。花いろちりめんのばつちぶつかぶりづきんのうへからよしハらのもちつきの手ぬぐひをかぶりたる男來かゝり。夫とミるよりづきんを取つて是ハ〱寒木様文字黒さま。おそろひなすつて。妙におはやひとあいさつすれバ。伊

之喜さんかどうりでいきな男がくると思つた。わつちらもけふはこゝの會日だからなんでも先生のおきる時こくをかんがへて。晝じぶんからぶら〳〵出かけやした。けふは雪そらでいゝめくり日よりだねへ。おくがたへはむきの此ふぐであつがんといふしゆかうだが。かふさげた所は。かほミせの二はんめだねアイサきつひものさ。わたしも今あつちからのかへりがけさ。先生が下戸といふもんだからわたしがミつぎものはこいつさとふところから紙袋を出し。萬屋の袖のふさにちと肉桂の匂ひで風くすりめきやすががん石もなかの月は口へかすがたまつてあやまりやす。少しうつわに花のあるやふにあるへいをとり合せやした。もしこいつがお茶をひいたおいらんをミるやふにいつでもりつはにあとへのこるやつさ。是でにはなをしかけはおまへがたのほうにねへりうぎだ。と。三人はなしながら枝折戸明ケて入りければ磁石はなを身をひそめてござうかゞひ居たりける。損者三友とは是らのともからをいッ、べし。かの三人はおひでさん。先生はまだ寐てかへとおとつるれば女ぼうが。ヲヤミんなおはやひね。もちつとさつき目をさまして又寐なをしやした。マアどんとはなしなせへしと手あふりをまんなかになをせば寒木がとんだ寐やふだ。爰のうちも向ふのかべに月かあたると。晝ミせの出るじぶんだノウ伊之喜さん。サウサ晝ミせといへは角トからおめへにあつたらとゞけてくれろとこの中壹ッふ





うをたのまれたをとゝけたかほでゐたが見てやんなせへとかミ入から出して渡せバ寒木ハとつて。アノけいも名ハりつパたが手のねへやつさ。ばんしんややり手をこわがる内ハ、はなせねへよといひながら。中ごろからすへをとび〳〵によんで見て。おきャァかれ是でも新ン手の氣だろふ。はかたこまの目きゝしやァ有ルめへししんぼうを見ろも有リがてへ。しゆんくわんがしやめん状をよむやふにいく度くりかへしてもうれしひ文句ハなしだと二ツに引裂て手あぶりのはしを拭ているはなしのさいちう。一ト間の内よりしわぶき二ツ三ツして先生とおぼしく。立出けるをミるに年ハ三十四五と見へて手の有るさかり温にしてはげしく威有つてたけからぬ風俗。やなぎ鼠のねまき小袖にやなき茶どんすのおびをしめながら出て。コレハ寒木子。文字黒子。伊之喜子。揃ッての御出今の高わらひが耳に入ッてやう〳〵目かさめやしたけふハけいせい買の極秘傳を巾からげるりつとお聞キなされと坐に付に三人ハすゞめ原へ小石うつたるごとくひそまりけれハ磁石ハおのがゑつぼに入リ此先生何事を云出すやと聞耳立てぞ居たりける。先生きまじめにて曰。夫釋迦の方便莊子の寓言。楠か謀略。繪師の繪そらごと紺屋のあさつて。唱へハ違へと商人のそら直いふも傾城のそらごといふもミな身を治るうそにしてなぐさミにうそつくにあらず。貞女にあてゝけいせいを論するハ螺螺吉丁蟲をとらへて我に似よといふ

にひとしかるべしされどけいせいとて八文字ふミなからも生れもせず。もとハミな白地の娘にておやはらからのために此里に來タれバ。女郎迚別に實情なきはつもなし。うそから出たうそもあり。まことから出たうそもあり。又うそから出たまこともある也。近松門左ヱ門が作意に傾城にまことなしとハ譯しらぬやぼの口から大たんなと書キしハふかき所なり。されバとて女郎にほれらるゝハ浮鳥をまとに下手の弓をゐるごとくあたるハまれなれバ。きわめてまこと有りと思ふも又あやふし。むかしより此道のせんだつまゝけいせいの虚實を論すれどもミじかくいハゞたますハ商賣。だまさるゝハなぐさミなりさあらハ商賣人の方へ六分ハつよミを取せてもにくかるまじ、その商人をだまさん〳〵と心がけるきやくもあれどそれハむかで小判で正じんの小つぶ切リに行にひとしかるべし傾城のまことをミるは。こちらもそれだけのまことを見せねバ。その情をうる事あたハず。又新造をあげて。坐敷持と色をし茶屋の二階でげいしやをころバし又ハ女郎の方より金銀を出して呼バるゝを我色男なり此里の通也と心へたるもあれどそれをよき事と思ひまねんと思ふへからず是にハいかふわけの有る事也。なにハの椀久ミやこの薬法師江戸の奈良茂紀文をはしめ大盡の身をうち。下總の銚子にむすこの人びやく打ッハ。傾城買のはんじやうのしるしよく〳〵おもしろきわけのあるものゆへとミへたり。とかく情をも

つぱらとする廓なれば客も女郎も情ふかくこそ有りたきもの也、君は今駒形あたり時鳥といへる一句の情はまことにありかたき所也女郎の客にあいとぐるに五段有りまづ初會には男ぶりと樣子にほるゝなり聞傳へたる客ならば。かく別はじめから氣しやうのしるゝ物にあらねば男振りのよき方が利を得る也又はたのおだてにてじぶんはさのミと思はぬ客にもほれる氣になる物也初會に一坐の内にて。じぶんの客壹ばんおとこがよくその夜もうれしくどふぞ今一度よんで見たく思ふ故よくつとめてかへすあすも晝ミせなぞてほうばいの女郎が夕ァおまへのあがつた客人はどふもよい男ださぞよびたからふなどゝなぶられるにしたかひいよ〳〵呼んで見たくなり。一坐のきやくの所までみをやり又はつてをもとめてよびにやり。それよりなじミと堰りて一月が程も有ッて見る是よりはその客のきしやうと手にほるゝなり此客きしやうおもしろくもなくさのミ手もなければ男はよいがおもしろく無ひ客なりと終ひあきがくるなれ此客手も有りきしやうもおもしろければいよ〳〵ほれやふがしミて來て外にほれた客。又は客色地色が有るとも切れて仕廻ふ氣になるもの也。扨夫よりはその客の心だてにほれる也夫ほどにほれても此客實情がなければ。是ほどまでにするにしん實のなき客也と。あきらめる氣になるもの也。此客いよ〳〵實情もあれば爰にてくつとほれ。もはや夜も日も無ひやふに思ひ。一日あはぬとふ

さいではかりゐてあふてもしれつたく。あわねバなをじれつたく思ひ。おやさとのやうすも咄して親兄弟にも引合せ少しも外へ心をうつさぬ氣になる也夫からが金つくなりもし此客身ひんにしてしげ／＼あへハつい身につまり女郎もいろ／＼くろうしてよべともつまらぬわけになりあげ代かたまつて二階をとめられ中の町へ出てあへども夫も長くたもたずしぜんとあハれぬやうになり。はじめハ死ぬ氣にもなれとも。夫か二ヶ月たち。三月たち半年立てバ。去るものハ日ゝにうとく。そのやふにも思ハぬやふになる内。又まんざらでもなき男が出來れハ夫ゝに紛れてつい夫ゝきりになるもの也。此客身のうへもよく。なか／＼城のおちぬ人ならハ此うへもなくほれもはや人のまへもいとわずいかやうの事もはつかしくなく女房に成た氣になり。酒をやめろの遊んであるくなのなどゝゐけんをするやうになるものなり扨夫からハゐんなり夫ほとに思ひ思ふてもゐんかなけれハどふかいふわけになりてその客の所へ行かず。年明ヶまへに成りて思ひがけなき人の所へ行くもの也。めりやす禿たちの文句に。思ふにそわで思ハぬにそふもゐんなりやしやう事がないそへとうたふ通りにてゐんといふものハ。男ぶりてもきしやうでも手ても心たてゞも金つくでも行かぬものなれハ。ほれられたも。つき出されたも。ミなゐんつくと。さとれハ。はまりもせずはらも立たぬ也。又女郎のこのむ所に客と地色との大キなる

わかち有り。金の有色男の客もつとめといふ文字あれハいや也錢のなきぶ男な地色も。まぶといふ文字有れバおもしろし女郎も客にほれたと地色をするとハ。心の内に別有れバ。地色を見のがして客のはちにならず客に。ほれるハ地色の耻にならず。只客ハ客をせき。地色ハ地色をされぬやふに心かけへし。夫もふかくハいらぬ物也。かうばりつよくて家をたをす事まゝ有り。あまりこミづにせくと。女郎のほうニてふかくほれたとミるゆへけつくつのるもの也だまつてゐてたるミの来た圖へのりこミ切れさすべし客をせくほどの客をバ又内所からせくもの故。とかくせくにもかけ引有りもとかしんにほれてゐれバ。ほれろと頼んでも外へ心ハうつさぬもの也。地色にこんくらへといふ事有り。引ヶより七ッまで男ハおもてに立あかし女郎ハ二かいのれんじに出て立あかす毎夜かくのごとくしてたがいのこんをくらべる。八ッに格子をあらひに出るわかいものにミつかり。あたまから水をかけらるゝ事有り。もちろん色事と一やうにいへ共。しんの色事と。義理の色事と欲の色事と三ッ有ル也。又なしミの客のかけなどたまりて二かいをとめられたるに女郎中の町へ出てあふ事有り是ハほれたばかりてもなく。あまりせわになりし客にハぎりてさふする事もあれハ。是らハ内所にて見のかしにすべし。客にもさま〳〵の別ち有り。ミやうもんに行く客有り。一通りなぐさミに行く客有り。女郎にほれて行く

客有りくるわにほれて行く客有り。はたにほれて行客有り。女郎にほれられに行客有り。ミやうもんに行客ハ名有る女郎に。ちか付の出来るをよろこび。定まれるあいかたもなく。ふりそてなどあけて所〻ほう〳〵をへめぐりとかくたれさん〳〵とよハるゝをよろこび。ミやうもんにたほれてむりに色けをさりかまんにておもしろくなきめもたび〳〵するもの也。一ト通りなくさミに行く客ハさのミ女郎の虚實にもかゝハらず一月に五六度来て。その夜さへおもしろくあそへばよひとおもひ。かへりもはやくして内のしゆびもわるくせず。女郎の用もそうおうに聞てやり。あまりかぶりをせぬものなり女郎にほれて行く客ハ。むしやうに客をせいたり。名代の夜ハかけ出して茶やに世話をかけ。何かくらくなりむりな時もゐつゝけをして内のしゆびをわるくし。毎夜来りしもその女郎と切れゝハ。さつハりと足ふミもせぬもの也是らハ茶屋なとにてもあてにならぬ客と思ふべし。くるわにほれて行く客ハ。中の町又ハ女郎屋の内所なぞにちかづきがたんと有りて。ほう〳〵を咄して歩行あまり女郎にかゝハらぬもの也はたにほれて行く客ハあい方の女郎ハそれほどおもしろくなけれど二かい中が心安くなりて。こゝからもたれさんあすこからもたれさんといわるゝかおもしろくて行なり。ほれられに行く客ハうぬほれなやつなり。何屋のたれをかつて見やふと。一度いつてはよし。又外へ行てハ。是もおもし

ろくなひとなじミかねるもの也。是ハうぬほれゆへもちつとほれる女郎が有ﾘさふなものと思ふゆへ也又客にあな知りと。わけしりと二ﾀいろ有ﾘ左ﾘの手の指に。よこにきづの有るハタァあたり起情を書た女郎たの。やり手にごふく屋をうけあハせ。はつの客にそんりやうのうちかけを着て出るの。竹村のはり札ハ金がすまぬとはがさぬといふを。しつたしまんにいふハ。あな知りとてきらふ事也。又わけ知りといふハ客色地色はつなしミあるひハ切レ引キまでよくさばくをいふされバ。穴しりにハ成ﾘ安くわけしりにハなりかたし新造買ニて坐敷もちと色をするならバ。あいかたの新造ハずいぶん小りこうにて。あまりねこく無ィのを見立てあげるがよし。ゑてハ新造のぶきげんよりあらハれ。又ハ夜ふけなどに坐しきのきやくが。かへつたかかへらぬかを見にやる時など。たわいなくねていくハ。いたつてこまる事あり。しかしあげるしんさうハ其色の女郎が見立てあげさするもの也又ばんとうなれハ。女郎にかくしてハ万事しにくきものなれハ。まづばんとうにあかしていかにもよくくるめておくべしばんとうさへしやうちすれバ。二かいであふにも。中の丁であふにも万事し安し。されど引にかへるといふきやくも朝までゐたり。又ハ名代の客一坐の多き客など有つて。いたつてしゆびに氣のもめるもの也。いかにも氣がながくなければできぬ事也。尤そのあひにくき所におもしろミの深きハ人情也。色の女郎の

坐敷がたとへ。やり手部屋のむかふなりともれんしが行ぬけならばこつちの物と思ふべし心中にも色〳〵有り　日み、時み。血み。血さけ、血きしやう。牛王きしやう。入ほくろ。ほりもの。かミ切り。ゆび切り。つめをはなす。又きやくの心中にぬす人誓文といふ事有り。是ハ先の女郎の物をぬすミしといふあやまり誓文なり。いつわる事有るときハ此誓文てはぢをかゝせるといふ事也。いかにもたわひなき事也此外に色〳〵の心中あれともミな畜生のする事也。すべて心中といふものハ。ほれぬ客やなまほれな客に深くほれたと見するための道具也。ぞつこんほれた所ハしうちにてしるゝもの也。心中にてうたがひをはらすハ小口の所也。尤あてになるりくつなし。されバ第一の心中といふハ心に有る事なり。ゆびを切一切の道具の。よろづ見世に有りてうる所にて知るへし。とかく客も女郎もなまほれなを。しんにほれたと見せるうちにたのしミは多く有り。しんにほれてかゝりいろ〳〵のくろうて。かんじんのおもしろミをけしてしまふ故。友たちほうばいのつき合にもかまハすたわひもなき人になるもの也。むかし方床花をやるにいろ〳〵の。あんどあれどもやつハり茶やから遣らせるかよし。多少ハ客と女郎とのくらゐによれハかきる事なし。またなじミ淺き内に客と女郎とさし向ひにて。金銀をとりあつかふハいたつて安き事也。坐しき持の女郎の身のおのがまゝにし安キハ中くらゐの女郎に有也おし

よくより二まひ目あたりまては内所にて。大事の女郎と思ふ故いたつて氣を付ヶ。やりて廻しかたねずまでも心を付ヶ。茶やにてもおつこふにとりあつかふ廊下あるきも出來ぬ故。いろくるひするともいたつて手おもし。又突出し間のなき女郎ははじめ一年ほどの内ハ。内所の世話なれハ。是又身まゝにならず。ことさら番頭女郎の手まへもかねねハならぬゆへ。色くるひもおのづからふんりよせねバならずされハ。中くらゐの所ハ万事しやすきもの也。又二まい目の女郎のわるきハ。何方の二階にても有る事也。今ときハ貳朱の女郎を買ふ身のうへのものハ壹歩を買ふ氣になり。壹分を買ふへきものハ晝三を買ふゆへ終には二階かとまり茶やにまで損をかくる也。呼出し晝三の客ハ國家の留主居うとくなる旅人。大商人の旦那。大名の御ゐん居のるい也平の晝三の客ハ有德なる町人のむすこ若との樣御用たし町人の旦那のるい也。壹步の坐しきもちハきめづきん。おはたの二男又ハ。店業のるい也。大見世の部屋持の客ハ家中もの又ハ高の能き山の手のるひ也。その分限に應してそれ〳〵の女郎を買へハ。おのつから買とぐへし。初のばんに女郎のほんにほれたとかけるのとハちきにしれる口傳有り。廊下を通る女郎をむしやうに呼込ッたり。度ゝ唾を吐たりあふと直に手水に行ッたり。はらハへになるのハいかほとよくつとめてもミなうそ也度ゝつわをはくとあふてじきに腹はへになるのハいかふ譯の

有る事也・氣を付て見べしまた何かいわんとしてはいわずにしまひ・いろ〳〵謎をかけて見たり・はづかしさふにて多く口をきかず客をふとんのはしへおちるほどにこつちから身をおして行ハほんにほれたニちがひなし・たとへなしミの客なりとも女郎にたいしてふかくはらたつハ心せましとかくはづかしきハ客と客との立ひきなり・女郎買ハ・金を遣ひ習ふより意氣ぢを覺るか肝要也金ハわきものありさへすれバ遣ふに苦の無きものにて意氣地は俄に覺へかたし世間にても・金をいかして遣ふ殺して遣ふといふ事有リ・されとまづむた金を澤山遣ひたるうへでなければ佳境にハ入リかたし女郎買ハ見切りが大事也とかくそれ〳〵の仕うちを見てとりさハくを通り者といふべし・もと傾城ハなくさミに買ふものゆへ深き所を論せす・其時〻をおもしろく遊ふこそ通なるへし・傾城にしつをつくされんとよしなきくろうをもとめに行く客ハ遊ひといふ所をとりうしなひしゆへなるへし又あたまからしつくしたるふりにてけいせいかいの味ミをしらすむしやうにいきすきたるハあまり出來過たる仕かたなり・此くるわハ顏のあたらしきうちがおもしろし・あまり顏か賣れて來てハかへつて色なぞも出來ぬもの也又女郎のきやくをたまして金をとるハ・商賣なればゆるすへけれと其金をためて親里へやり・田地あるひハ何ンそのかふなぞをかわせ萬事しまつして着るものなども氣を付ケて着るハ孝心のやふにもおもわ

れりこうらしくもおもわるれど。夫ﾚハ地女のする事にして女郎のきしやうにあらず色のために金銀を遣ひすて見世へも出られぬやうになりあすのたくわへもしらぬハうわきなやうなれども。けいせいの身のうへにあたりしきしやうといふべし。ぎりとなさけゆへにハ一命もすつるがまことのけいせいなり。されどけいせい買ハ。意心傳心にして筆を以て書く事あたハず。詞をもつてのぶる事あたハず。むつかしきもの也。それほとむつかしき事に。金を出して遊びに行とはいかひたハけといふ人に論すべからず。そいつまだけいせいのうまみをしらぬやつなるべし此道斗ハすいりやうのさたにてハわからず三ッふとんのうへに九年めんへきせすんバそのふかきを知るへからす。唯あそびといふいふ所をわすれ給ふなとしめしければ垣の外に聞居たる磁石ハ己が心にてきちうし。思わず門の内に入りて。かの先生にむかひ申けるは　我先ッ刻より垣の外にて先生の通談を聞く。傾城買の悟道をきわめ候。そも先生ハいかなる人なれはかく青樓にくわしきやと。ふしんしければハかの先生。さもあらんといふ顔付にて御ふしんにまかせ我身のうへをかたり聞かせ申べし爰にやうじといへるものハ。楊柳くわんおんのまもり給ふ所にして。口中を清らかになすの雑具也。その器種々有りといへ共その中に吉原楊枝と号しふさの長キ一種有り。常にけいせいのやうじ箱に住居ては。女郎のあなをしり。居續客に歯をみ

がゝれては通客のふところに入ッてその人情をさぐり知る我こそ。まことはかの吉原楊枝の精なり。今こそその姿を見せ申べし。と。たちまち。白りんずに向ふ菊の地紋おりたるゐしやうをちやくし緋のはかまをちやくし。やせおとろへたる老翁と化し。身より光りをはなち。其姿は長頭丸が昇殿をゆるされたる時の姿もかくやと思ふばかり。諺にやせたる人をやうじに目はなを付たやふ也といふもかゝる事にや。白髪の長キはふさのやふに思はれ今ふさやうじに菊のもんうつは此ゆへなるか。緋のはかまきたるをミれは赤き紙のふくろに入るゝも故なき事にあらず。磁石はぼうぜんとしていたりしがかのいほりと見へしも観音の地内と思ひしもやはり柳橋の主が別業にて三人の通客もかの女ほうもきへうせ。けるぞ。ふしぎ也。かの老翁ふたゝび申けるは。われにあわんと思ひ給はゞ、行跡を見給へといひさま庭のすミなるちりづかの内に入るよとミへしはゆめうつゝのごとく。あまりふしんなるまゝに立出て見れば日ごろ遣ひなれたる古キ楊枝有り。扨は此楊枝の精出て我を示しけるか。遊行柳の謠曲に柳の精出て佛果を得。又祇園女御の淨るりには平太郎が妻のおりうと化したるためしは。文章にかきしばかり。今柳をもつて作りたる楊枝の精目前に物がたりせしはまことにふしぎ也是をおもへは世にやうしがくれなどいふ術もなき事にもあるまじ何にもせよ此やうしのために青樓の悟道をきはめしこそ

有りがたしとひとり磁石はつぶやきてぞいたりける。思ふにやうしの古きを折らずして。そのまゝに捨る時はかならず怪有りと。世に云傳へけるも。さる事になん。

吉原やうじ　大尾

来春出版の小冊外題左に記し入御覧候

青樓
居續日記
全
近刻

青樓遊君
あふむ石
全
近刻

自跋

漢苑有柳。一日三起三眠。号曰人柳焉。蓋齒木以柳所製也。故雖非情齒木有精乎。延爲女肆雲談。而授其悟道於通客。奇哉怪哉。于時正月初紋日。使三弦掌雛妓呵毫。山東京傳書於雞舌樓上。

汐干のつと（しほひ）
三十六の貝を生寫にしたて
箱入二冊彩色摺

繪本虫ゑらみ
虫並ニ艸花生うつし
箱入二冊彩色摺

うづら衣
人情おもしろき事をあつめはいかいの便りとす

四方のあか
四方赤良先生のかな文集はいかい狂哥の詞書のたよりとなる本

狂歌卅六哥仙
狂哥人の像詠を畫く

野夫かゞ見（やぶ）
籔醫の穴をさかし長壽の傳を書たる本也

傾城けい
當時名高き遊君の評並ニ自筆をあぐる

吉原楊枝
けいせい買の一件極祕傳をしるす

曾我糠袋（そがぬかぶくろ）
女郎かいのおもしろき事目前にあらハす

昨夜の口舌（ゆうべのくぜつ）
かり宅のしやれ本なり
山東京傳 著

通詩選笑知
唐詩選五言絶句を當世の風流に仕立たるおもしろき本也

諢都洒美撰
遊君の桃灯紋所相印迄委敷記しそれ〳〵に譯を加へたる本也

柳巷化言
晒落とおとし咄との間にて遊君の面白き貫せつを集たる書也

地本問屋　蔦屋重三郎

自怡說

自惚鏡序

松王丸曰。松王が淨波梨の鏡に懸て鐵札か金札か。地獄天堂の境は云々。所謂淨波梨の鏡ハ。紅毛のスピーケル唐山の火齊鏡。我邦に稱する。自惚鏡なる物是なり。其形を寫すや。秦の始皇の懷中せし。照膽鏡もそこのけなり。頃日振鷺なるゑせ者。仁壽殿前の古事を思ひ出して。此鏡を高く擎げ。遍く北廓の遊里を照し。觀る所の善惡邪正。書して一冊の草帋となす。實に虛靈不昧うそつこなし晒落本。なり則外題ハ自惚鏡。作者もちつくり髭撫に

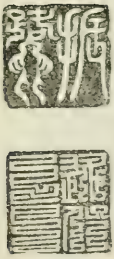
て。　筆(ふで)を酉の新板とす

天明九己酉初春　　皆樣御そんし

自序

舟かく夜明に近き堀の蛙も。何にうかれてすだくてふ。待乳山に啼鶯は咄相手の友なるかも。今や盛んに行る。自惚は此道の大意にして。四方の君立。彼鏡を額に照せば。忽色白いひ男通の氣ならざるハなしいでや此念を斷此蠹惑を去べ。傾城の腹をも探りつべく。化粧部屋の鏡となつて。素顔をも分たん事を。于時立春二日の晡こゝろ時めきて

振鷺亭戯述



自惚鏡

目録

○息子株　○率頭醫者

○武左　○夾客

○色客

〇松しま　まつのみどり

見立つんとせず。またとりしまりて。誠に中座の位あるハ角屋敷もかたむくべしつきだし一年ほとハ。あまり苦勞ハなけれど。中の町ハさらなり座敷身じまいのよふす客のふうぞく迄。まわしやりての氣をつければものこゝろしミがちに。うわきらしきことならねバ。さしてふかき色客といふハなしまた客にハほれず。色男にハなづミやすく。茶屋にてけいしやたいこもちのさわぐ時。口に手をあてわらいながら。われしらず客のひざへ手をかけ。にわかにつゝしむおもいれほど。娘氣に替事なけれど。言外にいろけあるハゆだんならず。床ハさミしけれどいわずかたらずどことやら色けあるハ十分ンにきたのとしるべし

〇息子株

黒羽二重の身は・ひろき上着。二ツついにかんとう嶋の下着、黒うへ田のあわせばたり前さがりほどよくこけちやにすこしきんのこぼれ梅のあるかべちよろの帯をまからずひろからず　ミたきれいにこにいやらでなく人がらよく。こくふに女郎のほれる出立つれハはくがとかいつてさしきもにきやかにおさまり　まだはゑいでア、おはなしなせいといふせりふありて、きせるをひねりながら。しつたじまんのしなやなはなす【白我(はくが)】いまろうかで松しまがどうぞおめいをつれて來てくれろとつて。あるやつだがしんになつてたのむからの。いゝかげんにいつておいたが。あのきりうで床(とこ)がよつくちやあたまらねい。なんでも大事(おほごと)がおこるだろう【榮次郎】ナニサよくあるせりふさ、【我】そふじよきいがなけりやあ。まんこうハ御(に)あんどだ。したが主(ぬし)によつぽときたといふもんで、ざしきでたしなむよふす。それに顏を見ぬよふに見るをもいれ。深山といふ口つきがあるからめうだ。なんでもあそびも主たちのうちのこつた。先がミへるよふになつちやあもふいかねい。トうれしがらせる。【榮】ときにきのふハどこへおいでなすつた。【我】大わらいさ。さんやのきけいがとこへ茶のいにいきやして。するがだいのをしようが初客(しようきやく)。わつちがていしゆで。花月がいつぺんごぜいした。きけいもあじなものずきをする男さ　けいりに玉屋のりやうのめいで。おかねに出やつて。よつぎの明神へめいりやすからあへべとつて。むりにいふからいつしよにいきやした。所がへんにわるさびのした所で。大にうたせやした。【榮】玉屋といへバ。なるほど柳枝(りうし)ハうつくしい。今でのかきぬきでごぜいしよう。【我】ふミのぶんしようなどハめうさ。ぜんてい玉屋ハないしよのしうちがきれたもんで。けいせいの

しんていかかくべつさ。【榮】ぼくがも下座敷へ。ごめいろうのかくれちつとひねりやすね(はなしている所へ松島がかふろ来る。)【こどり】もしへ主においらんがちよつとおいでなんしと。【榮】いまいきやしようといつてくりや。【我】いゝ子だから茶を一つくんできてくりや。なんといつてもむすこかぶだ。ゐがつくもんだの。【榮】つれが白我さんといふもんだから。こわもてにこんな事もごぜいしよう。時にあしたれ早くしやしよう。(ときせるたばこいれをもつてこうらうかへでる。おもこさしきにまち侍たといふかほで。)【松しま】ぬしやあ。なにをしておいでなんしたへ。(トにつこりとなる。)【榮】まだにひけめいだにおいつ。御用があるだろうとおもつて。よいをさましながら。はなしていやした。【松しま】ヲヤぜにくびになつていゝす。どれおまちなんし、(ト衣りを直し顔を見ながら。たばこをすい付てだす)【榮】これはをはゞかり。【松しま】どふやらたしか見申したよふだがどふもおもひだされいせん。【榮】ナニこんやはしめて來たものを。ごぞんじのはつがねい。【松しま】うそばつかりいゝなんす。はじめて來なんしたふうだ。【榮】うそをつくれきついきらいさ。【松しま】茶ばかりいゝなんすと。きついせんによ。【榮】よつぽどよつたそうでせつなくつてならねい(トうつむく)【松しま】あればかりおあがんなんして。主もふかくれおあがんなんせんね。【榮】おめいをまねて。さかづきごいにばつかりのましていても。ついよいやした。【松しま】ばかりしうざんす。(折からろうかを通りながら。おくざしきのおいらん)松しまさんおたのしミ

【松しま】ちつとおはいりなんし。○いつてまいりいしよう。トおく座敷の方へゆく。これはいろ客のひさしく。とふざかつてきたのか。初かいに一座の色男かにて。すかぬ客をとつたつほうばい女郎の。うらやむ詞なり。【榮】ごふぎにずき〱したきゝたわへ。むりざけのしねいこつた。【松しま】なぜそれにおあがんなんした。【榮】付ふいならしかたがねいっ【松しま】大かたこんやのつきあいで來たと。いゝなんすこつたろう。【榮】つきふひなら情なしにしんぞうしゆでもあげやす。それにどふして。茶屋からしめいによこすもんか。ごすいりやうにもしれし。おん事とやらさ。【松さま】うれしいねい。まだやつぱりづつうがしなんすか。くすりをあげいしよう。【榮】いんにやもつていやすゝトはらばいになり。あんへらの紙入から何かだす。【松しま】これ〱その子や。まつのや引。【まつの】あいわつちでざんす、【松しま】主にさゆをくんで來てあげもふしや。そしてこのさとさんの座敷に。ひようご屋の傳さんがいつさしやるから。かの事をおたのミもふしいすと。いつてくりやこの間しはらくはなしなく。ゑミをふくミし梅間。たがひに何かいゝたそうにしている所へ。かぶろさゆをくんでくるのミながら【榮】おくざしきへいつて。白我さんにおさミしくはなしにおいでなんしといつてくりや。【まつの】なにもふねておしまいなんした。【榮】そんならよしゝ。ごくろふ〱。【まつの】あいおやすミなんし。ト出てゆく。【松しま】もふ。さめなんしたそうで。顏がしろくおなりなんした。【榮】まつ〱ろにならねいでしやわせ。【松しま】それでもいつそぬしやあ。きめこまかでさんすよ。【榮】おてうしだ子。

【松しま】そふじやあおつせんけれど。【榮】そんならとふだ子。【松しま】ばからしふざんす。【榮】何かね。【松しま】しりいしねい。【榮】それじやあねつから。わかりやせん。【松しま】なんとでもおいゝなんし。【榮】おめいもふおいくつだ。【松しま】わらいながら あてゝおみなんし。【榮】そんならこふと十八さ。【松しま】よくあたりいしたぬしやあ大方。十九かはたちになりなんすだろう。【榮】きついもんだ廿さ。【松しま】ひとつましへなんとかいゝすね。アノ子アノだまつていゝしよう。【榮】それじやあわからねい。なんといふ御意だね。【松しま】あのもふなんぞ。きまりなんした事がざんすか。【榮】女房といふよふな事へまだ早いとつて。うちでふ承知さ【松しま】そりやあんまりおとなしくしておいでなんすので。内でも氣かおつきなんせんのだろう。そんなそろつておいでなんすか。【榮】そろつてさ。【松しま】それでへていゝしやあおつせんねい。兄弟しゆわへ。【榮】ひとりもなしさ。どふぞおめいのよふな妹をほしい。【松しま】主の妹になりいしていね。【榮】わつちが妹にへすきもんた。【松しま】氣にいりなんすめい。【榮】ナニもつていねい。【松しま】そんなら妹にしておくんなんし。【榮】茶にしたもんだ。【松しま】あんまりはなしを茶にしなんして。そつちへばかりおよりなんすから。いつそこゝがふいてさむふざんす。もつとこつちへおよりなんし。【榮】こふ

かね。【松しま】アレサどふもきうくつなねよふをなんすよ。ト夜着をかけながら をやいつそつめてい。おあしだね。【栄】のぼせるからさ【松しま】なせへ。【栄】おめいのよふなめいにいるからさ。【松しま】にくらしい事をいゝなんすと。くすくりいすよ。【栄】まつひらごめんだ。【松しま】あれ大な聲をしなんすな。【栄】だまつてねやせう。【松しま】主ばかりねなんし。【栄】どふしたらお氣にいるね。【松しま】エ、モばからっしふさんす。トすこし身をもむしぬほどほれてしかけるとハ思ひながら おもわせぶりに まじなせりふをいふ。【栄】さくばんのおつかれておねむかろふ。お心おきなくけしなりませ。【松しま】よくこそんしだね ちいさなこゑで。 いつそやゝせこいなんすねい。ト跡ハだまつてしめやかなるとこのうち。作者もきはをいそめて筆を捨ぬ。しばらくしてひそ／＼ごへ。【松しま】もしへしんにぬしやふ。きておくんなんすかへ【栄】つきだされるまでハ。くるなとつてもまいるのさ。【松しま】そりやあ主さへ情があつてきておくんなんすりやあ。どふともしいす。それもこれも。ゐんづくのこつてざんすから。なんぼこつちでおもいゝしても トなにかあじなせりふになり。あるいへめいり。あるいハうわきのひそ／＼ばなしも。はやきく／＼にかねつこへ。【茶や男】日風の外かよ。ハイ栄さんおむかいに参りました。【栄】兵庫屋か。ばんにれんじがあかるくなつた。【茶や男】白我さまハとふにおきておいでなされました。【栄】また一ト日。はらあんべいかへんなこゝろもちだろう アッアヽ トおびをしめかへす。松しまハ羽織をきせてやりなどなたず。ふあ て、顔をだしきへゆく。はくがへおもしろくもねいといふ顔で。ふとんのうへに。こすかミでかほをふきながら。【白我】お早いの。【栄】おねむふござせいしよう。【我】ナ

ニサきれい事さ。【松しま】染の井さんおけいりなんすよ。びつくりしたおもいれで目をさまし。【染の井】お早いねつ
わつちといへバ。いつそよくねいしたよつ【我】なんだかおふたりハ。おつかれのおすがただ。
【松しま】につこりしながら。主がおいでなんす時かならず。つれ申てきておくんなんし。おたのミ申し
いすよ。染の井へあんどうの火。ミすかミへ付て。たばこをすい付てはくかへだつ。れんじを明て田中の方を見ながら【我】いゝ/＼。朝のけしきハ京町ハ妙だがつ。蚊
とかいるのおほいにやあふさぐ、【染】とんだおそくなつた。サアめいりやしよう。トいふがもてたるきぬぐの

ゟて詞にして。立のぼる今戸のかわらけむへに袖引たばこのけむりかれをとゆかしく、さあけの明星わる石がおもかけとのミおきわかるゝ衣の
かに恋もいわれぬこゝちするも。實わかき一さかりくつからか一とくもてるが一徳。夕に来た二虫のねをきいて二部屋すミのまゝならぬを
かこち。心こゝにあらざるも。むす
こかふのあゝかてい所なるべし。

○牽頭醫しや

さ　新道にひよふとくた雜木といつて。仁をころゝといかすとへとんだ功しや。酒とはいかいへしぬほとすきにて。うちへすり物のこし
ばり唐しせんのまぜばり。しよたへ逆ぐハ三味せん一てふ。りつぱたすい物わんとひろねの木まくら。いつもたばこぼんのうなぎぐしハ夜
うちのあつたやりのごとく。かんろばいのまげ物を茶ほうじにしたやつば
かり。じゞむさい中にとんた日たち。くわずひんらく。けふも二日恋い

そめきぬ

かミなどにてしんぞうをあげるとも。またつきあいのときハことさら。きれいごとにして。ことばつかひをうれしがらせるよふにいふべし。はしたなきあなどハきつくきろふものゝたれバいふべからず二かいぢうのしんぞうに何さんハおもしろいきやくじんといわるれバ。ひとしを何事によらずおもいつかるゝものなり。

のひる寝をおどろかされサア、おせうあ、たつせい、きそふ水。おともをいたしやしようか。夕も中ばしのお茶ばんこ。夜をふかしやたから。大事にかぎも。あゝけにくいなとゝいふせりふあり。りうもんのこいそらいろに酒をかけたきべのあるに着。繻はかたのよじれたおび。黒ちりのちときた羽織。はなしをするとき。しかたとあじな身をする。これからハおらがせかいだとざしきのつとめもすんで。廻しざしきの床の中。あいかたのふりそでしんぞうそめぎく。ミせ三味せんをしのびごまにひく

【そめぎく】唄へ身にかへて思ふ人にハとをざかり。おもわぬひとのしげく〳〵に。くるわの里のうきつとめ。しよう事もなきあだまくら【羅木】ぶはむきな文句だの。しをからによつたにきびといふ聲だ【染ぎく】あいさ。いつそいろづきいしたからさ【木】もふゆだんハならねいわ

へ。おしつけつきだしといふ時にやァ。さつぱり見ぬ顔だろうの【染ぎく】しつたかさ【木】（きいろなこゑでありやす）へあさをがよふないんらんの。げいしやとしらず。うか〳〵と【染ぎく】ほんにあさをさんハどふしなんしたねい【木】むこふ嶋にいるそうでせんどあつたけかわいゝ事をしたハ又兵衛だ【染ぎく】それだつとて女郎しゆの氣にもなつておミなんし。どふも中の町へ顔がたちいすめい【木】それよりやあ。うつくしくつてどふも玉子やきだ。ちつと口をすハせねい【染ぎく】ばからしふおすよヱ、モすかねいぞよう引【木】べつかつこふといふ顔をするの【染きく】うつちやつておいておくんなんしァレサくすくつとふおつすよひつこふすにへモ、、いつそ酒のにほいが。アレサしやくにさわりいすといへバ【木】なにうそをいふやつさ。さつきてうしをこそと。げひぞうをしながら【染ぎく】そんな事をいゝなんすといつ付てにかいをとめいすにへ【木】げいしやじやあ。有めいし。この子もあをつきりひねりの。さつばつなおいらんになるたちだ【染ぎく】その時きやあなんでもきておくんなんし【木】しれたおん事さ【染きく】それでもぬしやあ。しらはの女郎しゆハ。きらいだとおつせいして【木】いつそんな。もつていね事をいふもんだ。【染ぎく】ちよ竈さんをおあけなんした時に【木】あの時ハなまこのあふらげをくつて來て。しゆすのゑりで口をふいたからつい口がすべつた【染ぎく】よふ

おしやべりなんす。豆藏のよふだ。トはらばいなる。折から屏風のそとからしんぞう。〔ちよ靏〕染ぎくさん〳〵。ちよつとおいでなんし。〔染ぎく〕なんでおすへ。〔ちよづる〕あんどん部屋へね。猫が子をうミいしてね。〔染きく〕なんでおすか。〔ぼく〕どつこゑまつた。そんな事をいつて。はづそふとおもつて。〔ちよづる〕何さほんでおさアな。〔ぼく〕ねこよりやあ。おめい立が。子をうむしよふを。おしへてやろう。〔染きく〕おやばからしい。〔ちよつる〕羅木さんハぶ人じようだよ。きのふのばん竹村のまへで見かけ申しいしたら。見ぬふりをして二町目のほうへおまがりなんしたよ。サア、どこへおいでなんした。サア、おつせいし〳〵トくすぐつたりつめる。〔木〕おいていく。おいていのがくもんだ。〔染ぎく〕わつちやあいや。はいふきをこぼしなんした。〔木〕ヲヤ大ごつた。ぼうとろゑんのへどといふもんだ。〔染ぎく〕ちやじやあおつせん。主のすそへもかゝりいした。それまあお立なんし。〔木〕むごくしかるの。トリヤないしよでゞもちとはなしてこよふ〔染ぎく〕てふづなら早くいつておいでなんし。またかどちがいしておはいりなんすな。〔木〕あんたのよふに。とりあつかふの。トよろけ〳〵立て行。〔ちよづる〕羅木さんハいつそ氣がかるふおつすね。〔染ぎく〕なにもふいつそ。よいきつていさアな。〔ちよづる〕さつしておくんなんしわつちといへバ。まい日のよふにづつうがしいすので。いつそじれつとふすよ。トひたいの梅ぼしをはがして見ながら。

内でどうちうさんにかけて。くれさつしやれぺいゝに。【染ぎく】わつちらがきやくじんに。ミておもらいなんし。【ちよづる】それにこよいのよふな客人をとりいすと。しんにつろうおさあナ。ほんに。角力取ね。なで付ね、つんぼね。そんなかたあもんのうちでおすねい。【染ぎく】そしてあのぼうずもさ。【ちよづる】きついそうだ。もふひけをうちいしたね。おやすミなんし（ト出でゆく入違て廊下をハタ〳〵。）【木】染ぎくさんのおざしきは。もふこゝかへ。【染ぎく】よふ間違すにおあけなんしたね。【木】そんなうろていたこつては。しのびのちよん〳〵まくはならねいのさ。ナントちつとひたいをもんでくれぎかしは。きなこ餅か。【染ぎく】もんであげいしよう。おや主しやあ。しろいほくろがおすよ。【木】ほくろといふ客は。よるねぬきやくだ。【染ぎく】ドレとつてあげんしよう。それなミなんし。（ト口のはたのめしつぶを取つ）【木】こりやあ封をする時のよふじんさ。【染ぎく】口はへりなんせん。【木】口からさきへむまれたからさ。ときにあの琴はどこだの。【染ぎく】わつちらんのざしきでおす。【木】ゆうげんなこつた。こつちもちつとうなろうか（ト三味せんを取）【染ぎく】あれだまつておきゝなんし。月夜がらすがなきいすよ。【木】うるていたやつさ。あいつもいろのくろいにやあにくまれねい。おれも黒仕立にやあにくまれねい口ゆへだろう。【染ぎく】それだによつてだまつてねなんし。わつちもこつちらをむいて

にくまれいせんよふに。だまつてねいしよう。【木】これさあやまるから。こつちをむきな。【染ぎく】なんでも口をきいたほうが。だまつてねつこておすよ【木】ムンいゝ〳〵。ありがてい〳〵 トひとりむだをいふうち。ふりしんのくせなれバ。染ぎくはすや〳〵寐ひきのおと。せけんもひつそとしつまつて。ろうかにしらする八ツのひようし木カツチ〳〵。はやよいざめのひやつくころ。湯の望もできず。鼻のつまつた。よぼけごゑで。染ぎくがせなかをゆすり。【木】まぐろをだいて寐たよふだ。もちつとおきてつきあうきれなしの切口か。さこしくつてならねい。これふりしんせんせい〳〵。【染ぎく】ちぶくつたこゑで。なんでおす。どふもねむくつてなりいせん。ごしようでおすおがミいすから。ねかしておくんなんし【木】あわれがらせるもんだのちよつとはなしがあるよ【染ぎく】あれさ。くすぐつとふおす。ばからしい。【木】ばからしくつてもいゝよ【染ぎぬ】ちいさなこへで。あつかましいござよふ引。【木】ヲヽうれし。

むりやりのちきりもまた其中におもしろミあるべし

○武　ざ

あさぎうらの鴇ぐんないの小袖。黒ちりめんの羽織にぼたもちほとなもんをつけ。もへぎのはつち出立。ゑもん坂ごしりたおろし。中の町の雨かわをきよう〳〵見て。あつちへいつたりこつちへいつたりして。しん町でどぶへあしたふんごミ。よふ〳〵しあんたきわめて。ひけまいにあるまがきたのぞき

【武ざ】これわかいもの。アノ本を見て

すみのえ

見立。まかきに人しげき時。きよろ〳〵として氣をつけ。立たり居たりしてさわくと見ゆるハ。地色あるなり。またつんとしたるに二ツあり。ないしよでしかられたときなどハなにやらふにんそうに見へるなり。火ばちなどいぢりてものおもい顔なるハ。しんにくるしきことあるなり。ある女郎のいへるハよびたいとおもふ我客ひとりこず　その夜の一座ばかり來たるばんか。なんぞ氣のもめる時ハ。いかにもつとめられぬものと余にかたりぬ

おるてきれどふしや。【若もの】へ分でござります。【ぶ】ぶとハげせぬ。【わかい者】イヤおざしきもちでござります。トいわれぎつくり。【ぶ】そんならあのかべの中ほどをはたらひておくりやれ。【若者】おこしの物を

大切そふに雨こしをわたし。さしきへあがる。おさだまりのごとく若者。たばこぼんをなをし。一あんとんなどかきたてゆく跡にて。羽織をたゝミして。ばつちをぬきかゝるところへあいかたすミの江来る。うろたへまたつこおびをしめながら。うれしそふなかをで。
【ぶ】ホイ大事の所を。【若者】お盃をトだす。【ぶ】祝言をするよふにおりめたゞしくのんで。ていねいにしたミながら。おなかだちを
トわかいものへたす。住の江。盃へ手をかけたはかりに【若者】ちとはじめましてさし上ましよう。【ぶ】うけながら古風なしやれをいふおつとあり
どふしの明神。ちとけんじませう。【住の江】おさわり申しいしよう。【ぶ】まづ〳〵。ドレお
しやくをいたそう。【すミのへ】これへおくんなんし。【ぶ】ハテさておかたい。それ。ハどふ
あつてもおかさね。【住のへ】いつこふなりいせん。【ぶ】それでもあがるとこでハ。あがるだ
ろう。【住のへ】おやばからしい。【若者】おゆるりと。ト立てゆく。ねつからはじまらぬざしきのよふす。武ざこれのミに。手じやくでひつかける。折から廊下をと
ふろ。そわしかぶろ。【住のへ】これその子や。主にしやくをしてあげもふしいや。【ぶ】いや手じやくもな
かく。つうなもんじやて。【かぶろ】なにこつちへ。およこしなんし。【住のへ】久さんハま
だいなさるか。【かぶろ】あいまだおいでなんす。【住のへ】そんならの。いまふミをかいてあ
げんすから。庄さんにとゞけて。おくんなんしといつてきてくりや。あいトかむろハ立てゆく。入違て。【若者】お
あちらへ。【ぶ】すぐに。となりざしきかの。ト立ながら。どんぶりのなかから。しふちんぶかんと年だいきをおとし。ひろいとるおかしミあつて。とこへはいろともなく住のへ来る。こい
つへありがた山櫻と。おもひのほか。たんすのうへの硯箱をおこしてあんどうのまへてゆる〳〵とみた書【ぶ】まち兼て。御用だんの筋と見うけ申たが相さんだらちつと
ねのまくハどふじやな。【住のへ】まあ寐でおいでなんし。いまじきにしまいゝす。【ぶ】君さ

へそふいふお心なら。千ヶ年でも万年でもまつておるじやて（わるいこゑて）うたひへせめてねやもる月だにも。しはしまくらにのこらずして。またひとりねになりぬるぞや引（住のへが色きやくと一座(いちざ)する女郎と見へてろうかから）【はついと】住のへさんちよつとこゝへおいでなんし。【住のへ】なんでざんすへ【はつ糸】（ちいさなこへで）いま庄さんがきひしたよ。【住のへ】ほんにかへ。【はついと】そして子もらつてくれろとさ。もふこせへひけいしたから。おつふくるめておいでなんし。【住のへ】いまいきいす。うれしいねい（トふミをまきしまひ。どこみどふか。あいさつもなくおくの方へ出てゆく。與ざしきへ。此うちのおいらん部屋もちと見へて。二てふつゝミかしましく。す二朱(しゆ)のミゝをつらぬく。ほどなくさわぎもしづまりて。やゝ氣(き)のわろくなるところ。ろうかゟはたく／＼。）武ざまち衆山の時鳥(ほとゝぎす)とたぬき寐入それにへあらでねずがあぶらをつぎに來たのなり。【ぶ】これ／＼。【ねず】ハイお火(ひ)でござりますか。【ぶ】火でもちやてもないへ。身が女郎へどふした。【ねず】是ハお氣のとくでござります。【ぶ】イヤ／＼だい一女郎がその意(い)ゑぬ。何やらさゝつぱの先キへすゞをつけたよふに。さわ／＼ばかりしていて。そのうへどこへあそびにいつたか。いまにかげもかたちももつてこぬ。大切(たいせつ)の金銀のだして。遊にあしくされてへ筋(すじ)によつて。りようけんがならぬ。（トくだらぬことをいふ）【ねず】（ましめな顔で。）いくゑにもわたくしが。いゝよふにいたしましようから。【ぶ】そんならおそひとつ。はたらいてくりやれ。【ねず】かしこまりました。（ト出てゆく。武ざ大ふけにふけて。目ばかりぱち／＼していゐ所へ。住の江はながミでかほをあをぎながら。屏風を明て）【住のへ】（モシ）へもふねなんしたか。【ぶ】主へ初會(しよかい)のきやくを。なぜにそまつにおしやる。もふかへる（トおびをとし）

めかへして出よふとする。【住のへ】ばからしいもふ八ッまいでおざんす。そしてあの田丁にはいつそわるい狗(いぬ)がいゝすとさ。わつちがとこへおいでなんすきやくじんが。せんど足をくいつかれなんしたとさ。トきいてがつくりとなる【ぶ】留(とめ)るお氣(き)ならとまる氣じやが。おもしろくもあるまいて【住のへ】なぜへ。おきにさわりなんした事がありいすなら。おゆるしなんし。それともまたかんにんならずば。どふともしなんし。【ぶ】どふとつてこれがどふなるもんじや。【住のへ】じよさいのない女郎と見へ。なにをそのよふにはらをお立(たち)なんすばからしい。マアおきゝなんしこふいふことさ。トひざへ手をかけられ武ざくんにやりとなる。去年(きよ)からいつそのぼせて。おいでなんすきやくしんが先度(せんど)はらをたつておかへりなんしたのさ。それがきいしてね。しまいの事を。どふのこふのといゝす　わつちもこの客人(きやく)にたのミいせんけりや。ほうばいしゆのまへもわるし。このこつてめうだいはだされず。ついざしきをあけいしたのさ。こんなにうちあけていゝしたら。おさげしミなんしようが。もらいもふしいすもいつそお氣のどく。それにどふともしてよびもふしたい氣でいゝしたおり。こんな事もいゝだしにくし。だまつていゝしたがわるふした。また主のはらをたつておくんなんすは。わるふはおもいゝせん。トあつかましいことをいつたとおもつてうつむになるいかけられるとはしらず。【ぶ】そふのたまいては。この方(はう)いこふおそれ入て【住のへ】かんにんしておくんなんすか。【ぶ】かんにんしねいでどふするもんじや。

トこくふにとをもんでしかとつく【住のへ】それじやきうくつでとつくりしいせん。まだおはなしもふしいすことがおざんす。それにひつこじきやくじんで。いつそよいきつて。やかましくつてなりんせんから。ちよつと顔をだしてきたふざんすが。よふおざんすか。【ぶ】その義ハどふとも。【住のへ】そんならちよつといつてまいりいしよう。いつそむしいすから。夜着(よぎ)をよしてうへの蒲團(ふとん)をきて おいでなんし。寐なんすときゝいせんによ。トせわにもならぬことをいゝながら。鼻紙をもつて出てゆく。見れ見立なさしにさせまいためのしん手なり。時つつてにこく顔お。まちたいくつのあくびとへんじ。枕もとのわるかミれ君がはだへかとさミしく。今や〳〵とまちかまへ れど。うわぞうりのおとだにたへて。うらめましくも。となりざしきのむつごとに向ふさしきの聲(こへ)。夜ハなん時とれんじを見れバ。さらりとあけてからすかア〳〵。羽織の黒ちりめんが。夜明(あか)にしたがひ。赤くたるもおかし。

○き を い

どふらくものといわれたがるてやい。春(はる)さきのこがれが頃といふはおやきっ茶こぢんのめんちりのあわせに。黒なゝこのうらゑりをかけ。こぜ茶さやのすそまわしに。おなじしゆすの袖口に。あふれのちりめんのみとへ羽織に七すじあるもへぎのちよんがけのひも。旦那場のともれいげへりといふ丘立(いでたち)。まきせんのみわを出取て。めんぜきめいで。こぢきにとゝまかれて。羽織ホだいゝしにしたなどゝ。あく一んをいゝぬき。咲のさいそくをしたり。硯(すゞり)ぶたをならしたりして。いつぱいをいゝぬき。ざしきもおさまり ゝこのうちに大あぐら。

【若者】こしたかさめ たゞいまよんどころない【金】客がきたといふ事か。

へかめきく

もらいひきハきれイにやるべし。それもたしもふとおもふ女郎ならバ。わかいものゝいゝたさぬうち。こつちからいゝだしてやるなとハ。情なきものなれバ。すこしこだわりて名代をとるべし此時ハぜひうらやくそくをすべしまた見立なをしにでる女郎ハ。あまりこゝろよからぬものなれバ。とんだ氣にいつたきミあいそをして。詞さつきわつちがあがる時ハ。ミせにおいでが。なかつたなどゝいふせりふしかるべし

【若者】お氣のどくながら【金】おきやあがれ。いやだよ。てらが大體のかしらでも。もらうの引のといふこたあ。五分でもならねい。ことゝすべによつちやあ。やるめいもんでもねいが。でい一チあの女郎の仕うちが氣にくわねい。おへねいすつぽかしと見たか

ら。すつばりはだるゝでしてやらあ。今戸やきの姉さんが。しけにあつたといふふうで。つんとしやあがつて。いまになつてくれろもすさましい。なんでもこゝへ引ずつて來やな。わけ道がたゝねいけりやあ、すまねいによ【若者】こんばんの客人がいたつてわかりませんと申もんでござりますから。とふぞ（ト手ぬぐひをひねくりまわす）【金】しよけいでもせつけいでも、岡場所だとやらねいか。錢になる客に。つとめさせねいもせつしようだ。てめいもしようべい屋のわかいもんだ。むりなこともいふめい。すなをに。見立なをしにしてやるべい。【若者】これはありがたふこざります。もふこせのひけましたから。はたらいてまいりましよう。（ト立てゆきつゝらさかづきをもつて來る。跡からおち）（やをひいた女郎ぶにとられたといふ顔で、つんとして座になをる。若ゐすんー床をかへるに）【若】さよふならおやすみなされませ（ト出てゆくしばらくはなしなく。茶わんでありつきり引かけながら。）【金】てめいもとんだぶにんそうなもんだ。かわきりのゐんまといふ顔だぜい。なかなをりに一つのまねいか。【亀ぎく】このころはいつそしやくけで。ひつこんでいんしたからいつすいもなりんせん。【金】へこいつも化もんだ。【かめぎく】なにがへ。【金】おれかうでの。いのくまのほりものが。くしやみをしたから。【亀ぎく】いゝかげんにあがんなんしたらちつと寐なんせんか【金】おれがからだにやあ。おきやがれこぼしがとつついているから。めつたに寐るこたあならねい。【亀ぎく】そりやあこまりなんしたもんだねい。それじやあそびに來なんした

時。こまりなんすだらう。【金】うきあねい。したが氣まぐれなおんなもあるものよ。うミのお筆といふ女郎だがの。どこにほれたかごふてきにおれにほれてよつぴとねずにつとめるが。ありがていじやあねいかへ。【龜ぎく】そのおふでさんとやらと。いろごとをしなんしてへ。わつちらが内の女郎しゆへ。おもしろくもねいはづた。【金】女郎しゆも氣がつゐゝしたが丁の女郎しゆへ人がらなこつた。おいらが氣ぐれいじやあ。さつぱりはじまらねい。てふ場のゐびすこふによばれたとおもやあ。きついこたあねい。【龜ぎく】さつきつれしゆのほりものをミいしたが。こわらしいほどはつていなんすねい。【金】ナニあいつもおさきなやらうよ。【龜ぎく】いぢのわるいもちつとそつちへよつておくんなんし。【金】てめいの店おろしをするじやあねいが。ばかにひよろなげいせいだの。きぬいとのろうげいといふもんだ。【かめぎく】うちやつておいておくんなんしそんなにきにいりなんせん内へとふいふ氣でおあかんなんした【金】ばけものやしきだとおもつて。まづこうしをのぞいた所が。てめいのかをが黒くきいろく。ほたるのけつのよふに。わるびかりにひかるか。つぎの女郎かさつまいもがあくびをしたといふ顔か。三ばん目がすりこきの立おふぞうといふ鼻。四はん目がちゞろりといふ口。五ばんめがどつぼうねこのやねわたりといふ身ぶり。六ばんめがミづぶくれの仁王

といふづうてい。七ばんめかまだにんげんらしいからあげて見たところが。おへねいかぼちやのとふなすだ。べらやあねい。店ざらしの五百羅漢といふこせつきだ。【かめぎく】とんだぬしやあ。はなしでふづだねい。もつとはなしておきかせなんし。【金】おきやあかれ。こふれいふものゝてめいれ。こじきしばいのさぎむすめのよふで。いつそかわいゝよ。【龜きく】ぬしにかわいぶられいしたら。さぞながいきを。しいしよう。【金】それたによつて。おきてはなさねいか。【龜きく】あんまりはなすと。夜があけいす。【金】あんまりしやつべつたで。はらがへつた。べんとうをつかうから茶をひとつはたらいてくれねいか。【かめきく】もふそんなねてしまいゝした。【金】いけずるく。むごくするの。てめいも物めいにきやあひどいたよりだトふところから紙につゝんだ、とふれいけいゝのこわめしとたくあんをだして。むしや／＼くふうち鐚ぎくゝすや／＼寐いる、あんまりこふせいをいゝぬきしゆへ。いまさらおこされもせず。まぢ／＼している所へ黒こはくのおびをまへでむすび切ひんをなでながら。おきて来る。つれの。【八】まだおきているか。【金】女郎れどふした【八】大わらいだ。ソレ座敷をいきにしたからくつとのりがきて。のひとはつたら。ごふのつきよ。とこへ来るとかんなりが石うすにうなされるよふに。うなりだしやあがつて。まだ。どぶさつてけつからあ。へんちきなばんだ。【金】それ見や。あんまりおとなしくしだもんだからつ。おれ迄こんな目にあわせらあ。なんでもあこぎがやあ。あまく見られると。あげさげしやあ大キなりかいだ。しよせんはじまらねせ

んぎだ。もふいゝへい。【八】まだまつくらだ。【金】氣のよゐいやろうだ女郎といつしよにどぶさつたな。氣のきいたばけものだ。あしをあらつてひつこむじふんだ。トれんじをあけて いゝちくせうだ。見やふつて來たぜい。【八】これじやあ伊勢屋のたてめいも。あさあおへねい。【金】そんなとこしやあねい。あかるくなると。すぶぬれかミとをもねい。トおいたしめかへし。きせるで花をたゝきおこす。【かめきく】なんだへばからしい。けいりなんすか。【金】いめいましい。こんな湯かんばゐはじめてきた。ト床をでる。錦ぎくふせうぶせうにねむそふな顔でおくつて出る。小便所のまへに相生そばのせいろうつんである中で道具がおとろほと金をもふさまけると。おもて座しきの客へ。ねぼけた聲で【客】大なぢしんだ【女郎】なにねずミだろう【金】へらぼうめやまあらしのばけもんだれ。トどくをいゝ〳〵八當りにはしごをカタ〳〵。【鶴きく】久八とんけんなんすよサア〳〵客人がけいりなさるよ わかいもの。返事を二ツ三ツして。まつくらなミせか出で。あくびをしながら。草履を直ス。【八】くらいものもいゝが。たまぞろいだ。【金】ばけものぞろいが。きいてあきれる。【かめぎく】この間に【金】たがくるもんだ。トくゝりをガラ〳〵。そとに犬がねている。しつぽをおもふさまふむとキヤン〳〵【金】ヱ、ちくしようめ。【八】はうかむりをしながら。唄へわたしやかさのしようできすきじやけれど。おまへげたのしやうではきなさる。のこ〳〵さい〳〵。【金】まちやたな。はなおゝふんきつた。【八】うまらねい。悪遊のごくてん。これらのきやくへ。花にあらしとやいふべく。あしたにかミゆいどこの。はなしとへなりぬ。

ゑ その巻 そめじ そめぎ

見立つんとしてすましし顔に。うすげしようじミななりを好などハ。氣性にけんしきありて。色けうすきょふなれと。地色をせずまたよびとげんとおもふ客ハ。いかにもしてとおもふものにて。とかくたて引づよく。ほうばいにもひけをとらす。二かいぢうでこわかられるほとなれバ。あまりないしよのまへハよからぬものなり。しよかいに。きやくをやすく見るときハ。かべゐよりかゝりよふじをつかう事あり座敷かくのごとくならバ氣をつけべし。

○いろきやく

すこしそげであへびろうどのゆうきつむぎに。ちいさな鳴八丈の下着黒打二重の羽織に。ひらうちもわかいものだといふ氣どりで黒の丸うちのひもにふところの。角のとれた通人ひさしきいろきやくなりがしか。このごろうち何かあじになりて座しきのうちもたかいにつん〳〵としてしまい床もおさまりて。なんでも大いざをいふ氣でいる所へ。そのまきがかふうためいきをつきなから来

【そめし】懸季(けんり)さんごしようておすからなんぞくすりをおくんなんしい

つそ酒によいゝしてせつなくつてなりんせん　トふとんの前につゝぶす　【懸季】おいらんハなにをしている。【そめじ】いまおかんどんと。何かはなして。おいでなんした。【季】ちつとねるとさめるからこゝへあがりやまたばけものばなしをしてきかそうか。【そめじ】しかられいす、トいゝながら。ひざにもたれて。すや／＼ねいる所へ。だまつてひやうぶをあけつんとしたおもいれで。【その巻】そめじじやあねいか。だかゆるして。こゝにいる。ヲャ酒をのんだの。【そめじ】それだとつて。ミつ山さんのきやくじんか。むりにのめとおつせいしたから。【そのまき】そのなりやあ。なんのこつたモヲとつくに引をうつたによ。そめじハ出てゆくしはらくはなしなく。だまつている所へしんぞう【うたはし】おいらん。ちつとすゝりをおかしなんし。【その巻】またいつものよふに。やりばなしにしなんすと。きゝいせん。きつともつて來ておきなんし。【うたはし】あい　トちかいたなの硯箱をとりて　懸季さんおやすミなんし　ト出てゆく　【季】かわいそふにとがもねいかぶろをしかつたり。八ツあたりをするてまで。いふ事があるなら。きつぱりいへ【その巻】なんだへばからしい。なにも主が。はらをたてなんすことハおつせん。あらほどみをつかわしいしたに。それにやつぱり。二丁目へおいでなんしたじやあおつせんか。【季】てめいもよつぽど。氣のせめいもんだ。通のつきあいもするおれだものを。おりふしハなぐさミに。女郎けいもありうちのこつた。【その巻】よしておくんなんし。そんな情のねい。客人とハおもいゝせんで。いま迄

よびとげ申しゝしたが【季】なんだよひとげた。よびとけたもすさまじい。コレそふあじにはかなく。やすくされちやあ。もふかんしやくの虫がふせうちた。よしおれが二丁目に。いろごとができたにもしろ。二階ぢうで。うらやまれるほどのふたりがなかを。いまさら年あきめいになつて。色じかけで。げいぶんにも。よばれる義理じやあ。あるめいか。此頃うちの一チ部始終。はくぜうをしてしまへ。【その巻】そんな事をいゝ立に。きれてしもふ。主のけやうげんかへ。ヲヤこわらしい。【季】しれた事よ。うかくしてつきたされちやあ。懸季さんといふお名がすたるヽ。【その巻】そんなにたてひきをしりなんす。ぬしの氣なら。こねいに苦労ヽしいせん トなにかおかしくしらけて來る。誠ある詞に。さすがつよくもいわれず。【季】ミれんなこつたが。おれヽよつぽとふしあわせなもんだ。いまてめいにいろごとができて。こんなむまらねい目に。あおふとヽ夢にもしらず。内にいりやあ子どものもり。さいの河原のばん太郎じやあねいが。しめしのせわや何やかや。しミな仕うちをするうちも。こつちの事が氣にかゝり。それにてめいの年ンあきが。もふおし付だとおもやあ。女房の顔がふびんに見へこん夜あい着をしわにして。あした女房のつんくを。しかるたねのわるだくミも。ミんなてめいゆへだ。コヲのろい句をはくかられ。覺悟をして口をきけ。もふこの世のいとまごいだぞ。【その巻】そふおもひなんすれミんな主の

まわり氣でおす。あんまりうたがいぶこふおざへすにへ。ト涙ぐむ【季】かたかわねいてどふするもんだァノやろうが旅人とゝいゝふもんでやきまつたけまで。かんざしてくひやつたなかたものを【その巻】モヽそんなことをおつせいすな。こん夜のことヽこれぎりにして。あやまりいすから。やつぱりどふぞ。よんでおくんなんし。【季】おもいつきでもねい。てめい立のぴい〳〵がら〳〵にやあ。もつていねい。べちかあたるぞよ。【その巻】それたによつて。あやまりいしたともふしいすにまあこちをおむきなんし。これさ〳〵じれつたふすにへ【季】いまさらそつちか。むかれるもんか。【その巻】よふおす。そんならこふしいす。トうへゑのりながらいれかわる。【季】なんだか氣のちがつた蔦のよふに。からそまわつていふからついはらをたゝした犬にうつた。時にすこちやすりていの。【その巻】まあまちなんし。【季】こふなつてうちとけて見れヽたゑいもねいこつた。丸三年のうち。二度迄二階へ。きさんをしたなかだものを。義理もけいぶんも。いつたなかじやあねい。【その巻】ほんにあくゑんでおつしようよこれも主がせうわるからおこつたことさ【季】せうわるにヽだがした。【その巻】二丁目の女郎しゆが。【季】おきやあかれ。

折から七のひやうし木。かつち〳〵とうつこまれヽ早下にヽ水くむ音。おり〳〵ほうほうの　くゝりのあく音きこへひよりとり下駄の音高く。たゝくわへのはなしけいりか中の町へ。ゑんりよのこやいのかへりと見へとんだい、こへでくぜつの鶏をうなりながら　のきのしたをゆきすぎる。

江戸ブシ〽はるの夜を夢ばかりというらさより。うき世のゆめのさしかさを。かりね

のゆめにうつしかへ。わかれになれバこふことも。わすれてあとのものおもひ。【季】ありがてい

〱見かゑりの柳におく露へ。くぜつの涙かとうたがわれ。日本堤の虫の音も夜明をおしミこすだくかも。これがために幾万人か。すいもあまいも諸事承知万事人ぬからぬ客人たち。もうぬぼれにくらまされて。つまらぬことに落入も。あへて愚成にもあらず。了簡のないにもあらず。石上ふるに色男あり。ほれるに無男あり。死ぬほどのぼせて。色仕かけてよぶかとおもへバ。たちまちつきだし。また客のために身をうつ女郎有。客もまたあい同し。そふかとおもへバ。つきだしから年ンのあくまでかよいとげ。ついに女房とするもあり。實なにがとふだかわからぬとハ。京傳子が文章の妙なり。うそかまことかうわ氣かミへか。此さとのいろごと千變万化してうつりやすき事。たとへバゑちかわが多葉粉入の夏とすぎて。竹屋が冬のしん形とおしうつるがことし。

振鷺亭戯著

自惚鏡跋

余友振鷺の主一ッの鏡を作る。鏡とはなんぞや。お備にあらず酒樽の蓋にもあらずして乃この自惚鏡なり。吁之が徳たる。居ながら章臺の趣を移す。實に洒落本の天下一を以て。四日市の南總舘にあたふ。跋せよと乞ふにまかせて畫の面へ水鏡。安忍もしるす事しかり。

亘侯多藏題

自惚鏡跋

先生常に云。娼家にて仰き敬ふべきは己惚なり。夫人に己惚なくんバ。誰歟千里を遠しとせずして遊里へ趣んやと。宜哉此言また川柳点に。客の己惚は遊女の後楯と。これ又己惚の尊ふときを譽ての句也。通に至らんといふもの此小冊を枕とし眼をさらし。己惚の己惚たる干要を知らば。大通にいたらん事三挺立にて堀へゐたるよりも豈早からざらんや

天明九のとし

己酉　孟春

諸譯不知人述

記原情語（きげんおうご）　全

蓬蒿通人著

あまねく世間と客れいさ
ぢおもむきを発したる言論
世間買をなしなり

俗談諺種（ぞくだんことわざくさ）　全

此書ハ浮華淫語に
ぬけるる者此為ニ備（まうけ）
へる教訓の書也

年中日記　小本

日々見聞機根要用
を記し世のちれんの
ふゐるなり

瞽引　小本

連雅誹諧和歌の
書を記し世のちか
らうり用に致すこ

都の大帳

序

我嘗傾城買の癖ありといへども。未遊びの足ことをしらず。客ハ妓のワけ知らず。妓ハ客の穴知らす。しらず知られぬ中の町。其中庸をとつて以て。今京傳一冊に述。予草稿を閲し掌をうつて曰。奇〻妙〻

笹葉鈴成

自叙

天地一大戯場とかや。堤八町の花道あれば。大門の鼠木戸有り。分ある客を見附柱ハ。雛妓を以て中の町につけさせ。大盡柱も其因あり。軒を洒春雨ハ。下坐あつらへの廓清攬。遂柏木のちよん〳〵に。初霞の引幕をあくれバ。茶屋の床机に連し。雛妓小三板のならび大名。渡りせりふの口〳〵に。あれ〳〵向へ妹妓が。見へるハ〳〵といへども。見れども見へず聞どもきこへざるハ。傾城買の道なり。妓の景清ハ大盡の襟下につき。客の三保の谷ハ紋日をのがれんと前ひく。たがいにゑひやと引力に。はちつけのハたごとより。ふつつときれしきれ文の。それにハあらぬ此一帖。其

名をよんで廓大帳。大帳勿論大町の。唱にかなへバ。小廓の妓へハあな川岸コ

山東京傳誌

本舞臺三間のあひだ。眞崎のけしき。玉やと云茶屋のかゝり。右の方石の鳥居とりつけ。まへニ文塚とほりし碑あるべし。すだれあがるしかけ。山田三郎上下モゐしやうにて。上のかたに居る。若イ衆一人仕丁のなりにて手をつき居る。かぐらにてまくあく

山田三郎 一それがしは都北白川。よし田のかしん。山田の三郎といふもの。主人梅若丸。さいつころより御行方しれず。このごろせけんの噂に聞ば。此あづまへ御下りのよし。御跡をしたひ當地ニ下リ。御行衛をもとむれども。今ニおいてそのじつ事。分明ならず。これによつて梅わかぎみの。御身の上いのりのため。吉田家の重寶都鳥の一くわんを。當しやの神ぜんに備へ。一七日があいたかぐらをそうして。奉幣なさんそのために。今日それがし參けいいたした。此通り神主がたへ。申傳へてよからう

仕丁 一いさゐかしこまりまして△リ升ル。ゑんろのところ御くらう千萬。まづ神主方へ御入あつて。御きやうそくあられましやう

山田 一しからば案内　仕丁 一いざお入リあられましやう

トかぐらになり兩人入ル。下座岩戸になをす。さる嶋惣太しのびのなりにて。玉がきを切りやぶり出る

さる嶋 一さいぜん山田めが持參なしたる。都鳥の一くわん。あいつをこつちへとりのまちとすりや。

金にありつくといふもの。こいつアおもしれへちよぼ一だ。したが此すがたじやァ手おもい。とふぞすがたのかへやうが。ありそうなものだナァ〇をりわるいあの人聲ツレ

トしのびの木のかげにかくれる。をくるさいぜんの仕丁。ときどくりと茶わんをもち。ついでのみながら出

仕丁
一ア、うまいぞ〳〵。とんとかんろじや。なんでもこれから七日か間神事が有といふ事だが。こいつアおいらがふくとくの三年め。ずいぶんはしこくたちまはつて。さいせんをしこための。千住じやれとおめにかけやう。こりやをもしろぎつねだわへ

トゆきにかゝるを。だしぬけに。惣太うしろより出ゑりたつかんで引よせ。しめころす

仕丁
一ダア、

さる鳴
一きじも鳴ずはうたれまじ

トしうはりゑばしたはぎとり。これをきて。あたりをこまわし。ゆきにかゝる。さいぜんより山田三郎うしろにつけている。とゞ出

山田
一くせものそつけた　さる鳴
一何がなんと

ト両人よほどたちまわり有て。とゞ惣太山田をあてゝきりまくへ入る。しばらく有て山田をきあがり

山田
一とをくれゆくきまいぞふじや

トあとをしたひ。花こちの方へにか、ふと[illegible]て。花やのすだれのうちにて。胡弓やつ[illegible]

いなづる
一かぎりなくとをきあづまにすみだ川

山田
一なんと

いな
一たえぬ流をいつまでかくむ

トいふをきつかけに。すだれあがる稲づるうちかけゐしやうにて。手にたんざくをもちたつている

山田
一これハ

とおどろく。をくよりいなづるがきやく。霍聲江戸がみの烏口。女げいしやおゑん。新ごうまひづる。そのづる。たち出

【ミな〳〵】ヤンヤ〳〵　トわらふ。いなづるはづかしそふにうちかけをとれば。下タハ白ちりめんのしごき。よそゆきのなりになる。ミな〳〵すハる。山田の三郎かづらをとり。上下モのひもをしめながら　【三味子】イヤモゥいひ合もなく思ひがけなひ。おいらんの今のお哥。とんとあんばいがはま村でござります。あれでけふの趣向の茶ばんがはへました。いち〳〵あやまり入ましてござります【いなつる】ちよつとミな。いつそはづかしうざんす【霍聲】コレ三味子實事師の山田の三郎ハ。きついものであつた。手めへたちが此眞崎のけしきを芝居の道具だてと見て。ちやばんをすると。きいたゆへ。いなづるにふつこんで。だしぬけに。きもをつぶさせたのだ　トいふ所へさいぜんのしのびのものたち出づきんをとれば　ヤア　五町かおきやァがれ【五丁】ナント　だんな。わたくしかしうちハ。秀靍でござりましやう【霍聲】でかした〳〵仕丁ニなつたのハたれだ【三味】あれハこゝのりやうりばん

の・傳介といふものでこさります【鼈】フゥあじをやりをつた【烏ロ】サァ〳〵みんなのみにする事だらうぜ【まひつる】五丁さんかほをふいてきなんし【そのつる】大こくまひのやうざんす【三味】又ぶしやれを・いゝなさる・おささどんにいつつけるよ【烏】イヤもふとんだ・をもしろかつた【ゐん】いなりさんのかぐらが・下座にとれたうちなぞれ・あそびませんね【鶴】をもしれへ〳〵（此うち出しもの・いろ〳〵出・五町三味子・かほゑふき・きものをきかへて来り・いろ〳〵酒事アリ）【烏】なる程こふみた所れ・どふもいへませぬ【鶴】日本ン一のけしきさ【いな】よふざんすね【その】モシイおいらんのとこへ・ちよつとごらうしいし・何か鳥がとびいすよ【まひ】あの鳥れなんざんすね【烏】あづまにすめど・都鳥さ【五】みやこ鳥とびや明のかね【三味】あやまるだぐちだ【いな】それよいせ物かたりにおざんす鳥さ【ゐん】なぜくちばしが・赤ござりますね【烏】くちばしの青ィうちれ・いやこどりさ【三味】モシそのくちばしの青ィについて・妙なはなしかこさります・さる所にせむしで・きんのまんとあるきやく人がこさりますのさ・その客人の・きにいりの江戸がみがあつた所が・とんだいゝ男で・三味せんをよくひいて・聲がよふこさりやす・あるときかの大じんのしゆかうで・そのいろ男ヲかさかきのやうすにしたてゝ・かほへかうやくをはり・きものもおゝぐむさいなりをさせて。さるうちへ初くわいニいつた所が・すつぱりくつて女

廓大帳

八

郎もみな〳〵。ざしきのうちからきたながるやう子。こいつハしめたと。大じんハ心のうちでおかしく。けふに入ッて見ゆれど。かの男ハ。だん〳〵安くとりあつかはれる故。すこしいま〳〵しくなつて來て。床がおさまるやいなや。かふろをよんで手ぬぐひをしめしてもらひ。かうやくをとつてぐつとかほをふき。うへのちゞむさいきものをとれバ。下にハ八丈のうらゑり。かべちよろの帶をまへではさんで。初にひきかはりて。いきな形になり。見世三味せんをかりて。三ッぶとんのうへにあげあぐらで。何かミだれ鳥とかいふやうな。めりやすのうまひ所。藤二がふしに。藤吉が聲といふはだで。うたひかけたれバ。あいかたの女郎ハとなりざしきに。こんやの客のちゞむさを。おもいれわるくいつてあそんでいたが。その哥をきゝつけ屛風からのそけバあいかたのきやく。ざしきの時とハうつてかはりしいゝ男。ことにあだな聲で。ひきうたつて居るゆへ。くやしい手すつぱりとだまされんした。こんなうまらねへ事ハおつせん。も一ッどふぞ。きしやうをおきかせなんし。などゝ。おほもてにて。だん〳〵ほうばい女郎も是を聞てよりあつまり。この客をとりまひいて。わつちや松かせがいゝ。イヤもん太郎が名殘りをきゝたいのと。らんをいれるところへちうかを。かのせむし大じんの。あいかたの女郎とをるゆへ。よび。もしへ此客じんにすつぱりかゝれんした。くやしいねといへバ。ほんにかへ。そ

んならワつちか。客衆もそんな事でおつしやうと。手まへのざしきへかけてゆき。床のうちに
よくねて居るせむし大じんを。むりむたいにひきおこし。せなかをにぎりこぶしで。くらハせな
がら。此なかのものをおたじなんしく〵ハ。どふでこさりますトしかたではなす【鶴】こいつハありが
てへ【烏】こんななんぎな事ハあるめへの【まひ】【その】ばからしいねヲホ、〵トわらふをくよりでんがくのやき立ヲ出ス
【五】マヅこれハ一本げびる事だらう。ア、からい。ごふぎにからしがきいた【烏】でんがく
ハからしのミそにして。とかくくちにいるのそんなり【鶴】ム、でかすぐ〵こいつハ書ぬきだ
【五】こんななんぎな事ハ。ござりますめへ【その】ばからしいね。ヲホ〵【烏】ワたしも
しん手を。一ッはなしやしやう。此なつかりたくが。中洲へうつると。ないしよが寄合ヲつけ
て。ていしゆたちのそうだんにいふには。をいらもたひ〵のやけで。おたがひになんぎのこ
となれば。こんどハいひ合て。晝いくつ夜ルいくつと。きつてうるがよからうと。そうだんき
まり。それ〵のうちの。名ある女郎をよんで。その通りいひきかせたれば。ミんなおほふせ
うちがほでいふにハ。どうもそうハなりんすめへ。それでハわつちらがかほもたゝず。よしハ
らの名がすたりんしやう。おかばしよの女郎しゆじや。ござんすめへし。モシへ今までよし原
の女郎しゆの。きられたためしがこさんせんと。くち〵にいへば。なかでしあんありがほなて

いしゆまかり出て・そりやァミんなわりいりやうけんだ・むかしなかずじやァ・高尾さへきらられた・こいつわどふた【五】コリャおちをミやうに案(きな)じやした【鶴】ム、いゝはなしだ 此うち女げいしやおゑん三味せんのてふしをあはせどうを一ッなあてひく【ゑん】(うた)へみか月の・それと見るまにいるまのゝ・尾花がまねきとめたやら・まんざらそふじやある・まいけれど・あのむらつくもがうらミじやへ・チンツチ、ンツ【五】コレ三味子宿のつりをだされへか【三味】何さもふかびがたかつたわな・モシだんなこのあいだ彌八玉やで・だいぶ家のげいをだしました【鶴】しら玉がざしきでか【鳥】しら玉はきついやつさ・あのくらゐのしんぞうたしれ・めづらしい【ゑん】どふもいゝ女郎しゆされへ【鶴】あそこのわか松もたてひきのある女郎た・ミせびらきの時きた・黒びろうどの名鳥のぬいわ・いゝきものであつた【三味】あれわ野田の鶴花さまから参つたのさ トなりふしをもてたおやしき女中の一トむれとをる【五】ヤアもしちよつとこらうじまし・おやしきそふにござります【鶴】どれもびなり大明神だ【鳥】どうかばかされそうだわへ【三味】どふでもこつちが・いろ男ぞろひといふものだから・アレミんなふりむいて通りやす。【まひ】ヲヤきつい系ル二郎なこつたね【いな】ちよつとミなんし・あとのふりぞての女中わ・かはいらしうざんすね【鶴】松ばやの喜瀬川といふはたけだ【五】天王子やの万ぼうといふ所もござりやす【鳥】まんざらでもねへ【鶴】コレ角のをもて

ざしきハ（角玉やこむらさき事）身うけざたがあるじやァねへか【三味】きまつたとまうします【いな】うら山しいことさんすね【五】おいらんもしどうれたんなが【鶴】うさァねへ。此ぢう中の町で五明の湖月とおほきにはなした（あふぎやにほてる事）花扇。七越。なぞも。今でのけいせいだよ。おらァまだ黛がざしきをミねへ。よくできたそうだ。今じやきついものになつに【鳥】にしきどやこむらさきなぞといふ。をしい女郎がでると。二丁めのにしきを。松葉のワかな。きせ川。松の井。なぞといふワか手かできる。女郎衆もたえねへもんだ【五】春ハ丁子やから。つきだしがでます【ぶん】早く見たふこさりやすねへ【三味】うつくしいそふだよ。きのふ田まちで見てまいりましたが。いしやうハ地がひでいろ糸のぬひで。はご板盡しの模様さ。とんだようござります【鳥】かどの玉やもいつでもにぎやかなうちだのう【五】たが袖さん。哥うらさん。玉菊さんの。三ツまいで。紫夕さんができしつても（紫夕とハこ紫が事）めげません。へやもちもしんぞうしゆも。ひとあいそふがよくつて。やつぱり二かいが丁子やと。いふものさ【鶴】扇屋ハもう見せがでるでハねへか【五】二三日あとからでます【まひ】ふたりぜんやもでんすねへ【三味】よほどでるうちが。ありやす【鳥】すがハらハどふした【ぶん】ぬしもどつちへか。きまつてでなんす。そふだね【鶴】ィヽ女郎がだん〳〵。なくなるの【五】さやうでござります【鶴】ワか

なやの白玉も。だいぶしん手をだすそふだ。たれらやのよしのハ。ワか松やへいつたそふだの【三味】あのしばゐへ宗十郎が。は入ッちやァ。はなせやすね【鳥】しばゐといへば。かほ見せをミたか。とかくさかい丁が。いゝひやうばんだの【五】一ッさく日。代地の東里さまの。さじきがこさりまして。さかい丁をミました。瀧のやと。正月やに。こまといふぶたいが。きついものサ【その】てつせんとやらの所が。いゝとねへ【まひ】みとふざんすねへ【いな】ミにいきなんしな。そしてかへりにすぐに。ぜげんどんの所へ。いきなんし（トいふハこのごろべつしてしといが調子やハはつとゆへゆくはじきにくらがへとはくゆへ也）【鳥】なる程こいつハいちごんもあるめへ。じやうるりへお山をいれねへ所が。左(さ)交(かう)が（さくら田が事也）しん手だ。ぜんてへ書もんだよ。をく山が（ため十郎が事也）評判ハどうだ【三味】まだぜんあく。ワからぬひやうさ。ホンニ土橋(どばし)の介二(すけじ)と。かろくが。だんなにおめにかゝつたら。よろしく申上てくれと申ました。ワたくしハ参りませんが。ついたちハ両座ともに。近年(きん)にないはでなことで。こさりました。さかい丁ハ。とをりものれんのさじきが。十二けんつゞき。ふきや丁ハ品川れんのさじきが。十けんつゞき。とんだ大ィそふな事さ【鶴】そふであつたそふだ。品川といへば惣助がくわいハ。にぎやかであつたか【三味】だいぶ人が。でました【鳥】又をふかたよう助奴(やっこ)や。おさる彌十が。しやれたらう【五】ミんな女郎かいで。おほどらをうつて

かへりました。三味子なぞは。べつしてまよつたそふで。このごろハ品川のゆめばかりて見て。ゆふべもねごとにいつて。女房にきめられたのを。傳吉がとまつてゐて。きいたと申て。けさあげやまちの湯での。評ばんで。こさります【三味】コレ公ハ人のことばかりいつて。喰がくしハうらみだせ。松坂の女郎を。二てふとぼして。三てふめをとぼそふといつて。よわらせたそふだ【五】ヲヽをきやァがれ。べらほうめ【鳥】これハさばきにくひ公事だ。ねへ鶴聲さん【鶴】モウ二三ンまいだかせたら。もつとばけが。あられれ様【五】きびのわるいしやれだ。アハヽヽハヽヽハヽ　トいちざわらふ【三味】此あいだ我物がいゝのをだしやした【五】こいつハきゝてへ【三味】さるきやくじんのざしきで。きやくじんがいふにハ。これがぶつこのごろハどふいふせかいだ。たゞいろけとくひけでござります。そんならうへしたからもちゆるの。アイサ松がやのきやく雪隠といふものさ。コイツハできやしたね【鳥】ウヽいゝ〳〵【五】此あいだハだいぶ。はいかいが世にでました。我物がとこにも定會がたちます。いづミやのこゑん。非筒やのせつ。へい。松やの魚民。なぞが。いつでも利うんをいたします　トはなしのうち調子やのまわし方忠兵衛目をこすり〳〵たくた出て【忠】をくでぐつとやらかしました。もふおかへりがようござりましやう【五】それがよからう【三味】チトまくがながすぎやうの【鶴】そんならいきとしやう【まひ】おいらんの

とこへてうづにお出なんせんか（トミな〱したくするこうせん寺のかね七ツこん〱）【ミな〱】（したくできをもてへ出る）【その】ヲ、さふいねへ【三味】おめへと道ゆきだ【その】しつたかィヤョ【まひ】アレ鴈(がん)がとびんす【鶴】ア、水底(すいてい)に書(しよ)をうつす雁(かり)のゆくとき【鳥】さほトなりワとなる雁の。ゆく衛かな【鶴】だいぶよつたれへ【まひ】ヲ、あぶなふざんすにへ

○其　二

よその入相は。春の花(はな)をちらせど。よしわらの入相わいきてはたらく花をさかせ。わかいものがミせあんどうに火をとぼせバ。たちまち。ねもとの花のさきそろふて。美人天上(びじんてんじやう)より落(おつ)るかと。よほどうかれの色ミえて。どぶへはまる素見(すけん)あれバ。犬につまづく地まわりあり。茶屋の男ハをくりものに。つきあたられん事をおそれ。けんばんの男が。左右のにわきにかいこみしハ。安(あ)藝(き)の二郎太郎が。三味せん箱とミゆるぞかし。むかしハかふろもむかふの人とよびしが。これも今ハそれ〱の家名をよぶこと〻なる。さすが大ミせにハ。干(ひ)もの。なづけのげびぞう。まきがみたばこの小がいハなけれど。西のうちをいちまいもつて。きさつしやいといふハ。こよいきしやうをかく女郎のつかひなるべし。まことにうき川竹の流れのさとニ。しばし人のさかり

をせきとむる。戀のしがらみ女郎はつらく客はおもしろく。すいほどけつくゆびのわのはまりやすきは。此ミちのならひぞかし。北州の千年。北國のくがい十年もかぎりあり。いつかは人のつまとなれども。たれが女房は何やのたれであつたと。いふもまれにして。ミな〳〵ちり〴〵にいづくへかきえてなくなる。雲水の身のうへ。別してつらきは役所のつとめ。三味せんばんの新造が。二上りのすがゝきは。そらに知られぬしぐれの音。ミせをしらする神棚には。ひまゆく駒の鈴の音におどろかされては。中か座。へやもち。まわり。振袖。それ〳〵にれつを正しつらなりたる。その中には。かけ硯のふたで。まきがみつぐもあり。長〳〵とふみ書もあり。何か耳こすりしてさゝやくもあり。くさぞうしじやうるり本よむもあり。きせるをとをすあれば。火いぢりするあり。はりひぢあれば。たてひざあり。こちらのすみではかふろに百人しゆをしゆれば。あちらでは暈ざんして鼠鳴するあり。いろ〳〵さま〴〵の中に。部やもちの何がしと云女郎。ふりそで新ぞうがよびつぐに。たれさんでござんすとたつて。かうしさきへかほをだせば。そとにはかうしのはしにしのびすがた。ふろ敷頭巾にかほかくし。小聲にてをれだによというにこなたはいのちと思ふ男の聲なれば。きゝちがふはづもなく。よく來てくれなんしたと。そゞろにうれしく。今までしやくを。おさへてゐた手で。かうしのうちから。かのおとこの手

をじつとゝり。モシへひるほどふみを。あげんしたが。とゞきんしたかへ。サア其ふみのことについて。内のでにくいをいろ〳〵につがふして。あいに來た。マア手まへのかゝさんのびやう氣(き)ハ。どうだ。アイサゆふべ弟(をとゝ)が參りしたが。だいぶよいとまうしいす。ぬしのやつてくんなんした。藥がそうをふしたそうでござんす。このごろハかてゝ。くわへてのくらうばかり。きいておくんなんし。杖(つえ)にも柱(はしら)にもと。おもいんした。あふミやのたびうとしゆも。さたなしにたつて。しまひなんした。にくひといつちやござんせん。それハそふと。ぬしのかけのほうハ。どうぞかたの付やうはござんせんか。二兩や三兩ハワつちも。どんなつがふでもしてあげんしやう。なんにしても。早く二かいさへあけば。ゆるりとそうだんも。できんす。中の町でばかり。おめにかゝりんしてハ。どふもきがおちつきんせん。ぬしもワつちがやうな。はかないものにおもはれなんして。さぞいやでござんしやう。ソリヤこつちからいふ事だ。そんなことをいつておれをこまらせるきか。このごろも。こつちのかけのことについて。いろ〳〵心をいためてゐる。おれもよがよなら。十兩や二十兩の金に。ぎちつく身でもねへが。里の金にハつまるならひとハ。よくいつた。このごろハきのせいか。やり手や。まわし方の顏(かほ)が。しやうづかのばゞアや。ゑんまのやうにミへて。よるも時〳〵うなされる。内でハおやぢがやかましく。ちや

屋でハかみがられる• ふさいでばかりいれば• きしよくもわるく• 今夜もづゝうがしてならぬが• なぜか一トばんでもあはぬと• きにかゝるから• でゝきた• これミやと• づきんをすこしとつて見すれば• らんびんちやうはつ• 思ひなしか• 皃もやせて見ゆれば• 女郎ハミせあんどうのかたあかりで• 一トめ見るよりむねもいつぱいに• おもはずはら〳〵となみだをおとす• かべをしよつて• 三味せんをひいて居た• ふり袖志んぞう•たばこを付て出シ• それと知(し)れども• ゐんりよならんと• しらずがほ• かの男ハちからを付て• コレサ其様にふさぐことハねへ• こふして人のめかほをしのぶも• ちつとのうちだ。たがいに心さへかはらねば• いつか又をつな風がふかうわさト•いへバ•女郎ハをちたなミだで• かうしへ丸のゝ字(じ)書ながら• ぬしをこふ云身にしたのも• ミんなわつちがわるふざんす• わるどめをして• 居つゞけにをいたり• 何かしたから今此思ひ• いつそくらがへでもしたふござんす• トをりふし二かいニ• 玉琴(こと)がざしき• あたりとミへて• いつ治がじやうるり• 里綾(さとあや)が琴ニて へ詞(タヾリ)ア、いかさまそふじやナア• 戀もまことも世にあるとき• 人の心ハあすか川• かハるハつとめのならひじやものあはすといつそ• いんでくりやうか• アイヤ〳〵あはすにいんでハ• 此むねか へすまぬ心の中にもしばし• 住(すむ)れゆかりの月のかげ• ほのかにきこゆる。かうしさきニ• ふたりが身のうへ• かの客(きやく)ハきせるをは

たき。又をそくなつてハ。内もわるし。歸るミちもぶつそふじや。そんならかへるによ。といひ捨て。ゆかんとするを。マアちよつとまつてくんなんし。いひ殘したことがござんす。又久しい物。いひのこしたとハなんの事だ。マアちよつとさまちなんしよ。それではいつまでもはてしがない。やり手でもミつけてハ。わるく。かんがつく。サア そこをはなしや。マア まちなんし。其やうにいそぎなんすハ。ほかへゆく所でもござんすかへ。そんならどうともなんし。コレ なる程わるぎなものだぞ。ハテ ぐちになるのハ女郎の。ならひざんすわな。そんなふような氣があれば。こんなにくらうハしねへ。ばかなべらぼうだ。こがれつてへと。くらわしたいにハ。かうしがへだてせんかたなさに。ふりきつてゆく。よびかへすのも歸るのもたゞいちづにこつたる中。はたから見てハたはけらしいが。其身になつてハむりもあるまじ。さればいろざとのわけ知りてハ。女郎のまこともめづらしからず。すいた男もすかれぬも。いれかハり立かハり。のぞく夜見せの月宮でん。白衣黒衣の天人が。かづも。三五。十五夕。一夜になくすそのたのしみ。見たつる客の中にわりこむハ。山の手つうとミへるふたりづれ。ひとりハまがひ八丈の長ばをり。ひとりハくろとびのはをり。かうしにかほつけて。コレきふう見さつせへ。どれもうハきらしいくびだの。ムヽ アレ あの。いねむつてゐるしんが。里蝶がかつてふられた女

郎だ。いつも〱。建具やのかるこを見る様に。かうしをしよッてるもちゐがねへ。コレ僖ぼう
こゝによしわらつうの。知らねへけりやァならねへことが有ルぜ。てふじやのしんぞうわ。それた
ばこぼんをひかへねへにョ。こいつわきがつかなんだ。ツシテ角トの蔦やで唄をうたひだすと。
いつでもかね四ッだ。かどの玉やじやァ。いくらのこつて居ても。ひけまへに見せをひかせる
ョ。それだからをいらァ。たび〲見はぐる。こいらァ素見通のごくゐだ。コレ そんなにのぞ
かつしやんな。かほへ赤ィものがつくによト。しつたかぶりいひすてゝ。どぶをとびこし。又
わかなやの見せをそゝる。かゝる所へかの。鶴聲。鳥口いなつる。まひつる。そのつる。左町。
三味子。おゐん。まわし方忠兵衛。むだくちぐ〲に。眞崎よりかへり來る。まがきより【しんぞうたせい】
ヲヤくわくさんへ。けふわおたのしみざんしたね【まきつる】モシイ おいらんのとこへ。なん
ぞみやげをおくんなんしな【ひた山】うかうさんいつそ。きれへざんすよ【イサ波】だいぶま
じめざんすね【三味】おめへがたのかほわ。一ッてふづゝとぼさせたといふかほだ【はや哥】
あきれんすにへ【ひた山】すかねへ三味子づらだよ【鳥】みんなのち程 トいひすてゝ。みな〱二かいへあがる。ところへ。みたりか
かふろ。せきや。くわく聲に。とつつき【せきや】やくそくのものをもつてきて。くんなんしたかへ【鶴】人形か。つい
わすれてきた【せき】いゝむしざんすね トふりそでゞふつて。はしごだんにかゝる 【鳥】コレ みた山さんによくいつて

くりや【せき】しりィしないれァ　ト下へゆくやりて【おさう】ヲヤおはやうござりました【いな】いつそおもしろうざんした【まひつる】こてふやおいらんと。おいらがはきものを。れんじへもつてきておきやァ。きり〳〵しやよ。ながしてくれめへよ　トみな〳〵いなづろがざしきへなりこみ。みやげものなど。それ〳〵にくばる。茶やも来り。次〳〵大さわぎになる。此所ざしきのやうす。いろ〳〵をもおきあれども。まへの真崎のかたに。にたれバこゝにりやくす。かくてほどなく。ひけもすぎとこをさまり。たいこもちけいしやの茶やも。いとまごいしてかへる。鳥口があいかたへ。しんざうのまひつるなれば。下ざしきへたおさまる。かふろへおいらんの。くしかうがひを。ミすがみでふき。かうがひ箱へいれ。りやうてんの花かんざしをぬいて。【まひつる】りやうしゝふたへのせてしまひ。下へゆく。つぎのまにれ。しんざう二人よそゆきのきものなぞ。たゝんでしまひ

モシイむらづるさん。おめしをおあんなんせんか【村つる】つきやいんしやう　ト火ばちへ。ほたて貝をかけ。すゞりぶたおくりものなぞ。ひきよせ。はし箱からぎんのさかわばし。ひよくの金もんのつきたるを出し【まき】ふたりじやァさみしいね。だれぞくればようざんすね。

モシイこれハなんざんすね【村】そりやァおよしなんし。へびにたさかなざんす　トいふへすばしゝの事

【まき】わつちやいや。よしいしやう　トいふ所へ。はやつるくろもじのやうじを。ホチ〳〵かミながら【はやつる】こんやのような。じれつてへばんれざんせんョ【村】はつかへ【はや】アイサ。きやうざんさんと。をのざくさんと。ひとゆふさんと。夕なみさんと。いちざで。ぼうさんざんすれな【まき】ちつとおつき合なんしな【はや】たつた今。ゑい山ッさんの所で。きやまきさんと。たべんした。ヲヤ〳〵きつい何もねへこつたの。ゑい山ッさんの所に。かくやのかう〳〵がざんす。もらひにやんなんせば。いゝね【まき】ぬしやァかわちやのきやくじんれ。どうなんした【はや】モウかまいんせん。い

まじやァもふいつそ•まんざらだね【村】きついじやうのねへこつたの【はや】いまどきじや
うをたてるわ•やぼざんすわな子トらうかにて•はやつろさん〳〵とよぶ•ふしやう〴〵にたつてゆきながら•をびのとけかゝりしを•〆なをし【はや】いそがしい
とつちやねへよ•松のうちの大こくまひのやうだトゆくいれかはつてきたる【やさのと】ちつとおかしなんし
トかんざしで•あんどうの火をかきたて•すみのほうをむいて•長〳〵としたみをよむ【村】やさのとさんしんになるもんだ子トヌ来る【はす山】これハ
にばなざんすかへ【まき】まだワきんせん【はす】じれつてへねト小よりをしてどひんの口にむすぶ【村】モシへ
やさの戸さん•おまへわ正月何をきなんす氣だへ【やさ】わつちや•うわぎわ•おめしちやに•
ねぢ梅のすそもやう•むくわ•ふぢいろとおもひんす【はす】なんとおもつてかでへぶ•じみ
なんすね【やさ】そのかはりにもんわ•これ〳〵をつけんす【まき】いやだのうトこれから•きやくじんのうわさ
になり•ほれたのほれぬの•いゝのわりいの•すのこんにやくのと•なんぼあいたくちだとて•すきなことをいひ•時うつる•いたづるちやうづにゆく•下座敷烏口がとこにわ•やさぎく来り•はなしていたるが•たばこヲ付てうこうにやり【やさ菊】ワ
つちやきがとをらなんだね•おじやまになりんしやう•イッソうら山しいよ•となりもまんざ
らでねへ子【鳥】マアはなしねへナ【まひつる】おはなしなんしな【やさ】ッウいはれると•
いつまでも居たくなりひす【鳥】なんそとあはせかゞみかへ•はながちるワな【やさ】そんな
ころしもんくを•いひなんすなトいひながら•びやうぶをひきよせてゆく•所へ•ゑん山がかふろ【やそし】もしいァノ子•おいらのと
こでァノ子•おつせへす•ァノ子こんやわ•ァノ子よくァノ子•おいでなんした。ァノ子これ

れ。ちつとでざんすが。アノ子 おあんなんし トサ トげんし兵。くすまんぢうを。持來る【鳥】ム、おいらんに。おありがたうござへすと。よくいつてくりや。コレこゝへはいつてねゝへか ト手をつかまへる。ふりはなし【やそ】しつたかしりいせん。きついぶしやれやうだね トいひすて。いでゝゆく。まひつる。どたんのぬるいちやヲ。ついでのむ【鳥】をれにちつとのませや トいふゆへ。ちやわんを。つめで二ツほどはじいて。やる【鳥】ヲ、つめてへ しやうじをすこしあけて。かほを出し【錦の】おたのしみざんすね【鳥】だれだ。にしきのさんか。サア はいりな【錦の】そんなら。一ッぷくのんで。いきんしやう トつまにきすがみをもちそへて。つくばひいる。まひづるたばこ付て出す【まひ】づゝうかへ【錦】いつそのぼせんス【鳥】そのおめへの小びんの梅干で。ちやづりてへ【錦】にくい口だよ。どうしやう子 トよそのうへからきせるでたゝく【まひ】たしか小がらしさんと。ましのとさんと。いちざだね【錦】これ〳〵が。來ていんすから。まだはつのほうへれ。いきんせん。モシイ おやすみなんし トいひなぐりにしてゆく。あとへふりそでのしん【そのつる】まひづるさん。ちよつと。かほをおだしなんし【まひ】なんの用だへどふしたのだへ トそらつたばけて。らうかへ出。ふたりこそ〳〵とはなし。何かまひづるへ。むしやうにうたがいて。ふたりともにどこへかきへてなくなる。作者の京傳も。なにしにいつたか毛頭知らず。鳥口へひとりとこのうちにのこされたれど。じたいうぬぼれでいれば。なたきがつかず。まくらもとになげちらしてありし。こせに味せんをとつて。つめさきでなき 哥 〽人めも知らぬ男なら。うらみも戀も。あるまいものを 折ふししんとしめつたる。となりざしきの【女郎】わすれもよもやなんすめへ。ぬしが三人いちさで。はつにきなんした時。まんざらでねへと。おもいんしたが。わたしがいんぐわ。いつそ其時思ひきつて。しまへべようざんしたに 哥 〽な

まじあふミの水かゞみ•うつして見ればミなそこハ•かたいかたゝの石山と【客】なんのこつたへ•そりやァ•こつちからいふせりふだ•ヤレわたしが此むくへ•へりをとつてあげんしやうの•ヤレ女房にならうの•ヤレかゝさんにあはせるのと〽きつうのせたにわしやのせられて•思ひすごしハわれからさきよ•一ッまへをび•しどけなりふり【客】アヽモウとんたふさいできたかへらう〳〵【女郎】まちなんし•女郎のばちもあたりんす•ソリヤあんまりでござんす〽たとへあはづと三井寺の•かねてハ思ひゐるさきの•月のひらのハゆきのくれ【客】コレなかすとよくきけ•此やうにきづよくいふモ•じつハ手まへの身のうへを•思つての事•それといふものがあつちやァ•きやくもつくめへ•まづとうぶん•されたぶんでいろ•ハテなんといはふかかといはふが〽人のうハさも七十五日•うき名きのどくの•山はとゝぎす【女郎】ソリヤほんニ〽はてそふじやかへ〳〵【女郎】うれしうおざんス【客】たとへどふ云ことがあつても•アレあのとなりの•うたのとをり〽すえハひとつにもとの水（鳥口ハ三味せんをいて•くちこゞと）【鳥】ナンのこつた•となりのめりやすをかりて•こつちで口舌（くぜつ）をするなら•きこへたが•こつちでうたつて•となりでくぜつをされてハ•うまらねへ•此まひづるハ何をしてゐるな•ハヽア•きこへた•どうりでよいに•そゝくさとしやァがつた（トかんをつける所へ•まひづる来る）【鳥】何をしてゐた【まひ】おいらんの客人のつれ

しゆが。きていなんすから。用があつて【烏】くそでもくらへ。よくいつぱいかいたナア

トなぐらをとつて。まくらでぶつ所へ。二かいをくわく聲(せい)。茶やのむかいといつしよニ。めをこすり〳〵。來る。いなづるもをきてくる【鶴】サアよかからりとあけた。どうた〳〵

トいはれて。烏目こゝろせき。まひづるをつきとばす。むかふのはしらに。あたまをたらゝつけて。かうがいヲぺつしより【竹内から出ろ　あきんど】あゝあぶらげ〳〵

大尾

千秋萬歳

大々叶

來春出來

青(せい)樓(ろう)艶(えん)談(だん)　ほたて貝(かい)　全一冊

京傳作

再板 廓中奇譚

再板 辰巳之園

再板 婦美車紫鹿

新板 廓乃大帳

辰巳の園後ろへん

閨中狂言

天明九酉春

江戸小舟町三丁目

多田屋利兵衛

志羅川夜船

自叙

千両の黄金も。三十二文の孔方も。悉皆一物にして。上は三浦の高尾。頼兼が城を傾け。下はぼちや〱のお千代。折介が鼻を傾く。都鄙に上下の隔なし。況貴色に於をや。中三の生る畠もなく。川岸妓の釣る池もなく。その流れの源ハ一ッなり。されば金襴の夜着も。煎餅の蒲團も。寝て見る夢に差別なし。今や一個の通子あつて。青樓の西岸に遊び。閨中の少婦が。愁を知らざるをしる。予其趣を一帖に述。初に武左と素見の二篇をくはえ。夷狄だも妹あることを知らしめて。四方の遊子に。南廷一

志羅川夜船

片をはづませんと欲云々

山東京傳述

二

目録

○武左の初會
○素見の高慢
○西岸の世界

京傳画

艶語雑話 志羅川夜船

山東京傳著

○武左の初會

人ハ武士なぜ傾城にきらワるゝとハいへとも當世吉原の客ハ七分武士にして三分町人なりされと色里のならひなれバぶつさき羽織にどう金づくりの大小しやんと小りゝしく見ゆるも又異様なり大小と遠くねる夜も口盛りとハお武家かたのじゆつくわいぞかし此里に來てハ武士のたましい一寸もひかぬ氣になるハ戀はくせもの傾國のしるしなるべし此客人一人は年二十五六髮おほたぶさにて元結澤山に卷てゆひ淺黄の五分長じゆばんかいき縞の下着黒羽二重の小袖もへぎこはくのはゞひろき帶を四角四面にむすひ黒縮緬の綿入羽織白糸にてべつたりとぬひ紋しはおりの紐大小のさげをともに紫なり一人ハ年五十斗ッさかやき赤くかほに白なますできてはけまげふしほそくかば色のじゆばん黒りうもんの小袖小紋の下着とひさやの帶おなし給羽おり玉むし色の茶丸のうらいづれも白き足袋になかぬきぞうりをはきいつかどの家中しゆと見へいかにも茶やあるいハやり手まわしかたのよろこぶ客人なりけふくわん音さんけいをいひたてにそれ

からそれたまりならではづミきつたる心をむりにおちつけゑもん流しの衣紋坂をおりて大門をはいれば茶屋の軒ごとに七くわん音の夜とてりんぼうとまん字付たるてうちんをつらねからんころんの駒下駄にけ出しづまの八文字お梅さんゆふべハおやかましうをつしたと妙なる聲に女房がモシヘちつとおあかりなされましそらなさらぬものさといゝながらたはこ付ていたせばかどくちに立て居てたばこのむも所がらとて火の用心がわるいととがむるものもなしこなたにハ新造禿が長くなりミしかくなりしてまつて居るハおいらんが地いろしにてれん茶屋へしけこみしあとなるべし犬が茶やのあげゑんの下からのびをして出るに禿ハびつくりしねむけもこれですこしはさめたる也中の丁のさまハいちやうならずきめづきんのぼうづハむきたしのほうつを見くだししやうわるな客ハほうかぶりにさまをかへすけんは地まわりにはりこまれあるハ小べんにふミこみあるハ犬の糞にすへり入リ來人も出る人も氣は天上にのぼりいろ〳〵さま〳〵にうちむれたるなかにかの二人のさむらいの客ハ同役のしつた人の茶やを目あてにのれんをのぞきどふだお内儀かわる事もないかといへばあがりはなに禿の口上をきゝ居たる女房立てろくに見おほへもせぬ顔ながら人がらのよいさむらい衆ゆへなんにもせよたいじない客と見てとり是ハ〳〵お久しぶりでよふお出なさりましたおうハさ斗リ申ておりましたとけふはじめてきた客に

あはせぞくなつた口上もおかしくすハるやいなはや女が盃臺もち來れバ女房ハ二人が大小をあづかり手あふりかたよせてさかつきをはじめ何やら咄ハわからねどそら笑して一ッ二ッとすゝむれバ客ハしゆうぎをするにはや女房おち付顔どこぞお心あてゝもござりますかおなじみてもござりますならおしまひ中につかはせましやうイヤく此ごろのきひしいてうちたへ此地へ來ぬゆへ心あてといふハむかしの事こんやあらたに妻をさだめるつもりさほんでござりますかへ毛頭いつはる所なしさき様ならもはや見世も出そろひましたらう御見物なされませ牛介かてうちんとぼしてお供しやれとあいくろ敷ハ此女房の一トかぶモシおまちなされましとはおりのゑりを折てやりさ様ならごきげんようと內證ハ早くおいだすくめん客ハはや心中そゞろにおもしろく鼻唄であちこちと見てあるけどよくこゝろ出てさらに口せまれハ茶やの男衆心やすき內へすゝめてあげる客ハ廣ざしきにやう〳〵茶やの男とともに三人なれハ居所にきよひ床の間の脇へ居る女郎のすわる所なれバ茶屋のおとこきのどくがり心のうちで笑ひながらもちつとこちらへお出なされませといところをかへさすれはほどなく廻し方女郎のたはこぼんもち來つてならへおさまりの盃てうしいたす女郎のでるまで客ハ大おんじやうにひるおこりたる事尾に尾を付て見えをいひ同役の友だちと三四ねんあとにちよつと來た女郎やの出をくハしく知つたかほに

はなすこの座敷のやうすにて廻しかたもやほなきやく人と見てとる女郎もらうかを通りなから此やうすをちらりと見るゆへに座敷へ出やうもとの外おそくまわし方にせつかれてふしやう〳〵首きりばへたされるやふににべもしや〳〵りもなき顔つき苦界の身なれハこそかはれますといはぬ斗ㇼの顏色にて出なから何やらほかの女郎とはなし小聲にて笑ひなから來て坐鋪へはいると横の方(ほう)むいてすハる客ハ今まで高聲てはなししたるもきやうにそげてとの外小聲に也盃事たはこのむにも心用ひて何か氣ぐらうになる女郎は茶やの男にむかひダイブまじめだのどうさしつたと初音いづれバその尾にとりつき茶屋の男すこしおかしみをいふて女郎をわらはせ禿をなぶりていやがらせ客の方へもいろ〳〵はなししかけて見てもとかくすこたんなあいさつ故座しきいよ〳〵かたくめいつてきて客と女郎との中に一言一句のはなしもなし客ハあまりてれて手持なければれんじの障子(しやうじ)をあけつれの男と天氣のうハさやあしたの奉公の番ぐりをはなし小聲なり茶やの男あまりきのどくさにちよつと內へ知らせて參りましやうとてうちんとほし廻しかたに賴んで出行バ客ハたのミに思ひし茶屋の男かへれバ木から落た猿のごとくしばらくにらめくらして居て見たがどうもつまらずこハ〳〵ながら女郎にはなししかけてミれど女郎どし顔を見あはセたばかりて返答(へんとう)なし扨はかはいや此女郎二人ㇼともに瘖(おし)かと思へばよつぽとすぎて

ふしやう〳〵にあいと口のうちで返事したばかりにどゝものもいはれず酒ばかりのんで居る是をとなり座敷から見れバ燭臺(しよくだい)のあかりしやうじにうつる影法師(かげぼうし)ばかり折〳〵うごくやうに見へてあふぎのをとパチ〳〵灰吹をたゝく音トン〳〵鼻をかむ音チン〳〵

○素見(すけん)の高慢(こうまん)

(すけん山の手の)【きふう】へさふしたきじ久としら菊のおなし流れの身しやとてもコレむすこもなんぞうたハッセエたまりんでありくと犬かほへるぜ【むすこ】いかさまわつちも幾(いく)さんの所へでも通(かよ)つてちつと唄(うた)でもならひやしやう【きふう】ナニ公(こう)などは本ニきやうが通だから唄を習ふよりちりからにすれバいゝ月見などハよし原へ行とがうてきに色ができるぜ【む】ちりからも五秋(ごしう)さんハなくなるしはじめハ向ひ町へ出る今しやァ天神の助八より外ハ山の手にハござへせん【き】はやへもんだそうこふするうちモウ坂ヵ本トへ出る【辻駕】ハイ旦那貳百で二てふめへりやすか【き】二てふでよし原まで二百か【駕】そんなむだをおつしやらずといさくさなしにめしやし【き】二百ならおれもかついてゆかふ二てふて百なら乗ふ【駕】そんな事なら埒(らち)ハ明(あか)ねへ(ト跡へかへる)【き】だれがあんな高へ駕へのるもんだ二百出すと明ほのへ行ッて余ッ程うまひ世界がか

ける「む」ほんにあの茶漬のやゞりをかひまよりなして居るだらうよりなはるか「き」ナニあすこにも下りが有るからふさかりわらべたよ「む」おめへ毎晩出なさるかいつてもすけんかへ「き」コレサしつかにいわつせへ通りの人が聞ィて外聞か悪ひ有リ昔ハおれもはつた者よ大町六十幾軒に五十軒の河岸見世てつほうにいたる迄一軒も上らねへ内ハなくて大門を打たぬはかり起風さんといつちやァ飛鳥も落るやうたつけがすこ色事の筋からもめ大根ができて酢のこんにやくのとうたせるからく〳〵といたちの道にしたよそれだによつて今夜なともあそハふとおもへバ昔そふいふ世界を書て置た名にしをふおれか事た物を格子くときの相生屋を一ばん御目にかければとの傾てもどつこひ承知之介だけれどもそれもむだな事たよ功成名とけて身しりそくとやらていつそすけんと云所かありがてへよむすこなどもそふさつせへ「む」すけんも歸りが難澁しやァござへせんか「き」そんならどこぞ茶屋にひける所でもあるかあらばおれも附合ッてやろふ「む」サァ有リァ有けれどもいひにくしいつてもしよせん引ヶやせん「き」おきやァがれ相談が出來るかと思へばそんならやつぱり見物素見禪てんまか「む」此ミのわの内が長ひからてへくつするねへ「き」この先の横町といつて松葉やと丁子屋の別そうがむかふ合て居るをれが大名だと爰をぐつと縫上ヶをさせるよ「む」アノ何ハおめへ「き」コレ明ぼのゝ前たかくれて

通らつせへト（ト行すきて）今見付た様子じやァねへか【む】ナニ誰も見へなんた【き】ヨシ〳〵時に公に素見の通をおしえて置ふまづ第一五丁まちをそゝるにさとなやつハまわりやうがわるひから同し町を二度も三度も通らねへければそれならねへハ所をやろうが案しやしたッレからひんそろにぐつと伏見丁の下直な所を見るハヨシカそれから二丁目を下ミから上ミへ見てすぐに江戸町へはいりやすッレよしかそれからけつまづかねへやうに西川岸をつつ切ッて京町そゝりの新丁へ來てそれから羅しやうもん川岸を通つて角町を打留メにして中の町へ出て犬のくそのなひはし通りを通ッて歸る何レもおそろかんしんだろふむすこあやまつたか【む】きついもんでごぜへす【き】かふいつちやァ塩ざるをどこへ置て來たといふやうだがかうまんでも髭なででもねへがすけんでハマァ日本一の通だヨマァいつたら見さつせへッレ傾(けい)が見世に居る癖(くせ)をいつて聞かしやうまづにざらしが三弦(さみせん)を彈(ひ)く御射(みさ)山がくさぞうしを見る玉かづらがはりひぢ松人が立てひざ深山が琴をしらべる瀬山がみをかく七越がきせるを通す扇野が耳こすりかたぢ野が火いぢり其外まじり小見世までだれハしやくをおさえる新造のだれハいねむつて居るこんなこつちやァねへつがもなくそれ〳〵に穴があるけれども一ッ朝一ッ夕にハはなされねへならうとおもわばおらが內へちよく〳〵きさつせへ【む】いづてもおめへ留すだからむだだ（トはなし行うち大をんじまへを出はなれ西川岸）

の二かいで へ歌 ミだれ島口舌した夜のきぬ〴〵ハ【き】あすこハどこだと思ふ【む】西河岸さ【き】おれが二ッ晩三ばん連て來たらがうてきに通になつたの【む】こゝからゆかれるとよつ程近ひね【き】爰ハめへど牽牛七といふやつが切られた所だそれから番小家ができた【む】何んだかおかしな匂ひがするねへ【き】ムヽ又小つか原でやくそふだ鼻へせんをかわつせへ此匂ひかすると爰ハ降りたがるよ【む】そこいらハ歸る身てハ案じハねへョ【き】ソレその刀ミ二本ンがあやまる大門へハ一本ンではいらつせへ【む】ホンニ今忠五郎が所かつんぼうが處へでもあつけりやァよかつた【き】それも我方寸の內にありさ此笹の中へかくして置がいゝ【む】ひよつと人が【き】ナニサしるもんだそこがまだやぼだおらも無刀に成ッてはいるよ人ハこねへか氣をつけさつせへ【む】ヨシ〳〵【き】サァこれで腰がかるく成ッたコゥ彌八玉やのしん造にとんだいきなたてひきの有りさうなやつかあるこんやもいればいゝがいつも〳〵建具やのかるこを見るやうに格子ばかりしよつてるよ【む】おつな所に木屋が有るの【き】これハげいしやの駒次が內だこの格子が松葉やの別家た火事の時分ンハミんな女郎がこゝにいた【む】まちねへこゝでちよつと【き】小便なら奥田のわきがいゝそして公と羽おりを取かへてきよふおれがのハあんまりだてだから夕ァの人がまた來たと直に格子さきで目につく【む】こんやハ賑だね

【き】マアいそがつと衣紋でもつくりのいかにも傾城買といふつらで大やうに大門をはいるがいゝ　ト二人ハ大もんのうちへはいりけるが出入のしげきにまぎれて見うしなひその後をしらず

○西岸世界

いづくか鬼の宿とさだめんよし原の假宅もをのが住家にかへれば燒土にはへしべん〳〵草もすがゝきの音にのミ殘り材木の間に鳴しこうろぎもむかふの人とよぶこ鳥おぼつかなくも只ひとり藏のさしかけに夜ばんせし若者もはやきん〳〵ぜんたるかほつき壁土の山にひきさき紙の目印つけしも跡方なく大工のはまりしどぶもふたができひの木がかほる新宅のはんじやう五町のにぎはひむかしに百倍せりげにやけぼこりとハ此ことなるべし大町の家ゝハいふにおよばず西川岸の夜見世も中洲兩國のうそさむきに引かへて女郎のかほつきにもはやよし原のおもむきあられるゝぞかし【そゝり】さいめんへ西行いかにとありけれバどれゝん〳〵　ト見せをのそき　つがこらさんどふしたへんな顏をして居るぜ中洲よりさむくなくつていゝのしかし四ッ竹ぶしがきかれねへでわるからう【女郎】だれだ徳さんかどふりできいたやうな聲でをしたでへぶ遠くからきなんすね【そゝり】こはたの里に馬ハあれどサ【女郎】君をおもへばかへちくしやうめおばさんに

よくいつてくんなんし【そゝり】をつとのみこミ山さくらかな（トゝきすくる。）【女一】ありやァどこのかむすこだつけね【女郎】ツレサ中洲のきりやのむすこさ【女郎】そふ〳〵あのとをい所からよくきんすれいゝこんだね【女郎】いろでもあるでおつしやう【女郎】物すきだねへ（トいふ声からおまこにれ三八つお）（ひとりハ□ものにて名ハ源一人ハ田まちむすこにて名ハ久兵衛ひとりハ茶やのむすこ）【政】こゝをちとミやうハゝァおもしろ狸だねへ【源】こつちらの火いぢりをして居る女郎ハひてへをかなづちで二ッほどくらハせると大橋いお今といふはたけたせ【政】をぎやいあふぎ屋さんをすきかへしへすつたといふくびだ【久】ありやァ系もとやの牛かめへどなじみさ【源】こゝへあぶりハどうだ【政】おらァあやまらう【久】なぜ〳〵【政】こん夜ハうらだから南一いてへそふいふとがハしれへ【久】そんなら此ぢうのばんあがつたなおらをはずしハうらみだぜ【源】それしやァ相談ができねへサァそんなら早くどこへでもきめてあがらうすこはらがきたのゝ天神だ【久】さむしいやつさはんに早くあがるがいゝのさ又さけをうつとまこつきてうちんだ【政】いつそめうつりがしてきたのう（書つけちやくせめうへ紙の書をくきかゝる）【昔やし】政公どふだヲ、久兵衛さんもいちぎか戀にハ身をやつすの【政】モシきさん猫いおなじみハとふだれこつちへきたらうゆしまのがけからもいゝのかきたそふだ【書】そふさ役年ッのらくじやうがあるのに貴女がきたからいそかしくつてならねへ【久】モシこのころのまきれ

だがてんだね【書】あけや町の山豆さ【久】だがかちやした【書】ばたハわつちがとつたがおくがいゝ句さまわたでくびといふだいでくら宿できせるをほめられトいふ句さ【久】よくしたねへ【政】なる程こいつァまわたでくびだろうトいふ所へむかふから丁子やのまわしがたきたる【政】かくれる【久】なぜかくれる【政】かけがよらねへでこまりきるわな丁子やなぞハりやうけんづよいからなをきのどくだ此さわぎで書やくとわかれ三人ハまたさきを見世する【源】サァこゝへあがらう〳〵さむくつてならねへ【久】あがるがいゝ〳〵トうちへはいり政ハはきものをもつてあがりそつにする【若者】おはきものハこつちへ【政】ホイ客人をおくつて大見世へいつたくせがうせねへいま〳〵しい【久】しやうをあらハすの【若者】おミたてなされましト三人はしごのだんから見たて女郎あれこれときまる【久】おもしれへ〳〵トニかいへあかる川岸ミせへらうかもせまく何かきゆうくつな二かい也【若】マァちよつとこゝにお出なすつてくださりましト三畳敷のまわし座敷へ三人ならび立てみて【政】ごうぎにやけ穴のある畳だどうらくものゝ布子を見るやうだ【源】おきごたつでねわすれたのさァ：まだ天井ができねへをうばく宗の本堂のやうだぜからかミの中ばかへ丹とたらしやうでつけたてにかいたたつた川の書也【政】此からかみハよりかね公御入といふ道具だてだわかいもの女郎のへやへやはき出しあんとうをかきたて、【若】サァこちらへト三人を入て下へゆく源政久へやにおちつき【政】これハ書おきをよまうといふあんどんだねとゞふつけすとごやうしまくだ【源】何か書てあるぜ【久】ナンダ〳〵二朱出シて海獺をかひに北の里【源】イヽ〳〵とんだねられたとミへる久兵衛あじ戸棚にあそはし紙をたして【久】ウヽ上の紋ハ丸に五本ぼね

の日の丸扇下が五三の桐こいつハひねつたもんだ三味せんぼりのおやしきかのよもやそふじやァあるめへ角丁の花山名順さんのもんだ（トふたをとれへはしがみ二ツかつほぶしのほそくなつたのが一本くろもじのやうじ五六本ある）此はしがみのうハがきハ惣兵衛ハヽァきこへやしたこりやァ鳶澤丁川岸のふるぎやのばんとうだもしれねへ【政】こいつァ露しやうと書てあるわかりやしたこりやァ大をん寺めへのあけぼのからくる客だらう【源】あけぼのきやくハ百六ッ【久】ァ、ワりい〳〵ろしやうおしやァそんなねがてる（トむだくち〳〵に用だんすの下の深ひきだしを出しにかゝる）【政】これよさつせへそのひきだしにやァかたずみかあるぜ（トいふゆへ下のうすいひきだしをあけてミればとりのまちのびいどろのくま手一本引まちのぢゝん房がかうやく一トかいまんきん丹一ト包長ふさのやうじワる紙と小づかひ錢かけち一ツふく）【久】マア都鳥の一くわんがある（トひらけバ大山のふどう）【政】もつてへねへよさつせへワりひしやれだ（うへにあるとなへをあけてミればつべたくなつたあまざけ半分ほどあるふたぢやわんにハかづの子ある）【政】まんさらてもねへ【久】（かつの子を一ツつまんでくひ）こいつァつめてへ【政】もうよさつせへ（ワかいものしよくだいを持来り）【若】こんばんハだいぶおさむうござります【久】とふだへにきやかかへ【若】あまりにぎやかでもござりませんが中洲ハ宿ちんが高ィからどふてもこつちがわりがようござります【源】こんたァミたやうだ角トのつるやにいやァしねへか【若】へ、いゝへ大三屋におりました（をくのほうゟぼうずの子しよくはな哥て来りほうきとうへぞうりをなけいだす）【若】此がきやァぞんざいなお客人のござるに【久】ぞうりだしてはうきなめにあわせる（ミな〳〵わらふワかいもの下へゆくこじよくにむかい）【政】これてめへのひへハなをつたか【久】なんたこんのたびたなひねつたも

んたッレてめへのせなかに大きなかざさきがある【こじよく】コリヤァね見世びらきの時せいろうのすミへひつかけてやぶりいしたよ もつとも此こしよくハ折ふし小つかいせにをぬすんでだぐわしをかひぐひしてね小へんをたれるくせあるべし【久】おらァ又かけ清が切りやぶつて出た穴かと思つた【源】コレなにをいわつしやる【こしよく】ばからしい ト下へゆくわかいものおさだまりの通りさかつきたいてうしその外出し物もち來り【若】お一ッをあかりなされまし【源】これおらいとんこんたにたのミがあるぜ彌八玉やのむかふうらのかみゆひの庄介が所のぞうにをかつて來てくだせへ そしての水戸尻の相生や そはやせ をあつらへてきてくだせへそれたのみます ト南一なけ出す雨方で南一でハわかいものゝもふけがないゆへ おかしなかほつきて【若】かしこまりました ト立て サァミなんお出なせへ 三人のあいかた女郎出ろ先へいつろハ花代とて廿二三とミへてかほたくましく人のわるそうな女郎これハめとおたびからとられこ口そやくねんをこゝへかわれるもちろんきやくとり也紫のよほどきたきんしのすれたぬひもやうのうちかけもんところへまいする【久】ャァ丁子やのおいらんこちらへ トあくてんをいふつきに出るハ月の戸と云まわり女郎としハ十九ばかりほうハ木ざわしかきのことくあからミ兩ほうの小びんへづつうのましなひつかミをはり松ばのかんざしへゆびのわをとふしてさし小袖ハおなんどぶあい鼠かあさぎかしれなくよごれたちりめんの小もん所ハきんしで梅ばち【政】ハヽァ梅ばちの御もんハ當世だワつちかふんどしと同木同作だ そのあとハ雪のとミふりそてしんぞう大とせのしきぞのなかれのふりそてをきてこきもとゆひてひつつめにゆつた嶋田【源】おめへハまげへまち人をかけたのかわいらしい子だこゝへきな【政】此子ハひなづるさんの所のつるじによくにているねへ【源】サァでへふせまくなつてきたおめへかたハあんまりそつちへよると舟がかしぐによ【女郎三人】ほゝ〳〵 トわらふ源ハ一ばんめの女郎久兵衛ハ一ばんめ也ハふりそてとおさだまりのさかつきすむすいもの出つゞいてぜんいだす【源】げびぞうハまんざらでもねへす【久】なる程よく食たがる人だ

【政】げこをあらはすねふりそこ【ゆき】わつちがもつてあげんしやうトめしをもつてやる【源】これはゞかりの山櫻【ゆき】ぬしはへ【政】おらァめしはあやまらう酒をのんだらちとのぼせてきたトおもてのれんじをあけホヽウあしたも天氣はよしのくす【源】こつちはかんざつしになるしめさつせへさむいぜ〱【月の戸】ゆふべも此あてゞ狐火がもえんした【久】れいこくがにほつてわりいしめるかいゝトいふ所へ又来る【小じよく】モシへちつとおくんなんしト酒を茶つけちやわんについでゆくさつきあつらへたやうにそばつる【久】サァおもしれへ〱モシおめへがたちつとおあかり【花代】おかたじけなふおすがたべんすめへ【源】此そはを一ぜんこれはそつちでくれつせへトぶつかけの二ツかつたせんをわかい者にやる【若】これはありかたふござりますト此うちいろ〱もやうあつて時うつる【若】ちとかたつけましやう【久】そいつもよからうト女郎はみな〱下へきやくへに行源ト久は小べん所で小ごゑに【久】モシおめへの女郎のくびはなせそうだね【源】わるい色の女郎だなんでもやまひがあるよ早くためでもねがへぺいゝ【久】うさァねへつとあをさげ二人の床おさへはやひけたうついきせきはしごを上ル此きやくは中の丁やのわかいもの跡より【なじみの女郎】おめへよくきてくんなんしたねおそいからきなんセんかと思つたョ【客】こんやはあいにくきやく人のもめがあつてぜんてへこられねへ所たが今松ばやをおさめるとしきにきた【女郎】おめへもつてきたのはてうちんか【客】扇やに七ッのむかいがあるからすくにこつからむかいにいつてうちにねたかほをするつもりでかんばんてうちんをもつてきたそこらへをいてくりやトたけ出しざしきへ

は入ル【源】【久】花代かへや床の内にはなしている【久】ねどうぐがだいぶりつはだねへや持たけありやすしかし三ッぶとんとれちとつよすきるねドレうへのふとんかひぢりめん中がもへき下があさきべちやァねへおめへこうの餅といふものだ【源】まくらをミねへ金もんがまだあかくならねへひさこしにかつたと見へる トいきだしをあけて 何かこんたんのみかあるこいつァおもしれへ トひらき おきやァがれきやく帳だ【久】そのあいだにまだ何かある【源】こいつハたしかにいろみだ トあけてミればこんりやうの書出し アヽ引 トいふ所へ政小べんをしこなり【政】おれひとり大よいだ トよぎふとんにめをつけ ヲヽこいつハ大わらいだコレ久公此ふとんをしつてるか【久】そふいやァどうかミたやうだ【政】ツレ尾田本のつま川さんがぶんさんにだしたやぐだしかもおらが所の客人がしてやつたのだ【久】ウヽそふだ〳〵【源】ほんにかこれもいゝ此やぐもこゝへくらがへしてハはたらきのねへ屋ぐだ【政】おらァもふね松やぶかうしとしやう ト手まへのとこへいつてこれは花ヾ月の戸雪の三人おきこたつにあたつている 【政】こいつハまんさらでもねへ【月】いゝへぬしハあてもふされやせん【政】そんなにむごくしなさんな【ゆき】ぬしをあてまうすときつとわらひなんす【政】こいつハあやしおこたつだあらし音八ときこへやうとれ〳〵 トいやがるをむりにあしをつゝこみ アツヽ〳〵〳〵【花】それミなんしやけどをしなんす【政】ヲヤ此こたつにやァくわんがついてる トふとんをとつてこれハ用たんすを深い引たしをよこにして中へ火入をいれたこたつなり 【政】こいつァいゝ思ひ付だ【花】もふおしまひなんし火の

用心かわるふをす　トへやへゆく月の戸も久兵衞かとこへ行【花】モシヘねなんしたかへ【源】どふしてねられるものかまつ身なりやこそ疊ざんさ【花】どうしたのでおつしやうね　トたばこをつけ出しくぐにかけたまもりをとつこたんすのくわんにひつかけびやうぶをひきまわしあんどんをかたよせくらくする　モシヘそつちらへねておくんなんしなねかつてがわるふおす　トきやくをあかるいほうへまわしくらいほうへねる　ヲ、つめたいよきだよさむうおすねへ【源】コレおめへさつきよしハらものならさしがあるといつたそふだが町のうちでだがなじんでくるへ【花】何さだれもなじみもおつせんが政さんときなんしたからおまへも町のうちかと思つてさ【源】なしみがねへもきついうそだそうハとらの門のこんぴらだなじみがなくつてさしをつくものか【花】そふいふわけしやァねへが町のうちのもの丶一度か二度きてハ又ほかへいつたり何かして生わるのくせに口がわるいからわつちらァ町のうちのものと見いすとマァきめてからあがりいすのさ【源】江戸の者なら一どか二どでこねへでもいゝかへ【花】何いゝもんでおすかわけてぬしなぞのやうな人ハ三度も四たびも百ねんもよびてへのさ　トゝはやすこしもちまへの手をだしかけてかきのめす所へこじよくかた手にやくわんをさげかた手に茶づけぢやわんへしやうゆをへてもちきたり【小じよく】モシィあけてもようおざりいすかへしげざとさんのおつせへすおめしをおあんなんすならこれでおあんなんしとさ【花】なんだ此子ァおらァもうたべたよもつてゆきや【こじよく】それでもセつかくおよこしなんしたものをおいていきんすよ　トいゝすてゝ下へゆく【源】ナンダにばなか一ツぱゐいかう　とやくわんのふたをとれべゆと

ふふ こいつハおもしれへ源公ハいかなるたびもしてみたがやくわんのゆどうふこれがはじめてだ此ちうよその女郎衆があんころ餅をかいにやつて土なべえ入レてどうするかと思つたら水をいれてかきまわすとぢきにしるこになつたそれよりやァこれハいゝ案しだ【花】しげざとさんもゑんりよのねへはさの座敷へこんな事をしてよこして【源】なんのゑんりよがいるものかこいつハ一ッいきてへのうはしがねへ【花】そんならこれでおあんなんし トかんざしをぬひてやる【源】ヲ、ァッ、〳〵こいつハうめへ〳〵 トすこしくびヲかたげ 何かでへぶ薬りくさいゆどうふだ【花】くすりくさいへヲヤ まちなんし トやくわんをよく見てわらひ出す【源】なぜわらふ〳〵【花】しげざとさんもばからしいこりやァしんぞう衆が山歸來をせんじるやくわんだものを【源】ャレなさけねへそんならゆどうふハゆとうぶだか藥湯のとうふだの【花】ヲホヽ〳〵〳〵 政かねているまわし座敷のびやうぶのそとへ女郎一人來りあんどうをかきたてゝみを書何かふろしき包といつしよにおいてどこへかゆく政めをさましはい出て ふろしき包をあけてこれば重にくミしふたちやわんうへに まめ中ハとうがらしのうまに下ハなづけにしやうゆをかけたやつ政へじやうだんものゆへあいかたのしんぞうたわいなきをさいわいに のふたぢやわんのものをおもへくひ又床のうちへはいりねたふりをしているさきほとの女郎また來りければたいなしにくひちらしてあるゆへびつくりして【女郎】ヲヤ〳〵どうしやうのうねこかのうはらがたつよモウばからしい トびやうぶのそとから モシ雪のさん〳〵【雪の】めをさまし 津山さんかへなんでおすへ【女郎】だれぞこゝへ今きやァしんせんかへ トいふ政は今めがさめたかほで【政】ゥ、もちつとさつきたれだか女郎衆が二三人のこゑでわらつたり何かしてそう〳〵しくしていつたつけ【女郎】にくらしいねへおふかた

そんならげび川さんたちでおつしやうわつちやぬしたちにさふされるおぼへはねへモシきいておくんなんしわつちかあねさんが京やにお出なんすが此ごろひやうきでいんすから見まいにやりんしやうと思つて一日かゝつてにたのでおつすわつちや又ぬしたちにこんな事をされちやァたちんせんからやり手しゆにいつつけてつかはしんす【政】そりやァじやうだんでもわりいしやれだしたがだれだかきつとした事はしれめへ【女郎】何さてへげへしれておりんす【政】なんでもわりいしやうだんだ（トしらをきる此女郎あねの所へやるといつはり事いふの所へやるのゆへこうされてもじつへやりてにもいはれぬ也）【女郎】どふもしかたがねへ雪のさんおめへと此客人とわつちとにべてしまいんしやうこねへになつちややられやせん雪のさん下へいつて酒をぬすんできなんし（清兵衛へ床の中に月のとゝねているところへあへたゝしく　んぞう）【玉よ】（ふてにすみをためちすり）モシへ月の戸さんへおがみのごしやうでおすからね此みのうは書をしておくんなんしねへか【月】なんとかきんすへ【玉】清兵衛さんとさ【月】モシぬしへ清兵へとはやつぱり清兵へとかきへすかへ【久】清兵へはありかたへりやくして書とそのやうに見へる女郎しゆはおつな事を云もんだ【玉】しれさァかなで書てくおくんなんしなサァ早くサ【花】ぬしへ見なんすなわつちやはづかしい【久】小なミが山しなへきたよふな事をいふの【玉】うちへよこすとわりいといゝなんしたがどこへ出すとゝきんすね【月】やつぱりかミいどこへ出しなんしな【玉】やつこのけつかへ【月】何

さ大門の松さんの所へさ【玉】あそこへきんすかねそふしんしやうおありがたふおすモシぬしへお休ミなんし ト出てゆく【月】アレおきゝなんしきざでおすまへ子をよんできいした【久】何あれハ米のあげさげだ ト三人の床のうちいろ〳〵模様あれども戀の情になつこハたゞミせも川岸もかはる事なければこゝにりやくすかくてだん〳〵よもふけしん〳〵と二かいしめりて猫がねずみくひするころとなりたゞもノりもごう〳〵のいびきまたハぽつち〳〵のむつごとをくの方の座敷で三味せんお水てうしにあはセ 歌 へ夜中ハうらみ暁(あかつき)ハわかれの鳥とミな人ににくまれぐちなアレなくわいないなせとむない耳に手をかねハ上野か浅草か

大尾

志羅川夜船

天明九年己酉正月

下谷池之端仲町

板元　伏見屋善六

通氣粹傳鴻

山東京傳著

通氣粹語傳

書肆　文榮堂藏

自叙

昔宋梁山泊。數多有義士。今堀大棧橋。餘多有遊士。彼替天而行道。是替愚而行通。其豪傑百八人。此大通十八人。夫寓言是妄言。於是比彼水滸傳而。題粹語傳云

山東京傳誌

附言

夫是ハ唐土の。梁山伯かり毛十六巻目の。抜書にして。野暮じやござらぬ。水滸傳の世界を。今傾城買の捻に。比したる小冊なり。四方の通子閲たうへで。作者の畠を。義論したまへ

通氣粹語傳上編目祿

第　一

向島。武藏屋。武松。藝者と虎卷をうつ
林冲。花和尙。堀の大棧橋へ。矢文を射る

第　二

宗江大棧橋の通氣堂に。林冲と會す
下人李逵助　醉て虎鰒をなげうつ講釋師。吳用。智をいて玉屋の女
郞玉獅子を欺く

第　三

宋江夜中の町に。文月の花燈を見る
大に長字屋を閙す

第　四

關取久紋龍進吉。日本橋に巾着切をうつ

第　五

袖乞藏前の王婆阿。武太郎が妻の。密通を取もつ

花和尚醉て。碑文谷の金剛神を倆旬

第　六

鞠師高休。醫師瘦皮病身を賴こ。蒙汗藥を以て。鯛丸屋の呉服物を奪ふ

以　上　六　篇

通氣粹語傳上編

山東京傳著

第一

夫諸白の名に流れたる。隅田川の景色は大江戸の隅におかれず。哥讀は。都鳥にいざこと問はんと捻れば。俳士は小町。能因を。へこませ。詩人は。秋葉の猿の三叫に。腸を斷てば。佛者は。蓮の鯉に居所の歩ミをおもへど。鬢のそゝけた田舎人はその味ひもしらず。日もくれぬ早舟にのらんと。心せくは廓にうかるゝ息子かぶ。うちまじりたり隅田堤。ゆきゝの人の其中に。一トきは目立たる人がらとしは二十四五と見へ。髪は大たぶさに結ひ。鼠もくめのぶつさき羽折に。こくらの馬のりはかまをはき。菅の深き笠に貌かくし。中間ゝに弓ト矢をもたせたるは。さるおやしきの用人の息子篤尾戸忠右衛門とて。表徳を。林冲と云人。時世につれねばならぬ身のうへなれは。昔のうへだそろいに引かえて。富士のすそので。猪にものりかねまいといふ出たちも。ミせかけばかり。やつぱり心は猪の牙の舟の柏餅はわすれられず。けふ弓

のけいこ場よりはづしての遊山。つれ立しきめ頭巾の大坊主ハ。魯智深と云て。元くハう大寺といふ寺の和尚なりしか。お市と云。小娘をらりにして。寺をひらきし程の。女好キの大酒くらひ。今ハ花の師匠して。あだ名を花和尚と呼ばれ。看板にいつはりなく。酒さびにて。鼻の先赤く。その大きなるは。家根屋の釘ざるに。猩〻緋のをひをかけたるごとく也。かくてふたりハ。五百崎武藏屋松兵衛が奥座敷へはいれば。（むさしや）【女】（まへだれて手をふきながら出）どなたかとぞんじました。林沖さん花おしやうさん。きついおミかぎりでこまります。【花和尚】きのわるいくびだぞ。ちくしやうめ。【女】よしてくださりまし。いゝなぶりごろだと思つて。【林沖】をれが此形りハどふだ。【女】ホンニひねつたお姿だね。したが此頃ハこれかいきらしく見へます【林】てめへがあわせかゞみを久しぶりできいた。此頃は。ソレ馬か。やりか。けんじゆつ。やハら。イヤモいそかしい事よ【花】てつぽうも折ふしてうせん長屋ではなさつしやるとよ【女】ほんにかへおや〳〵（ト笑ふさかづきその外。だしものいろ〳〵もちでる。林仲かつれたる供かつてへやる。）【林】どうぼうまちの。おゐんまハまだこなんだか。【女】イヽヘきなさるはつでござりますかへ【林】和尚さまちがひハしめへかの。【花】何さ〳〵【林】うなぎハあやまらう。皮がこハくつて喰へねへ【花】コレていしゆハるすか【女】只今そこへ【林】おしやうが酒のむかふづらかなくつてさみしい。よびにやりやナ【女】かし

こまりましたトいふ所へうゑり來るていしゆむさし屋松兵衞へ。（ひやうとくを武松と云て。酒ばかりのんでふじやうもの。江戸けいしやの。おゑんか三をひいて來り。）【武松】コレおめへゆへなら行者になつて。ひもんやの仁王へはだしまいりでもするによ【おゑん】ほんにかへ。うれしいね【武】又まよハせるよ【花】（三升がコハイロで）ふざものミつけた【武】アハヽ、ハ、おめづらしいおそろひで。どつたい風が吹たやら【ゑん】りんさん飛だおはやふござりやしたね【林】おきやァがれ。そつちのおそいのだ【ゑん】どふしやうね（此けいしやおゑんといふハ。とんだおてんはものにてきついしやくもちゆへ。天馬しやくと。あだなを取たるなり）【武】そのかハり大のミにのませる事さ【花】おもしろだぬきのはらつゝみ【ゑん】けふハいつかふなものさ。此はらじやァのめやせん【花】（りう蔵がコハイロで）酒がいやならおれといろになれさ【ゑん】ソリヤこつちからねがッてもだが。モシ林さん人中でいはすとも六はらの松かげで。ものひそやかにとかいきてへ所さねへ【武】まんざらでもなしだ【花】わしれたこのしやうで。すいつくけれどさい〳〵（おゑんハ三絃のどうた。一ヨなめてひきながら）【ゑん】おまゑ海老のしやうではねなさる。のんのこさい〳〵のこ〳〵さい〳〵。ハヽ、ハヽ〳〵【林】サァそんなむだハおいて。のみのわかくさとしねへか【ゑん】おしやうさんおたばこ入をすこしはいしやく。ホヽ、いゝさらさだね。ゑち川かへ【武】丁字屋の下ざしきの。天井といふたばこ入た【林】ハヽ、でかす〳〵【武】おゑんぼうとらけんで一ッいかふ【ゑん】わつちやァいや。おめへのやうなとらけんの上手な人と。イヤ〳〵このおうも深

川のとミおかで哥うたひの燕靑さんと、一兩がけで。でへぶかちなつたそふだ【林】インヤおゑんもとらけんハ妙たよ。やつてミや〳〵【ゑん】そんなら松さん。じぶくりつこなしたよ【花】ドリヤおれが合かふに出やうか　トいふゆへ武松。おゑんきゆうにめくはせして【武ゑん】シヤン〳〵　わざとふたりながらとらをする【林】それあいかふだ。おしやうのまつしく〳〵【花】はてめいやうな。ごめんだ〳〵。もふ酒はいやじやわいのふ。【林】なにじやわいのふ。黑山秀藏じやァあるめへし【武】モシ林さま玉屋のおせけへハどふでござります【林】何かワからぬ事。ちとふさぎも波をはしるのさ。ならび大名のしんめらがどふもうたせやすコレそしてあそこのやりてハ。張靑がかゝァの孫二娘といふはたけだぜ。【花】それに付て妙な事がござりやす。堀の大さんばしのべつそうに。ワかるんきよしてゐる。宋江と云とをりものかござりやす。そこに同居してゐる。吳用と云おやぢがありやすが妙な狂言をかくやつさ。なんとけふこれからすぐにそこへなり込んで。吳用に咄して。見ると云。法ハどふだね【林】こんつはおもしれへ。宋江といふ人ハ。たび〳〵きゝおよんだ大通だ。近づきになつておきてへ【武】はなせる人物さ【林】そんならこゝのまくハ。これでもふうち込のひやうしまくとしやう。ときにけふの書付をちよつと【花】おふかた貳分九百三十六文とかいふもので。つりハそつちへをけといはせて。三分とるかげきよだろう【武】コレ

ていしゆのそれがきいてるに。そんなワるうがちをいふまい〳〵【ゑん】わつちハどふしやうね（トいふは此けいしやまへど宋江にほれて。たび〳〵ころび。大きにぶちこヽされた事あるゆへ。じつはハゆきたくないゆへ也）【花】（その事をしってるゆへわさと）こうハすぐにかゑらつし。こつちハどうで手間がとれる【林】かへるがいゝ【武】そんならどふでもかへ。（モシ）おとものしゆうおたちだよ【ゑん】それでも土手までまいりやしやう【武】わたくしもおゝくり申ませう【林】よしな〳〵。けつくわるしだ【ゑん】わりいかね【女ども大ぜい】ごきけんよう（林仲花和尚ハ。土手へあがり。まつちや〳〵とよべとも。風の吹まわしワるく。いつかふきこへず。花おしやうハはながみを出し。やたてにて何か書て中間の持たる矢にむすびつけ。弓につかへて林仲にワたし）【花】せめてこんな時でも。此ごろの御けいこをやくにたてねば。持になりませぬ【林】こいつハ。さそくのあんじだ。わがゆんぜいをみせん。なむや八まん大ぼさつ（トよばわりまんげつのごとく引しぼつて。大さんばしのよしのうちをめあてに。をつびるてひやらどはたせば。つるをときびしく。たれ塲中を飛ゆきぬ）【花】ヤンヤ〳〵【林】これで矢文ならしやうことがねへ

第　二

まつちの山に残すことのはと。よみしハ。戸田茂睡の風流にして。こすへのりこむ。今戸ばしとうたひしハ。英一蝶が戯言也。爰に今戸橋のかたはらに。まつちやと云舟宿あり。むすこハひやうとくを張順と云て。水をよくおよぐ男也。或日大さんばしに舟をたでゝいたる折ふ

し。ふしぎや矢一筋來てさんはしのくひに立。ぬいてみるにむすびつけたるもの有。しやうやの流れでハないかとひらき見れハ。まつちや御もとへ。御ぞんじと書たるハ。たしかに花和尚が手跡なり。さてハ向嶋にしやれてゐると悟り。やがてちよきに棹さして。出れは。くわおしやうはやくもミつけ是はあにきありかた山。わたりに舟とハ此事と。岸よりひらりとのりうつり。林冲もともに舟こそりて。咄しながら大さんばしへつき。しゆうぎなどして立わかれ。和尚にあんないさせて。宋江が別荘のほとりにいたり。ひそかにそのすまひを見るに後にハ待乳山屏風をたてたることく。前にハすミ田川三ッぶとんをしきたるにひとしく。見越しの松ハ。青龍の雲に入るごとく。みかけのつくはび石ハ。白虎のふしたるに似て。庭の植込。ざしきの物すき。風流をつくしたるこのミに。林冲心中のかんじ。さすがの通士かなとかんげきたへざりき。花和尚ハ先に入て案内を乞ふに。どなたへと。うるわしきこゑして立出るハ。廿一二と見へてうつくしく。それしやにちかひない風俗（此ふじんもとハ深川仲丁にてミな松といふ。名とりなりしが。今ハ宋江がめかけと成て。おさんといゝ。またかい高く。よきふうゆへ。人も一丈青とあだなしけり）花おしやう。今日は。はじめてのおかたを同道いたした。旦那ハいぬか。だんな〳〵とわめけば。一丈青ハおくへ入て。宋江にかくとつげける。林冲又ざしきの上を見るにはま丁の先生が筆にて通氣堂と云。三字を書たる額をかけたり。これを見て居るうち。をくよりせき

ばらひ二ッ三ッして。宋江とおぼしく立いづるを見るに。志氣堂々威風凛々。として。いかにも一個の豪傑と見へける（此そう江といふハ。おくら前へんのうとくなり米屋山東屋及二郎といふものなろかきしやうよハきをたすけつよきをじく大丈夫。ことに風流をこのミ家ぎやうのうるさきをいとひまだミそじ一文字をすきさるゝかき身にて身代をへはんじやうの盧俊義にまかせこのおふさんばしにひきこミける）たがいに一禮おはれバ。花おしやう林沖が事をくわしくはなし。引合すれば。宋江もよろこび。かね〴〵柴進のはなしでハたび〴〵。御高名をきゝおよびましたといへば。〽林沖も足下の大めいハ雷の耳ニとゞろくかごとく。通徳をつね〴〵したいましたが。今まで御ゑんなくして玉顔をはいせず。今日の幸ひ雀躍のいたり。何をもつてこれにあたらんと。たかひニそこいなきあいさつ。それよりいろ〳〵浮世はなしになり。酒肴しゆ〴〵もてなしあつて。花和尚すばいを干して。大に醉ふ折ふし。おもてしきりにされがしく（宋江がぞうりとりの李逵助むかふはちまき大はだぬきて。虎鰒をうり来りし商人にむかひ。ちやるめらのやうなこゑを出して）なんだ此さい六め。こんなつくさつた肴を持つてうしやアかつて。ねのつけやうか安ィの高ィの。すのこんにやくのと。コレへわりやア。大さんばしの李逵助さまを見そくなつたか。はなしのやうなくそがあきれるわへ（トのゝしれバ。肴うりもこらへかねて）おのしやア。でへぶセまへ大道へたいへいをならべるが。てへげへしれたもんだわりやァふぐをかつたことがねへか。飛たぼんくらなさるじやァねへか（トてんびんぼうをかたげてゆきにかゝる。李逵助は。たんきものゝうへにゝ深く酒にゑひたりければ。たちまちいかりにしんとうにをこり。そばにわりかけてありし。ツのまきわりを両の手に持て。はんだいをぶちこわし。とらふぐをのこらずけちらかし。それより大けんくわになる所へ。呉用ハしやう穴のバつとう。入雲法印公孫勝がところよりかへりがけ。此ていをミつけ。李逵介をとゞめて。肴うり

をなだめ。うちちらしたるとらふぐとはんだいの代をつくのいで。いろ〳〵だまし。やう〳〵かへしける。此吳用といふハ。くわんたんのおく山へ出たるからしやくしなりしが。おかしきおやぢゆへ。宋江がきに入。今は此べつそうに同居してせわになる。宋江は吳用がかへりしを見て ヲヽいんきよ。いゝ所へかへつた。今よびにやる所だ又李逵めがさわぎました。あのやらうめも。わるい酒でこまる。どふりで。でへぶそうぞうしかつた。コレあなたハ。林沖さまといふおかただ。おちかづきにならつセへ。コレハやうお出でござります。わたくしハわがまへものでござります。コレおしやう。足下のこゑハ。おもてまできこゑる。高イてうしだ トいへば花和尚 吳用さんこの林沖さまがおまへにひとつ書てもろう狂言が有とさ。ハテノふねいに狂言を書とハ。林沖さまどふいふおせかいでござります。アイそのせかいと云ハ。こふいふわけさ。わたしハ玉屋の玉獅子が所へなじんでゆきやすが。あいつも小手があるからおもしろをかしくしてゐるうち。このころきけバ。神田へんに。鞠のしなんしてゐる。高休とやらいふやつの弟。衙内とやらいふはかないやらうと。色事をしてゐるさうさ。こゐつがくびをきつて。此うへわたしがいろ事になつてミせねバ。友だちへもたゝねへといふものさ。吳用きいて 夫にハいゝ新ッ手がござりやしやう。その高休と云ハ。此宋江さんもさやあてさ。弟の衙内とやらも人のわるいやつで。玉獅子を書てひくといふ事ハきゝやした。はかりことハミつなるをもつてよしとす。爰はあまりはしちか。くはしいわけハ。あの二かいで。ミナ〳〵それがよからう。マツおさきへしからハこふ

第三

さとハ。ふづきのところとて。すけん地廻り。くんじゆして。やきもちかしに。やきだんご。枝まめ。すいくわ。あめをこし。土手につらなる。やたいミせ。こちらハ。ならぶよしずぢや屋。をく山へ出る土弓場の。花紫かむすめ。お弓とて。人あいそうも吉原を。見やう見まねの小娘が。もへそびれたる茶の下を。ふくも來らんあいきやうもの。折からいそぐ六まいがた。こゝじやゝゝと夕まぐれ。よしづのかげにかごおろし。ナントぼうぐミや。ゑらいくわんめの旦那じやナア。モシだん那いつもの茶屋でござります。ハイおはきもの。ヲヽおもたましをとつたほどあつて。いつもよりはやかつたと。たれをしあけて。立出れハ大人國のへやがしらも。かくやとおもふ。鬼若衆。くろちりめんの夏羽折。ゑちごのきゝやうの大じまに。銀のくさりの提たばこ入。どうがねづくりの大小ハ。さすが今での關とりかぶ。久紋龍進吉と云へねどしれたかつぶく也。ア、身をちゞめて居たら。けんぺきがはつてきたと。茶やがしやうぎにこしうちかけ。お弓ぼう一ッはるくりやれと。こくぶのたばこくゆらせて。はたく火入も今戸やき。かわらのけぶりともろともに。鼻のくるハを立のぼる。むかふへ來る人から出たちハ。大さん

ばしの宋江。中の町松屋のていしゆ。朱貴と云男跡につきそひ。モシ宋江さま。梁山さまの所へハなぜおいでなされませぬ。されバさ。あの長字屋の梁山がところへハ。をらが方からしをくりをする屋しきのるすいがゆくから。それでゆかぬのだ。女郎にそれをうちあけてハ。そんならいろであをふとか。ふるい手を出してうたせるから。そこで高休かゆくのをせくふりできれる心さ。こんやもミつからぬやうに。したいものだと。とちうのはなしを久紋龍ハ早くもミつけ。コレハ宋江さまよい所で。ヲヽ鬪取がなんと思つて。ハイ今日ハ赤坂の御前角力から。こつちへなぐれました。シテ此ぢうはなしの。まわしハ出來たか。イヤまだとりかゝりませぬ。此秋角力の間にあハせたふござります。その注文ハどふ云ものだ。アイ地を猩々緋にして。龍の丸を九ツ金糸でぬハせるつもりで。この田町のぬいはくや。侯健にはなしてをきました。ム、其入用はおれがせうちだ。それはありかたふござります。コレ此朱貴か所でのむつもりだサア一所にゆかぬか。おともをいたしませう。コレ御らうじませ。まんざらでもねへ。命とり娘おセわと夕がらす。アレ又そんなあほうぐち。ねぐらもとめに連て。とぶ日本堤を三人ハ。大門さして。いそぎゆく。〽あるつけ合に去ルものハうとく。とうろの紅細工すぎと。いふ句もむべなる哉今ハ玉ぎくに手向の心もうセて。たゞ客の氣をつり上ルしかけ。美人をさかさにい

たしたるびいどろさいくあれハ。女郎のうそハすいてミへる。されざいくあり。からくりとうろ。軒どうろ。ワれおとらじと。美をつくしたるハ。ミなきやくの身よりあこがれ出し。かね玉とミゆる。はんじやう。宋江ハ。呂のづきんに負かくし。久紋龍をともない。朱貴が二かいへあからんとせしを。長字屋の梁山ハ早くもミつけ。しんぞう。かぶろ。ぱら／＼と。來て左右にとりつけバ。さすがの宋江も戀といふかぎなわに。かけとめられて。心よハくもてうどやへ。ひきずられゆきけれバ。久紋龍も。あとにつきそひせんかたなく。梁山が座しきにおちつきけり 此うちせき上のやうす。もめのある坐しきゆへ。べつしておもむきあれども。たび／＼しやれ本にあるかたなれバこゝにりやくす。かくてとこおさまり。ひけすぎて。二かいもしんとしめやかに宋江とこのうちには【梁山】久紋龍さんがぼうおとりをしなんすと。じしんかいるやうざんすね【宋江】となりざしきハとこのきやくだ【梁】ひきやく屋の戴宋さんと。神明まへの歴火さんと。そしてとぎ屋の楊志さんとやらさ【宋】楊志といふのハ。負にあをひあざのある男か【梁】そふざんす。おまへちかづきかへ【宋】インヤあのてやいハ。おらが内にゐる呉用がちかづきだ【梁】呉用さんとやらいゝなんすハ。おいさんだね。いつそもの知りでりかうな人だとねへ【宋】よく知てゐるの【梁】ワたしが此さとへこぬまへ。つとめていた屋敷へ晁蓋さんとやらいふ人と。一所にうすいや人のなつめをうりにきなんして。ミんなをだましなんした事がござんした【宋】まへどそんなうれ

さをきいた【梁】コレねなんすかへ。いゝむしざんす。モシこんやハなんにも申しんせんにへ。なぜそのやうにきづよくしてくんなんす。こんやもミつけすハほかへお出なんすでござんしやう。【宋】高休(かうきう)がワけのわからぬうちハ【梁】こられなんセんかへ。ばからしいこんやも高休(かうきう)づらが來ておりんすが。もうかまハぬきでござんす。それだによつて。なんだいにできぬを知(し)つてねどうぐをたのんでやりんした【宋】それもどふ云(いふ)かげきよだか。あじにじやりをひくからくりだ。【梁】そんならどふあつても。うたがひなんすかへ。【宋】くどいわへ【梁】ちよつとこれをミなんし【宋】こりや血(ち)ぎしやう（をりふしとなりに謠かこゑで）哥〽三日月のそれと見るまにいるまのゝ。尾花(をばな)がまねきとめたやら。まんざらそふじやあるまいけれど。あのむらくもがうらミじやへ【梁】それこそふたごゝろないといふワたしが心中(しんぢう)【宋】どふも今ハうけとられぬ（トしめつけたところへ久紋(きうもん)れう來りびやうぶのそとより）【久紋】ぎりとなさけをひらかなで【梁】かけどもよめぬむねのうち【宋】うちあけられぬ此きせう。何かのワけのすむまでハ【久】此進吉(しんきち)があづかりやんした【茶や男】ヘイおむかいでござります

第　四

こゝに神田へんに。高休といふものあり。もとハたいこもちなりしが。じやちふかきものにてよく人にとりいり。ことに鞠をよくけたるゆへ。だん〴〵貴人にまじハり。いまハまりのしなんして。所〻の大名方よりふちをとり。そふおふにくらしけるが。ふと長宇屋の梁山になじんでから。かれがほれている宋江をにくみ。何とぞ宋江をつきださせんとたくミけるが。けふハかやば丁やくしのゑん日なればとて。弟の衙内をつれて。さんけいのかへりかけ。四日市の水ちやにやすらいけるが。かたハらにてハ佐〻木順悦がむすこ李忠といふもの。いやいをぬいてくすりをうるべんぜつハ。水をながすがごとく長口上をのべ。牛若が五ぜうのはしのらんかんにのぼりしハ。まだな事と。あんどう。さんぼう。茶わんをつミ。高あしだをはいてのぼり。六尺あまりの大太刀をぬく。見ぶつハめじろのをしおうどくさきをあらそふ。その中にまぎれて。時遷小僧といふきんちやくきりの名人。うつかりひよんとミとれゐる。田舎さむらいのいんろうをぬすミ。そしらぬかほてゆきすぐるを。高休はひそかによびかけ。よしずの小かげにつれゆき。そのほうがつらつきたゞものでない。さいぜんのはたらきも。こゝから見てゐたゞそれについてちとたのミたい事がある。ナニワしをすりとしつて。たのミたいとおつしやるハ。ア、きこへた。なかまのやつらニコリヤ何かしごとをされなんしたの。入用の書付なら出

もしますが。金れでませぬぞへ。たのまんすならセんぎしてしんせましやう。イヤ〳〵そんなことじやない。おれがたのミたいといふわけれ。コレこふじやと。耳うちすれば。ム、そんならなんといわんす。あのセきとりのきうもんれうが。今白木にかいものしているから。出る所をあたつて。くわい中の紙入をしごとしてくれといわんすのか。コレひそかに〳〵。これはほうびの手附。ソレト一兩わたせば。おしいたゝき。セきとりでも。何どりでも。よこどりするがこつちのしやうばい。へ、さすこつちやごんせん。こゝにまつてござりませ。かならずぬかるな。がつてんでごんすと。時遷小僧は。ほうかふりして。日本ばしの方へゆく。あと見おくりて弟の衙内こゝろをひそめ。あにき今の狂言にれ。何ぞたくみがござるかといへば。高休うなづき。あるだんじやない。久紋龍がかミ入にれ。てうじやの梁山が宋江にやつた。きしやうのある事をゆふべかぎつけてきた。そのきしやうさへをれが手に入レバ。それをしやうこに。梁山がつらのかわをむき。ぎりがらめにしても。宋江をつきださセるか。又れたのまれたやぐをきりぬけるか。二ッ一ッきやうげんの山になるのれ。あのきしやう。ナントむまいか〳〵と兄弟さゝやき。時遷がおとづれをまちいける。かくて時遷れ。白木のまへをあちこちとうろつくうち。ほどなく久紋龍れまわしの地にセんと。猩々ひをかひ。何こゝろなく白木をたち出る。じ

ぜん小ぞうは。跡よりつけてきたり。日ごろのしゆれんはこゝぞと行ちがひにゆだんを見すまし。くわいちうへ手をいれて。かミ入を引出すところを。久紋龍はその手をしつかととらへ。どろぼうめがといひさまに。よこつらをはりたをせば。何かはもつてたまるべき。大力のせきとりに。うたれて小ぞうは青くなつて。たちまち地にたをれける。久紋龍は見むきもせず。ゆふ〳〵とゆきすぐれば。町内よりは人〳〵出て。時遷をおこし。きつけなそのませけるが。やう〳〵きがつきおきあがり。大ぜいたちより。ひやうぎして。これはきんちやくきりのかしらなりといひければミな〳〵いごのミセしめのためと。二十棒をうつて。をひはなしける。あはれなるかなじせんは。皮やふれ肉さけて。血滾々と流れ。命から〳〵にげうせける。

第五

神は人の敬によつて。ゐをますとかや。このごろ碑文谷仁王尊はやり給ひて。七日だんじき。はだかまいり。ねこもしやくしも。まいらざるはなく。モシおきゝなされ。うまれついたせむしがなをり。てんぼうに手がはへ。ヤレこしぬけの目があいた。ヤレつんぼがものをいひますのと。をにおをつけし。まちがひだらけも。もとは神をたつとむ。正じきのこゝろよりいひ出

す。うれきなれば。おのづから神のこゝろにもかなひ。きん所の百セうもかうさくをやめて。
酒屋水茶屋。あるひはならちやミセ。などしておもひがけなき。錢もふけするも。ありがたき
利生なるぞかし。こゝにきセんくんじゆして。さんけいするたんぼ道のかたはらに。むしろ敷
てすわりたる。そでごひやぶれあミがさに。かほかくし。何か書つけを前にをひて。ゆきゝの
人に手のうちをこへば。さんけいの人立とまり。ナンジャわたくしぎおつとにはなれ。そのう
へセがれ。むすめ。あいはて候て。なんしゆう仕候御通りの御かたさま。御じひねかい上奉り
候。さて〳〵きのどくな事じや。ソレ四文ぜにじやか。つりもとられまいと。なげてゆきすぐる
も有。ア、人の身のうへではない。こちらとてもいんゑんがわるけれバ。あの通りじやと。わ
が身のうへはさとれどもきつうしわい人とミへて。のぞひたはかりでゆくもあり。人のとぎれ
をうかゞひて。一人のわかき男。かのそでごひをこかげへともない。コレくわしいわけはこゝ
にかいておいた。此みをとゞけてくりやれ。コレハそちがほねおりしろじやと。南りやう一ま
いわたセバ。うなづいてくわいちうし。このへんじはのちにとつてしんぜましよ。そんならた
のむぞやとたちわかるれバ。あと見をくり。ア、はなの下の長イわろでは有わい。したがまづ
なん一はしめこんだ。人どをりはあれど。ゼにかさののぼらぬけたいのわるい。此さかりバ。

こんな事でもふづくらにや。一ばいざけものまれぬ。まだ〳〵あいわろたかについてハ金になるしごとがある。コリヤあかぞうも仲ぞうもできそふだわへと。あミがさとればしらがあたまをミだしたる。どんぐりまなこのあくづらばゞア。ひとくせありとミへにける。むかふへきかゝる女房ハいなかに。につかぬぼつとりもの。もめんぬのこのよごれしハ。やぶれかゝりしミそこしに。ほたる入たるごとくなり。かのばゞハそれと見るより。ヲヽよい所へおはんさま。いまこひ人がこられてな。此みをとゞけてくれと。いふていなれた。あのお人もこのむらでハ。一ばんのしんしやう。せうばいはさぐすりや。あの人のにようぼうになれバ。おまへもしやわせじや。今の御ていしゆハ。せいはひくし。いろハくろし。よふおまへそふていらるゝ事じや。それにひきかへ。あのお人男ハよし。年ハわかし。あのはなつきでハ。どこやらもそふおふらしいぞへサイノウきさまのとりもちで。ふとしたいろ事。しんじつなことといふてぐたさるゆへ。わしやいとしうなつてきて。道にハかけた事なれど。このごろハあのうちの。すこたんが貞ミるもいやじやわい。ナしたがあのお人のにようぼうに。なりたいにもりゑんするてだてハなし。コレ〳〵りゑんのなんのと。そんな手おもひ事でゆくものじやない。あのぬく太郎をうしなふにハ。手ミしかなこのどくやく。ナがつてんか。とふからわしがしこんでおきまし

た。おりよさいないばゞじやと。おもハんセとワたセバ。にようぼうハくわいちうし。あたりミまハしうなづいて。左右へワかれゆきにける。こゝに花和尚(くはおしやう)ハ。けふひもんやへさんけいがてら。むかふじま。むさしや武松(ぶしやう)が兄(あに)の武太郎(ぶたらう)。このきんしよの村(むら)に。すこしの田地(でんち)をもとめて。ひきこみ。にようぼうをも持しときゝ。たづねやらんと心ざして。此(この)ところのミづ茶屋(ちやや)にやすミ。よしすのうちより。さきほどよりのやうすをとつくりと見て。扨(さて)〳〵おそろしい世(よ)の中(なか)と。舌(した)をふるつて立出(たちいで)しが。ほどなく武太郎(ぶたらう)が宅(たく)へたつねあたり。あんないをこへば。どなたでござりますと。うちより出しにようぼうハ。たしかにさいぜんそてごひと。あくじをさゝやきし女ゆへ。びつくりセしがさあらぬていにて。うちに入り。武太郎(ぶたらう)にもあい。かのにようぼうにもちかづきになり。むかしなじミのはなしも多(おほ)く。弟(おとゝ)の武松(ぶしやう)がうわさなども出(いで)て。かれこれとするうち。武太郎ハはなししかけてかつ手へたち。何かにようぼうとさゝやきしが。酒(さけ)かいにやりしと見へて。はや女房(にようぼう)ハミへざれバ花和尚(くはおしやう)ハ武太(ぶた)郎がそばへちかくより。とちうにてきゝし。にようぼうがあくじを。くはしくつげければ。武太郎ハびつくりし。さればこそこのごろうち。おもひあたりし事さま〳〵有(あり)。そのそでごいの。はゞァといふは。もとくらまへに。王婆屋(おうはや)といひし。ミづ茶やのばゞなりしが。だん〳〵をちぶれて袖(そで)ごひとなり。そのわうばや

と。いゝしかめいより。くらまへの王婆〳〵と。あだ名せしが。いつしかいひあやまりて。いまはくらまへのおばァ〳〵とよばれ。青ちやばゝァに。色あげしたる。わるものときゝしにちかはず。そのやうなあくじをたくみおりしか。女房めも大悪人。したが貴僧の耳に入しは。わがうんめいのつきざる所。一ッには仁王の御利益。アヽありがたやとふしおがむ。ところへにようぼうは事あらわれしはゆめにもしらず。酒かつてもどりければ。武太郎はしかたなくあらんと。いかりをおさめ。さあらぬていにて。たゞ花和尚をもてなしければ。和尚も十ぶんにゑひ。時うつれば。いとまごひしてたち出ける。かくて花和尚は仁王へさんけいせんと。道ゆくほどにだん〳〵ゑひ出て。めもくらみ。しどろもどろのちどり足にて。やう〳〵ゆきつき。山門にあんちしたる。金剛神のすがたを見て。大きにいかり。おのれ仁王め。とつこを持てふりあげしは。この花和尚をくらはすきか。ゆふべもきんじよの。ひつぺがしで。そのとつこにはりこんだ。けたいのわるいものにらめるつら。なんじやと。もつたる鐵扇にて。仁王のかほをうちつくれば。ソレあばれものとよばわり。大せい出ておつとりまく。かゝる折ふし両國やなぎばしの舟宿院小二といふもの。さんけいせんとかゝりしが。ちかづき花和尚がらんすいしての。らうぜきゆへ。人〳〵にわびことしてやう〳〵だましてつれかへりける

第　六

去程に高休は。時遷小僧がしそんじたる事をきゝ大きにちからを落し。此うへは梁山にたのまれし、夜具をこしらへやらねバ。貞がたゝぬとかねて、心やすき醫者疲皮病身といふものと、夜具をとゝのふ。はかりことをしめし何はせ。病身は高休がために、鯛丸屋といふごふくやへ行て。夜具にすべき。錦いたじめの、ちりめん、とうを、これ〲と見きわめ。それは小川町へんのいしや安道全といふもののじやが代物はやどもとにて拂ひ。つかはすべきあいだ。それと一所にこの品〲をもたせやるへしと、うり手にいひきかせて、そのしろものをもたせたる。男を同道しほり江丁へんのさかやの二かいをかり。酒をたさせて、すこんをほし、又てうしをかへさせて。かの男にもすゝめければ。このにかつき。何心なく茶わんに二三ばいのミしに。何かはもつてたまるへき。二度めのてうしへひそかに蒙汗藥をいれたれば。どく五ぞうにしミて。たちまちよだれをながし。たをれけるおりから。石丁のかねも入相なれば。ミセのいそがしきにまぎれ、かのふろしき包をかゝへ。二かいのうらはしごをおりて、ろじつたひににげ出。高休か宅をさしていそぎけるに。今川橋のへんにて。高休と弟の衙内病身がけふの首尾をあんじて來りしに。行あいけれ

ば。人なき所へひきまわし。かの品を見すれば。高休は天をはいし。地をはいし。〔高休〕ヤ、まことに貴公のさじさきで。此品もわが手に入るからは。宋江にけじめじるを。くらはせるはいまの間。おとゝようこべ〔衙内〕此うへはわしが色をしている。玉屋のたまじゞがきやく。林冲さへ。くびをきれば。心かゝりは何もなし。〔病身〕その林冲といふは。かの屋敷の用人のむすこ。鶴尾戸忠右衛門が事じやこさらぬか。〔高〕ソレ〳〵〔病〕ム、それにも一ッのりやうけいあり。あの粟まんぢうに毒をいれておりにこしらへ。聖手書蕭讓といふにセ筆の名人に。玉獅子がみをかゝせ。かれか方よりのつかい物といつはり〔衙〕ソノ粟まんぢうを。あいつにくはせ〔病〕アノ玉獅子が肉まんぢうは。おまへがしやうくわん。〔高〕コリヤまんざらでもあるめへわへ。 ト三人あくじをしくむ所へ。さいぜんのにかつぎしびれぐすりのどくをのんでようミがへり。あとをしたふておつかけ来り思ひがけなきうしろな 〔にかつぎ〕ごふくをかたつたどつほうめら。そこうごくな。 トとびかゝる高休すかさずウント。一トあてあてれば。にかつぎはしりもちへつたり。 〔五ッのひやうし木〕チヨン 三人かほ見合て。ホツトためいき チヨン〳〵〳〵

此末は中編下編にのべをい〳〵あらはし御覧ニ入可申候

大尾

粋語傳中編　全一册

仝　下編　仝

妄作談義　仝

各來春
出板仕
御覽ニ
入申候

天明九年己酉孟春

麹町かい坂

版元　三崎屋清吉

中洲之華美

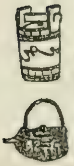
中洲之華美自叙

雁聞て亦一寐入する夜哉。 夫契情ハ厂金なり夫を如何といふに。 住馴し北の國をさつて。 こんな三ツ股に來る其揚詰の契情も。 ちよつと假宅厂のみいづれか里にゐにし有り。 冬も中洲の繁榮を。 岡目にそれと三ツ股や。 通に外飾有。 壁に耳有。 德利の口と倶にふりさげ見る。 二階檻。 日〻河邊見水流と。 紫式部か俤に。 髣髴たる名取草の君たちを。 見てはいかな夷艸も腰をぬかし。 氣の利た仙人も。 雲間を踏はずして。 天上より落る美人艸の全盛には仙臺河岸の矢來よりもしけき客の。 あしきも美なるも一人として茶引艸の局も無し。 されバ語に曰里客仁爲

美擇んて客を取らずんば焉利を得んと故に手もなく。假里擇中洲の華美と題す。讀者是を嘲て糞土の如しとさゝなすとも。予れ河童の屁ともおもれず唯世間を水茎にまかす而已

申の
中呂

有難山人書于鶯鳥堂



目録

第一　當世流行
第貳　並木の一華
第參　小通の登樓
第四　怱行の譫言
第五　見出の閨亂
第六　二尊の談合
第七　高尾の解脱

假里擇

曾子曰十目所視十指不揃倡妓も糸竹の道をたしむといへとも。一節切ハ禁物なるべくされハいへ縁の切れるとしりながら彫をなす女郎あり。一の糸の切れてうれしがる。妓者も。人の心ハ面のごとく浮氣な風に散りやすき花の雲鐘ハ上野か淺草の。くわんおんの額ハ嵩谷筆をふるひ。弓弦をふるふ奥山の大弓ハ。垜を越して無科榎を射る。見物の君子ハわらひの種を枕ひやうしにあらねどもアレハどつこい〱。コウレハ三介まつたり〱と團扇てはたらく獅子の足ハ硯ッ貝をめしつぶで付ヶ二まい屏風を小楯に取船頭にあらねども乘合ハかまひませぬサァ過る門おはんなさいと駄菓子を取らする閻箱ハ。お花獨樂を厨子入になしたるごとく。辯舌ハ箱の中と倶に廻り。竪板に水をなかせハにごり酒のかんばんハ。椎の實筆をもつて釘ハ折の筆勢をあらわし。住よしの名物玉水鳥の籠ハ芝居の釼菱のごとし。木綿に丈なしあれハ。未練なしといふ餅有り。玉子まんぢうの厚味には。お市が毛糯頭もはるか劣り神園孝大事の唄流行して。親孝行の次第を賣あるけバ。岡崎町より無二の忠臣出て　御免の板行とよびあるく。是ぞ世人の鏡

草くもゝぬ　御代のしるし也かゝる例ハ　江都におゐて。いまだ聞キんせんと里訛の天神結びに。地ものゝ鳴田くづしハいかなる醜女も意氣に見ゆ。風流に見ゆれバ磊川春日町にもあらバこそ。御藏前の鹿ハ踏分べき紅葉もなく御休ハなさいましといふ聲きく時ハ。茶屋のかせぎとしられたりツリヤ出た又出た。龜の甲にハ似もやらぬ万年神酒の口ハ伴頭の目を悞ばしむ大極上ゝ油へらす。徳用向のかわらけハ諏訪町にかくれなく。千句合の方灯の油費と見へて耗にもならす。大きなこゑの講釋師ハ。坐料に不及してかならず外面に人立多く。遠目にけんくわの見物かと思ふ新道の坐敷淨るり評ばんよく大入をとれバ。横町の正助にけおされ湯島の天神と。芝神明の御地内におきまして人形戯場興行なせハ。中の芝居ニて能をはじめ。又子供きやうげんにておちをとる樂屋新道の竹桝榮五郎が力もちハ小人嶋の見せものを以て持にす。肥前ハ大仕掛にて度〻あたりをとりかぶと。夫にハあらぬ編笠も人目の關の大門や。中の町にときならぬ藤棚そらをとぢ。紫白英をたれてなゝめならず。江戸紫のいろたちハ。ひとつ所へ夜の俄。日限をきらねとも十日せずに仕舞ふ遊人爰にあつまり。贅を盡し奢をきハむ五歩に一兩十歩に。一角を擲ども。視レ金如土塊秦の宮室にひとしき青樓も。束の間に焦土となんぬ。可レ憐近く年ゝ數を考るに辰の四月燬てより。このかたわづかに四年をすぎす。是俄に不

時な事のあらん前表也さるほどに〳〵。寺々のかね月落烏啼て霜降月。鞴祭の日もくれ〳〵。翌□たり朝まだきソヽヤ鍛冶屋ぞといふ聲に。どつと白歯もおいらんも蜜柑のごく散亂なし。いなせとむないきぬ〳〵に。吸付たばこの火におわれ。歸る客より眞ッ崎へ逃て今戸かかふならふ。橋場の寮や權那寺。和尚三谷をたのミてしばらくやどりを覓ける

○並木の一華

易に曰。同聲相應じ。同氣相求。目のよるところへ玉かよれば。土手八町のゑにしによつて土手側の邊りへ青樓現じ。葭簀張りの寶年餅も皆中の町の茶屋となる。見歸柳の糸にひかれて。柳橋のたもとへ扇や假に居にけり。角町の見番いづくにやあるらん。藝者もしばらく浮世をのがれ。むなしく手をこまぬいて假り宅の御面を待つ。夫浪花にて並木といへば。作者に名高く。東都にて並木と問へば。淺草にかくれなし。かくれ渚に身をよする。海士の子なれば宿も定めず。されば古今集にも。世の中は何かつねなるあすか川。きのふまでは石の上。古道具鄽。料理茶屋。御客に爽大こくを。造り花屋に南禪寺。豆腐の人も昵近に。なるかならぬか見通しの。平澤うらへ引ッこめば。萱竹にあらねども春慶筆を投て。ちつと蔦蘿に醤油の付や

き。木履の下駄の歯をならす恖のわる口ハ格子先に氷り付てはなれず。大佛もちに近康ハ。見世を二ッにわり床の挾敷居の唐帋ハ。奥山の茶屋のごとし。二階へかけ上る客は。あは雪のはしごよりもせわしく三たり四たり廻しをとりし倡女ハまくらをもつて二階中をくる〳〵とまハる事。切賣の色事にひとし。常にあづからぬ腰のものも内證の戸棚へはいれバ。初會の御盃も大晦日の婚禮のごとく。はやく若いものがあづかれバ、ざつと御床も角田川の名酒あきなふ所とハなりけるもいつしかきのふの淵ぞけふハ瀬となる。ふしぎや今まで有りつる女。とり〳〵假粧の容貌を見し樓舩をうかめて大河を濟り。ういた並木を引拂て三ッ股にいたる。千變万化有爲轉宅の世なりけり

小通の登樓

酒興に日緩〻たる女郎ハ。在中州窈窕たる倡女ハ兩國に美徒あり見番いかめしく藝者役所とかいつけし方燈を出し。袖の梅平次そば。山屋豆腐にまご付けども。蛇の目すしハ木偶人町に定見世の屋たい。黄昏より。出。甘露梅ハ長谷川町に名高く。出來合のすゞり蓋ハキのじ屋をこち付。たそやあんどうハ中番に有。田畝の蛙もまとりすむ鵜てふものとかわり。罾駕より罾網

小之洲華美

九

の上ヶたりおろしたり。なすを見てハ。野暮な客をあそぶに的中す。沖のくらひに白魚の篝ハ花火の平均かとあやまたる漁舟の火影ハ寒ふして浪を焼出されの娼婦紋日物日のせわもなく。付ヶとゞけをはしよれバ。きいたふうの客ハかすりへまハり。がまんて直す氣づかひなければむかひのかゝるあんじもなしと。ちりめんの頭巾のうへに。おやぢ橋でかつた手巾をほうかふりになし。羽おりハ茶ミぢんのゆふきつむぎにつやなしの上田の小袖を着し黒とんすの帯にばた〳〵するうら付をはき連ハ黒のりうもんのわた入はおりに。あられけんぼうの。ちりめんの小袖。鼠しゆすの帯にお太刀をきめ。暮がたよりいつきせつきと【大橋】時にこつちらを通ッていかふ。河岸通りを行と。ふじ屋の菊蔵が見付るとめんだうだ高麗やのお色がゐねへから。いゝと思つたら。菊が越して來て。あやまりす。【永代】おれも船宿の藤本の藤が所へ行た何にもかりハねへけれとも又よらねへかならねへ【大】娘のおもとには氣が有るす【永】りきんだ日附の娘さ【大】聟かは入ッたかの【永】たしかまだゞ【大】どうせふ引手を連やふか【永】よしにしたがいゝあいらァむかふから一人まいで五十文七十貮文出す所もごせへすその引手を取るからいゝが連ていつた斗でぢきに歸るもの。おもしろくもねへ。何ンでも引手なしのッ、かけ上りさ【大】夫もよかろふ【小女】(ふらなとぼして)もしだんなさんどつちへご御出なせや

し【大】イヤどこへもいかねへ（といふ所へ引手若者）【引手】だんなとつちへそいらッしやへまし。よい子供衆の所へおつれ申ませふ。【小女】コゥさつきからわたしが付てゐやす【引】ハテいゝよしつているよ（永代ハきよろ〳〵とそこらをミるゆへ）何ンぞおはなし合でもござりますならおいらんをおよび申て上ませふ【永】インニヤよりやァしねへョ【引】とんだ事をおつしやりやす。お遊なさるおかたハしれます【永】（小聲にて）なんとあいつを連やふか。【大】ゥヽよかろふあんまりこまねへ所がいゝぜへ【引】ハイ角山口むさしやなどハ見世を張ッておりますご覧なさいまし【大】コゥ今あつちへいつたけいしやァだれだ【小女】筆次さんでこぜへすよ【大】見ちげへた【永】いつそ大文字やにしよふか【引】ハイ夫がよろしうござりませふ（と引手の男先に立大文字やへはいり小二へにておふたりおつれ申て参りやしたと若者にいふ）（雨通ウずつと上かる若いものハおわきさしをといふお小づかゝござりませんと断る。雨通ハ二かいの上り口にまご付くこつちらでござりますと若ひものかあないにつれ二階へ上り坐につけべたはこぼんと盃臺を出しおんどうとしよくたい取かへて行）【大】爰へハ久しぶりで來た去年の燈籠に來たまんまだ。その時ハおれがいさをしを買（か）ふの連が爰の一ト金となしミだから。一金か坐敷へずい上りのこれげいしやをよびのあたまからどん〳〵とさわぎた所が欄間（らんま）を見たら蝶と千鳥が彫（ほつ）てごぜへす。そこで一首よミやした【永】なんと〳〵【大】蝶千鳥ほりし坐敷のおいらんま曾我にゆかりのひとへなるらん【永】おもしろい曾我へゆかりじやァ物日が思ひやられる（と噺の所へ出來るけいせいハ花住に人寄といふ雨君かりたくの事なれハさのミにけんしきもなく夫より盃例の通り相済）【永】ナント

げいしやをよびにやろふじやァねへか【大】夫が能かろふ。ぐつとにぎやかに一挺鼓の霍次がよかろふ。呼ひにやつてくりや【引】かしこまりましてと（いひながら此所にて引手ハすぐにかへる）【大】是から膳を出すたろふがモゥ何にもくへねへぜ。今八ッふじでしこたまのんで大キにめへてへ常燈明だ。（廻し禿には少シ大きけれど）【菊次】ぬしやァとんだ酔ッてゐさつしやるよ【大】アイよつたのさおらァ。ずつとけへろふといふのを連がよつたから。そこでおれもよつたのさ（ミな〳〵わらふ）此所へ妓者の霍次雛次來る。まづ御定リの通リ客へあいさつをなし。夫ゟ女郎衆へもあいさつあいしらい。もてなしにうれに。まんべんなく口をきゝながら霍次ハ箱より鼓を出し。しらべをしめなをしなどしたくにかゝる。雛次ハ三絃のてうしを合す【永】きのふ淺草で見かけたがどこへいき山た【霍】ちつと用事がござりまして田町まで參リました【永】おいらハすぐに馬道へよりの。茗荷屋のかゝァがさる子細有ておいねといつて出やす。夫をよんだがとんだはやるよ【大】馬道で思ひ出したハへ。爰の中通に四季庵のほうへよつた方さ。小まつやお高といふ假宅ハ實ハ馬道の江川屋丹次といふ子供屋でごぜへす。今度のやけから思ひつきて。よしハらへ遣ひ物をして小まつ屋の出見世ふんになつて。此中通りへ越して來たて。かゝえの小供ハいゝ子が二三人有ッたが今見れバ五六人見へやす。此るいがいくらも有つて内中が越して來たが丹次ばかり馬道に殘

ッて何ンにもせずにいるのさ。何ンとかいふ事まで知ッて居らァす。きつひ穴知りだろふ【雛】穴知り男之介とハ。あなたの事でござりませふ【大】ゥ、有りかてへ〳〵（是より雀次雛次ハ門寺の花からたらうなひ出しはじめハちりからに米かしの入にて山田の畔、か〻しよのチヤン）【永】ヤンヤ〳〵二丁鞁しやァねへ二挺雀次だ【大】壹人姉さまの雀次が上手ゥ【菊】とんだよふさんすねへ【大】時に三升が書た御田でもうならふか【雛】ちつとおかたんなせへまし（と三絃をとる）【永】イヤ御田より花咲春といふ浄るりを見たがよく出來ました。夫に赤城の文子が手を付たといふ事ッた何ンでもはじめか三千とせと云出しだ【大】ナニ出しだそんなら鰹ぶしだな【永】インニヤ河東ぶしだ【雀】人哥さんの御聲じやァ。義太夫がよふござりますよ。【人】ナニとんだことをいひなんすよ【大】おゐらんあげやせふ（とさす）【住】ちつとあげ申んせふ。【大】此盃を押へるとハおいらん〳〵どふ新造のふ【住】（わらひながら）わたくしハ此間から酒はどくだてゝざんすものゥ【大】何でも此酒をのむと。のどをッ、切るやふだ。悪酒たれがためにか雄なる（とのむ）廓のげいしやも去年の暮から正月までハ。からだに持あつかつたろふやう〳〵と此正月の十八日に。爰も兩國も假宅の御面ねがひがさがつて。たれこめしすだれを引ッたくりの。あざやかに見世を。はる十九日の日から藝者がうゐや〳〵と出て來て漸く樓上に三絃の聲を發した。夫からはるか後に兩國とこつちと。兩方へ見番が出來たナントかふいふ事まで知

ッて居らァす。ァレ此向ふへかやは町の楽庵がこして來やした。楽が跡へハ七町が來ておりやすナントかふいふ事まで知ッていらァす（と口をきく内おくの方にて）【女郎】せんしせへ／＼（とむしやうによふ）【永】ァノ先生／＼とよぶハ何ンだ【大】ァリャァ仙子さんとよぶいさ。此内へハ常住來ておりやす仙子といふ。醫者ばうすさ何の事ハねへ嶋八やつこがばうずになつたといふ身で。よし原でも爰でも。二かい中をあるいてよくのむおしやうさ【永】てうど先生とよぶやふに聞へる子。【大】なか／＼【雛】大橋さん。又おあいをなすつて下されまし。【大】是さおれがとこへばかり盃をよこしてくれちやァうらみだ。もふのめん／＼。のめんのくわんけだ。【永】なんと此かし通りの水茶屋ハ。今年ハはやひじやァねへか。【大】大キに早ひのさ。いつも五月廿八日から。夜見世のはじまりだ所が今年ハ請負人かねがひて四月朔日から。はじまりやした。そこてミんながふんごんて。いひ合の杉丸太できれいにかし通りを。ずつと新規に建やしたナントかふいふ事迄しつていらァすと（いろ／＼口をきゝちらす所へ）【若者】（来り）ちとあつちらへ御出なされまし【大】どこだ【若】新二かいでござります【大】フヽァノ楊弓場か【雛】よく茶ばつかりおつしやりィす【大】ァイワたしやァ茶がすきさ。此中も三河島の別荘へ茶によばれて。すぐにふ動のうしろの温泉へは入ッたがとうもいへねへ夫から歸りに藤兵衛にあつての。五十間におりますから。

ちッといらつせへなどゝよんところなく。丁子屋であそんで來たが。中の町も半分の余出來たの。【雀】はやくあつちらへまいりたふござります。【大】此四月見世ひらきをしたのが七軒のあふミや。山口巴に井筒やまつや巴やなどハはやく出來た。山三玉屋も見世ひらきをしたの何ンだか江戸町ハ花ゞしひ。藤ハゑひ屋もよつぽと出來た。【永】コウ雛次やその酒をそこへ明けハならんぞ／＼イヤアなら團扇【大】此團扇の畫ハよく書た【永】たれだ【大】由美庄さ【永】あいつも仲町にいるじふんからしつているが。今ハ何所にゐるか【大】とうじそうろうの水すめらばといふ身で。らくなからださ。よく堺丁の近所に居やしたが此中小田原町で見かけた【永】何でもその盃ハあらためてよこしな【雛】ずいぶんあらためます。此御さかづきハ。あつちらへまいつてたべませふ【永】なるほど夫もよかろふ【若】さつとあつちらへ【雀】【雛】サア御出なさいまし〇わたしや傘のせうでさす氣じやけれどサイ／＼とさハぎにつれてぞ入りにける

悤行の譫言

明のからすと鐘つく坊さまと。かぢやの嘉介どんに舂米やの小介どんに。豆腐屋の藤介どん

と。トテコとなくとりやァにィくいのゥ。コゥレハかァわい男のやァ日をさァますのゥと。うたひながら來るものハいわねどしれた地廻りの【權】晝ミせをそゝるハ十ッ軒店へ雛を見に行く心もちだせ【八】うさァねへ【權】コゥ八ャこゝいらの屋敷じやァ。つがむなく白粉がいるだろふ。ナァ。【八】ナゼ【權】假ッ宅でとんだにぎやかだからァレミやそこらちうの窓からあねさんたちが。首はかゝり出してひかつているぜへ。今のう見たか【八】ァノ格子から顔を出した新ぞうが【權】ゥ、【八】がうてきにぬつたの白鳥の德利しやァねへか【權】うさァねへ【八】ゆふべ假宅へでもいけばよかつたよとんだとけへいつた【權】どこだおたびか【八】いんにや大橋へいつた【權】留よしか。山しなやか。【八】ナニわかたやへいつてナ。お山を買ッた【權】あいつハおいねへやつだぜへ【八】ゥしつてるよ何んでも安くされめへと思つてナごうぎに氣ぼねをおつてな。てうしを合せたら何かうるさくしての夜中咄してねかさねへハ。いゝごうさらしじやァねへかうけとるものもうけとらねへて。今朝まで起ているやつさ。とはなしながらはや江戸町二丁めかしの大こくや彥左エ門がかりたくの前へ來る是より夜見世【八】こゝの內と笹屋の內じやァだん〳〵女郎がふへてくるぜへとつから出したか【權】ゥ、サ爰の新道の角にナ。八ッ藤といふ茶やをかりていた小松やハ內の子供をそんなほう〳〵へ邸子に出して。家內ハよしハらへこしていつた。といふこつた。【八】

なんだかへんな匂(にほ)ひがするぜへ　と鳶やたミて隣の竹やの前にて　【權】コウァノ花道ゟ二ッタ町といふぜへ。此中千之介が買ッたのだ　といろ／＼むだをいゝならべて八ハ角のむら松やの格子ニて　田むらさん／＼と　よぶ　【田】アィどなたでおつすへとなんだへ　ときよろ／＼とそとを見て　ヲヤだまされィしたよ　と引込　【權】よせへじやうだんをいふな　としかりながらおハりや高田やと見てむかふのいづくらのまへにしハらく立ツて夫より松葉屋米屋が内をのぞいて　【待】ア、きれい／＼こゝハ又ちがつた物じや。　手ぬぐいをかぶりしあやしの男うさんらしくかうしのかたすミて小こゑにて。　紅梅(こうまい)さん／＼　【紅】エなんでおつすへ○どふぞ袖うらさんをよび申て　おくんなせへし

【紅】アィ袖浦さんどなたか御目にかゝりィしやうと　【袖】アイ。といってかうしのそばへ行しハらくさゝやきてかの男ハいづくへか行　【袖】ばからしひ　アハミミとわらひながらしよくだいのそバへ来る　【紅】さつきからこゝへ来て立つておりィしたよ。袖うらさんコレ／＼かへ　【袖】アィそれでおつすよ。いやでおつすのふ。ばからしひいつそ身ふるひがしいすよ　と身をふるふ　△　あんずるに是ハあつちらにおりしときの地色が尋來たるなるへし尙可尋　【權】川岸のほうへ出茶やの内をミて　八やこつちらのしんぞうをミや。きついい徳次が条川だぜへへミミ　八ハ高麗蔵がこは色をつかいながら行　【八】川岸通りハナゼ見世をはらねへの　【權】見世をしらねへでも客があまるほど有るからす。兩國もこつちらも大見世ハどれも見世を張らねへ。アレ佐介万字の二かいから。顔を出しているのが。辨山といふぜへこつちらの顔が初咲(さき)といわァあいつも徳次といふもんだぜ　とむだをいひながらかし通りに出ているゝた、見世のこしかけ茶やへより　【八】とふだ引けるか　【茶や】何ンだ引けるか。引けるの引けねへのと。色事のむしんか車力(しやりき)じやァ有るめへし。何ンでも引

ッはると小言をいつてどふもならねへ【權】假ッ宅を見ン物に來たといふだろふ【茶】まだそ
ういへぺいゝがの。付くな〱といわァそのはづよこじきでも何ンでもかまわすに引ッぱるれ
サ。あの又子どもが付ていく引ッはるにやァうるさいの。くわじ羽織だす【權】とほうもねへ
川口橋の上からの（是はさかいけの辻はんのうしろの小はしをいふ）引手が一ッぱいまちかけてゐて。引はり餉にするといふ
れこんとの事だろふ。今も何所のあまたか。丸ゑひやの男を引ッはつて笑れるやつさ。何ン
の事はねへ。芝居の前を通るやふだ。あて事もねへ。【八】權や是からあたけをそゝつてけへ
りに猿子橋をそゝろふ（と大橋さして行あとへ店ものらしきおのこ二三人）○何ンじややら賑じや。夏はどふもいへんであろ
ふ。とんとゑらひのさ玉屋の清春といふがゑらふうつくしひそうじや。今夜は遊んでいにたい
ナァ○イャよすがよひ。何ンでもこゝへ來て遊ぶと。こたへられぬぞへ吉はらへいつて遊ぶ
は。むつかしふは無いけれど。今までは遠から。十度に一チ度いくかいかぬじや深川へ行てさ
へァノ通り。心やすくなるとおもしろひもの。こゝへ來たつと。とんとたまらんぞへ。モきつ
とどらを打ッさかい。そんなどらを打たぬやふにするがよいとあたまのはげた人は又一寸いふ
のもこはるけん。勸善てうい假ッ宅を横に三ッ股又かさねて。御げんのふしに大橋や。それま
で思ひ桐の箱崎へとぞ〳〵いそぎ行く

見出の閨亂並に二尊の談合

隣坐敷ハ此家のお職。姿も派手に芙蓉とて。さとに名高き情しり。客ハふかまのしきだんし如來ハけふもゐつゞけの。小なべだてそめたてもやふ。【如來】憐の客ハたつしやに口をきくの【はす花】アノやふに口をきゝいしたら。ちつとふるふざんする。五丁さんのやふに頤がはづれんせふ子【如】どいつも錢のねへふうたすあれから床へ行とミなきつと。聲色を遣ふせ【花】その癖二度とハまいりィせんよ。（とたがいに咄の折から新造の淺瀬ハあわたゞしくかけ來り）【淺】おいらんへとんだこをうざんしたよ【花】何ンでざんすへ。【淺】今子箱根屋の淸左衛門さんが來なんして子。そとから這入らつしやると直に目をまわしなんして。びつくりしィしたよ【花】ほんにかソリャアしやくのせいだよ。頓死とやらじやァねへかのゥ【如】何死ぬこつちやァねへ。內へつれて行とちきになをらァ。【淺】なをればよふざんすねへ【花】サア火がよくおこりィした【如】トリャ銚子をかけやふか【淺】もしヘアノ橋の下にいけへ事。船がおりィすがアリャア何ンでざんすねへ。【花】まだしんなんせんか。アリャ網だョ。【如】ナニ阿彌陀と（びつくりする）【花】アイ四手網だといふ事でおざんさァなア。夫に網だといつたらアノマア仰山な顔わいナア（如來笑ひながら）【如】此餅ハどふす

るの【花】こんだらちがあきイせんねへ（といふ所へ茶やの男もゝくわしをとんぶりへいのこくつゝ持てくる）【茶屋】こんでおりましていゝやつと持つてまいりました【如】あんまりおそいから酒にするつもりだ時に玉子を持つて來たか【茶】へイ生でござります（とちらとか、玉子たロツテツくす）【如】よいノヽまア玉子酒にあり付た【花】わたくしに一ッ燒ておくんなんし【如】ナニやい一ツくれろ【花】アイ【如】ハア燒てくわふとおもて。これものふ燗鍋で。（と云ひながら火鉢の火をかきわけはいの中へ玉子を ツくべつて子たちもくわしを取て）【如】ナンダあげ卷燒に錦梅か。下があら打だんごだな【茶】是が中洲の名物でござります。まだかさゝぎ燒と申もござります。エヘゝゝ。【如】こんどあよし町のはやし屋の餅くわしを取よせやふ。【茶】モウ何も御用はござりませんか【如】なしノヽ【茶】ヘイ左やふなら【如】ウヽあしたはゑゝぞへ【茶】かしこまりましてござります（と茶やハかへる）【如】幾世さんたへな【幾】アイ如來さんアノね。此河岸通りへ越して參イした。假り宅の家名をそんなしつて御出なんすかへ。【如】しらねへてどふする物か。そんなしつてるやす【幾】そんならこゝでどうぞいつておきかせなんし。【如】ぞうさもねへ事だ川岸通りはかりたによしたか只いつちやァおもしろくねへすこしひねつて申やせふまづ地廻りと色事のあて名を佐介万字屋の格子に立ッてこつそりとしつか玉屋にはなすのれてつきり開夫に大笹や抱て子の日の小松屋もいつ太田やらしらしの扇屋客ハ見ぬふり大やふにやつかりすてゝ岡本屋君か

ために若菜屋の菜たねに長七伊勢屋ならしらつしられぬ中万字屋きのふ京屋のなじみにて色て近江屋大かな屋の心ハきついやぼてんのめつほう彌八玉屋なり兎角山口きくゆへにいつてもふられ俵屋のふり出されてハはづ河岸の大こくやたら大よいハさゝやすぎてのねぢ上戸かほれまつかにゆでたての丸海老やかや赤蔦屋伊勢屋武藏屋大三屋大文字屋に越ぜんや万壽屋万字屋二文字屋河内屋巴屋大黑やおほへし家名あら神やかくの通りでごせへせう【幾】よくおほへて御出なんすねへ【花】とんだおもしろふおつしたよ【如】まだ〳〵こんなこつちやァねへ。うゐろう賣をいつて聞かせてへの。したが一日土堤でいつたからよしにせふ【幾】姉女郎へこゝじやァよくおよられんせふね【花】アイおもて坐敷じやァ朝寐がなりィせんよ【如】ナゼ【花】イヽヱ寐ている所へ朝日が【如】ヱヽとびつくりする【花】ナゼ朝日といつた迚そんなにびつくりしなんすへ。【如】アァ今びつくりしたのハ【花】何ンでざんすへ【如】何よヲヽそれ〳〵朝日と云フたからもふ夜が明ヶたかと思つて。そこで【花】今のやふに【如】びつくりしたのさ【花】アノおまいさんが【如】へゝゝ【花】フゝゝ【如】へゝゝ【花】フゝゝ【兩人】ハゝゝハゝハゝ【如】いけへ田わけな【幾】何をいゝなんすのだへばからしい。いつそ芝居のやふでざんすよ はす花わらふ ちつといつて參りいせふ【如】イヽわなもつとになしねへ【幾】客人を歸てめへりィしやう【如】

よく寐ているだらう。うつちやつておくがいゝ【樂】いつそすかねへ客人でざんすヨ【如】ホイ是ハしたり酒が熱燗じやうじうとなつたれと何心なくこうしたとらんとなす折からさいぜんくべたる火鉢の玉子如すかひたいへぱつちとはねれへびつくりぎやうてんなし持たるこうした取おとせバ酒ハこぼれて火鉢の中へぱつとたつたるくろけり坐しきへ一めん灰だらけ時にふしぎや如來が身より光明赫奕として異香四方にくんじすつくとたつて爪はじき手足網縵皮膚細滑としてあたりをてらし微妙の浄音あざやかに【如】ヤアく凡女たしかに聞ヶ。我ハ是新町の丸屋甚右衛門方に安置なす朝日如來の尊像也。我はからずも。蟹の所へ行し猿のごとく。鶏卵の爲に白毫を。やけとなし思ハず姿をあらはしたり。汝等に見ると盆と十夜ばかりにして。常におがまれたる事無ければ。おれが顔をミしらぬももつとも〳〵。華嚴阿含放蕩者とかりに姿を化城の本尊。浮圖此所へ來りしも。ふかひやうすか烈王臣一ッ切。京町一丁め。般若眞行かきのめす。大文字やの芙蓉ハ。とりもなをさず蓮花といふ名にほれて。一ト度も南無阿彌陀佛といふ人の。蓮のうへにのぼらぬハなし。蓮の上へのらんとて。通ふも煩惱則菩提地中蓮花大如車輪。と阿ミだ經にも出たるなり。わきて女ハ。五障三從の罪業ふかき身と生れ。殊にためしすくなき川竹の流の身ハ。あしたに鳥鐘をうらみ色男と別れをおしむ。是を佛法にては愛別離といひ。わけのわるひいやな客にあふを。怨憎會苦と云。かるがゆへに朝暮苦界のたへがたく。てれん手管を心かけ。書のめす事をもつぱらと。客と色とにくつたくなし。欠伸をしてもねんぶつをとなふる事も氣も付かず邪道にしつむ群類を救ハ

ん爲に來りたり。就中。此度中州の假宅こそ。又いにしへにかへる浪の。水邊に遊女のすまゐなす事。いたつて古風にしてその謂なきにしもあらず。そのかミ遊女のはじまりハ。唐土にてハ楓橋漢水のほとり 日本ニてハ江口神崎よりまの無漏。有漏〳〵舩の御やゐふ夏ハひとしほいにしへを。爰にうつして江口の君の川逍遥の月の夜舩を三ッ股のゐにしに夜ると晝となく。心ハ通上下往來舩と作りたるその源の順も野暮にハあらぬ大通をむかしハ水と呼たるハ此いわれとぞしられたり。水にもとづく陰陽の妹脊の道をひさぐなる。戀と情のまん中洲その中央の假宅ハ。大文字やじや無ひかィなナント精舍アねへかいナア【花】その又朝日の如來さんが肴をあがりなんしても大事おざいせんかへ【如】おつとそこにおちよさいハ中洲〳〵。おれが魚るいを喰し事ハ。毛志之介か小刀を呑にひとしく。たべたやふに見せかけて。ミんなうしろの掃ためへ捨一休もどきにやせたるいぬの腹をこやすの。觀音ハ佛の內での通りもの。ミな圓通と稱美なす。【花】野暮ハ夜ミせを見佛聞法。【如】拔地廻りハ惡口兩舌【花】口舌のもつれ千話のはて【如】けいせい妄語あり【花】客に綺語あり仇月ハ【如】煩惱の山にかゝるれべ。擧權謀扇。實相の月ともろともに。佛體をあらハす上からハ。今ハ何をかつゝむべき。夫法花經譬喩品に曰。爲求牛車。出於火宅ッ五町の者過半ッ並木町へ去年霜月末つかたより引移

りし所。常だにもけに繁花なるに。所せくまでにぎわひ。いやまして燈籠のかわりめにひとしく。群集人の山をなしける所に。ある夜並木の釋迦如來。ひそかに來ッて歎して曰此度吉原回祿によつて。先例にまかせすらりつと角並木町かり宅にて。めん〳〵住居を明渡し店賃の高金を。しよしめうるしのかせぎ取り。さしもに清き並木町もたちまち不淨の土地となんぬ。あまつさへ假宅のために我旅宿もすでに明なんとほつす。又店立をくわん事の。なげかわし。あをぎねがわくハ。先生の方便をもつて此邊に假り宅のおらぬやふな。ナントいゝ讃歎阿彌陀佛ハねへかと。相談をしかけられ。少しおれもこまりしが。夫熟惟ハ。近年諸所に地ごくおびたゞしく。出來たり。あすこの裏や爰の新道。夜更さよふけ。四ッ過の。地ごくの汰沙も金次第。悪鬼羅刹ハ錢もふけ。倶生神すら貸し夜具をはじめしとほのかに聞く。分ヶて中洲ハ地ごくに名高く。越中の立山も是にハいかで增るべき。抹香臭き地ごくハ見番とや線香の切りもせわしく店ものゝ客ハ。逢ふて間もなきむかひ酒。何ンと性根か焦熱や。登りつめてハあつくなり。おやかた前も大紅蓮。遣ひはたしてッ朋輩のどうも仕まひハ一ト人りして阿鼻叫喚の地ごくに墮落なすものその數をしらず。一ッ切衆生皆是吾子衆生濟度ハ佛の職分。其職分で有なから。きいた風の鼠の輩。まのふりの小通とも。看ゝ地ごくへ落入るを。見ぬふりして居

る時ハ。第一佛の道も立たず。諸佛のおもわく。凡夫のそしり。爰を思ッて並木の釋迦と一ッ致なし。地ごく退治をおもひ立チ。俄に並木を引はらハす事。去年の師走の十日頃より。折角取り付ケし格子をはなし内中をとりかたつけ。十五六日時分まで。ミなやね船や樓船に打のり觀音の市まへに。殘らず。假宅並木より。中洲へ引移りしかバ。さばかりおゝかりき。地ごくも忽きへうせて極樂世界となりたるだや。其前も箱根屋の清左衛門か來りし時。此家へ入る事あたハずして。悶絶なせしも佛の奇瑞。まつた汝等にあたふべき一ト品有リ。まづかくよつて是をミよと。懷中より短冊のやふな御札をとり出し給ふ。うや／＼しく御手にもち貸居店造作附是こそハ地ごく退散惡魔降伏の札也。此札を門戸にはり置かば。地ごくの破滅目前に。どこへか消てなくなる事。朝日に霜のごく也。かならず蒲の文左衛門の札と思ふべからず。ゆめ／＼疑ふをなかれ。扨こそ屋敷の前通リ。四季庵の方へ折過して。そのころ家毎に此札を張り置しハ。かゝるゆゑんとしられたり。此物音に二かい中の女郎ハいふにおよバず。内證のものまで殘らず。はす花の坐しきへ來り。朝日の如來を禮拜なしなむあミだぶつと同音にとなふるこゑハ遊行さまの御十念にさも似たり。此内始終沖の家根船の管絃にあハせ。引はり有つて大てけ／＼

高尾解脱

大勢ハ中にはす花ハ。首をうなだれふしおかミ。一心不亂の有りさまハ殊勝にこそハ見へにけり如來ハ是をこらんじてア、ラ怪しや最前よりはす花が擧動を見る所に。まさしく此世の人にあらじ。まことの姿をあらわすべし光明遍照十ッ方世界。念佛衆生攝取不捨。南無幽靈頓證菩提と。御聲ハ下よりも。容姿麗艷たるかんばせも。色青柳の髪をみだし。から紅 襦袢も。皓くゝ然たる白しやうぞく洗ひ髪に一こ、朔に。茶屋へ出たるごとく也 【芙蓉】思ひ出せバ万治のむかし。此川つゝにおいて双にかゝりむなしくなる。さもおそろしき日を三浦屋の其名も高尾が幽靈也。もとより五體不具にして。佛にはなりがたし妄執といひ因果といひかゝるうき日を三ッ股の底のミくづとなりし身のそのまゝ三ン途にしずミはてゝ。紅蓮大紅蓮の氷にとぢられて。うかむ世もなき。くるしミの。海こそあらめ大川や。見るもうらめし水の面に。てる月なミをかぞふれバ今年でてうど。百二十九年にあたつたり。年忌にあらねバ此所へ。あらハれ出るに及ハねども久しぶりにて古鄕の女郎衆のより合ゆへ。うら山しくもはつかしく。閻浮こひしてこのねぬる朝日の如來ありがたくも。此家へ來臨まします事。とくに夫ぞと知つたる故彌

陀の利益を蒙ッて。冥途の苦患をまぬかれんと。扨こそ姿をあらわしたり。あヽれふびんと思し召。佛果を得させたび給へと。すかうのなんだヽ氷柱のごとく。合掌なしてふしおがむ【如】扨こそ／＼はじめより。かく有らんと思ひし故。わざとそしらぬ體にもてなしぞ。汝禿のむかしより。青樓に人となり。あまたの客とつてその罪おびたゞしく娑婆の業因ふかき故。無間のそこに墜罪すへかりしを如來一ッ宿の功力に引かれ。急ぎ佛所におくらまへ閻魔も更に見咎まじ。おれが臺坐をもつほどに。いさいかまわず極樂へすい行の隨求陀羅尼。だら／＼してヽ那爛間佛。がうけやつた。往生安樂うたがひなし。【はす】あら有りがたや。此世にて。ぼたいの種ヽうへねとも君が引くべき身とぞなりぬる。今こそねがひたんぬと思へヽ自故に科もなき。浮世渡平も身をはたし。ともに修羅のくるしミを今目前に三ッ股や。たすけ給へと夕榮の紅葉に名だゝる女郎の氣象勢至にくわんせおん如來ヽこゝぞとねんじゆをもミ。おんあミりたてるぜいきやうらんそわかの御聲につれ。たちまち佛果を衣裏寶珠玉にヽあらで金色の。花をふらしてその姿大文字屋か大文字の。火かげとともに消へうせて。西方寺に名をとゞめたり。後に如來はぼうぜんと。手もちなければ一時もはやく此場を立さるの手並。月並節句の仕まひ切りかけられぬその内に。是までなりやさァらばぞと。ヘアトッチン／＼スタ／＼。隣のさ

ハぎに立まぎれ。紫（むらさき）の雲に打のりてこくうにあがらせ給ハずして。蜊川岸（あさりがし）の方へとび去り給ふ。げに有かたき佛力なり

内新好戯作

于時

天明九己酉歳

甫月二日

南極踊跳雀

序

世有金翅鳥當翅長三万六千六百里荘子呼之爲大鵬其色黄にして白し常に義理と情を喰ふ色林に入て美娘をころ壽娘も亦殺寸手數千本有て娘と手く良扁して互に相搔相殺故諺に能殺すやつは必ころされ能搔やつれか支轉さると此鳥南の奥を見んと行事億〻九億八万里にしていまだ其半にも到らす寸道に飛とつの空〻寂〻として南に向亭數ゐいきに壽るものを見る忽化して鳥と成大さよし原雀の古登し其早き事夷駄天素足て遁る其名を問へバ驛路雀と答ふ則金翅鳥にいつて曰予南方の世界耳通ふ事數年夕に行朝に歸る汝足甚遲南方に行バ先此小巻を見給へと懐中與

南極驛路雀　二

り取出し亭渡してさあ歩行彼牡丹餅耳酔ふて自述焉

とりの
はつ春

仁　○二男一妓會・附濫觴

義　○二匠の初會　附見立と出立

禮　○二武の五會　附心待の秘叓

智　○口舌の手叓　附惡吐の卷物

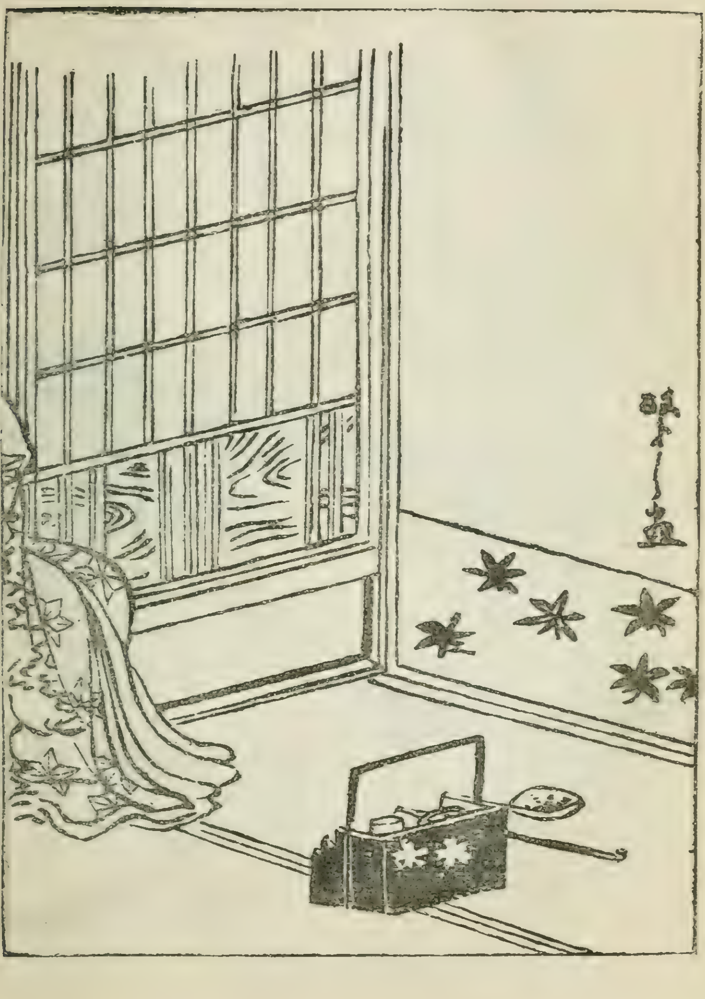
信　○一男五娼會　附六韜三略の卷

南極驛路雀

虫二日。塡然。牽頭擲。閨中交白水棄甲。曳茎而走。家暮。三而後止。通二而後止。通以一。家暮笑三如何。曰不可也。唯不二耳。是取也十篇木純遅氣家通をごた交にして白水の一ッにきやんと云れす。南濱に糸を引て諸侯をも釣るべし。北方に洞庭湖有れバ。南方に峩眉山有り。菩薩影向龜成が無苦世界と號しもむべならずや。吉原に腕押して屁を房州へ屁。のへ紙を大和にもんで小便を葛西へ放つ。やつとうをにぶしとし。紫檀棹を利しとす。しつけの柳の糸れ。御殿山の櫻ヶ坊にほころび。初かつほの聲耳を突抜て其角れ簀のこの上に居る。卯の花に足ふんがけて。菅笠に登る日。布子の綿ぬけ出。小袖化して南鐐と成其こゑきやつ〳〵といふ。飛んで南溟を極んとほつす。已に極めて木枕の一睡按摩の笛止んで。三縁山の鐘鮫頭に引捨れバ。畧の箱上總の山に盡る。旅客の浪枕に横雲を催し。きぬ〴〵に別れをおしミ。又のちぎりを結縁して。無苦世界を出る駕舁の三まひ押に郭公を欺けバ。ほうかふりの手拭に内の首尾をぬらす。肴荷の先陣金杉にうちかぎをましゆればっ後陣の鰶六郷を渉る。またほのぐ

こゝきより゛牛のよだれ十八町を續き。お市が髪の毛。佐渡屋の舩を繋くの長〳〵しきも。吉原豩日と見れバ。是を壁とも見給まへ所かわれバ。品川をわたりてその淺深を氷川に知り。北國に融通して雪肌を中洲に見る。一不二に腰かけにた皃さんなすむゆうの指遣ひ。に。かく爪をはかり。居續の晝遊に。手管のとあミを打たせ。海の妻戸を若ひ者の酢走に明ヶさせ新造禿を芝海老のごとく引連れ。姉女郎をおぼこと見。帆かけ舩は妓者の皃とともに白く見通へ馬乗り込きんだちのちよんの間の鐙にあらぬ。むさしおとこほうかふりして。ミんなミの里にしるよししてかいにいきけり。其夜の興不興をすふに書のめして一坐ならぬ友とちのもとへ贈る鯱ハ雲を衝て嵩へ。千水緯を分て明鏡を夾万橋横を連て彩虹を落す侯家星を盡してきらめく。商肆砂子のごとく地を限ッて並ぶ一夜の歡樂千歳を壽る。一ッ時の價万金を重しとせず。門に繋く千石舩。千艘出れバ千艘入るかゝる江戸の湊。其濫觴ハつまミ錢なりとも爰に到て万項小判の波をあげ。小粒山をも築へし其枝折さへ見付たらバたちまち黄金の林にも入る。夕ァに菰をかぶり朝に金銹をさす何ンぞ壁と見られて狂言を書かれし事を憂んや是を埋んとせば印旛沼もかたしとせす臍を極彩色し翠丸に銀箔張る屁玉を手つらまへにする事をしらば。何ンぞ河童の屁の嗅をしらざらんや。干見世で十二文に買ッた茶碗わ中通リの朝市に南鐐八ッ片に付人か有伏見屋

が三十兩に賣ッた水こぼしの。田舍小僧が八王子へ打やつて三太郎がしのびんと底搭子に紫衣の相樽ひろひに地主の手筋有り。ひしほ金山寺賣を見ればタァの夜鷹そば賣り也お寺の賣買も有れば野郎の山伏も有りしらミ紐をこよりでこしらへて安うりと出かければ小袖の上から灸をすへる足駄の歯入の不細工なやつがつよく。蛇はらふせと書た手の惡筆なやつが上手也かぶと形ひごすいきとまつくろに書て引札を出す。兎角ゑてゝなければ酒も呑めぬ硯蓋に四角な鷄卵も出來れば三角といふ遊女町有。赤坂に麥めし吴岸島にこんにやく牛町のよこ丁に根芋をうゑれば大根ばたけに千坪有り。金銀のねこ有れば海に裾つぎし潮にまんだらうを積んで五町丁の卷せんへい迄棹させば情を商ふもの米の守と數をくらぶる繁榮は毛唐人の夜光の玉できしやごはおきをし蜀江のにしきの豐嶋丁の朝せん人にも着せる下谷で三絃をひかせ市ヶ谷で淨るりをかたる淺中で馬道をつくり四谷から太鼓をも打すへし駕舁の力杖を銀で張んと思へば棒組のすたれを珊瑚珠で編んと欲す千兩箱で棧橋をかけ屋かた船に佐渡の金山をのせる。紙花を吉野へさかせ酒米で銚子口を埋る。百万石の威勢にもなびかぬの契情の意氣地なり平をのり賣婆ゝァがきらひ。塩うりにお姫さまが惚るもかづくにはならず鰒をきらひなおやぢがお取越によばれて芋を喰て死る。極樂をいやがつて地ごくへ行て墨を擽ら蓼くふ虫はたばこのまぬかとさま。



九

ちんこ切と薬こしらへして芥川を歩渉にして。九尺弐間配所の住居。心つくしの有明の月夜に釜ほり出す娘あんよハお下手。ころぶわ上手太夫号もらつて。二の糸も切れるほど聲つり上て願ふちかひハ只たのめ。近所の若衆やおやしき方の御世話てうら河岸へけいこ所出し。丸ひ物や四角な物ハ丸の内から光り。格子ハ金六町の見世さらしをもらひ床わ古木店の見倒屋のむすこが施主に付。懸札ハ塗師屋から仕おくり。三味せん屋の若衆ハ猫の妻はりかへてくれる。門跡さまじやァねへが夫〻の講中か有も師となれバ七尺去ッて。上りはなに手をつき稽古子供のかへる跡に【兼吉】【哥集】【薬立】【哥】薬立さん夕ァ南極へめへりやしたが。九夏ハまことに南方の世界だね。常陸下總を扇にかざし。安房かづさを眼下に見くだし元船の褌に白鷗が夢おとろかす。かつほ舟の櫓ひやうしを海の塵にして。獵船を芥と見やす。八景ハとうけた觴の内にもありそ海。南濱青樓臨海起。不捲珠簾見海水。とも云ひたき所。松嶋も是がために腸を斷。和哥の浦も爰にいたつて面を覆ふ實に魚龍潜躍水成文と申所さ【哥】艶〻隨波千万里。鮫頭から洲崎へふんまたがり。浦賀へ穀物の小便せふといふ所さ【兼吉】笹はたきもしねへが大そうに愚痴をいひなせへすね【薬】コゥ夕ァァよふおつりきを云つて迯たの【かね吉】おめへ又ごうけつ斗ッ云ひなさるもの。コゥ哥集さん。さつき杵やの善六さんか。新叶のみをもつて

寄りなさいしたが。何ンぞうらミても有りやすか。大キさが枕ほどそのたけ廿尋あまり也あれにやたしか魂の四ッ五ッも有やせふ。【哥】なんだあいつァ近ころつがもなくむつかしくなつた。これじやァ女郎買ひもやめねへけりやァならねへ。さらばくだをよまふかへ【かね吉】葉立さんの所へも信州の若衆が寄りやした【葉】内へくれハィ、【かね吉】歸りによると申やした。【葉】夕べのいつしげが廿日あまりに四十兩ハよくかたつたが米屋じやァねへが言葉でふちこわした【かね吉】手に入らねへものァがうぎにあしくいふやつさ【葉】おいらァさんげくァいわねへが六こんしやう／＼ながらただそんなにいちや付くのしやねへ。いつたいげいしや。へこミといふ世界だから。どんなつよひやつでも足腰ャァ立たねへどけへでもころばァ。ころはす事にやァ哥集があかるひ。日本橋から品川までのけい者ァうしろ付ハおろか。足音でもしつてるらァ。下坐見ならはだかを見やふといふやつだ。おれも大概ハしつてるが哥集にやァ叶ハねへ。いわして聞キねへ【かね吉】哥集さん云ッて聞かしねへナ【哥】いやだよあとでげいしやの岡引たといわふと思つてコゥ此みを見な冬の日にやァよまれねへ三丈あまり有らァ。【葉】ふり袖に裁ても手ぬくひだけあまらふといふやつだ【哥】此くらひのやつが猪の頭から出ると目くろ在郷へ氷雨をふらして品川の海へ出るぜへ其くせ何ンの事もねへ。芋をいぶし

て屁の亡魂をあられさふといふやつだ。屋形ものゝ色事をするやふに。みといふやつァよつぽとぶいきなやつだぜへ【薬】門徒宗の御文章を讀やふにあなかしこ〳〵で。さつきからかんきんをして。居なから人聞きのイヽ事をいふぜへ。ばんにいくだろふ同心にいくべい【哥】こよひわちとはやくいかふ【薬】おれもはやく行ッて宵の内四ッ手を引かてふ【哥】よかろふ【かね吉】此内ひら長屋ハ普請をして大ぶ二階家が出来やしたねへ【薬】ウンアレデ高輪ハ大によくなつた【かね吉】薬立さんわつちも梅さんへおみをとゞけて。おもらひ申やせふ。此間のお禮をよくおつしやつておくんなせいやせ【薬】又云ッ付ヶこハ御めんだによ【かね吉】なんにもあしき事ハ書かず【薬】せんどとんだ事を書てやつておれにやァ大に手こずらせた。少しハ種のねへ事ァ書かねへといふハな【かね吉】ホンニ女郎衆といふものァぐちなものでござへすね【哥】濱松じやねへが廣ィやふでせまひものよ【薬】そんなら哥集さんのちによ【哥】わつちやよる所が有るから先へいつて森元の伊勢屋にまつてゐるよ【かね吉】さやふなら御機けんよふ明日カッチ〳〵カチ〳〵

三五郎　空色太織の單ものくろ七〻子の帶小もんちりめんひとへはおりこんのたび　三十七八

万　吉　さらし中かたゆかたかたひらちやゝ〻子帶ちりめん小もん單はおりこんはんぐつ

【万】三さんおめへの形りやァ山女衒といふ身だぜへ【三】うそれねへかふふたり出かけちやァ日なしかしか岡場所の出入師か見付次第に預けよふといふやつさ【万】コゥ爰の牡丹餅二ッ買ッていくと三十番こわ、高枕だぜへ、【三】手めへのやうに桔梗やと鈴木金澤にしばりを打たして。天を取ふトいふやつにやァ叶わねへ【万】アノかしらが内の十一紋に足場たひなしにした。是からぐつともやふをかへて遊のほうへ縮圖を極めやふ【三】その墨がいゝぜへ。やちをお注文わおれが書てやらァ おやぢのまへたこしらへてやる也 こちらへ付て柾に歩びや二丁ほど近ひ 高なハ十八丁濠かわの方へ付て行ケバ二丁ほど近し【万】おめへの裾に何か長ひ糸がからまつているぜへ【三】どこにほんにナァうしの涎だアレ／＼どこまでかつゝひっているぜへ【万】そいつをつたふて酒屋の娘がおつかけてくるよ【三】手めへのかたにもとはほうがからつまつていらァ。それ／＼踏めへぞがうけつに牛がぬいて置たぜへ うしかきたないこゝといふたしやれこゝいて有とはいふふんでして有なりへ大木戸もすぎおんぞからしん宿までひら長屋さつま長屋を遣て、ツ出にかゝるこゝに江戸おへのせる舟有【三】汐留へいゝらでのせるへ【舩】橋向ふでのんねへ【三】すつとむかふでのせねへか。【舩頭】舟かへ／＼すつとむかふて川きう二百の事也【万】よしか乗りやァしねへ 宿へかゝるいなりまへ【三】方こうこちらのとしまを見や。イ、つらだかがうてきに鍵目が有るぜへ。戸の〆てある江戸やのむふきのぞいて見て【万】アノ破風のあがつた着物をちがひはぎにして。墨坪をひかへて。墨さしをとつている子をミな。音がいろ事だぜへ ひたいのあかつた着ものを引ちがへ

て着てすゝりはこをまへに置ふてなもつてゐる事也　【三】ィ、子だか耳のワきにぬけぶしかあらァ　三ツほしのから紙のもんがだミこ　【万】モゥ佐渡だよろず。さいなかれんといふ合もんだ　十匁と七匁五分　○是からだん／＼から紙のもんを見て行子もちすじのから紙のうちへあかる　【三】爰ハしな濃やだ新州た爰へ上るべい　女郎三人から紙のきわにならふ若もの横へひらき二ハすわつている女郎人行灯の脇にしやがんでゐる　若ィ衆上ッてもィ、かへ

【若】お上り遊ハしませ　【三】ォァ万こうあかりや　二人上る若者跡に付てくる見通へとなる　【三】長ひ廊下だぜへ。爰で曲馬乗れハィ、【若】あなた方御初會でござりますか。【万】こよひ地まつりせへ渡ればすくに手筋を始やふといふものさ【若】すぐにお見立遊ばしませ。【三】遊ばせも大そうだ。万こう見立てきや、【万】おめへも歩びねへ　二人とも見立に行

ちよつと　陰見世の結構

銀燭晝のごくてらして美婦嬋娟として色をくらべ媚を争ふ蘭麝百疊に満／＼自笑私情頤ゝとして誘ふ水あらバ流れて品川を出んとおもひ着る美あらバ綾羅と成て肌着にならんと思ふ君がためし錦帯をとき。一ッ身をともにし。鏡となつて。嬌面を分んとす。ろうかを顧歩する兩鴛鴦あれば。階子を登る双蛺蝶あり。此時異香四方にくんし室のものに蓬萊も有れば。五色とかわる紙花もふり妓者の音樂三階の雲中にきこゆ爰にいたつて碑文谷の仁王様の刀もぬけ。九尺の

草りもほん〳〵下駄にならび堀の内の百度参りも此所へ緡を投る。榮螺堂の百観音も。女郎芥の光りに利生をうしなひ。魚らんの観音なも香かごを捨給わん
【若】御見立てござります（と大きな聲で呼れる女郎おの〳〵いぎをつくろふ）○（二人の若ひ者うしろへことち邪りになつてきたてる）【三】下へうち敷をしいて。祖師さまの開帳見るやふに。赤ひものを上へ着て。柱へ片ふたになつてきせるをたばこぼんへほうづゑに取付てゐる子ハ【若】アレハ片うたさん【万】その次の小屋を寶形にして。露盤のうへに鏑雁股をさしてもちを蒔ふといふやつたからゑんぎかィ、あの子ハ（むすびがミにして新田の矢をかんさしにさして居る事也）【若】アレハワか浦さん【三】よし片哥にワか浦ィ、取組だ。（若者片うたさんワからうさんと呼ふ二人立ツて身しまひへやへ行尭あとからたはこ入持て行）○（見通しへ行子とも硯ふたこうし持てくる）【三】若衆やのめめへ一ッ斤取ッて下せへ（おしきせの酒ハのめぬ故美酒を壹升とつてくれといふ也若者立て行）【万】アノ子や此間妥のうちへ馬が上ッたといふかほんの事か【子】ィ、へとこのかワかとのさまが。表見世を馬をのりあげなんしたのさ。わつちやきもをつぶしんしたのよ見世を引てからて有ンしたから。またよふ有んしたが。そでねへと女郎衆を馬がかミんしよねへ【万】ソリヤとんた事た【三】馬にも一人女郎しを買せベィ、【万】ソレしやァあとがやくにたゝねへナア。【子】わつちやァしりィせん（ほどなく女郎くる）○（片哥ハ脊白ねりの袷あいさ紅ニあやち金入の帯上うちかけ紹薄うすねつミ給に一面山水をゑかくハかまは□しやふの出たち上うちかけ□に鶏やの鳳けいを金糸にてぬふ二人三五郎万吉か向ふへならふ）【わか】あなたちと上んせふ【三】ちと上ンしよ【わか】まつおとり上ヶ【三】

ゐてをあけてくんねへか 子とも白てう德利より酒を明る 【万】若し嘉吉と長を呼んでくんねへか【若】表二階で今明た所でござりますす聲色ァよく遣ひます【三】呼て下せへ【若】かしこまりました 若もの立て行 ○ 聲色けいしや二人來る【嘉】【長】是れ御そろひなさつてよふ御出なさりました【嘉】佐渡のまゝでござります【万】此間來たつけが。こんたァ容衆と習に出たとつて。おてつを呼んで義太夫とかたすんだ。【嘉】そのばんかへ【長】此間御近所まで參りましたが。おより申ません【三】春次が所へか【万】マァ一盃のむが能ひ遣ろふ。【長】チト上ヶませふ 長一はいのんで【長】片哥さんちとけんじませふ 片うたてうしかつちり【片】嘉吉さん上んせふ【嘉】さらべてうだいと會所めかふか ト實右衛門の九太夫の聲色【長】さしおれのむれ おや玉かゆら之之介の聲色（）三味せんてうし合ス テン〳〵チャン〳〵

〽思ふ事いわてのもりのあけからす引

松本幸四郎

あわざからすれなにはかたやほ鶯れ京そたち吉原すゝめを羽かへにして男の中のおとこと呼れれしはんすい長兵へとァわしか事てこんす

【三】すごい〳〵【片】【りか】よう有ンすねへ【若】チトあちらへ入ラッしやイませ 是から片うたかさしきへ引ける

○

茂點（もてん）　下に白麻じゆばん近江たまご色のかたびらにこはくの帯おなんと茶五所紋付のはおり白足袋中ぬきぞうり鼠色のきさし茶ざや

嘉伴（かはん）　越後横しまのちゞみ紅麻じゆはんはかた帯黒絽三所紋羽おり大小せいしつむしくひ玉子色たびうらつきぞうりこふ嵐の手ぬくひひたいより引かけかぶり

此ふたり石はしよろずへあがる

〔石橋女房〕よふ御出遊しました〔てい主〕是れ〴〵だいぶお道が近くなりました。〔茂〕貴さま此間やしきの下を御通りだの〔亭〕とこでごろふしました〔茂〕窓から見ていた〔女とも〕サア二階へ入らッしやいませ　二人二階へ上る娘十七八女廿二三皆付てくる　〔娘〕此間ハお遅ふ御さりましたか〔嘉〕イヤ〳〵見附の行灯。まだ引かない内に乗り付た。きつく早ひ駕舁さ小馬とあさ市といふやつだ〔娘〕ソリヤ駕舁のひやうとくかへ〔嘉〕こて庄　大坂おふ万。小万。草傳。皆八ッ山のはや駕だ〔女とも〕能ふあなた知ッてお出なさいすねへ〔嘉〕まだそんな事じやねへ品川のあんまの名まで知ッていらア　てうし盃ふた吸ものやき肴真肴いろ〳〵出て三味ひく　〔茂〕サ嘉伴公壹ッおはじめ〔嘉〕まづ〳〵〔茂〕サアつぎ給へ　是から酒事女とも二三人来りのんでさわぐ茂伴内義に花をやる一角也　〇　皆〳〵らんかんによりかゝつている下へ近所の若ひもの来て二階を見て　〔辰〕つんじや聞へめへらかんの脇へ遣ろふか〔娘〕辰さんよしねへあんなといふれな〔女とも〕おめへの形ャア仕切場の冷めしといふ物だぜへ　娘きさこお提る　〔辰〕やつだはじきなおしねへ盃をなげてもらひてへ。〔皆〻〕ハヽヽ、マア五人商人にあらずまのあんまかみつかいかといふ男ら　なき十二三余風俗しきにかまてかたにかけこはや足に来り　〔松次〕辰さんハこんなやァおぶつさらにやァならねへぜ

へ【辰】どふした【松】さきの立いてうの半丸が出たよ【辰】そいつハ大きハぎだ とかつてかけて行ク おかつ さらとハ逆につれて行ケといふ事也【茂】けんくわでも有ッたか【娘】なぜへ【茂】それでも大きハぎだといふじやないか【女】アリヤ紋付の棒引があたつたから遊に行とて。嬉しかるのでございやす【茂】ハヽアそふか【皆々】ハヽヽヽヽ【女】どつちへ入らつしやりィます。又しん州かへ【嘉】しれしさ但いかないで妾へ一ッ宿しゆく。すのこのはしに只一チ夜【娘】わつちやァいや玉つさしやあるめへし【茂】さらバまいろふ【女】此間村じさんハ吉野さんから御つかいにあづかりました。御次手によろしふ 是ハ此□□□ながら末花をやりし故女郎より去やへつゝとゞけ□し故也床花二分ほどツヽやりし也しかし さま下へ行 嘉半女をつかまへにかゝる【女】アレ嘉半さんかよ【嘉】さらバ行てちきりませふ 若ひものてうちんを付先へ出る是よりふたり半九こしにて行也【皆々】御きげんよふ【女】おたはこ入お扇子せんすがござります【茂】第一のものたもしてらされると一チはんに入るものだ【皆々】ハヽヽヽヽ 嘉半ハあふきてたゝいてうたひながら行ケハ茂助ハ若者とはなしながら行く【茂】ひら長屋の奥州おうしう屋の娘ハかへつてゐるか。【石橋若】此ころハかへつてゐます【嘉】ふゝ子だのふ【石橋】とんと半四郎といふものでござります 宿へかゝる【石橋】ハヽァこよいハ御番衆のお宿とまりかござりませふが新しうハとうござりませふか 石橋の若者しんしうの内をのぞひて見て【石卷】よふござります 皆々上る【信州若者】石橋のお二人一座村次さんよしのさん【むら】よしな と言ッてたつ【よしの】吉兵衛とんどふもわるひのふ 通し若□三人有こよいハ吉兵ハ通し番也【吉兵へ】

なせ【よしの】尾張町の定さんが來なんすはづだから。心待にしていたが定さんが來なんして
から。そういつちや。もられれめへのふ【吉】とふでござりませふか【よしの】客しが有といつ
て下せへ 若もの少し小首をかたふけて 【吉】そういつちやァ嘉平さんたから合点しやすめへマァ石橋をよびや
せふ【よしの】ヱヽすかんどうせふ ほうはい女郎元町の方へ向て小なこへて 【よしの】あの客衆や私やァ性が合ねへ
そふて。どうもいやでなりんせんこよひは定さんといつて身あがりさ【元町】わつちも彦さん
て仕廻ひィせふ 石橋の若もの吉兵衛連立來 【よしの】石橋さんとうぞおめへたのミィすよ。そのかわりとんな
事でも聞ィしやう【石若】おめへ又はやくかくれたらよかつた【よしの】そふしィせふと思ひ
したかついすはりした 是から石橋の若者と吉兵衛と二人行て口から出次第の事をいつて嘉平をくるめて名代をきめる 【吉】とふもおきの毒(どく)でござります
【嘉】坐敷は明てよこすだろふ【石橋】坐敷とりのからだやりさ。それにァノお子は積氣(しやくき)だの
【吉】ゐてになるトいつてもあれよ【石橋】わるひくせがあるものだ。わたしが內の女もそふ
よ ゐてといふはやくになつているといふ事也是有手也 【吉】石橋さんようしうおたのミ申やす 硯ふたこうし湯も・鉢さかなとんふりものなど出る是さだまりの酒事有 【嘉】
こよひはかふいふ目に合はふと思ッたおめへはゐるゝの【茂】まだおれもさたがならすじや 女郎甘瀬
よしのが名代のしんぞうをつれてくる 【村】となたもよふ御出なんし【茂】きつい御もつたいだの たらせ少しうつむいて気こたふくむ 【新
造】石橋さん此間のみやつてくんなんしたか【石】さつそくその日あげゝました【嘉】石橋誰(たれ)ぞ

よんでくれねへか【行】金蒲とおしけをおよびなされませ。【茂】能からふ【子供】あちらへお出なんし 足よりむらせかさしきへ引ける 【付】繁野(しげの)やおつれ申や といつて立ミなく〳〵行

葉立(はたち) さらしのしやはん纏をあひさひのかたびら茶とんすの帯くろ絹一ツもんのはおり廿一四

此葉立廿はかりの時より梅さとか所へ通ふ女郎も十六七新造あけよりあい勤今ては女ほう同前の中也内中の者のミな心安くあまりしげ〳〵なる故此一両年ハ芸やなしに来て若ひもの吉兵衛といふが茶や同前に万事とりまかない也女郎といひ合セ外の客ハせかずもし葉立をせく客有れバかくれてお針の部やなとに居るやうにするゆへ梅里もいろ男なとへハゑんりよして大かた出ぬやふにするこよいも来ている

女郎二三人来る花町一ト町きわ 【花町】葉立さん梅さんハへ【葉】とけへか無くなつた。あいつァこよい酔(よ)ッてるらァとこて呑たの【花】爰てわつちと二人呑んした【一町】ほんにおめへも酔ッて居なんすよ【花】ツレたんすのめへの白てうを見なんし【葉】ほんにか とふつて見て まだ有ァ肴が無かつたらふ【花】とうもろこしのやいたのとなまつけを買にやりんした【皆々】ハヽヽ【一町】【きへ】わつちらのちにおまんまたへに来んすよ何ンぞおこりなんし 女はつ来る 【はつ】葉立さんこん夜梅さんおきやくがなくつてよふございやすね【葉】ーおはつどん夕かしが有るそふだ。塩やきにして下せへたんとかイヽ。なわにや何ンぞ大キな肴が有るだろふ。見せにやつて下せへ下へ行たら万次を呼んで下せへ 万次ハ梅さきかゝふろ也 そしてかミさんに此間の本をおミせなさいやせ【はつ】わつちものちに

参りやせへ 梅里下谷の早亭でおき いろくないのでいる【梅】どふせう嘉徳の久さんが來ているとよ【花】だがそふいひん
したへ【梅】若ひしが見世へそふいつていたとさどふしやうのふ【葉】どふするものかおれが
部やへいかふ【花】おめへのへやとか【梅】お竹へやの事よ【花】ハヽヽ【梅】わつちやもふ
こよひ久さんと切れてしまわふ【葉】てめへそんな一ッこくな事いつちやアかゝさんの手めへ
か大キにわるひよ【梅】しれつてへのう【花】かゝる時にや人わ死すらん 葉立に知り有る女郎一言人有 ことよひひまい
へとり分梅里六き に氣たもむ也 ○ 久むつかしき事に 葉立をきつくせく ○ わかなさの 吉兵へする【吉】葉立さん御よびなされましたか【葉】豐八と
澤太夫よんでくんねへか【吉】アリヤ新叶へ出ております【葉】明キしだい來ひといつて遣つ
てくだせへそして新叶へ人遣るならっ きね屋から哥集が來てるるから。明日のあさどうしんに
歸らふといつて遣つて下せへ【吉】御手紙でもつかわされませ【葉】ちよつと書かふか【梅】
新叶へ手紙やらねへでもイヽよ【葉】ナゼ哥集が所へ遣らァ【梅】イヽヨ哥集さんも一ッあなの
狐だ。又花月さんの所へでもいかふと思つてさなくハヽヽ これ早よりこれに葉立哥集がとりもちで新叶の花月といふ女郎の所へ色どかけてたびかくれていつた所をそ
れが梅里にしれて葉立を大きにおこつた事有それゆへこないやうにいふなり【梅】それにおめへがわつちが所へくる事ア品川中へ橋からこちらア
大概しれているからモウおめへのかきやアまくが通らねへよ たゞおはつんか【はつ】何でござへすへ大
ぶにぎやかでござへす【吉】新叶の花月さんの事よ【はつ】それより御てん山からつかまつて來

た時ハおかしかつたけのミな〳〵ハヽヽ【梅】ハヽヽ たび〳〵ごうをさらしなんすのふ【吉】それがおもしろひのでござりますハな 久来る坊主客なり外に觸かなんぞのこい腹ツふくれなり かとくの久さん御出なされました と下から呼ハる【葉】ソリヤ來たぞおれがせけバせくのだヱかふ物がまだかつていらァ 女郎ばた〳〵てん〳〵の座敷へ行【久】コウ梅里ハ葉立と切たといふハうそじやねへか。ゑゝつらだ女郎のびんぼう神。獅子身中のむしだゑゝつに喰ひころされた女ァ宿中でも折介じやァねへが手にあまるァそろばんでなけりやアかん定が出來ねへぞへ【かとく】ハヽヽ 葉立みだんだ男がイヽにからた中がいきさ。女郎を殺す事ハごん妙でござりますあのくら田の姫蔦さんが葉立さんに一夜逢ふと外のつとめがいやに成あの人に惚ねへ女郎ハよそハしらんかマァ宿中にわあるめへといひなさいやした【久】いまく〳〵しひやつたほんに切れねへけやァこつちがこけにならァ【かとく】ほんに切たそふでござります【久】ぬしやなぜしつている【かとく】此間神田の文四さんと白さん正良さん本郷の鴻さん四人一座で佐渡やへ御出なされやしたが葉立さんハ中洲のかり宅大かなやの豐里を買ふといひなさいやした【久】かつてんがいかねへせへ とほそころこだんしているかとく若ものも葉立と至ごく心やすくするゆへならんで久をくろめる。ほどなくおしきせの硯ふた鉢さかなてうしなど出る梅里も來る 【梅】かとくさんこの間あいぐミとやらいふものくんなんせんのう【かとく】一ト町さんよしのさんがミな取りなさいやしたャ久さん此間夏垣い芝浦さん七帰さんを連れて客

衆が玉川へ御出なされましたが鮎はまだずぶちいさふござります「久」まだちいさからふ〳〵鮎
が來てかげを足す薬や夏柳といふものかの夏やせがはしまるとあいつハふとり出すやつよ「梅」
久さん大ぶあしが近くなりなんしたの「久」近くもねへ十日に一度といふ物さ「かとく」ちく
生めかわひ男といふのかへ「久」うそしやァねへかおゐらァ白魚のはしりから寒念佛の年ン明
まで三百五十余日ミぞれ夕立に無構くれて傳馬町の御用でうちんじや無が品川へ通ひづめだ。
かな川の馬とおれが通らねへけりやァ高輪の夜が明ねへコゥもじの鑓裂に手こずる仕立やじや
有るめへし手めへのやふにかける女ァ東方朔が御ほうだんにも聞た事がねへ「梅」どこでなら
つて來なんしたか大ぶながなきをしなんすねへかけるのかけねへのと遠乗りの馬じやァ有るめ
へし「久」すねおしとまくら引にやァ叶ハねへが女郎買の立引にやァ越後屋から干鱈取ふと思
つていらァ木の事たが御てん山の一ト重さくらにてんかけて天王さまつゝこぬきに打ッて七月
に三役くらつても蒸にやァ。部屋の疊に髪月代さしてのうれんを着かへさせ。七五三をおれが
かけてかげミせの仕まひ紙ァうら打唐帋にしてとうこうに書かせらァへ。どんのくほに髪結ッ
て輪違にたばこのむ若ひやつらァ遣らずのどうとりといふつら付で。親仁と女郎にさばァよむ
事ァ上手だが。もん日物前にやァ二〆が一石餅をくらつて　胸を浅間山ほどやかして手赤が付

てもすつぽんの首を見るやふに襟斗出して燈籠うりが白雨に逃る足付をしあがらァへ【梅】小山椒助とやらが積の薬の云立するやふで有んすよ。そんなにならべなんしちやァ通りの邪魔になりんせうぜへ【かとく】古銭うりほどならべなさつたハ、、、、（若もの　くる）【若】ちとあちらへ入ラッしやいませ（是から箱挿が部屋へ引ケる詰事御定り）【久】コゥ手めへ薬立を切れたといふが。此間おしやごじて見かけたといふものが有るぜへ【梅】わつちと切れたとつて宿へ来なんせん物じや有るめへし。又山崎の常盤さんのとけへゞもいきなんすでごぜへせう（薬立中ただときわが所へいつた事有故也）【久】そんなに手めへ油賣のうなぎつかまつたやふに奴ら付出入もねへじや〳〵ねへか。何ンぼおれが蜆貝で居風呂のふたするやふにいつてもかんじんの。借し元がきまらねへじやたゝける狂言じやァねへ何ンぞそつちで白いとも黒いともやふの付やふが有さふなもんだぜへ。口じやァ櫻草の鉢植へほうれうがおりたともいわれるものだじよさいねへ手めへでもあるめへじやァねへか【梅】かぼちやの雪隠へからんだやふにいひなんすけへども。指を切らふの起情を書かふのといゝしたとつてそれにこうぶおめへでも有んすめへしどうすればよふ有んすへ（久ハ坊主にてせいがひくいゆへかぼちやせつ）（ゐんちからむとあてこすられて大にせき込こわ高に成）【久】コゥかぼちやの雪隠をからむとハ何の事ッた【かとく】アリヤおめへさんたとへにいひなさつたのでござりやす【久】手めへ桃しやァ有めへし梅里に並ンでなる出

入ァねへ　是から久はらを立てしゆろ箒で梅里を壹ツゞつ梅里大きにせきこんて引ツたくり久を二ツぶつ是から大いざになつて久ハ切れてかへる久が先へ手を出した故かとくの若ひものも理にまけてつれてかへるちきとなりのむら田の内へあがる久かあくたいの巻ものへしけ〳〵く略す。かとくのわかひものおよびかへして　【吉】どふでこよひの事にやなるめへがッレ御たのミ申やす【かとく】先へ手を出したこつちハわるさわるけれど梅さんもあんまり一ッ國だおいらァうけ合ハれねへ　といつて出て行く。若ひもの跡へ塩花ふる葉立お針部屋より出てくる梅里か部屋もはき出し塩をふる女郎三四人くる若ものおはつお針ミな梅里が部屋へ来　【葉】てめへといふものハ久をむごくしてとう〳〵返したの【梅】それでもごふはらで有んすもの【はつ】こんやハ梅さんがもつともでございやす。下でもおかミさんが腹立なさひやしたっ〴〵かねびら切ッて一ッ盃をいふものァいつそにくらしひね【梅】いつそげいしやを大勢よんでさわがふじやァねへか【葉】よかろふさわぐべひ【梅】葉立か耳へ口をよせてこんたんをだんじて　万次だまつて居やよ。用たんすの下の引出しに有るものを持て來や　是ハ梅里外の客にきのふ花をもらひて遊ひのこりが二両と貳朱銀五ツ有るを葉立に遣りて今宵のさわぎの足しにする葉立も當時親かゝりゆへ金銀じゆうならぬゆへかやふのはかなき仕打有しごくのひじゆへ先万次梅葉三人の外しるものなし葉立が紙入引出しに万次か預りている故それへ咨ツ所に入ておく　【吉】御呼び遊ハしましたか【葉】下に新造衆やァいくたりいるミな仕まつて下せへ【吉】としさん民さんかつらさん梅が香さんが居なさいやす【葉】女けい者でも男でも明てゐるやつ三組斗ッ呼で下せへ今夜ハちとおごらねへけりやァ埋らねへ見通しへいかふか【吉】せまくつても爰かよふこさります私もこんやちとわつさりとさわきたひ氣てこさりました久さんで氣をもミ切ッました　といつて吉兵へ下へ行　【かミさま】吉兵衛二階は何事だ【吉】今夜ハ葉立さん

が奢(おごる)とつてらんこくで【かミ】ハ、、、（妓者もだん〳〵來さわぎてかへるも有外の座敷へ廻るも有り少しし つかになる女郎三四人に女共も來りて酒をのミめしなと喰ふもあり）【菜】元町さんおめへの松さんハ來るか又かふりァしねへか【元町】いんねかぶりやしねへよ夕ァ來なんしたつけ十藏を呼なんして龍藏と德次か身ぶりをしんしたがいつそおかしふ有んすよ【梅】松さんハ嫁をとるそうだんか有そふだぜへおめへゆだんしなんしたら大きな目にあいなんすによ【元町】うんにやありやァ庄さんがいゝわでしやくりなんしたのさミなうそで有んした手を廻して聞ッした【梅】ほんにかァノ庄さんハよふあかはらをたれなんすのふ門之介が煩つてゐるとつてさきさんに氣をもませなんしたかそれもうそで有ッせふ。【菜】ソリャほんの事たあれが煩つているから桐座でやァ盆狂言にすかハらを取組そふだよ。花さんの安さんハ江の嶋(しま)から歸りなさつたか【花】アイてうどいつた日ともに七日めで【菜】その內あげつめか【花】ナニサ初會に二度出んした【菜】來るかへ【花】夕ァから居て晝歸りなんしたおはつどん聞ねへ安さんハまたいつそあさとひ事を言ひなんすよ【はつ】ほんにさあれほどはつめいだがネ【花】晝もいゝなんす事にや手めへを內　入ると方ミ連てあるひておもしろひ所じや五日三日ッ、とうりうするといひなんすハな【梅】【はつ】梅川じや有るめへし【梅】菜立さんおめへもあすハ居續(いつゞけ)に居なんししづ山さんの成程(せいてい)さんがお出なんすから近付になりなんし【菜】朝わ歸らねへけや內

がわるひ晝過から出なをして來やふ【梅】近ひころハ御所女中の出合するやふに。六ッあかりとやらたからいつそあつけねへよ【はつ】一チ力。中かとくみとりや坂口。和國是見なんしみが是ほと有やす【葉】ほんになァ藤藏に袖なしはおりを着せて黄に出そふといふほどあらァ【はつ】是ハこんや都さんの近さんにたのんでやるのとコレハ山へいくのと【きわ】山へ人かいくなら深見さん首丈さん歯丸さんのみも一所にやつて下せへ【若】豊八と澤太夫か參りました（澤太夫豊八が三を引片手に三味せん箱さけて來ル）【澤】おつとあぶなし紙屑にけつまづくまひぞ【豊】おきやァがれまだそんなに紙屑の出る時分しやァねへもの【豊】【澤】葉立さん今ばんハ大におそふ成りました【梅】どなたもよふ御出なんし【澤】新叶で三坐敷そのくせ仕まひハ三勝の縁切【梅】いやたね【豊】是ハしたり縁切らずさ【澤】私もきらひじやさかひ嘘八をかたりちらして參りました【豊】只今歸りに松坂で。阿部嶋の眞琴さんが御出被成まして。ちよんのまをつとめて抱付たれバうれしげく澤太も私も聲をだいなしに致しました【葉】もふこよひハ仕舞にしたがィ、三味せんもゆるして遣ろふ呑んで噺していくがいゝ【澤】此ごろハ盲人色男てうるさふござります【葉】うら山しひの【豊】此間ハかゝァ左衛門がさんを致しましたから。清姫といふ仕打ハなしやたらむせうに越しますゆへ歸るとかゝァが顔が八面大王さ見へねへからよさわるゝが（亭者ハ橋むかふてなければ道ハれぬゆへ橋をこし）

て行をしやれて越とはかりいふ【薬】ィヽのさこよいも越がィヽ元メをおれがするべい太夫も連れ越しにさつせへ【澤】私ハ越とぢきにしれます此間も寐ている所へふんごんで來てさつて日高の錦木場といふ物しやさかひごふをさらしました【梅】ィヽハな何かミんなわつちが部や置て越しなんせな【はつ】尋て來たら見世でわたしがてうしを合して遣やせふ【豊】世帯道具をお部屋へ置て越さふ【澤】ゐけんに付かふか【澤】【豊】御きげんよふ といつて二人ハ臈むかふへ遊びに行女郎ともおのがさま／＼ふしどに入れハおはつ屏風を蚊帳の見へぬやふにあんとうのきハ迄引廻しはしごだどん／＼トドル ○はるか丸の坐敷で古ひかひのはへた聲で すいのすいほどはまりもつよく只なつかしふいとしふてぐちになるほど逢ひたひものどふマァわかれいられふぞ と文字共富本共しれず口ふら出したいにかたれバ ○こちらの方でハいきなこゑで こゞゐる手先懐へあたゝめられつあたゝめつ。木ゝの木枝ももミぢして色で逢しハはやむかし今ハしんミの女夫中 いかなるさとり切た六禪しうのおぼくにもたどや心がうごかではあらじ枕より裾より襟のせめくれバせんかたなとにれうりばのふ男どもの痩ゝ氣にもなるへし四日八日と見へすけば何かしつぽりとしたる坐敷で永おろしたふくむやふな靜て 去年よりとしハいとしうなりきのふに今日ハますかゞミ神や佛の御ゐけんでも思ひきる氣が有らばこそほのうの中にはくらされふがあなたにわかれかた時もうき世の日かげが見られふか ト若太夫に助を調合して 六太夫 戀を十寸見山彦も廿六夜の灸を背負据てやるのハ恩ならず。すへさするのを恩にして江戸のきつすい一すいの枕に通ふ夢路のちぎり坐敷／＼もやゝしつまりて。不寐のひやうし木かつち／＼。聞へて上艸履の音もたへ／＼になるかと思へハごをん／＼といふもの海へ

落ると。くわらり〳〵かな棒(ぼう)にゝあらであふた嬉しさ別れのつらさとうたふて幾人(いくたり)も通るとおもてのくゞりぐわら〳〵おちかひ内といへゝ又ゐとへ箱てうちん持て石橋でござりますといふ哥集さんはやかつた椠立さん晝來なんしよ。三さんおいらばんにくるよ万公しつかにゐゝびや茂点さん嘉半さんすぐにお駕にめしませ椠立さんおめへのァふとんか敷て有るか哥集さん杵屋へよるか。サァ遣りやキャッ〳〵高ひぞキャッ〳〵。カァ〳〵

跋

子品川を慟歎美曰南方之驕也君子居之朱註に南方は風氣柔弱也と故に張といふは見世番の言の葉にして振といふは江戸入の鳥毛ニて有らし其軟き事岸下に漂泊海月のごとし見通しの新吾左隱し藝を出せば單に薩摩芋の笛を吹に似たり根芋横町の横に行娟飯盛はいやな客に大佛を脫かれ色にしつほりと濡佛をたのしむ新造は客のかへるをしらずして竟寢こかしに逢ふもいまだ日の鮫頭故也爰に逸我なるもの驛路雀と云へる冊子を著し跋を乞ふ予ぐつと承知と閤なすに妙でこぜへすおそろかん新橋の឵駕は鷓胡のとぶに似た山の遊客此驛に入る時は飯鍪果報にま

かせ給へと云爾

于時

天明己酉發春

内新好述

雙床滿人羅

廻シ枕自序

一日予黄昏の徒然なるまゝに。蝙ともに宿を立出。甲驛に趣き。其遊意を見るに。青樓に異として。名代不入の客。幾人の限りなし。妓の言葉ハ。青樓の方言に似て。また深川の里言にひとし。色男の床の内ハ。内藤の森とともにしげり。五寸の素見。送り提灯と倶にぶらつき。夜の四ッ手駕籠。晝の小荷駄よりも續く。藝者意の二上りをひき。至通恐れる板子を唄ふ。衣紋から出す板〆の繻絆にあやまる其聞た風知たぶり。新造のみと倶に。くだらぬ文の此一冊。まわらぬ筆の跡や先。唯じれつてへぞヨウト爾云

此書ハ以紀ノ國屋小春に紙屋治兵衛の色客外三人の回し客ノ床の内ヲうがつゆへに此冊のげだいとなす

山手山人

驛路風俗 雙床滿久羅

總目録

第一　井紀國妓樓霄間世界

第二　俠夫似家長醉顯生質

第三　久左狂藤伊唄句過意

第四　紙治閨中實語離傾情

第五　烏口臥床逢怪婦飛魂

驛路風俗 廻しまくら

發語

夫めりやす五大力の文句に曰へいつ迄艸のいつまでもなまなかまみへ物思ふとハ是坂田が妙音にして並木か名を得しうがちなりへまゝにならぬとあわねハふさぎ逢へハなを氣のもめるたねとハ二上りの板子なれども共氣のもめるのか苦界の樂ミいか程まじなおしよくたりともこの色客の樂ミもなくてハ勤まらぬものぞかしその叉色男きどりにて通ふ客人數を知らずといへ共客百人に間夫壹人り夜每に替る枕の數そふ〳〵ハほれられましきなれども勤い身にハ仕舞のたねと義理一篇のほれづらにふわと乘たる四ッ手駕籠日ゞに行繁ミに通いあげくのはてハ無心を食い紋日を呑裕をまげて拂いとすかなしミ共内にあるべけれどもさとりがたきわ此ちまたにしててらされて見立替突出されてハ外へ馴染己ばれの心からハ夕部の敵ハふりよふが面白ィなどゝふられても道理を付る程なれハよくされてハ叶わぬ理屈也されハ今宵の旦那も明朝にハ忽ち權七どんとなる誠に恐れつゝしむべきハ此迷いなるぞかし○爰に大坂より申ノ方に當ッて一ッの色里有り地名を蜆川と呼爰に

來てハ老若の旅人皆足とゞむる黄昏の賑ひハいふもさらなり見渡せば星と見る夜や此里の客を送れる茶屋が提灯妓家のきを並べし其中に一二を顯ふ【井紀ノ國屋ノ見世】はやたそがれすぎなれハ若イ者つるしかけあんどふへ火をともす見世にハ若イ者二人火鉢にあたつているそべに此家の女房年ハ二十ぐらいかミハひつつめのがくや結ひあいおなんどの所ゝわたのすいたしたるつむぎの小袖は黒なゝこのはゞのひろきはんゑりくろどんすの七ツ過のおびを右の方で結びさげ若イ者に何かさゝやつているそべの板のまのはしにハうらづけとこまげたがあがつているわきてごふんで名ゟ書たる黒ぬりの三味せん箱がある是へいま居つゞけの座敷からあいてかへるのなるべし若イ者大平とどんぶりをひろぶたへのせ持來り見せへ置てかへる是ハだいやからおあつらへの品なるべしはやかげミセにハ女郎居ならびろうかをへだてゝやうふのゑんまといふ身にて帳をひかへ此家のていしゆそばに年頃十七八な女あたま斗りりつぱにゆいあいびろうどのぬのこにほそ帯をしめ茶をほうじている是ハおとゝいうられてきた子なり節句から突出しの部居持くらかへにあらざれバまだいつかふ女郎じミづあんずるに色事で欠落からとゞこの地ごくへおちたとミへる折から二かいよりてうづにはしごをおり來る女郎【小春】まだ年があまり若きゆへおしよくにハあらねど此家での客とりにて晦日かんぜふにいつそくもつろふといふしろもの年ハ十八にていろ白くほそおもておしろいなしの。口べに斗りつけ髮ハおとしばらにゆいうわぎハ鼠ちりめんに赤く花びしをつまあがりに染だしたる小袖せうぶかわのいたじめ二ツつい花色八丈に相をすがぬいにしてうらハふじ色ちりめんのうちかけ白ちりのしごき同ゆもじミす紙をつまに持そへ 花のや〳〵コレ〳〵きんじでもいゝちよつとこゝへきや【子供】アイゝなんざいます

【小春】コレサあのゝよし野やの女中がきたらちよつとしらせてくりやそしてノ二階のてうしをけへてノ逢いだなに。ひら〳〵があるからもつてきやコレサまあよくきいていきやヨそしてノたばこをいれておいてくりや【子供】アイト二かいへ上る ― この里にてハ茶やの女を女中とよぶまたゝひら〳〵とハかんざしの事 【小春】ハかけ見せへあがると【ほうばい女郎】小春さん太兵へさんハ今夜もいなさるか【小春】ウ、ヨきゝなんしナさつきもかミさんのとつからあしたハよりゑゝだからけへれといつてきたのにながすわなモウ〳〵酒をのむとほつてもけへらねへよヲヤおいろさんそのいたこをみせなたれがかいたへ ト是をミていろ折ふしきせがばた〳〵するとおミ

七

やくだゥお茶たくめのこへと一しよにつ〔ぺし壹人はすいやう有いたてを横なぐりにあがつて來る客二人【壹人の客烏口】年ハ三十七八とミへほうかむりつきんたくびにからみつけあいらへだの七ツじぶんの小袖下着ハきじまの八丈こいつハ大きにきたつたのをあいへぶちこんで色あげをしたとミへる尤黑ざやのうらゑり黑八のよおりつきどふかこど六のはねたあとがおちず右の手で帶のしたをちよいとつまミかげミヤを見むきもセずそりかへつてはしごを上りけつまづいて　アイタヽ【若者】おあぶのふございます　ト二かいへ上りぐつと奧の廻し座しきへつれ行【若】まづこれへ　トなんどふたきいて行【烏口】此座敷もひろいの和德屋だと土藏へいれよふといふ所だ　ト床はしらへよりかゝりふところでにて片あしあげて鼻うたへなけヱりやァよヲいィヽ　引ロ三味トヽチヽチツチヽチツツン【つれ】コゥまあすわらつし　トいふ所へ子供茶をもつてくる【烏口】ヲャあめふりにでよふといふ子だどふだあかぎれがいてへか　ト手をつかまへ　こいつァあやまるひつうかいてるぜ　トいふ所へ茶やの若イ者來り【茶】烏口さん小春さんハおわるふございますがどふいたしませふ　トいふはきやく小春たなざしでかうつもりなり【烏】よしさく廻しに寐るぶんの事さ【茶】それでももし【烏】ヲット　いわずとよししよじむねにあるよきづけへなしだがこゝのを一疋美しい所を【茶】あなたなんならお見立なさりませんか【連】やろふそうわふな所をミつくろつてくだつしそして一組【茶】ハィ羽織楽かへ【烏】みなたちで　もちろん〳〵　といふ所へだし物いろ〳〵もちくる【烏】さかづきをとつて　まづひとつきめよふコゥついでくんな　トいつはいのんでミて　此酒もしいたけのだしがきいたからのめねへ　ト硯ぶたのかまにこをとつてくい　此板ァめつそふ塩ッかれへゼコゥこゝのセうがをとつてくんな【子供】ナニこりやァめうがたけでございます　トいふ所へ小春といま一人の女郞そうじのやふれからのだいたてはいる【茶】こちらへ　トいなおろし女郞二人くらいほうへすわる此所おさだまりの盃ごとあり程なくはおりげいしや筆吉おたく來り【筆】ヲャ烏口さん此間ハお久しうモシあなたよふお出たはいまし

た【連】アイトいつたきトきせるをとる【茶や】女房(にようぼ)どもはやおつた トおちたきく【たいこ】よしなセへおつこのわりい

ト三味せん箱のふたをあける【茶】こしけのふとんもいれてきたか【たいこ】ぶじ[illegible]れ[illegible]へぶんのわりい

ト三味せんのてうしをあわせる【鳥】盃をとつて モシ一ツおさかづきのためとおかへ[illegible]【女郎】おゝさへもふ

しいセふ【鳥】まづ〳〵ときにおたくさのふ猫の内のしおいつきのめへで見かけたが【たいこ】ヲヤほ

んざいますかへ私ハさつぱりお見かけ申ませなんだ【鳥】見かけねへはづさおめへがはなはだへお

りてしよんべんをしていたときだものを【たいこ】ヲヤいふ[illegible]のねへおそれますね ト三味せんをとト【茶】【たいく】

歌へいろはにほへどちりぬるをわかよたれそうつねならむ人さと遠き[illegible]【鳥口】いゝ声ではしにもたれ

をとるをゆびのさきで廻しいたるがとれ落し向ふのどんぶりへあたる ホイ トとれ[illegible]どこ[illegible]して口にくわへ[illegible]見て【鳥】こい[illegible]花や

流(りう)たナ生直(いけ)してやらうふと だれもたのこもせねにいけ直して[illegible]へ若イ者[illegible]小盃を[illegible]【小春】[illegible]あいで九[illegible]

実にいるきやくも小春がなじみにていまゝしき[illegible]てきたゆへあまりわるくもせたきなりしかし[illegible]へあいその[illegible]とわるくなるな

【客】年ハかん平とのくらいとみへ黒[illegible]うもん[illegible]なまじかきしたてくりむめの[illegible]はお[illegible]たびに[illegible]のきに[illegible]にくわ[illegible]ている【小春】さしきへはいわれなから よ

くおいでなんしたね【客】よこめにて日ながら いつもござ[illegible]しやの【小】にっこりとわらい ナセこんやハおそくお

出なんしたへ ト いゝなから火鉢のそばへすわる【久左】イヤけふハ組下(くみした)に引込(こみ)があつて居残(いのこ)りをしたゆへじや【小】

フウコレサ喜八どん [illegible]の事 赤坂へたよりハねへかへ【茶】ハイ明日たよりがござりますと【小】こ

んならあしたの朝みをかいておくから人をやるならちよつくりしらせてくだせへよ【茶】ハイ　ト盃をとり客へさし　ちよおすいなさりまし　ト戻物をたし　私もちよとしよくらんとでかけませふ　ト鉢物なぞくう　【客】モウなん時だろうの【茶】ハイ四ッ過でもござりませう【小】コレサ善八どんいゝからけへらつセへョ【茶】ハイ此間は長次がおりませんから大キにいそがしうござります【久左】モウいきたまへ爰はとゞんと納りしや【茶】はいさよふならごきげんよふおむかいは【久左】いつもの通りじや　ト茶やはかゑりいりかわつて若イ者来り八番をよびだし何かさゝやくと小春うれしさうなかほをして又何かさゝやくにそ／＼はなしゆへいつかふわからずよく／＼きゝたゝやば小春が命とおもふ客がいまゐりたるよし小春はまた此部やへきたり小ともをよひ【小】コレサ奴しの床はとこた【子】中二かいざいます【小】つれもふしていきや【久左】チトまたい給へ小用にいくじやて　トろうかへでる【子供】ヲヤこつちでざいますョ　ト客の袖をつかまへて行此時九ツのひよふし木チヨン／＼／＼ろうかのおくの方でひけだヨウヰとゆふこへかする内先さしきのとなり部やにはでふろくよつた客とみへまきじたてしやべつている此きやくいつたいとびのものなるが二人いゝあわせはんとふきとりにており座しきはしゆびよくしおうせたるがあまりのみすきたるゆへ大きにおかぶ中の字をきめる【八】ケイ、コ、　このあまアト、とんだふんばりだじやァねへけへ　ナンタ　わつちやおびよふをとかあきれへだもキ、きさあつるゝ此八さまなんさあ帯をとかねへ女郎はめした事がねへわへ　トいふは先きやくかこへばかり行ゆへなり五寸の女郎は初かいより大かた帯をとくゆへなり　イ、いゝかとおもやァがつてたけへつらあしやあがる【女郎】わつちやァこねへだ丁からくらげへをしてきいしたからとちのふうをしりいせんきにあたつたらかんにんなんしとふともなりいセふわな【八】シ、しれたこつたへなんだ丁から

くらげへおすさあじいわへてつほふからくらげへでうでにやあ染(その)そくなつた唐(から)くさァミるよふなかまびがあるだろふしはつたれめへ トだん／＼こへが高くなる所へ 【連】おきて来り コゥ八かふよつたな／＼やかましいゼしづかにしやな宵(よひ)の約束(やくそく)をわすれたかへ【八】ナ、なんだやくそくだわらじを一足(いつそく)がきいてあきれらあおらあにやァしねへがコ、このあまのつらがたけへれへこんなやてへぼねへあがるのじやァねへがなけふれ親(おや)ぶんから二人(ふたあり)で壹分しうぎをもらつたからしぎよふのためはじめてしものやてへぼねへきたのたわへほんのこつたがかミのおなじみさまへいきや五十ヅッで三味をかり心いけうひかセてたのしむわへバ、はあなつらだへ【連】コゥ八いゝかげんにしやなだしきるゼコゥげへばわりいゼ【八】此やろふれイ、げへぶんのいゝふりをしやァがつて親(おや)ぶんのはおりをかりやァがつてきつけもしねへできやァがるからぴら／＼してミつともねへわへけふも井戸(いど)げへのつなひきにいきやァがつてすべつてころんでへなつ土(つち)をよこつつらへくつゝけたのをわすれやァがつたかわれがでるまくじやァねへすつこんでいやァがれ【連】このやろふれあま口にすりやァつけあからァいゝかげんに口をはたきやァがれ トよこぞつほふを一ツはると【八】ク、くらァしやァがつたながつてんしねへ／＼ トしまいにハつれとけんくわになるとわかいものたぜい来り二かいより引ずりおろす跡ハ大風のふいたよふ也扨また二かいの口の六ぜうにハ小春がいろきやく紙や治兵へ是ハ部やをもらつていれこもよけれどたでへけつくめだつこわるきゆへわざとまわしにおくなり年は廿四五いやミなきいろ男せいらつじまの下着にこんちりめんのしゆばんにて床のうへにはらばいにたつているそバに小春あほむけになつてねていろびよふぶにハりうもんのやねいた

小てねづこがへの拍子おりついの六帖かけてある其そにはおちやたていたしんぞう三人いる客人のしんぞふ【花】りようほふのこひんへやいたかミをひつさいてつけつきやくになつたとミへおかしなかほゝして紙治さん薬があるならちりつとばかおくんなんし【治】どふした【花】いつそ腹の横丁で虫がおこつてなりやせんヨ【治】そりや、おうかたしたの木戸があけつぱなしだらうか、サ【皆々】ヲホヽヽ治兵へはおらこれひめじかわにてうらは二重どんすの二んぶりからきんたんえんだしてやる【花】ありがたふざいますヲヤいつそいゝにほいだヨ今宮六のしたそふ是はまだ三せへはでつひら〳〵のかんざしであげぐらいおしうちのたわ【染】わつちにもおくんなんし【花】ばからしいおめへはなんともねへのに【染】わつちもはらがいてへものをトいふおりからろうかをわぞうりのおとがすると【小春】おいろさん〳〵【ほうばい女郎】わつちだよトせうじをあける【小】ヲヤお糸さんかおめへとおいろさんはどふもわからねへよトいふはかほをミすゝもらうかたとふるらわぞうりの音にてあれへたれさんだといふた大かたしろなりいれたもの也【治】いとさんへゑんねへなうなぎをとつておいた【糸】こりやァおありがたふおぜへすまあしたへいつてきやせふ【小】おめへこん夜は勘さんか【糸】ナニはつたマァきゝなんしナトはいり口へかゞミいつそとわそふな角力取での酒はつかりのんでのふざけたうたァうたつているわなト治兵へがかほをミてうらやましいせけへだョつらくつてならねへぞョウ引トントろうかを一ツふんで行【花】この子のつむりにはいつそたばこがついてるよあやしいの【染】ヲヤほんにかへこりやァさつきいねむりをした時たしかつけたろふよ今宮六のしんぞうあんどふへほち〳〵かんざしで穴をあけているが【とよし】ヲヤ此子はこい替りがしたよ【花】するはづさ越後屋の伊のどんとこれ〳〵だものふ夕部中二かいのは

しごのしたで此子のつけみをひろつたよ【染】うそをつきなありやァむだがきだものを【花】なにむだがきなものか伊の御もとへとかいてあるよそこの枕の引だしへかくしておるたお年さんだしてそつからよんでミな【よし】（ト枕の引だしよりなめくじのはつたあとをミるやうなあくひつのふミをとりだしあにてミる）【染】（なきごへにて）いやだよよしなよ（トひつたくりひつはりあふうち中からさばけるとその半ぶんをよむ）【よし】ナンダけへハ御いやましくもこなた心のうちコレサ手をだしなさんなお花さんよくおさへていなヨフウ少しハ〳〵御ふびんと御くませいろよき御かへり事サァなんだかお手がいゝからさつぱりよめねへよフゥねがふダノ御事に候【染】（トなミだながらにむしやぶりつきとふ〳〵此みをとり口へほうばつてしまう此さわぎを若イ者きゝつけて来りせうじをあけ）【若】ごめんなさりましこの子たちやァとつくひけをうつたのにはやくいつてねなせへいつ迄も〳〵お客のめへもあらァばか〳〵しい（トしかかりろふかのかけあんとふをかきたてゝ行）【染】（こゝへにて）セわにやァならねへうつちやつておきや【よし】そういつてもふいつてねよふじやァねへか【花】またこん夜もいつしよにねよふ紙治さんお休なんし【治】もつとあすんでいきな【よし】アィ又目だまがやかましくいふよ（ト三人たつ）【小春】コレサついでにそのあんどんをそつちのほうをむけていつてくんな【染】アィ小春さん明日よ（ト手ならい子が八ツさがりといふセりふいゝはたくさはしごをおりかけミセのくらがり八はへる）一（あとへ二人さしむかい）【治】こん夜ハいくつだ【小】三ッさだけれどもどれもそねへにつとめづといゝ居つゞけが壱人のそしてかのおやしきよそして一ッハ初けへ廻しさそりやそふときの

ふそふいつてよこしなさつたものを二まいつがふしたからまあ夫でみのやのほふをかたづけなヨ「治」ゥ、夫じや大きにでふりが出來る「小」まだたんといふことがあるがちよつとつきやつてくるからねづにいなよねちやァいやだよ トミすかミたちちセう じをあけていで行 へさてまたかのやかたものへ先刻よりとこの内に 壱人まじ／＼していたるがたばこものをあきて んぜうのさんをかんぜうしたりあんどんのわきからでたひしくもをきせる先でおいまわしゆきがたをたづねて見たりまた へきせるのやにを とふしたりしてもはや八ツにもならんと思へどもいまだきたらすこゝぞいちばんおかぶのかへる／＼といふ所なれど もそれもあんまりふる いとたゞのつゝそつゝしていろおりか一夕霧の らとなり座敷にへげいしやのこへにて一上るり へ過しよすがのかねとを思い出してたつゝ居ッ腹立まぎれてうしさへあわゝどふしてかふしてと胸ハ二上リ三下り今のうき身の心から夫ぞといざや白糸の哥のセうがにあいの手やかわい男に逢坂の關よりつらい世のならい「久左」ハこの上るりをきくとわが身 のうへにひきあてゝぐつと併 左衛門き どりに歳 ァ、あの哥で思いだした跡の月の廿日の夜ハ小春とおれが一ㇳ枕だきあかした其嬉しさたゞ其主ハ替らねと替つたハあいつが心おれひとり床へおきいまゝでこすにいよふとハ となりノ 上るり へ思わぬ人にセきとめられていまハ野澤の一ッ水「久左」ァそふじやよゝされるのもひとさかり女郎の心と秋の空ふられやすいハ客のならいじやいつそあわずにかへろふかィャ／＼大切な金銀をだしもとめたるあの小春にあわずにかへれば此むねが 上るり へすまぬ心の中にもしばしすむハゆかりの月の影むざんやな夕霧ハ流れの昔なつかしく飛立つ思い奥の間の首尾はくちセぬ縁とゑん胸と心のあいの山あいのふすまのぐあいよく トおりからてうどろうかばた／＼にて小春来りせうじをが らりとあける「久左」おどろいてよぎ上るり引かぶり

〽ころりとこけて空いびき【小春】もしへ〲ねなんしたかへおきなんし〲 トかたをゆする【久左】ハ小はるをとつてなげのけ ヤコレ小春殿とやらめばるどのとやらこなたのよふなひまでハござらぬ三十五人の組下をもちよる晝勤る久左衛門こんな時寐ゝばねられぬじやまなされなそふかどの ト小春を夕ぎりとみてうぬハなをも伊左エ門きどりニなり又小春ハ此しうちいつかうわからずつきとばされてあきれゐへり【小】ついぞねへとんだはらたちよふさ なんだかわけをいつておきかセなんし【久左】人をばかすたつぬげいセい狐女郎きつねなら初午におじやとうりや〲〲〲〲 トまだいつている【小】ヲヤきみのわりい狐だのたぬきだのとなんのとだへ ト枕元にかゞんでいたるが アレまた手をうつよやかましいちよつといつてねかしてきやすよ トほかのざしきで手をうちしをわがきやくのつもりにして小春ハすけなくも部屋を立出る又きやくハあまり伊左エ門きどりがすぎて床へもはいらずでゝゆかれまたうぬひとりとなる【小春】は夫よりまたわが部屋のいつゞけの客の床へ行セふじをあける此きやくも同じくお定りのたぬき【小】もしへ〲ねなんしたかへいつきてもねていなんすよよくねるのふヲヽさむいちよつとてうづにいつてきよふ トまたこの部やを立出とゞハまた紙治が廻し部屋へゆきうわぞふりをたゝみのうへまではきあげセうじをたてる是ハほうばいの女郎がてうづにいきかへりいつでも紙治が部屋にばかりうわぞうりがないであるゆへあたのしミだのおうらやましいのとなぶられるがつらさひとつにハむねをなほっばいなぞかほかの客をふづとめにするとだんなへいつゝけやかましくいわれるがつらきゆへはき上ておくなり【小春】ハひようぶをあけ床へはいりみすかミを二三まいとつて枕へすき跡をふとんの下へいれたばこを一ふくのミしごきをときふとんのそとへだしうわぎをぬぎしたぎいちまいとなりてよぎの内へはいり【小】こつちをむきなよオヤときなんしな ト治兵へか帯をときよぎのそとへくりだしすこしもたれかゝりてびよふぶを引まわす此内のこんたんいろ〲ありといへどもしねしなふとのなかなれハたゞひそ〲ごへのむつごとゆへくわしくハきゝとれゝまつたあまりくた〲しけれハ爰にもらす 〽折から若イ者八ツのひようしぎをうつてまわるいま壹人ほうきにてかたくぎをはきよせてゆきこかいもひつそりとなるむかふの部やから一人の女郎いでろうかのなかほどまでくるとあとさきをミてうわぞうりをぬいで手に持五六間さきのあき部屋へはへる是ハ此となり部屋の客と色ごとにてあいかたの女郎が廻しの方へゆきたるすをしりてとなりべやからしきりのふすまをそつとあけてはへりまたうわぞうり

た手にらちしハあし□に二ほうばいへけとられそじとの心づかいなるべし一こゝにあわれをとゞめしハ雷にあかりし小春が初かいまわしのきゝくなりしたてうづばのわきのはなれべやにおしこめられ思となくべやあいといへとらあきべもと〻へくらやミのさみしき部やにたゞひとり小春ハざしきでミたばかりいまだへやへハかほさだゞすあつくものハせんこく来るあぶらつぎおり〱てうつばのげたの音がきこへしかこれもときゞはやうしミつも過しころ　【烏口】ハひとり寐られもせず後悔先にたゝざれどもまわし夜具いわたうすきにいとゞ寒さも身にしミて折しもふきくる夜あらしにつれて聞ゆる遠寺のかね夜ハしん〱とふけわたり犬のとふぼへ内藤の森にひゞきあんどふの火もきへしにものすごくなまあつたかき南風のさつと吹くる其折からしきりのふすまさら〱とあく音しければ【烏口】ハおどろき夜着の内より是をミるにやせおとろへたる女のすがたにて其年二八斗りなるが色水あさぎのごとく黒かミハ左右へミだれ口よりハ青ゝたる息をふき出しくろくひかりたるものを着し烏口が寐いきをうかゞふ有さま【烏口】ハひと目見るよりも惣身ふるへてはの根もあわず夜着の袖よりのぞきいればかの者糸よりほそき手をいだし障子へつかまりよろめきながら烏口の枕もとを目がけて来る此時【烏口】ハ誠に生たる心ちなくおもい出せば此間爰の内のてうづ場のまどより細き手をいだしたるとのこわさいままた爰へ顕れ出我をなやますものなるかアラ恐しのゆうれいやと口の内にハ堀の内のそしを祈り南無日蓮大ほさついまわが此難を救い給へと息をころして居たりけるかの者ハよろばいながら枕もとへかゞミ宵に食せし硯ぶた其外の肴等を手なさしのべて是をつかミむしやり〱とくらいければ【烏

口】心におもふよふ是ハ日外品川の倉田にて年を經し一疋のとら猫女郎と化たるためしもあり
かれも其たぐいにて猫の化したるものなるべしと爪も口にハだいもくをとなへいる彼者ハ肴を
殘らず食終りやがてすつくと立けるがようノヽとして鳥口が夜着のうへへどふと倒れければ
【鳥口】ハぎやつとひとこへにて忽に氣を失ふ此こへを寐づの番きゝ付欠來り是を見るに鳥口
壹人目を廻しいたりければ若ィ者を呼おこし薬よ水よと大さわぎとなる　〽我また此よふくわいハ猫でもなくゆうれいにもあらずとやについたしんぞう也一此となりべやハひつこんでいる女郎をねかしおく部屋にて女郎やりじやけんなるハびよふきの内ハろくにくいものもあてがわぬゆへたゞがつノヽとくいたいノヽおもひたゝまり此となりべやに來あるときハいつでもきたりてぬすみぐいをするなり夫もあらわれる時ハわかいものゝせつかんにあうなりまことにあわれむべしかなしむべきハ此くがいのつとめなるぞかし

〽鳥渡此所に一寸御斷申候彼小春治兵衛道行のまへ迄ハいろノヽこんたんありといへども丁
數も多くなり御みなしも御むもじさまとあらノヽ書殘しぬ

はや春の夜のミじかきにせんりう寺の六ツのかねゴヲンノヽノヽくゞりの音ぐわらノヽノヽハイおむかいのこへとともにばたノヽおりるはしごのおとおもてにハはやかごかき高井戸から出る馬子かやぶれまどのでる手拭をほうかむり　哥へよんべしのぶ
とわしよだましたによヨウ引　くつわの音　チヤンラノヽノヽノヽノヽ

天明九年正月吉日

古今奇談 閑栖劇語 五冊 出來	養生嚢 二冊 出來	繁榮百人一首 全 出來	神儒佛三教問答 二冊
諸説辯斷 俗僻反正錄 五冊 出來	俗字節用集 一冊 近刻	易學當用考 一冊 小本 近刻	神田紺屋町二丁目代地 本屋善藏

京傳予誌

寛政二庚戌新鐫

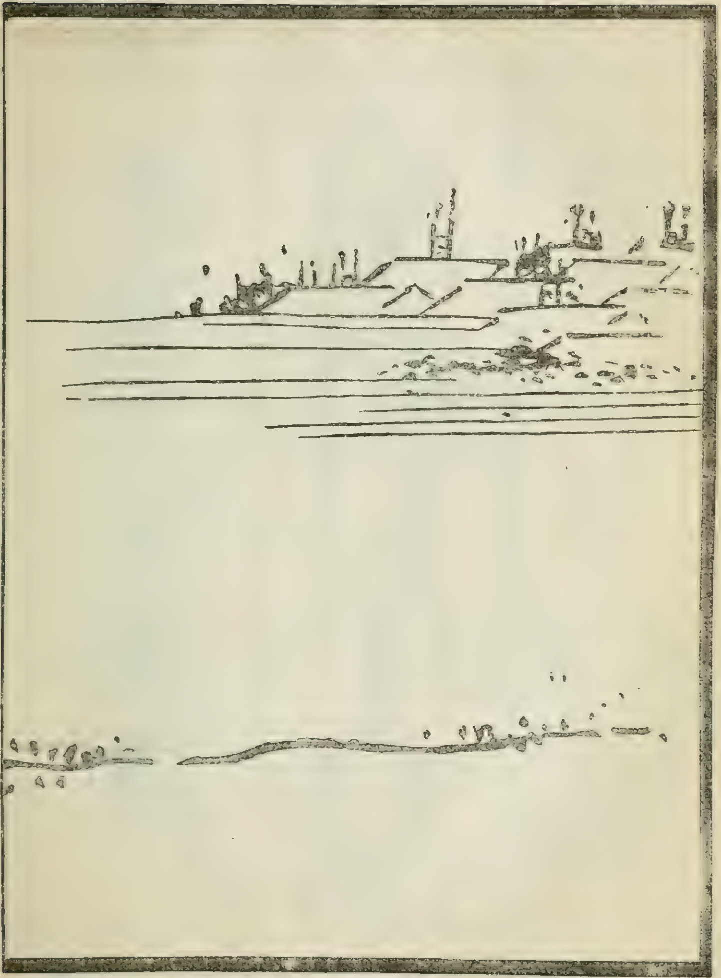
戯作四書

京傳予誌

書肆　大觀堂

序

近來世に行るゝ。經典餘師と云書を閲に。塩梅よしのおでんより。上手をゆきたる美味にして。盲目の杖闇夜の提燈。愚鹵な八兵衛をも明し。土手の八町をも照して。徳に入の大門口に至らしむるのはや籃輿ハ。此にしくもの有べからす。雖然乾坤でかく。癡呆組の侠々徒ハ。馴染のみほと難有からす。妄作ほとハ手に不觸。固や小八にして大道を學ハ。鱣を割に鯨の刀を用が如く。是等にハ難からん。彼等をりやうる庖丁にハ。鈍作者か相應と。笔をつ操て立あかり。已に艸紙を綴けり。夫大樂通用とハ申ども。永樂通寶の貨にもあらす。豊後巾と号れとも。



兼好法師の類にあらねハ。戯作の四書とハ恐あり。顔靚らるゝもはつかしけれと。頭巾と見せて頬包。妄言から導木曾海道近道の拔裏も。至る所ハ芝蘭の室。鰻の店よりかんばしきを。一度嗅で實に入れ。虚々邑の瓢介等が。鼻毛にとんまる蠊蜋こい〳〵。そつちにやァ道ハね云爾

山東市隱

京傳自序

旹

寛政二年庚戌孟陬

戯作四書京傳予誌

目録

○大樂

大樂ハ月雪花をおさきにつかひ色と酒とにたのしんでたることをしらさるをいましむ

○通用

通用ハ質物の通用物の事にしてひといくめんの女郎買をしめす

○豊後

豊後ハすべて江戸げいしやのこんじやうをうかつ

○申

申ハまうしんすの申にしてをつりきな所をさとす

意氣狂句

堅衆曰大樂功者之虚言而兎角入欲門也於隙可見通人爲樂氣質者獨頼金銀之損而貧乏次之客者必由是而迷焉則庶乎氣差矣

大樂

それ大樂のうへをいはゞ春は品川の汐干にあそびて身代のひかたとなるも思はれず戀の淵の深みにはまりてれん手くだといふ悪魚のゑじきとなつてはじめてをどろけどもをそまきなり或は上野御殿山飛鳥山の花見に幇間藝者を引連ては諸行無常の鐘よりもやたらむしやうに散したる紙花の下りを食ひ武家方の血氣盛なるは春色に心うごきはじめはよいりやうけんにてすいふん錢のいらぬ樂と出かけ一日金一分の借馬に鞭うつて遠騎の游山もかへさには忽ち心の駒の手づなゆるみて大門口につなぐ中の町の家櫻は寛保の昔にかはらねど人をなじからさる突出しの君が名びらきの蒸籠饅頭の山をなし櫻もひよんな所へうえられて生た花に見らるゝ花のくるしきぞかし目に青葉山時鳥初堅魚かつほ／＼の聲にはじめて心づきもう夏が來たそふな今日はい

つかだと禿に聞くハ居續に氣ぬけのした客人と見ゆる其居續のるすハうへを下へかへしとゞのつまりハ二ばん番頭かむかひに來てしかつへらしく左やうなお心てハこさりませなんたにといふにこちらハ闇か雲にてをきやァかれそんなましめをいはすとマァ一ッ呑かよいイエく左様な氣せんてハこさりませぬとハいへとしたしハすきはら御意ハ吉原一ッのミ二ッのミついにハ酒か人をのんて宿の事ハエ、まゝの川へ流してしまひ氣違ひ水にをほれてともに碇をおろし木乃伊とりか蜜人になつて遊ふもあり夏ハ墨水に游舩をうかめ江戸藝者のひつこぬきをつかみこミたんなひとりに神八人此人數舟なれはこそ涼哉と口すさむそはから三弦四てうてひきたてゝの大さハきさいせんより陸に此舟を見て居たる隱者と思しきか嗚呼愚なるかな花飛び蝶をとろけとも人不知と詩の意ハうたへとも盛者必衰の有理をしらぬ其のはつしや千住の惡臭をかいてさへ女ハ臭皮袋と云所に氣かつかぬ俗物しやものあのやうにされくもミな臭骸の戯れしやほんに凡夫てハあるぞと憂世を悟顔なるも實は錢なし組のまけをしミ金持にはそんなめいつた思ひハなし物に感るも根か己か心の欲か所にしたかハす志を得ぬゆへの述懐そかし此隱者も錢かあらハ生者必滅の場所へ氣もつくまし陸から舟を評するも岡燒餅の謂なるべしむかしハ口もくれぬはや舟にのれといひしが此舟ハ口もくれぬ早く舟からあがつて呑なをさんと神頭の何某が

水室に下知して隅田堤の下にこぎよせ中田屋かむさしやかたゞしハ舟をもつとのぼせて眞崎の崎玉屋といふはらか凉といつばこれも酒色の二ッに而已とゞまるなり文月ハ廓の燈籠五町を照しもし總角に棒があたるともなか〳〵闇夜とならん景色なし軒毎にともしつらぬるてうちんハ客人の身よりあくがれ出し金玉かとうたがひ唯人の氣をつりあぐるせんまいしかけにハ萬客の目をおどろかせさらに内しやうのからくりと思ハれず絹張の燈籠ハすいて見ゆれど女郎の薄情なる胸のうちハすこしも見へず二のかハりの硝子細工ハ名君をさかさにつるしたるかと思ハるこれもそのをこりハ正德の昔中万字屋の玉菊が追善のためにとぼしはじめしなれど今ハそれにひきかえて衆人を迷ハす煩惱のなかだちとハなれり近來附合の句に其意をいへるあり去るものハうとく燈籠のさいく過とまことにむべなり十五夜の月見にハ高も賤も今宵の月をめでて詩を作哥を詠し發句を按ず又此夜色里のにぎハひいことにさらなり此日深川八幡の祭禮にて土橋仲町三櫓新古の石場にいたるまで一年の大紋日月見と祭禮とを兼備したる遊び千日にかつた茅も一夜にほろぼしてつけのぼせとなりもとの百姓となる店物あれバ百日の說法も屁一ッに放て院をひらくお寺様ありこれぞ眞如の月にあらでついにハ隱居の月見としられたり旅行の月も一風流と南驛の傀儡にうちこみ兩松坂村田新叶已がさま〳〵介六の氣位になり髪のはけの間から安

房上總の月見で興し田毎より手事を考へて異見する伯母捨山あすか日業をさらしなまでも須磨ぬ顔してくらすハ損と氣ハむしやうに高輪のまハりかぬる錢金散して遊ぶもあり其外端〳〵のいさゝかなる色里まで月の光りのワかなくて夫相應の月ハ見る事ぞかし青樓の月ハ今さらいふも愚なり亦海安寺正燈寺の紅葉見にハふしきや今までありつる息子とり〳〵化粧の見えぼうしてはてハ鬼住里にこけてしまひ丹楓の錦より正眞の紅閨の錦にくるまるゝ樂ミ又ワすられず冬ハ雪見とて家根舟に居火燵うハきにあらぬしんの事晋の謝安にまけぬ氣で馴染の妓を携へ雪見にころぶ所までといふ句によくかなひこじまが崎よりむかふ嶋のことく浮舟の心意氣も見ゆるなり春秋の角力三ッの戯場杉田の梅見江の嶋の月見玉川の鮎狩眞間の紅葉見金澤の雪見四季折〳〵の樂ハかぞえ盡し難し是天地と云細工人の大からくりにしてたのしミつくることなしかれども樂ハ月雪花の三ッにとゞむといひながらつまる所ハ女色ほどの樂ミハなし月の清きとて女郎の胸の鏡にしかす雪の色白なりとて抱て寢たためしもなく花ものいはねハむなづくしとつて口舌もならずそれよりも眉ハ月をまかし肌ハ雪をあざむき姿ハ花をはぢさせ雨にいたます嵐にちらぬ美人を見てたのしむほと如何外に樂のあらんや花より團子色氣より喰氣とハ飢饉年に生れた人の言なるべしこれ無量の味ひある女色の極意しらぬ故ぞかしと衆人皆是に同心にて

今時の樂を見るにつまる所ミな女色へこけるなり昔も人情にかハる事なく夫子衛の君が女にのろきをミてワれいまだ德をこのむもの色をこのむが如くするものをミずと曰しなり兎角捨がたきハ此道の迷ひとしられたり然れども富乏のわかちありて艶なるたのしみしたくても難し花がうつくしいとて飛鳥山に居續もならず月の明なりとて引窓から見てハ興もなし裸で雪も面白からずされバたのしみハ女色にとゞむるとハいひながらつまる處金なり金さへ澤山なれば愚なるも奇才と思ワれいやしきも貴見へ鶴にのり鯉に乘じ瓢から駒を出し石をうつて羊となす仙術よりもはるかをきをこぐ猪牙ハ天へのぼり四ッ手駕に中をとばすこれ金術の勢ひとしられたりしからバ金なくてハ樂ハならぬかと思へどけつして左にあらず顏淵ハ臂をまげて枕とし樂ミ其うちにありと大平樂をのへしがこゝを思へば樂ミハ又金にもあらず唯心なるべしその心の樂ミといふハ世の常の俗物にハ得事難しされバ樂ミハ其身に應ずる處あり骨牌にくらす日もあれば酒にあかさぬ夜半とてもなしこれも己が好ゆへのたのしみなり又女と心中してあたらいのちすつるも樂ミのこうじたるものなり又酒半買て鉢植の蕃椒見ながら女房とゝもに一盃のんで嗚呼てんとたまらぬ天德寺ひきかぶりて寢てつくるもたのしみと思へば樂ミぞかし金持とても樂ミの極意をしらねバ氣欝を散するために樂ミをもとめて多くくるしみに至るならしかれバ

大樂の樂の字にをゐて得事あらバあやまちあるべからず昔世の諺に親苦勞する其子樂をする孫乞食すると一人の樂より老と慈との二ッをうしなふいましめの言なりこれむべならずや昨日まで日本一の凉の場處ともてはやされ貴賤群集したる地も今日ハ忽一河の流れと變ずこれ淸水ならぬ盛衰の世の中を天の然しむる處なりほんにそふじやナァと歎息するもをのれがをひこみのしるしかチョン〳〵〳〵

大樂畢

戲作四書京傳予誌

意氣狂句

通用

若衆曰無錢之謂通不迫之謂用通者半化之貧乏用者紋日之出入其錢乃寛永年中通寶大夫恐其久而絶也故作之文以授格子其子胥言無理中亂寢客衆不逢其夜僞千里語之則渡苦界省速則恨藏於店下略

それ通とハなんぞ列子いへることあり徳を以て人にわかつ之を聖人と謂財を以て人にわかつこれを通人と謂と此言こじつけて見ればよく今の通としやうする者にあたれり然れども金銀ハのろまなやつでも澤山に持て居るなり氣質ハ安く難得唯通と野夫との差別を知るを以て通と謂ひ通と野夫との差別をしらざるを野夫といはんか扨こゝに通用の二字を以ていさゝかすこたんをして風諫せん夫万里を非といひ非を十あハせて通といふ是をもつて考れバ千萬里の外までもよくせうちするを通といふべし又書の首末全を通といふしかればば初會の首よりきれてのく末までも全くしていきかたのわるき事なきを通といふべし如來に三妙六通あり𦬇に圓通あり条の

仙人も通をうしなふては下界たはけと笑れ狐も通力うせては麹町の市にさらさる吉原通深川通芝居通といふもよく其道を得たるをいふべし又用の字をいはん天地至功なし萬物全用なし又人に四用ありと人用らるゝ時は下女もたちまち御新造様とあをがれ用られざる時は麒麟も魯人の古傘に包まれ牡丹紅葉の類とならん又傾城の言に金銀をやくそくし紋日物日をたのむこれを總て用といふなり又急用事と書たる文に用のあつたためしなし酒屋の御用御用の外車留これ等にはもつとも説なし又通用とつゞく時は質物の通用物の事なりこれについて頃日一ッの奇談あり爰に表徳を烏有といふ者あり其身代は飯器に車をしかけるくらゐのくらしなれば何くらからず一盛は傾城買に身をゆだねて花にめで月にうかれ雨にもしのび嵐にも通ひ逢方の鼻ひくからねば宿の鴫居を高しとせず元旦の庭のたき火より大三十日の蛤賣來る頃まで月雪花の三ッ蒲團の上に座して他念なかりしもそのとゞまる事をしつて而后世に隱笠きて蓑輪の別業にひきこみ孤獨のくらしも世をあぢにすねたる處なるべしされば昔とつたる杵屋流の三味線も心の根〆よければうは氣の調子ふられず憂世を壁チョロの帶に結び邊鄙も心安ければひとしほ住吉屋の煙管に心のやにを通し小人閑居して不善をなすのいましめを常にわすれねばかんしやくも片肌をいれて臍下にをちつき腕のいれぼくろも外山の霞にひとしくだん〳〵にきへてなくなり額ぬ

きあげしもいつしか角とれてゆたかに眠る手枕をおどろかすハ誰そ時宗にあらねバ祐成が幽靈にもあるまじく時ならねバ池の水鷄とも思ハれず夢かうつゝかと首をあぐればこれそもいかに異類異形の怪物あらハれ出たり風をおとし家うごきてをそろしさたとへんかたなく濕氣の臭き事鼻をつらぬく鳥有ハ一目見るより氣も魂も天上へ飛でさらに人心地ハなかりけるが彼化物のうち頭と思しきがくるしげなる聲して申けるハいかに鳥有かならず懼ることなかれ我〳〵ハ壽永の昔西海にほろびたる平家の一門にもあらず化物屋敷の煤掃でもなく質物の精なり世の中のたハけどもの爲にぶち殺されて繩目の恥をうけ七ッ屋の藏にしづめられて浮ミもやらず流もあへず迷ひ居ることはや八か月にをよべり夫昔より質と云物なきにあらず戰場に人質あり諠嘩に言質あり借金を質にをくとハ女房が自腹を切る時の捨言葉にして清水の舞台と同日の論なりむかしさる何某の上人とかや十念を質にをきたる事ありしが貸主十念のうち一念をもどさず故に此上人生涯九念いミまうしけるよりて九念寺と云寺号何所にか今にのこりたるよしを聞くしかれバ佛の方便ともなり又露と云字を質にをきたる連哥師もあれバ風流の友ともなれり古人訥子ハ己が名を質にをきたる噂あり新田義貞ハこがねづくりの太刀を相洲鎌倉稻村が崎の海中へ質にしつめて軍の利運を龍神にくどかれし事あり龍神これを感應して彼太刀海上に浮流しと

かやこれ質物に流るゝといふ言葉りしハ此時よりの事なりけり今に其所を質利か濱といふも此所謂なるそかし又質物といふ言に由てハ萩の上借着の下質あり或ハ燕と雁の入かへ物あり天地も又質屋の度をいはゝ置主受人のなき質物をとらす火事盗人ハ兩損鼠食ハ置主の損と提札にたゝしくしるす或ハ質に曲ると云言あり是十の字の尻をまくれハ七の字となる是よりをこりしこしつけなるよし七ッ屋と洒落るも則此ゆへんなりそれもはたにふんりよある時ハ唯ゆひをまけてミすれハそれとさとるなりしやれすきたる凡夫にあらすや唐土にもありと見へて質店を印子舗と云質物を典貨といひ質札を當票なぞと云俗語あり　固我〳〵ハ持主の身がハりにたちて憂かんなんをこらえ火急の難義をすくふものなるに今ハ已か放埒に身をもちくずしやゝともすれバ我等をくるしむる事ぞかし或ハ女郎を身受せん爲に親からゆづられし家藏を家質にいれ共又女郎も間夫に狂ひてすつ裸となり　笄　駒下駄　褌　まて質入して苦界十年損料屋の爲にくるしむあり或ハ初堅魚の名代に袷をくるしめこゝが江戸ッ子の尻の穴の廣き所と隣家のとくじつをそしりながらこれを喰ひ又ハ一人の娘を人質に入て博奕にうちこみ又ハ五臓のわづらひなる夢をたのミて富の札を買過し主人からもらひためたる仕着せの布子を殺もあり武士ハなまよらならぬ大小もまげ出家ハすぐな心の佛像までもまげるげな質を置てうける事なきハ恩をうけ

て恩を知らざるがごとくなりとても我〳〵つうくつならず利あげをされんよすがもなければ此身ハ鼠にくひさかれついに骸ハ柳原の干店にさらされん此恨をはらさんにハ貧乏神の末社となり彼恩不知の徒が皮肉にわけいり長く是等をくるしめん汝ハすいもあまきもせうちの介なれバ此事をかたりきかせ世の中の不埒者どもに傳てもらひうけもどさんあてのなき闇雲質を置ぬやうに心得させんと質屋地獄の番頭大王にしばしのいとまをこひこれまであらハれ出たるぞやとヒウドロ〳〵のおさたまりかきけすごとくにあらすして南風にあふた海月のごとくふはり〳〵とうせにける烏有も始のほどハおそろしかりしが質物の幽霊に逢ひし事古今に奇なる事なれば彼等が述懐なか〳〵面白く有増をおぼえしを予にかたりしが彼質物の精かいひし如くもし金銀の急用ありて質を置ともうける心がけなきハ恩をうけてひどき工面をまぬがれし恩をしらぬにあたるべし共時ハ必質の怨念とりつきて己〳〵が身をくつがへすことうたがひなし金をひろふたら浴衣を染よ肩にかなてこ裾にハ碇質に置ても流れハせまいと謡へども八月がたてバ流るゝなり利上のしがらみせんよりもつまる所ハ儉なりいろは歌哥のしの字の一句に質置事が上手にてと女房をいましめしも不宜乎

通用畢

豐後

樂酒亭主　　意氣席中

此長幕茶番而時語之不肌柳橋乎　有隙日待夜來未茶飯食乎
人不聞而不喜不亦素人乎

土佐上下に外記袴半太羽織に義太股引豐後かあこや丸裸といひしハ予等が生れぬ前の事にて今ハ土佐ぶしも出しがきかず外記ハ勿論半太夫も語人なしあまつさへ中あふミの半婦もまでが其名絶たり義太夫ハ今に盛なりといへども是も好不好あり豐後ハきらひなく常盤津の津々浦々まで富本の末廣く世の中此二流のとゝかぬ處なく上ハ玉簾のうちより下ハ薦張の芝居にいたるまでかたらすといふ事なし彼方の横町此方の新道常盤津富本の表札なき所なく店子の娘の寒彈にハ大家の親父か看經をさまたけ鳴物停止の浴室にハ湯番の氣をいたまする豐後梅豐後竹あきなふにさへ此音聲をうつすこれハまた名によるゆへとも思ふへきに蝶〳〵とまれ放し飄〳〵まてか此淨瑠璃の節あらハるゝそかし夫淨瑠璃ハ信長の時代小野の通女か牛若丸淨瑠璃女の事をつ

くりしよりをこりたる事人の知る處なり又極樂淨土に淨瑠璃世界といふありて迦陵頻伽の藝者でやい日夜淨るりを語て留主居井　息子ばさつ或は年季ばさつのたぐひまで此世界にて金箔をはがさるゝ事不鮮と此道に識のお寺樣のはなされしなり斯て淨るり世ゝに流れて今其中に豐後節といふもの出來たるなり是いやしけれ共樂の余風にして人を和するの器也樵歌牧笛樂ならざることなし固豐後節は文章に色欲多く音聲婬亂なりしかれども其とり處によりてまんざら姑の小言馬士の惡言を聞にはましなり試に一ッ二ッをいはん高尾懺悔と云にいつかおの字の名をつひてといふ文句あり曲禮に女子許嫁して笄　而　字此語にあたれり又お半の淨るりに唯うつむひてなんにもいはずと云文句あり詩曰奏假無言と此たぐひ多し爰に又さる新道に黑格子をしつらひ竹の簀すだれかけたる淨るりの稽古所あり表札に難波津野路梅と猨山流にてしるしたり火とほし比こゝへ來る二人の者いづれも年季ものと見へて一人は澁染のうればりをしてさらしの手ぬぐひを肩にかけ一人は伊勢縞の布子に棒縞の前だれをし尚是も角もつこうを染たる手ぬぐひをかたにかけいづれも湯がへりと見へ門口にて【伊八】サァ源介どんへへらつし【源介】マァききまへゝらつせへ【伊】ナンノかまうことはねへきいへゝらつしな【源】わしやァはじめてだからきささまさきへへゝらつし【伊】そんなら待つし小便を一ッやらかして

ト路次のわきへ小べんするとなりのかさりやの内から　モシそけへ小便ハなりません【伊】ホイこりやァ御めんなせへ大わらひだ　ト又むかふのどぶへそのあとをたれてしまひすたれをしあけて　梅さんうちか【梅】どなたへ【伊】わつちァサ【梅】ヲャ伊八さんかあがんなせへな【伊】サァ源すあがらつし　ト二人内へ入る内の道具だてを見るに獅子口の花いけハむなしく狀さしとなり屛風ハ名ひらき花會のすり物ではりつぱな鏡臺の引出しのくわんに三味せんの三の糸をひもにつけたるぬか袋かけてある【お梅】ハあいうへだのよごれた小袖に鳶色を黒くいろあげしたどんすの帶をしめあらひがみと見へてわらでたばねたひつつめの嶋田此げいしやゝすやくしやといろ事にてそのみをかいてゐたるがかたよせて　【梅】伊八さん此間ハおさう／＼でございやしたモシおまへこつちらへおいでなせへし【源】アイこゝがようござりやす　トこいつハまたいつかふなにさいゆへすこしはにかみ伊八かうしろのくらき所へすハる　【伊】コゥ梅さん此男ァわつちか友だちだがちつとならつて見てへといふから連てきやした【梅】よくお出なせへしたねへそりやァもう　ト火ばちのふちをふきながら　モシマァもつとこつちへお出なさせへしわつちァもう伊八さんもしつてゐなせへすかとんだぶちやうほうもんとやらなれハ【源】是からおたのん申やす　ト手ぬぐひをひねくつて居る　【伊】武士のつきやいハかたひね　トおもしろくもねへしやれを云　【梅】ヲホヽヽヽ　トそらわらひ　【伊】コゥ源主もつとこつちへきさつしな此男ハわつちらとちかつて口きようたからてきやせうよこハいろなんさァきようさ【梅】ほんにかへきゝてへね　トあへせかゝみ　【伊】コゥ源主氣をつめちやァわりいせ【梅】そふ／＼わつちらァふさけもんたからそれしやァわりいのさモシへもつとこつちへお出なせへしな　トたひ／＼いはれて源介やう／＼伊八かうしろより出て火はちのそれへすハる　【伊】梅さん此男ァ何しやうハへたと思ひなさる【梅】とふもしれやせん　トすこしか

んかへてまちなせへ ト源介かきものをよくかいて見て しれやしたたはことんやかへ【伊】にほひをかゝれちやァしれるわつちらァなをたしきに木薬やと見られる【梅】伊八さんおめへ清明丹ハへ【伊】ほんにあけるのたつけ又わすれてきやしたまだわすれた事がある ト此ごろはやるにがほのゑをすつたいせもとのたばこ入レから紙にひねつたたばこたらけな南一を出し 梅さんこりやァ此男が弟子入の何サ ト出す 【梅】こりやャもうもしあなた ト源すにもあいさつし モシかゝさんちよつと來な おふくろ此こゑをきゝ茶をうミかけてしやうじをあけ口にくハへたまゝたち出て 【母】こりやァもうおありがたうござりまちす トきゆうにきげんよくなりぬるひちやをわかしたをして二ツくんでくる南一の光りこんやのあいそうきついもの也 【梅】伊八さんおとつひおめへのめへを通りやした【伊】フゥどこへいきなすつた【梅】百川に座敷があつてさ【伊】頃日ハざしきハどふでござりやす【梅】留主居衆の寄合がやんでからいつかふさ 此うち源介ハたゞまぢり／＼とはなしをきひてゝれてゐる梅心つき 【梅】モシなんぞはじめやしやう【伊】コゥ源主をれといれかはんねへ 源介ハすゝはきの時内の頃のしやミせんのほこりをはたいたはかり生れてからはしめてこんや三味せんをにきりきうくつそうにもつてゐる梅手をとつて老松をおしへる 【梅】柳松のめてたき事萬木にすくれ【源】口のうちにて そも／＼茄子のめてたき事はんほくにすくれ【伊】コゥ源主そりやァなすしやあんめへ松たせ【源】わしやァ又一富士二鷹三茄子と云からめてゝへハ茄子かと思つてた【伊】そりやァわりいれうけんた【梅】ふきたしそうなるをこらへきを長くをしへてゐる折から來るハ紙間屋の手代【半六】是ハ上方者にてはや中のほりむすこよほとたちあかつて番頭より三はんくらゐゆへになりむさんとめ仕立よほとくめんもてきる也此けいしやも此男をてきるやうてきねやうに折／＼ひちをあてゝをくゆへ時／＼ためになりこゝの内をよほとしこなしたしうちあり【半六】はゝァ稽古しやナ ト内へ入る 【梅】半さんかちつと御めんへ トやはりをしへてゐる 【半】

なんのイナ御ゐんりよハいらんしや 源介に人かきたゆへなほはづかしく伊八もすこしそけてミへる半六伊八にあいさつして火はちのそべへより 【半】こりやなんぼ御時節がらじやとてゐらひけんやくじやなかゝさん炭とりかしておくれんか【母】半さんかサア炭とり【半】をつとよし〳〵おやぢさんハどこへいてじや【母】題目講へめへりやした【半】きつい後生のねがひやうじやなそれじやもう極楽のさきへゆきすぎるじやらうが【母】それだけにつミをつくるから五分〳〵さ トげいしやの母だけとつさにしやれる 【半】コウかゝさんこれ夜食のおかずにさんせ ト桜に身をこがすうなぎのかばやきこゝろのたけのかハづゝみたいだす 【母】こりやアいたゞきやすちやうどあの子もやしよくまへさ 六半 ゆび、さきでさくらばりのきせるまハしながら 【半】ゐしやうがでゝをるが座しきでもいふてきてか【梅】けいこをしまい あした堀のうたいさんへいきやす【半】何をあてじやか信心をなさるもんじやな といふうち且ツのひやうし木チヨン〳〵とうち来る源介も伊八もびつくりしてそこ〳〵にかへる梅もいろ〳〵あいそういふ間 表へ出 【伊】なんときれいなもんだらう。二。子。本町三丁目木ぐすり仲間唐人ふてうわ外五分といふ事 ぐらゐぢやアゝいふ代物ハねへきさまなんざアかほがあたらしいからよくするとできるぜ〳〵【源】又あすのばんいつしよにあゆんでくんねへ内がもうしまらねへけりやアいゝが【伊】そつちの藩しうもやかましいナアおやかたハそふもねへナ トいそぎゆく跡に半六ハすこしいちやつきたいきあれどこれも四ツたきいてハたちついて居られず なんじややらもやくたいなほど夜がミじかひぞこゝが勤の身じやかへつてこまそ〳〵【母】もちつとはなしなすつてもよからう【半】店でも又ふたりほどかぶつたじやそれじやさかいこちらもたい

ていきをつけにやならんじや【梅】半さんそれでもおめへ頃日ハ石場の豊倉へ又しこんなはるそうだね（トすこしやく思入いふてうれしがらせる半六まにうけて）あほうらしいたがマアそんな事いふてじやせいもんじやハい〳〵【梅】いゝよあすのばんきゝやしやう【半】ない事いはるゝほどつらひ事ハないもんじやコリヤあのわろたちがざうりはきちがへハせんかなヲットあるじや〳〵（梅母へかくすやうにしてせなかたゝく半六まにうけてしらぬ㒵で）なんじややらいかふさむいばんじや（トたちかへる）

是等のてやいさまで稽古するでもなけれど皆此藝者を一ッてんばりの色ちよぼいちと見ゆるなり又博奕の簺と女藝者ハころびやうて一夜検校の幸多し七ころひ八をきとハ藝者のうへの事なるべししかれども藝ではやると顔ではやると二いろあり是鳥に鶯孔雀の有がごとし娘ハ主君のごとくたかふりわれあれハこそと恩にきせて我まゝいふ不孝ハ象牙の撥とゝもにあたるべし親ハ臣下のごとく我子にうやまひかしづき三味線箱をかつき駒下駄をなをす事皆欲の皮より出て三弦の皮よりもあつし又これらがをこりをたづぬるにかゝるいやしきものにあらず漢土にてハ妓といふて。莫愁。陽阿翠翹。などゝいふ名妓多し和國にてハ白拍子とよび。嶋千歳。和歌前。など世〳〵に名あるものかぞへ盡し難し今の女藝者此流れと謂ッべし上方にてハ藝子舞子といひ江戸にても前にハ踊子といひたり元文のはじめに名高き。衛門。照。艶。などあり其後。辨天豊。地藏幸。などときめきけり。新富。直。百

合。秋。などちかごろ是につゞきたり唯人の愁を忘れしむるの器なりしかれども今ハをとろえてこれらに比すべき者をきかず

豊後畢

酒氣貧通

申

町傾城辛苦情　凡十年

通子町ノ馴ニ染傾城一 馴染ハ一 曰

傾曰 主不遠千里而來 亦將有以見艶書乎〔床花反叫ニ向ノ人ト己他ノ女郎之文通子在リ二懐中一〕

通子 妄曰 君何必曰レ茶終爲胥虚而已矣　茶ハ言レ虚也ナリ

田の中に棒の壹本立たるハ甲か申か扨ハ申か。柳のかげから申シ〳〵とよび。花道から申上ますといふもみなそれ〴〵の身の業なり。人間万事さま〴〵に。世ワたりする中にもためしすくなき流の身ハ。うそいふ事の常なりといへどもそのうちにも實ありて。ほれた程忘られぬものなく。惚れられたほど捨がたきものなし。爰に去ぬるころ。大岸屋といふに花衣といふ娼婦あり。彼か客に富士井田藝吉といふ艶治あり。たがひにほれつほれられつ。かの忘られぬと。捨かたきか。こうじ〳〵て終に心中と極まり。二人の中ハ深けれども。淺草の中阪畝へ忍ひ來り。氷

の刄ぬきはなし。すでに胸のかゞミをやぶらんとせしに。お刀の手の内御無用とこゑかくるものの有り。はつと思ふてあたりを見れど。畷に立たせ給ふ石の地藏尊と。案山子の外。人らしきものなし。扨ハわれ／＼が心のおくれかと。又刀とりなをせバ。又御無用と聲かけしハ。たしかに石の地ぞうそんなり。兩人ハごつくりし。申地ぞうさま。われ／＼ハ心中してしぬるもの。となせでも小浪でもないに。御無用と聲をおかけなされしハ。なにゆへとふしんうてば。地藏尊莞爾としてわらひたまひ。嗚呼やぼじや凡夫じや。そちたちがいのちハ今が九段目じやなひか。おれがとめたハ外でもなひ。さだめて先の世をいそぐてもあらふか。ちと話したひ事が有ルから死出のたびぢのはなしのたねに聞ておきやれ。かならず刄傷の變化じやと思ふな。夫心中死ハ無分別な事しれてあれど今好色の世の中に。刄ものさんまいこそせね。一生連そふ女ぼう故に。腎虚して死ぬも品こそかハれ道理ハ壹ッ。又ハ金がたんとほしひ迚。氣を遣ひ氣病して死。或ハ食物して命をうしなふなど是らハ金心中下卑とも謂つべし おなしくハ女の道ニて果る事こそ順なり。世界の人皆その穴門より生れて。又その爲に死す是花ハ根にかへるの道理じやものと。定規杓子にしたる不了簡より。二ッなき命を一女の爲に捨。心中死を自慢らしく骸を野經にさらして。じやうるり繪そうしに長く耻をあらハし。讀うりの外よろこぶもの

なし。今時の心中ハ義にもあらす情でもなく。唯不自由故のむり死也又うハ氣なるむすこ娘ハ。ふんごふし新内ふしを聞き。しばゐをミる度に。半七三勝か死だハ尤じや。おそめ久松が心中ハ道理じや。あれほどまてに戀の情をつくしたら命も捨さふなもの。われらとても捨かねハせぬと素痴なる心より心中死をうらやましかれど。しばいでする心中ハあやむ所が奴じやゆへ犬の糞をふむ氣つかひなけれハ。着るもの引ずりて行に品よく一ッ對の美服。紫のほうかぶり。どうもいへねど。もし是がほんまの事なら。一ッ町行くとお手にあふハしれた事。又うしろにハじやうるりといふもの有りて。拍子よく。今死ぬる身でおどりなから行く事。いかにもおもしろさふに見ゆるなり。扱刄をつらぬひた所がいたくもかゆくも何ッともなく。骸に毛氈をかけらるゝとすぐさま。二階で休息し。鳴呼今の心中はきつひものであつた。よふ見事に死だと。切落しでじや〱のくるを聞ているなど。本の心中がかふ行かふものなら。なぐさミに死ッて見ぬものハ壹人もなし中〱そんな甘口な事にあらず。ほんまに死るはきつふさへぬものなるべしいつたんのむふんべつで死ぬるハ。ひつきやういのちを弄にするやふなもの。どの道無益のさいご。三世ゐんぐわのたねをまき。不忠不孝のつミいつの世にかハまぬかれんと。自笑腹にて曰けれバ。両人是を聞。是地藏どの。そなたハいかうしんちうを茶にさるゝ

が。そりやかたおしじや。ミやうもんに死ぬとばかり思ハしやるハ。無量の味ひ有る戀の情をしらぬからの事，とうりでそのやふにわるかたひ石になられた事と憤れハ地藏尊。なるほどおれを戀しらずとの云ふん尤じや。高が此うそさひしひ所に立てゐる安地藏じやもの。おりふし朝かへりの客がおれがあたまへ。煙艸のふきからはたくより外。戀句ハさつた身の上なれど𦬇をしてくらすたけには。先の世の事ハまた大通じや。固心中の腹といふハとても此世てハ添ハれぬから。來世で契らふといふが山とミへる。したが外の事ハミなそつちが尤にもせよ。是ばかりハあてにハならぬぞ。今生にあるほどだにやすきいとまなき身の。むなしきのちハいふならく捺落の炎に心をこかし劍の抜に身をつながれ。修羅の陌に爭闘して。こちの人女房どもとよびかハす隙さへなく。ふたりしつほり寐る事などハ思ひもよらす。もし又最期の一念により。上との首尾にて淨土へ往生する事ありとも。變生男子といふて。かあいと思ふ女ハ。たちまち男となれハ。極樂へ行てからがはしまらぬ事女が男に成ッたならいな物で有らふぞやとけちを付給へハ。二人ハおとろき。扨ハごくらくでハ女が男になりますかとてもちこくハたのミなし。すりや來世ても添ハれぬか。しからバ死ても益なき事と。うちしほるれバ地藏尊。ヲヽいたひ思ひをせふより思ひ直して生たがまし。外に思案をしかへて見やれとねんごろ

にのたまへり。兩人りやう〳〵とく心し。互に小袖のちりをはらひ。抜はなした刀ととも命をチヤンとさやにおさめ。すご〳〵くるわへ立かへる。地藏尊跡うちながめ。あゝりいふて見たものゝ心中死もミなゐんゑん。天命じやと獨謐きもとの蓮坐に立給ふ二人が延命地藏尊。利益のほどぞありがたき　申畢

京傳予誌　大尾

自跋

夫洒落ること難し。黄山谷が曰。周茂叔が人品甚高し。胸中洒落たる㕝。光風霽月の如しと。是等を洒落の親玉と謂へし。然れハ世界の洒落悉皆洒落にあらす。於是予かしやれ本の不洒落なる事をしるといふ

傾城買四十八手

四十八手叙

千手観音はさらなり。薩摩守忠度は。一本の手にさへ。六彌太をとつて投のけたまへば。蚰も足が手ならば。やゝくと翠簾紙に包て。捨られはせまじと謐き。茨木童子も。大江山の骨牌場で。手のつかぬ事を嘆しよし。紙雛も寳の藏に居ながら。手の空を哀も理ぞかし。されば傾城をころ寸も。手にあらずして何ぞや。故に今新手を盡して。其題を四十八手とよぶ。是を以て即無手容の愚鹵に授よと。我にあたえしは誰なるぞ。何にもせよ此一冊の四十八手がツてんのゆかぬ

寛政ふたつ
戌の春日

山東京傳述

二

文点

秋やうき身に間夫の闇客の月

傾城買四十八手

三

京傳画

慾界之仙都
昇平之樂國

傾城買四十八手總目

○しつぽりとした手
○やすい手
○見ぬかれた手
○それ〳〵する手
○しん（眞）の手

傾城買四十八手

山東京傳著

〇しつぽりとした手　客へむすこ後方へつき出し間のなき中三元初會

【女郎】此春からの突出しにて年は十六なれど大がらにみへいたつてうつくしく下村のおきな香たうつすらと付人がらよくあいきやう良にこぼれ髪はしのぶにゆひ百介がくこの匂ひむせあぢにさせひちりめんのとうにて紫しゆすに金糸と黒糸であら磯をぬひつめたへりをとりし褶むくを着ゑち川が注文ばたにておほち樹みおつた藤チヨロのひらぐけをしめたるねまき姿とす紙をつまにもちそへらいかにて　ことおりやァ【かふろ】目でんの花かんざしにてあたまおもそうにふりむき　なんざんすへ【女郎】さつきいひ付た事をわすれてくれめへョ【かふろ】モウそふ申ィしたョ　トいふは床のとりやうをいつもとかつてをちがへてとらせてくれろと云事これはとなりがへまし座敷ゆへむつごとのきこへぬやうにとの心つかひこんやのきやく大のもてとみへろなり【客ムスコ】年は十八くらゐむつくりとして男もよくあまり口をきかずいかにもよき所のむすことみへる風俗つれも一人あり床おさまつて五ツぶとんのうへにはをりをとつたまゝよこになり手あぶりの中へ火はしのさきで何か書て居る所へ　【女郎】床へはづかしそうにくらきほうへすへり　上着をおとんなんせんかへ【ムスコ】アイ　トいつたばかりぬぐ　【女郎】たゝんで床の間の上にをき　ぬしやァいつそ氣がつまりんすョ【ムスコ】なぜへ【女郎】だまつておいでなんすからサ【ムスコ】わつちや何ッといつてよいものかしりやせん【女郎】うそをおつきなんしぬしやァいつそ手があらつしやるョ【ムスコ】手とやら乀二本ほきやござりやせん【女郎】にくらしいの　トつめりそうにしたがゑんりよしてつめらず。たゞこすひ付る。火たちきへかゝてなし。手をたゝく　【かふろ】きたる　【女郎】火を入てきてくりや　よくいけてョ【かふろ】アイ　ト火入を持ゆくかべごしにとなりより

「女郎」おたのしみざんすね「女郎」きこへたれどわざと なんざんすとへちつともきこへんせん トちらしにつこりとわらふほどなくかふろ火入の火をふきおこしながら持きたる「女郎」ヲヤてめへゆびをどふした「かふろ」宵に中の町で犬にくひつかれんしたヨ「女郎」それみやいはねへ事かよコレヨ それにこりてモウ犬や何かと心やすくしめへヨ トあどけなくしかる「ムスコ」わらつて居る「かふろ」うつむいて居る「女郎」コレサこれをしまつてのそして着かへてモウやすみや トくしかうがい、たぬきみす紙へつゝみわたす「かふろ」アイそんならお休なさりイし ト立ゆくひやうし立かけ有し琴へ袖かさわつて〽コロリンジヤント なる「女郎」しづかにしやヨ ト枕元へたばこぼん引よせたばこすい付るぱつと火たつそのあかりにてむすこのかほをつく〳〵とりてみぬふりしじぶんが一ぷくのみ又すいつけてむすこにやる「ムスコ」わつちやたばこはきらひサ「女郎」おあんなんせんかへモシへぬしの内は花菊さんの客人の近所かへ「ムスコ」イヽへちがひやす「女郎」どこざんすへ「ムスコ」神田の八丁堀サ「女郎」うそをおつきなんしよくはぐらかしなんすヨ「ムスコ」跡でしれやす「女郎」なぜへ來にかゝりんすいつておきかせなんしなおいひなんせんとくすぐりんすよ「ムスコ」いはずともいゝじやァねへかねマァとをひのさ「女郎」ほんにかへ「ムスコ」おめへあてゝみな「女郎」そんならかしら字をいつておきかせなんし「ムスコ」かしら字はにのじさ「女郎」まちなんしよにのじだねコウト そんなら日本橋かへ「ムスコ」わらひながら ちがつたね「女郎」又しばらくかんがへて そんならにかは丁とやらかへ「ムスコ」いんへ「女郎」しれつてへどこだのう トか

んざしでまへかミたかく　「ムスコ」やつぱりほんとうハ日本橋の近所西河岸サ「女郎」ソレ見なんしよくあてんしたらう モシ ハ日本橋へもかんのんさんを通つていきんすかへ「ムスコ」しれたとサ「女郎」大かた内にハおかミさんがござんせうね「ムスコ」ナニまだそんなものがあるものだ「女郎」そんならどこぞの女郎しゆにおたのしミがあんなんすだらうね「ムスコ」内がやかましくて出られぬからこつちのほうなぞへハきた事ハねへのサきよねんとりのまちのかへりにつれがあつて外へ一度いきやしたわつちが事ばかしいはずとおめへのいろをやつと噺してきかせナ「女郎」どふしてそんな事がござんすものかわつちや去年までミのわの寮にゐんして此春からでんしたョいろをしたくつてもわつちらがやうなものハだれもしてくれんせんものをムスコ」よくうそをつくのうそつきとつけやせう「女郎」人にほれるのハきらひサ「ムスコ」そんなら客にほれたのがあるだらう「女郎」ほんざんすよ「ムスコ」そんならわつちらにハなを　らうね「女郎」ぬしにかへ トかほをミこわらひ 跡ハ申ンすめへ トふとんのすミへつけしくヽトざるをひねくつてゐる「ムスコ」じらしなさるね「女郎」モシへわつちやたつた一ツねかひがござんすよ「ムスコ」どふ云ねがひだ「女郎」わつちがほれた客しゆのきなんすやうにさ「ムスコ」おめへ今ほれたものハねへといつたじやねへか「女郎」たつたひとりござんすよ「ムスコ」うら山しい事だのどこの人だ

へ【女郎】だまつてゐる【ムスコ】コウどこ◎人だへ【女郎】おまへさ トおもなきつていふ【ムスコ】でへぶあやなしなさるもんだの トむねどきり【女郎】ほんでござんすよそれだけれどわたしらがやうなものだからもうこれきりでお出なんすめへね【ムスコ】もつてへねへおめへのやうなうつくしひ女郎しゆだものを【女郎】あいさ左様サたんとおなぶんなんし【ムスコ】ほんにサよんでさへくんなさるならくる氣さ【女郎】うそや【ムスコ】きたらどふしなさる【女郎】じつかへ【ムスコ】しれた事サ【女郎】マアうそにもうれしうござんす【ムスコ】それがうそだ【女郎】ほんの事サ ト[illegible]【ムスコ】どれはなしかそこか トだきついて[illegible]【女郎】エヽモつめたいおかれにしなんしへ ト[illegible]きさいしようの声へたばこ入にきせるやはさみ片手に持チ【一座】きやく今夜のでへぶはだきむいばんだケイ、いつでもよしかへ トからうこれハこゝへよほどなじミなる万事さきわたつたるなれどつハーのはんかたり【女郎】わるいときじやそとへねたまゝなから よう／＼お出なんしたねサア おはいんなんしな【一座】そんならーッぷくのめの若草としやせう トすれる【女郎】たばこつけてだし こゝへおあがんなんせばいゝね【一座】何さこゝがよしいくすサ【ムスコ】へゝかなさへな トぎりをいふ【一座】コウおいらんわつちが弟ぶんだからかはいがつてくんなせへ【女郎】いつそ情からわつちをじらしてお出なんすよ【ムスコ】何さんなこつちがあやなされるのさ【女郎】ちよつとそなんしにくらしい トきせるでぶつまねをして しかしぬしがお師しやうさんだからし手がおあんなんすはづさ【一座】コウ

栄さんおめへなざァいまつからだァずいぶんかいねへおいらァモウおいこんだぜだいいちこん
がわるくなつて一ッぱい呑とぐつとねるから〻これじやァ傾城がしなねへはづだ「女郎」ヲヤあ
れほど花菊さんたァおころしなんせべよふざんすれ「一座」ナニサあのけいれこつちの畠ではね
へ女郎さモウきやせん「女郎」かはいそふにそんな事をいひなんすないつつけんすよ「一座」き
いてもい〻のさこういつ〻やァおかしらしいが三百六十よかん日此里へへりこまつて尻に四
ッ手駕のたこができびろうどのはんぶりが顔へか〻らねへとねつかれね八男（トはなしにのりがきてきせるの火玉のひざへおちたをしらずきりたての上田の小袖もへる）「女郎」見つけ（ツレ）火がおちんした「一座」ホイ（トけしたばかり女郎のまへのこへあればおどうかぬ良で）トいふも
のだからッレ左りの目がいごくとこいつァこふだなとわるごうが入て居るからわつちらをよふ
にやァ傾城もマアむづかしいのサ（トうぬがこんやわるくされるあたりをこゝへきていふ）「女郎」（あきれてだまりこす紙を小よりにして床の間にいけしかきつばたへぶつつけてじやうだんしたいくつのてい）「一座」ヲ、ついはなしが長くなつた長居ハやぼのいたりおいらんお休（トたつ）「ムスコ」
マアあすびなせへな「一座」いんにやでへぶれふくなつたョときにおらァい〻がおめへハちつ
と早くけへらざァわるからうによ「ムスコ」そふさ〻つとも早ィがよふござりやす「女郎」
（うれしややう〳〵ゆくそふだと思ひながら）モシへもちつとおはなしなんしなしかしおとめ申ッすめへ花菊さんがおしかん
なんすだらう「一座」そふいふ所がねへ点さ（ト次の間へ出）ヲヤばんとうさんをはじめ山川だコリヤア

夜ばへにくる事だハヘ　トあんどうのかべへよつてさいぜんのやけ穴へゆびを入てみて大きにふきぎ見行あとハふたりほつとためいき中の尻のとけい　チヤント七ツ半【茶や男】ハイおむかひでござります

【評】＝曰右のおいらんがたばこの火でむすこの顔を見しハ源氏螢の巻の意味ありてをくゆかし此くらゐのじぶんハまだやり手やばんとう女郎をこハがつて人にほれ、も心でばかり思つて居るものなり又ばんとう女郎が今宵ハあの客人にこふ／＼いつて節句をおたのみなんしといひをしへてもつい云そびれていはずにしまひばんとう女郎ハ次の間にねて居て始終聞耳立ア、あのはなしにとりつひていひ出さつしやればよいにと氣をもむハ度／＼なるべししかし末たのもしけれバ内證のせハも早くはなれ新造出しの難所を越も今の間ならん又今時の小むすこハとかくゆきすぎてしやれたがるものなるが此客ハそれがなく女郎に思ひつかるゝ風なりまとに此とりくみなぞが浦山しきあそびなり或人曰去おいらんが中洲の假宅に居た時もシヘ丁ハ天氣がよくていゝがどふも中州ハふりんすヨトいひしハありがたき語なりト云よとかくけいせいハあどけなきをしやうびすべし

〇やすひ手　客ハ山の手の通り女郎ハ小見世の座敷持尤馴染

【客里風】　二十二、さかやきびらうどのやうにはやしたいくわのやうにぬきあげいろきみのわるひほど白くきわ毛ほそく髮もとゆひをたんとまいた本田らハ着じやう紹ちりめんのあいびろうどにうらぶり袖口こび茶さや帶もへき七子ふのうちにあけあ

（からでミせ三味せんを持何かひいてゐる所へふりそでしんぞう）【黒衣】しつたかしりイせん（トあれたゞくうろうかをかけて来りしやうじをさつとあけてはいゝうちからおきへこわらつてゐる）【里風】びつくりした【黒衣】からかつてつかれしたらおつかけんすれな【里】だれだ【黒】モウこねへそふだごめんなんし（トすハリ）里風さんよくお出なんした子モシヘ紋太郎をひいておきかせなんしな【里】いゝ所へ来たちよつと吸つけてもらひだ【黒】ヲヤおもてへきせるだのウ（トあんとう）【くらの戸】（れ魚油をとぼすゆへかミへ不てゐいつける）【黒】手がふさがつてゐるゆへもつて（ゐこもらつて三くち四くちのむ）【黒】モウようすかへ（しばたく）〇女郎【くらの戸】（よほどとしま髪毛うすくひたい大きくなきまミへ病身とミへている青くやせかたち雨吉の小べんへおつうのまおないのかみをはり宮澤町仕入のこゞ茶ちりめんの色入のすそどやうに紺ばかりあつらへこしらへせた着すぎの小袖たうたかけにし負たゑりにはんぶん入レふところ手にて）ヘイタコ奴しをかへしたそのあとミればヨどたからむひても夜着の袖トウくコレ銀治やいけそふだ〳〵しごぶしやれめへそよ（トまへしかふろをしかりながらわぞつトはたゞいにて来ッ）これミやあのがきやァ火もおこしてをかねへすかねへッちやァねへヨコウ里風さんが角花さんがよくいつてくれッサ【里】てめへもつてきたナア なんだうめへものならくれろへ【くらの戸】サアくひなんし【里】おきやァがれ温石かおらァ又餅かとおもつた【くらの戸】おへねへけびぞうだア（トはんどの火ばちをひきよせ）くろぎぬさんすみをだしてくれなんし【黒】アイ（ト立れんじのすだれからよりい出す）【里】でへぶこのころわめんくがいゝな炭の小がいといふけちわしねへな【くら】たつとたおびんす【里】これでもまだ鏡わうけめへそのくしもゆるにそれりやうを出すのか【くら】しやれたんすたげへぶんがわりいよ【里】コウたつと

酒としやれやう【くら】酒をばよしてちやづんなんせばいゝ【里】やぼをいふぜトウその硯ぶたを見せや金平ごぼうも久しいもんだ此鮹のあしのくさつて居るぜ栄螺のつぼへ赤辛螺を入てだすからおそれらァこんだの料理ばんはどふもけちをするぜ【黒】よくいろ〳〵な事をいひなんすよ【くら】そんなら五分づけを出しんせうか黒さめさんそつからとつてくんなんし【黒】ちごとだなから重くミのふたちやわんを出す【里】あけてここウヽこいつはよくついた下はなんだはだなかこいつもまんざらでねへしかし是をくはせたら手めへは五分づけはだなか血のなみだが出るだらう【くら】サア又はじまつた【里】ときに是ばつかりじやァさへねへ書付をとりにやりやな ト云わ茶やにて其日のしこみの物を何〳〵とちいさき紙へ書つけて何まいもつるしてをきとりにやると一まいづゝよこすなかで気に入たものへこちらからこんだをかけてとりにやる又つに木へ書もあり【黒】モウねんしたらう【くら】マア子どもをやつて見てくんなんしそしてついでに此どびんへ水を【黒】アイ トふしやう〳〵にたつてゆく【くら】コウおめへいつかだう着てきた八丈をわつちが此むくとつけへてくんなんしなミせぎにしんさアヽナ【里】とうにきせてあらァ【くら】フウそれでも玉とやらがおちなんしたらだされなんすだらうね【里】マアそふはとらの門のこんひらだ【くら】しやれじやァおつせん【里】そんなら此下着ととつけへはどふだ【くら】おらァいやそりやァわりきがこれとにたりよつたりだ【里】ちよきにふたりがきいてあきれらァいやならこつちもいやだのすしだてめへたちやァく

がい十年塩だちをしてもこんな着物がきられるものかをしのつゐへ【くら】しつたかわりい酒だトちやわんへかみをあてゝ茶をほうだて居るうち【里】ただこ盆の引出しの字帳を出しあけてたてでへふこのごろハはやるな【くら】又さがし事をしなんさよこしなんしトひつたくる【里】ョツと見せろへコウゐんきよさんたァだがこつたこいつァ氣がもめの吉じやう寺だれへ【くら】だれでもいゝうつちやつてをきなんし【里】ゥヽヽきこへたこんぢう糸菊が名代に出だ色の黒ひ白魚のゆうれい駿河細工の木地呂色といふつらのおやおか【くら】かんにんしてやんなんしそれでも茶屋づきできんさァおめへよりやァきん〳〵さ【里】茶やづきもすさましいおほかた大をん寺めへか田町だらうごうてきにしげ〳〵だな【くら】こんぢうも居つゞけにをききでへぶ手ができんしたらうちつとひげなでさ【里】手めへもその貞で手ができちやァ化物やしきのあんどんといふものだ【くら】なんとでもいひなんしいゝよしよじくがいといふものだから【里】なんだすがいだ【くら】むだをいはずときゝなんしそのかはり小づかひまで氣を付てくれんさァ【里】こいつァおもしろ狸だちつとかりやう【くら】まゝにもしんせう【里】さぞなくだらうなそのつらでないて見せちやァしぬはずの池だ【くら】いけねへくちだよト硯ぶたの煮だ豆をゝほへはちきかける【里】コレよせへしやれるなへト云所へ久外のしんぞう来り先しやうしのやぶれからのぞひて見てうちへはいりモシヘくらの戸さんちよつとかほをだしておくんなんし【くら】なんだナこゝへきていひ

なんしな【新造】そべへよりミゝにくち あのねはかなぎさんがねどふぞおあしを一トすじかしておくんなんしあしたおけへし申ィスとさ【くら】久しいもんだよしらねへといひなんし【新】そんならこう申ィしやう ト出ゆく【里】コウでへぶ火がおこつたのほせこわりィ火ばちをもっつとそつちへよせてくりやだぐわしやのしちりんを見るやうだ炭をついやうでかつたと思つておごるぜ【くら】口から先へ生れたそふだちつとだまんなんし ト火はしでつくまねをする折からとほりの座敷持の女郎【いろ糸】白ほそおもていろ白うすいもありひつつめのしまだみがちていつた髪是ハほれた客のみて髪をのふがよくするやつなり申しきりのふすまをあけかほを半ぶん出し 里風さんでへぶさへなんすね【里】客人か【いろ】アイサ【里】なしミか【いろ】はつさおそれんすねモシちつとおくんなんし トふすまの間から茶かけ茶わんを出す【くら】おへゝんなんしな ト酒をついでやる【いろ】目をねむつてぐつとひつかけむねをたゝく【里】かまぼこに火はしのやきがねをあてて出してやり【いろ】こんやァ又おめへかたのむつごとをきく役だねつれへこつたの【里】むつごとどこじやァごぜへせんわつちが一といふと十ことでけへしやす【くら】こいつァおかしい手めへのことを云やつさいゝごうさらしだ【いろ】うら山しいせけへだよモシへおありがたふござりィす又おじやまとやらなれば【里】もう一ッいきねへなめざすかたきハ【いろ】ワつちだといひなんすのかへきついあはせ鏡とハ思へどもだまされて咲室の梅さおやすみなんし トふすまをたてきる【くら】しつたかいゝかげんにしやれや ト小声でいふいつたいとなり座敷ハきりやうもよほどよいゆへそねミにておもてむきハうつくしくしんハわるし【里】あの子のくびもかづのこをさゆで

にたといふくびだ【くら】あんまりさましなんすなおめへにほれてゐんすとさ【里】氣がちがつたそうだ何ほれて居るもんだ【くら】ほれてゐりやァとぼすきかおめへもほれて居なんすだらう【里】なんのほれたのほれねへのと土葬の施主が卵塔場で小言をいやァしめへし【くら】それでも糸菊さんにおめへをとりもつてくれろといひんしたときあつかましひいゥあの子が小間物屋の助さんといろをしてしばられた時ハおもしろかつたつけあんなきいたふうな女郎ハねへ【里】手めへの枇杷葉湯ハ棚へあげて【くら】ワつちらァ口ひろひこつてをすが人の客人なざァとつた事ハおつせん【里】どふりですおもの吉にとぼさせた【くら】ありやぎりでした色さまだ小僧の時さ【里】それ見ろもう一まいだかせたら何が出ようもしれねへそればかりでも五十のたくきで江戸がものハあらァ惣ざいの芋をくつておたらばかりしていたじぶんからそれだからくらわれねへはづだ【くら】しりィせんコゥモゥむだをやめ一ぷつとねなんせんか【里】ヲヤちよつとこや手めへのかほハなんといふざまだ呑ゐゝもしれねへ酒をくらつてひてへをミや江戸繪圖の川といふすぢをだしてさハぐやつさ【くら】コゥおめへくたぶくたびれやァしねへかおらァもうささハねるによ【里】ホンニあきれらァぐわんをきかねへてる〳〵ぼうづを見るやうによくねてばつかり居るぜ　（トこかよかいづまるにやおもこの方）　ヘ火ハ用心さつしやれませう二かいなまハらつし

やれまさう　ト夜まハりの金ぼうの音さへわたり夜はしん／＼とふけ時うつる鐘に上下のへだてなく此びやうぶのうちもいかなるゆめをむすびしやはるの夜のとじかくほどなく夜ハからりとあける　【里】目をさまし　こいつァとんだねわされた【くら】此さハぎに目がさめ　まだはやいハなそしてふるそうだ【里】ふられちやァらんちきだ　ト云所へまハしかふろ目をこすり／＼をきて来る　【くら】だれだ銀一かョウ　ふるか見てくりや【かふろ】アイ　トれんじから手を出してみて　こまかくふりんすよ【くら】いゝ居つゞけびよりだのゥョウ　思ひきつてゐなんしな【里】べらぼうめいゝめくりびよりがきひてあきれる　ト此きやくわかひものに傘をかり安下駄をかつてもらひ中の丁を着ながしでぶたら／＼と通りぬけゑもん坂を出はなれるとあと先をよくみてはをりをぬいでふところへ入レしりをぐつとはしよつていつさんにかけ出す

【評】ニ曰こふ云はだの客ハ女郎をひいてあそぶをのみ色男とさだめ初會なぞにも先女郎の着物から髪の上をふんでかゝりすこしあまひとばをかくるとあじにからんできりづめにして引たをしめくりや棒引のもとでにしたがるなり又これより一だんひくきやからハ水茶や土弓場なぞをはつてたのしみとするなり或人曰小見世の女郎ハ初會なぞにわつちや子どもの時ハ丁子やに居やしたの扇屋にゐたのととハずがたりをするものなりしれハ小みせに居るをはちてのまけをしみなりたいがいにきひてをくべしと云ゝ

○見ぬかれた手　内ハ大見世なれど家中もの女郎ハ部屋ざしき名代のある夜

【客】年ハ二十二三とみへでく／＼とふとつてかごやにおもたましをとられやうといふかつから洗川御でかためた中たぶさの髪あか斎の田中八丈うらゑりなしのかたのあたりすこし油でよごれた下ぎばかりになり羽衣の入しこんできぬのはゞのひろき をびを前でむすび床のうち

にはらはへになりまちくたびれてたばこのみあきあんどうのらくだをよんで居る所へやう／＼来るあひかた【女郎】はたちぐらゐ良はほそおもてすこしいろへあさぐろひが目鼻だちよくあはれもそつとせい高くあふハちうさんにハあらでもたき事ゆへ人々さいきにしハかつこうものときや　ふそうなうに有てあつたにお茶ハひかずこれへ　ぎらへもよほどねうちがへちやめんの崇しぼりのごくにいちやちりめんのしごきをしめたる姿かふろをよび何かさゝうちする所へたくさうかよりおたきにぞうりやうちのたいこの　しもし　つきやくがゐらずなしうりせんとざしき／＼をていねいにのぞひてとをるを見【女郎】ミつけ　でへぶいゝいろだよ【たいこ】コレハ山さんきやく人かへ　トひやうぶのうちをのぞき　これハどふだ源吾さまでハございませんか【客】ヲヽどふりできごたやうな躰だと思つたマアこゝへ【たいこ】御めんなさりまし先おひさしぶりでございます度々お出なさるならちよつとおしらせなすつてハくださりませんでおうらミでございますホイ又あすこへきせろづゝをおき山けんぎやうだ　トわきとふるひしやれをいふ【客】イヤじつにしばらくこなんだがこのごろすこしはじめたのさ此せつやかましいから【たいこ】なるほどいづれなアハヽ／＼　トつきらない所でそらわらひする【女郎】ふつときのついた良にて　あの子ハモウ何をいひ付てもらちのあかねへひきずりづらだ　ヨウトいふをしほに立て名代の座しきへはいる【たいこ】はつすたと思ひながら　イヨ／＼かんしやく／＼　トまぎらしてやれ　ときにこんばんハおひとりかへ【客】此ごろハ連は一切ないのさ【たいこ】コレハきついモシ此な郎衆も手ハまんとしこんでございますマアいつたい氣ぜんが妙さそしてかの京町ハ【客】シイコリヤ【たいこ】ウツヽツン／＼　トあたりを見る【客】ひすべし／＼酒ハ【たいこ】是ほどから奥座敷の居つゞけで大きにたべましたやはにのませる客人で大のなんじゆうやうかんさ【客】そんナ氣いとをらぬ客ハつとめにくからうよ

又外のさしきもあるもんだから トうぬへとをつたやうなことをいふ 【たいこ】おかしいと思ひながら 大きにさやうさねそこでおさまる とじきにかけ出しさこゝへ参つたらのふ〳〵といたしやしに トほかの客をそしりはわきをいふもかへり馬だちんに早く一分くれろかしそれさへとれへじきに内へかへりあんまもませなからかゝが良ミてくりやうにと心のうちでハ思つて居る客へわが通なるゆへたいこ持も心やすだてしてくれると思ひたをこいかりをそろして咄す 【客】ホンニ思つて見れバ半年ぶりであつたノウひさしぶりだぞ ト云ながら三ツぶとんの間へ入をきし紙入をさがすゆへたいこハ今やう〳〵一分くれおろゝとおもひ 【たいこ】これハくらひあんどうだ トまきらしよとのほうをむいて客の手もとをミぬやうにしておれバやがて鼻紙の間をさがしへに一ぺんですつた手まへぼりの六小を出し 【客】これハなぐさみにこしらへたが見やれッレこふすると是が大の月じやこふするとッレ小の月じや トかうしやくしながら二三まいやれバたいこハあてのつちがはづれあいそうもこそうつきはこむだほねをおつた事と思ひ 【たいこ】ハイこれハ トいつたばかりくわい中し ちよつとあすこに用事が トはたしを半ぶんきゝかけてすげなく立てかへる客も此たいこ持をかすつてはなさせんこ思ひしこつちもあてがちがひさてうゝひとりになり 【客】ア、新ぞうも禿も居をらぬ茶を一ッぱいのみたいものじやが ト立て小べんに行かへりにかどちがひしてとなり座敷のしやうじをあに ホイこれハそこう ト又床へはいりつとめのばんなんをしながらたハこのんだりはなをかんだりねたりをきこミたりゆくび五六十番着のうゝにつゝんでゆく時うつるやう〳〵らうかをはたり〳〵とうハぞうりの音扱へ今来をるなといそひできせるはたき夜着ひきかぶりねたふりして一あれバ外の女郎とミへてむなしくむかふのざしきへはいる此時めへさへて風のごとくなり扱ハこよひハ名代の客あろとミハたゞうせ　つたらこふいふてあゝいふてとむねのうちにいはんとおもふりくつたたんべんもつくしてゐるうち又候あしをとしてしやうじをさらりとあくるゆへぞつくりしてねたふりすれバわかいものが来て油をついで行もはやこたへられずはねおきて帯しめなをし屏風ひきあけてミれバしきせのよごれたふり袖一まいきた新ぞういつの間にか来て枕の引出しをまくらにしたとミへてそれをはづして鼻のこぶまきたをかしたやうにはぎしりをかミながらたはいなくねてゐるをかの客つめたいきせるの先で八ツ口の開わきの下をつゝきながら 【客】コレ〳〵おきてゝ〳〵 【新造】うつゝにて ウ、だれだすかねへウ、フウ 喜六どんよさつせへウ、フウスウ 【客】コレ〳〵をれだ羽織を出してくれ〳〵 【新】やう〳〵きがつき目をひらき ヲヤ

源さんどこへお出なんすへ【客】こへひ良して おれはもうかへる【新】ばからしいまだ八ッでござんすは【客】ウンニヤなん時でもよいかへる早く出してくれろ【新】マアおまちなんし歸し申とじかられんすは ト正直をいひ目をこすり〱ほそ帶のとけたをひきずりながら〱かへ出あひかたの女郎へかくとしらせにゆく客はじしんにたんすの引出しをさがしてはをりを出し身づくろひしてかけ出すむかふへあひかたの女郎名代の座敷からぬつりんと出久しひものと云かほ不氣で來り【女郎】ぬしはマアなんだへ今しぶん【客】やかましいおどれがしつた事じやないふとひ女郎めだいひぶんがあるがよふいはぬうぬがやうなくさつた女郎にはいふくちもたぬァアわかひものにはきものをおろさせろちや屋のくるをまつてはゐぬかへるとむるな【女郎】それだつても用心がわるふござんすきついはらたちやうさ【客】用心もへちまもいらぬなんでもかへるをれがあしでをれがかへるにだがなんといふものだそこをはなしやらう トよひからのむしやくしやばらとむろほどこゑがたかくなる【女郎】マアしづかにしてくんなんし外のきやく衆がやかましうござんす用があんなんすならじんじやうにけへし申ッすからマアちよつと座敷へお出なんし【新】ア、おいひなんすからマアお出なんしョ トむりむたいにひきずつてゆき床の中へすはらせ【女郎】ちよつと見なこれひ良だョ トにつこりとわらひはをりをぬがせてほうり出しよふねさんしまつておきな【客】イヤ〱しまつてはならぬ〱どうでもかへらにやならぬ ト立【女郎】ひきすへマア聞なんし此がうもわつちやなんといひしたへおまへは客しゆとは思ひせんつとめをはなれてあひんすといひしたじやないかへ トいひながらふところのきせるたばこ入を取さげる【客】何もきかん〱かへる

〱そんな手でいくのじやない「女郎」はらのたつ事があるなら一ト通りわけをいつてきかせてなぜくんなんせんへいつそ他人がましいョ　ト云ながら又紙入を取あげる「客」イヤ〱かへしてくれいやじや〱「女郎」名代の客しゆを早くかへしてぬしとゆつくりとはなしもあるにと思つて居たわたしが心いきもしんなんせんでや　ト又客の帯をとく「客」イヤサかへらにやならん〱「女郎」その心いきをむにしなんすなぜ男はそんなに氣づよひものだノウ　ト又うはぎをぬがせる「客」イヤ〱どふあつても歸る〱る　トくちではいへどもはやじやうになる「女郎」ヱ、きつい人じらしだヨウ　トしつかりとだきつきその□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□まゝよこにをしこかす「客」コレいやらしい事よしてくれかへらにやわるひ「女郎」それほどかへりたいかへにくひノウ　トだきついた手でかたをつめり口に口「客」ヲ、いてへべらぼうめサアそんならゐればどふする　トのろくなる「新造」やう〱しづまつたと思ひびやうぶをひきまはしヲヤばからしひ今のさわぎでゆびの輪をおとしたそふだ

「評」＝曰此夜の名代の客たがりやうけんにも色男ならんと見ゆれども左にあらず三會目の客に一ぶ男なりしかれどもこちらのさむらい客をばたかをくゝつて居るゆへまづ三會めの客をつとめもはや床花の三兩もしめてきたゆへ大の平氣なり此うちを一兩はやり手の時がりをかへし二分は小間物屋の内金にわたし二朱はかし本やのはらひ一分はあんまの心づけと心のうちではさん用しながら他人がましいとは手のあることばかんしんなりさだめてかのだんに

なつたらないで見せる事なるべしいつたい人をころりとさせるふうにてなか〳〵色男にほれるたちでなし又なに事にもさばきたがつて出すぎる故二かいぢうでハにくまるゝたちなりこふ云女郎ハたてごかしにしてこつちの釜にすると又よい事ありむかふづらへまハしてハうるさきやつなるべし或人曰此女郎ハ八朔の白むくも後で又何にか染て二度はれをするたちだとちがひハなし又其手でハゆかぬといふ客ハいつでもゆくの也或人又曰此客ハげいしやが三味せんをひくとかならずきせるで茶わんをたゝく人なりと云よ

○それ〳〵する手　中三の女郎茶やの二かいで色男にあふしうち

右草稿出來ありといへとも事繁ければ牒數の多くならんを厭ひ於是省く追而後編に著すべし

○眞の手　世界ハ大ミせ女房にもならふといふ女郎しやうといふ客

【若者】らうかたふく【今一人】湯をしまひます〳〵　ト二かいぢうをふれるいつたい天氣のよい日の昼つゞけの座敷也【女郎】中三にて歳ハ廿二三すこし心もちあしく身じまいもせずねまだれ髪のまゝ白むくのきれをひきさきしはちまきをして床の中にねて居る【客】とし三十二三四すこしにがミばしつていやミのない色男下着のまゝそのわきにたひざたてゝゐる【女げいしや】メリヤス上路〽うつら〳〵とおくる日のめうと事してあそぶ此里　トひきしまふ【のたいこ】ヤンヤア【客】サア一ツのミな【げいし】チト是ハおゝさへ【客】マア〳〵さやうならト　三味せんをかゝへて宮ながらさかづきをとる【茶や男】つぐ【げい】コノ貴様今朝どこへいつた毘沙門様の歸りに見かけたよ　女げいしや山の毘沙門をしんからして参

(りするをはやるなりこれ風通ハ御ぞんじの事也)【茶や男】客人の所へサ【げい】フウ【たいこ】(至極の上へ置しばちをとつてたくまねをして)こいつァい〻木(き)だに(ぞうげを木と云ふ通言なり)【げい】何さあんばいがわるふござりやすいつてへ河東(かとう)のばちさ(ト此うちよほど時うつるだれか茶やの男をよび出すこれへげいしやにむいのかゝつたのなり)【げい】(しらぬふりをして居る)【茶や男】(きやくのみゝへ口)あの子をモウけへしませうか【客】(小声で)ウ、けへしや【茶】ときにモウ箱(はこ)をしまふと云法にしやしやう【たいこ】チト幕(まく)にしてもよからう(ト云所ふしきばへ置し三味せんの三の糸パツチリときれる)【げい】モシ通な糸でござりますね(ト云ながら一ト二の糸をゆるめてしまい箱ならうかへつき出す此間パツ六ツまでせりふ有トヾ)【たいこ】【げい】さやうならら御きげんよふ【たいこ】(たちもどり)おいらんおでへじ(大事)になせへしよ【茶】おいらんへかい物がとんだによく漬(つき)ましたよ(ト云ハはだなのなまづけなり)ちつと上ヶ申やしやう【女郎】フウ(トいつたばかり)【客】そんな御くらうく(トきてるをはたく)【たいこ】ヘテこゝへはき物を置(をひ)たが【茶】ヲツトこゝへかた付て置やした【たいこ】これハおせわ(トミなく帰る中居等をはこび屏風のそとへならべておく)

【禿】(髪を毛筋立へまきつけ丈ヶのミぢかいしきせやうによごれたる着袖を帯へはさミぼうしの禿とくるひながら笥子の袖あけにした)なんだといゝれうつちやつておかつせへこんたのせわにやァならねへれ(トきたる)【客】松野いゝ所へついでくりや(ト茶わんを出す)【女郎】酒(さけ)れよしなんしひさしいもんだによ【客】うつちやつてをけへ呑(のみ)てへから呑れいゝ子だはやくつぎや【禿】およしなんしな(トおいらん盃を出てつぎかねる)【客】つげよ【女郎】そんならお出しなんし(トちやうしをとりわざとこぼれるほどつぐ)【客】(のどそうにするを)【女郎】(きせるでうちおとす酒手あぶりの中へこぼれる)【客】(袖で灰をあふぎながら)おへねへ氣

ちがへだ（ト小ぎく四五まい出す）【禿】それごうゝうじいし（トそこらをふく所から）【ほうばい女郎】（これも中三よせぎれのむくを着身じまいをしかけてあそびにきたところへゑりへばかり白粉をすりこゝかほへまだをしろいなし しやうじを半ぶんあけてかほを出し）モシへうけたまわれバ御とうりうだそふでござんすねおたのしみだねうらやましいヨウ（ト云ながらはいり枕元につくばつて居る）【客】此天氣のいゝに居つゞけも氣ちがひのさたゞねへ【ほうばい】そこがしんじつざんすわな（トたばこをつけねて居る女郎にやる）【女郎】（ふところから手を出してとり）コリヤア山から里だねぬしやアミせかへ【ほうばい】いゝへけふわ出番の棠でやくそくさ【女郎】ちよつとうしろをむひておミせなんしぬしにやア手がらが似合よ【ほうばい】けふいつちやア都合がわるひけども（ト云へあしたわ廿七日でかこあらい日ゆへなり）【客】モシ酒わ【ほうばい】いゝへモウ（ト貝をしかめてかぶりをぶり）モシへしんじつだと思ひなんしへぬしが居なんすときゝいしたから身しまひをしかけて参りしたたんとおしげんなんしヨウ（ト立そふにする）【客】（すそを引とめ）もちつとあそびなせへ花がちる【ほうばい】モウあんなころし文句をおつせへすこわひのう（ト出ゆく入かへつてしらはの）【新造】（二ばかりつばにゆひをしろいべた〳〵と付あいびらうどのよごれた石子を着たなり）モシイおいらんのとこへ【女郎】（だまつて居る）【新】モシイおいらんの所へ【女郎】なんだなやかましい【新】あのね初山さんがなんぞおくんなんしッサ【女郎】なんぞみつくろつて持ていきなんしな【新】（茶やのおくり物なぞとりあつめ持て所へ又壹人来り）【新造】モシイ御無心ながらかてへ紙を一まいおくんなんしな【女郎】いゝきぜんな色〳〵な事をいつてくる【客】サアもつでいきな【新】おありがたふ

ござりいす（トリゆくらうかにこ）【禿】モシ花ざきさんかおつせへすさつきの着物をどふしなんしたとき【新】廊下櫺子へほしてをゐたよ△（かくてこよひやミせたしらする鐘の音はうりくわんとして居た女郎の耳をおどろかせきにさへが しくミなくひるミせへ出ればこゝのすがたきをひき出すすべてなれやのひるミせ時分は夜ふけよりもかへつてこゝかいうそさミしくあはれなるものなり故此客はひつそりと蚊帳の中に二人さしむかひ）【客】コウ錢助が（茶や男の事）けふはでへぶ手めへにはむひていつたぜおれに羽織をねだつて置からだ【女郎】ソレ見なんしあそこの内の者はすかなくつてなりるせんよなんぼこのごろぬしが都合わるくつて何かざいきとざかねへといつてもあんまりげんきんでござんすはなりつちやくやしくつてなりんせん【客】そふ云氣でも有めへそれはこつちのぐちだ【女】何さお聞なんし頃日は異數の新造衆がいつでもいつそ神がりんすとさそれだから附金もてへ／＼氣をつけてをくこつちやァござんせん此ぢうもわつちやあそこのミせで二度かんしやくがおこりんした【客】うつちやつてをけへ手めへのやうな一ッ國を云ものはねへかけでもすゝめべどふでもなる【女】ホンニどら程殘りがござんすへ【客】三十兩のうへあるわきい內だと二かいへあげるこつちやァねへそれだから居つゞけなぞはまァふせうちなはづだ二十や三十の金につまるとはおれもはかなくはなつた（ト少しふさぐ）【女】（うつむいてものいはずやゝあつて）考れはかんがへる程今まで業手に遊びつけなんしたから今の身になんしてはさぞおもしろくござんすめへそれといふも皆わつちゆへさぞにくうざんしやうねへあいそうがつきんすかへ【客】

愚痴な事を云もいだまだ此上勘當をうけて薦を着てもてめへと一ッ所に居ればほんまうだしたが女郎と云ものハ【女】まだわたしを女郎と思つて居なんすかへわつちやもうかミさんになつた氣で居ンすものをちつとハふびんだと思つておくんなんしそれハそふとそんならかうしんせうわつちがわるひはうの夜具をやればしまいばかりハできんせうそしてかの客人の所からも三まいぐらゐハくるはづでござんす外にもそのくらゐハくる所がござんすそれをミんな上ヶ申んすからぬしもちつと都合しなんしてせめて半分もおやんなんしぬしゆへならわつちが身ハどふなつてもようござんすよしや年を入レてもしんす心さ【客】ホンニそれほど迄に思つてくれるこゝろハ死でもわすりやァしねへしたがマアなりたけこつちで都合して見やうから又其上の相談にしやう【女】ちつとも早ィがようざんよ頃日もやり手衆がわつちをよんでしミ〲と異見をしいしたが人の異見で思ひきられるくらゐならぬしをかういふ身にハしんせんわつちを産た母さんをさへ見かへる氣でござんすものを頃日も母さんがきていつそやせたといつて涙をこぼしいしたよ中の間でもわつちにハあきれけへつて居ンすときハテもしせいて上ヶねへときハふてゝくらゐへとかくごうして居ンす命までハうりんせんハな【客】（ぶうち始終ふさぎこゝのいはず）【女】ア、モウいや〳〵何かにつけて頃日じやァ一日も早くこゝを

出たふござんすホンニぬしとわつちハ悪縁と云のでござんしやうよそして御母さんの病氣ハどふでござんすへ何かにとりまぎれて巾ッせなんだワすれずに持ていつておくんなんしへ堀の内さんのお張護符を戴にやつておきんしたよ入谷の鬼子母神さんへもがんをかけんしておとつひから精進をしんすいつそ苦勞だよ「客」おれもよく〱の不孝ものだお袋の病氣もおれが事苦勞にしての事だそれにかう流して居るなぞとハホンニよく罰もあたらぬものだ「女」いろ〱な事を思ひすごすとじつにもつとも早く死たふござんすよ　ト男のかほへつめたいまへかとをすりつけなとだばら〱をりふしそく二かいの方ひるあそびの客のざしきにて　へ三絃歌　へ思ひきらしやれもうなかしやんなわしハなかねどこれこなさんが「客」ア、だいぶふさひで來たサア〱外のはなしにしやう今さらいつたとてうまらぬ事だ「女」ホンニそれもそうでござんす命がものだねでござんすねへモシへ錢助がぬしにねだつた羽織ハわつちが方からこしらへてやりんしやう「客」ウ、そんならマアそふして置てくりや「女」早くやらねへと又口がわるふござんすかち「客」へんとうなきゆへ「女」かほをのぞひて見て　ヲヤぬしやァねなんすかへをきなんし〱　トかほへたばこのけふをふきかける「客」けふにむせながら　エヘン〱ゆふべからまんじりともしねへから　ト又ねふる「女」いやだよねかしやァしねへよばんにねなんしなサア目をあきなんし〱　トはなをつまむ「客」コレサおがむからちつとねかして「女」そんなら勝手にしなんし　トすねてうしろむく「客」こうあやまつた

まんならねゝへねゝへといひ出しちやァ又ねゝへコレなぜこねへに逸りせかしうらみたせ ト泣きよせる

【女】わらびながら なぜほれさせてくんなんしたへ ト客の袂の下から手をさしこミ男のくちびるへくひつき けつちやや後月から月の物をミんせんからいつそ苦労だよ ト背なかへ手をかけ ヲヤあつかましいおときなんし ト男の帯をといて夜着のえとへくり出しじぶんも帯をときはだと □□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□く合せてしつかり へくれ六ッの鐘ゴヲン 【作者京傳曰】ちくしやうづらめな

【評】＝日傾城に眞があつて運のつき右の客のやうになつて來てハ蓿虫歯のいたむやうにどこともなしに身代ハうつろ洞に成べし此身になりても幇間舞妓をよぶハさすが中三買の終なりしかし茶屋ハはつ／＼と思ふべしこふなれハたがひの中にハミへもなくなりみも有合のけるがみなぞハ用事ばかり昔ことよこすやうになりいつとなく其客の好な喰物も好になりその男の癖迄がうつるものなり又ハ客を不勤段／＼切てしまひ終にハ獨客と成互ひに身すまりとなる故老杉や傍輩が寄て異見すれバなをおもひハ増り世界にハ女も男も無きやうな氣になり愚痴にばかりなりて人ばかり恨じミて來てけつく面白く無し女郎の方からもちつと内にも居つきなんしなどゝ異見をし客の方からも隨分外の客をつとめさせるやうに手をおしえてやるとなぞあつて女郎も馴した惡日ハふさひで飯さへも喰ハず役所をもごくなり客もうちへかへつても御持佛の阿彌陀さまゝでが女郎の顏に見ゆるもの也何レ外から見てハ馬鹿らしく見ゆれどその

身になつてハもつともな理屈もあるべきか嗚呼されバ捨がたきハ此道の迷ひなりと双岡のしれものも書しにあらずや

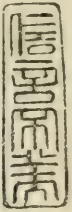
傾城買四十八手畢

予誹にくらく侍れと
此小冊を述終ぬる時
ふと心にうかみたる
まゝこゝにしるす

京傳

西行も未
見ぬ花の
廓哉

自跋



東坡先生曰。男女の婬樂ハ。互ひに臭骸を拖と宜なり。可愛とおもふ妹妓も。最愛と思るゝ優艷も。粧飾も絲瓜も。悉皆臭骸の戯にして虚言の皮をつくらべ。朝に高慢ありて。夕には白骨となれる身なり。莊子が枕とハなるとも。豈もとの紅顔にかへるべきや。これらを見てハ。あなめ〳〵と聞し色男も有。御用心〳〵と示したる。坊主客も有。美女美男燈籠にてらす迷かなとはまことに然り。嗚呼こゝを思へハ。一言の妄作といへども。悟道のはし

たるべし
これもやはり

ゝしるす

遊妓早學問

京傳著

珍らしき新板諸品追ゝ出來申候御求メ御覽可
被下候

江戸通油町

書林　蔦屋重三郎

鯨千話

江左都門北華街幾追尋美人粧白玉佳子擲黃金嬌態千夫惑
妹顏萬容臨洞房何處曲籬郭孰家音傳陌朱唇韻遏雲皓齒吟
晝思翡翠席夜娛鴛鴦衾豈有風流薄當看妖艷溶鄭聲兮衛色
恐是古猶今

洞房妓談

繁千話叙

前に繁野話とよぶものあり。古今の奇談を載。其言夜話〱むく〱として。世にをこなはるゝ事亦繁なり。此繁千話と題するものは。洞房の妓談にして。オス。ザンスの方言なり。もし世に城木屋の丈八如きが是を閲て首すぢもとから。千話〱〱とならば。書肆の幸ならん乎

山東居　京傳述

黒介稲荷

繁々千話 人物名目録

ちや屋男

旦那方

茶やさんる

名代新

女の雛新

〽きくざれ だんな

〽山ちけ ちや屋

〽

花きね

ゑきまち

風そよぎ

月の戸

女げいしや

やりて

〽馬骨 りんつうへら

〽たへ悦 おしやく

〽いろ男 むすこ しんぞう

〽そら琴 ちうさん 女房

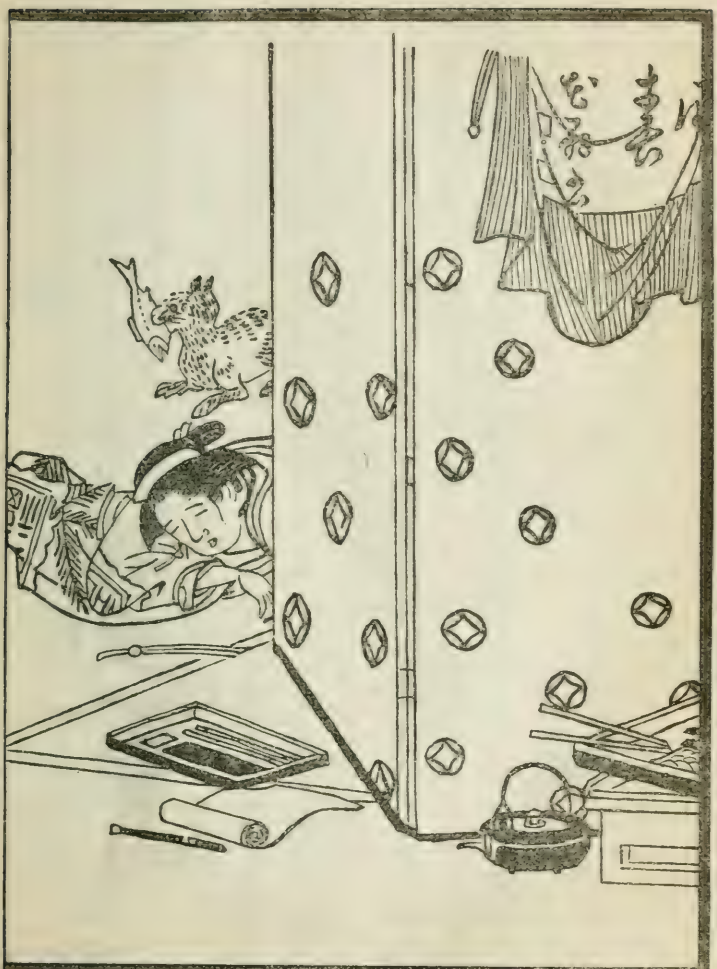
繁千話

○

京傳著

遊閑公子。飾冠劔。連車騎。亦爲富貴容也。女郎のためにミえほうする事昔も今もたかふ事なし。かの川柳点に「色男繻袢で首を括やう」といへる共情を穿たる句なり。今娼門入遊客を見るに。悉身に美服を着し。口に美食を喰ひ。諸藝に疎からず。よく當世に渡り萬事に通じて。鄧通が富貴潘安が容貌も我物にして大坂の鳴池や江戸の訥子よりもはるか沖を漕ぎ。金のなる木も鉢植にし赫奕女さへふつてしめた顔するミえほうハ。皆妹妓。雛妓。了鬟。保兒髮の兀た假母までにたやすからず思ハれんがために。繕飾る事にして。素我身に相應せさる事なれハ。或は金銀の約束を間違又は知ぬ事も知た顔して。人に心を見らるゝ事多し。これ眞の通客にあらず。通に似て非なる者なり。これを未至通といつつべし當世此徒多し。爰に何屋といへるにて有けるか。大きなる女郎屋の二階廊下座敷にて何やらん縺たる事ありし相談と見へて茶や【正助】コリヤア御尤なすじサ　番頭新造【菊咲】べんぜつあたかもため小べんをひよこるかことく手に鍰をひねくりながら　あいさつまんで申ンしやう

がマアこふでござんすあの五節さんとあやめさんと色事の分ハワつちもとうに知ッてゐんすしミんなも來てしやくりんしたけれどワたしが目にかゝらぬうちは知らぬ顏で居ッした五節さんハ梶の葉さんの客人梶の葉さんハこつちの座敷の新造衆ではござんせんか夫にあの雛形さんがゆんべよつて來ていひなんすには此色事の分ヶハワつちが取持だからあやめさんにハ何ッにもいひなんせずにとこまでもわたしかわりいからわたしをふつともたゝくともしてどふぞ五節さんをあやめさんの客人にもらつてくんなんしひころ兄弟ぶんのよしミハ爰でこざんすといひなんすけれど夫レあんまり手前勝手でござんす雛形さんとわつちが兄弟ぶんで常ひこうういもつれへもいゝやつて喰てしめへてへ程可愛けれと兄弟分ンの雛形さんの云ぶんを色て座敷の新造衆の顏の穢るハかまハぬかといはれてハ内所へ聞へてもすます二階の女郎衆か聞ィてもワからぬ者と思ハれれんす【正】大に御尤ナすじた【菊】是と云もぜんたい梶の葉さんがぐうたらべいからをこつた事サそれだけなをおし付られんセん【正】ホンニ御尤でござりやす【菊】それだによつてぬしの内の客人で氣の毒だけれどいつたん五節さんハ二階をとめねへどふもすミんセんハテ爰の二階ばかり日は照ッすめへあやめさんのはたらきで是から中の町であひんすがいゝのサそれハ大目ニ見てつかハしんしやう兄弟ぶんのよしミハよしみ是ハこれだから雛形さんのたのみハ聞とゞけら



京傳画

れんすめへ【正】聞ヶバ聞ク程御尤でこさりやすのサ【菊】ハテ世間にいつくらも有ル事だものをやかましく云のじやァござんセんいちがわるくて云と思ひなんすなへ【正】何サおめへわかつて居るこつたものを【菊】其うちミんなのめへゝも目立やうに手足の二三本もはいれば又わつちもりようけんがしようござんす【正】手足が二三本はいつちやァわつちらにやァなをぐつろべいでござりやしやう【菊】しやれじやァござんセん（ト茶やのむすこのひざをつめる此さとのならひにてまじめなさうだんかと思へばちきに跡は笑ひになる折から△此内にて一二をあらそふ中三の女郎）【空琴】（今宵は座敷には客人来て居れどかねて新造買の客と色事にて今下座敷に床おさまりしとお先キにあがるふり袖新造の知らせによりてうづに行燈にて下座敷へ来り忍び入ンと思へどむねわるな廻し方が見て居るゆへ行ツもとりつやう／＼よき間をらかゝひとなりのあいて居る座敷のから戸をあけ床のうしろからむぐりこみをんとつにいちやついて居る）【色男】（小ごゑにて）てめへ今茶やの男と何か咄をしたがなんだ【空琴】はつをいつてきんしたのサ【男】出る氣か【琴】アイサ【男】（ぐつとしやくにあて）コウ手めへといふ者はわからねへもんだぜこんや座敷にも客が有ルじやァねへかそれに初の客に出る事はねへば鹿なつらだフゥ聞えたァとふに切レたといつたが手めへ又ァノ虎月とやらを新造けへにしてよぶのだな初の客もすさまじいちよつとお日にかゝりやしやうが度／＼だからこんな事であらふとおもつた【琴】ホンニぬしもきついまはり氣でござんすねへこふ云わけでこさんす（トいひそうにするを）【男】（セきこみ）イヤ／＼そんなわけは聞キたくもねへをいてくれをきにしろ（トつきとばす）【琴】（あをむけにたをれしのき二三本をれるやら／＼をき上り）エヽモしれつてへきゝわけのねへ人たよどうしやうノウ（トつい大なこへをしそうにしたがきがついてミゝへ口をつけ）マアねわけをねお

きゝなんしよとふしてそんな氣がござんすものか氣が違ひなんしたそうだ【男】ヱ、やかましいとふりはなし氣も違ハねへでどふするものか聞ヵねへでもわかつて居らァへとこつちも大な聲をしそうにしたがあたりをはゞかりむなぐらをとつて耳に口コレ今夜のしうちで萬事がわかつたハモウ是ぎりだらくしやうめト枕をふり上ル女郎其手にすがり又耳に口を付マアサわけをね聞イておくんなんしョしこれより兩人せいてハ居れどあたりをはゞかりたがひに耳こすりでりくつをいひあふ耳こすりの口論其身ふりをしけれどもこゝに述がたし跡ハふつツふたれつゝの内に手あやまちのてきたやうに苦なしにかたひしするとすこししづまれバ【琴】たき藤でホンニ氣のミじかいわけも聞ずに腹を立なんすそしてとふすりやいゝのだへ【男】知ッたかいたこの文句をづぶでぬかしやァがるそんならわけを聞イてやらう【琴】わつちも相應に虫がござんす客人ハあるしぬしハ居なんす初に出る氣はこさんせんが常世話になる茶やがよんどころなくわけをいつてたのミんすから茶屋の義理ばつかりで出やうといつてやりんしたのサ虎月さんをよぶのにぬしの來て居なんす今夜にかぎつてよひんすものかなんぼわつちかちゑがなくつても其位の事ハ知れて居ンす證據のため此隣へ床をとらせんすからよく見て疑をおはらしなんし【男】此理にふくしやうくをれる【琴】なげた枕をひろい色男にさせミだれたびんをかきあげをれたしのぎをよりあつめてミすがみにくらみ自分もねる跡ハ寂として聲なしさだめて雲となり雨となり臼

となり杵となり二臼くらいへじやうぶなるべしいつたい此いろ男そら琴か外心なきハせうちで居れとかんしやくも一路の景物なれバわざとしたしうちなりなか〳〵手のあるやつと見へたり △所へかの初名代〔客【馬骨】ト云はんくわ通來る此きやくかねてそら琴かねとりといふ客をきゝいざや我そいつころしてミせんすと朋友に廣言をはらひ初名代ハけつくもこたもてるの早くわかるものとぐつとのミこんで來る是うぬばれ大高慢ゆへなり ゐしやうづけ万事のミの五分もすいた所なし黒の唐ちりめんの小袖本八の下着二ツつい白羽二重になをりもみのうら付た袷襦袢黒のカヘチヨロに身代よりまつ先へくつしはじめの紋所うしろ二所に星縫にした袷羽織丸前下りのはしを少し折こミし仕立御納戸茶のゴロフケリンの帯丸ち川仕入の三ン度かハさけたばこ入ふろしき頭巾をくびにまき是ミてく

れといはぬばかりぐつとそつてあゆみ來り まがきの方をミもやらずのれんをくゞる【茶や男】ヲイ氣助どん〳〵【廻シ方】二階はみんなふさがつて居るから下座敷だよ化助がかけひまかてたのていそがしくてならねへまだお座敷をこしらへねへまづこちらへお入レ申ゥ ト先へ立て下座敷へつれゆく【馬骨】だいぶ遠國だの ト座敷へは入り サアくらいは【廻シ】唯今あかりを持て參ります【茶や】てうちんをたゝむ【馬】てうちんのらうそくの火てたばこ吸付る【茶】爰はけつく下座敷の方がようござります【馬】庭を口て 此石はいゝ石だ青の野面だあの燈籠は住吉だが錆かつくとよくなる植物はどれも藥研堀の御緣日だどれもねうちはねへ トモウワる口云「程なく廻し方片手に燭臺を持片手に盃臺小指に銚子をひつかけ一度に持來るつゞいて名代の振袖新造來るそれより廻シ方の勅使三ン度におよびしかど客琴はふしやう〳〵に來りお定りの盃すむ馬骨か座敷のうちちよつと茶をのむにも茶の湯い手つきでのみ酒を□□□ひ紙入から琴爪を出シて見せひらかし胸のわるひ事ばかり故客琴は始終無言にてツン〳〵然として出行跡は女藝者二組程來てかれこれと時うつりむざんなるかな客琴がたのみにより馬骨が床かの色男の隣へをさまり皆〳〵歸る扨馬骨は廻シ床の中に大あくら薄舞の煙草くゆらせ獅子のかうろ見る樣に口と鼻から煙をふいて居る【名代新造】屛風の外あんどうのそばにゆびのさゝくれをいちりだまゝんて居たるが エ、モじれつてへしやくりだヨウ引 ト立出るらうかにて【ほうばい新造】松さん廊下鳶をしなんすなへと引 トかけ來る【名代新】どの松さんだ【新】首尾の枝さ

んの松さんサいつそからかひなんさアナ　ト二人つれ立行　△　むかふ座敷にへふり袖新造　「花きぬ」　袖とめ新造　「鳥まより」　番頭女郎
「風狄」　一三人百万編の中に念珠とられたやうに車座になをり火鉢をとりまいてベラァリ〳〵
とむだ口をたゝいて居る「花きぬ」いゝおけらさんがでんした〳〵　なんでもこわいものに様をつけるから此さとの情なりかとなりさんお盛さんのる
い　「鳥まより」　ナニサおけらさんじやァございせん硯蓋物のたべかけでござんさアナ　「花」　ヲヤ
びつくりしんしたヨ又だれぞそふ思ひニしやうおすてなんしな　「鳥」　きつい苦労性だよ「風狄」
ホンニ此おうの笄ハモウついできそふなもんだノウ鳥待さん　「鳥」　小間物屋どんが風をひい
てをりんすッサそれてまだ持て参りんセんッサ　「風」　じれつてへノウ　ト云所へ禿茶をくんでくる　ごしやうだよ
いつでもだよ又にえきつちやァ居ねへか　「禿」　ナァニあつかァございりイセんヨいつそさぶい茶
でございイすヨ「花」ヲヤ此子ハやさぶい茶といふがあるものかヤヲホヽホヽホヽ　ト笑ふ　「鳥」　コ
レ〳〵おれにもたのまれてくりやどこぞの客人にのかてへ紙を一まいもらつてきてくりやそのか
りあした兄弟ぶんを取持てやるハ　「禿」　アイ　ト笑ひながら行くいわちがつて　「月の戸」　これへ部や持なれとまた年若なりも やわがかへつたと見えとなり座敷でうたかスた
の勤ニぬしあさ寝ゝ電ゝとゑりへ顔をはんぶんうめこんでぶらウナと求り　風狄さんへよしかねおかしくつてなりやァいたしいせんにち
やんとわつちをしよいによこしんすなあの坊主に出るとがハしんせんねへでられねへといつて
やりんしたらこういつてまふしんすハな生かはりにかはりうらんでやるッサ　「風」　おめへあ

の坊さんのあだなを知つて居なんすか【月】イ、ヘ【風】玉眼入の炭團と申ンすとさ【月】なせねへ【風】あたまか丸くで色が黒くッて目はかり光りンすうとさ【月】ホンニそふだよなぜあねへに色が黒ィねへ色の黒ィがはやると思ッて居ンすかねへそりやァそふとお聞キなんしせんどの理屈かまたすミんせんヨ　トはなすそはからさし出て【花】モシイ　伊勢屋の内と角文字さんと神風さんとおめへさんと四ッ鉄輪でおつせへしたら分がわかりそふなものでござんすねへ【風】此子ハ時〳〵をつな事を云出す子だよ三ッ鉄輪といふハ聞ィたが四ッ鉄輪といふを初て聞ィた　ト笑ふ

【花】手前も笑つて居る　【廊下ニて】ト立てしやうじをあけるギシついてあかずむりにあけやうとするとはづれる　花衣さん〳〵おいらんがお出なんしッサ【花】あくびといつしよに　今ァァよ參りンとゝヨ　エ、モじれッてへ障子だヨゥ【風】ヲット氣をよくしてあけなんし氣をわるくあけるとあかねへヨ【月】鳥待さんそりやァなんだへ【鳥】いたこを書た木ざんす【月】そつからちつとよんでお聞せなんしナ【鳥】誰か書たかいつそよめんせんヨ　トかんざしをぬいてあんどうをかきたて　「ワしも一ト重に咲花なれど勤あさまし八重に咲ク」こがれ死にももし死だなら頼ますぞや跡の事「色をするなといはんすけれど花じや若木じや散ぬうち」葉手にするなといはんすけれどこれは互に目にも立【風】きつい頃日のおめへと云もんだの【鳥】後生でござんさあな【月】跡をおよみなんしヨ【鳥】「人のうわきを笑ふたワしか今はぬしゆへわら

ハれる」年と今宵ととりかへほしや長し短しまゝならぬ「主に逢ふたるその翌日はなまけ姿でうか〳〵と」つらい中にも又顏見ればまゝよ〳〵で日をくらす「手鍋さげよと口でハいへとじつハのりたや玉の輿【月】そりやァいつこそすかねへ氣ぜんの文句だよ トこれより跡ハ客のうハさになりいゝのわるいのすいたのすかぬのとはめたはつしてはなすおりから廊下ヲ【茶や女】てうちんをキク〳〵いはせながら馬骨の座敷へ來り屛風こしに參ッてもようございますか【馬骨】まださら琴も案らずまちり〳〵として居たるに よし〳〵いゝが何しに來た【女】犬悅さまが又こちらへ御出なされましたモシ〳〵爰でござります ト云程なく來る【犬悅】ト云ハよほとよろしき醫者の息子是は馬骨か朋友にて京町に馴染があれど今宵惡ひと見え少疝積にて此方へ來りしなり鶯羽かふりのきめ頭巾諸事御坊主と見せる風俗 臺下をとて「ハヽァかけて來た姿の見ゆる上艸履」紀逸點〳〵 ト云ながらきたり 馬骨子足下の得釆ハ如何不佞ハ大ドロンコに及サ 紅毛のことばに醉た事をドロンコと云是儔者の仲間にてよく云しやれ言なり【馬】おめへなせ今時分きた山の武者所た【犬】大なる情頭ありさぐつといつた所が兩三個の客があるといふやつサもらつて座敷へいれろといつた所か平氣でうしやァがつて調唇弄舌をまじえてちかんのごとくとりあつかふからぐつとかけだしさあの妓もくられねへやつだおれも只顧嘆息したあいつァ柴胡湯の性だぜ【馬】いつこふなものだのこうおめへハほれて居るかしらねへかあの傾は景物点の誹諧をする氣で欲心にばかりかゝつて居るぜふてかしのねへうちくひサ〳〵【犬】どふして見ても欲

心家だよいつたいあすこの內の老杉板がまつきざだ（ロウサンハント云とういんにてやり手の事也）【馬】（へ化ことばいつかふわからねへ）何がどふしたと【犬】イヤあすこの內の假母の事ヨ【馬】ウ、やりてかコウ吉ほうかいゝのをだしやしたなんといつたと思ふあのやりてハ吊道具の龍頭といふ面だッサいゝじやァごぜへせんか【犬】奇々妙々ときに婦人おれハ寢てゆくばかりだから長袖を揚てもらひてへ【茶屋女】ハイちやうしうさんと申ス女郎衆ハござりません【犬】あきやァかれ振袖新造の事ヨ【女】ヘエヲヤくワたくしハ又女郎衆の名かとぞんじましたかしこまりました　ト立ゆく【馬】はらァたちなんヲ京町のおめへの傾も首ばかりうつくしくつて野じめの鯛だ（見かけばかりてあぢかあるまいと云事なり　理遁の言也）【犬】うさァねへ鮐の昆布巻サ（これもミかけばかりと云しやれ）そして朝なんぞ見ると面も變だによく見ねへ祥瑞の餌さし瓢と云面だ【馬】ありがてへ〳〵【犬】ぜんてへ此ぢうのばんあいつと理論した時跳槽のきもをこつたがきれやうかどふしやうかとすまぬ心の中にもしばししりぞいて考見れバ今きれちやァ黄金をいとふに似るからまてしばしと思ふうちあつちからをれてきたからこつちもをれてしまつたかモウ殆あいそうがつきた【馬】日光蠟石の曲尺じやァあるめへしをれるのをれねへのとそんなこたァまゝのかハ今ン夜のしうちを幸にきれてしまつて妾の內でけへねへな未練をだしなさんな〳〵【犬】時に足下の今ン夜の世界ハ【馬】まだ床へハこねへかなる程手のある女

郎でござへす座敷のうちが妙サ【犬】かねて佳人才子のきこえあればそふであらう〳〵【馬】すつぱりワつちが書て見せやう【犬】おそろしい〳〵足下の宰我子貢でハたまらねへのさ【馬】したか名代ハ此廻シ夜具でおそれるノウ是見ねへ夜着ハ錦の色揚だ錦の色揚と云ハ此廓よりほかにやァあるめへす分散女郎の古夜具とミえるコレ枕にやァ引出もねへ此紋を見な金箔で石塔ニ付やうと云紋だ【犬】妙言〳〵（トわるしやれをいつて居る所へ犬悦にあかつたふり袖馬背が名代の新も来り座敷のすミあんとうのかげに二人さしむかひしちにとられたぬうにだまりんている）【馬】コウおめへたちァちつとこつちへこねへか【二人】爰がようすヨ【馬】金魚鉢を晌へたしたやうにとかくくらい方へはいりたかるせ【新】なんさんすとへ【馬】モウいつてしまつた【新】（一人の新造の耳へくちを付）あの客人ハ水さいの亀ににているノウ【新】（馬背かほをつく〴〵見て）ホンニよくにて居さつしやるヨ【馬】さきつからだれににたのかれに似たのといふが身かわりにでもたてるきか【犬】此子たちもをつつけ一個の名妓になるだらう嗚呼梳櫳とでかけたい（トいふ折ふし廊下を女けいしや通りを見て）【馬】悦さんおめへ今の藝をしつてるか【犬】今こゝを通ッた女樂か【馬】ウヽ藝者ヨ【犬】我未知之ぬの【馬】あんな悪藝者をしつちやァうらミたさきつから廊下をいつたりきたり用もねへに光るがありやァたしかに櫛を買て二日めでござへしやう【犬】ウヽイ回〳〵こりやァ見せたからうその櫛も人の質にをいたのをうけきせてもらつたのだらう【馬】うさァねへ【犬】

コゥふく茶といふ所を一ッ吃てへ【茶女】お茶でござりますか【犬】ゥ、【女】持て參りましやう（ト立ゆく）【馬】でへぶ廊下がそふ〴〵しいなんだ【新】ありやァ江戸町へかくれていかしつた客人をつかめへてきんしたのサ【犬】其爭也君子なり（トいひながら立）【馬】どこへいきたまふ【犬】小解に去のさ（犬悦へあしやたけに唐の俗語をあそこここゝきりぬいておぼへてゐるゆへしつたかふりにてむしやうにいゝたがる馬骨へからつきりの文盲ゆへこのことはいつかふにわからねどもきいたふうの事なれへまけをしみにて何の事たときゝもせず大かいにすいりやうして）【馬】潮をしにゆくのか【犬】いんにや小べんにいくのよ（ト云所へ女茶をくんでくる立ていてくつとのみ）ア、馬の小解と云茶だ（トむりな所へまて俗こをつかふ）【女】すぐにお休なされましあまりこゝが【犬】其句嘗てせうきの幕

「河東峰に一（トはけ）夕霞」とうなりながら小便をして來てそれより犬悦ハねてしまひ茶屋の女も暇乞して皈る二人の振新も二かいへ下ひぞうをしに行又跡にハ馬骨ひとりになり將棊の都づめになつたやうな心持にてよほど時移どまた空琴ハ來らすこうでハないはづだがと胸の中ハ筆の室て奉書の卷紙をきるよりもしれつたくあまり退屈なれバ保養のため室小便をたれて來てもまた來らねハ欠三ッ四ッしながら廻し屛風の唐詩をよむ【馬】こいつも東江流だなナンダ「のぶながミやちうのくさッサ。としへ\あきのところにうまるゥ、。ときに（ト此所さつはりよめぬゆへくちのうちにて）な〳〵なにのあと。（トすこしかんがへてまた大なこへて）ヲ、つかひをよこさすにかいにゆくだらう」と大間違を獨謡折から空琴ハ盛-粧艶-服光-彩動レ人の風俗巧様新裁皆隨時變易見者謂是時世粧べ

長信宮中草　年々愁處生　時故

珠履跡　不使玉階行

し羅帶に懐手してせり出しの奥州を見るやうな身振すこし髪の毛のみたれて顔へかゝりしまで艶きなり一体茶屋への義理て出た事なれバまさか捨てもをかれまいと來て障子をさらりと明る馬骨ハうつかりとして居たるがびつくりして烟管をはたき宿衣をひきかぶる【空琴】よりそへてモシへもふ寝なんしたかへ〳〵【馬】さすか狸ねいりハ古風とおもつてハゐれととふいふはりあひてかついねたふりをしたゆへきゆうにをきられもせずウ、フウ〳〵【琴】ヌもしい〳〵」と氣かつきてそこらを見れハ今はたいた烟艸のふきがらが火入の中にまだけむつて居るゆへ是にて狸といふ事しれてハゐれどわざとまた」モシへ〳〵ねなんしたかへ〳〵【馬】ウフウア、【琴】へあまりをきぬゆへさいわいにして行にかゝる【琴】是ハあまりしすくしたとおとろきあへてコレ〳〵モウ覺た〳〵とこへ行たまふ【琴】心持よく寝て居なんすからをこしまうしてハ見んしたかあんまり心ねへやうだからいつて參ンしやうと思つてサきつい寝なんし様だねへ【馬】いあまりお出が遅からセめて夢にても見様と思つてサ【琴】何方その夢を見なんしたのかへホンニ初から名代でお氣の毒だねへしかしお馴染の所がわるくッてしやう事なしにお出なんしたのかへ【馬】決てそう云事でなしサいつも御全盛と云物だからしらせんと思つてはつ名代を承知で來るくらゐだものを是にて諸事御粹察サ【琴】ホンニかへ御志ハお難有ござんす卜隣の方を見て笑ふ隣座敷にハかの色男とおさきにあかる新造とから紙の引手のとれた穴からのぞきこてわらつて居る

【色男】コウ耳をだしな【新造】なんでさんすへ【色男】アノ客人は大黒舞のこび八に似て

いるによ【新】ホンニにておりんすヨ【色】ごふぎにかミのねが上ッているぜ【新】靜になんしきがつきんすよ（ト二人いきなところしてのそき居る）【馬】（それとハ夢にもしらず）お前のこつたから定し色も戀もあろうか馬骨流ハそんな事ハかまァねへ法た色は色客は客だからぐつと大まかに見るのサ共上ハ互の腕づくに有こつた【琴】ホンニそふでござんすなんぼこつちがほれているが負だといつても分も聞ずに討たり擲たりするハ惡洒落でござんすのサ（ト隣の色男へあてゝいふ色男へのぞいて居たるかこれを聞きせるてうつまねをする）【琴】（よ着の袖でかくしひそかに笑つている）【馬】（それとしらねバ我身にうけて）こつちのはたけにやァそんな事ハねへのサワつちらァきにくはねへ事があれハ手をおろさずに口でさばくといふ奴さくりやァどふでごぜへすちつと川岸をけへておいらか樣な者もくつて見なセへ又をつな味の魚だよとら程廣いさとたか馬骨を組とめる五郎丸かねへ口ざす敵ハまづお前だ【琴】ワつちもとふぞほれたうすが主が主にせきのねへ程ほれていなんすから共上へハほれ所がござんせん【馬】（少シむっとして）ナンダトお前だへぶあしな本よミをするの【琴】ヲホヽホヽそりやァじやゑたんねお氣におとめなんすなへそしてぬしやァなぜ遲お出なんしたへ【馬】けふハ全てへ柳橋の大夫か所の稽古會たからちつとべかし聞て夫から早く來るつもりて有たが向嶋の權三が所にちつと用が有ていつたハなァホンニ中田屋の文鯉も可いゝ事をしたノウけふ武藏屋に與四郎鬪取や額親方や勘五郎等が間中のてやいを二三人連て來て

居たから大坂や水戸の勝負を聞キながら一盃呑でかへらうと思つたら蔦屋の平蔵が寮で誰かよぶから見たら品川の村田のお熊と左達サ宿のげいしやを大勢ひきつれて來て居た村田でも共哥が出ちやァ松山だ全体手取だものをあれハてつちの生れだから氣しやうがいゝ何か又例のお熊が大酒をはじめそうだからそつとはづしてそれから三朝か所へよつたら土ばしノ助次が來ている金升や万や姿見煎餅が來ていて大酒落にしやれて居た助次がをれを深川へひいていかふと云腹で水を向たがをらァこつちへくる氣だものを何いくもんだ一昨日土橋の新尾花へ唐料理を喰ひニいかふといつて二三人神を連ていつたが中にお勝をよぼうといふやつがあつて口をかけた所が亀屋の出番をおくつてァサリ河岸までいつたと云からそれじやァはじまらねへと仲町へ引道具にして梅本とお目にかけて今雛松やお靏と云誂の鳴物があつてちよびと討込の拍子幕で遊ふつもりであつたが并大名の神めらが渡りぜりふでうたせやァがつた一体おいらァ吉原で育たから深川へゆくと水あたりがするヨホンニさつき堀の芳野やのめへで佳六にあつたつけ今時分どこへいくといつたら代地の甲子にめへりますといつたが大方又淨瑠璃だらう文魚が江戸節ハ黒イものだノゥそりやァそふと角町の親父ハどふだの俄のせ話で揚弓もひけめへ久敷逢ねへ墨河ハ頃日金川の別庄へあゆばねへかといつて言傳をしてよこしたつけじつハ昨夜こようと思つ

たが茶によばれたからついこなんだ今(こん)やも三升(さん)が所に香會(かうぐわい)があるといつてよびにきたがことはりをいつてこつちへ來た又明日ハ赤坂の熊さんや誹諧(はいかい)連のてやいと眞間へ紅(もみ)ぢを見にいくはづだが大方又江戸藝者めらがいくらだらうそれだからおめへ明渡日よかァしまつて居てくんねへおめへ義大夫ハどふだ好なら仕大夫でも此村尾でも連(つれ)てきよう　卜當時名の高いものをならべ立心安いやうにはなす空琴へこいつとんだきいたふうと思ひすこしあそびかける【琴】ぬしやァいろいろな人にお近付があんなんすねへそねへに廣(ひろ)くおつきやいなんしちァお遊(あそ)びなんすにも隙(ひま)がござんすめへねへ【馬】アイサつきやいがすきでこまりやす時にこうお前(めへ)そう堅(かた)く遠(とを)くへどいてることァねへもつとよんねいな【琴】ワつちもよりてへけれどぬしがそねへに通り者(もの)づきやいをしなんすお方だからもつてへなくつてまぶしくつてどふもよられんせん【馬】コウ何もそふ捻(ひねつ)てくれる事ハねへよんねへなコウ洒落(しやれ)じやァねへ　卜むりむたいとひきよせ此ひやうしにまたくらへわりこみにかゝる【琴】アレサマァお待なんしよ【馬】なぜ【琴】なぜといひなんすけれども何もつきやいでそんな事をしておくんなんす事ハごさんせんそりやァ人ちがひでござんしやう品川だの深川だの江戸藝者だの引手あまたのお方だものを女と寢なんす事にやァあきていなんしやうワつちらが様なかづならぬ女郎でもとぼしておくんなんす心いきハお難有(ありがたふ)ござんすがヲヽほんにつかねへこつたがもしへ池(いけ)の端(はた)の錦丹(きんたん)さんなんぞハさだめしお近付たらうね　卜外のはなしへちらす　△うまらぬながらも

【馬】さためてこれも通人ならんしらぬといふハはぢと思ひ　すいぶんサ心安(こゝろやす)いのサ【琴】ほんにかへ神田(かんだ)の與吉(よ)さんわへ【馬】これもしらぬハはぢと　アイその人ハそねへに心安かァねへがずいぶんしりやつて居(い)やす【琴】ほんにかへ伊勢町の米俵(べいひやう)さんなぞハへ【馬】夫(それ)ハ別(べつ)して心安イのサ【琴】かミさんをお入レなんしたそふだねへ【馬】そふさ〳〵ちやした〳〵【琴】とつからきなんしたねへ【馬】あれかへあれハね　ト此所ぐにや〳〵にいつてだきぐらかしている　【琴】小田原町の半黛(はんだい)さんハへ【馬】これもすいふんつきやいやす至て心安イのサ【琴】ほんにかへ【馬】ふだんつきやいやす【琴】ヲヤほんにかへほんざんすかへそんなら主(ぬし)の弟(おとゝ)の魚街(ぎよけい)さんハへ【馬】あれハ又兄弟同前(きやうだいどうぜん)サ【琴】ひつくりして　ほんでこさんすかへ【馬】ワつちとハあい口サ氣があつていやす【琴】ほんでござんすかへしんにかへ【馬】しかも今日來(けふき)がけに兩國(りやうごく)で逢ひやした　トきくと空琴ものいはすはな紙をもつてずつと立てゆく　【馬】てうづにでもいつたかしらんと思ふうち番頭とおぼしく來て【番新】モシへちよつとお目にかゝりんしやう【馬】だれさんだ何でこぜへす【番】外のこつてもござんせんがぬしハ魚街(ぎよけい)さんを知ッて居なんすそふだがさだめてそれをしりつゝおいらんの所へ御出なんしたのハ何ぞわけもござんしやうか御そんじの通り魚街さんハおいらんの所へ久敷御出なんす客人の事たからおまへさんお氣(き)の毒(どく)なから今宵ハひとりお休(やすみ)なんしておくんしそれをはじめからぞんしいせハおいらんもてなんすのじやァこざりいせん　トいひすて出て行　【馬】これはしたり口から高野へ參つたかとこうくわいすれとせんかたなく今さら

さつきいふたへいつはり言へしらぬ人たといひなをしもならすア丶はやく夜かあけれへいゝと廊下へ出てれんじのそとを見ればむかふの屋根にはや一はんからすが來てとまり馬骨かゝほをさげすみらしくよこめて見て　【烏(からす)】アホウアホウ

〱〱〱〱〱〱〱〱

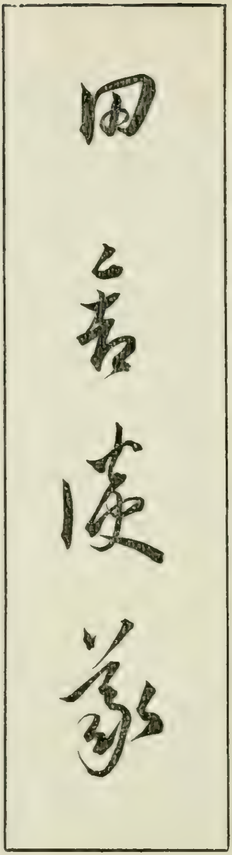
是(これ)ぞ所謂(いはゆる)未至通(はんかつう)の徒(と)なるべき乎(か)

洞房妓談繁千話畢(とうぼうきだんしげしげちわをはんぬ)

馬骨は何所の馬の骨なる乎。馬骨ハ一人の名にして一人の名にあらず。馬骨馬骨を見て馬骨なることをしらず。馬骨馬骨を見て馬骨なる事をしらバ。馬骨馬骨の名をのがるべししかいふ

京傳自跋

寛政ふたつ
戌の春日



田舍談義發端

予去年の秋。いでや市中のかしましきを避て。鄙の月みんと。刀禰の河北にしたしき朋友のありけるに心。さして。艸庵をうかれ出るに。秋聲鼻を酸め。秋色腸を斷。目に見るほどの景物皆風流を帶たりわきて田家の軒に。萩尾花の露にふしたるなど。我身ひとつの秋なるかと。往往ほとなうして。草加の驛に至り。酒肆に柱とゞめて。一椀の酒を求め。心ゆるこしまゝに。思ハず床机に眠りけるに。人有て起よ〳〵といふ。目をひらきて見るに一人の翁なり。翁の曰客好で戲作をなすことをしり。傖父嘗て述たる一冊子をあたふ。一度閲時は腮の釣匙をはづ

し。臍忽に店かえをすべし。賈大夫が妻といふとも一笑を催す事速なり我ハ竹の塚の翁也とてかの草稿を予が袖にをし入て去ぬと思ひ目さめて袖をさぐるにはたして一巻を得たり未審と其書を開けハ左の如し云々

江戸市隠

山東京傳誌

自序

稲刈て天地に怖きものはなしと誠に秀吟なり今や聖賢の御代にして萬國ミな仁讓あり故に天よく萬物を育したまひ地に預りしもの十重二十重に實のる見るにいさましく粒〻皆心苦と語せしも豊作にわすれ民屋の賑ひいふもさらなり予かつしかの郷に行くことあり時もひがんにして廣田の稲ミなぼさつとなり金色の光り黄〻と照らすあたりにいみじき佛室の有ハ幸に結縁せんと導場に至り見ればあなたふとげなる說法のあり和尚の流辯ハ三毒の塵をはらひ聽聞衆の頭數は菩提揃に似たりおもハす感喜なしつゝ嗚呼予も法の友ならなくにと尉と姥の中をかきわけ

高坐の下にすゝみより木耳（に）をかたふけ首より尾まで默然として腐銅に納め置（をき）しか怵寂のつれ〳〵に一冊子となしぬ見て笑ん歟いなか談義と有のまゝに竹の塚の翁東子なるものミつから題し侍りぬ

田舍談義

爰に花のお江戸を百町余去つて葛飾の郷あり東ハ利根川の流れ渺〳〵として順風の帆影穣井に移り西に中河の青水帯流して呂拍子の音水田にひゞく其地洪水にうれひあれと豊作に倦す雨順都合セハ穂に穂咲の名郷なり此秋こそいつとしに覺へぬ豊作にして四石とりの說あり譯て金田村の滿作他にことなり一村の賑ひ落穂につゞみあく鳫金も羽を休日の三日正月村ても若いものゝ頭を押す家持の杢助 小の川染のひとへものに雨國尾張や出の紺はかたの帯を尻下りに〆丸木綿の下駄に赤いかへをすけ梁流しの毛ほりのきせるに朱らうをすけそう色ちりめんのきせるつゝを結ひつけはまむらやと紀の國のもん所のさらさうちへをもちかたにさらしの手拭をかに編道を一はいにひろかりながら こけへいくのハ風つはりの兄しやねへか。げへにはやく出かけたアな。まよりさへ一所にいくばへハナと呼かけられ【助右衛門】 いがんもふん事なれば青ちや目引の小紋の給に黒さん留の半ゑりをかけこはくじまの七ツ過といふ帯を〆肩に花染の手ぬくひをかけかハぞうりをはいて ラヤどこれだァとおもつたりやァ家持のおセなァかどけへ行氣だァ【杢】おらァ法福寺の物讀へいくべいと思つて 物よみとハ談義說法の事をいふ 【助】そりやァ奇どくだァね物讀も晝間のうちハあんぢん事べへで。ねつからおもしろくねへよ。よさつセへばんげいぎますべへ。何ンだァか敵ぶちだァとよ。そりやァさうと。お身らがとなりの茂平なァ。ふけたァげだァ。けへ

り申たかな。ふけたとハ欠落の事ニ云　あんでふけましたァ。ばくちやァ御はつとだァし。どうしましたな【杢】何ヶものよ松戸河岸の。おん女郎でふけたァ。それもハァべらぼうな咄しよ【助】すんだら女郎でが•どうしてな【杢】とんだァ事よ• いけゞへぶんの悪い• 兄嫁のおばァが• 江戸のお屋鋪にゐて• 去年の冬死ましたァ• そのかたミだつてよこした• 浅黄縮緬の褌をそつと持だへておん女郎にきつくれたァが• 尻のうわれて• それでふけ申たァ• いけへくそだハけだァよと•咄して行向ふから隣村の通り者【小松】異名東金の茂右衛門が背戸セどで鳥がなくっトうたひながら　身なりは似たものなれハこゝにりやくす　ヲャ〳〵そろつてこりやァどけへ。物讀いかでかく盛るさうだね【兩人】松あにいか　此ごろハあへましねへ工面ハよくござるか【小松】いゝじやァねへのさ。むごい物だァ。錢らうけはずがねへのさ。だへぶ店が賑かだいつて。一ッぱへつゝ呑ンますべいト。三人連れ立店のまへにいたる　まづ在方の店といふハこもかぶりを壹本たし立其外酢醤油さうりわらじ。紙ろうそく。附木きざミたばこ其外いろ〳〵の物を正面の戸だなにならべ。勝手よろしけれハ。小質てとる。您商とふれるのゝしまりたるが。此店をはす在方ハ似たものにて一日正月の時ハ村中の老若男女より集り。ちらや酒ものをして　おどりうたひすさまじく賑か也わけて盤征の時ハくんじゆなす也【小松】亭主ゐたァか【てい主】ヲゝ松さなァどれもよく出やしつたサァよらへ。家持のおセな。ひさしぶりだね【杢】何ァにハァびやうどくるが。いつでもうちにやァめへなへ。かミ白べへ。ゐるから小氣づけへだァによつて。一ッ盃のんじやァじきさきかへります【助】ちくべい。いはねへがいゝ。かミ白べへな

らいゝ娑にして。呑んで居べいナァかミさん又聞ねへふりをしるよ【女房】しさしいもんだァ助右衛門どんナァハ來ると悪口べいきゝ申スにくい人だァサァミんなあがらつしやりもセ【三人】何ンぞ。さかなハねへかなまづでもあんべい亭主此頃ァ網代ァどふだ【てい主】何ンだかとれ申さぬ　鮒の焼たァかある。是で呑つセヘト辨慶より四五本ぬいて。酒をかん鍋に五合程いれて茶碗をそへて出す三人大あぐらにて呑はしめる片わきにハ村のおとしより百姓貳人奴豆腐て濁り酒をひかえなから【茂作】お旦那ことしハおめへの田を作つたおかけて去年ゟ五俵はへもうにとりましたいつにねへ事共替りにやァちいさへ娘を新田の舍弟かとこへさつくれはへと思つてセんと馬喰丁へいつた時大丸て古着をかうへいとおもつていつたらこつちにやァ古着ハこさらぬ富澤丁へいかつセへといふからすくにたへまるを出てとひ澤町をからうつちやすれて鳥町はとこてこさるとたつねたら鳥丁と云ハ江戸にやァない枇杷葉湯なら烏丸た雉子町ハ神田とひ坂ハ本郷たァ何をたつね申すといふから古着を買ひに行ますといつたらそんならとひ澤町たとおそれつてやう〳〵尋ねててかく古着屋の有處へいつていゝきる物を二ッ買つて來ました【お頭】ソリャァハァいけへものいりたァひとつてよかんはへに【茂作】何サ二ッを直してひとつにすへいとおもつてサとんたァ堀出し物たァよ地ハ淺黄のきぬて金はくてめてたへ紋所

よ松竹に鶴龜かてつかくついて居ます二ッてたんた壹分て買ましたよ【お頭】そりやおふきたんへい直してもやくにやァ立チますめへ【百姓甚八】サア咄しはへし申さすと呑てさしめさろのとかくひく〳〵いひます【茂作】ヲヽすんだらかさねて物すへいと手杓てくう〳〵呑んで甚八へさセは【甚八】こりやァ見事たァおつへすはへ其代に肴にひとつ諷ひませうとつちやう聲をはりあけて〽（謠）高砂やあの松の木を臼にして其うらほちを杵にして餅をつくこそ目出たけれ引ハヽヽヽ是しやァひきずはへ【茂】こりやァおめい付たァと顔をしかめて呑かける見世の片隅にハ若者ひとり馬工郎貳人交ッて酒をひかえなからとほうもなく高調子て咄すコレハ馬工郎の持前也【はくらう吉】コレ戸か崎のおせなァきけへせんとをれか金町の三ふとはくろうしたとち栗毛の馬ァな三ふやろうか稲毛へ乗つて行きやァかつて十粒負をふたした（小粒一チ分を一トふといふ）下馬もいゝちくセうてな土浦の馬市へ乗つてゆきァかつたとんた虫のいゝやろうよそりやァそうと權八龜割の金ハすんたか【權】何ニハァふつてもはてへても。よくしやァがんねへ此頃ァ水戸へうしやァかつたとよ【わか】そんだらかゝァでも。ぶつたくれハいゝ【ごん】エヽあんなものをあんにする物か。ふきけへろが。あくびをしてゐるやうな。かゝァを五兩ぶつてもやだァよ【吉】そんなに。さますな。いしやァそれでもあしをつけたじやァねへか。頬ハきくつてもあしはがんた

んべへ「ごん八」たァことをつくな。おもしろくもねへヱ、、モウ酒がねへ。コレてい主濁りを割つてモウ一トツかん鍋。くれさへと。銚子切リついて。するめのつイたをむしり〳〵。コレ吉。昨日勘二に見せたあげつ歯れ（あげつ歯とハ馬の手のあかりたるを云）どけへもひいて。いかれねへからいゝかげんにたゝき付てしまへ「吉」とんだ事をいふもんた。あの馬にやァ。をれが軍が。あるといふ内酒を出すいよ〳〵高調子にてさへつおさへつ奥の座敷にハ大百姓の小旦那とミへて（浅黄きぬ小紋の紋付の單羽織に空色ぶとりのひとへ物に。黒とんすの帯を。むな高にあて何か詩をかいた扇子をもち一年に二三度つゝハ吉原へもゆくといふ風俗相手ハそがミのゐしや逃留賀徳庵ようかんいろのろの羽をりに片めん小紋のひとへ物に眞田をりの帯ふところハとほうもなく大くしたちものゝ見へてものいひ鼻へかゝり）「徳庵」小旦那もし。となり村へ。江戸から放蕩子といふじゆしやか。ではつて大學ナア講譯サ。するげだ申わぬしサア。聞もしたか。でかふ高慢サァいふともし「小旦那」聞キませぬが。江戸から流れて來た。くらへだァから。高のしれたァもんだんべい。ほんに徳庵老にやア。まァだ見セねへツけ。先どをれが樋の口河岸の女郎に題して。狂詩のものした（ひの口河岸とハ在戸のかしなり）書いて見セべへコレかミゐ。硯箱をちつとかさへ「かゝ」アイといふて掛硯を持て來る「小旦那」懐から小半紙をとり出して。筆をとりて書サァ徳庵老とたす「徳庵」フ、何ンだモシ濁酒大醉對夕風　四文錢一本懐中。女郎買往權八殿。廣大夜長今五鐘。ハア、こりやァ出來もした東冬の韻カァでおもしらへ。小旦那も中〳〵あじをやりもす。イヤハヤ我がへけもしたァと

此口條小日記のかミと見へてむせうに・とめる医者にもゆだんハならず【杢】何ンたか與しやしきにやァ毛唐人の寐ごとこけへに。むつかしいこんたァおれづらがにやァ。ですへワからねへサア　もうお談儀もおへたんべいっ　だへもんへいつて。名主どのゝ。娘のけへりを見ばへしやァねへか【助】けふいつたァかな。あの顔ナア。とんだじこうなァ女だァこんと豊年だつて哥をものしたとよ【小松】ハア、あんとよんたナァ【助】ヲ、きけへ。ア、なんたつけなァそれよ

〽満作やうつたまけたる稲の出来
　孫彦やしや子喰ひあまるべい

【杢】【小松】コイノハアいゝとんたァ作者だァ。江戸にもあんめへモウ口くれるさうだ【小松】なる程。おらァたへぶ用があり申すサア　わかれますべい【助】又うまへ事か。はん口のりたへな【小松】のりたへも氣イつやへサア　亭主変れ。をれが一ッ所にはらへますよ【てい主】ヲ、よし呑込ました【杢】【助】いんにやァそれじやァ。わりい。作く割にしますべい【小松】はてらチらねへ。ようおんすれナていをれげへ。ものしてをけへ。すんならミんなァゆるりと遊べつセへ。ばんげおだんきへ來て。しりてもしねるべい。かミ合セわてこざつた【かゝ】マァ遊べつセへ。そんならよく出なさつたよ

金田村の法福寺といふハ一チ村一ヶ寺の舊地にして。本尊ハ弘法大師の御作の阿彌陀如來なり。此秋大滿作なれハ。本堂修覆のため。近郷に名高き談義僧。佛相寺の天鳳和尚を頼ミ。彼岸中晝夜說法ありければ。近郷近在ハいふに及ハす。方壹貳里が間の。老若男女。群集なすゆへ客殿に松板を次て張出をなし。村内の檀方世話役。庫裡衆寮に詰かけ奉納のはり札ハ。本堂のなけしに張あまり佛餉袋の杉なりは。伊セ町。小網町の入ッ舟にことならす。取わけ。夜ハ參詣おほく。本尊の前にハ。手前造りの花をかさり。盆てうちんの白張を。一面に燈しつれ。双鉦二挺に鎭守の。太鼓を交て。皺かれたる念佛亂調に打たつれハ。秋風にさそハれ隣鄕隣在に響き渡り近來比類なき大當りにて。村中の小道もせハく。大きつまあめおこしの呼聲耕作にひゝいて。夜の更る事をしらす。最はや夜談義のはしまると見へて。半鐘の音聞えけれハ【はゝ かゝ】子とも引つれやれ長松へはやくあいへ居場かなくなる〳〵へ【若者】コレ吉やへはやく來ねへかへ。モウおたん義かはしまらァ、いけ埒のあかねへと。われも〳〵といそき門ンの入口を押て這入る門の内の杉垣の蕋に十七八の娘なるミしほりのゆかたに花糸のすかの立しまの帯に上田の紙の三ツおりを前の方にはさみ手らうのきせるをあたまにさしそのうへから染かけの手拭をかふり人まつふせいに立ていれハらんとうの内やふをかた〳〵とおしわけはたち斗りの二才茶ひろうとの袷に油しまの帯をしめこんの手拭をかふり日より下駄てぬきあしたしなから【二方】そこなァおかねしやァねへか【娘】だれた德とんか。いかく待ましたァよあセハァそんなにおそくござる【二方】おれもハァ氣イセくから。日イくれると。とつかとうかんたしてナ本道をくると遠から次郎作ら

ァ背戸のなすく道を來るとつて・權右衛門どんの糞溜へがらおつこち申て・數々ハァ・つらもからだも。糞たらけになり申た・とんだめに・あひましたよ・どふもハァすべいよふがごさんねへから・用水堀へ・どんふりとびこんで・あにかァ・せんだくのうしもうして・彌兵衛後家を賴んで・給のうそつと兄娵のとけへそう云つてやつて・やう〳〵うまきましたコレミさへ・まだ糞の匂へがします【娘】ほんにナァ薄ぐさくごさる・どこもけがナァしもうさぬか【二才】あにハァげがハしなへが・たゞくそにばへなつた事よ【娘】そんだらいゝ・こん夜ハ内の首尾も・でかくいゝから・おもハれにあそんばへ・どけへいくべいかナ【二才】待さへあすけへ・だれかくる・めつかつちやァよくねへ。こつちへ來さへと　娘の手をひき藪の中へはいつていきをころしてすくんで・いれゞやぶ蚊がきてむせうにくいつけど〳〵・手のひらておしつぶし〳〵・おんミつにいちやついてる

△擬璉堂のわきより・としころ五十ちかき道心坊白もめんのひとへ物に・麻衣を首にまき・しぶうちわをもちながら出る・其跡から四十四五の女後家とミへて・空いろ木綿のひとへ物に・さん留嶋の帶を前へむすび・足もあたまにきせるをさし・其うへから手ぬぐひをかぶり・二人ながらくらい所にたゞずミ【後家】これ坊さまいしやァおゑねへ人たァよ・此頃ハ・ねつからよつつかすついぞ・つらも見セねへ・あぜハァそんなァに・生が惡くごさる・おミゐとねんごろを・しハじめ申たハ・それわすれもしめさるめへ・去年の盆の棚經の時・內の者ハミんな・踊(おどり)ミに出て・おれべい居たら・こなたのいふにやァこれ後家どの・そんたァもごていに離レ申て・ひとりじやァさびしくごさるべい・道心坊の身で・こういふも・氣のどくだァが・とつくからお身に・かつぽれて居申

た•うそじやァごさらぬ•ほんのこんだァよ•たくはつしてもらへためた•引割が蛭になる法も•あれしんじつだァと•おいやつたによつて•ついわしもその氣になり申て。人ㇳの目なこ玉を。しのんでものして。まなこへ入れても。いづくねへほど。いとしくおもつてゐるよ。此頃らァ秋風だんべへ。かげも見せねへ。大方外にいゝ生根ができたんべい。ありたへに。白狀しめさろ。それがやだなら。その着て居るひてへ物と。盆前淺草のおくハんのん參りの時。かした百の錢と。越中褌のきれを。けへしてもらひますへいと泣聲ての大くセつ【道心】そりやァハァらちもねへ恨ミこんたァそうゆふ氣ハ日藥程もねへよ此頃らァ腰ねへらかおこつていこく事かならねへから御向の伯樂殿にみセたら人間のねへらにやおれかくすりはきかねへ死て牛になつたら療治してやるへへとおれかとうらくをしるのをしつているかこすられ申た。それゆへに不沙汰しました餠雜魚をくハねへ法もあれ。外をかセぐやうな道心じやァごさらぬ。隣のおかさまかいうにやァ。腰の痛むにやァ。またゞびと。鰹節がいゝとおいやつたから。昨日市で買ッてもらつて。食かけて喰たら。そのセへか。だへぶいゝから。おだん義ィハ。大方お身のうでべへとおもつて。片あかりいから來て待ました。うたげへをはらさへ。こゝじやァ人ㇳざかしいから。本ン堂のうしろて。咄しませうと。（後家の手を取本堂のかたへつれてゆく）【セハ役】サァ／＼燈明錢を銘／＼に

あげさつせへあぶらが。たけへとつて。お佛へ魚油あぶらもあげられねへ【參詣】コレあんま
りおつぺすめへよ。子供が居ます【同】ヲ、込むから。ちくとんべい。ふせうしなさつと（押合へし合ふ）談義僧ハ
（くんしゆの中はっ女に若イ男ともみこミになつていろゆへとほうなくさへがしければ物音聞えず）【セハ役】東西〳〵（芝居のやうに東西〳〵といふ事へだんぎ、そう禮のいんどうの時お定りにて在方の風なり）
高座に皺面をつくり。參詣を見おろし。りんを十ヲ斗リうちならし【天鳳和尙】ヱヘン〳〵ヱ
、しすところの。燈明錢施主の面々。有緣無緣愛みんご念。南無あミ〳〵。（名号同音十念ある畧）【和尙】さ
アて此間中ハ。天氣も能ごさつておいさま達ばァ爲たち。かミ爲。若ィ衆。子ども等迄。奇特
によくまいらしやります。當寺の本堂も。見やつしやる。とふりでかくてへ破に。および申た
によつて。他力のため。おれさァに。說法を物して。建立をたのむと。お住寺の。たのミやつた
に。よつて。此頃中から。おつぱしめた所が。仕合とつて。でかい參詣で。よろこび申す。扨又
おの〳〵の。ほふなふめされた物を。愛て鳥渡ひろうしますべいと。いふより番僧帳面をさし
だせば【和匠】（手にとりあげて）ヱ佛餉一俵當村佐治兵衞との先祖ぼだいのため。同二袋金町村八六殿。
諸生靈のため。靑銅拾疋。當村久助母一ッさい聖靈のため。引割壹ト袋。當村太郎左衞門殿先
祖のためぼたもち壹重おいわだ村おすけ後家どの方拙者へ見舞のため。秋栗壹ト袋鳥目百銅。
草戸便庵老方盛リ殺したる諸聖靈のため。右こゝろざす所の。諸聖靈菩提家內安全そく才延

命・南むあミ〲（香十ね ん響人）【和尙】さてはや・書の内ハどふでも年よりが・おゝいからありがた
へ事へへ・けふは父母重經の香壽丸が身替りの・所を説申たが　とかく夜談儀ハ　若ィ衆がお
ゝいから・ちつと又きつい事も。とかねへしやァ耳に、へへり申ゥぬから。夕ァから敵ぶち鉄
砲物語といふ、おもしろい。はなしを始メ申た隨　。しんびやうに聞かつセへ。マァた。談義
もしまいマじやァ、日數もあるから。段〲とおもしらへところを。説ませう。爰でまた隣村
の所左衞門どのゝ。娘ッ子去年のなつ死やつた。そのため風誦文を　あげられたによつてッみ
んなが同音に。ゑかうしてやらしやれと（りんをならしつ うやくしくつ ふじゅもんを おしひらき）【セハ役】東西〲とれちしづか
にしめさろ【參詣】コレかミ包。其子をだきさつセへ。よくなく子だァなかねへ子とりけへて
きさへ。いけやかましい【セハやき】東西〲【和尙】つゝしんで申す風誦文之事。それつら
〲おもんミれハ三ヶ月時分の桜の花ハ。でつかい南風にさつちり。うんざら寒い秋の月ハ。
わら灰のほこりにかくれ正命濕熱ハ。不換金正氣散なり。爰に凉夜螢光信女俗名お鍋。艶なる
男をミつかおりしよう朝夕戀こがれ。ものすれどもさすかに。口へさんだす事もならず。ぶら
ァり〲と。やまいの床に。ふんぞりぬ兩親でかくてうあいして。いしやよ藥よ。はりよやへ
とよとさワぎ。又ハ神を賴ミ佛を。、ちりセつてうしても。定る。いのちだんべい。更に其か

いも。ぞうすひもくれず。去年六月廿六日の曉くんねむるがごとく。此世を去りおれんぬ。ァ、かなしいかなとしれ十六さゝぎのとして。れんぼれゝつの。闇にまよひ。終にあの世へうつばしる事。むごちねへ事どもなり。これによつて。本ッ尊へ風誦文をさゝげ。又ハ大勢の人に。一ぺんのゑかうを受て。生念成佛をねがふもの也。時に寛政元酉秋彼岸施主所左衛門妻。どれもゑこうを頼んますと。松虫の鉦うちならし。六字詰を念ッ佛同音ッにて。しばらくゑかうある【和尚】とむなも。ずいぶん。ねん佛を申なさろ。若ィとつて死ナぬとぃふ事ハねへこんだ。扠ハァこんやハ色〱の事ばへでかんぢんの敵ぶちを。咄しませぬさて。其時にナァと。高座をぐれつたりとならし熊鷹權太左衛門ハ。伊勢の山田の。村ッはづれに。手ならへの師匠をして村のわけへもんどもに劍じゆつのふ。おしへてかくれて居申シた所に兄弟の者共ハ。小食になり申ておやの敵を尋る所に。兄の八兵衛ハ。道てセんきが。おこり申て。きん玉が。でつかくなつたによつて。あるく事がなり申さず。コレしやてへよいしやァあんとおもふ。おれがきん玉がコレ見さへあて事もなく。でかばちなくなり申た。是が邪魔になり申ておやしいの敵ぶちァ。おぼつかなくござる。エくやしいこんだァと唐茄子のやうな。泪を流して。いゝ申となァ弟の七助がそりやァハァあんとすべい。何たるきん玉だァよ。いしやに。見てもらつ

てよくし申て・敵をたつね申すべいと・いひ申て・そうでもつて・兄の八兵衛をハ辻堂へ背負て行キ・ちつとの内妥に・いめさろ・おれが村中へいつて・醫者殿を頼んてこへいと・はしり申す・兄の八兵衛ハきん玉をさんだけへて・い申す所へ・山田に居申す熊鷹權太左ヱ門が・隣村からけへりかけ・辻堂の八兵衛を・め付てな・ャヘわりやァ・作太夫がかきの八藏じやァねへか・でつかくなつたによつておやちいのかたきをふちにてはつたァかといへハ八兵衛も權太左衛門か顔を見てうぬハよくおんらかおやちいを切ッころしやァかつたなサア おやちハの敵しんしやっにしやうふしやァかれとたちそうにしてもきん玉かしやまになつてへたァり／＼としりもちをつけハ熊たかハ口をてかくあへてけら／＼笑ひをしてわりやァそのきん玉ァあんのさまたへたやァねへはへ小屋の家根に這てる夕良ふくへを見るやうたァそんなァ邪魔物もつてる身ふんて親仁ィの敵ふつへいとはてんこちもねへこんたァかくこうしろけへりふちたァそと何かなまけへものをつらゝひんぬくとナア八兵衛も杖にしこんたァ刀をぬくへいとあセり申セととかくきん玉か荷になり申て立つ事もならす無念の泪た夕立程流してしやてへやへ／＼ととなり申すを熊たはあんとも思ハす此おふきん玉やろうめてけへ聲をものするといけつ口からさつきるぞと刀をつきつけ／＼すれバェ、いんくハなァきん玉だァどんなきん玉だァともがけと

もかなハすやれハァ熊鷹殿よとうておれもこふなるうへしやァしかたがねへなるほとけへりふちにしめされしかしハァたんだひととふりいふ事がこさるとうそこセうたァから聞てくれさへとなんたをほッたァ〳〵とこほして頼めハあくとうなァ熊鷹もふびんたァと思つたァか刀をわきへ物してサア〳〵早くぬかせ云ふ事とハ何たァといへハそんたらい丶ませうかへりふちにしねへめへに勸化をとつてくれさへ（トいへはせ話役かんけてこさるよひしやくをふり立て参詣の山を廻る）【参けいはい】やれハア熊たかてやらはむけへ男たァ八兵衛の大きん玉ハころされ申すか【ちゝ】ヲゝサ大かたそうだんへいよ【ばゝ】おやつかなんまみだふつ【和尚】勸化しのめん〳〵諸聖靈はたいの爲なむあミ〳〵（同音十念畧ス）△（それより引つゞいて鋼をいたし紙ひやうぐの守り本尊など、せそのあとに一遍念仏供養とて京下に銘〳〵の題目をかき和尚六字詰にて廻かうありていろ〳〵の狂言おかしき事あれど あまりながくなるゆへにりやくす）【和尚】りんをならし。又十念をたす。扨ハア そこでもつて熊たか權太左衛門かといゝたすと。本堂の片隅にて。生酔口論ありけれハ。談義しばらくとぎれる【生酔】コレ おれがさつま芋をくひかけておいたらなぜぬすんでくらやがつたおれをたれだとおもやァ がつてとつて くらつた此どろ ぼうやろうめへ【相手】このくらへだをれめおれがいつうぬがさつまいもを盗んだとんだやろうだァ人を見そくなつたァかくさむらい權六といつて襲舟仲間じやァ頭のおしてハなへ男だどろほうにされちやァすまねへやろうでやァがれと。旣につかミ合そうになれハ。世話役村の若ィ者ども。大勢

かゝつて。外へ引ずり出す【セハ役】東西〳〵ミんなたゝつしやんな。おたんぎハマアだなげへと。しづめるゆへ。くずれかゝりし。参詣もおちついてしづまる【和尚】イヤはやお談義も。此やうにさかりて申て。けんくハの出來るよふてなければおれサアもはりあへかねへ。しかし今夜もよつぽど夜か更申たから。けへりぶちの所ハ。あすのばんに咄しませう。跡でゆるりとおどりでもおどろしやれと。お定りの十ねんおハれハ。はん鐘が。ぢやん〳〵〳〵。
双鉦がぐハん〳〵〳〵

田舎談義　大尾

附録

みさあとやらで見しらせら〱いまたいきれつよく候へともそれ婦まめでうるしくそんしら〱まあづいふべい事にハ返し田うへの時分夫婦のじよなめきめされたを一まなこ見かぢりら〱てゐべいにもたつべいにもワすれべいにもほうがくなくうつたれけら〱たあだしひだあとおもひめされべいならセどきあのはいごやでなりともすぐさま思ひをおつはらしたく存ら〱それともかつほれたをうそだあとおもひめされべいなら四ばんげもいつばんげもむだあしだとおもつてかよひ申べいにて候それさあでうらがこんしやうぼねもしれべいにて候よく〱しやんのおしやつて返事さあこしめされはなすべい叓はしゝりはの草のやうだつちやめてたくかしく

哥に

それさまがやあだと
　ほんにおもしやらは
うらがまなこハ

ほへつぶすべい

おなじくかへし

やれ〳〵それはあらたまりめさつたこゝろからうらあにかつほれめされたてゝみさあくださつたかやう〳〵よミ申ら〳〵うらが田うへのすがたにくびつたけと被申しやるがじつはんの事てあるべいならうらもあんまりにくゝはおもひ申さぬ叓にて候大かた壹二ばんもしめされたらよしにしやうといふべいかとそんしら〳〵なんにしろほんだあといふしやうこを御見せめされぬうちはうめえ返事はなり申さす候此やうにいつたらうたがいふかいやつだとおもひめさるべく候へともたび〳〵此やうな事にこりら〳〵ゆへかういひ申ら〳〵

めでたく　かしこ

猶〳〵哥とやらは身どもられつくれ申さす候　かしこ

附録終

跋

闕をはつて獨笑やまず懐にして茅屋にかへり。頓に四方の君子の笑をまねかば。翁が本ゐなるべしと。書肆に授て。櫻木にうつし。寛政ふたつの年庚戌の春の。華をさかせ侍りぬ

格子識語

格子戲語序

世謂倡婦無貞。虛哉斯言乎然其貞焉在日在我也。在我亦非自惚也。友人振鷺嘗逍遙乎無我有嶋遂登待乳山而小北國吐大言乃爲一編書。以示令倡婦盡貞之意味其魂丹之深也殆如聞夫之私言焉。名曰格子戲語一閱之則雖撲野夫薄鈍無情無術者頓入于通家室矣豈不左禮本之貫首邪。嘻莫企望云爾

寛政二庚戌春正月

濱町亭 題

自叙

日本堤の霜消る間なく。骨塚原の煙り。立さらでのこすえはつる。川竹の身のうへこそ。さらにもいわじ。はやう江口の素見。神ン崎の買ばなしなンと。あへれなる例はおほかンめれど。いでや五つの町のふえ書てんは。つきまじくふりにふりたれど。春ハやう／＼二日の初見せより。ものいふ花の綻たるいふべくもあらず。堀の蛙のぞめきつれて。若人のむねはしりたるなと。ことにおかし。初會ハしななし。出シ物ところせきてきハ／＼しう。裏三會も過もてゆけへ。ひとつにおまんまをたうべたる。あいぎやうづきて見ゆ。中の町ハ躍。鶯さうそきたちてなきあいたる。客もつとめてとくゐぬるめやすし。まいて隅田川の朧の月の光哀なるころハ。きぬ／＼のさま。艶に。眞男のむかしもうち出られ。いますこし自惚もまさりておぼゆ。夏のよンべ。茶立といふ蟲。田螺のすだくなとよし。すゞろごといひしろひて。ことのえをつくしていへるに。子ゝつもまたく。時のほどにもなりぬれバ。やおらいぬらんと。大門まですべり出て。あがれぢの衣の煙え

ならぬに。糞取といふものゝ行かひたる。いたう衰におかしけり。今戸わたりちかき瓦煙に。いものがりすい付たばこのことざま。いとこゝろあぐかれ。ほとゝぎすのいこじうつぐるに。主は今なゝどうちずんしたる。かたみのほだしなゝめれ。秋ハくせち廓のおぼへはなやかなる君の。むけにうれたく。れんじのもとにそひたちて。うはのそらに。鴈の使ちがなと。あづまをすがゞきて。じれつていよなゝといひ出て。髪のはら〳〵とうちふくだこたる。いはゞ糸萩の露にこぼたるさまなり。十月のころハ。かよふ神おふさきるさもたへて。田の面の虫の音かれ〳〵なるに。よき客もたらぬ身の。かぶしかたち調ゝ度なといぶせく。おちやひきたるこそこよなふあはれにおぼゆれ。さりとて雪の居續こそいとめでたけれ。紋日は。正月松のうち。すき〳〵のあやきぬ。桃のせち。五月のさうぶ。七月中の二日の草市。灯籠。にはか。西瓜とうもろこしのときくわざ。月のしまひはさらなり。八月一日のしらかさね。九月九日の菊なりさるをひたこちにねんしてハはてハちりぼひ遣手のつきしろひておどろくしういと心くるしく格子のと

に立なとし忍びやかにひんなきかことしたるこそあたうたてぞ見ゆれと戀草のせちといはんめれ。よてこのさうしを。格子戯語ともものしはべるいまめかしくおこなから色好のおのこだちへいさゝかもしほ艸のこゝろばへを。めでたく〳〵

東流講振鷺　二日の書初

弟子
顔艶
志路
文向
格子名丘仇名
通其先通人也

格子戯語

東流艴　振鷺　戯著
闘　東兵衛　夢注

富士筑波を高蒔繪としたる隅田川の吸物椀に都鳥をはなし。是を吸干者ハ誰江戸生長の息子株なりその長角屋敷を床花にうつも卑とし。氣性の高き事水戸尻の櫓に接穗すべく。辨ハ牽頭に高ミを交へ。意氣にして咄るの徒和漢有爲貌萬事承知といへども。是を世理に論ぜバ行ひ野暮一向な者におよバず。その野暮といわるゝ者生德馬の裾模樣を着て水ばなをたらし。御當地に長となつて深川の遊を是とす。されとお坊さんと丁稚の見識芋やかぼちやの中に育つと金銀の中に育つ畠が違ふゆへなり。爰に一固の通者あり。栢莚助高屋時代の色男にて。今ハ隱居株なから今の貞見世にむかしをいわず。能當世に渡り。常ハ廓の內證に遊んで雛妓買の捻りを樂とせしが。ふと新町の水溜りで犬の屎を踏んでより。始て遊の無常なる事を觀じ、ひとつの隱里を求んとするに。銚子下總に左迂の月を見さるゝ。此男の遊に妙を得たる一德なり。根

岸ハ溝堀の多いせいか親父くさい別埜が多く。簔輪ハ圍者くさい寮が多し。木場鰻澤ハ捻り過
ると。廓近き三谷町の見倒やの裏に意氣な菴をひつらへ。長屋付合といつてハお隣の紙屑買お
向ふの無商賣奥の女衒さまなり。友とする者ハ地廻り來りて格子先の世界を辨ずるゆへ。ミつ
から格しと稱す。けふも晝寐の折から枝折戸の外に。【顔艶】くわかへし小紋のりうもんの上着。三ツついに
ぼた僕しぼりのあわせしたばん。白毛どろめん
の給羽綾に。去しんぞうの蔵の壁の如くむだ書をした白む子の胴うら。花なりをゑてほうかむり頭巾をゑりにまき付。三日目のさかやきに
すこし屋をひいた見へあり。こげ茶むじかべちよろの帯。金から皮の前ンどうらんに。扇を筋かいにさして。諸事人からのよき思ひ入。左
りのつまをちよいと取
まん中に立て居る。△此着ながしの出よつ程そげて。
じミなるハいわくあり可レ考 コレちつとだいぶらつせい。【支向】黒羽二重の小そで。黄八丈の
羽織黒こはくにもめんはらの
いきづきん。去新道のいしやだそうさ。よつ程よつ
たと見へ。鼻のつまつた聲で。枝折戸を明ながら。（中キン〳〵上〳〵）へまづせいしようのあしたにハたにの（〳〵引下ー、、ー引居ウタヒカヽリ）戸出るうぐいすの（、、〳〵〳〵引）こ（、、）は
ハルこキン〳〵〳〵下〳〵〳〵
れるなァミだとけそめて △けふのかミにて形のりつ
ばなるハ〇印ゆへなり 【志路】も。とのなれど。少したくミな仕立を好方にて。しまゆうき
の小袖。捨られぬせ丸鍋がんとうのあい着。うへ田の黒の羽
織。宗十郎頭巾のうへからこんの手ぬ
ぐいをかむりたるをほどきながら。おまさんおやどかの トはいる △此三人路次をはいりし時。おくの明地にからんでいる
へちまを。いきな形のうつくしい女立て見ていたりし
が。三人を見ると。きたない家へ。ちよいとかけこんだるハあや
しき風俗なり。作者もしらず。蚤氣ハ此内に一御尋なさるべし。【お政】此女房むかしをいふとながい事にして。顔の寺白所と。手足
のじんぜうなるに。こすいりやうあるべし。いつも髻をよこ
の方でむすび。油じミたうへ田の小袖。こび茶じゆすのすそまへし。旦那の上田のふだん羽織を着ている。京橋お來ると久しく見てい 。ヲ
るなりたといふ風俗なり。椽がわに鉢植のまんりやうにありがたかツて居るを。ぎんの松葉かんざしでいぢつて居しが。こう〳〵しく
ヤおそろひなすつて。すきどおみかぎりね。旦那へ申へ。アレサ。トゆすり格子五十何がしと見へ鬢がいきの
こたツぶとんにすツぽりはいり。女房が
ひよくもんのぬり枕ハ。去ろ二階からつけわたりの枕なり。そばによみ
かけたつれ〴〵草の本にのべのきせるのせてある。こたつを出ながら【格子】なんだよ湯へいくのか。日なしでも
來たのか。トおき直ツて。敷ぶとんの上へ直る。なりハひぢりめんの丸ぐけ。黒つむぎの小袖なり。女房ハぬからず立て。いか
うにかけてある。りんずのへりをとり。金ざらさの袖口の。紙子羽織をうしろからかけて火ばちへすミをつく。【路】

化物咄でもしておきかせなんしな。わつちらん〻今にお出なんすといふ●見へがありやすね●【子】おきやァがれ●タァ貨物と義景が來て●歌撰を一巻せめられて七ッ迄居た●今白髪をぬかせながらとろ〳〵やりかける所さ●なんだか此ころ〻●誹諧で代が治るようだ●けふ〻冬枯見といふ御趣向か●【艶】アィサ太郎が所で鰻を出す自分●江戸のお鶴をつれてどこのか見へやしたから●立て渡場へ來ると●よつぎへ参つたとッて●利八と吉藏に逢ッて俄の咄をしながら川中へ押出すと●ァ、なんとかいふ二軒目の二階で白い良が大勢こッちを向て富士の白酒朝日でとけるをうなつて居やす。まぶしくッてしれなんだが。揚て見たりや熊吉梅を筆じ八十吉おさよりの八重といふ花やかな舞臺サ。けんばんの男をつれてそゝりに出たそうで。妙に意氣な男が來ると思ッたりや艶さんかへ。まんざらでもございやすまい。マァおあがんなさりといふ。爰で。どんと呑やした。【子】ゥ、玉姫稲荷などお立寄。ゥ、ひねる〳〵。【路】モシ淺茅か原〻黒幕。忍三重若衆松葉をたいて居ようといふ場だ子。【向】旅人〳〵といわしてい傾城も。ござりやすによ。【路】一本四文が小狄番夷のせけいを咄しやしよう。（北狄とへ深川をさす）【子】こいつ〻聞こッたろう。時にこんな〻かわく時分だろうの。お政や白我が京物の茶でもいれさつせいよ。ゥ息子一町目から廿日出のみが來て居たッけ。見すとももの事だろう。（トいふへ。見たからせるつもり。お政へさるものゆへ）

立てこたつをおよびごし。白いまたぐらを見せかけながら、駿河臺が
書た引舟のふくろ戸棚から。茶をはすついで。かのみわ屋えんに渡し。△【路】かべちようのさんどのたばこ入。
きせるを火ばちでちよいとたゝき。そのなれそめ
ハふとした事からさ。與四郎が床で額をさらわして居る所へ。いつも來るいひ男サ。もしへお
賴がござりやすが一向なせかいさ。お鷹といふ子でござりやすが。一年ほど相惚の思ひをして
居た所が。此せつぽいときッかげられたと思ひなせいし。その云分が何分にくいのさ。これが
出來すべげいぶんが惡から。來てくれるなとしらを切られ。先その晩ハ承知で歸つて見たが。
それ切にしてハあの內へ顏が出されず。口惜くッてなりやせん。おめんさんの筋で。一番かき
かへしたうございやすと。氣まじめで賴やすゝわたしもその時分おかくといふ女房があッて。
是も同じ筋で。舩宿までおしかけて來たを。留主を遣ッたらおもふさま惡るくいつて歸つたそ
うさ。こいつぐるめほいとやる筋がありそふなもんだと。誂の鳴物にふるばしらも出されず。
首をひねつた所が左交点さ。すつぱり請合てあつらへいつた所が夜宮の晩で。まづ懸行燈へ突
あたッてひつくり返したが。かんしやくの始と見せ。梯子へ欠上ろうとすると。娘がおかくさ
んハ仕舞で出で居なせいす。アノ子も心持でもして居るのか。マア下で一ッおあがんなせいと
いふ。所詮沙汰なしにこん夜來る仕宜だっアノ躁がおかくが見通かゝよこをしたとつてはじま
らねい。おかくが事ハ思ひ切た。此ごろ出る新子のお鷹とやらを聞て來てくれろといふと娘が

おめいさん氣が違つたそうだっどういふこつて。ぐちをおッせいすといふ。氣もちがわねいが錢のねいのだ。呼せずれ藝者を買つてけいろうと。これたをあちに見てとつて。そんならよんであげやしようと。お鷹をしめいにいつた所が。尤しれし今宵のお茶曳。來た所が。まづあたまが冬枯。しかけがふのりへ塩温石をふりかけたといふ小紋のベラ〳〵。頬がぼた餅が新造のお萩といふつらで。無人相といつてれ。ものめいに蚜をなくなした遣手が。灸がいぼつてむしがかぶつて。さがりのある客の居續を氣を付ると顏色さ。こつちれ何か思ひ顏で。硯蓋の慈姑も手をつけづに居ると。女もそれて銚子を撫たりあたまをかいたりして居やしたが。ちとあちへといふ。床へ這入と直に寐て。顏を見詰て。目ばかりぱち〳〵して居ると。お鷹もおへねいぼんくらだと思つたそうで。じようごきこんに白眼くらをしていやしたが。中へおかくさんを呼なはつた所へわつちらが出るれ勿体ない。御ふせうだろうがつきやつておくんなせいと少し水をむけやす。爰がやまッサほろりと涙ぐむと。なんだへ苦ひ顏をしなさるが。ちりけでもいぼうのかへどうしなはつたへといふと。わたしが振聲でこわ〴〵。おめいに願がありやすがどふも面目ねい事ッサ。まあいつて見やしよう。どの子も一偏つゞれ呼やしたが。生付て無念なこつたがゝ彼ものが片輪で。ついぞあつた子がないのさ。お鷹れ物好で出てくれやしたが。おめへ

ばからしいと思ひなさろうが。どふぞ辛抱してあつてくんねへと。まじめでムグ〳〵にじり寄ると。道なやつが顔が火のよふになつて。膽を潰し。しばらく腹ばひになつて居たが。こつちが足のつま先をちよいと當て見たりして。いやミをするもんだから。たまらず烟管と煙草納をもつて。脊むしのぶたといふ身ぶりで。立ていつたのサ。此跡がいゝ。所へおかくが來て大うらみサ。おめへそふしてくんなはる事ハございやせん。奥のお客ハどうなつてもいゝから。今夜中を直つてくれろと。門跡めへの乞食のよふに。ひつこくいふ。娘や艫頭も口をいれる。よふ〳〵閉悄たつらで。そんなら承知して呑なをそうと。はおりをミんな仕舞にやつた所が。今夜のこつてよふ〳〵七八めいそろつて大騒になる。おかくも大ふざけになつて。お鷹さんを太鼓にしやしようと。下にお針とはなしをして居たを無理に引ずつて來たそうさ。お鷹ハ隅へ這入て酒も呑ず口も開ず。おかくが顔をじろ〳〵見てハにこ〳〵わらうを。おかくが氣が付て。なんだへ此子ハ人の顔に祭が通りやァしめいし。ちつと古が鼻の穴へ〆切をして。だしか〳〵。おちよ〳〵も留れバお猿も留る。ソリヤとんまつたが。三文でも賣セねへな。おへねへ臺所唐人じやァねいかといふと。お鷹も口ハへらず。アイサ赤貝へ指を突込と得てけかをしやすといふと。おつな事をいひなはるのさんだらぼうしの黒焼が椎茸の髻玉といふ髪の風で。あたまの

工面も出來もしねへて。大キなぶう〳〵貝ハおきねへな。まだ此土地の風もしらねへで。すました子しやァねへかと。盃を投付る。お鷹ハわらつてすまして居るはへ。猶セきこんで大取合になると。その時小菊一帖てチントヲ鼻をかんで。コレおかくとやら四角とやらお鷹とやら夜鷹とやら。四ツ耳をじよれんで渡てよく聞よ。忝なくも此嶋から北へ當て吉原といふ都がある。そかあおれが寐所だ配所の月を見る氣になつて。此嶋へ天降りやァ。勿体なくも冥かねへ。紫磨黄金の長羽織を。追剝つもりのしよう塚の。婆々か娘かしらねへが。まづおかく鏡でてめへが顔を見ろ。せんたくしたさらさの鬼といふ頬たせ。お鷹とやらも大キな口だ。その口てくさい息を吐と七里うかむだろうちつともりの揚枝でも遣へ。金がほしくば子路さんが。此土地へ遊にお出なすつた事を。摺物にして五丁町へくはれべな。たまつて居る大神宮ハねへ。コレおかくおたか委細ハ胸におぼへがあろう。わいらがかいた一ばん目へ二番目の籠をとつて。今泣上戸腹立上戸笑上戸をよせて見た。皆こつちの仕組だァ、つがもねへといふと。くやしい子といつたばかりで。ふたりハずつと下ッてしまうと。大あくたいサ。何がはおりが口を聞て此沙汰がぱつとしたもんだから。おかくが干鰯問屋の新とやらいふ客をはじめ。こんな切てしまつて。いちつぱりの二人だから。トヾくらかへれどふたく〳〵。 トきいろなとへで。仕かたをしながら。身はゞの廣き上へ。たばこの

こぼれたをおり〳〵はたくさありてはなす【向】いひ〳〵。三句の渡が妙子。まじめで泣うちがごんめう子【艶】どふも深川ハさつはつだぞ。【路】ぜんてい深川ハ。客を二番目の葛籠に遣つて。子供どうしのたてひきかつよいから。却て万ぼうが婀といふといふもんで。かきいごのサ。【艶】丁しやアどふも手はなした事ハ出來ねへす。此春芝のほうの客だそうだが。京町の座敷持と色事で少シいざか有て。遠さかつて居て。ある晩中の町に居る所へ。彼あい方か通りかゝるを。女房が挨拶するを。アイといつたばかりて。彼客を尻目にもかけすカラ〳〵と引過るを。客ハはたして飛おり三朝かひな松といふもんで。むりに二階へあけて。大うらそにうらそたりや。大ほれに惚てすつぽりきたそうサ。こいらあ情をよく案したの トはなして寄る所へ。お茶ハにハなおせんして。らくの茶商に茶しぶを付る茶はんにはつほたくさ一人ゑこ出し。ちよつとかんをつけ。おりへ出の四人そうけのかうかいて王子をちよいとたいきほいとわつて。香に出す此うちか気のきいたとの世【子】おしようハきゝかただろう。【艶】モシそのお茶碗ハ。おほり出しと見へやす子【子】川伊のウ市に出たのさ。時代のいひものか出やしたつけ。ていぶ厨屋のおく座敷ハ。手まへかあかつたそうた【艶】せんと。門の部屋で。下谷へ行竹村の甘露梅へ。わたしか箱書付サ。【子】ウ、いゝ【艶】長居續ハしねへ事ね。湖月の破本の見出しかあつからいひ多ハ懸物にぶんれいこうか見へやすね【路】深川の見通にやア。探幽のあうていかあるから罪かふかい【向】子路さんの思ハぶはむきだが。深川の藝しやハ心やすくな

ると一蝶が鹿島踊といふもんで。輕はづミになりやすよ。【艶】そこいらハ。荻江や大坂屋ハきついものだの。【向】伊助がとこの二階もでいぶはなせるとね。【政】サア、子路さんおはじめなせへ。けふハ久七を江戸へ遣につかわしやしたから。お肴ハなんにもなしさ。ドレお見せ。いつそきれいだ子。すいた煙艸納だ子。【艶】竹屋の遠州どんすさ。ゑちう川の。じよしん好のこきんらんもきれいサ。【政】いつそおめへさんのまげハ意氣にいひす子。與四郎とやらかへ トしろちりめんのながいもじが。ひざから出ているを。ちよつとかくし色氣を見せてうれがらせるつもり。おきやあがれといふにうぼうなり。【向】あたまなでゝ與四郎に剃せねへと心持が惡い。【政】ホヽ、ばからしい トつめる【子】何もそう。いきがる事もねへ【艶】此巨燵ハ。おふぎやの臺所といふもんで。鈴がなるぜ。こたつの中から。猫がのびをして出ながら。玉子をハツタトにらむ【政】し。コレサ。行義がわるいぞよ。モフ。トひざへのせ。あごの下をくすぐつてやる【路】時に今から艶さん。おしようをおともで。深川へいひ筋を見出しにいきハどうだろう。わつちハめづらしく町とまりにしやしよう【艶】おもしれい〳〵。ちよくし三度におよんだけれど。ちつとさんだいの出來ねへ譯もありやすからてうといひ【路】わたしがききさきも　立の立ねいのとねつけの足長嶋のよふに。むつかしいからサ【艶】丁も腰かけ臺か缺をする見せもありやすが、三家兩門ハ賑な事サ。しかし深川へ宗旨をかへてハ。先祖へ對してたゝねへす。【子口】その舞臺へおれをいれねへハうらミたせ。ア、水清ければ魚

仕す。人至ッて粹なる時ハ遊なしだ。蒲團のしたについて居る。寐むそうな禿を見て。コレおれハ色男かといへバヲャ此客人ハとんた事をいわつしやる。アノとふも色男サ。おいらんにかわいかられなんしと。あわせてうれしからセ。なんそ咄をして聞そうから蒲團の上へのりやといへば。しかられいす。トレ火をいれてまいりんしようお出しなんしとまた氣のつく年でもないに小理好さ。モフおしつけ正月でおさんすね。大黒舞かまいりんしようねまた市の晩にお出なんしようね。去年のよふな土産ハいりんせんから草さうしをもつて來ておくんなんしといふ。モフいくつ寐るとかゝさんや正月たと。あめをたれる子供とハきつい違なり。咄をする內もつい膝にもたれてとろ〳〵やる所へ。屏風を明てヲャ此子はやその形ハなんのこつた。とつくにひけをうつたによと。しかられて立てゆく不便さ。遣手が介抱ハ繼母の如く。踏ぬいて寐ひへ仕めへそよ。此子ハ惡ひ癖たよ。客人の前でしもやけをかくめへぞ。ちどりや灸をすへてやろうよ。大がいにひよとむせつかいなり。やかていろ事にしる苦界をこたゆるちりけに憂涙をなかし。八文か鉄漿その外の小買もの丁稚の如く。まるい顔の大キい禿にいぢめられたるも。ほそ面ついにつき出しの時至りて。世間もよふ〳〵噂くなつたと思へハ。そこ爰の義理つけとゝけ全盛をせんとすれバ身いうへが廻らず。いつ迄內證の世話にもなつていられねは。取留て

客もつかぬ時ハ。心ひとつにじれつたく。女の身で足らぬ身代を取まかなうようなものにて。少シハ頭痛のする日も押て中の町を勤るハ。とかく評判が大事なればいかう心遣あり。客へ無心を云出すとても。身をきられるよりもつらい事あるべし。たゞ振袖のうちハべちやくちや口ばかりきいて。床へ来ると寐たいがいつぱいなるハ。後生楽かと思つて。抱しめて寐るに。びくり／＼と物驚のするハ。うわ気らしく見へてもしんに心遣ひがありて。アノ客人へハ命もやりたいと忍ふ程の色もあるやらんと。しだらくな寐顔をつく／＼見るに。行末その身の果報にて大尽に請出されるもあり。よしなき年明を契りて苦界を出ても一生を苦しミ。男の為に亦じまいをかせぐあり。いづれ天道次第の身の上かなと思ふと。おこして一てう犯たい気ハなくなり。色気ハ去て無常がおこり。自得果のおもしろくない遊びをする。身の上をセ話になる姉女郎の道具身の廻りの貧困なうへ。頼と思ふ大事の客の切たるも気の毒なるに。我も色男の虫が付て居れとも。相談もできず。どうしようのうといつたばかり。すつきりあどけなし。また交り見せ以下の。その座敷もち皆見立で揚りたるに。一人残りたる座敷持の身揚りをしたるもつらし。まだしも一座に見立直しが有て廻しの働で出たるハうれし。〽印の相方の客格子をのぞいて誰さんハ揚ッてかととわれ。〽印いま初へ出なんした。わつちをかみに揚ておくんな

んし。よんどころない用事がおすからごせうさ。しんにかへうれしいねと。二階へ欠あがり。扨座敷を勤るに。同じ傍輩の女郎なるに。我ハ敷居のきわにすわり。蠟燭のしん迄きり。よい客もないと見へて。その客に浴衣しごきのねだりをしたるも哀なり。爰に中の町であじな仲人が出来て。新造買となり。寐られて仕まつた晩など。夜深て表座敷をねらわんと。梯子の際に立て居る所へ。小便に出た客だと思つて。寐すか腰をかゞめて通る。我ながらおかしくあわれに切なる忍戀ともいふべけれど。やがてかのお來りて。此ごろハうすく二階でもしりんした様子。どうもこをふざんす。いつそ晴て來ておくんなんしといふ。其時それでハいやだとハいわれず。承知ハして歸つたが。どふした事かそれから少シ遠ざかると。先でもわすれて仕まつたそうで。前のようにみもよこさず。随分行氣であつたが。何か間がぬけて一月立二月立。ついそれなりになつて仕まうハ元があつちもこつちも胸算用がはづれた。色事の算露盤違なりと思へば。少シ腹もたてど。ないしよの譯を聞てハ。おなきなさるも御尤至極。工面づくの深を探つてハ。ほたて貝の炭もやりばなしにハつがれず。高尾がいつたように。此廓へはいらぬが諦と思へば。どうも得もいわれぬ所が有ていきたくなれど此廓明るくなると。貳分や三分にてハ我ながら恥かしく足ぶミならず。されど上を見ればばうづがなきも又此廓。却てお先のく

らいうちが遊手つよし。其眞をしると迷やすくはまりがたく。なんだかわからないによ。ト元分もすいた所のない氣ではなす。三人ハそのくらいな事ハこつちも承知だといふ氣位なれど。こうしなせ。エ、なるほど。ウ、きついと。國存な十もん目ほどのんでしまう。又此あとがいつもの松の内だらう　きいていろうちがなんぎだと思い少しめいる此内お政ハこたつへよりかゝり忍こまこて「へこゝろしらずやあけのそら。」ト引しまい　なんだかモフばからしい子ヒちつと貞見せでもおはなしなんしな、【艶】アノ鐘ハそうせん寺の七ッかの。野暮に日が短けい。【路】右の趣向なら。お立がよかろう。サア、おせうたゝつせい。よくのむぞ【向】こふぎによつて立ながら。鉢うへのまんれうたけとばす。　まんりよけつまづきや玄關番のば合點。【艶】ばかばの落鴈ハどうだ。【子】もちつとあがりそうなもんだ。モフ鳥の待でなくてハ來めいの。【艶路向】ゑもんをなをしよいといぢト　ふところをちこへをそろへ　おまさんおちかいうちに【政】くやしいね先をこされやした。おしづかに。【子】ヲット路次板がはねているぜ。

下「へふつかハ茶屋にゐの日にて　トうなりながら枝折戸をハる　○　三人ハむたをいひ〳〵うだを出っかみゆひどこの前に日なしと見へをうかぶり日より下駄ひろ袖ほそ帶り地廻り障子の團十郎をつばきで穴ほあけながら立て何かふつ〳〵云ているを聞すて此所小便無用の札のたてゝある竹やらひのそはへ長命丸のはり札をよミながら。小べんをし子路ハわかれて此小路から土手へ出る。實ハ深川へこつこいると見せて此ころ吉原に色事が出來て。大にまよつているゆへ二人か一度てれ少し悪るい事が有ゆへはぶいたるなり。顔隠しに支句ハひねつていひとかいふ氣どりで堀からちよきにのり柳橋でのりかへて　仲丁へゆく此しやれハぶら桃灯といふ本にあらわしおきぬ。

其二　皆

そも大見世の二階といつぱ。廊下ハ三十三間堂の如くに長く。梯子ハ宕愛の石壇に似て平な

り仲の町より歸り來る中座。箱挑灯三張に雪の素足を見せ、あふのうすにへと氣をつける新造の肩にかゝりて。客ハ腹中滿〳〵たる大盡と見へ夜具敷ぞめの風を肩で切て欠上れハヲヤおはやふござりました。只今それへあかりましようと遣手か挨拶ハちとあやまる筋。若者が持はこぶ燭臺の物　內證より上るの廣蓋茶屋が送り物。けんばんより持込三絃箱風呂敷づゝみハ二てう鼓ごばん人形の望ある座敷なるべく。東西に馳違ふ中を。醉もせぬによつたふり出もせぬに小便に出る客人得てハ上草履に蹴つまづくべし。是を濟顏で上着ハたゝんでしまつて八丈のあいき帯を前でむすび火ぢりめんのきせる筒をいわひ付たのべを。つき袖に持そへて。そこの座敷こゝの部屋へ出たり這入たりするいきな姿若者や遣手があいさつする時。アイと手重ク返事して見識をとり。またこくふにていねいにいふハ和かミを見せん爲なるべし。廊下をそゝり歩けハ突當たらしかれそうな年明まへの𠆢たしか伏見町で見かけた顏なり。すり違に色氣を見せる十代の𠆢たしか中の町で哥骨牌を取りて居た顏なり。いぢの惡るそうな袖留新造、娘氣らしい振袖新造。座敷〳〵をのぞけバ女郎ハつんとして立膝多葉粉盆とともに筋違に直り。客れだこまりんで三方とともによこつてふに直りたるあれバ。五丁僅六がいつこつてふ。つめられるしんぞゝ郭下へにげ出す禿澤ハ問すどたん〳〵と賑なるに。はや屛風を引廻して次の間のう

すぐらきあり。羅引に立たり居たりする座敷。茶屋がのミこみ姿。理くつくさき番頭新造。どこへいれもうそうと客をまごつかす茶屋あり。遣手部屋に遣手と何かはなんしをしているおいらん。白足と赤下帯を見せかけて下座敷へいくおいらん。楊枝をくわへながらそゝつてあるくおいらん。簞笥の中から何かちよいと出してゆくおいらん。あるべうぶの中へちらとはいつたおいらん。夫婦の如くおまんまの肴を客とつゝつきやつて居るあり。一座新造買客ハ通りものはたの悪しやれ。女郎ハすかねへといふそら目。こちらハ次の間にしんになつておまんまをたへて居る　これハうつむいてみかくあり。百人首を見て居るあり。癪をおさへて居るあり。見世三絃をもちあつかつて居るあり。廻しとともち狂ふあり。行燈のそばで何かいもしをまくつて見て居るあれハ。モフ〳〵アノ子いつそ子はしこへ酒をこほしておきんしてこねへに裾を引すりんしたたれたかモフヨといへば。まつのておつしようといつそねむがつて客人のとこにねむつていひしたと告口するあれハ。何か障子のかけから呼出せべ。うるたいて出るあり。ノレ草鞋虫がかまいりんしたと飛のくあれハ。わつちやァいや土瓶をひつくりかへしなんしたと腹立あり。くやしい子すつはりかゝれいした死ていよどうしてつかわしいしようなんだかモフわからねいぞと。なる程色事で気がちがつたよふにわからぬハこわい新造なるに。モシへこんだハわ

つちらが客人ハつれてきておくんなんすなっどうもあの人さんハいちあなんすかつサと連へたのむあとけなきあり。こくふに客の噂を悪るくいへバ。うれしいねへといふあり。つらいの引といふあり。いやたの引といふあり。じれつていを一萬ほといつてッ トレ いつて寐んしようといふハ引過なり。その口を客の床へ行と若寐入ているとき幸にだまつてはいる氣狸寐なら鼻へこよりを突込手まだまぢ／＼として居れハコリャア淨留里本サちつとよんでお聞せなんしなどゝ。今迄きいてた口をちつとハはなしてもよきそうなものを客によませながらじろ／＼顔を見ているハなんぞ悪口を見出す氣。さりとてハ御胴欲なり。すこし廊下もしづまれバ。もふ來そうなものと。夜着ひきかぶつてまん中に寐て見しが。座敷の樣子でハすつぱりきたに違ハない。こいつハおとなしく片よつて寐て居るこつたろう。イヤもちつとそつち寄ておくんなんしといわせるがいひしかし意地悪くおもわれてハ一大事と。はやもてた氣でいふ事迄を工風して居る初會の客あり。多くも來まいに。初名代のおもしろくもなんともないあり。大ぶちころちくるいを初るあれバ。有無なしにねられるあり。寐る氣の足代をあやなされるあり。おもしろくあわれに客をせかしてッリャ北山時雨きつかけるあり。今きれてハわつちがうまりひせんそつちがうまらねへでもこつちがうまるよと女郎に氣をもますいろ男もあり。いろ／＼さま／＼

の床の中一ッか一ッハ眞に艶なる遊色事もあるべけれど。是を突當るハ天運のしからしむる所なるべし

○内證志賀ハ廻座敷に獨さみしく時をうつし。やゝ見世もひけたか。おもての人足もうすくなれバ。表座敷のれんじを明て見るに向ふの表座敷も今迄せうじにかげぼうしのうつゝたるが。ミとりとうゝさがりいす引の禿が聲。戸を立る音ちりりん。かなはうヲゝさむの中だちとなつてひつたりとなる床の中。小便所の水鉢の音のミ折々家下へひゞきこしへとなるころ。相方のしんぞうたわいもなくねいりしゆへ。おこすも氣のどくと思い。色氣といつこハ夜ざの煮ゝの匂ふのミなり。家々の八ツのひうしぎカツチ／＼と聞へ。傾城のくせ者ばかゝおきているころをいしんとふけ渡る。志賀ハこゝろならずもおくの間へ忍び入に。くゞるのかんも心おかれべうぶの前に立聞に。ひけに歸るといつた客のまだ歸らぬハ。扨ハと大きにせいてゝ何見れバ。客ハ二十四五の女郎の好しの色男。女郎ハ此ごろ引込て居しゆへ。けふ洗し髪をひきつめ髪にゆい。こうがいおちよいとさしたるいきにして。くひつきたいほとほれたるに。面やせたる顔の薄化粧は燈のうすあかりで猶ぞつとするほどうつくしく。むくのねまき姿。ひぢりめんのしごきお腰におしあて客とゝもに拆くどくにぞ。かんしやくをおさべて聞いるに。色男もらてた猶色ニて。【客】コレそんなにふさいで居る事ハねへ。もふどうおもつても歸らぬ事たア。ごうぎにやせたぞ。【女郎】引込んでいんしたうちも。主の事ばかりあんじいして。頭痛のせぬ晩とつてハおざんせん。並大体や大方の苦しい譯も知ながら。露うたがいもあるかのように。まだ實が通りいせんが。わたしハくやしうおざへすトしがミ付く折ふし向ふの何屋とやらの表座敷に。大聲のきぬ／＼と見へこかきならす琴の音尺八をまじへ誰とへ聞へねどありやすの一曲しんときへ渡る。〽はるの夜のゆめばかりなるたまくらに一ッまくらのゆふべぞかたミ〽はなのやどかりのちぎりもさアよヲ、いさよ【客】どうもくちだぞ。ハテそれ。出て居る晩なと來あやわせらア。名を聞て爲になる客に腹をたゝせるでもねへと。茶屋からすぐに歸れバ。なぜもらつてくれねへヤレうつり氣だのごつちへでいつたろうと。あんまりひつこくいふがへ。つ

いかんしやくでぶちもたゝきも仕たもんだ。夫にけふは居續を仕ようといへば、てめへが二階の前をかねて。むりにかへれといふを承知で。そう歸したがる事もねへと。つい云懸りになつてせいたりしたは。その場のひやうしといふもんだ。此ころうち内に居りやァふさいでばかりいる。こつちへくりやァかミがられる。中の町への顔が出されず。また二階がふさがりやァ。活ても死んでもだ。あいていばかりであつかましく來るも。いひ虫たと二階中で笑れるもほんにくやしいよ。てめへも嘸せつなかろう。【女郎】ツリャァもふ覺悟の前でおざんすわな。傍輩衆のしやくりなんすは。たがいのこつてありいすが。こうなつてミんすりやァ。どうも玉村さんはうらミさ。主の内でも嘸わつちをおうらミなんしようが。わつちだとつて。久しい緣づくてうわ氣やミへで呼申たではなし、來年の三月は是非主のとこへいくつもりで。たのしんでおりいしたに。〽そのかいもなきすて小ふねァ、うきよ合〱【客】コレ聲が高ぜ。わけて今宵などは。寐すや隣などで。氣を付めへもんでもねへ。そりやァそうとちつとはかたでも附たか。【女郎】ァイサそれもこれもどうせうと思つていひす折。とつさんは持病であきないにも出へせんから。ちつと働てくれろと。きのふの晩見世へ兄が來て頼ミんす。どうぞしても請合てつかわしんしたに。けふも女衒殿が來て心ねへ事をいひす　おさきどんはなんのかのとて

いひすし。じれつていとつちやァおざんせん。夫も分散とやらをしんしたら。かたの付ようもおつしようけれど。そうして倉替を仕た所が。あんまり能くももうしいすまいし。よく諦てミんすりやァ。氣づよく思ひ切ておくんなんした。【客】思へバほんに悪縁たのふつと揚た初名代がそんなに深もおもわなんだがどうした事か思われ思ふて苦ふのたねをこしらへた。此來る正月が二人が爲の死神だ。【女郎】主を格子へ立せもふして置て。おさきどんや忠八どんの前をつくろつたりする。しんにつれハ晩の事を思へバ。いつそ死んだがましでざんしようよ〳〵おもひきらしやれもふなかしやんな【客】コレサしづかにしや〳〵わしはなかねどそれこなさんの合いゝやこなたのいやこなさんのとかほとかほとを見あわせておもハすわつとなげくにぞ合はや寺ゝのかねのこゑ。（あやしや女郎ハ泣〳〵立て。仏壇をおしひらき。かざりてありし一ツの位牌に。宗花活にしきミをいけ。おだいぢやわんの手水の水。珠數一れんを取出し。しばらく念仏申せしが。ふとんの下よりミす紙に。巻かくしたる剃刀ニてう取出し。客のひざに打もたれ。泣しミづいていたりしが。よう〳〵顔をあげ）コレ御らうじいし此位牌ハ此前この座敷に居なんした女郎衆の。病氣でなくなりなんしたを。人の身の上でハあるまいと命日ゝにはるのに菓子を買に遣り心斗の回向をしんしたが。あすハなき名のわれ〳〵が。身の上になりんした。モシヘ引こんでいんした時。いろ〳〵かんかくをしてくんなんした。内證のおふたりさん。禿立からに御高恩もかへり見ず。未來とやらへ参りんす。お赦なんしておくんなんしへ（はや田中の方にハ知死期をつぐる鐘の聲此世のきぬ〳〵冥途の）

ひ哥へ手に手をとりてしでのみちいそぐ心かまだにあけぬ千日でらにぞつきにけり【客女】なむあみだぶつ〳〵【志路】まつた〳〵と。屏風の中へとびこんだと思ふとモシへうなされなんすにへとおこされ。茶屋がおむかい夜はさらりとあけて茫然たり。實夢ながらも此女郎。我を色じかけで呼一番かいたるは悪けれど。おもふに夜毎の客に情のあるは眞あるといふべからず。眞を盡すはたゞ一人にとゞまる。夫をおしなへて傾城に眞なしと心得たるは大キなる誤ならんかされば義理と情に迫ては。百年の命を捨るは此郭なり。然らば世界の婦人よりも色を色として賢女少からぬ日本一の色里。遊にうぬ惚なくば迷わすなづます。自女郎の淺深を探り程よく遊び程よく樂む。孔夫子もこれを可なりとし給はんか。呼此道明るならば。虁取に突あたらぬ御用心〳〵

振鷺亭戯作

格子戯語跋

氷砂糖と高利座頭ハ訓同しといへ共。甘と辛の齟齬あり。今振鷺子が中稿を閲するに。辭藻妙絶無類飛切嗟かゝる才子を生せしむる事不知造物者の助歟。兩親の細工の妙歟若博覧士ありて。放屁作者の黨にあらざるを感じ。砂糖と坐頭の異なるを知らば。中〳〵可與言者にしてまんざらでもねへ才と言べし。

于時寛政酉の極月貧乏といふ熱に犯れ。苦しい紛れの妄語を

貪候多藏識

夫家語の沈紛簡讀たる其說ハ四十四篇。吾日本ハ紫女が法華經の裏に和らげて其巻ハ六十帖。先生今和漢一帖の小菊に杜撰して艶なる塗を說。されど此道の迷妄き。戀と情と色と金との四街ハ。江鬪の中央に演說といへ共未分。弱鷲山の說法鉄炮洲の畑島に艶色を說ハ。何の言か知べからずと先生喟然として嘆曰須庸の人に觀へき稿にあらずと。吾聞下邳の一編四百年の基を闢く。今や河岸の一片四百竅の端銭を采る。苟四方の通子此書を熟覽となさバ。傾城の涙眞赤な嘘立羅の西瓜八字か物あり孔門ハ十哲大門ハ戀蕩弟子等洒々落々の一座七尺去て次の間

に妹妓(おいらん)のお毫をかり申しいすよ以上

門人　關　東兵衛　拜誌

記原情語 全

蓬蕩通人著

あまねく女郎と客のいきぢおもむきを余ずしたる言語
女郎買をなしなり

俗談諺種 全

此書ハ浮華淫佚に
ふける者此為に儲
たる教訓の座右へ

蟲丸梵嚢 全

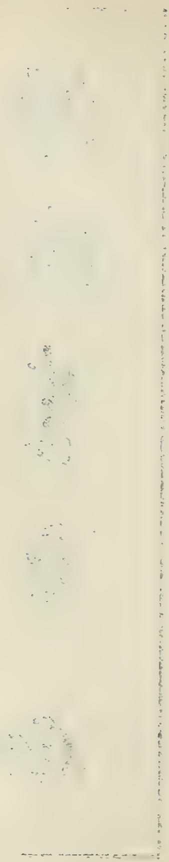
振鷺先生戯作

此書ハ三國傳来の袋入にてホツタ
りくとこぼるる玉まぜまんを
奥深くしまよる極秘の巻物

瞥引 小本

連狂詠をあつめ
書を画きのちに
見るり中をしるかへ

傾城悲之心



自序

今不佞曾傾城眞之心の風流を著蓋鼻紙入の底を拂て以一部の書述是大通初會に不遊南一の工面に何親讓之重代を殺哉早回の粹と成て吸付多葉粉味ひを知らば異見折檻の野暮なるに不構忽ち馴染之深間の切なるを樂夜來魂膽深金落知是似山之知非所結句粹ほと指の輪の酒りやすきは此道にあらす哉然者粹と不粹の中の町せかれた客を揚町二人一所に角町と京まち兼て見せ先にたがひにみを江戸町におもひに暮て伏見町其戀中の色即是空朱子性善の教にあらすして何嗚呼若水を硯に汲惠方に向てしるす

第一回

爲親身賣夕霧妓名轟廓中

其二回

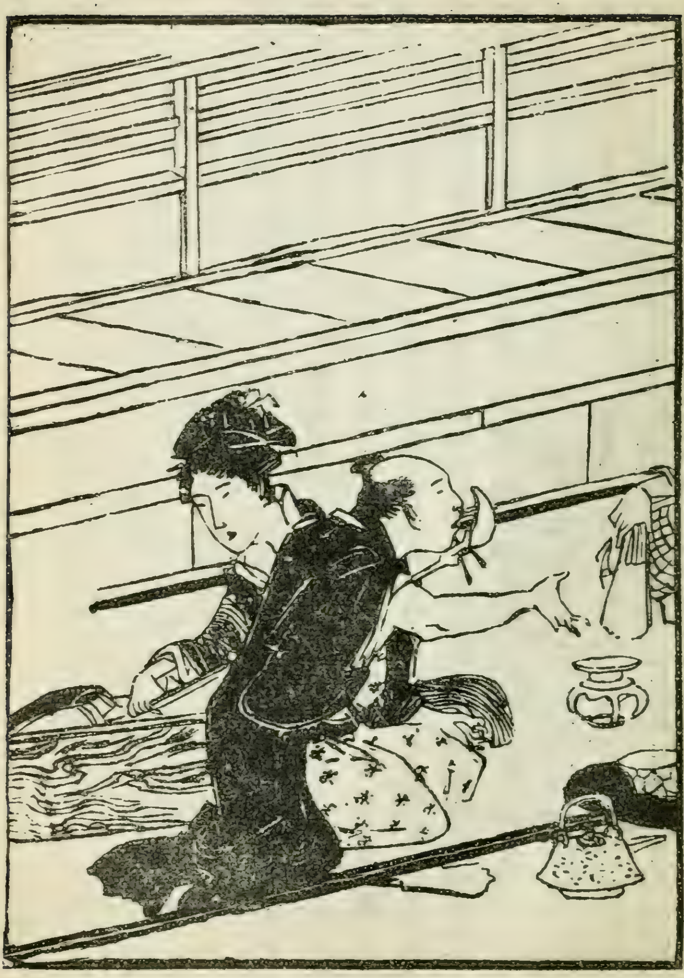
藤伊遊樓忘歸節妓諫夕霧

其三回

安波大盡夕霧匈訇叫娼家

其四回

伊請勘當夕情全遂契同穴



意學丸呑 傾城眞之心

第一回

夫儒道に三墳八索より九經三史まで皆孝の一字を出ス佛門の八万の聖教五百の戒法皆孝の一字を説然りといへど此界に生往て守る事難奈人情禁好のなき者はなし鳥獸に至るまで好める道には一命もかる〳〵し武士は義につのる時命露よりもろし好色の人は親をすて居住をこれか爲に失ふて二世の契りに一日釼の死期をいさむ花の春の鶯は障子ごしの人におとろかぬもおのが好める梅の香にしたふてからき命を籠の内にくらす紅葉に通ふ鹿は獵人の營を養ふて市中にかはねをさらす鼠の油揚には人を迷す野狐も自ラ命を失ふ魚は餌あるを知て針あるをしらす人は迷ひの餌に掛りて一生をおくる是身を養ふ爲にもあらす後悔不レ立前流水不レ還レ源とは宜かな夕ァの妓代朝にかへる叓を聞すかゝれてつのり惚られて往ぬあり眞にほれて見る占は十二文餘錢を氣張色男にあふ夜の傾城はひとしほ悦氣としてゐたこにふさぐ年明前　客

上止ふてる戀の意路ふさんの昔にあらね共夕ァの霜朝の雨一夜の情に百夜のつらさをいとはす惚たといへば不男にも情立るハ廓の習ひもてたるをしんセつふられたを悪すとは京橋のしれ者かいひしにあらす也中の町の夕けしきにハ內の張合を。忘むなしく一夜をこゝにあかすけにや北新此所に有て萬客こゝに廓の賑ひ都太夫か美音河東の一曲富本萩江か音聲にはおいらん買の心をすまし素見の日和下駄はむつ言の寐耳にひゞく石部金吉もうつゝをぬかす功言令色も所からとて目に立ぬもおかしひけの柏子木は傾城の心を悦バし素見のむねをおとろかすあすの御迎ひはといふ念あれハいつ來なんすの捨句あり櫻につなく駒下駄の音ハ天にひゞきおいらんの頭は鼈甲揥の淸玄の笠の如く禿の雨てんの花かんざしは吉野の櫻にことならす見上れハ萬客寶盡見下せは素一本夜中の雨にむねを轟す上下陰樂ハおなし孝行にうられ不孝に請出されとハ川柳点の秀句豈宜也こゝに倡家軒を並へし中に多人にあふぎやの內こそいと賑ハへり

こゝに扇屋夕ぎりの昔をたつねるに川崎の邊小泉といふ所にて始めの名ハおゑんといひけり父ハ三年あまりの病氣にて枕もあけぬおき伏にたよりにおもふハ我子二人り弟の名與四郎とて今年十の上を二つ三つ日の內ハ舟方にやとハれ親姉をはごくみけるが中〱壹人りの手業にてへくらしかたく日ゞ夜ゞに心をいためいたりしがしだひにおもる父の病氣おゑんも日夜おこたりなくかんがくも手をつくしあそこのきとうこゝの加持良藥さらにしるしもなく今ハせんかたなく〱もしるべのかたをたのみ見て我身を賣て父の病氣のたすけにもと親おとふとにハ咄もなく我身ハ知るべの方へ行ぬかくて與四郎ハ今日も舟方にやとハれかへりしバ　【父】おゑんか〱【與】イ、へわたくして御座ります【父】與

四郎か待兼たそこの藥を呑せてくれろァノおゐんハいつになひけふハどこへいつたやら【與】姉さんハいつでましたへ【父】晝じぶんからゐなひいつになひ事とおもへば〳〵くろうになりもしや二人りに嘗りゐなひければいしやの藥も加持きとうもたよりにおもふハ子供事　神ならぬ身のせひもなャ【與】あんじながらも　そんなにくよ〳〵とおもハすともはやく病氣さへよくなれハよふ御座ります姉さんも今にかへられませうと　とゐ〳〵に力を付る【父】ヲレガ病氣ゆへに舟も三ぞうといふもの賣はらひ今はそれゆへ賃日雇親のいんぐわが子とやらに世上のたゞへも今目前さぞさむがろふつめたかろふかんにんしてくれ我ためにハ氏神同前子とハおもハぬ　トなミだはら〳〵と老のくりこと身にしミ〳〵【與】もつたひなひ子が親を大事にいたしますがなんのめづらしひ事が御座りませう【父】ソレそふやさしくいふほど猶かわいらしくわづか十二か十三でおれを親とおもへばこそ大切にしてくれる　トとゞめかねたるふぜひ也【與】とゝさんおひへなさりましたら又わるふ御座りませふぞへ　おまひさんがそのやうにおなきなさるといとゞたよりなひわたくしかゝさんハなしおまへ壹人りたよりにあねさんとわたくしよひもわるひも一所にゐらばとあさ夕神佛をいのります　ト子供にまれなることばのはしいとゞあはれたましにけり【父】ア、やくにもたゝぬ事を思ひだして手めへにまでなかせた千べん万べんいつたとてかへらぬ事かゝが今年で十一年跡てめゐをうむとけつかんと云て血の道がのぼりはかなひわかれ姉がてう

ど六つの年てまへハさとにやり姉と二人りできのふけふトおもひしがはや十年の月日の下三年已前より此病氣いつかうき〳〵した春を見る事だやらとおもへバ〳〵つらゐ月日を床の内におくる事た【與】しゞう涙にくれけれどもさとられなばあしかりなんと　わらひながら御あんじなさひますなおしつけ又よひ事も御座りませう御まくらが高ければひくゝいたしてあげませう　トなに心なく立よるあんどんのかげ姉の手跡で親の名のはつと心に五寸くぎうたるゝおもひねなをる親【與】モシ御あぶなふ御座ります　ト立よる所にいぜんのふミ　父ハとつて見なに〳〵おとつゐゑんよりとよみくだしてミれば

返〳〵御身を大セつになされ下されかし是のミくろうにいたし候あら〳〵めでたく〳〵かしく
一ふてもふし殘しら〳〵さん〳〵たゝ今までの御セ話御禮もふそふよふも御座なく候ハたくし事も御まへゐのそばを少しにてもはなれ候へは御ふじゆふがちとおもひ候へとも與四郎手業にてハ中〳〵まいりかね候間ハたくし身のしろの金子にて御藥其外御としのひなされ被下かしまた與四郎もわかき事に

候へばこれのミくろうして又〳〵申あけ候なにとぞ御まへ向
もひやうきよく候ハヽわたくしかたまて御たつね下されかし
月日のたつははやくと

よみもおわらす【父】（わっと涙に）コレ與四郎われハさだめしいつた所を知ているであらう早くつれてこひコレ〳〵なひていてハしれぬとこた〳〵（トすでに病かのとこをたゝんとす與四郎あハておしとゞ）【與】マア御あぶなう御座りますなんのわたくしが知てハこふまではさせハせぬに仕様もよふもはなしハなし姉さんにはなれて片時もいられませうかと親子手に手をとり合てなくありさまいかなるむくるとなげく親（おりふし遠路の鐘いよしん〳〵ときこへ）

其二回

陀羅尼藏ハ是六波羅密經の眞言にして三世の諸佛の法藏を五藏に分給ひ極悪人の爲に說玉ふなり速に涅槃安樂法身を證する事うたがひなし色卽是空と聞時は自他平等にへだてなし三界猶頃火宅と說給ひしも宜哉一休の哥に世の中ハ心のほどにたのしめよ佛になりしありさまを見

よとハ莊周性悪朱子性善の裏表韓雲孟龍のちかひも花にあらし鯨に鯱まゝにならぬハト戯哥も理なるかな　こゝにおゑんハ知るべの方をたのみ身代金五十両にうり其金ハ父におくりすぐに我身ハかごにのり北國さしていそぎ行心そおもひやられたりほどなく内に入ぬれば家内のよろこひ内徒のにきハひ千両箱の玉とよろこびぬおゑんハ父の病気をあんじ二三日もしよくじもすゝますいたりしかかくてハはてじと内のてい主なひしやうよりとりたつてつゐに中三のくらひになりぬ其容顔うるハしくかほにてりそふもみぢ葉の一枝おりていへづとにとおもはぬ人もなかりけり名と夕ぎりの夕まくれこゝにむれくる大じんありなにはに名高き伊左ヱ門たいこ三人引つれ吉田やの内に入ぬればてい主【喜左門】コレハよふこそまづ／＼ミなるトそうにたつ【伊左】此間堺町でミかけたつけどこへいつた【喜左】ハイ芝居へさそハれました【平】モシ喜左ヱ門ゐ此間扇屋へつきだしか出たといふひやうばんか御座りましたがどのよふな御子で御座りますへト【喜左】さればさ其御子ともふしまするハ親のために我身を沈たとの咄うけ給りなミだがこぼれますきりようといひげいといひ良姿のやさしさ生た辨天ゐを見るよふで御座りますトはなす内いろ／＼さけ肴出る此うちげいしやつま太夫里長きたりペン／＼と引出す平三ハなにがなしやれをひろうざしきのていいとはへ〴〵としてにぎやかなり【伊左】此盃ハ平三に一ツさそふ【平】コレハ御見立にあづかりましたト盃をとる【女】つぐ【平】おつと御座りますモシ【女】一ツおかあかりなんしな【平】唯今一丁めへ参りましててうじやの御ざしきでいかひ事たべよひましたそれに兵庫やの御いんきよ様へ参りましたら祝ひがあるとて又たべました【妻】どうでも平こうたぜ【平】旦那ひとつけんじませふ【伊左】こいつハおさへよふ【平】そんなら里長さん御あいだ【里】

そんなら一けんまいらふ【皆々】よかろう〳〵【平】ごうさい【里】むで【里】どふた〳〵呑ざあなるまい【平】よし〳〵とぐつとのむ【妻】おそろしい〳〵とゞどふいふひようりにかはなしやミこんどのつきだし夕ぎりを伊左エ門買ふつもりになりぬ此所にてチヤン〳〵とひようしまくにて夕霧のざしきのていとかはる【夕ぎり】小ぎくの鼻紙にて茶をほうしながらコレそめはや共琴をそこへ立かけておいて花いけの水をかいや【そめ】アイヨもしおいらんエアノ琴の糸を一すじおくんなんし【夕ぎり】なんにする【そめ】アノおもてにいんす犬をしばりとふ御座りますからさ【夕】犬にちかづきかおゝいから此間のよふにくひつかれなんすモウ犬とねんごろにしなんすなよ【そめ】それでもさきからくるいすものトあどなきことばも甲のならゐなり おりふしろうかをかけてきながら【いそ】【ふね】ふしやれたヨウ【夕】なんさんすへしづかにしなんし【いそ】それでもアノ客じんはきなんすたびにじようだんをしなんすから今からかつてつかわしんしたノサもしへおいらんへもふしんす八汐さんがおまひさんの此間御かきなんした御扇子をどうぞおくんなんしトサ【夕】そこの引出にありんすから出しておくんなんし【いそ】おいらんこれで御座りますかへ【夕】アイそして八汐さんにちつとあそびに御出なんしといつておくんなんし【いそ】アイヨ【夕】しけじやそこの障子を立やト机にもたれて源氏物かたりをよんで居るいつたひ夕きりがざしきのよふす雪舟が画帯たる山水のかけ物に一角の花いけ其外哥書たんす香道具茶の湯の数〳〵風流をつくす夜具はゑぞのにしきの三つふとん二ツまくらに一つよぎもれてふきこむ小夜あらしにあんどんの火きへけれは【そめは】はあはてはしより火鉢の火をうつせしか夕霧は気にかゝる父のびやうき【夕】この間もみをたび〳〵出しんしたにへんじのないはもしや病氣かおもりはせぬか弟壹人

りでさぞなんぎするであらう戀しの我父ゆかしの弟とおもハすなミだ（はら〳〵と顔へかゝれは）【此梅】もしへおいらんへ今あんどうの火がきへんしたがそのよふにかなしうありんすかへ【夕】なんの火のきへたのハかなしひ事ハありんせんかねワたしが一人りの親の九死一生もしあのあんどふの火のよふにきへたらとそれゆへなミだをこぼしんしたのさそれに此あいたはゆめミハわるし度ゝみを出しんすが一度もへんじのこぬハもしや〳〵とおもひすぐしてミんすといつそ心ぼそふありんす【此梅】おいらんにもにやひやせんなんのたれしもあんじんすけれどあんじたとつておとつさんの病氣かよくなりんすかへそれよりおとつさんをくるわへ引とりなんしてかんがくしなんすがよふありんす【夕】かねてそふおもひんすが是ぞと思ふ客しゆもなしいつそくろうでありんす【此梅】そんなにくよ〳〵おもひなんしてわつらつておくんなんすなヱ【夕】ほんにおめへがた迠そんなにくろうにしておくんなんすからそふおもふめへとおもひんすがつひおもひ出しんす世話になるのを姉といひうきをかたるを妹とおもふてくらすつとめの身とかなんとかいひんす淨瑠理本にあるとをりでありんす【此梅】じせつかきいしたら又ゐる丶事もありんせうモシおいらん髮がみだれてありんすなでつけてあげんせう【夕】（かゝみにむかひなにかしあんしながら）さだまらぬハ人の身でありんす人樽を逆にしてありんす井戸を廣ひとおもつてゐんした井の内の蛙今こふな

りんしてつらゐつとめといひなからそんながいたらぬわつちでもたよりとおもつてくんなすからそれを樂しみに日をおくりんすつとめする身ハ片時もたのしみなくてハつとまらぬと重井筒にあるとをりて ありんす 夜毎にかわる まくらの數いやもつらひもかなしひも親の爲てありんす【此梅】おいらんの おつセへす通りで ありんすたれしもそんな親の爲て ありんすかならず〳〵くよ〳〵と思ひなんすなへマタ ゐゝ客じんでもつきんしたらト いさむる此梅ふさぐ夕きりざしきもひつそとしづまり心のほそきとふすまのいとしおもひハなたくらうそうにしらるゝ袖のあめかの吉田や喜左エ門へ伊左エ門だら〳〵にてたいこ二三人つれ夕きりのさしきへとたりけれハ今までひつそとしたざしきも急にざゝめきわたり なにかな夕きりが氣をとらんとたいこまつしや口〳〵に【平】もしおいらん エわたくしが鳥渡茶番狂言をおめにかけませう【そな〳〵】よかろう〳〵 皆より茶ばんけうげんはじまるや、ときうつりひけのしやうしぎがチ〳〵となく〳〵いとまごひしてこそかへりぬ夕きりも此夜ハうさをはらしぬ跡ハたかひの床の内 【夕】もしへ御休みなんセんかへマア羽をりをおとんなんしぬしハいつそきうくつたねへ【伊】たばこの火がきへたそうだ【夕】チヨン〳〵と手をうつと【そめ】きたる【夕】そこの火を これいいけや そして花町さんに わつちがいひんすどうぞ此間のしやくの藥をおくんなんしと いつてもらつて きてくりや そして ことばをてへねへにいわふョ【そめ】アイヨと出て行【伊】積のくすりならこゝにあるからト くすりたとふより出す【夕】藥をもらいんすとゑんかきれんすとき【伊】きれたほうが よかろうじやァあるめへか おいらのよふなものにハ【夕】ぬしやわつちの よふな ものハいやでありんセうそれだからきれても

よふ御座りませうがわつちハ　トすこし顔あからむ　【伊】そりや外の人の事だろうおいらハそういはれる
おほひハなひ　【夕】とてもわつちともにはおよひもねへ事たトあきらめてゐんす　【伊】それ
ハわたしがいふ事サ御全セいの君たちだから　およひもねへ事たト　こつちて　あきらめて　おりや
すはじめてきてこんな事をいひんすもおかしらしいがおまひさんにまよひやした【夕】はつかしそふなかほに
て　おまへさんがうそにもそふいつておくんなんせばうれしいたよりのすくなひつとめの身長
イ年季の其内ハたとへ三年に一度でもかよつておくんなんし【伊】おまへさんハ東江流のかき
てたいなか者が初て此二階へあがつて壹人リ小便にいつたよふにまよひやすの【夕】そうおも
ひなんすれはゼひもねへ事だが實にわたしもおまへさんのきなんす迠ハ此梅さんと二人リてふ
さいていんしたけれと御まへさんのきておくんなんしてこつちハなんたかいつそうきく〳〵しん
す【伊】ふさいでいたもそんなまぶの事だろう【夕】なんのひとい氣もしんなんせんで【伊】
そしてなんでふさいでゐたのたそれをきゝてへ子エ【夕】是はかりハ　トうつむいて居る【伊】咄ねへトい
つたのがおれがわるかつたおめへのかわゐゝとおもふ男だものをどんな事があつたつてはなし
もしめへ　サア〳〵ねよふト床のうちへはいるおりふし【そめ】モシおいらんエさつきの御藥をもつて參りした【夕】つと
てくつと呑【そめ】さすりんせうかへ【夕】イヽヨいつてやすミや【そめ】アイ引ト出て行【夕】ハ床へは

いりモシヱねなんしたかへ〳〵いつそさミしくつてなりんモシヱ〳〵トゆりおこす【伊】わつちかへ【夕】おまへさんハつらゐおかたゞねへ【伊】どつちがつらゐやら【夕】なぜそのよふにうたくりなんすへわつちが今はなしんセんから腹か立ゐんすかへそれたつてはかなひ咄をしんして跡でト斗りイゝ氣ね【伊】そりやおまへのまわり氣といふもんた一夜枕をかはして百年の事を語るとやら咄てミたら又うさのはれる事もあるもんさ【夕】そふいひなんすこゝろにほたされてはなしんセうワたしが親が九死一生弟が十二か十三で親とわたしをはごくミんすけれとなか〳〵弟の手ワさ一ッにてハくらされす日ゝ人參代にくしかんざしうりしろなしてもなか〳〵つらくよふもなく次第ニとゝさんの病氣はおもるなんとセんかたとほうにくれてゐんしたがふつと我身をうつてと知るへをたのミてこの身をうりんした其日から親をかんがくしんす者もなく弟の手一ッで晝ハかせきにひまもなく夜ハさだめしねむい目にてかんかくをしんすだろうとおもへば〳〵かなしくなりんすそれに此間みを出しんしたけれど返事ハこすもしもの事がありんしたらとそれでふさいでゐるゝんしたのサ【伊】しゞうだんまりにていたりしがなる程喜左衞所でちよつと聞てテモ孝心な者もあるものとふつとかつてみたくそれゆへに今のよふにきいたのサしかしあんまりあんじてわづらわぬよふにするがかんじんだア、おれまでかなしくなつてきた【夕】おまへさんが

そふいつておくんなんすほどなをおもひがましんす【伊】もふなにもかもきかぬ〳〵きくほどけつくなほかなしい□□□□□□□□□□（明のかね）コウ〳〵茶屋がむかひに目をさまし帯引〆て出にける（夕ぎりなミだながらいつきておくんなんすへ）【伊】ぜひ〳〵二三日中によふ【夕】かならずきなんし

ヲ（茶屋かむかひのてうちんに先をてらさせあさがへりの客はしごをおりながら）

契情のまことを知らめほとゝぎす
雲井はるかにそらなきぞする

【評】契情に實なしと難克たやぼもあり酒で通放蕩ありせひてゆかず酒りて責す是を通トいふか妓も又しかりとトハイ、ナカラ惚れた身に成て見れは中〳〵そふゆくものにあらす雨の夕へかよひ雪のあしたにかへるをワする知者も面前に三尺の暗ありとハ宜なり昨日の美人も今日の白骨となる迷ひたまふな〳〵

第三回

凡人の力は我得たるほど〳〵ならてハ働きかたし蠅の燈心辨慶の鐵の棒もその得たる所にかはる事あるへからす廓に遊ぶ通人ハよく契情の心をうべふ事を得その契情の玉章を三筋の糸に彈

なしてゆかりの月の一トふしぞかしされバこゝにふられた客の小言ありもてた客のしつほりあり豈ふられた客を悪むへからすもてた客に不男あり近くハ通ふて此味を知り給へかし　こゝにあふぎやの二階にハたいこまつしやのにぎやかハあわ大盡の今日夕ぎりを根引とて居つゞけきやくの大さハぎ　【大盡】こふ夕ぎりちつとねよふでハあるまひか　トイエトタきりへしらぬふりをしてゐル　【盡】モウ三味せんもひくなたいこもかいれ〳〵【ミな〳〵】さよふならば御きげんよふ太夫さん御いとまいたしますと　ミな〳〵かへりぬ　【盡】コウおいらんこれほどおれがおもふのにちつとハおれをかわひがつてくれそなものだほうしのねへゆうれいを見るよふにてめへにやァまよつてゐるぜそれにくるたびごとに積がいたるの頭痛がするのといつきてミてもいゝ顔をミせた事ハ子ェこういつちやァおかしらしいがおいらがおかミさんになるとてめへたちののぞみしだひこふいつてハをかしいがあちらむゐても金こちらむいても金さ【夕】そりやありがたふありんすかしかしいやな男にそふされてねかさりよふよりやつはりすゐた男ともめんぶとんがよふありんセふョ　【盡】ぐつとせしがはらをたてず　そふ思ふハくるわのならゐだがにげたりかくれたりしたものに始終そひとげたものハねへてめへセへとくしんをしてくれゝハてめへの親もひきとつておのれがかんかくしてやるおふといへ〳〵　トいわるゝほどなをいやになりとこふしあんもなかりしが　【夕】御しんセつのところハしんでもわすれハしんせんがどふもわつちはいやでありんす【盡】コウてめへも子供じやァあるめへし

おれか此ほどいふのが耳へへいらねか【夕】それでもいやでありんすものを【盡】（くつとのぼせ）てへかへにごたくをはけ此大盡サマがこふ言出してハぜひだいてねるいやとぬかしとやこふする（ト手をふりあくる所へはんしん此梅來る）【此】大盡さんなァんてそのよふにおゐらんを手ごめにしなんて【盡】をれがいふとをきかねへから【此】おまへさんのおつせんす事をおいらんがおもちいなんせんとてもそふハなりんせんつとめの身でもすいた客人とすかねへ客人ハあるうちでざんす【盡】ナニすいたのすかねへのと下手大工がこしらた戸じりじやあるめへしそして手めへの名がをれが氣に入らねへハこけがうへ木を見やァしめへし此梅だのあの梅だのとをらが畑ニァそんなとうへんほくハはへねへ【此】そのとうへんぼくがはへたかわたしにおくんなんし床の置物にしんす【盡】をき物にしたくは三日塩だちをしておれが所へこい【此】塩たち茶たちをやめて納太刀で拂ておくんなんし【盡】ワれがよふな口のたつしやなやつにやかまわねへこれ夕きり手めへの所へハ伊左ヱ門といふすかんひんな客が來る共すかんひんに心中を立ても親にかん當をうけ宿なしだハその宿無にほれていとしいのかわいゝのと堀ぬきの井戸がわをほめやかしめいしおれサマがかふ云出してハあうんの仁王が猪の熊のかひた長てうちんをこんがらせいたかにもたせ久米ノ平内が羽織はかまで鬼子母神さんお祖師さん七面さんが天笠の羅漢をたのんでハ　れだん

うけん合掌しても抱てねゝうちハ合てんしねいそれがいやなら身うけをする返事が聞てい トいはれ
てなんト夕きりへたゝうつむいて居ル【此】鉢坊主が氣の違たよふにてんぢくのたなおこしをしなんすの【盡】ナニぬ
かしあがる トだん〲こわ高に成ゆへきゝつけ夕きりが座敷へ来る ミな〲【ミな〲】大盡さんなにか殊の外お顏付がわるひまづま
づ仲の丁へ御入り被成ましておあがりなをしを トすゝめられミな〲打つれ仲の丁へ出て行すでに其日大盡も我家へ歸りぬ ○ こゝにふじやの伊左エ門ハ夕きりの馴き
メづてにもなりかたく通ひしが次第につのる戀のいぢあるよの床のとなりしが 【夕】モシエこふたび〲来ておくんなんすハうれしいけれども
しや内のしゆびでもと是斗りくらうになりんす【伊】それハいゝがとつさんの病氣ハいゝかの
【夕】アイ此間手かみをだしんしたらおゝきによふありんすとさ【伊】カノもいをやつたか
【夕】アイつかはしんした【伊】きのふてめへのはなしたきやくハどふしたろう【夕】うぬほれ斗
りいゝんしてにくゝつてなりんせんそしておまへさんのこふしけ〲きなんすをしつてるゝん
すから猶意路にかゝつてきんすハなきのふもぜひ〲わたしをうけ出さねへけりや男がたゝね
へのなんのといやミばつかりゐゝんすハなもしそれがほんの事でありんしたらトそれかくらう
でありんす【伊】いゝわなそんな事をくろうにする事ハねへもしそふいふはなしやいになつた
らおれも男たどうぞしてうけたそうわな必あんじねへがいゝ【夕】おめへさんの御はなしな
んした事ハどふなりんしたへ【伊】なんぶんおやぢがほんとうてねへからむつかしいおちがい

ふ事にやゼひ〳〵こゝの跡をとらセねへけりやァならネエトいふどうなる事だやらねつからワからねへおれ斗りこふのぼせてきてもし手めへかこねへときにハおれハいきてハいられネエトいふもんた【夕】まだうたぐりなんすへおめへさんこそいひなづけのおすわさんとやらにほれてゐなんすからそんな事をいつて　わたしにきれよふと　おもひなんすたろうが今わつちハ　おまへさんにきれるとくるわの内へ顔出しが出來んせんわつちがくろうもちつとハさつしておくんなんし【伊】そんなさつして居る【夕】そんならうたぐりハはれんしたかへおゝうれしいトれいの床の内さこつからさきへどうも作者にもかゝれやせんからミなさまよろしく　さつしておくんなんし

其　四　回

虎穴に入らすんは何虎の子を得とハ諺りなり信言美ならす美男ハ爲にならすとハ實　哉　爰にふじやの伊左ヱ門へ夕ぎりに打こみ内へおるすなりけれはおや　のりつふく一家の義理是非なくかんどうせしが母のみよかんかたより內證にて金子をおくりけれども中〳〵つゝくよふもなく茶やのさかり　に身をくるしめ今ハ夕ぎりにあふ手だてもなくたゞぼうぜんとして日をおくりぬ夕ぎりへかくともしらすたよりなけれハ新造に打向イ【夕】此ほどみをいくら出しんしてもたよりのないハもしやこゝろがはりでもしんしたかといつそくろうでありんす【此】茶やのほうがふさがりなんしたからそれてきにくうありんすから御出なんセんので御座りやセふ【夕】吉田屋たとてゐくらありんすものかわつか

なこつて御さりんセふセんと大盡かいふ事にハかん當をうけなんしたとさせめて格子までもき
ておくんなんセばいゝに【此】おあんじなんすな御出なんすで御座りんせふ【夕】此あいたハも
つたいねへ事だがおやのびやうきより結句伊左ヱ門さんのほうをたんとあんじんす【此】ほれ
た身ほどつまりんセんものハありんセんそばていけんてもしてくれんす人てもあると其人にも
のもいひたくも御座りんせんそして其男のふうがうつつてほうばい衆にわらワれんすョあはれ
ぬ時ハいつそくるわを夜にけにしんセふかとおもいゝんすものでありんす【夕】くがひとハた
がいつの世につけんしたやら行すへ永ひ年のうちハ死もしれぬ主人のからだでありんす　ト此所夕きり
大ふさぎにて新造へはなしをしていたりしかにくまれ子くにゝはびこるとかや河波に盡
夕きりを身うけせんとたいこ持ト人引つれとや〳〵來ろとやかふするト酒さかな出ル　【たいこ】モシ旦那わたくしが此
間よそでいゝ咄をきゝましたざならしに一ッはなしませふ【皆〳〵】よかろふ〳〵【たいこ】
こゝに長町へんの町人て御座りますが内も有德にくらし一人リ息子に唯四郎と申ますか御座り
ましたか今年ちよふど十八内のてい主どらをうたぬうちにそふおふナものがとおもつておりま
したところにさいわひ同町に十六歳になります植木屋の娘きりやうといひしなかたちといひな
にふそくハなし息子にもその咄をいたしたらさつそくとくしんてそう方が出來仲人ハ青木の
某といふれつきとした町人日をゑらんでこんれいさせんと來十八日ときわめ其夜になれば仲

人を始め一家のこらす集りければ内のてい主出てあいさつ終りなにか嶋臺のよふなものにかやをのせて出しければみな〳〵あきれかへり御てい主これハなんで御座りますといへばてい主ぬからぬ顔てハテしま臺てござります客蚊屋を島臺といふこゝろハてい主ヘテつるとかめがまひます【ミな〳〵】おそろしい〳〵【たいこ】此間にしがしてうけ玉りましたがこれハおとしばなしでハ御座りませんほんとうでござりますさる二階でござりますが法印がなしんで參りましたがおりふしとなりざしきに三人一座が御座りましていたこをうたふやらこわいろをつかふやらとん〳〵とさわぎますとその法印ハさわがしくつてねつかれませんから女郎にいふ事にハいま〳〵しいやつらだ不動のかなしばりにしてやりたいもんだといひましたら女郎もうそと思ひしてミなんしといふからほうゐんやがてふところよりじゆずをとりだしなにかひもんをとなへと今までさわひだとなり座敷もひつそとしづまりしゆへ法印のあい方あまりふしぎに思ひいつてよふすをミればかの三人さわひだまゝに立すくみうへをしたへとそふどうするゆへしか〳〵の噺をしければさつそくそのほうゐんへわびをしけれどもなか〳〵とくしんせざるゆへてい主よふ〳〵わびことしければはほうゐんもぜひなくとくしんして水の印を結びければ三人ハゆめのさめたる心持にてその夜ハすぎぬはやしのゝめの明ヶからすに三人も歸らんとらうかへ出けれ

ばつゝゐて法印たちいでヵノ三人にむかひゆうべのしゆこふはどふだといへばきついもの〳〵サア〳〵一しよにけへりやせふとぐつと四人つれで出やしたとさ【ミな〳〵】あたらしい〳〵此所大さわぎにてはへ〳〵としてにぎやかなりかくそれに引かへて夕ぎりハいつぞやよりきぶんあしくひごとにおもるやまふのとこけふ身うけと聞よりめいゝどおもひにかきくれていきてハ思ふりにぎりたゝすとそつと座敷ぬけいでゝしめるかくごのおくざしきすご〳〵はいる伊左エ門かほを見るよりなつかしく【夕】我身をとんとうちかけに引まどひよとんとねてモウシ伊左エ門さんわしやわづらふてなァとふに死るはづなれどまいちどあわせてくだんす神佛の引合せなつかしうハなひかひな【伊】とってつきのけよふすハのこらすミなきひたはかなひおれを見すてゝ阿波大盡に今日身うけされると廓中のひやうばんよふ今までだましおつたな親の異見も聞いれず一家の義理もうぬゆへにせけんへ顔出しもならぬよふに成り富士の山をはりぬきにするほど書出しがたまる大晦日さむいにつけつめたいにつけ持病のしやくハおこりハセぬかとあさ夕あんじてゐるわひやいおやのかんどうもミなうぬゆへそれをハしらずいひなづけのおすわハなおれが事を苦にやんで煩ふてゐるとのうわさけいせいにまことなしとハ廓の金言ミるゝなか〳〵けからわしいとゝつてつきのける【夕】涙もろともにうらミられたるかこちのはいろのならゐと云ながらそれハうわきな水あさぎあいそめたその日よりこんなゐにしが唐にもあろか【伊】くそをくらやあがれからにもどこにもうぬがよふなうそつきがあるものかうらみられたるかこちのハ色のならゐもすさましいよしてくれろへトとんと後をむく【夕】ワたしにうらみがあるなら

は又こなさんにもうらミがある度〳〵みをあけんすけれど一向たへておとつれもなくそれゆへに此やまひやせおとろふたが目に見へぬか【伊】コレてめへのころしもん何も聞あきたおれがくるだらうとおもつてふくしておるたろふおきにしろモウ聞たくもなんともねへ今まで月頭に一まいつゝ取かれした起請をけへすからおれかのもけへせやせおとろへたが目にミへぬもすさましい【夕】せんやくとねりやくと針とあんまでよふ〳〵と命つなひてたまさかにあふてこなんにあまよふと思ふこゝろをさかさまな【伊】そんなさわり文句を聞ク耳ハもちませぬ【夕】外にもしやといひがゝりそれがこふじて内方のしゆびはぶ首尾となりそめのかんどうの身とならのはやこのてがしわのふたりが中いとまこひさへなくばかりそれからたへておとづれて又此夕きりをけいせいと思ふてかほんの女夫じやないかへなけふも身うけの相談ゆへおまいへ義理がたてたさにわしやしぬかくごにこれこのよふに死ぬかくごでゐるわひのふわらひ皃をミせてくださんせト（伊左衛門がひざにうちふしてとつとすゝりなきけれハ岩木にあらぬ伊さへもん）【伊】モウなくなあんなにいつたハおれがあやまりたとへ木挽の手にかゝつたとててめへトおれハきれるこつちやァねへ又しやくてもおこつちやァわりいなく〳〵【夕】そんならもふうたぐりハはれんしたかへ【伊】それはそうと身うけのそうだんハ【夕】なにしおふ阿波大盡今宵中みうけそうだんマァどふしんせふねへ【伊】今お

ふくろの所へそふいつてやつたら十や二十はよこしもせふがそれではつまらねへはなしだトいつて外でくめんもできずァ、ゐゝしあんがありそふなもんだ【夕】なにをいふにも今夜かぎりてありんすァレあのさわぎがそうでありんす【盡】夕ぎりがいぬがどけへいつたてい主〱【てい主】ハイ〱ちとたゞ今おしやくがいたるとて【盡】おれがくるたびごにしやくがいたるのかつけがおこつたのと今夜はぜひ〱身うけせねばならぬッレ太夫が身のしろ三百兩外に入用二百兩たしかにうけとれ【主】ハイ〱かしこまりましたさつそく明日太ゆふさんをあけますて御座りませふ【盡】太夫をよへ〱【主】ハイ〱かしこまりました（二人りは是をきくよりも）【伊】とてもみうけの金をわたし今夜中につれゆくよふすひとまづこゝをたちのくしあんト耳に口【夕】たとへ野のすへ山のおくまてもいつしよにつれてくださんせ【伊】にぐる所はこうらいばし【夕】ァイトれんじづたひに二階のこうし【夕伊】すでに向へとびむめや心の細きほそ引もきれてそおちる庭の面下にはいぜんの阿波大盡（ミかわす顔のかほとかほ）【伊】ャァおまへは親人さまとふしてこゝへトあきれ

【親】文四郎ャィたわけめてまへのしよふが下手ゆへにつれそう女までに苦をかけるわれが事を母はあんじてないて斗りおれは義理ある子ゆへのやミ此くるわへ入りこんでよふすを聞に孝といひ貞といひ孝貞まつたき此夕ぎり今夜身請金もわたしたれば天下はれての夫婦なるぞ

ト聞て二人へゆめみしこゝちかゝるおりから下女はしたや
りてかむろに女房がきをひかゝつて喜さへもん

モシ伊左衛門さん〳〵太夫さんの身うけのそうだんら
ちがあきたいていうれしいこつちや御座りますまへホヽ〳〵〳〵ヽホこの喜左衛門がセい力てほん
ふくさしてみせませふと家内がいさむいきほひにつれて本ぶく扇屋夕ぎり名を萬代の春の花さ
る人袖をつらねけり

風流傾城眞之心終

自跋

苦勞するそばで禿が春を待トハ宜なり契情の心の內ハ火の車にて引るゝよりは猶つらく朝にさす笄はゆふべに七ツ屋の藏に入レと其つらさをつらさとせず一文がおはくろ買て千金の客をふり寒夜に衣をぬいでまぶを呼廓のならひ當世おそるへしで御坐りやすト爾云

保校吾所役

鳥獸羽毛あり、艸木花實あり、娼妓糯の立姿、遊子粧調の出方、をの〳〵季を知り色を分てり、都是十日の覗を歡ばす所也、その艶色好まざる少年は、玉の盞そこらが些不通の愚才ならんか、其情色深を好も亦すこたんと紺樓の藍瓶に沉がごとし、全身に染こむ心の濃紺、馴染の色の紫を訪て、籬に忍てあひ御納戸、魂魄飛むで天の空色となり、生壁と見らるゝも知らずして、晒落詼にあふ時は存之外ぬ呑花を取られ、或は實情て紅閨の逢日忍、一夜べまんじりとも不眠身がへし、後朝のあさ氣に烏の黑飛、爰におゐて不知行末とならば、地生丈爺の產得といへども、家業終に綴となりて、垢買人の手にかゝり、

柳原店の軒に漂泊も、實悼悼然成行なるべし、茲に當春も又、瑤池堂が誂染の助僕となつて、予手の拙を恥ず、染抜五所紋と表して、五ツ、鴈金の後編を、明後日までの嘘なく、例の群染に染あげ新紙も春の戯になれかしと爾云

戊　孟春

梅月堂　梶人述

染拔五所紋

題辭

陰

仲の町の夕けしきすまぬ身うけ
に清川か涙とともにちりさくら

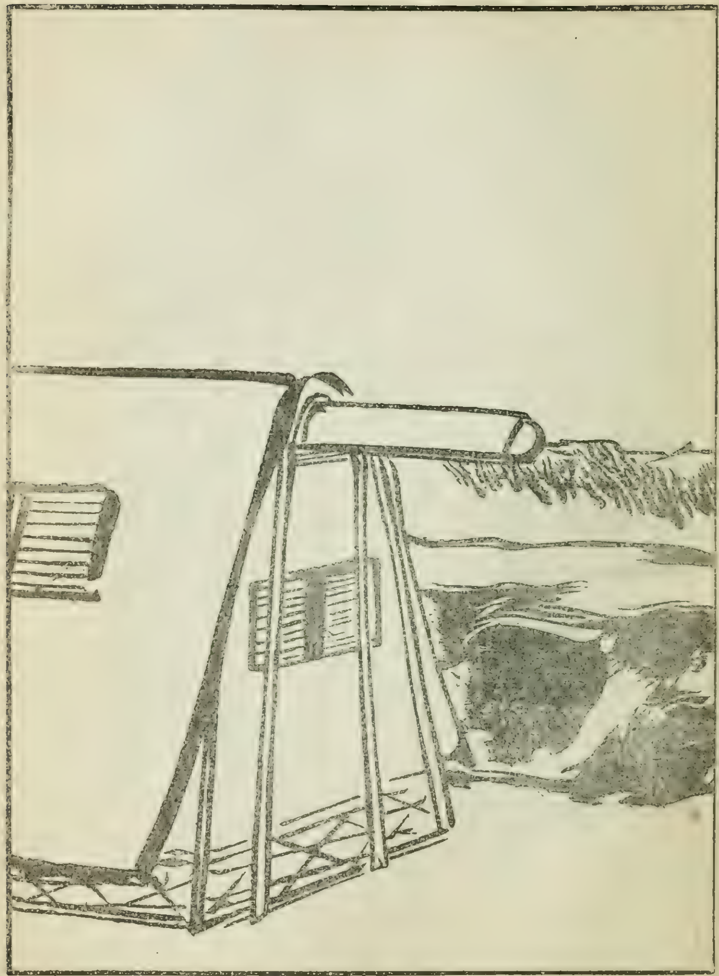
陽

居つゝけのしんの閨中
五人一座のさかりの花

染拔五所紋

四

染抜五所紋

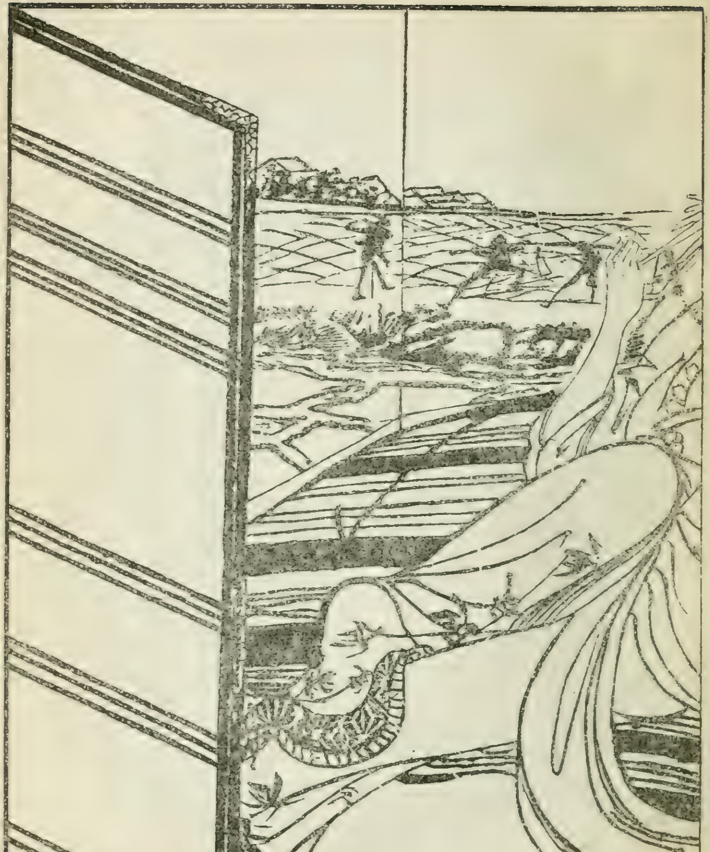


五

其壹

五人一座の衣裳つけあいかたのくらいつけ仕好の山から里のせかい樓は前編にくわしくしるすさて初會より居つゞけうらの羽二重紅絹ハ△千右衛門平兵衛 なじみだけゐんりよもなくしごきの帶ハ△市右衛門庄九郎 見ゐもなくかけもなくたがいふ實事をかさね着のかくむくハ△文セもん日もの日に身うけまて惣縫のうちかけハ△角左衛門 清川がおもいれにしたておろしのはれ小袖今日ぞくるわの名ごりとかざれる華の仲の町空にしられぬぎんせかい花のふゞきハ雪ならてとけぬ心をむり酒にうかすも花の黄昏どき【茶や女房】アレ／＼おいらんのおさかづきへ花がちりこみました【たいこもち】是ハありがてへおいらんそのお盃はわたくしがおすけ申ませうなんでも華のはいるといふがおもしろい モウよくばつた事をいふやつさ アハヽヽトわらふ もしおいらん／＼といふのもけふあすばかりあしたハよめのはなざかりさぞ角左衛門さんがまちかね山ではなのしたと臍の下をながくしてまつていさつしやるだろふこらほどなお目出たになぜおいらんはうかつしやらねへのだへ【清川】モウごしよふでさんすからめでたい／＼といつて おくんなんすなこんなかなしいつらいいやな事はおざんせん【清川母】またそのよふなもつたいない事をなんのかな

しいつらいとがあるものかおふかたほうばい衆にわかれるがかなしくつて泣のかと思へばさうでもなくいわしておけば我まゝいつばい是からはそなたのためだからちつといわねばなりませぬさだめし酒によつていふとおもおふがわしハちつとも酔ハしませぬ　トいへどもよつぽどよい〳〵　【清】かゝさんなんの事でおざんすがいぶんがわるふおざんすかんにんしておくんなんし　【はゝ】イヤ〳〵かんにんしませぬ　トひざたてなおしすりよれば一座げいしやたいこもち　【げい者】もしへおふくろさんなんの事でござりますそれでハわたくしどもゝこまります【はゝ】もふ〳〵おめへがたハかまつておくんなさるなどふで一ト通りハいつてきかせねばなりませぬまづおめへがたをよぶさへあるにヤレはなだのしゆう義だのとむだ事ばかりそんなゐよふをするはだれがおかげだミんな角左衛門さんだよわしが事ハちつとも思わずに此間うちもなんといつたかゝさんおまへが勝れなんせんと角左衛門さんにはなしておいたからねだりごとにいつてハわるいところほど丈ぶなものを病人にしてたいてへ不自由をさせた事でハない是からハ御いん居自になつて扶持でももらつて孝〳〵にしてもらわにやなりませぬほんにそなたハ仕合ものだぞよあしたからハ四もん五文のおはぐろの世話もなく香の物のいがゝり櫛かうがいのあげさげをのがるゝばかりもたいてへ有がたい事でハないさぞこのよふな事をいわれるハせつなかろふいわれるがいやならはやく支度をしていきやサ



アどふだく〵　トひきたてゝその手にすがりおせぶなミだのかほふり上ゲ　【清】もしへかゝさんおまへあんまりでおざんすとく心ずくてこうゆふわけになりんしたからさらく〵角左衛門さんのところへいくかいやでハおざんせんがどふもあわねばならぬ人がおざんすからたとへどのよふに人中で恥をかけばとていといんせんたんとはじをおかゝせなんし【はゝ】なんたあいたい人があるその逢たい人はついに壹度錢一ッ本くれた事のねへあの文七か文七ハおけあの一座にも逢せる事ハなりませぬ【清】ならぬとおつせへしてもあわぬ內ハたとへおまへの氣に背きよしや勘當うければとてしかたがおざんせんどふぞあわしてやつておくんなんし　ト思ひきつて一いゝはなせばなをもはらたつおらきのはゝ　【はゝ】かんどふが請たかろふ緣がきつて貰いたからふがそうハ成ませぬ七ッのとしからもらつて十五まで面倒ミてそだてたもすへにハ樂をしよふばつかり今まで其よふにうつくしく成て清川さんのおいらんのといわれるよふにハだがした獨でもそだつたよふに恩しらず義理しらずおや子のゑんがきりたくば七ッのとしから十五までそだてた養育金一年十兩づゝにしても九十兩其金出したらゑんを切ッてやりませう角左衛門さんの所へいつたらしらぬ事今の身でハほんに九百の錢でも出來ハしめへ　ト黒八丈のまへ帶をちからをいれてしめてハすりふりをせるでたゝこゑたゝきたて古人勘左衛門あたり何ばゞあとかめうじのあるしろものなり清川ハうつむきこしやうじからへわなゝきしがひきどろほどはぢも多しとよふ〵しあんを定メ顔ふり上ゲ　【清】成ほどわたしがわるふおざんすからどふぞかんにんしてなんにもいわずにゐておくんなんしすぐ

に角左衞門さんの所へまいりんす【はゝ】そんならちつともはやくしたくをしやヲ、夫でこそかう／＼ものだ其なき顔でハいかれまい化粧でもしなおしておせわながらおかみさん髷をもなをしてやつておくんなせへ　トこと葉までさそくにかたるごふよくもの　【女房】二階の三疊へ鏡臺をだしておきましたからかほでもなおしたり成ほど其ひやうごでもすむまいからよくハなくとも勝山にわたしがなをしてあげませうきよ舟さんをふそのよふになかずともいつしよに二かいへいつておいらんのしたくを手つだつてあけなせへ【清】きよふねさんおまへにはたんとはなしておく事かおさんすからわたしといつしよにサア來なんし　ト手をとる八さとられる身もおさへるなミだにはなされぬ右と左の袂たもと　【清】もしへそんならそこにきげんをなをして待てゐておくんなんしおまへがたもにぎやかにどふぞさわいでおくんなんし　トきよ川きよ舟女房おうき三人ともにかいへあがる　△はや入相のかねに花やちるらんきよ川ハ三ぜうのきやうだいにむかい　【清】おうきさん眉毛をとつてこいといひなんしたから剃刀をかしておくんなんし【う】ほんにそふいわしつた其引だしにありますからわたしがすつてあげませう【清】爰にあるならマア今でなくともよふおざんす【う】成ほどおしいもんでござりますからそんなら夫ハのちの事さ【清】きよふねさんおまへばかりハほかならず眞實の兄弟もおよばぬしんミになつてだいじにしておくんなんしたが今別れてまたいつお目にかゝりんす事やらわるくしたら一生わかれるよふになるまいものでもおざんせんすいぶ

ん煩らわんよふにして旦那さんをだいじにして傍輩衆ににくまれぬよふにしなんしたん〳〵おまへも客人がふへて座鋪てももつよふになりなんすたろふかかならずきやく人かたんとあれはとつて高慢な顔をしなんすなわたしかふたんいふとをりたからいやなきやくほとしんほうしてつとめなんしへ地まわりのものがなんともふしんしてもからかいなんすなわるい評判をうけんすにへ【きよ舟】其よふにいつておくんなんすほとわたくしハとふもおいらんのそばをはなれるハいやておざんすあしたからわとふしておりんせうなにをするにもたのしミかおさんせん【清】わたしか小袖ハミんなおいてまいりんすからわたしだとおもつて着ておくんなんし【う】おまへさんがたか其よふになかつしやるからとふもわたしまでかかなしくつて貰い泪て此やうに袖をぬらしましたおいらん今のうち髷をなをしてあけませうか　ト立あかりうしろへ廻ろ折からとなりのわすやにくま吉かとくきんのめりやす〽黒かミのむすほれたるおもひにわとけて寐た夜のまくらとてひとり寐る夜の仇まくら【清】このかり金の紋をミるにつけてもあいとふおさんす〽そてハかたしくつましやといふて【清】もしも文さんか来なんしたらやつぱりおまへがてなんしてけふのわけをくわしくはなしておくんなんしとふで此世てハお目にかゝりんす事もなりんすめへ【きよ舟】なんとおつせへすにへ【う】まてはかんろのひよりとやらまたこてんなあわれらしい事を【清】かなさぬなかには

ど義理のあるかゝさんには氣をもませ恩をうけたる角左衛門さんにきりをかき人なかてはしをかきこれといふのも心からみんな文さんゆへ〳〵くちな女子のこゝろもしらてしんとふけたる鐘の音【淸】なまなかきのふきなんしてすへはこうしてとふしてとおつせへしたか今おもへばあのはなしがまよひのたねになりんしたほんにこれが悪縁でおさんしようとふそなるなら顔はかりてもみとふおざんすへ〳〵ゆふへの夢のけさ覺てゆかしなつかしやるせなやつもるとしらで積るしら雪 となりのきやく やん〳〵〳〵 【淸】おうきさんさそ角左衛門さんの事ては腹かたちなんしたてあろふ堪忍しておくんなんし【う】なにおいらんそんな心づかひ文さんはせんたいわたしとものお客でたいてへおせわになつた事てはこさりませんかちつと譯かあつて今では下から送られていかつしやるがとんたわけのいひお方でおり〳〵こつちらへもおよりなさいますそのぶんさんとおいらんたものふとふしてかへつて今ではおきのとくてなりませんこふ言事までになるまいと思つてすゝめてお送りもふしましたがとふもいまではおきのとくて成ません【淸】また手間とつてかゝさんに氣をもませてはわるふおざんすからしたに着かへが來ておりんすからよこしておくんなんしきよふねさんはかゝさんをもちつとたましておいておくんなんし トたちかねる二人をむりにしたへおろし淸川はかくこのしたくかねてきゝおくきやうたいの引たしよりかミそりとりたしすてに自害とミへけれはよふきうさんとたちきくふたりころしはせしととりつきすかれは【淸】とふぞはなしてころしておく

れなんし【二人】いや〳〵ならぬ〳〵 のものおとにき丶つけかけ来るきよ川かは丶【はゝ】われを殺してよいものか角左衛門さんのところへ行がいやならほかへ賣る身うけがすめはこつちのしろもの トかごそり取てなげいたしその手だすぐにしはりあけなき入る口へ手ぬくひのさろ〳〵つわとめろふたりたつきのけしたへおろしてよふいのかこへ引のせて【はゝ】かこの楽いそいてたのミます トおしいたす【かご】ほうぐミよしかかつてんと はやかきいたす大もんくちそのさのげいしやたいこ持もらいなミだのちりからすた〳〵となりのさわさのときめ時ともにひかれておくりさんちう 三味せんツウンテチン〳〵〳〵

其　貳

華に酔蝶ハ入相のかねに酔をさましゆふへに酔仲の丁の酒ハ心こゝに持こしてあとひきとなり一樹のやとりハ盧生の夢の五十けん道さめ〳〵なけく清川かなをす間もなき衣紋坂なミたをつゝミ八町もそでなきかたへひかれ行その身ハ魚にもあらず網にもあらす四ッ手のかこの中田甫かゝるおりからうしろより田の面にのこる雁金くミはつととひ出す【庄九郎】そのかこまで トたちあかる【はゝ】たれだとおもつたらしミつたれ組の庄九郎たなわいらに清川をわたしていひものかこれかこの楽かまわずにやつてくたせへ【庄】死におくれのよい〳〵ばゝァめいのちがおしくはきよ川をわたせかごのやつらもそのとをりしやまひろぐと此世のいとまをとらせるぞ

ト仁王たちにさきほうおさへらとかさす【かご】むまい仕事のこのしろものまきあけられてなるものかしやまひろかすとそこのひてとふせ【庄】きよ川をわたせ【かご】そことふせ【庄】イヤわたせ【かこ】とふせ　トたち廻りありかこのもの二人ともいきつへとつてふりまわし【三人】とつこい　これをきつかけに寺／＼のつとめのなりものちやん／＼ぼく／＼／＼かこきぬたのつけひやうしかた／＼／＼／＼【はゝ】そふた／＼このやろうを思入れにたゝいてやつてくたせへ手傳てへかあしがふるへて氣がせいてどふもならぬおのれくひついてやりたいが齒はなしせめてあしてもひつかこう　ト庄九郎にしかとつくその手を取てすてんとうはゝへたんほへまつさかさまにゝちよくこそ見へにけり二人のものに庄九郎うつてかゝれはひつぱつしした をはらへはひらりととひこの所しはらくたてあれと芝居にまゝ有かたゆへこゝにりやくす△庄九郎は二人のものをよふ／＼おひちらしかこゝらちのきよ川がいましめのこしおひをときさるくつわの手ぬくひをとれは【清】庄九郎さんいひ處へ來ておくんなんしたとふなる事かといつそ怖ふおさんした【庄】モウこわい事はねへこの間にはやくにげるがいちの手さあ／＼　トせきたつれはきよ川はうれしさこわさこゝろへさきへいそけともあしはかどらぬゆめのこゝちしんきつかれて持病のしやくむなさきへさしこんてうんと一トこへ斃たつかべこはにねている文七は目をさまし【文】コレ／＼どふした目をさまさねへか　トゆすれはきよ川は目をひらき【清】文さんでおざんすかうれしうおざんす庄九郎さんはどふしなんした心がらとはいひながらかゝさんはさぞせつのふおざんせう　トまた目をねむりたわいなし【文】なんだわからねへとをいふせへまたろくに目がさめねへそうだこれしつかりと目をさまさねへかこゝにぬるい茶があるから一口のんで氣をはつきりとするがいゝ　トいへどおこせど氣かつかねばその茶を取てしうつし清川かのどへとふれつほつといきをつきて【清】そんなら今までのは夢でおさんしたかほんにこわいゆめでおざんした【文】と

んなこわい夢をミたかしらねへがこれ脊中もむねもびつしよりとあせになつたしやくでもおこりれしねへか【清】アイサいつそ積かゆめでハつよくおこりんしたか目かさめんしたらそのよふでもおざんせん思ふ事ハ夢に見るともふしんすがいやたく〳〵とおもひんすほどどふしたわけかきうに角左衛門さんの所へいかねばならぬよふになつてぬしにあわぬうちハ行事ハいやだともふしんしたらアノぬしもしつていなんすわるいこゝろのかゝさんだからいつそ腹をたちなんしてもふ〳〵あるとあられん外聞のわるい事をいひたてゝゑにやのミせでおろしなんしたから人のまへゑわとふで顔むけハならす主にもあわれす角左衛門さんの所へいくハいやなりいつその事しんでしまうがましたと思ひんしたから剃刀をたして死ふといたしんしたら【文】命がおしくなつたか【清】マアおきゝなんしおうききさんときよふねさんかとめなんしてまあまてどふしてもころしわしねへといつそとめなんすさわぎをかゝさんかきゝつけて二かいへ上りなんして手ぬぐひで口をしばつたりこし帯で手をしばつたりして無理やりにかごへのせてつれていきなんしたなかたんぼとやらへ參りんしたら其所に庄九郎さんがいなんしてかごのものをぶつたりたゝいたりしてさわぎなんしたらミんな逃てまいりんした【文】その跡で庄九郎にいつてふきめられたか【清】ばからしいそんないひ氣ぜんでハおざんせん此うちはやくに

けろとおつせへすから迷よふと思ふほど一トあしもあるく事がなりんせんから積がおこりんした【文】夢はさかゆめといふ事であるからあふかた角左衛門のところへいくよふになろふから何も共やうにしやくをおこす事もねへ【清】ちよつと見やまだそのよふなとをおつせへすたとへ人なかでどのよふなかいぶんのわるい事をいわれてもじつとしんぼういたしんしたもぬしにたつたひと日あつてから死ぬこゝろにおりんしたこらほとまでにおもひつめておりんすものをぬしをはなれて何かたのしミうれしくつて月日をおくつておられんせうさつしておくんなんし

トなミだながら文七をだきしめる文七もふさぎがほてだんまり

【文】夢ハ五ぞうのやまいとハいひながらこてふいふわけになる事ハしれているなんぼ庄九郎がせうちしていてもゆめのよふにもいくまいこれが日數の十日と十五日もある事ならまたほうのつけよふもあるめへもんでもねへがあしたハきまるてめへの身のうへこのよふなわけになるならあのよふにくろふをしてかけのかたをつけづともよかつたものを【き】アイサどふぞしていままでのよふによびもふしてへから庄九郎さんといひあわせてゆふべもらつた二十兩かけのかたがついたとおもへばそのかわりにだましたむくひかきうな身うけほかの客ならしよふもありんすが角左衛門さんハぎりあるゐミやのきやく人ゆへこのそうだんをへんがいハならずおもふとをりにまいりんせんとかくこわいたしておりんすからふびんとお

もつておくんなんし愚痴な事だがけふばかりか七ねんも八年もあるよふにしてほしうおざんす【文】それハおれとてもおなじ事うちのわるいうへゆふべからの此居つゞけぎりあるおつたれたゝきだすやぶれかぶれの百ねん目いひあわせたきやうげんかむまくいかねへその時ハ手めへばかりをころしハしねへたとへ人をあやめよしやくごのざへなをるまでも一日なりと九尺貳間のたなでもかりてそつてみるこゝろだ【清】うれしうおざんすそんならなんとおつせへすあのおつたさんをばおさりなんしたかへさぞやわたしが事をさりしらずと思ひなんしたでおざんしやういつの頃でかおざんしたわざ／＼人をよこしておくんなんしたそのときのみがおざんすからのちにとつくりとミなんし【文】なにミずともいひさつた女房にミれんハねへしたがなんといつてよこした【清】いろ／＼な事をいつてよこしなんしたかうらミらしい事ハすこしもなくなんぞふぢゆふな事があるならゑんりよなくいつてよこせ兄弟のよふにおもつているどふぞなるならさくらのうちちよつとなりともあつてはなしたいといつてよこしなんしたが其後へんじも上ヶずにおきんしたがミんなわたしゆへだとさぞうらミなんすでおざんしよう【文】成ほどおれも三年そつてるうちまる壹年半ハこつちにばかりきがとられてあれにハさつはりかまわなんだかついに一口やきもちらしい事もなくはやく手めへを身まゝにして一所にくらしてたがいに

ちからとなつてくらしたらうれしかろふとふだんいつていたがあれもけつこうすぎたべらぼうよそれだからかれもだすきれなかつたがおふくろがごふぎにかわいがつて子でも出來てはたがいにわるいどふでおれがよふなものにそつていてれためにならぬといんがをふくめておれがまへれとまりにやつたつらで里へやつたがそれがすぐにだんぎりよそれやこれやでどふでうちにやァどふも居られねへそのかくごてゆふべ出て來たがもつてへねへおふくろがさぞあんじてかへるをまつているだろふこのよふな子をもつといふのも【清】みんなわたしがした事でおざんすかんにんしておくんなんしへ（トまた二人ともふさぐきよ舟はねだやわかいものきたる）【きよ舟】おいらんモゥおきなんしたかへ【茶やわかいもの】ぶんさんとんだけしなりよふだね【文】いゝ所へ來たそこに酒があるならよこしてくれねへか【きよ舟】今みんなもりけへにさげて參りんしたからちつとおまちなんしなんぞ來てからおあがんなんし【文】もふみせかはじまつたのいつ日がくれたかしらねへやつさいつもひだるがる市がでへぶおとなしいが茶めしでもとりにやつたか【若ィ者】さつき山がたさんのおざしきてむま事がござりましたおまへさんをおよび申にまいりましたがきついもんでござりますおふたりながらいくらおこしもふしてもさつぱりさ【清】きよ舟さん子どもわどふしたへそこらにいるならよこしておくんなんし【文】そしてみんなをよんで來てくんなせ

へこれさぬしハちよつといつておつるをよんで來てくれねへか【若】かしこまりました　トらうかへいでたちもどり　もしわるくハだれにいたしませうね【文】お櫛がいゝ　若い男いでゝゆく入かわつて市右衛門庄九郎來る【庄】どふだ〳〵おきねへかごふきによくねるせ屏風をとつてしまわつしきよさんでへぶおつかれのごよふすだね【清】庄さんもふ〳〵とんだこわい夢をミんした【市】ゆめはもうぞうのわすらいだから用心しなせへ【文】もふしやれるぜあとの二まへのいろ男ハどふした【市】なんだか一日かいたりかへれたりしてあいだにうんすうといつていたがあのてへゝのよふなやつらがいまじぶん田町のほうからよくでるよ【庄】そりやァなんだ【市】かごのけいこをするやつらさ【庄】こいつはわからねへなんでもわるくハねへよふすだ一ばんしやこうをつけてしゆぼんにかゝれよふといふ色男がふたりできやしたきよさんどふいふもんだろふね【清】どふいふもんでおざんすかあふかたぬしもそのうちでおざんせう【庄】なにさそんなやくハつかねへつらさ【市】なんでもふたりがあめとなり雲となつたからさしづめかミなりがごろつこうといふところだがけさつから地震のいりつめで天氣になりやした【庄】おきやァかれ　此庄九郎先のうちへ角左衛門がかミにてむねきはかゝしたゆへいたつてできあしきところ文七きよ川がためにむこうづらとミせいま又ミかたと成て身をすてゝする心いきをしりあいかたたのもしく思ひまんざらてなくいま迄わるくしたるをくやんで一通りよりかへつてよくする事まゝある事なり△おつる　おきた千右衛門平兵衛まいかたミなく〳〵來る五人一座にてハ一トくミでハちつとしがなし【つる】おいらんさくばんハ文さんおながしかへ【きた】どなたもおそろいな

すつて【庄】なんとのろかろふ【市】いかさまそうでござりますとやらねへか　ト衣もんおなをしながらすこしくびをふる【つる】また市さん人のまねをして【庄】これものか　トかたのあたりですこしそり身にてたゝくまねをする【つる】左よふ
さたんとまねをなさいまし　このうちにおきた三味せんのいとをかけるおつる大づゝミのかわをほうしゆびさきではぢきながら【つる】文さんおいたゞきもふ
しませう【文】いもせ山だからなげるぜへ　トさかづきをほうるさかづきふす【つる】ヲツトふしました【きた】わ
たくしがおこしてあげませう　トさかづきをとりあげしんつぐ一ッのんで千右門にさす【千】このさかづきハかとちげへだ【き
た】そんならおつるさん　トさすこのうちおさだまりの大小いりからたいこぢまでのうた一トくさりありみな〳〵やんや〳〵とほめる【つる】これから市さんのぢ
あまりだ【市】おれがこの子へ心いきのぢあまりをこしらへやした【平】きゝてへの【きた】
市さんはやくおうたいなんし【つる】サアどふだへ【市】そのよふにせかれてハたまらねへせ
かれるといふハおいらが身のうへにハきんくだ【千】わるもつてへをつけずとやらねへか【市】
うたいやす　ト用ほうのほうへ手をあてゝ　〽（いたこ）これさかきやるなしこじやおしこじやよい〳〵のごん七さんでござ
りやすあとで太郎兵衛がきのどくだ【きた】とんだうぬぼれないたこでざんすねへ【市】どふ
もこの子がかいてならねへからあきらめるためにこしらへやした【そらと】よしておくんなん
しかく事ハぞんぢんせん【市】何しらねへ事があるものかおれをかいてあしたのそうざいへい
れてこなせへだしかきくぜ【そらと】かんにんしておくんなんしそんなげびぞうじやあおざん

せん【市】ほんにしんそうだのはやくおいらんにでもいんらんにでもなりなせへ客人がつくぜ
へ【そらと】ぞんじんせん又はじまつたたんとおしやべりなんし（トたちあがる）【市】ヲツトそうれな
らずのかばやきだ（トおさへるひやうしに臺の上にあるてうし膝にたる）【千】それいちこうぬしのひざへてうしが小べんをする
【市】是れたいへんだいなしぬらしたわるい所へおくぜ【つる】はや〳〵おたちなんし【きた】
それさなんしそら琴さんのばちがあたりんした【平】ちつトそんな事もよかろふあんまりしや
べるから【そらと】ほんにいゝきミでおざんすねへ【市】なんと【そらと】おざんせんといふ事
さ（ミな〳〵わろうそのおりから忍こやのむすこ京二郎あわたゝしくきたり）【京】庄さんとんだ事がござります角左衛門さんがきさしつてす
ぐにくるといわつしやるからおいらんをおよびもふしてまいりましよふといつてとんでまいり
ました【庄】そいつれとんだ事だしかたがねへつれて來るがいゝ【きた】なに角左衛門さんが
來なんしたとへ【文】たいへん〳〵こゝをあけずれなるめへ【庄】あいつがゆふべあしたまで
しまつていつたからまづこゝれ山がたさんの所へひきとるがいゝ【京】そんならどふぞそふな
すつてくださへまし文さんどふもおきのどくでござります【文】なにさ氣のどくな事もねへ家
ぬしが來ちやァしかたがねへ【庄】ぬしれはやくいかつせへいまあけておくから外にだれもき
わしめへの【京】どなたかおひとりしらぬお方がおいでなさへました【庄】いよ〳〵もつてむ

づかしい【京】そんならおいらんはね田(だ)やさんおたのミもふします　トあしをはやめて出て行あとへミな〳〵そうがゝりやうり茶やのすゝはきのごとしわかいものだいのものをはこぶげいしやさみせんばこをはこぶしよくらん硯ぶたをはこぶ酒のみハ一うしをはこぶ　【きた】庄さんどふいたしんせうねへ【庄】あんじなさるなどふかいこうわな【市】たゞなに事もおくの一ト間で【きた】たしかにあのこへハ角左衛門さん【庄】ミつけられてハいゝだいし【文】そんならとなりのあき部(べ)やから【市】そこられおれがゝつてん　トふつとふきけすしよくだいのあかりはやいり来たろ角左衛門　【角】これハくらいだいぶとりちらかつておるわへそのあかりをこれへよこしやれ　トてうちんのあかりてはしがミをひろひ　なんだうわがきハ　トよまんとするを　【きよ舟】およこしなんし　トとる　【角】たしかに文七【茶や男】なむさんしまつた　トばつさりてうちんをおとす折から　おもてのひやうし木カチ〳〵〳〵【角】もふひけだぞふだ

鳥渡(ちよつと)申上候未(いまた)ひけ四ッにも御座候儘(まゝ)あけ迄ハよほとのしやれも御ざ候へ共清川ハ文七か居(い)つゞけにてとの外(ほか)つかれほかの一チ座のものもよわりのやうすにミへますれば先(まつ)當年(とうねん)ハこれきりに仕又來春(らいしゆん)くわしくしたて御覧(らん)に入レ可申候　以上

わたくし方

いづれも様

跋

普賢菩薩の化したる江口の君も清川か千手觀音の手をもつて書ときハやハか劣まじ紺屋の獨息子文七ハ愛染明王に愛敎を受て通ふ佛神〆て三まいの竹輿に乗りて大道を行といへとも或ハ不信心あるひハ不心中のこゝろあらは必罪とともに辱をあたへらるべし此道を守りて信心おこたらぬ輩ハ旭如來も九郎助稻荷もあんまりもめる御神詫も有まじとおもへバ後編さきにたゝす又候やつがれふんてをとる

文選卧座

文選臥坐序

廣し狹しを論ずるは花嫁の店をろしに。ひとしと雖。大鵬ハ北海も狹しとし小屌ハ雛妓も廣しとせん覗機の千疊敷も廣きと思バ廣く。狹の陰嚢の八疊敷も。狹きとおもへば狹しされバ店子の胸の廣しといへども。大家の尻の穴の狹きにはしかず。爰に何某等が述し三編の妄言あり。其趣遠州濱松にひとしく。廣いやうにて又狹し。故に同國掛川の產なる。文選臥坐と題す。これや臥に狹く坐に廣からんと云〻

山東居

京傳序

寛政ふたつ

戌の春日

文選臥坐目

○東北の雲談
○北廓の奇説
○河東の艶詞

文選臥坐

狂爾作

○東北の雲談

いざことゝハんとよみしかの好色も其名を蜆に殘して龜戸の流れにとゞめたな葛飾の郷春ハ臥龍の梅見に鶯茶飯の初價高く夏ハ心地の藤に所縁の色ある蜆を味ひ秋ハ龍眼寺の萩風流士の目を歡しめ冬ハ妙見の松風颯〳〵の聲をのづから人耳を樂しむ四季の景物如此し爰なん市中のかしましきを避るの地ならんと世事のうるささハ作頭の助右衛門にまかせ御假家橋の別業に風雅と洒落をないまぜの繩に結ふたる建仁寺垣の物好すん切の植込にこゝろのすつかりを見せ袋表具の一行物張雑の風炉先屏に隱元澤庵の筆意をあつむ獅子口の花器庚申棚の飾附に與四郎か風流をくむ定釜のたぎり時ならぬ松虫かと獨いと閑然たる折から（となりの庵主へ本町邊のたばこ問屋のゐん居五十ばかりにてこくめいふうふとりのすゝ竹の小袖にかミこ仕立の羽織伊勢じまのゆかたをかゝえながら）【たばこや宗左衛門】いかゝお出じやのいかふかんじますとんとはれ間なしにふる事じや【亭主新でん】（大げんや新太郎とてとみたる町人の若ゐんきよ茶人なれバゐしやうのこのこも大てい御すいりやう元袖なし羽織なつめへひき茶をはいてゐしが）ゝこれハ多宗子お湯がへりかよい雪でハ

ないかねこれま庭の景色を御らうじろコレお茶を上ねへか（女房）【おわか】（よしへら出なれはこれもゐしやうづけハ御すいりキヤう）ヲ
ャ宗左衛門さんよふお出なんしたモシイたばこが旦那のもござりやせんおたのん申イス【多宗】
浪花より今度ハ雲井になされ又薫りがちかふたものじや【おワか】アイどふともしておくれな
んし舞をたべつけてハ外のハいつかうサ子【多宗】左様じや（トはなす所へ下女雪ガホくんでくる）【新でん】せんじ茶
ハ上るなこれをあがりやし何ぞ口取を（トうす茶を一ツふく立出ス）【多宗】コレハお手前ちかごろ（ト一くち呑で）是ハお
ふくかげん【おワか】（ハ水屋の戸棚から出し蜜柑を入黒もじの利休箸をつけて持来る）（ションズイドンブリ端の井に雪花糖唐）【多宗】コレハけつかうなお菓子じ
やハテ面白そふなお茶わんじや（ト多宗ハ此ごろの茶のけいこゆへしよじむちやなり）【新でん】何いつかうな麁物サ【多宗】茶
碗にも色〳〵がござるじやらうな【新でん】あるだんじやアねへのサまづ御所丸。渡唐屋なぞ
が尊いものサ又ハ。井戸。判司。辣胱。三嶋手。私物でハ藤四郎の楽て朝四郎。ノンコ。左楽
なんぞハちがつた物サ釜も雲龍阿彌陀堂。なぞハいゝ物サ【多宗】色〳〵な名が有もんじやの
【新でん】琉球風炉に。チンカラ。なぞといふがありヤス【多宗】ハテけうな名じやな（トかれこれはな）
（す内深川の花ども三四郎清三與太郎いづれ有るべかゝりのなり合羽にて来り次の間からじぎをして）【三人】（しやれをまじへてあいさつする）【新でん】此雪にどふいふ世界でころぶつ
もりで出かけたのじや【おわか】こつちへはいんなんし【與太】今日ハさる客人をおくつて二
ツ目迄參りましたゆへさいハいとおたづね申ました【清三】こふお庭を見渡した所ハ負見せの

二ばん目といふものだのう【三四】切幕から鰒をさげて出やうといふものだ【新でん】雪月花
三ッの樂といふが雪ほと風流なものはあるまいまことに銀世界じや ト折から【ゐしや】【丁けい】茶どろめんの長合羽たいこ半ぶん仲人しつかりづつとゐんがへ通り 嗚呼ふつたる雪哉。雪似₂鵝毛₁飛散亂。それは合羽を着て立て誹諧士はどうでご
ぜへス【多宗】此人ははやわせるとやかましいぞ【丁けい】コリヤアおらが兄弟ぶんがイヤア
いづれもお揃ひで【與】【清】【三四郎】三人口々に すきとお目にかゝりませぬ【丁けい】さやうさなんとマアい
ゝ雪じやァねへかへ此雪に内に居なさるとは大先生でもあるめへ三ッぶとんにぬくまりの竹村
の上あんで揚屋町の子明が所の八重垣などをチョビとせんじはどふてござへせう トいゝながら女房を見て ホ
イ是は奥方へ大ふはむきモシ今のはうそでござへス ト舌を出す【おわか】おまへひとり行キなんし〱
トをしいだす【丁けい】これはへいこうのむさしぼうべんけい〱【清三】丁けいは久しくお目にか
ゝらぬうちだいぶお洒落が下りましたハ、ハ、ハ、【新でん】來るとそふぐ〱しいおしやうだコ
レちと炭をつがつせい【おわか】コレゆきや茶の間の炭をもつて來や【下女(ゆき)】ハヽイト持來る【三四郎】わた
くしがつぎませう トしかミと手あぶりへつぎながら ときに丁けい様廓はどふでござりますだいぶうつりかはつたげ
にござります【丁けい】イヤモウ物かはり星うつりサ【與太】ハテ子雛霜さんも出るし【丁けい】
先から琴が出る小ざらしもわけあつてひつこむ長山千山もひゐて居る【清三】それでは二丁目

も皆若手ばかりになりましたね【三四】しかしミき山ときハづ此二まいがひやうばんがようござります【丁けい】錦尾もよし豊住もきついのサ【おわか】角の玉やのこむらさきさんも出なんしたね【丁けい】とふにさ角玉の花紫ハうつくしいものさ【おわか】それじやァ今ハ扇屋の瀧川さんなんぞがいつちおほきひ女郎衆だね【丁けい】そふさ鳰照もちともめがありやす【與太】七越さんや扇野さんハどふでござります【丁けい】かはらずぜん盛さ【三四】ワたくしハまだ綾越さんや玉しきさんをバ度〳〵間違てしミ〴〵と見ません【丁けい】どれもうつくしいよかたらひハしつてるだらう【三四】これハおほきにさ【おわか】花あふぎさんハどふもかはいらしいねへあどけねへからいゝねへ【丁けい】でへぶ新手を出すそふサ【多宗】その花あふぎといふハアノミめぐりのいなりへ額を上たのかなよいばゞァであらうな【丁けい】何サその花あふぎから今のハ三代目さ【多宗】ハ、ァそれならちかごろ又できたのじやな【與太】とかく角玉のくハしいワけがうけたまハりたい【新田】（たばこをのんでだまつてゐたるが）なんとキウ女郎の店おろしもいゝかげんにしねへかおもしろくもねへ勤番部屋の日まちじやァあるめへし（トはんじやうな人ゝ此うハきのうちハ女郎にハ新田があたりの有女郎もよほど有ゆへ三人の神でやいハわざとはむきにうわさな皆のなり）△（これよりひろぶたのつは台肴席ぜんの吸物など色〳〵出酒事になる）【丁けい】玉碗盛來琥珀光しやうぶ（ト吸物のふたをとつて）鰒とハをもひきや【與太】いつの間にかいきな狂言をおふせ付られた【清三】こいつハ命だ

【丁けい】玉のをよたえなバたえね鰒の味此くらゐ風流な味をもつたやつハないて【清三】お盃を早くいたゞきたい【三四】こくうにせきこむやつさ【多宗】これハよい所へ参りましたホン〳〵口ぐハぼうのあるのじやとても御ちそうにハわたしにハお飯をすこし【おわか】ホン〳〵多宗さんハ酒をあがらねへからそれがよからふ雪やおはちを持て來やそしてのそこのあミ戸のふた茶わんを持てきや【下女雪】ハイ（ト唐人もやうのふた物を持來る）【丁けい】振新がおくり物をはしけるやうにして持てくるの光るだんすのわきから出しちやァこねへかちつと見せなせへナンダくしこにこぶまきかこいつァいきだ【おわか】たんとほめなんしおまへにやァたべさせねへから【丁けい】おきやァがれつきぬけをうつてまきなをしになつたやうにちつとばかりうれしいおめをした【おわか】そのかわり京町へいきなんしたらうまい物をのけておきんすだらう【與太】ハテナ何ぞ新狂言ができましたがな【新田】頃日ハ大の色法師サ【丁けい】なんだつてきの國やがくびにからうらい屋が手事左交がむねでするこつたものをたまりやァねへ【三四】おそろしい〳〵【おわか】何をくつてもあたらねへね【多宗】（ハミんなのしやれる中にまじくちと五百らかんのあなんといふ身で居しがすこしうかれのいろミへて）何かしらぬがおもしろそふな事じやぞ嗚呼こちらも年二十だにわかくんバ角力の相手にならうに【丁けい】土肥の次郎でおしやれなさるおまへなぞもさぞおつくしなすつたらうね【多宗】しやう

〳〵な事サ、こちらがのハ高が出番の節にふか川あたりの事じやからいかふおはなしになる程の事もないじやそれも今ハこちへよんで舟宿の二階やうなぎやを中宿にしてじゆうなこつちやげな【清三】イヤモ今ハ大ぶんぎやうぎがわるうなりました【多宗】わしらがほうらつした時分ハもはや久しい事じやてすさきのはつこうしたじぶんでそのせつハゐしやうも青梅縞ぐらゐの事で淺黄太織の帶がゑらうはやりました【與太】それハ久しい事でござりませう【多宗】さよじやまづ深川での高尾と云ハ米蝶といふのじやこれハ又なを久しい事じやがわしらも音に聞たばかりじやが米蝶といふハ仲町のけいしやて家名が米やといふたじやそこで米蝶といふたげな馬文耕が作東都著聞集と云寫本物に米蝶が嶋鵆をはなした事を書たが又三浦の薄雲が傳にも山本の勝山が傳にも鵆をはなしたといふ事が有がいづれがまことやらこれハむちやじやがその後も六部じやの茶釜じやのといふ全盛ないろたちがありましたで【丁けい】ハテナア　トミな〳〵此はなしにたいくつのてい【多宗】時にわたくしハおいとまじや是ハちよとおより申て　いかい御ちそうに成ました【新田】マア御用がなかァおはなしなさいナ【多宗】イヤ今宵ハ店の恵美須講じやさかいに店をろしの勘定間ながらゆかねバなりませぬあまりおもしろさにとんだうつゝをぬかしてこましたミな樣ゆるりとおはなしなされや【新田】御用があつてハぜひもないこれハ〳〵【多宗】ホヽヲ

雪（ゆき）もあがつたそふな　ト多宗へかへる　〔三〕〔與〕〔清〕三人ワたくし共ももはやおいとま〔新田〕かへるさ
なら用がある　ト紙入から兩りやうを出し二分ツヽ小菊にひねつて　サァ舟にでものつてかへりたまへ　トやる　〔三〕〔與〕〔清〕コレハ
ありがたふございます　モシ御しんぞう様おありがたふございます　トくわい中する女房ハ何か用が有て次の間へ立此間に新田三人の袖と丁けいとに耳
うちする四人うなづく〔三人〕サァ〳〵いつまでをつてもさいけんがねへ御いとま〳〵〔おわか〕かへんなんす
かへ〔三人〕ハイ〳〵いつもながら大きにたべました〔丁けい〕おれもかへりやせうチト用があ
りだ〔おわか〕をんなじやうにけへんなんすね〔新田〕おしやうれマァあすびねへな〔丁け
い〕ぢきにいつてめへりやす　トミな〳〵立かへる　〔おワか〕ゆきやこゝらをかたづけや〔下女雪〕ハイ
ト来てかたづける〔おワか〕こたつへ手をさし入てミて　モシイこたつの火がちやうどようございますちつとおはいりなさり
やせんか〔新田〕インニャ酒をのんだからのぼせてワりいさゝまはいらつせへ〔おわか〕アイ
〔新田〕そこのゆふべよみかけた本をとつてくりや〔おわか〕ハイ　ト本を持來る折ふしだい所へつかい来り下女手紙を持てくる女房うけとつ
て新田にわたす〔新田〕まゆにしわよせ　どこから來たのだフゥ永德殿からじや急用（きうよう）とあるがなんじやしらん　ト火ばしを
入て封を切り　ナニ〳〵此間御咄御座る茶碗（わん）之儀　ト半ぶんよんでそばへおき　こりやちよつといつてこざァなるめへおわ
かじゆばんをこたつへかけてくだせへ〔おわか〕何の用でござりやすへ此雪にマァてへげへな
事ならけふわおよしなされバいゝ〔新田〕インャけふいかねへと十兩斗のそんがあるから〔おわ

か」それだがさむうござりやしやうにへ（といつたい女郎あがりと云ものハとんだやきもちをやくものにて又ゑてしわくなるものにて十両のそんがあるときゝすこしやろきになり）そんなら着物を出しやすかへ七兵へをおつれなんすかへ【新田】供ハいらねへ【おわか】早くおけへんなんしへ【新田】しれた事ョ（トそこ〳〵にしたくして加賀みのに雪ぐつで出かける此手紙ハ万八にて女房を一ツぱいかくため新田が丁けいにさせた狂言なりきん所の舟宿に丁けいはじめ三人の神も待あハせて居る）【丁けい】にせ上使の狂言ハいかに〳〵【新田】すつぱりくハせたゆふべみを見つかつたから一ト通りじやァだしてよこさねへ女房といふやつハぜんてへおそれるやつだときに舟ハ【與太】できてをります（ト五人やね舟にてすだれをおろし出かける此世界吉原か深川かその先をしらず）

○北郭の奇說　湖舟作

夫往古の勇士は戰場にのぞんで再びかへる事を思ハす當世の游子ハ青樓に入てふたゝびもどる事を忘るゝ其敵によつて變化すればその客によつて喧嘩するあり互にこつたる中にハ他目ハ敵と見せても心ハやはり味方にて謀をめぐらしてもあげる工面もあるべけれど女郎の片思ひハまづすけなく客の片思ひハ多し鮑の貝も女郎買も唯光るを以て貴きとすへし大門の伏勢にハ新造禿が連を亂してわけのわるき客人を生捕にせんと引ずりひつぱる客ハ羽織のやぶるゝ事を恐コレサいくから放せよといへどはなすと逃るハ承知の幕そのまくのうちへはいつて見れバ實事も

あり敵もあり實惡道外男達勸善懲惡のをもむきはありながら眼前の生惡を改めざるは此廓ばかり月の夜も戀の闇路のくらきと云べしげに世の中は大戯場下坐あつらへの清攪に五ツの折チヨン〳〵と堤の道具がくるりと廻れは本舞臺正面女郎屋のかゝり先刻より格子さきにまご〳〵して居る一個の武士其名は市兵衞と申にあらぬ【藤馬竹右衞門】頭巾は山岡に一もうかの南京染うらは黒つむぎに何か紋所のあるをすこでぬつたやつあごの所でひもをむすび羽織は上品の飛八丈情のあるかミろがさむくないやうにといふて綿をしこたまいれたやつこび茶ぐん内の五所紋の小袖下によく〳〵さむひとミへてかな色ののしめを着其下に丹後の黒地にもえぎのかうし縞の小袖間にあさぎのくじらむくのどう着を着黒ちりめんの半衿のかゝつてゐるきもめんの長じゆばんはかたの帶あさ上下のしもばかりつまミもゝ立大小へもえぎとうめんのつかいとをかけ白足袋といふなりを御じせつがらと云せりふですあしもミのきれでしろしを付た中ぬきぞうり外より手まねきして【竹右衞門】コレ〳〵おとな〳〵【若者】ぎうだいよりたち出てハイなんでござります【竹】ワしはお手前に頼がある事むし【若】ハイ【竹】外の事でもござんねへわしやアハアむかへの柱のいんでにくれへゐしやうを着てまかる女郎をかいたくゐすがなんとお手前そこを一ツあくどくもはたらいてやらしやつたらあれめへかむし【若】心にはおかしけれどはやきやくにするきになりハイ〳〵ずいぶんどなたでも御意に叶ひましたのをおだし申ましやうサアまづお上りなされまし【竹】そんたらゆるさつしやれトのうれんのうちへはいりコレ〳〵此ぞうりの間違はねへやうにたのミますぞや【若】かしこまりました【竹】上へあがりはしごの前に大小をさしきよろ〳〵して居る【若】お腰の物はこちらへ【竹】そんたらあづけますべいがわしがはつか袋がかゝつてをるぞやコレなんならわしが名を書て札でも付て置てくだされトいひながら若者の案内にて二階へ上る【若】まづこちらへアヽくらひらうそくだ【竹】尻のい

んでからふくとよくとぼる事むし トいゝながら座敷へはいり居所に迷ひ床のまへにすわる【若】今晩ハだいぶ冷ます【竹】あくどくさむい事むし ト若者ハ下へゆく竹右エ門なりひらあづま下りのかいてある紙たばこ入からおいぬ川原とやらさいのかハらとやらあやまろにほひのたばこを出しけぼりのあるぎん流しのきせるでのんで居る若者女郎のたばこぼん盃銚子持来り【若】モシあなたもうすこしこちらへおよりなすつてくだされませそれへおいらんがおいでなされます【竹】心得ました 逢方女郎出るまじりミせの座敷持風俗ハ御すいりやう竹はらハ何かものいひたそうに女郎のかほを見たり若者の貞をミたり又女郎をミたりわかい者をミたりして居る初会の座敷ハ廓通でもてれるもの説山家の猿にたいてをや【竹】コリヤアハヲ、初にお目にかゝりました 女郎怪野つんとだまつている【若】チトおはじめ申ませう トすこしつぎぐろ〳〵とまハしさかづきの中をよくしめしてのミ【若】はゞかり様ながらさし上ませう【竹】いたゞきますべいがむし ト女郎を見て マア御亭主から御上りなされぬかわしらハァ國の城下なんぞじやァ馴染があつて女郎も買ましたが御當地じやァいかな事よふかれぬ事むしハ、〳〵〳〵 トそら笑ひして ハ、ァこりやァいかく御念のいつた御酒じや トやう〳〵のんでしまひふところより半紙の四ツ折の間へちり紙を二ツにきりてはしへ小よりをとをしたやつをはさミたるを出しうへの半紙でさかづきをふきじしんにさかづき盞とゝもに持出女郎の前になをし【竹】コリヤアハァいたゞくのでゑすがおりよぐわいたむし トさきほどから女郎ハおかしさをこらへ袖にかくしてゐたるがたまりかねてふき出すはや二階もにぎやかになりわかいものも外の座敷へゆく【怪野】菊のや紙をだしてくりや【竹】御めんなさろ袴をとりますぞやコレあね子むし茶碗へ水のを一ツぱいたむけなさろ【禿】アイ ト出て行しバらくあつて水を持来る【竹】こりやアハァお世話なこんだむし【怪】ヲヤ水をおあんなんすのかへ【竹】どふさおめへのまぬ事むしこふする事むし トいひながら麻の袴をぬきよくのしてきりをふきたゝみひざの下へしきすわつて居るひざにふきがらおちたとミへてやけ穴二ツ三ツある【怪】ヲヤそうしなんすと

どふしんすねへ【竹】かうしねへと癡(ちき)わるくしれができてなりまうさねへ癡べへれやぶれ立ち
うとぼろヲリ／＼となつてしまふもんだむし トいふ所へ勝をもち來る コレハ／＼よさしやれべいゝかうなされてハ
以來馴染て來るに來にくい事むし トかれこれ時うつり女郎とさしむかいになる女郎も此客からちつきりの國ざるとおもへどにた山通のわるじやれをきくよりハましにてすこしあそぶこゝろになり 【怪】
ぬしやァけふれかんのんさんへでもおまへんなんしたのかへ【竹】わしかなイヤそうじやァござ
んねへがぜんてへわし方の大殿様がげへにおかてへがむし御時節がらの事じやァあるし御家中
のわけへ衆なんぞがこういふとけへでも來てほつと口論でもしたちうと忑らく六ッか敷(しい)からむし
わしゆう始毎日(はじめまいにち)ひごと三人ヅゝ出あるく役で番非番(ひ)があつて來ますがむしわしやァ先(さき)の月から
お身様をどふぞ／＼かひたく思つたがどうも相番のうちにやかましくいふ者(もの)があつて札をあげ
てくれねへからむしどうもこられなくござつたが同役のうちに一人ひつこミがあつてそのむづ
かしい男とむかふ番になつたからやう／＼のこんで來ましたァげへにうるしく忑す時刻到來(こくとうらい)だ
ァむし トまじめにしんに咄す此うち本まへ床をまへし 【若】チトあちらへ【竹】イヤ／＼おかまひめすな是でもくるしくござん
ねへ【怪】チットお休なんしと申ッすのさ【竹】フゥわしハ又こう御馳走(ちそう)になつたうへゝ又外の
座敷で馳走に成事かとぞんじたげへに心得ちがへだむし屋敷でこんなに心得ちがへをするちうと
さしひかへでも伺(うかゞハ)ねへけりやァならねへ事むし トひざの下へをいてすへつて居たるはかまをくわい中し 時にはゞかりにいきて

へもんだむし【怪】てうづにお出なんすのかへ菊のやつれまうしや【禿】アイ此うわぞうりをおはきなんし【竹】やれ〳〵あね子霄ッからげへにお世話だむしこれむし【禿】なんざんすへ虫がでんしたかへこをうざんすよ【竹】あんだとむし【禿】わつちやァ又びつくりしんしたョいつそむし〳〵とおいひなんすから蚰でもてんしたかと思ひしたョ【若】チトおやすみなされまし【竹】よくげへす〳〵　トふとんのうへにわりひざでかしこまる　【若】おつとめをいたゞきましやう【竹】心得ました　トいひながらふところより紫ちりめんのふくさに包みしきんちやくのつきたるとろめんのかみ入を出し中よりこんぢの錦の箔のすれて白くなつたる金入を出しかみよりへがしたあとの有小つぶを出し　女郎ハいくらじや一朱かむし【若】あのお子は御座敷でござりますから百疋でござります【竹】よし〳〵　ト半紙を二ツに折小つぶをのせて出ス　【若】ハイ御機嫌よう【竹】ヲイ〳〵なにを代物ハたしかに渡したぞや【若】ヘイたしかにおうけとり申ました　ト若者下へゆく女郎もめつたにハ来らずてれて居るしうちこれハ通もふつうもみなしなべてをなじ事也　謡へ牛若兒ハ御覧じて太刀ぬきそばめ物間を少しへだてゝ待給ふ熊坂も長刀かまへ互にかゝるをまちけるがいらつて熊坂さそくをふみヘッ。テンッ。イヤア。テン〳〵。ツクテン〳〵ヒヤア。ラリウ。ヒヤウ。　トしばしときせるで火ばちのふちをたゝいて居る所へあひ方女郎あやしの来る　【怪】ぬしやァ獨して何をおさハぎなんすへ【竹】ハヽ〳〵〳〵【怪】アノ子ハつちやァあすこに聞てをりいしたか今の所ハとんだつよい所ざんすねへ【竹】イヤ此まへの牛若がをもにすゝむ十三人のどろぼうを同枕に切ふせた所が大らんちくさハぎでゑらくつへい事む

し【怪】ほんにかへ聞てへもんでざんすねへげで（外題）へなんと申ンすへ【竹】熊坂サ【怪】ほんざんすかへ熊坂と申ンすかへ今の前をかたつておきかせなんしな【竹】ハァそりやァそふとわしやァとんだ事をから〻らうちわすれたァ【怪】なんざんすへ【竹】りよげへながらおとなをちよつとよんでたもれ【怪】わけへ衆かへそこで手をおたゝきなんし【竹】手をたゝひてもよくげへすか【怪】ようすよなぜへ【竹】アノわし方の屋敷の御殿なぞでハ手ハたゝかれぬ事むし【怪】なぜでざんすへ【竹】御てんでハ殿さまのめすのとまちがふからの事むしそんたら手をたゝく事むし（ト手をやたらにたゝく）【禿】なんざんすへ（ト來る）【竹】コレあねへおとなをよんでたもれ【禿】をとなたァなんの事でざんすへ【怪】エ、モたいがいすいりやうしやァわけへ衆をよんできやァ【禿】アイ（廊下へ出て）權八ドウ引〳〵（トよぶ程なく若者きたり）【若】ハイ何でござり【竹】コリヤアハアをとな御太儀だ外のこんじやァねへがわしらか同役が此地へ廻りに來て居るからわしが御門の札を上てもらいにちよつといつてくるにッて四ッをうつたらしらせてたもれそしてかうした所の時と云もなァむしわるくするまちうとまちがふもんだからどふそほんとうの四ッにしらせてたもれ【若】かしこまりました（ト出ゆく）【怪】モシへ羽織や何かをとつてちつとお休なんせんか【竹】そうしますへい（トはおりをぬきよくたゝみおびもといてよくたゝみうへぎとのしめハいつしよに袖たゝみにしながら）こりゃアハアこうたゝんじやァたまらねへしかし四ッまで

のこんだのちにまかつた時ハゐり紙をあてゝよくたゝむべいトいひながらふんどしをとき下着のうへゝをびにむすび【怪】ヲヤぬし
やアトあとをいわずおかしくてならぬをこたへてゐるへかれこれして床へはいる女郎もやう／＼床へはいり【怪】いつそさむひばんだヨ夜着をもつとおかけなん
しナ【竹】ヲイ／＼かけますべいそヲりやアよしかかくて女郎もかくほどなきやくでもなくふるほどなにくひ事もなくいやハやなれどくがひと思ひいつしよにねてハゐれどたゞだま
つてゐる竹左衛門もいふ事しらず互にだまつてゐるやう／＼としあんきやめ【竹】ハアこうしてくるもヘア他生の縁だがなんとわしに江戸の事
をちくとんべへおしえて下されめへかむし【怪】わつちらがどふして江戸の事をしりんすもの
かトいふハもつとも也竹右衛門が江戸といふハ吉ハらの事を大きくとつていふのなれは【竹】ナアニしらねへちうハゐうそ／＼うそだんべいいふも又もつとも也
【怪】ホンニモシヘさつきぬしのおはなしなんしたおじやうかとやらどことやらの女郎衆のは
なしをしてお聞せなんしなハ【竹】わし方の城下の女郎なぞハはなしになるやうな事ハない事
むし時に此地に川岸(かし)とやら云所があるげだが舟せどで女郎をうりでもする事かむし【怪】川岸
と申ンすハやつぱり川岸の女郎衆の事サトこつちらのあいさつもやつぼりわからず【竹】扨貴公(きこう)にわりない無心がある
ちうがなんときいてたもるまいかわしハ茶屋へゆきたいが貴公のこゝろやすい茶やがあんべい
なんとひきつけて下されまいか【怪】ずいぶんサとハいへどきミがわるいからあとへぐにや／＼にいつて居る【竹】どふぞ又の時ハた
のミますぞやわしハハア江戸のいきかたをしらぬがゐふくなぞハマアどんなものがはえますべ
いナ【怪】何がようざんしやうがわつちらにもしれんせんが浅黄(あさき)かたびら黒小袖と云唄がござ

んす【竹】フゥそんたら小袖ハ黒がよいじやナもつけな事があるハヘ冬歳くわい勤で大殿様から拜領(はいりやう)した小袖があるか此地へくるにハこれがよかんべい羽二重じやぞや黒羽二重じやぞやそれにハアお仕立師が仕立たのじやからむしあんとしてふきでもなんでもあくとくよくげへすわたなんぞでもうらもとをしなりゑらいもんでござらァむしはえましやうの羽二重じやぞやざんすとさ【竹】ホゥ今四ッなかよくしらせておくりつた是から皈る者にあつて札を上てもらつてトつくす女郎ハただおかしきをこらへにこらへて居るたりからしやうじのそとより【若】モシ怪野さんへ唯今鐘(かね)でござりまのす【怪】モシへ今四ッでござんすとさ又來ますべいコリヤ貴公待て居てたもれトせなかたゝく【怪】早くお出なんしへトいつたばかり竹右衞門ハ身づくろいし又はかまをはきあたまにまくらがみの付たをしらずまじめなかほでらうかへ出るあやし野もこれにきかすほうばい女郎が見付跡にての大笑ひなりしとなり【竹】はしごをたり【若】ハイお腰の物【竹】コリヤハア御脊に出るやうじやそんだらおとな外の客へ出しておくりやるナ【若】ハイお早ふお出なされませ【怪】そんならいつてお出なんしへト竹右衞門がのれんをくゞるが早イか見せと二かいと臺所で一度にわらひ出す聲百錢のつくせにも一度に落せしごとく也△此いなかさふらいハまことのものにあらずじつハにせもの也女郎始若者禿まですつぱりかいて中の町へ小もどりしそれよりとつと一座で此内へ來り又ゝしゆかうあるとミへたりそのあとをしらず

○河東(かとう/フカカハ)の艶詞(えんし)　谷我作

一艘(さう)のたなゝしをぶね深川仲町濱本のさんばしへつきはま本〱の聲に女立出て馴〱敷前(まへ)に

たちお小づかといふねんあればお馴染〻といふむだありげいしやのつけげん氣女郎のさゝやき障子のやぶれからのぞくもよくするやつお梅さんといふ聲をかぎりに立出れば座敷〻いきける じやれにこじ付地口さま〴〵いろ〳〵の酒中〻しれし御事と爰に略す扨床おさまり茶を一ッく んなも障子ひつしやりのいとまごひにあたりもしづまりお梅〻此客あたりのある客なれバまん ざらでもないと思ふ程さつき廊下で甑頭とのはなしをちらりと聞た富倉のうわさが氣にかゝり じれつてへといふ手がかんざしへかゝり又わきばらへさしこみあんどうの火のかぶりふるを日 ばたきもせず見つめて居る【客・文好】ちつとさいつのないゝ男につたい石斗の富家になじみがあれど見ごろせかれて居てこんやらいつた所だあいぬ、せん〳〵たたくこゝへ来らし出されたゞとみくらの事ばかり氣にかゝりだんまりで居たるお床をとりなをし おめへなぜそねへにふさぐ【梅】チツト氣にかゝる事があるからサ【文】 其氣がかりハおもしろそふな事だねはなして見たらきのはれる事もありそふもいだ【梅】これ ばつかりハどふもいはれやせん【文】色男についてのくるしミならやつぱりそれがたのしミ だらう【梅】色事と土用ぼしハした事ハござへせんどふしてわつちらがやうな者が【文】おれ が色男のせんぎをしやァしめへしそこでハまんざらでもあるめへわな【梅】そふいふ事ならい ゝけども トいひながらたばこを付て出す【客】コリヤァおありがたふござりやす【梅】とんだ茶だね【文】もつ てへねへどふして【梅】じれつてへヨウ ト茶わんにありつきりをつぐ【文】きれへなもんだの【梅】ぜんてへの

まねへけれども【文】エアノおめへがゝコリヤアわりィふねにのりあハせた【梅】そりやァい
ひなんせずとさつして居るのサ トぐつとのむその手をおさへ【文】コゥのむハいゝがのなんぼおめへがうつくし
くつてもはやり子だといつてもこつちのいふ事までさきをくゞつてうまらねへとかなんとかで
茶わんざけもあんまりだおいらがやうなはかねへやらうもくげへと思つてふしやうしねへ【梅】
それこそもつてへねへそふ云事もごぜへしやうがね【文】そんなら半ぶんすけさせねへ【梅】
ヲヤ〳〵富倉(とミくら)の女郎衆がきいたら角(つの)でごぜへしやう【文】おめへでへぶわからねへ事をいふぜ
【梅】かくしなせへすな何もかもしつて居やす【文】何かくすもんだ連(つれ)なるほどいゝがおら
アいかねへしたが人間ハ色男のやうだす【梅】そんなにいひわけをしなせへすなせきたくつて
もせくきりやうハごぜへせん【文】ソリヤアおめへがうそにもなんとかいつてくれるやうなら
うそをついてもつき力があつておもしれへけれどもどふではれたゝねへからうそもつかねへの
サ【梅】とんだおめへハせじがいゝどうりてお春さんとやらがころされて用事を付て江戸へい
つてまであふといふひやうばん記(き)だ【文】むりな文句にふしをつけてくるなといふめへびきか
【梅】成ほどおめへハうらないじやだよくワつちがむねをしつてゐなはるどふりで心がつうに
てじれつてへしかしおよびもねへ事だ トくすぐつこへもん句をいふ【文】上たりおろしたりこけがたこをあげや

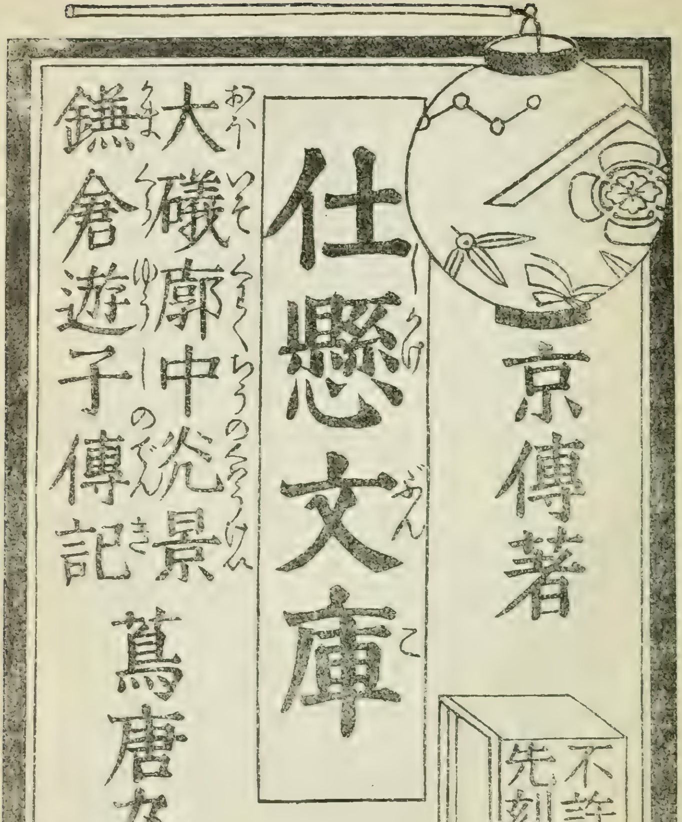
アしめへドレたこがゐひかあらためて見やうトむなぐらをとつてひきよせる【梅】よしなせへナ人ちがへもおかしいもんだトいふかほまんざらでもなく【文】じらしもいゝかげんがいゝト又しこなす【梅】よしなよとんだけるじやれたトはなはだふせうち【文】そんなにつらくされるほどけつく思ひおますかゞゐトにらんで又あたる【梅】子ぞうだと思つてそんなにあすんでくんなせへすないやだよ【文】なにいやだもすさまじいソリヤアほんきで【梅】しれた事ほんにいやだよ【文】きついものだおれをわが【梅】しれた事サトむつとして【文】ドレまだよいつからろくにそねへがつらをよく見せてくれゥ、まだ歯ハ白ひなちすいばもかけねへで大きな口から大きな事をまきだすがわりやァマァ何といふ國で生れてそんなにきがつゐゝこつちがくげへだと思つてあれせかゞみをいつてゐればつけ上りのしたふんばりだ【梅】そんなに口ぎたなくいつてくんなさるなそんなてへへへをならべることァねへ【文】ならべるだアおけんつうのびんさしが大きな四ッあしだァたちうりにしてもぼたんのすい物にはかならねへハト立上り身づくろひする【梅】どふするのだ【文】うつちやつてをけどふしやうが【梅】けへす事ハならねへヨトたばこをとりあげる【文】なれなれしい女だおきにしろ【梅】おめへのめにもなれなれしいと見へるか【文】しらねへハ【梅】そしてはらがたつか【文】何はらがたつ物かへ【梅】そうだらうはられたつめへおめへがしんにはらをたつてくれる氣がありやァこんやわつちがきハもめね

へ【文】まだたハことをつくかさきつからくらしたくつて手がむず〳〵するハへ【梅】たゝいてもだれもしかりてがなかァたゝいてくんねへ初けへからこんな事をいふもあつかましいがおめへゆへならぶちころされてもいゝ命ハいらねへさきつからあいそづかしをいつたもおめへにぶたれてあざができたらあすのばんからせめてあざでもだいてゐる氣だとみ倉になじみのあるもしつて居るしさけすまれるもせうちでゐやすきゝおよんでゐるおめへさんにふつとこんや出たのが百ねんめだわつちもはかねへかゝへの身だがたてひきづくなら行でもだくかにしてくんねへほれ申たまよひ申た（ト男のかほへ前がみをすりつけてなみだはら〳〵）【文】なる程おめへも名のふれたお梅さんほどあつて手のあるものだいゝハなうそにもそふいつてくれることゝろざしをむにする文好でもねへとてもこんやハ夜もふけるきがせへてはなしもできねへ【梅】そんならあすのばん來てくんねへ【文】ッ、もあんまりのろかァねへがあんまりころしたらあだをしやうぜ【梅】しぬたまるか（ト四ツにくむ）

○予となり座敷にて此しうちをきゝ居たるが夜ふけにいたつてねてしまひ此末をしらず

大尾

仕懸文庫


京傳著
仕懸文庫
大礒廓中光景
鎌倉遊子傳記
蔦唐丸梓
不許半時
先刻御迎

自叙

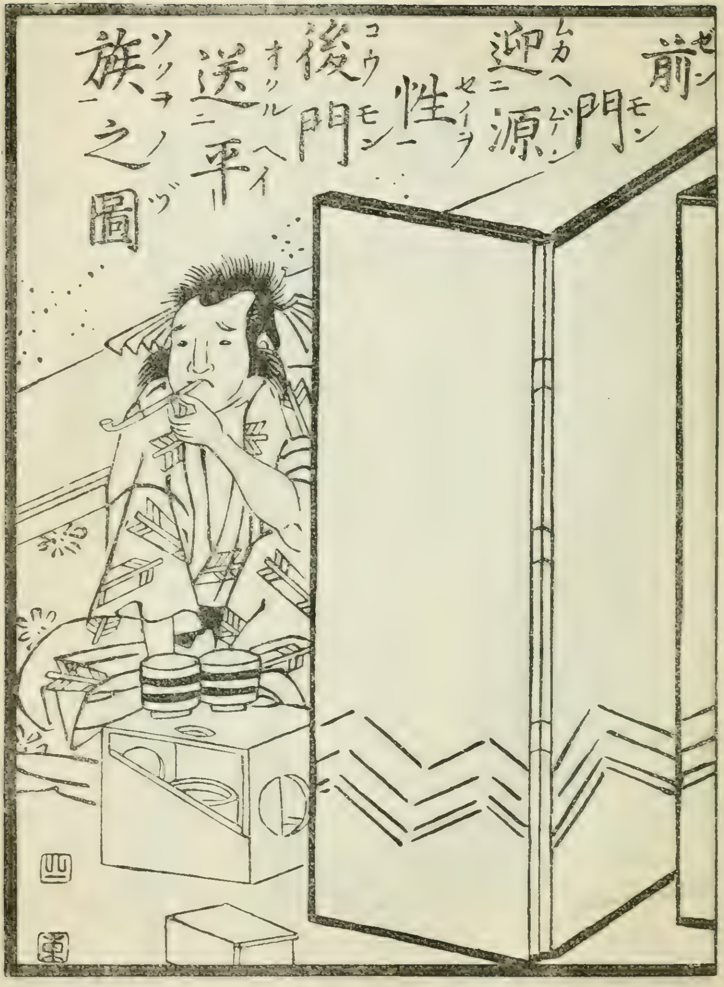
夫頼朝公の御聴會より。大ハ獨大磯の賑ひなり。虎少将を初として。許多の妓女色をあらそひ。萬客爰に通ひ乍。梶原か佞ハ。宵宿りの矢筈を違へ。小林が慢は。左右の髯をかき撫。祐成が二日醉の衢足。時致が疳積は煙管の皿を挫ぐ。羽織工藤あれば。羽織歌妓あり。兄弟の男子等あれバ。抗籠の妓女衆あり。或恍惚て近江の實情あり。八幡で首の義理づくあり。汐息の猪牙舟に範頼公は。鳴子の音に神を飛し。一切遊びハ對面の三方のごとく扱れ。外へ出て居る妓女をば。寸間狩場の切手あり。於是双切

丸とともに魂を紛失し。赤木作とともに家を鞘ばしる。豈滿江心を痛さらんや。鬼王が忠言。却て耳に逆ふ。是鎌倉時世の妖境にして。星月夜の井の深く戒。且惡所ぞかし。

北條時方寛政三郎
祐安辛亥の荒次郎
鬼王の正月和田醼
の三日目

京傳醉中誌

四


前門
迎源性
後門
送平
族之圖

仕懸文庫目錄

第一回

大礒往來游戲舩中之談

第二回

朝夷名祐成醉風流忘還

第三回

舞鶴屋傳三敎訓惜妓

第四回

梶原誇口罵蝶

妓爲時致謬終身

其二

大礒風俗 仕懸文庫

山東京傳著

第一回

東山に妓を携し漢土の驕者もいまだ綵皂舗の出番のちよつきり遊び酒肆の枝藏がへりのたのしき事を知るべからず爰に後鳥羽院の明宇文治建久の昔鎌倉の巽にあたつて一ッの女肆あり大礒と名づく爰に來りては陶朱倚頓が富も桂林の一枝のとくこゝに居ては昭君楊妃か美も崑山の片玉にひとしく黄金の塵塚鬱氣の捨場湯氣盛の場所にして顱卷安座の失禮も所からとて目にたゝずサッサおせ〳〵の鄭聲じつに雅樂をみだし忠臣もまよひ孝子もうかれ老たるとなく若きとなく權介となく八兵衛となく屋たらに行むしやうに通ひ振らるゝあれば照らさるゝあり或は討或は被り陸を行ものは稀に舟を行者多しゆく舟のいさみある風情かへる舟のおもひあるやうす猪牙舟の柏餅は笘舟のまんぢうを過り舟棧橋へつけば心とんで先へ上り御ちかいうちと港板をつき出せば神あとにのこる船頭たつとまれて君のとく客人茶にされて臣のごとく羽織と

いふは衣服にあらず新子とよぶはもち米にあらず昨日の娘分は今日のかゝさんと變し羽をり化して子どもとなるなんどはいまだ禮記の月令にもミず初會をもらひぬすミを賣跡をつけて待あればなをして鼻をあかする有宵どまりの客のをちつきがほ朝なをしのねむたき顔四ッあけのしつぼり晝あそびのいさゝある妓のみは獨立の草書のごくよめず蜜言は蠻夷の風調にして解ず呼れて來りおくられてかへりいやがられてのぼせるあればすかれてすゝまぬもありうはきの風は鼻のさきをふき實情の雨は膝のあたりへふるきやくは千差万別妓の臨氣應變實に是平康の盛事なるぞかし〇こゝに相州平塚の宿花水橋の上を通る武者【御所五郎丸】半ぎらしのあいさびのぶつさきはをり十ばん仕立のお馬やひらの馬のりばかま大小いこしらへに氣をつくれば刀はつがもなく長くてつのふちかしら鐵のもく目つばにうでぬきの付たやつつかは鷹のへをつもえびねりさやはにかはだゝき身はびぜんものゝ三分ぞりぐらいと思はれワきざしはくつとミじかく竹のこがたといふやつもつとも太づかさやは三分の一どうがね入ぼく刀こじりのとぎ出しミは長刀ごしらへの鳳打などゝおもはれ小づかはするがのゝべうちさげをはぐミくのおどし糸をうつたやつぶつさきのうしろへ扇をさしてつのくさりとやたてをこしへつけ髪の風はをしどりといふやつもつとも小びたるあり手に花色のめりやすをかけすげのふかき笠をかぶる年は廿四五ぐらいなり【供】は十三四の小さむらいしらくもあたまのやらう黒きぬのひとへばをりおとなのきうやうなやつをかたであげをし大小もはかまもふ相應に大きく竹の子笠をかぶりはり弓をしやうぶかはぞめの袋へ入ゆがけ袋とつる袋と腰まとを一所にゆひつけてかつぎかた手にべんとうをさげる〇一たい大いそ三めん堂のけいこかへりとミへるなり【五郎丸】コレ風できまとをふきとられるな氣をつけろ【小侍】ハイ〳〵モシさきはどのお矢はとう〳〵見へませなんだか【五郎丸】ウヽ三面堂も場所はいゝが草がおほるからわるくすると矢をしてやられるコレあすは又由比がはまでミせ馬が有がふりはせまいか【小侍】どふござりましやうかモシあの佐々木さまはよふおあてなされます【五郎丸】何てうしあたりだ

ゆるミがある　トすこしかうまん　ア、此橋で上足を騎てミたい　トつきそでにてしやつきゝり花水橋の下をゆきすぐる三折かこ秋のはしぶつかたにてぎんしよきゝばゝにれすぐさ長
なれ舟をしおくりふねなんどさま／＼の舟ゆきかふ中になめり川の青楼屋の舟と、へ一そうのやね舟こし障子はなれハしんつのはなたなら
きにのる船中一人のきやくハ「小林の朝ひな」としハ三十ぐらいゆふきじまのひとへものろのふとんのはおりぬいでそばにおくこれハおまへ
大いそのつうなり今一人の客ハ「そがの十郎」としハ廿三四あさぎまのあちごに白じゆばん黒ろのはおりしぶ紙の扇あふぎをも
つこれハ青楼きやくにて大いそハまだふつうなり今一人ハ「團三郎」とてそがの十郎がかゝへなりこゝらへハすいりやうあるへし　【十郎】
コウ朝さん今花水橋のうへを通つた侍ハかのやつがつとめてゐたやしきの次男だぜ【朝ひな】
フゥなんだかごうせへに武ばつたなりだのうミねへ檜垣もこうしてミると大きなもんしやァね
へか【團三】此おや船にハ大ぶんいミとばがありやすねへ茶わんなどいこかれた事をはじたと
いこうおわつちやァ一度へゝッこミやした【朝】おがい此ごろハなハゝどふだい　気なハのど　【さん
どう久】あんまりてりつゞくからにがしほでいけやせん【朝】さうだらうヲ、けふもよつぽと
南がでゝきたハへでへぶうねりがある　波の立事　けふハいつかだのヲ十二日だのコウト二四八ゥ、
八ッ八ぶたからてうど今あげるせへちうどのりにくいはづだ　しほときにくハしき大体つりの名なり　【十郎】アレ鵜が
うなぎをとつた【朝】ホンニ【團】ごうせへなうなぎだァレもふいんてしまつた【十】又しり
から出た　ト船ハしんつへトたるはしをくゞるむかふからもちよき一そうとぎくる　いゝさかりがあつたナ【向の船頭】ヲイおおりさんどけへい
く【久】縄町だァ【向の船】しづかにいきねへ　トすれちがふ　【久】アノやらうもでへぶ艫ぶりがよく
なつた　又むかふから鎌倉ほ引丁のふたなものとこへゝきくおくゝゝおこくるさげいしや二人女郎一人茶屋の娘ぶんがつきやね舟のすだれをあげさせへしときれきたる　【團】こけが心學をならやァし

めへしむしやうに茶わんをたゝくやつサ【十】こりやァできだ【朝】まんざらでねへくびだのおぢい鳥羽瀬だの【久】アイついていくナァ鳥羽瀬の釣屋の娘ぶんサト新市葉のまへゝ来る亀子屋あたりの二かいにてへおまへしゆうもちわたしれかゝへ天じよつかへてまゝならぬセへ〳〵〳〵トウ〳〵〳〵【十】こゝが大磯の新市葉といふのか【朝】そうサ【園】こゝの坂戸屋のうちへ京の次郎さんときた事がござりやしたいゝうちだねへ【久】こゝの新ミせもすだてができたばかりで【朝】今にこうしてあるのう茶屋中のたばこぼんへおくへの引茶屋からかへて来しをすぐに入てきたりし也火がきへる【久】モシ枕箱の引出しにはくちがござりやす【十】ヲツトしやうちト火なへ箱のふかい引出しをあぐれバ舟手がたとあたらしいろぐいが二本四文せんが十五六もんうちに御[illegible]通寶が一文有ほくちをさがし出してうつこいつァいつこうだ【園】トレうつて上ケやしやう【朝】引出シの中からみを引ずり出しトがきをよむなんだ青砥屋にて藤綱さま夢の戸にてしげよりコウおぢい此おしげといふナァどつから出る【久】ホンニそのみをとゞけるのだつけなにさ中うらのちゝぶ屋のかゝへサ六いそなへ丁の子どもやある所をなかうらといふほとなく舟ハふる市場のまへゝきたる【十】大いその振市葉といふのハこゝかへだいぶ舟がついてるにぎやかださふだ【朝】よくするからにぎやかサ【十】こゝの大智屋とやらいふハどれだね【朝】大ちやといふナァあれァノ下駄うりの荷のをりてあるうちがそだ【十】富倉とやらハへ【朝】とミくらハァノ赤くぬつたとうろうの出てゐるうちさ【園】モシ爰のとミくらの出見せが花川にござりやすねへきよねん山のかへりによつてしやれやしたモシ

はやりやすねへ【朝】コウおぢいアノ湯川屋のわきのちいさな稲荷りやアなんといふ【久】山田いなりといひやす【朝】コウ祐成さん此左りの堀が日記どのぼりといふヨ大いそつうのよくしつてる所だ（トいふ所からあとよりかまくらさや丁川岸のちよきおくりのかへりをのせてくる舟中にハ子ともとちや屋の女とのつてゐる）【子ども】おくめどんしつかりもちなよ日傘をふきとられるよ【茶屋女】（こつちの舟をミつけ）ヲヤあをと屋のおぢさんどけへいきなはるわつちらがほうへハきつゐもんだね【久】おくりけへりか【茶屋女】アイちつときなせへしな（トいふむかふから又一さつのちよききやくをひとりのせかへりするたがひニミつけると）【子とも】ヲヤ　青砥屋のおぢさんどけへいきなはるわつちらがほうへハきついもんだ子【久】おくりげへりか【茶女】アイサちつときなせへしな（トいふむかふから又一さうのちよききやくをひとりのせかへり来るたがひにミつけると）【子とも】ヲヤ善さんだよ【茶女】ヲヤ〳〵よくおいでナせへしたね【客】今けへりかおくりだといつたからけへッてきたてうどいゝ所であつたサア舟をけへしてくれ（トたがひにぞう〳〵しくわめき舟を引かへし〳〵そふならべて何かはなしながらいそぎゆく○これハ此きやく此女郎がなじミにてきた所が他所へおくりにいつたときゝむなしくかへつてこゝまで来りしなりてうどよい所であひ舟を引かへしたるなり）【朝】こいつアいゝ〳〵あゝいふ所が大いそ遊びだよそしていゝちうとしまだおちい鳥羽瀬の女郎だの【久】さうさあの子なんざアミへきでの板がしらさ（板かしらとハよせべの板かしらだといふ事大いその通詞也此舟へさゝミいそぎもせねバやう〳〵右に白ふねいなり左にしゆミの四てん川岸をミてゆきすぐるなり）【朝】祐なりさんコレ此右りが白船いなり左がしミの四天河岸すなハちあの堂がしミの四天だこつちらの磯井といふのれんのかゝつてある蔵づくりか縄町のてやいのやりく

りをする七ッやだ　トからしやくする所へ又あとより二人せんどうのちよき奉公人らしきやつをのせいそぎ來る又そのあとよりおなじく二人船どうにて一さらこぎきたる跡より來りし舟のきやく何か船頭にさゝやきしがしきの[illegible]天がしへ舟をつけ人の船頭あかり一さんにかけ行さきの舟へもはやいなり川岸あたりまで行すぎる　【十】コレ朝ひなさん今あの舟はなぜあすこへつけて船頭を上ケたのう【朝】よくある事だがあれは大いそあそびのきもといふ所さ鳥羽瀬の客とみへるがありくつは先へいつた舟のきやくと跡からきた舟のきやくと同じ女郎をならんで買といふやつさあとからきたやつは先のやつをミしつてゐるから船頭をおかをかけさせてさきへ口をきりにやつたのさ先のやつは跡のやつを見しらぬからうか／＼いつたがなんぼいそいていつてもモウ後手になるといふやつサ跡の舟はいくらおそくいつても先へ口をきつておきやアこつちのものさきこへやしたか其又口をきるといふ事は大いその通言で青樓ならしまひにやるとをなじとだあとから來たやつはおよせへのねへやつサ【十】かんしん／＼共道によつてかしこしだこいらはもつともなりくつだ【團】宇治川といふものだね　トはなしのうちよう／＼舟は縄町のかし桜橋へつく　【朝】大ぶにぎやかだねへ　ト舟のならんでついてゐるをかぞへてミて　こいつア出てゐるもしれねへねへ　トいふへ一たい縄町の子どもはかすくなきゆへ舟の高で大ていきやくのたかもしれ子どものきかることをはやくしるは大いそ通の情也　【團】こゝにむきずな胡瓜がながれ付てゐる【久】そりやア河童へやるといつてながしたのさ　ト久はさきへ上りちや屋へしらせに行所へおくりとミへて客と子供と娘ぶんつきそひあとより下女すゞりぶたものを丼へ入ちよくとゝもにひろふたへのせかた手に大きなてうしをさげゝる船頭うけ取舟へ入る　【船頭】おあぶなうござります【客】清吉もう何ン時だ【船】八ッがち

つとまハりやしたらう　ト字も子とも〻舟へのろ娘ふんものゝてうしの口をみよしの方へむけるこれハ舟がゆれても酒のこほれねやうにとの心づかひなれたもの也【久】しらせてかへりモシへでゝいなさいやすョ【朝】いま〳〵しいさうだらう〳〵サア祐なりさん上ンねへ【十】マア團三さきへあがらつし【團】そんならおさきへでやしやう【十】ヲ、コレ〳〵こいつァ大さわぎだァ、きさがわりいコレ早くとつてくれ襟へ舟虫がはいこんだ【團】それとりやした　ト三人舟を上る朝ひなハ桐のまさの下駄をはく祐なりハわきざしをたばさむ三人小べんをする【久】平よしハかしぶとんをかたにかけはまべからおくりの時かりて來たたばこぼんをかたてにさげ　わたくしハ此かり物をけへしておあとからめへりやす【朝】早く來たかいゝ　ト三人ゆめのとのわきほそ小路を繩丁へぬける折からゆめのとの二かいにて枕ひやうし　哥へわしがこいきのナァあのはまむらやそして瀧野屋かうらいや【そら笑のこへ】へ、、〳〵〳〵のホ、、〳〵〳〵こホ、〳〵〳〵

第二回

暖帘風に鼈て家名人を招くとハ残口か筆勢にして前の家名ハ風呂敷にのこるとハ風來が妙言なり爰にかまくらの巽大いその細町に鶴が岡屋といふ大暖帘をかける茶店の賑ひ熬酒の香ひ万客の鼻をつらぬき廚下ハ湯氣上ッて霧のふかきがとく駒下踏を持てかへる廻しあれバ火桒箱に上草履をゆひ付て提來る舩頭あり口のかゝる妓女あれバあいてかへる舞妓あり婢女素足で飛

で會所にいだり鰈の煮つけハ細生姜をせをつて器におどる【下女おいね】（なろミしぼりのゆかたにくろどんすのおびこんがすりにもへぎのいとさなだのひもつけたろ前だれをしめおびのうしろへあふぎを立にさしかミハくしきき）けふハけしからねへあつい日だよモシなをし肴が一ッでるよ【りやうりばん】ヲイ／＼今のふたと三ッつミをだしなよ（ふたとハすゝりぶたをしやれてかくいふ）【いね】できたかへ（ト云所へ）【廻シ】（来り）おはくさんおむかひでござりやす【いね】おはくさんハでたをりだよ（でなをりとハすぐに外のきやくへだした事なり）【廻シ】アイ（トかへる）【いね】（だし物をもつて二かいへゆく入れかはつて）【下女おふさ】（利久小もんのゆかたこぴちやなゝこのをびかんとうじまおびのまへたれ）横座敷のおきやくハ濱本のおなじミださうだからしらせてくんなよそして和田屋の送りのおくり物をつんだかのう【りやうりばん】そんなおそまきとうがらしじやァねへ【ふさ】ヲヽこつさにしやれるもんだの【ゆきよしの女】（さきほどから上り口にきてゐて）モシヘおひきさんの事ハどうしておくんなせへやすおたげへのこつてござへやすおたのん申やす（トいふのハ雪よしにおひきがなじミのきやくがきてゐるにへかりにきたのなりしかれども其所にこゝから先よしへかりにいつたときぎりをワろくした事があるゆへそのいしはにこらさがあたすわざとつつてたくの也）【ふさ】アイ今さう申やしたが一座にちつともめがあるからすんだら上ヶ申やしやうマァいつてきなせへ【雪よし女】そんならお早くおたのん申やす（トそとへいで）馬鹿／＼しいしたゝかまたせたもめがあるも氣がつゑゝ（ト口小言）【ふさ】（きゝつけ）きがつゑゝもきがつゑゝすかねへ女つつちやァねへよ（ト云所へ）【朝】【十】【團】（三人来る）【ふさ】ヲヤ／＼朝比奈さんようお出なせへしたねどなたもサァおあがんなさへし（湊ぶん）【おたき】よくお出なせへしたお

はきものをあげてくんな【ふさ】九本ぐらいのてうしにて おきやくだよゥ【朝】はしごをとりかけておくをミればしかけぶんこ十四五三ミせん箱五ツ六ツあるゆへむ
ねどきつき けふはこりやァごうせへににぎやかだ しかけぶんことといふは子どものきがへを入てもたせて来るぶんこ也大いそにてきものをしかけといふ芸人のしる所なり尤しかけぶんこを持せる
事は町にかぎる【ゆへに此冊子のげだいとなす】【朝】【十】【園】三人二かいへ行 【たき】おつけすゞしい所があきますからマァ
こゝへ【ふさ】ちやをぼんに三ツのせて来り モシ 此ごろはおとうぐしうござりやしたねへ【朝】いそがしいわ
なでへぶにぎやかだの【たき】此ごろは相應(さうおう)でござります【いね】さかづき持きたる 朝さんようお出な
せへした【朝】おとつい雪(ゆき)の下の堀井(ほりい)町でミかけたぜ【いね】あいサかけにめへりやした トいふ
うちいろ〱たしもの出る【久】はおりをきて来り こゝは風のへゝりさうもねへざしきだのモシ舟におたばこ入がござり
やした ト出す【ふさ】おぢさん一ツのミなさんねへかサァどなたもお一ツおあがんなされやし
ト少しさかづきまはる所へこゝの内でのさバくなたんことあだなをとりし【おひで】来り 朝さんよういらつしやりましたモシへどういたしやう
ねへお鶴(つる)さんはおわるふござりやすよはま本に出ていなせへすとさこつちにでも出てゐなせへ
すりやァもらひひきものう【ふさ】さうサ【朝】そりやァかくごうのめへだがこゝの二人をはた
らいてくだせへ【久】おふたりは御しよけへだよ【朝】いゝゆかたゞ本國寺(ほんこくじ)ぎれのかたゞな
【ひで】此ごろ御きやくがそろひにおだしなせへしたけふはもうあやにくだねへ今わつちらが
うちからうつくしゐのが二三人あいてけへりやしたがすぐにでやしたマァはたらいてミやしや

う（トゆきさうにする）【朝】まちな〳〵そしてこうとなおつト稲ぎト魚介をよんでくんねへ【ふさ】魚介
さんハ成田へたちなせへしたよ【朝】そんなら鬼丈をよんでくだせへ【ひで】おつさんハたし
か雪よしの出番のしうへ出てゐなはるのうマアよせバへきゝにやりやしやう（ト此うち二ツ三ツはなしある所へほどなく）
【いね】よせばへいつて板をミてきやしたがいゝ子どもしハさつぱりさやう〳〵はたらいてお
だんさんにおとらさんがきなせへすおとらさんといふナァ新子でごぜへすがかはいらしい子サ
朝さんおつるさんをかりてめへらうとおもいやしたがおつゝけむかひだと申やすからあとをつ
けておきやしたそしておつるさんハござりやせん鬼丈さんと稲吉さんハ今きなせへすいつそあ
ついヨ（トおびのうしろへさしたるぶきやうげんの画を書し扇をとつてむねのあたりを仰ぐ）【朝】しよじおいねでなけりやァわからねへといふもん
だ【いね】又あんなだんごをおつせへすついぞねへ【久】おきさんハどうした【いね】いな
村が崎の鯛門屋へめへりやした【朝】出ばんか【いね】いゝへお店のしじやァござりやせん
（トいふ所へ二どめ出かゝりしやうじのやぶれからのぞひてミるこれハもしさしでハないかとねんのためなり）【いね】もしどなたもお出なせへし（ト二人座敷へ出るおとらハまだとしゆかぬゆへ先へ
だされる此さとにハかミ座しも座の一やべつなきゆへさきへ出るをいやがりいつでもと一のゆかぬものがさきへたゝせられる也きをつけて見給へ）【お虎】（十七はかり薬絹のひとへものふた使あふひのあづまもやうのふりミでもん所ハ五二のきりの寸がぬ
ひ下ニひの板じめのかされせんさい寺ちやどんすのおびかミハふくちびんのかた天神へつからのつくり萠をさす縄丁だけ二人からよし）【おだん】（廿ばかりひねつてたんごちりめんのやまとがきのひとへそのもん所きゝやうこれハとめ紺ひぢりめんの長じゆば
ん極たの黒じゆすのおびひとへむすんでさげかミへぐるりおと一のつり針さがはいつたとミへてどれもトつぱなり　おさだまりのさかづきすミおとらハ前なり　おだんハ庫二ときまる。　ものもよほどふめゐなりおしいとにひきまミへ此ごろしかけ　女二ミせん箱もち来る。　たゝし

（大いそにて三ミせんをこのもんを小口へ付る事へよせバにてはやくミわかるためなり）【久】おめへがたちつとこつちへよんなせへ【朝】おぢいこゝのとなりのかうしづくりの内ハなんだ【久】アリャ男げいしやの寄場さ（トいふ所へ鬼丈通次稲吉来る）【鬼丈】（一座のかほだつらりと一へんミて）コレハ朝さんようこん日ハ【通次】ゑびすの宮のまゝでござります（ゑびすのミやへむぎめしの名代也）【朝】さうだつけかノ【通】團三さんよくきなはへしたの【團】モシ此ごろハ木蔵といふまくハどふでござりやす（通次おり〳〵こむさうにでるゆへにかくいふ）【通】そりよをいつてくんなさんな【朝】おきやァがれ【稲吉】鬼丈さんおめへの髪ハ夏どんかとんだいゝョ（髷丁の手やいミな此なつとおニゆハせる）【鬼】ほれたか【稲】フゥやるせがねへ朝さん此間鶴が岡の山の今本でおうハさを申しました【朝】稲むらが崎の白軒が所へ此ごろにいかふ（此間にいろ〳〵おもむきありいな吉ちよつとしたものを一ッひきばちならうしろのおびへさす。折からきやく二人あがりとたり座敷へはいる一人ハ）【近江や小藤太】（二十四五ぐらいさんとめじまのひとへものきぬのとをし小もんのひとへばたりつむぎしまのおびよき酒ミせのかひ出しとミへるふう一人ハ）【八幡屋三郎兵衛】（廿七八つよさうな男くりむめのもめんのひとへもの花色くん内ぶとりのおび地もうせんのまへだれをたゝんでかたにかけ釘ぬきを髪へさすかまくらゆきあひ川の酒店五軒店あたりのわかひしゆとミへるふうこかゝけふゑだぐらがへりなり）【三郎兵衛】（ハざしきのとこの間へいけぞんざいにしりをまくつてこしをかけてゐる）【小藤太】（ハたつてゐる所へ）【女ひさ】（茶を持て来る）【三郎】（だきつく）【ひさ】ついぞねへわるじやれをしなせへすな【三郎】やかましいハ【ひさ】けふハ蔵だしかへ小藤太さんどこて三郎さんとおちやひなすつたへ【小藤】翁そばから一ッしよにきた大ぶにぎやかだの【ひさ】こゝともに五ッ座敷サけふハだれをよびなはる【三郎】ちゝぶ屋のおしげをきいてミてくりや【小藤】げいしやをだれぞ

【ひさ】太夫しかはをりしかへ【三郎】つゝちやわんをむかふへころ〳〵ところかしながら はをりサ〳〵おなじくならおミんがいゝ【ひさ】あれいゝがマァ板をミてきやしやう小藤太さんのもだれそうつくしい所をミつくろつてきやしやう此ごろハこんなににぎやかな日と又ぐつとひまな日かあるからうつかりと買こミもならずこんなだと手こずりやす かひこミといふハむほんしやうぶに茶屋でかひこんでおく事なり 【三郎】むかふにかゝつてあるあさづまぶねのがくをミて なんだ此額の繪ハゑぼしをかぶつて舟にのつてるのきんり様の舟まんぢうださうだ【ひさ】すきなとをいゝなへェますと行 頭ぶん【八重】さかづき持て来る【三郎】けふハわづかの駄で大きに手間をとつたうハつきのあるやつハミんなたして香つきのやつハなをしやへやつた うハつきとハ酒のへつた事かつきとはわるいかの付た事 ちつともいくやつハ鍋町かすじけへか来たら門前にたゝかふとおもひやす もんぜんとハたゝきはなしにうかといふとたゝかふとハ手をたゝかふといふ事これミな酒店の通言也 ときにこう爰の内へ北條のおやかたがくるじやァねへか【八重】わたしともへハお出なせへせん【三郎】そんなら化粧坂へばかりいくだらう【小藤】コゥ三ぶ公舟の来たにしちやァでへぶたけへのう【三郎】したじのかはいた所だからやすくハうりやすめへなんぞたしなすつたか だしなすつたかとハかつたかといふ事【小藤】雁新の手めへをちつとばかり【三郎】どうたしなすつた【小藤】三ぶかそでへ手をいれ 判の分さ トゆびをにぎる【三郎】かつこうもんだ【八重】モシお一ッおあかんなさいまし【三郎】一ッうけてのミ舌うちをして こいつァあんまりおめへ目かへたらう[illegible]かあらハちつとわ

つてくんねへしたが三河へ水をかめちやァあやまるぜ 三河ものへ水をわるとけんびしとのめるゆへにかくいふすいをかめるとはミつを入る韮酒だなのつう言なり

【小藤】そんなとをいつたつてつうじるものか【ひさ】 ト云所へきたり モシヘ三ぶさん夢の戸から

お京さんがあいて來たがおめへの氣がしれねへからつつといてきやしたどうしやうね【三郎】

イヤ〳〵あいつをよんじやァあとがむつかしい【ひさ】そんならへんげへてこにやァならねへ

ト又ゆく○つつてをくとはきゝにくるうちを外へ出ぬやうにちよつとまたせて △ こなたの座しきには【おとら】【おだん】きかへて來る【とら】はくわちやがへしの小もんちりめんのひとへもの【だん】は一ツへん水へはいつたといふゑちごのあいさびこれは床着と道中着と雨方へ用るいしやうなり二人ともにかけ番のひもをむねの所で十文字にとりはなかミ入をミすがミにてまき帯のまへゝたて二にはさむ たく事世大いそれたばこ一ふくのあいたをあらそふゆへ此やうなとあり

ごしらへきついもの〳〵 はやごしらへとは芝居の詞 【とら】【だん】ついぞねへ【女】モシどなたもちとあちらへ【鬼丈】

なるほどチトぶんまはしのどうぐがはりといふ所がよからう トミな〳〵たつ所へあとをつけておきし【おつる】もあいて來りすてぜりふあつこト、むか

ふざしきへ【鬼】【通】さやうなら御きけんよう【朝】【十】こくらう〳〵 らうかにて【鬼】青砥屋の久公つりが

床がまはり【いな吉】

たまつたらちつと海へつき合ウぜへ【久】此ころはそんなげんきはなしさ【通】うそをつくぜ

トミな〳〵下へゆく○つりゝ舩頭のほまちになるなりためて置ことりそれで海などへゆくなり海といふはつるかおか八まんのむかふ海手にある四六ミせなり〳〵又崩げいしやへとこがまはるとじき二かへたともはをりへむかひのかゝるまで下にまつてゐるなり〳〵大いそのならひとて八畳じきへ二三人わりどこひやうぶと〳〵のせなかあはせ綱丁はやぐを茶屋から出すゆへあまりよろしからす綱丁のほふはげいしやをころばすといふたてゆへにやぐをちや屋からいだすなりしきがミをとぢつけたみそせんべいをミるやうたあさのふとんにはよくごゞあさのなつ夜着やきいんをおしたかんりやくまくらなり女は三人のはをりを下へもち行めい〳〵にかしゆかたをきせる 【朝】祐成さんモウねたか【十】何まだサなぜこねへ

＝やぐかわりいねへ【朝】こゝは茶屋から床がてるからわるしサ鳥羽瀬なんざァ女郎が

もつてくるからミんないたじめなどさそれだから夜具つゝミのはしに付ィてる札を見ると
こゝハだか床だといふもしれるよナン トまあこうとこへはいつた所ハむしあついじやァね
へか極楽の塩風呂がこんなだらう【團】コリヤアできた トいふところへ【おとら】茶りはながミをとつてまくらへあて而なりがきせ
ろをかりておびの間からうらぼたんのきつかうがたのたばこ入をだしうすまひのたばこをすい付てだす所へ【女】つゝ茶わんにちやをたくん
でニツちよいとゆびでつまミ來りたばこぼんの上へのせて行おとらハすけなりをまんざらともおもハぬゆへおびをときもへぎのいとさなだ
の下じめばかりにてねる一たいこゝの法は初會などにハ大きなおび
もとかぬといふがさだめなるよししかれどもとりくミによるべし 【とら】モシヘなにかあじにじれつてへねへ【十】
おめへじれつてへをどこぞではきけへてきたか【とら】茶ばつかいひなはる【十】おめへもと
しれいくめへがぢよせへれねへ【とら】ついぞねへおめへがたのやうな革じやァござへせんお
めし サかれとハかわはなりおめしとハ羽二重といふ也 【十】ゑてこんな事からやミつくものよ【とら】わたいらがやうな
ものでマァどふしておよびもねへとゑんかうの月とやらサ【十】でいぶおめへハものしりだ
トむかふハ胴ニとおだんとの間中となりハ胴ひなとおつろへなじミだけべつしておもむきあれどもことしげゝればりやくす」折ふしむかふ座敷にハ上方ものとミへものずきなきやくむしやうにあたきゝたがるやうすにて【客】コレごふ
く店のきやくの穴をすこしいふてきかしやいの【舩頭】ごふく店の衆の遊山にでるのを出番と
巾やすが出ばんのあたるのハ正二六八の月ャサ仲間の通言にやァつけのぼせになる事をつけ楽に
なると巾やす又それをしやれていふときハ【淺黄のもゝ引松坂嶋】共巾やす床のまハる事を
【大の字】とも又【ランチ】とも巾やす金一分のとを【ナル舛一チ】とも又【シンヲ一チ】

とも。酒のとを〔ヘル〕よい女郎の事を〔トーチ〕わるい女郎を〔くハをり〕げいしやの事を〔かハ〕と申やすまだいろ〳〵穴もござりやすがくはしくハ申されやせん〔客〕コリヤふらい穴じやわいハヽヘヽト むだはなしのうちよほどときうつりければ 〔朝〕〔十〕〔團〕三人おきてとこを出る三人のあひかたハ下へゆく 〔朝〕コウ祐成さん日くれまで居ちやァわりいか〔十〕よくもねへがおめへがいらべどふするもんだ〔朝〕モシきにいらざァあの子をさげて外のをよびねへ〔十〕何サまんざらでもねへハな〔朝〕さうハにらんだてコウ團三てめへもおつう本よみをしたな狂言がおさまつたとみへるぜへ〔團〕何サわつちやアトロ〳〵とやらかしやしたそんなとをいつておくんなせへすなわつちが身のうへでござりやす 身の上とハ役者の通言 〔十〕朝比奈さんこゝじやァ男げいしやハいくらだやつぱりおなじとか〔朝〕何男げいしやハ一分サ〔十〕鳥羽瀬のげいしやもこゝへよべれるかへ〔朝〕ソリヤ鳥羽瀬をこゝへもこゝのを鳥羽瀬へもよべれるのサ共かハり一ッで二ッになるのサそしてこゝじやァ子ども。羽をり。といふが鳥羽瀬しやァやつはり。女郎。げいしやととなへるによそれがまだわきにねへめうな事がある鳥羽瀬のみへきなぞじやァ子ども屋へくる女かみゆひの外ニふりばかりこしらへにくる女があるそれで渡世になるのサそいつをふりのおばさんとつけてをくわな〔十〕ヘテかはつたとだの トはなしのところへ船頭 〔久〕来りもしへどふなさりやす〔朝〕もう一きりゐるつもり

だ「久」それもよふござりやしやう「朝」稲きもなをしてやらつせへ（ト小ごゑにて）おぢいおつるもくびれ想應だが一ッかふな棒だぜかるやきをうしほ煮にしたやうな女郎だちつと又かしをけへやう「久」御めへいやうなものあきをしなさるお客ハミた事がねへ「團」久しいどうけをいはつしやる（トいふ所へ三人ゆかたにきかへて來る「おつる」ハもめんちゞミのしまのゆかた「おだん」ハとばせの八ワたやから染だしたとばせしぼりのゆかた「おとら」ハ鯛丸仕入のしぐれ小もんのゆかた「いな吉」もきたりなたしざかななど出ろ此のきやく折〳〵りやうりばんにはづむゆへだしものハきたつけて出すやうす又さへかへつてにぎやかになりさかづきまハり娘ふんや女入かはり立かはり來れども事しげければりやくす）「いな吉」モシ朝さん此ごろに芝居へつれてお出なせへせんか「つる」ホヽニワたいらもいきてへよ（トたびへ手紙をはさむのきつひ此さとのくせ也」といふ所へ女みをもつてきていな吉にわたすいな吉ひらいて見るとすのかみへべにゝて書たみなり）「團」何かおもしろさうなとね「いな」なァにけう兄弟でいぶんの所からきたのサ「つる」これ〳〵にごりが「いな」さうサ「朝」しかたでするふちやうもふるい〳〵よせ〳〵（ト此らちおとらおだんハ初會たけだまりんでゐる）「朝」コゥおぢい此ごろハ鳥羽瀬ハどうだ「久」あつちもにぎやかさゆふべもおきやくをつれていきやしたが舟宿部屋までふさがつてざしきがなくつてけへりやした「團」マゥ青砥屋かんがごうせへいゝ一ッのミねへといふ所へ「おひで」あさいなさんおめへさんハこれぐミだからにばなといふ所をさせ申したサァこれを一ッおとんなせへやし（トたかつきにゑちごやの松かせせんべいこはくもちきぬたまきなどつとあへせたかを出す）「朝」こいつァありがてへゑちごやの松かせせんべいときちァ竹むらのもなかの月といふもんだ「つる」（胡かミヽへ口をつけ）モシけふはどうぞまハしにちかづきになつ

てをくんなせへし【朝】しやうちく

第三回

戀と情の中裏とて大いそ通にしられしハうら屋住るの小路にして妓家軒をつらねつゝ棟をならべて櫛の齒を挽くにひとしき人出入片ときたへぬ駒下踏の音ハ會場にかしましき夫が中にも鶴といふ字を鏤したる竹簾かけたるハ舞鶴屋傳三といふ妓家なり　門にハ【居候】惣どうこをミがいてゐるそべにハとやに付てる【子供】とミへしちゝんで中ふくをせんじてこちらにハ【子ちよく】金魚鉢の水をかえてゐる所からかまくら朝いな切道の粋人　【長谷観六】來り　おやかたハ御やどか　【居候】　アイおられます　【てい主傳三】　通俗すいこ傳をよミかけてひるねしてゐたるが目をさまし　ヲイ観六さん御出【観】ときにいゝ奉公人がありやすからきやした突出しだがとをりハよし身のしねへなさァこうせい＝いゝ女だ　とをりとハ鼻すじの事身のしねへとハ風俗の事皆此道の詞也　【傳】此節ほうこう人もほしいがわりい足でもついちやァいねへかノ【観】何サ根をよくたゞして來やしたいさくさのねへのさホン＝此ころひとりとんなすつたしやァねへかおや判かへよび出し判ハだれを入レなすつた【傳】二人リ取たがきゝねへひとりハ四五日つかふとゐんばらむしをやミだすひとりハ髮どやでひつこんでゐるハな　つきだしの子どもハゐんばらむしといふをよくやむもの也ふのりをせんじてのませるなり　かミとやといふハとやにかゝりてかミのけのぬける事也　そして其奉公人ハどのくらいのものだ【観】五年で金ン五まいぐらゐと

いふあたりサマァあしたあたりミなせへ【傳】あしたハ勘定日だ【観】おしい奉公人だから早くとらせて八【傳】仕切あけにせずに親判をとをすたらうの【観】ばんばやの忠太がほうこう人たがなんなら親からそへ證文をとつてあけやしやう相だんかてきたらかけをハちつと付てくんなせへ（かげとハかけにてもうける事なり）【傳】そりやァどうともしやう【観】そんならおめへミてからむなぐらの五両もかしてくんなせへ（手つけ金のとをむなくらといふ此道の詞也）【傳】それともよくあらつてミてくんねへ【観】きづけへしなせへすなあらひかたはぢよせへハねへわたしだからふミ玉なんざァつかやァしやせんハな（ト観六ハかへる○ふミ玉とハあとでいくさのあるほうこう人の事なり○折ふしかゝへの子供のせうしなたてきり二人さしむかひ）ほかのとでもねへが手まへがァノ曾我の五郎とやらいふ客をよぶ事ハとう【おてう】（二かいよりてうつ二下る）【傳】おてうちよつときや（トおく）にきいてゐるからせいてよけりやァ五軒の茶屋へとはつてあハせぬ事もしつてゐるか外の子ともにやァきかされねへと長家一ばんあきねへをよくしてくれた手まへだから今まで大月に見てゐたが此ごろハさしをついたり寝たりすると茶屋のひやうばんもわるくコレ黒木の客もきれたげなのきけバその時宗とやらいふきやくも内をかふつてゐるさうだがヘテすへ〴〵コウァ、トおもふ心があらバもふ一年もしんぼうしてをれにちつといきをさしてくれろおれも男ださうすれァ半年や一年のねんきハくれてもやるさうして手めへが地めへになり共男とひとつになつてかせき

やァ又おれもせわをしてかゝへのひとりもするやうにしてやる手まへもしつてのとをりおれも長屋で相應に口もきく玉をあづかつて土地ところの世話もしてゐれバ内の子供に万一のとでもありやァ長家中へおれが顔がたゝねへナきこへたかがつてんがいつたか　トふく清もどきのおだんぎのさいちうおもてから

【まハし】おてうさんつるがをかやから口がかゝりました

第四回

【女ひで】まへだれで手をふきながら 朝比奈さんモゥおかへりなりますかへ【朝】此ごろにきやしやう【ミな〳〵】さやうならどなたも御きげんよう【十】ちつと風が【團】でやしたね【朝】おぢいのつきれやうかの【久】氣づけへハござりやせん【朝】【十】【團】はしごをおりる女刀かけぐるミ持てきてミせる祐なりハきざしをミわけてさすおくからばんづけを書た札のついてゐるはきものを持てきてなをす娘ぶん下女なと川岸までおくつてゆく〔つるかおか八まんの人あい〕ボヲウン〳〵〔これよりやぶんのていはじまりさやうにごらん下されましやう〕折から曾我の五郎時宗と云きやく來ル【女】タヤ五郎さん【女】サァおあがんなせへましな【五郎】おもてのくゞりからかほばかりいだし いゝかきいてミてくんねへ【女】ハつちらが内にでゝいなせへすョ【五】そんならあとをつけておいてくだせへ表の畠山屋に友だちがきてゐるから共うち付やつて來やう【女】モシマァそれじやァおてうさんのめへゝわるふござりやす【五】いゝやうにいつておいて下せへじきにいつてくらァ　トいへども女どもしやうちせ

ずむりにひきずりあげる 【五】 ハ二かいへあがりたつた今朝はなや祐なりがかへつてまだ出しものや三ミせん箱のとりちらしてあるざしきへはいる 【五】 そんなら今のうち八もんじやの湯へはいつてあせをながしてこよう 【女】 そこらをかたつけはき出しながら よしなせへナニこんな事をいつて又おもてへいきなはるだらう性わるをしなはるとおてうさんにいつつけやすよ 【五】 ハかねてまみづるやのかゝへおてうとふるき中にてこゝの内へもたび／＼来りし也こよいハ心のもめる事あつてきたりしゆへはたへそれとけどられましとおもひわざとけんきにてゐるとほどなく 【おてう】 ハ なだしらせしゆへざしきをあけてちよつとあひニ来り 心まちをしてゐたになぜおそかつた 【五】 しよけへか 【てう】 さうさもらつてもいゝがもふ今にむけへだからはをりしてもよんでゐてくんねへ とけへもいきなさんなよコウおふさどんはゞかりだがのたばこと紙をおばあにさういつてとりよせてくんねへごしやうだにヨ ト 又ゆく長く他のざしきにいられぬがすべて大いその法なりまたよみばにおばあといふあり一子供のせわをやくなり △ 共となりざしきにはきやくハかへつたがまだむかいのかゝらぬ子どもとミへ 【おきつ】 ソレヨわたいがてへこに出てしかもそのばん雪よしで一座ァしたァな 【おたね】 ヲ、それ／＼ホンニあの扇が谷の末廣屋にしんぞうおろしが有さうだがおめへどうする祝義をやらざァなるめへナル外一でよかろうかの 出はんの詞をおぼへてしやれにいふのなり 二分狂言ではおそれるのう 【きつ】 わたいらァ此ごろハ大ひつ天でさしものもそんなやつてしまつたしきだころされてもねへ 【たね】 うさァねへホンニおいらァもうあしたァされハり用事をつけて引こもうこれじやァでられねへ きへりをふかくこころときハ用事を付る 【きわ】 なるほど奉公人こんじやうとハよくいつたもんだよわたいらもかゝへて

いた時にやァむしやうに引こんだがぢめへになつたら一日もよけへ出てへ【たね】よくげんみぢうんもねへの（ト むらふ所へ むすめふん）【おき】何へこむ氣がちがつたさうだッゥく／＼うれしい心いきだ（ト 何か ふく かみすこぜりふを いひ／＼きたる）おきつさんちよつとうしろをむいて見せなおめへの髮（かみ）はとんだすいたかつかふだよたれがゆふおりたさんか【きつ】何わたいらが内へはおつよさんがきやすれな【おき】おつよさんはたしか表（おもて）へもいひにくいのう鳥羽瀬のおよめさんもよくゆふよ【きつ】ほんにかへ【たね】モシヘおむじさんはおきやくがきたかねへ【おき】何サぬすミに出てゐなはらァな（ト いふうちに手 おなるゆへ）あいゝ引（ト いひながら立て行○ねすことはしまつてある子供その客のくるきをほかへ出ろと也）【たね】此ごろ隣（となり）へ大瀧（たき）がらでいしにきてゐる子はとんだ大キなかほをするによどこござしやァへこむだらう【きつ】ウヽヨわたいらァまだ一座ァしねへが長家中（ながやぢう）でさういわァなそれでもよくうるさうだよだがまへすのう【たね】犬兵衛（じんべい）さんがまへさァなホンニそりやァさうとあしたァ雪（ゆき）の下（した）へみをだきうにョ【きつ】一しよに狀（じやう）づかひにもたしてやらうはなト（一人は下へ行○町（てう）ではみつかひといふ内証とちてはしやうつかひト云）△（こなたのざしき二は【おてう】ごぜの五郎一がきてあゝうへならず心のうちにいろ／＼とくろうのすじあれは何かそれ／＼心おちつかすたひ／＼らうか出入数度（か）をくゞつて出さうにいる此きやくきほひはたの半道とミへ）名は【梶原源太】（このすそを つかまへ）コウどけへいくのだ【てう】ナニさつと手水にいつてめへりやす【梶】なんだこいつァとんだしびんしやァねへかさきつからたび／＼出るがわりやァせつちんへとうもうこしのくひかけでもわすれて來たのか

【てう】おめへさうあじにおもつてくんなれるこたァごぜへせんさつき二三度出たナァあの

【梶】やかましいわへ　トおきよはたゞあぐらにて三寸ほどあらいたおの湖しきのはしにかたかつんつらみたかいやつをうできくりして竹口がはつたけいこばいのきれこて唐紙様といふ一きん一匁ぐらいするたばこを一ツふくのんだちよいとはたき　これへわりやァおりやうば初午の晩の狸をミるやうに氣はつかりあしにさせやァかるがひつてんな客とミてあしくするのか但シかまくら沖でとれた通り者を喰つた事がなくつておそれをなすのかしらねへか近江の湖水へ目だかをはなしたやうにあつけにとられるきむすこや夕顔の暑氣あたりといふいろの青い出番のやつらをとりあつかふとれあてかちがふぞ鯛門屋の芋のにへたもしらねへていゝかとおもつて宵から管次が内のたばこぼんより高いつらをしやァがるが大かた内じやァ出しッこなしてこしらへたきらずに鯷の汁の中へ一ト袋三文のとうがらしをふりかけて小ひんから汗をかいてくらうたらう【てう】モシへまあしづかにしておくんなせへやしわつちがわるかァあやまりやしやうあんまりでこせへすけしからねへ【梶】なんだけしからねへけしがからけりやァナとうからしやわさびハナかぶをうつて裏店へ引ッこむハこれわれやァまあ何屋から出る奉公人だたゞし名まへ出居業で亭主をすくすのかゥ、ここへたァさつきからたび〳〵廊下へ出るがなんだな客がきたからこつちのあくのをまたせてをくのか經師屋の達磨か宗十郎が似顔しやァねへお横目でにらんでもやるもんじやァねへハヘ是から一ばん胸わ

るでおれがけへきりこんくらべだマァさうおもつてむかふの野郎にも往生させ身上へ縄を付て引すつてきてからまつてるろといえかういつちやァほんのこつたがお袋のまたぐらからぎやハといつて鎌倉風のひより下駄をはいてからさかわ川の猪牙船で鶴か岡の八まんさまへ宮参りをして稲村かさきのざるそはといてう屋のうなぎてそだちたまごの四角を枕にして女郎の賓をふとんにしき晦日の月の屏風をたて十二匁の場所から七匁五分の場所かけて隅からすミへ寝げへりをうち正月の初勘定から買はしめ一年中の客帳ハをれが表徳でよごさせ大いそ一とをりの夢ハミつくして脊にやァ舟梁の瘧かいつてる梶魚さまだとこの出店衆勘定ハ一ッうつていくらッヽ子供がつかふ床屋のそんりやうハどのくらいな床でいくらするといふとも茶屋のさんばしの鳴子の札にどこの内にハ何流で何屋と書てあるとまでづつうにのミこんでるるのたハへなんだのかたのと上手をつかやァいゝかと思つてすつほんのうち首をミるやうにあんまりひく／＼しやァがるな　トだん／＼こゑかたかくなるゆへおてうあきれけへりとはをやへらけていろ／＼となだめてゐるところへ下から此きやくをのせてきた舟宿や女ともかきてよつてたかつて立ごかしにしてやう／＼かへしてしまふあとハひつそりとなりはじめて外のさしきのわらひこゑもきこへるおてうへすぐに五郎が方へ出なをりニして出る　【てう】とんだ毒氣をふくばけ物もくれバくるもんだぞやう／＼まるめてけへしやした【五】ァノ客ハ大ぶしつたりぶりをならべたナァどこぞじやァいはうと思つて内でふくしてをくだらうなんのとハねへ石菖鉢で鯨を飼ふやうな太平樂だそれにてめ

へのかけ引が氣かきかねへからこゝできゐてゐても日よけの穴から狂言をミるやうでじれつて
へ【てう】ホンニサ此ごろどやをしまつた新子かなんぞのやうにこゝのうちのめへゝもかつこ
うがわるふござへすゐんきなをしにあをつきりをついでくんなせへし【五】よせへ又しやくをお
こすだらう【てう】一ッぐらゐれいゝわな【女ふさ】来り時宗さんおちやづけれへ【五】モウ
こんやれ喰ふめへよ折から下にて【女ひで】モシヘ大たかやへちよきを一そうこせへさせてくんなせ
へ馬入川のしほどめまでだよそして起番れひとりでいゝよ今夜れとまりがすけないからトいふこへがきこへるこれ四ツあけのせりふ也○大たかやといふハ舩宿のかしなりそのちや屋〳〵へ出入の舟宿なり又おきばんといふハ北國でいふねずのばんの事なり　又△かくてとこがまハり【五】【てう】ハとこのうちへはいる【てう】ハとしが十八ばかりあらひがミをおとしばらげのしまだにわらでゆひつげのちいさなくしたちよいとはつこちそうにさしまへかミの所へぎんのミじかいかんざしをさし三両ぐらゐもするべつこうものを二本ほどさすおしろいなのすがほいしやうハすハだにすき屋ちゞミ花いろじゆすのおび白ちりの下おびたゞし是ハ着かへたなり也こいつハ五日勤ミに三十くらゐつとめるといふ奉公人なり【五】もまだとしハいたってわかくにがミのあるいろ男こしらへハあいミぢんのめんちりのゆかた無地のこンはかたのおび下をびハこんちりめんなり【てう】ハとこの中にはらばへになりじましんごのミの玉のきれでこしらへた小さなかミ入の中から黒ぬりにしたうぬぼれかゞミを出してミながらかんざしでまへかミのほつれをなほしてゐる　【五】コレてめへ指の輪れうらミたぜもうや
めにしろおとなげねへ紋所れなんだドレミせろ【てう】いゝようつちやッておきなよモシこり
うふミなさんなよ守りだよ【五】なんの守りだ【てう】鳥羽瀬のむかふの秋葉さんから出る災
難よけのまもりさトいふ所へまいづるやからおてうがくすりをせんじてよこしたるをくすりやくハんのまゝ下女【ひさ】持くる【てう】コリヤア　おひさどんはどか
りだよとてもの事にもひとつたのまれてくんなよおらが内のおひらさんがあいてけへるならの

ちよつとこゝへ顔をだきしてくんねへナ【ひさ】アイさう申やしやう（トゆく）【五】瘡のくすりか【てう】しりやせん【五】枇杷葉湯だなてめへののむにやァいゝくすりだ【てる】にてさほどなく【おひら】（来り）おてうさんなんだへ【てう】おめへうらミなもんだ兄弟ぶんのやうでもねへ宵ッから五郎さんがきてるらァナ【ひら】ヲャわつちやァけへしぎしらなんだ五郎さんよくきなつたの【五】でへぶこんやれまじめだの【てう】ちよつとこゝをだしな（トおひらにこゝうち）おめへうちへいつたらのソレおれがくし箱の上の引だしにくしがあるからのあれを深本へもたしてやつての二両かりてのたばこ入の中へいれてたばこのつらでよこしてくんねへ又客帳を出しならかしておいてくんなさんなよおよせへれあるめへが小ゆびにさとられねへやうにの【ひら】ウゝくしやうちさ五郎さんおさらバへ【五】ヲイもふいくのか（トひらゝかへる）【てう】（たばこをとつけるうちにがきせるこなし手たゝきさうにしておもひだし紙入のなかからほたる火うちをだしして うちすいつける）【五】閻羅あたりの女郎を見やうにそんなものをもつなへやすくッてわりいぜ【てう】何をやくのめへでだすもんか【五】コウこのごろれしかけがはいつたの【てう】さうサ茶屋からたのミでしかけがはいつたから地めへのてやいれしゆらいまけがするとつてさがつてひきへ出るものもあるよ【五】あじなもんでしかけがはいるとにぎやかになるナアト（いろ／＼はなしの所へ一の会三人のたばこ入を手ぢよくもち来ル）【てう】ウヽよし／＼おひらんさんに御せわでござへしたとい

つてくりやそつとよ ト子ちよくへかへる モシ五郎さんさつきのはなしのものをこゝへ入ておくによ ト時宗か蒲入の中へ金を入る 【五】ッ、どふもそいつがなくつちやァかれこれがらくじや。しねへ【てう】もしたらざァあしたにも又さういつてよこしねへ ト いふうち外のさしきもひけて二かいへしんとしたるおもてざしきのあたりにて羽をりのおゆまがこへと ほくして メリヤス 万ざく へ宵へまちわびわくせきとふけてそれどもまださくごとの ト あたりにきをつけ 【五】晝ほどいみをさだめてそたであろう【てう】くわしくそやしたよけふもけふとてだんなさんがいやといはれぬもつともなゐけんはきけどわつちが身のうへも何をかくさうべつこうのかずがへりしかけぶんこがかるくなつて此さしものもきたものもみなそんりやうのつがふものおまへの身のうへといへばだん〳〵のあのわかちはてどうするもんでごぜへす此からだをつきだして【五】主人のぎりも【てう】おまへにそかへて【五】そんなら晝のみのとをりに【てう】にげやしやう【五】ッ。コリヤ

仕懸文庫 畢

追加

前に許多の小冊出て此大磯の地に於て妓客の情至り盡せり雖然コンコ、リキコ、マカリキの時代にしてはや十年の物撰星移よくいふもんの上ミ下モもいつしか着ふるしてわつかに吸物椀の袋となる古今人情かれらされと風のうつり俗のかはるハ息の強ひ吹矢のごとく昨夜の鬢さしの翌に飜かごとく流行はやきハ都て烟花のふうハ殊なり故に今再ひ此地を穿鑿して十二錢目の筆のはつミに三錢目の胸のうハはをくはへ合て以て一部の書となす猶予か穿のいたらさる所ハ此地の博子のくハしきを待而已

跋

河豚羹を不食愚鹵あり。くふ癡呆あり。くはぬ愚昧ハ美味を不知。くふ素痴は有毒をしらず毒あるをしらずして。くらふ人は論に不足。美味をしらずして。くはさる人ハ一槩にして危し。不佞京傳。嘗好色淫蕩を著述すといへども。實ハ前に美味あることを述て。後に毒あることを示し。戒を垂がため也。不如美味を知り毒をしつて恐慎には。河㹠はくひたし命ハ惜しとハ。豈此境を悟したる。君子の言といはんや。孔夫子衛國の煮賣家を過りて曰ことあり。吾未德を好者。吹肚魚を好が如くする者をこそず

と。嗟夫ホンニ。傾國傾城ものは。此鐵炮汁の勢ひにあらすして。何ぞやミづから後にしるす

六〇二

湘城詩注

傾城諺種序

朝と明夕と雲昏る頃花鳥風月の俳諧の集を取ちらしそこはかとなく繰返しつゝ思ず轉寝しければ頻に名葉の香薫じて淺黄の煙靉靆中より黥驢なる容貌露善哉〳〵我ハ是有漏路より無漏路へ瀾る一切の衆生を教導給ふ道祖神の隨身蘧塚散人と云仙なり熟世の戯言を閑に氣の長茶家船宿の爲にて遊君妓の丹誠を示し送るみをかの押來世の書と全う思ひ日を移し月を越す故思ぬぶ沙汰となれハ人しらぬ腹立する遊士ありて能中の悪成も皆考違より起る事なげかわしう思召以後言傳みの滞らぬ樣にとの神慮にまかせ世に告しらしむ序ながら傳る事あり汝無藝無能なれ

どもしらざるを知らさるとし貴にも諂す賤にも高慢す正しく直き心なる故かよふ神の教導となりよつて今より仙か心弟となし蘆塚の号を譲しか又諺の譬を解し言葉を傳んと數の辨を吟して汝慥に聽迂詐とせハ譎實となさば眞也なを追〳〵に教べし只何叓も神信心〳〵と告て空中に歸り給ひぬ梦中に胸中へ込んたる色情理解の辨をおもひ出るまゝ書集め其やま人の閒言を則巻の一にしるし侍りて名も傾城諺種といわまほしきと云ぬ

辛亥

はつ春　蘆塚散人泥田坊梦成著

發端

天地已に開て輕清陽氣を積て象をなし男と成重濁陰氣を畜て形をなし女と成人物は是萬物の靈也其陰陽の意根に戀慕起て合體し行ふ事を色と號色道開て陰の尤豐の凹へ陽の眞中の凸の血氣を以て人物の胤を母胎内にて清濁の氣交合し十月を經て人物性産たる儘の心を性と云物に思ひ牙を情と云一切の事學ざれど其情發事能す己と學得る情と云は初に欲後に色此二の情は師もなくして自心より産出すの智なり古人ノ言に學ずして能仕との教も是に等當れり其色情に曉者を粹と云疎者を野夫と云正邪虚實何にもあれと粹は智なり野暮は愚也善に進す惡に退す中央を行をもつて粹と云歟此書は其粹野暮の當中を行傳る事を著り集中皆諺の儇文を上にして陰陽人の戲事睦敷せよとの間言を記せし卷也

諺ニ橋の渡し人かなくては渡られぬと云すへて媒取次なくては事成就せぬとのたとへ也准て云は棚機の戀の橋は鵲と云俗したりさあらは凡巾の取次は風なるべし異獸を衣にするも糸針の媒してとゝのひぬ色の路には中立も橋もいらぬといへともさすかに打つけにならぬとありぬ其色戀の道の橋と云は何ぞ和哥也歌道の教は戀哥第一とし人の心を種として萬の思ひを云出

四

る夫ハ氣長な雲の上人のなす所是ハ絢しき市中の色の道の橋と云ハ俳諧也俳ハ哥ゟ出て歌人の及ぬ角隅まて捜し拾ひ俗談平和を以し滑稽のおかしみ風流の瑣尾ハ俳の情也色ハ共情を種として萬の思ひを云出て猛き武士の情も安らかにし愚なるも智を惠堅苦敷も和らき老たる人も若氣と成渇んたる氣もうき立おもひのいできぬ人の中和合して目出度たのしきものとかや色は風雅也風雅ハ仁也又觀念の助縁なりと云色の心に遊び色に心を亂しまどふべからす和して他を柔らけおかしき言葉或ハ哀にも妙なる詞にて物せハ天晴の中立なるべし力をも入ずして人情を動かし橋とも階子ともなるべしさりとて戀する毎に發句云にハあらず風雅に遊ぶ人ハ言葉おもしろふ云なし書の文理もよくなせる故なるへし眞より詠る言葉にハ鬼神も頂を垂るゝ哥を詠心にて人の氣を曳情をさそふにあへてむつかしき事あらじ色情のミにかきらすからきよの中むつかしき人中へ渡ル橋と云もおゝよそ此こゝろにこもりてありなん

戀すてふ人のこゝろに誠あらバ
　言の葉にてもかゝるかけ橋

　　物讀ぬ人ありみかゝぬ者あり

世中に明めくらこそあなれども

あき聾(つんぼう)ハよもやあるまし

諺ニ傾城の誠と鷄卵(たまご)ハ四角ハないと云傳れとも一向ニさもなきにやむかし方云傳へし女郎の心中立もまゝありと人の口に殘り云傳へたり今も見聞に色情にて遊女の髪を切指を剪(きり)あるハ相對死などもありぬかく人にしれたる色戀だに多かりきまして隱すを色のならいとすれハ他にしれざる色事ハ何ほどあらんやさるを誠なきと一口にハ云かたしうき身の契情を友にしておもしろくせんとするにハ其ならいあるべし云バうき事をわすれて遊ぶ樣ニ持てなし遊ぶ客を粹とも云か氣なしにたのしまんと思ふ故たとへ女郎に誠あるとも其有無ハ見へまじかゝるふ功者の野(や)暮(ぼ)か多き故女郎にも誠なきか多し夫契情の命ハミす紙よりかろく思ひなから我方實情を產む事ハ其身の罪より重く思ひぬ是遊女の身持心立すべてさのことしさりとて情(ぜう)をおしみもせす死ぬ事を願ひもせずたゞ情(こゝろ)なき人をうらみ身のまゝならぬをかこち美男にも惚(ほれ)ずふ男をも振(ふる)す元方金のあるにもかゝわらずたゞいつもわすれす通ふ人實情ある人にのミ誠に誠を盡すとなん是遊女の肌也尤新造などハ美男に打込年增(としま)にも又金ゝの客に惚るありかならす欲深くて實情薄しさりなからさのごとき女郎にハ働きあり是又客の仕方にて樂しき事あ也おふかたハ働(はたらき)かれる人多し其意味を分す女郎に誠なきと云を手からの樣ニ覺しハおかし河東節(かとうぶし)にも緣(えん)のあるのが誠な

れとありかれを見これを思ひ共實を求むべし契情に誠なしと野暮の口から悪らしいと新造禿に當こすりをいわれぬよふに月端をきかせよとの哥＝

契情に誠かないと云事は

身をうつ客にいましめの沙汰

諺＝挑灯に釣鐘と云物相應セぬハとげまじとてさハ云ぬ古哥にも

草の葉のほど〲に置け露の玉重きハ落る人のよの中

さのことくなる譬のうちにも釣合てよきものハ

付合＝てうちんに釣かねほどのはねつるべ

右の樣にて見分似氣なきハ七十の賀もせし人の十七八の妾にたわむれ傾城買もふけん者の貳朱遊ひたらわぬミから晝三くるひミな釣合ぬ故ミのはめつと也ぬ遊興ハほと〲に相應の遊ひこそミのやしなひ共なるへきや遊興ハはしめやすしきうぢハのべやすし遊興もきうぢのやうに日をのハし樂たきもの也形も心も似たものハ烏といへバ釣合ぬハ是烏にだもしかざるへけんやといわんかされとも形ハにても心の釣合ぬハ亂の元なるべし

色情に高い低ひハなけれとも

戀する人に大小ハあり

　　高尾か物語を聞てあわれむ哥＝

釣合ぬゆへに高尾ハはねつるべ

　　人手にかゝれハしつむ水ヶ底

諺＝沙彌から長老にハなられぬと云すべての事年と功を積ねハ名人とも上手ともならぬとの譬也色情もさのとく見悪き女賤女が段〻仕上けなハ高にも美女にも手のとゞく事安し云バ晝三と色をするよりハ半鄽の女郎と色戀するハ一段骨が折れるにてしるべし惣して遊女の戀ハ下品にこそおかしく樂しき事ハあなりと云女郎買にも年増新造中年増あり今時ハ前髪を落すとすくに女郎買の突出しからはや色事仕通り者と我なから号るこそおかし凡毎日戀の道を行とも路銀のみ費し千里を十里も行まじ路行つくとも名所舊跡をしるまし數品の色戀に當り見もせずして色事仕と自得する者ハかよふの神の祟にて半雅眞振の仇名をとり晴天にもふられて山のこと三ツふとんを投出され雨降にも照されて引汐にも長掉で突出され寒中にも悲されてあつく也極暑にも寒く遊ふ客ぞ多かりなん樂しきに入たのしきをしらぬハ座頭か芝居を見るに似たり願くハ再本心に返り靜に道を行べしさあらバ似た山をも越し戀の淵にもしつます婦人に智恵をかう

切手も赦りてむつかしき箱入女も仕て取人めの闘もなんなく行べしよつて通り者色事仕とも外方云出す也持たが病ひの錢金にまかせむりに近道行べからす夫にて行ものあれと宿セし方にて嫌らひ女郎ハ猶おもしろからす客も公界ある事をしらて何そ人の心をさとし初メから高キ遊士にならん習より馴と云ハ墮に入てハうそに隨ひ情に入てハ情に隨ひ先のうき事も買て我僞をもうる故女郎買の上手にもなり情の賣買をして樂を設る色情を見習うちハ諸人愛敬樂生緣ンを祈るべし疑ふ事なかれ慢心を用る事なかれ

まだ戀の筋もしらすに近道を
いそげハ見まし名所舊跡

諺ニ賣物ニハ花を飾れと云御夢想の藥も開帳の靈寶も言葉に花を咲セつゝ往來の足をとめて散錢を受る事あり又遊所の茶屋藝者なとも皆同し有か中に辻君ハ場末の澱の流の身なれうとんの粉に皃を包ミ黒もめんの振袖着たるに月の影移ひしハ少し見直したる風情ならんか夕涼の徒に塒近くさし覗けハさま〳〵にをいして鼻の煩ハしきに恐れ立さりとやかふ云間に尻に一ッ刀をきめ鼻に手拭冠りし者かざりし花の顔にむれッ、問來るハ誠に下を見れバ方圓かないと云たとへをまのあたりなれ氣なしに遊女になづめるものハ尻の毛迄拔るゝと云待れど此君にざれる

ものハ終に鼻のせうじ迄ぬかるゝとかやかりにも人情をうごかすハ花をかざりし故なれハ也戀に上下ハなきといへともこれハ又あまりなると笑へとも夫相應に足る事をしる人のあれハにや所〻にあれとも盛んにして客の絶る間なし是も戀の端くれとて月夜をうらむとぞ馴染るものゝ咄しけり共こゝろをおもひ出て

　月かけもよしやよしすを屛風にて
　　菰の褥も戀なれハこそ

安ものハ錢うしないと覺しが
　このやすものハ鼻をうしなふ

諺ニ合セ物ハ放物と云万物多ハ寄リ集たる故又放る事あり二セと固し夫婦も緣薄くて放るゝあり又金銀財寶も裸て生れ中途ニ持し故身を放るとて悔るハ愚なり譬て云ハまへかた流行し目來籬の札も人數に合て七枚宛放レ〳〵に蒔四十八枚ある骨牌を合セてハ眞と売と放し勝たる者ハ錢を繫合セ負た者ハ金に放るゝ色情にも又互に思ひ合し中も人目を見合セはなれ〳〵にてたゞ神佛をうらむ折から捨る神あれハ拾ふかミさンの有てこつそり合てやりしハ氣前の放者とやいわんしか又合セものハ放るのミにあらす放レ目貫ハ胴亂の金物ニあわセ又放れきつた歌を合

て六哥仙ト云放レ馬も兼女か來合セ奴等か仕合也若くて男にはなれし者ニハ問合セて相應な放レものを合セたのしきめに合セてやるかよし亭主にハ放ても色氣にハ放ぬ故若人と顔を合す度罪を作る樣見へて哀也と目を合セ共座を放れての噂に云侍りぬ

うき草の合べはなるゝ小さゝ浪
　世なミにまじる人も共如

　寄レめくりニ

合セものハなるゝものしりなから
　仕事にされし札おしそ思ふ

諺ニ人に鬼ハないと云尤鬼のとき力士あり鬼の樣なる面躰あり心の鬼ハよもやと思へとも佛說にも外面似菩薩內心如夜叉の沙汰あり聖人凡人面獸心と曰とく無義道なる者ハ怒て鬼の樣になり柔和してハ生佛の名を得し人も多し人の神にハ鬼も佛もありぬたとへ鬼のとき者ニも眞を以てセは叉むかふ事あらし又女郎のうそもさのとく僞と思ひなからも實を以て物セバ實に啇むかふ咥もあらし人多く遊女にハ情を盡を損の樣に思ふ故我とふ實になり遊ひの始終迄愼ならすして實情にめぐり逢ぬ人少なからす

付合ニ客ほど嘘ハつかぬ契情

是何にておふむねしるべし尤地女にハ宇治の橋姫清姫などの變化のさたあれとも遊女の鬼になりし事ハまだしらず情薄くふ實なるゆへ鬼になるほどハ惚れぬと云へとも色情のほどを知りあきらめたるハおとなしけれ地女の愚智より鬼のとくなり蛇の様にもなりぬ是實なるやよし誠なりとも其拙き心に愛情も覺けんかゝるすさましき事ハ聞しのミなれと今もすでにあなりうかく女を欺すべからず女も又欲に染て欺されぬよふにすべし女の男をたますハ己惚也悪ひハ可愛のうらと思わせ嘘から出る誠かほんの誠と言葉に花をかざる共内心ハ鬼なりと用心をして色の情にめでゝ情をハかけべし七の心中立を見するとも遊女に心を明渡しにする事なかれ

鬼に似た顔と力ラハあなれとも
心のおにの有無ハいはれず

近来鬼むすめと云もの出たり
人ともうたかハしけれとも
娘の一字ハすてへくもあらて
かくなん

付あふて見ねハ心ハしらねとも

娘そゆかし鬼も十七

諺ニ損ンをして徳をとれと云尤事品に寄べけれとも乞兒道心坊に手の米入る事呵のゝしるも有又惜む者もあれバにや佛教にも其說區々也人に施すにはあらす皆我に惠む也態とも取らせよと老たる人も云ゥ近く喩て云ハ馴染の女郎の方へ行し時客ありて逢ふ事むつかしく折悪くもらひ引もならぬ時名代女郎と云その節義と情を思ハゝ獨ゥ寐して遊ぶ事あり是遊士の公界也其後に行し時のおもしろみこそ一晩にも二夜にも增りて樂しかるべし是名さして行ハ初會にもする事あれと初心ハ好むへからす其獨寐するに遊女の不斷仕かたもやうにて得失の意味あり鑒て思ひ斗るべし

施せば身に惠むとの教あれと

いつれめかりをせねハ丸損ン

諺ニ永い正月ないと云又三日御座ると云藝業のとけまじきトおもふにさして云すへての物盛あれハ衰あり女郎買も盛あれと夫迄ハ行とげすして女郎に情かない面白くないと云尤躰のなき女郎もあれと夫を面白くして遊ぶを粋と云色事仕になじむ女郎ハ其仕打をまね同氣求て色事功者に成碁將棊も上手と打バ身も上達するにひとし又情を立てたのしき迄ハ代のつゞかぬ客も多

かゝり花なら沓の頃にて盛を見ずにしまふ也是もたのしき一ッなれどもさにあらず花のちりしき迄も見たく思へど落城せし故無據行ぬ也其代の傾しを隠すハさる事にて人情ともいわんにとにかく女郎にのミ難非を云人少なからずこれらを誠に情なしと云へし有縁不縁にてもしれしれ盛のあるをすて西風東風行廻る客ハ女郎を放し飼にしたるにおなし尤色事ハ金にても出來す又夜ことゝ口ことに通ふともできず樂しき嬉しきハ互の胸にありとハしらずや只金ゝの客人ゝをうらやミ顔あしき傾城をにくむぞおかしけれおもしろくて實情あらハ悪女にても金なくとも情ありて男氣ならハなど樂しきに至らんや女郎に非を云にかゝわり其身の非ハしれぬぞおかし

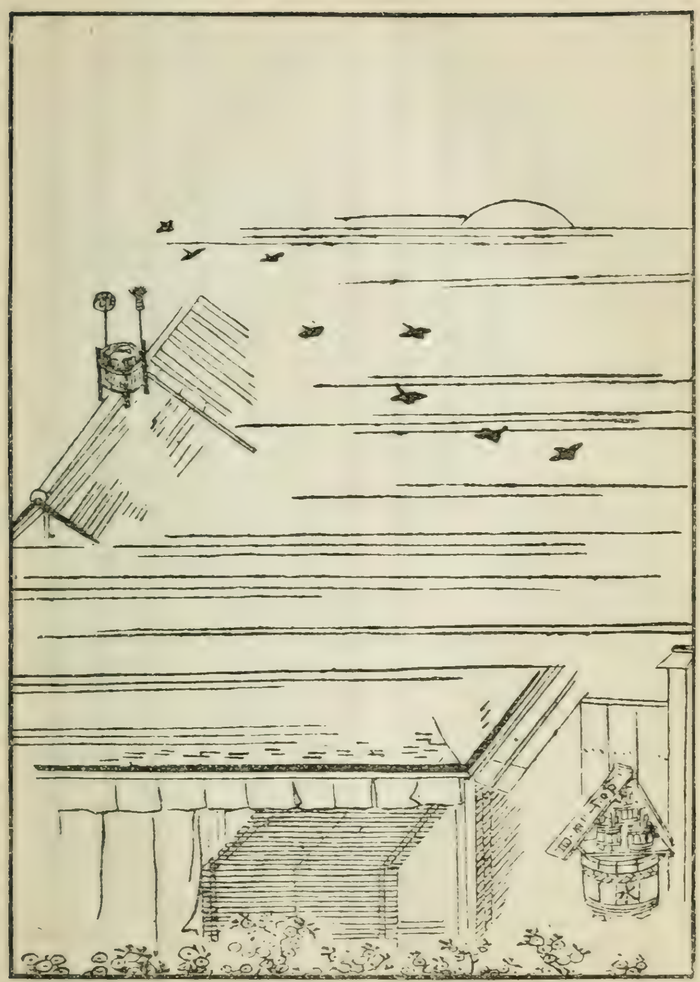
情なしと女郎をそしる情なしめ
我身の恥ハ氣も付もせで

諺ニ蒔ぬ種ハ生へぬと云人の上によせて云ハ來世佛にならんとて念佛を唱へ五戒もなりたけハ守りぬ呉ふく屋ハ貴ん爲に子ともに言種を蒔す類ひ皆おなし夫人の名を問にハ先自身の名を云是禮なりとかやすへて其とく女郎買も裏三會と續と若ィ者に花を蒔頓てきのじやの臺と生へる女郎にも又床花を蒔と近きうちたばこ入などにはへる是蒔やうの多少によつて多少ニ生る又女郎の方より實情を芽ぐむ迄ハ待久しく思ハゝ其女郎の腹を耕し意地相應に情のたねを蒔つ

けるとはやく情を萠て實を莟む左右の詞に花を咲すと咄しに實が入て言の葉しげりみどりの子ハなさすとも木の下闇の名にめでゝかけすむ月の水ももらさぬ中ともなりぬ遊里にて名染の客にハおしげりなされましと云もさのことくせよとの符帳也かならずしもわるじやれを云過して愛想づかしの種をまくべからず契情ニハ松の位の名ありていつも色かへぬと云なぞらへたれともとかく客人の方にあきか來ること二色する也尤俳諧季寄にも常盤木の落葉ト云事見へて松柏も散る事あれども樹に別条なし心の中ハさなきだに思ふ中の戀いさかひしてしばしとふさかるに似たり其情の実を見んと客女郎ともに態ともすなり是方して中直れハ誠に面白く樂しミに至れと物あきをする者ありて又よの花を詠るこそ多かりなんさりとて葛の葉のうらみも云ず終にハうき名も落葉せしハいと本定なき事に侍りぬ

色かへぬ松になしめど蔦の葉に
あきの來ぬれハ二色こそすれ

諺ニ荷つたら棒が折レると云いつれ相似たるを分て定めかたきを云准て云ハ勝負仕ハ何ほど負ても勝事あるをしつて面白き事をわすれず女郎買ハ藏簞笥をからにしても樂しミ厭たらず酒呑ハ欲徳も思わず身の損失も辨へず酒にひたされるを願ふ三ツ樂おもひ／＼なれとも前後に定



めかたし遊所にて客を粋野暮と云事あれとも是甲乙云かたし尤平生とハ人の元氣面もかわれとも別ニわけかたし云バヤボハ閒な金を仕ひ遣せらる粋ハ又義理張にからまりて金を遣ふ女郎買ハ・年増ニ金か入る事ミな粋が身を喰ふ故也よつて金のいる事ハ一ッに組て落る也おなし遊ひならスイニありたきものか遊君高尾か詞ニ

客衆の事をスイのヤボのとわけて云なんすが來いす客ハ慰にてかわりハありいせん女郎さんかたに好ふすきかありいすそして此里へきいす人ハミなヤボてありんすと云しとかや此語によりてミれハ皆客同士のせり合にて女郎に好きらい有事有緣不緣の事なるべしよつてスイヤボの事又わけかたきとせんか不斷の付合にて凢ハ斗りしるべし

　　人の野暮を云事なかれ
　　我粋をとく事なかれ

粋ぶすい惡しやれものと隔つれと
　落れハおなし色戀の淵

諺ニ水の流と人の行末ハしれぬと云國〻の諸人交代し生死もあなれハ誰か斗しる事あらし喩バ賤か女も氏なくて玉の輿に乗る事あれハ長者二代なしのときふ仕合にてハいや高き人の子も遊

女賈女になれるあり扨流の身に成てより一ッ郭ニ居てなみ入る客に身を任せ人の詠となりいづ地の誰を夫とも定ず暮し緣遠くして勤の年明れハきのふ迄しらぬむかし作りの人の妻ともなる有或ハ堅キ契約せし中も當り障りにて添に添れぬも有さもなく風與馴名染て連添ひ死なば一ともと河豚汁迄吸合ふ中ともなりぬ是水の流の果もしれ人の行末も見へたれとこれから先ハ其人ゝもしるまじ他ハ又なをしらじ

　凩の果ハ有けり海の音と言水の吟ハ
　名高く傳れと水の行末ハ未聞す

むかしよりいまたに人の見ださぬハ
　水の行衛と人の行すへ

諺ニ天道さま次第ト云時節を待心あるハちからに及ざる故打まかせて置る事ニ云譬ハ賤か子の二三歳にて獨リ大道川端などに遊ふを父母の止めても聞入す共まゝに遊びくるふハいとこゝろくるしきにおもへバ〳〵怪我もせすしかも丈夫に成長する事誠に天道にまかせたる也又遊女もいつ迄か公界をせん實情の客もあらハ取入て連添んと思ふ物から數多の客の中にハ眞に惚れるもあれど客か實に惚す又客が惚ても女郎の心に叶わぬ事あり相思戀と云ハ算へるほどなる故

當座一盛りにて放るゝ事多し是時節に合す緣なきと思ひとゞまる中には有德の客ありて女郎の氣も知らずして受出す事ある時は心に染ねとも自由にもならねば片思ひの客へも行ぬるまゝ末の程悒なし

付合＝十日ほど來ると受出す片思ひ

さのごとくなれは後に亂ッの發る事ありなんこれ共女の一存ッ榮耀にあるまし有緣ッ不緣ッにてとげぬ者ありよつて有緣のさそふ者あればそれか爲に千金の君を奪るゝ事もあらん共元亂レて末治らぬ敎もあれば人をうらみくゆるは愚の至り也これらも遊女に誠なしと云ふらしぬ天命をしらず無理非道にせんより愚智無智の天道樣次第は理の當途なりさりとて日用の勤家業を天にまかせ又人のすれはとて夫にまかせたるは骨おしミの名を取らん遊女などは共さづかりしを有緣と思ひ一夜妻の意を盡しふ足を云へからす安く見けなすべからず

天道にまかするも又事による

ぶセう氣長の人な思ひそ

諺＝形は產しか心は產ぬと云若人の他の人にはづれて身持あしきを母の悔るとて云り譬ば願ひもせねど賤の暮の據なく一人娘を遊女に賣り雇禿にも出す事あなりとかや

付合ニ一人娘に突出しの想
又　禿になつて取返す親

さのとく初ハ孝行にて身をしづめ其金にて高直の藥を求て父母の命をも助る事也とやかふ日を積月を重移安き人の心花ぞめ色のもめん夜具より純子縮緬の寐卷になりたく見樣見學に里染言葉の遣繰も覺へ發明器量のありたけ精出し終に公界の部や持ともなりぬ盛んにして客の折合し時左右へ僞りを云尤地色客色あれハ左右とも實情を傳る事あり是又兩方とも空言になれり差かゝる時ハかりても噓を云と古き契情の云イぬよつて女郎のうそハ思案の外なるべし馴染てハ日出たき髮を切彫物入黑子指を切てもいつわる人にハ僞るとぞ又眞に情を立る客にも詞にてハわからぬ故さのとく心中を立るなりト云

予か句ニ三十二想わけてやる指

浮氣のさたなから人に勝れて美しき顔形をも厭に心中を立んとて三十二想の中を一ッかきても五體ふ具にして產つかぬ疵者になれる事心より出る所うミの親もしるまじさりながら二親の心をうれ〳〵持て氣も形も取亂して拵し細工なれハ父母の淸血を受ざらんハなし心ハ座ぬと思ふ人よく思ひめくらして子の非を云事なかれ彫もの入すミハさなきに指を剪ハ浮氣の中の浮

氣とやいはん

十ヲの指九ッにする戀の闇
父母も浮氣て作し子なるや

諺ニ我慢ハ貧からト云賤き者ほど義理張に氣を遣ふて人よりも物事能したがるハむりにひゞけと人情也仝し聞へにて違ふものあり俗号て負おしミと云讐ハ生れも付ぬぶ人想をして猫の額ほどな顔も大面と云れ又銀喜せるハひしやげたるかよい物と皷立女郎買ハふられたが面白いなど云人に用ィられんと三十そこらで目鑑を掛或ハ六十過て見へわかぬ書物もめかねなしに見る風情外ゟ見てハいとおかし年寄の冷水と云にも當れりげにも色好まざる人の咄しハいとそう／＼しき事のミにてたま／＼他の色事咄を聞と半より己惚なとゝ惡推を廻し又ハあの様な女とけなすハ隣の疝氣を頭痛に病に似たり喩顔あしき女にても一ッ朝一夕に手ニ入る事むつかし我より高キ女美しき女の戀にハ入かたうして得安し身より賤女顔悪き女の戀にハ入安うして得かたし遊女の美しきハおもしろみうすきかた多しふ器量なるにハかならす手段ありて工ましき女少なからず悪女の深情ともいへば其深き情に染て奥行を味ふべしかゝる意味わかちもなく色事をこなすハ片はらいたしとやいはん女ゑらみするも色情にうとく戀にまつしき故起る色に貧なるゆ

へに云出せし我慢ならめ

　戀に入安き難きもわきまへす

　色事笑ふ情しらずめ

諺ニ一生ハ夢のごとしと云暮遲き春の日も明かぬる秋の夜も士ハ勤農ハ耕工ハ拵商ハ稼く中にも賣買ハ閙しき共隙の寸の間に錢湯へ行と云て遊所走り暫時なからうかれ女を呼んて樂しむ客こそ夢か夢見る心地ぞすらんかゝる夢中の戯事にも實情だにありなバおもしろく樂ミ遊ぶにかわる事あらし二階から落た様なる夢ハたれしも願ふものあらじ

　長い夢見て襲るゝ思ひなり

　たのしきものハうたゝ寐の夢

諺ニ七日捜て人を疑と云誠に愚なるものハ思ふ事多く物を姦勘違ひして諸事思ひ過して身て身を悲し獨五神をもみ詞を亂すもの遊里などにてまゝ見受おかしくも又きのどくに思ひぬ女郎も間違故とやかふいへとも聞わかず猗点違を云バあまりの事ニ嘆息無據麁末にも取扱るゝ事もあり皆ぶ間なる客の方より仕出す是も夢かれもゆめおなし事なら面しろおかしき方こそ願しけれ

姦ふて身て身をじらすおろかもの

相人になるハおのが魍魎

諺ニ天評棒ハ上へへ反と云すへての物有に相違セしをいへり譬ハ芝居好ハ役者より見る人が骨を折又素人に狂言をする上手か出來或ハ酒呑か禁酒するとはや生酔を笑ふなど娘が大はだぬいで義太夫節をかたれハ蔭間野郎か口をすぼめ端哥を唄ふ素人に提重の地極のと云賣物があれハ傾城に揚詰の箱入あり藝者のふんどしに封を付ル人があれバてれんの跡とり娘ハ定りの八人めハ店守にして男妾を持又鄙の小女郎も江戸の水ニ一月染ると役者の俳名家名を呼立ルる類いあるハ男傾城ト云者ありて年中喰にてくらす女のけいせいをたぶらかす是水ハさかさに流るゝとも云當世天地替と云事もこれを云めり夫おやぢをやぢをト云通をウツト云又めくらがめくりを打に書よまぬ目的かあり唖かみを書バ物言ぬ外寄あり堀出しをする目巧功者の素人がある故御先まつくらの黒徒か損ッをする弱女のとき若衆の輕業をすれハ女の力持ハ大八車を差上ける様の事あげて算へかたし寄ル商人に一哥ニ

乏貧に追付ほどの挊なし

天びんぼうハ上へそりてん

諺ニ鬼に鐵棒と云事似合て慎成をさして云いはゞ眉目艶しき婦人の心立ハ元より美敷好みのあやめも書針業つゞまやか成上に琴も三味線も彈哥學もあると聞し時又正直正路なる大丈夫の算筆ハ持前小料理もして重寶なるに大酒もせず男氣にて柔術も心得たるハ賴母數本文に對し侍らん又言分ンなき遊女の實情を盡したるも嬉しきものなれとも十人並の男の諸事に通して物和らかに色事仕にて金かありなば此うへもなく慥ニ侍らんか

三ッひやうし揃ふた人に眞實と

かねがありなハ鬼に鐵ほう

諺ニ一ッ寸ンの虫にも五歩の魂と云譬ハ一匁の藝者ニハ夫ほどの器量こんたんあり仲町土橋に遊ふ人櫓石場新ン地佃島其外の枝葉へ行子供藝者を安くするハ氣取違也其價ほとの仕かたもやう有又晝三にハそれほどの發明あり三ッ蒲團に遊ぶ人連の付合にて外の揚屋へ行新造買の節高ぶるハ非也かねて付合ハしりつゝも外にていひ種になるもの故思ひの外可愛らしく慰るものを客ハ强ひか見得の樣に覺へ新ン茶をくれろ或ハ足をもめト云ハ言葉拙ていやし其うへばからしいすきんせんと隣し人に云ふらさるゝ客まゝあり其心かけにてハ外の名染女郎との仕打も思ひやらるゝなれ是ヤボのはじまりぶすいの根也新造買の侘も又樂しきをしらず色をしても風雅

をしても情を思わず哀を辨ぬハあたら遊人の疵とやいはん夫米の飯ハ不斷也麥飯の味も又すてられじ上ミに居て下を思ざるハ愚なるとかや聞ヘァ、惜い哉

能を見てざつをこなすハ勘違ひ

あたら遊ひのむだにぞなりける

諺ニ椋樹子ハ三年磋ても白くならぬト云事すべて生れ付しハ愈らぬとて捨ぬさりなから山出しの婢も上水の漉水に朝夕さらし髪もはやりの風をまねもめんの惣もやうを青梅しまトかへ紅がら塗の細ィ櫛も柘植のミね高と磋上レハ□□□國から來たあらくれ男も手織の大縞布子をミちん棧留とはや衣かへしたるこそ黒ィものなら鼠色トハ成ぬ形振ハ見様見學になをれとも磋ても白くならぬハ片鄙の片訛生れついた癖態情ハ三年か十年ニもなをらぬとの譬也夫に引かへ都の遊士ハ遊の白徒を何かに付て黒徒になりたがるこそ聞へハ表裏なれとも同し望ミなり万事心にある事なをらぬ事ハあるまじあらたに諺を云ハ礳に追付曇なしと思ふべし

精ほと業も心も黒ひかり

朱にましハれハあかくもなる哉

諺ニ雪の翌日ハ私夫の穿鑿と云事。昔咄に曰ク雪のふりける夜亭主の留守なれハ幸に私夫を呼しと也翌日庭に人の足跡残れるをあやしミ家内の者ニとへとも盗賊のけもなし頓て心付かの足跡をおだ巻入らすにしたひ終に捜し當れりとかや夫ハむかしの事今時の私夫ハはやらせ給ふせはしき神佛の御めにハかゝるまし盗人の隙ハあれとも守人の隙ハないと云ごとく忍べ忍ぶと馴合ふてハ目明士の妻でも陰陽師の女房でもしれる事ハあらじさりながら悪事千里の譬もあれハ氣の智ぬものとかりにも作べからす强罪にもなるといへばつゝしみたしなむべきの第一也同し事にて遊所の蜜夫ハさのミに云ずされとも一夜妻の名あれハ一夜の妻を一夜盗ハ一性添ふ妻を折ふし盗む方ハまだしも割にしてハよき方にて罪も少なしといわん郭の蜜夫ハはでなる故其夜の主にしれ安ししれてハ男同士の生死にもかゝわる事ありて氣遣ハしけれど共こわいが命にて忍ひ隱れて來れハさすかに賁ものとも思われすおもしろき事たのしき事ハ別世界の又別にて夫婦別ありとやいわん色情の中にて極うれしきもの是にとゞむ梅ニ蜜夫する女ハ眉目よきかた多しうたがふらくハ己惚も中立すると思わるれ

さる婦人の云ける言葉に〇蜜通ハ罪といへ共かゝるたのしきをしらでくらすもあまりとや本意なく知恵かなし私夫にも過た罪をしても人しらず我又しらず殊ニ相對なれハ少ょ罪になるとも

なんのその厭ふ事なしと云ぬさりなから色情にうとき人初心ハわすれても好むへからす

はやりうたによりてものす哥

のほるほどあぶないかれ木人の妻

中途て下りて又のほりなバ

一客聞てあぶないと云ニ返し

さりなから人の女房にのる事ハ

舟に乗るほと浮雲ハなし

又罪になると云るまゝ

蜜通ハ相對なから罪といへど

鱣をさいて喰ふよりまし

諺ニ上手の手から水かもると云宜なる哉能水を游者ハ水に溺るゝト云されハこそ色を能する者ハ色にかならず身をうつ事多かりなん辨していはゞ野暮と思ふ人の直な道を行に粋とうたハるゝものゝ近道を抜て溝へ落しにひとしくへ夫もせうちく〳〵と常に溝のあるをしりつゝはいりしこそ浮めたる故也女郎もさのごとく馴染とはや我もの顔にして實情うすくなれバいつの間にやら

眞の色事を外ニこしらへたるもしらでばからしく思はれ取扱るゝ時ハ通り者の名も仕かたも野暮におとる事なれ是全くの慢心より仕出す事ならずや風をよく見定ず碇を卸と船か廻るともいへバ奥行をしらずして我から早く粋と鑽をおろすハヤボの部に落るといはんか粋又ハ物事にかけて上手と云れ器用と呼れ發明と思ハるゝ人こそ何かに付て心遣ひのたゆる事あらし諺にやぼなら斯ふした苦勞ハセましと云もこれにひとしく當れり

なまなかに粋といばるゝ身ぞつらき
　やぼてくらすぞ仕よかりける

金ほとれ遊んで損ッハあるまじき
　戀にくちなん名こそおしけれ

諺ニ魚心あれハ水心ありと云いはゞ浮氣勝なる妓も客の實情を以て乘鎭なハなど情に落入らん事あらじ浮れ女に乘て浮るゝ故穴へ落る也

予句ニうかれ女もうかれぬほとに買こなし

初ハともにうかれ後ニして情に引込實情を專にして辯舌手段あるハ兄弟思ひのさたなど共相人に合セて前後を見透す事ありこれを當世合鏡とも云不斷の浮氣よりいつる眞實故止事かたく情に

逢つけぬ故か思ひの外もろくしかも氣强くしておもしろく客に我まゝを云れて自由になる情ある人故心を盡して死ね死なふと云中にもなりぬうかれ女に情をあらせたく思バ客も情をたやす事なかれさのとくなる故不斷氣なしの客をハうかれ女の慰とおもふよつて踏ちかへると戀の淵へ落る人多し爰をもつて考うかゝふべし

　心して渡れハ越る丸木橋
　氣なしにふむと川へ丼

諺＝毒を喰バ皿迄と云濡ぬ先こそ露をも厭へとても女郎を買色事をするなら男の樣にぞ仕たきものなれ又遊人の閒言に富士の山を張拔ほどみか來たの今宵ハ鑓かふつても行ねバならぬとハおしきせの咥也同し事にていつどこにて金五拾兩ほど拾ひ嬉しさのまゝ走り來るとて又いづ地へか落したのト云ハ有そふにて與なしこれ眞らしい咥に似たり方圖もない己惚を云者あり或人の曰くかつて己惚云ぬ人慢心もなき人なりと云しこそ宜なる哉是全くの咥に似たるなれバ也遊所へ行てハ己惚云ぬ客更になしとて。妓の云し事あり。一月の中しらぬ客に二三十人ハ晝夜を掛て付合とも何れも己惚身上り見得を云ぬ者なしかく大きくうぬぼれを云客こそ己惚なき人なりとて床しく云けるハ又床しぞ思ひぬ夫女郎の情を盡し可愛かりし事を咄せバ人としてうぬぼ

れと云ハ非也相縁ッ奇縁ッにて惚たり嬉しかるハ平生の友とちにもあり其中にも悪ル情はり片意地我慢ものゝ我理なる事を先にして老人をもおしのけ理の當至に向て己か恩恵の愚をも一すいに理と思ふ者少なからすこれらこそ眞のうぬぼれとやいはん日に三ッ度我身をかへりミる者ハたゞ人の噂悪事を云より己か身のおかしき事を云て遊ふぞおもしろき人と云べし尤咥らしい咥ハ云へ眞らしい咥ハ云なとも云傳ふれハ己惚の咄も少サくハいらぬもの也くら闇に縄を付しごく云なバおかしき事もあるべし是も相人所からに寄ルミだりに吐ちらす事ちつとも好まぬ咄しなれ

戀病ハ眞らしくて興もなし
　焦れ死なら咥らしいうそ

諺ニ人を遣ふではなくて人に仕るゝと云調市子供に禮せんとすれバ却而氣か遣るゝなどをいへり女郎買にも又氣なし者ハおもしろき事をしらじ女郎に氣を遣ねハ女郎も氣を遣すいつも他人の交りなれハ打とける事なく客のミきわき或ハ女郎どしありし色情を呼きはなれ／＼に遊ぶ故遊ニ行女郎に遊るゝ客多し遊ひに行て女郎を遊バせ身も遊ハゞもやうかわりて樂しく終にハ女郎を買てハなくて女郎に買るゝ事ありなんされハ社女郎に遊ぶあり客に公界あり有徳の金／＼

客ハ此辨を笑らひやせんか中以下の金持ハさのとく遊ぶを手柄の様に云はべる元より女郎の物を取て遊ふにあらず何云ずとも買るゝ客ハ有がたきものなれとても及さる故笑ふ人ハしるまじ女郎に買るゝほどに遊ふハ極おもしろく樂しき事不斜覺にき

女郎買の女郎に買れて遊ぶのハ
恥も手からも捨てたのしき

諺ニ蓼喰虫も好〳〵と云諸むしの好所住食何レ算ふるにいとまあらじむかしゟ人間をさして裸虫と云又米を喰ふ虫ともいへり其好ム事諸職諸藝其各別あり女郎買も業の一ッなれバ客姉の好もの有中年增を好ムあれハ新造を好クあり太肉を悦ぶ有痩たるを能がるあり中に年を喰つた女郎が唾を吐ハ其手ハ喰ぬ客あり遊ひ過して物日の仕廻を喰ふ客あれハ床の度數をくらひ寐轉しをくろふ新造あり市中で辻君の喰逃にあへバ風をくらつてなくなる客あり大家に喰つぶしあれハ痩脚をかぢる掛人とあり手習にぶ情な子供ハ其師の棒をくらひ小兒の泣むしにハ赤だんこを喰セてそだて寺に住大黑と云ものを天窓のくろい虫かなめる事ありと聞ハ虫の付た女郎あり脣を喰つかるゝ客あれバ喰隱しをする名代女郎あり白髪をぬきつゝ勤る女郎あり杖突て色狂ひす客あり目かねをかけて芝居を見るも人〻の好〳〵也人に喰つてかゝるいかつを止氣で氣を喰ふ

ぞおとなしけれ

わるひ火をくふて越度なればとて

よそへかづけな米をくふむし

好むとも身にあはぬ事願ふなよ

氣て氣をくつて通れ人中

諺ニ泥を打テハ顔へはねると云どろぼうをとらへて見れば我子なりと云とく子の悪きハ親のわるき也勘當するほとの事さするハ親の悪き故ならずや子を見る事父母にしかすとあれとも又父教されハ其子愚也と云本文見へたり尤堪忍五兩ト云譬あれば

付合ニ五兩につもり幾度勘當

さあれハ子も悪るきと云んか又女房の我まゝを夫の呵るハ呵者の恥といわん嫁に當りの悪き姑より悪く當らるゝ娵のわるいなり又遊所にて客の情悪をうらみそしるハ外へ見かへられし女郎の恥也遊人も女郎を悪むとてよく寐ぬの面白くない手くだなしのと雷同ハ鎮て遊ひ得ぬ其客の恥ならめ又裏に呼ぬハ女郎の恥三ツ會を行ぬハ客の恥といふ片ひいきして非を理にするハ云るゝ者より云者のはぢ也すべて人の不禮などをとがめそしるハ不禮をされしもの〻恥とやいわん

か木の枝を震へハ雫ハ身にかゝると云にてしるべし
なぞらへし哥寄ニル俳諧付合ニ
むつかしと前句を云ッハ云人の
付句にあぐむ愚智と聞ゆれ

跋

一日轉寐せしに塵塚の生ひとつ農神と現したると夢見て色交合の奥儀を得たり最面しろく侍るまゝ後に忘れん事を恐ておもひ出る隨意書付見れハ樂しき小冊となりぬ其章嘘より出し寔にもあらず誠より出し僞にもあらずその虚實の眞中を解たる也元より梓にちりばめんともあらねば其儘にして置るを書林拾ひ見てたまへ櫻木に寫さむと云藏して埋木にせんもせんなくされまて跋してくれんと其談をありのまゝに示しぬ手跡のあしきは見赦し給へ他に書するハうるさしとの文にすがりておくせず書してあたへはべる事になりぬ雪月花と三巻の句章の中をとつ

て華の巻をはしめとせんとてさくら木に寫し色に戯狂す
百千の人の笑らひを希ふものならし

虹洒亭におゐて
梦成自書

傾城諺種巻ノ終

○目録　板元　江戸堀江町四丁目　多田屋利兵衛

廓乃大帳（くるわだいちやう）全一冊　山東京傳著
まつさきの家だんまり子屋の世界をとり組ちよつとひやかし幕のうちさ也あり

婦美車紫鹿（ふみぐるまむらさきのこ）全　再刊
諸所色里の風俗言守方をもれず絲乖かきわれど品川の穴をさゞす

廓中奇譚（くわくちうきだん）全　再刊
全盛の君がまことゝ過君の情をまじへてうちんふつゝか絲と云たとへに同じ

再刊 辰巳之園 全

深川のさハぎを天井へあげき甚閨中のこんこんにハ氣もつのやかをとそれ

洞房妓談 繁千話

山東京傳著

しげしげ世話にあきらくし當世ひいてぬきのうがちあつまりがりきいさふらうのあそびの正うつしあり

遊子方言 全

田舍老人著

いづれも名高きそんしよまりこ通書れそんしまりこ

多地の綿売 全

蓬莱山人著

これも行まさ茂さうめなそんしの書あり

南閨雜話（なんけいざつわ）　全
夢中山人著

日本橋より品川へ二里ある旅
十八丁大門口京目黒場より此
外引とする宿のうがちなり

かよふ神の講釋（かよふかみのこうしやく）　全
通野意氣著

女郎ハ容儀あやなさず客ハ
やくそくせる遠ぬぞ色秘也
此色男正直のかゞみなり

格子戯語（かうしけご）　全
振鷺亭著

先生夫子此家語に做し
てあそりの家語并して
やぼ子やころぬ唐人のねごと

自惚鏡（うぬぼれかゞみ）　全
振鷺亭著

そもしく此本一度見る好者ハ
ゑつとまるくなるとなく章

記原情語（きげんぎやうご）　全

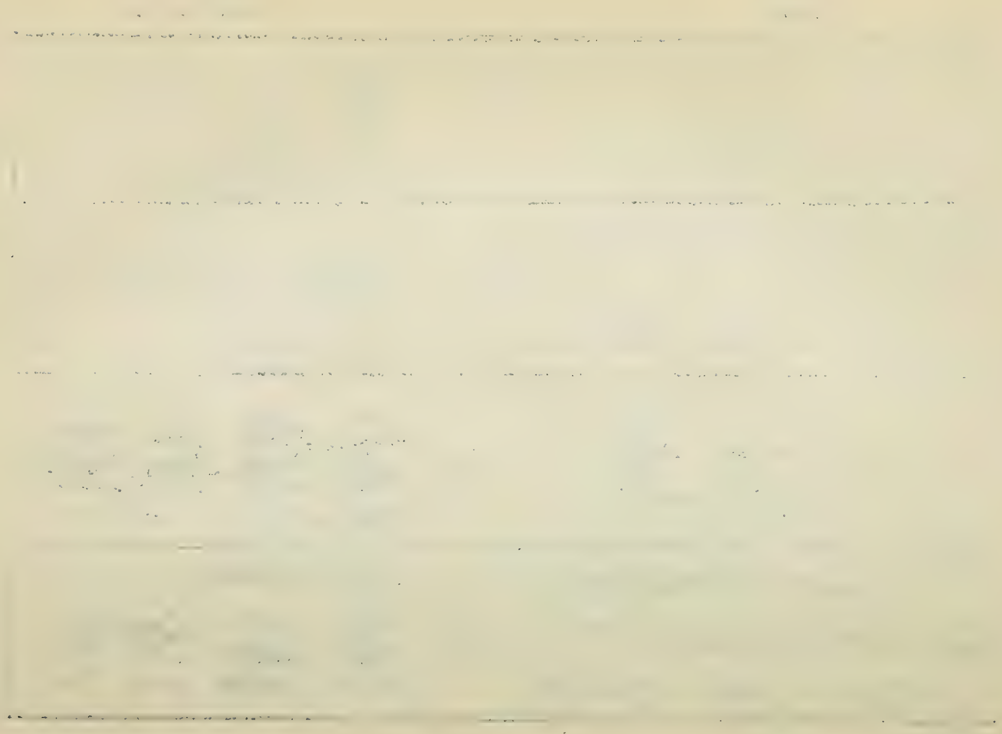
蓬萊通人著

あまねく女郎と客のいき
ぢおもむきを争ふなる言論
女郎買をなしなり

傾城諺種（けいせいことわざぐさ）　全

新板

娼妓編叢



娼妓絹籭

[illegible]

西江月

莫戀歌樓妓館。休貪美色嬌聲。分明是箇陷人坑。可嘆愚人不省。樂處易生愁怨。笑中眞有刀兵。等間失脚入他門。便是蝦蟆落井。

柳浪館主人

手段逼物娼妓絹籭自序

烟花を將棊の局面に設。娼妓の駒下踏の往來を觀に。茶店に客を持棊子あり。籬で私夫に間棊子あり。大通直して飛車先の如く。素痴曲て角道に以たり。初會の席上に初王手あり。馴染の閨中に入王あり。色は金銀に有て忠案になし。堅心の石田も崩れ。櫓に圍とも忽破る可恐。巧計のために都逼とならんことを。桂馬ハ誇て歩兵の餌となり。香車の慮なきハ謬白。或ハ飛車手王手の義理に纒られ。或は後王手の借金に苦。手のなき時ハ端の歩をつく〲苦にする茶店の借。臨期で二歩をつかひ。留主をつかふといへども。借金乞の爲に逃道を失ひ。遂に雪隱

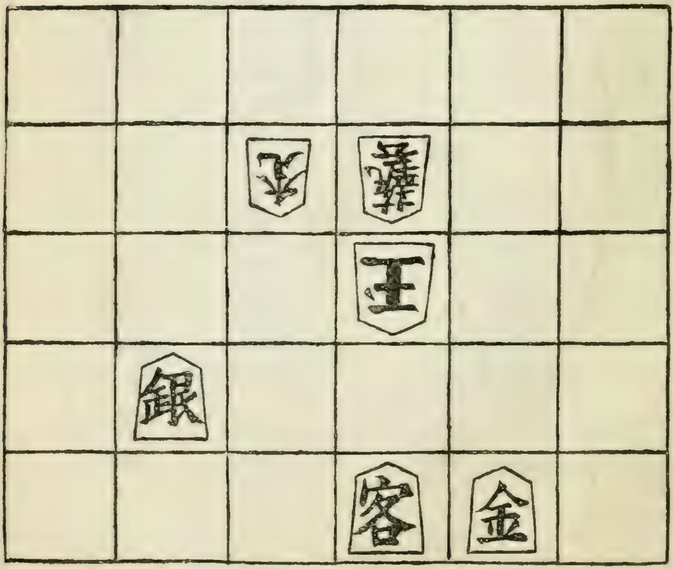
逼と成あり。嫖客と將棊圍ハ一手先はこへざるべし。則娼妓絹籭を作る。予がへぼ象戲の及ざる所は。段將棊の助言を乞而已。

于時寛政三年辛亥解凍日題於菊花亭

山東京傳

客はしごを二だん上る女郎てうづのかほにてよこにゆく藝車を一まいうつ女郎二けんめのざしきへにけるひらいて大手をとる又一ッけんにげるあたまから銀とうつ女郎ふそくにおもひとらずにわきへよる又金と打女郎がそこで死ぬ

右　惣傾城



目録

第一回
義理と情の二タ道にれ間棊子もならぬ梅川が飛車手王手
第二回
つかひはたして二歩殘る龜屋忠兵衛れ歩三ンびやうでも
つまらぬ身の上
第三回
金銀をつかふ客にもかまれず横にゆくれ女郎の實と卵の
角道

手段詰物娼妓絹籭

山東京傳著

○第一回

義理と情の二タ道にハ間棊子もならぬ梅川が飛車手王手

□沙糖屋の丁兒甘きをきらひ鰻鱺屋の猫兒苾をこのます李白一斗詩百篇といはれし底ぬけも劒菱で居風呂をたてゝ三日ばかり入ておいたらまつひら御免といふハしれた事花の下にて死たひといふた西行も飛鳥山に居つゞけをさせたらバかならず欠伸をするなるべしされバ久米仙人も女湯の番人にしたら素脛に通をもうしなふまじく弓削某とても女護島へながしたらたちまちおいとま申べしどれほどに美麗ても朝夕眼前にぶらついて居てハこのましからす女郎買も命から一番目の大切な金銀を出し其くせゆきにくきところを都合と工面で饅茹にした首尾をもとめ主親の四ツの眼をはじめとして人目をしのびて通へばこそおもしろくもあつたもの一升買の

足るをしらず心のまゝに樽酒のたのしミせんと女郎の胯ぐらに家藏をうちこんで贖身をし渾家にしたところが三日もたゝず鼻につくハ世間にいくらもあるかたなり雙が岡のしれものが花ハさかりに月ハくまなきをのミ見るものかハといひしもまことに如在なき法師也こゝをもつて推バ女色の迷ひもはれねべし嗚呼さうじやとひとり悟顏に口ひろきをハいふものゝ捨がたきハとかく此まよひの一ッにて上ハ一人よりして下モハ萬人講の講頭兎の毛のポツトセの髱に天午で出やうといふ耆夫さへもむかしおもへば信田の森のうらの朽家でちよろまかした徒にてかの川柳が選に母の名は親父の腕にしなびて居とハ頗穿なりわつちやこういふかなしいことがおさんすと酸鼻バ酒呑童子と腕をしもしかねまじき丈夫の涅槃像の二王ミるやうに己に似あはずうちしほれてともに涙をこぼすをミれば實に女色ハ斷骨の斧迷心の毒にきハまりたり佛祖三經に浮屠子の曰愛欲ハ色よりはなハだしきハなしと宋の景之元が美色のために命を沒するをもつてミれバ忠に死を甚輕しとかたく出かけしも理なり賢を賢として色にかへよとハ則此場所ぞかし又媚ハ比封狐機ハ深穽虎などゝ明人もいふて置れバ女郎に身を謬と中華の人情もたがふことなく夏の溫石と女郎の心ハつめたいがちのものなれハいづれゆだんハなるべからず共又戀といふ川上をたづぬれバ僅方寸にたらざる節穴なれどむかしから此穴へ國を陷

城をおとし家をおとし身をおとす者倭漢にかぞへつくしかたく周室を陷したる褒姒が穽も波錢一ほんおとしたる鳥焼川岸の穽もついに塡たうハさをきかす清の曼翁が碧海の迷津じやといふたもうそハなしむかし混沌未分のとき耳か鼻からか子をうませ社稷宗廟をつかせこんな節穴をバあけぬ相談にきハめたらこふいふ惑ひもあるまいもの何につけても邪魔な蚤口　怖の風ぬき穴あやしむべくおそるべきの妖洞なり○爰にむかし大坂新町の廓ちかきにいと閑なる所あり世を捨人のかくれ笠地名を箕輪とよびなれしも簑にとなえの通ずれバぬれのちかきにあるゆへならん箕輪の寮とて人もしりあたりに目だちし一トかまへハ新町の女郎屋槌屋治右衞門が別業なり抱の女郎梅川といふおいらんぶら〳〵と煩ひければ保養のためにハしづかなる此別荘がしかるべしと番頭新造の梅春も看病のためもろともにしバらくこゝに遷居るころしも秋の露さむく菊ハたばこにむしられて尾花ハ炭の俵につくられ庭の草木もうつろひていとほそく啼すゞ虫の音をきくにさへ苦海の身ハ夜ミせしらする鈴の音かと耳おどろかすも理なり折からそぼふる霧しぐれ遠寺の鐘の音もしめりいとゞあハれの秉燭ごろむめ川ハかの福清がいつしにひとしく幽靈の濱かぜにあふたるやうにおとろへて臥具に其身をもたれゐるそバにハ新ざうむめ春が氣をなぐさめの本よミさし。モシおゐらんのとこへ心もちハどうでおざんすへ。アイけふハい

つそようおざんす。ヲヽそれでハモウだん／＼とよくおなん／＼すでおさりいしやう風のあたらぬやうになさりんしドレ薬をあたゝめて上申ッしやうと尻輕にとし下なれど姉とよぶおいらん大じの心根ハ妹女郎のかゞミなり梅川ハ涙ぐミ。ホンニ何から何まで心づけしんミもをよハぬぬしの介抱死でもワすれハいたしんせんにへ。なんのマアばからしふおざりいす灸すへの文句のとをり世話になるのをあねといひ憂をかたるを妹と名をよびかはすながれの身ハせハになつたり又したり互の𪜈でおざりんすものそんな𪜈に心づかひをなさりんすなサアくすりをおあがんなんしへと薬ぢやわんをさし出せバむめ川ハ手にうけて。それにつけても苦勞になるは忠兵衛さんの事でおざんす。ヲヽそれもくらうになさりいすなおまへさんの病氣さへよくなれバワたしがどふとも都合してかけもすまして上申內證の手まへもとりつくろひ二階のあくやうにして上ヶ申ッす縁といふものハあぢなもの忠兵衛さんの初に來なんしたハ去〻年の三月さくらの初日でおざんしたね。アイぬしハよくおほへて御いでなんす。アイサワたくしハ其時の𪜈わすれハいたしいせんしかも其晩忠兵衛さんの形ハ羽織も小袖も黒八丈。ヲヽそれ／＼下着ハ對いの結城縞。もちものや何やかやもいつそ意氣でおざんした。わたしも其晩まんざらでないと思ひッしたから床へもはやくゆきなんぞいひたいとおもつてもモシヘほれた男にやもの

ゝいひにくひものでおざんすねへ。それハたれしもさうでおざんす其夜ハしかもワたくしが次の間に寐てゐんしてよく聞ておりんした忠兵衛さんのいひなんすニハ梅さん初から此やうなことといふでもねへが此間中からお前を仕廻によこしても御全盛といふものでついによいばんがなく初名代て來るも何か己ぼれらしいからじれつたく思てゐやしたが今夜かうしてお目にかゝるといふハわつちやァ夢かとおもひやすトまづをつな手を出しなんした。ホンニ忠兵へさんの癖がいつそぬしハ上手だよそれからワたしがかういゝしたわたしらがやうなはかない女郎でもャア虚にもそんなことをいつておくんなんすハうれしふおざんすとよくいふものでおざりゐすがワたしやァうれしくおざんせんまんざらでないと思ふ心からひよつとさうおつせへすをほんにしてとやかうおもひしてもこれぎりて御出なんせんときハ大たいつそじやおざんせんにへそれよりハやつぱり正直にをれハわきに馴染があるが今夜ハそこがわるいゆへしやうとなく夜をあかすまでに來たのだからかならずとやかうおもふてもむだゞほどに思ひきれといつておくんなんすがワたくしハうれしふおざんすトワたしが申ンしたァイサそれから又忠兵衛さんかいひなんすにハフゥおめへはむごひことをいふものだ此ごろうら茶屋からたび〳〵聞によこした事もてへげへしつてもゐるだらうにそれをわきへこかしてそんなとをいふのハフゥきこへた

思ひきれといふなぞだらうこがれ死をするまでもさういはれてハ是非がねへと一ッすねなんした。ホンニさうでおざんしたそれからワたしも面白なつて來てヲヤじれつてへとうしやうのうさう思ひんすくらゐならこんなに氣ハもミんせん何をいふのも。フゥ初會だといふのかこつちハ久しくとやかうとおもつて居た心からハ初の裏のと思ひハしねへしたがこつちばかりさう思つてこんないやらしい事いふもつもられる所がはづかしいモゥ何もいひやすめへ。トあちらむいて寢なんしたゆへやう〳〵あやまつてこつちをむかせモシマア聞ておくんなんしおまへさんも人にしられたお方なれバ今までお近付でこそなけれ茶屋でもたび〳〵御見かけ申とうからしつておりんすもの初會の心しやおざんせんおまへさんさへほんに來ておくんなんすならワたしやかくごをしてよびとげ申心でおさんす。ハテおれもさうなれバ浮氣をのけて眞ンの事。ツリヤほんにかへ。ヲヽしれた事こんなうつくしいしやつつらをなんの持すともいゝとにこんなにをれを迷ハせる。煙管でたゝくまねをしなんしたはづかしいが共ときハ眞にうれしくおもひんしたそれがやつはり悪縁でおざんしたとほれた男ハ噂にしてもふさぐが女郎のならいにて梅川ハ梅春とかけ合の此はなしにのりが來てすぎこしかたを思ひ出し我身にかゝる夜具を出ればば梅春ハそばから氣をつけ引かくるほどなく四ッの鐘なれば氣くたびれてか梅川ハ共まゝそこ

にすや〳〵と寢いりつけバむめはるが夜具かいつくろい屛風ひきよせ見かけてをきし淨瑠璃本一枚あくれば秋のかぜ障子のひまより方燈の火をさつとふきけす折から封墻のあたりと思れて迷子の〳〵の久太郎ヤイト、トンチヤン〳〵庇へをとす雨の音サラ〳〵〳〵

第二回

つかひはたして二歩のこる龜屋忠兵衞ハ歩三ン兵でもつまらぬ身の上

□潮光也浪速の色をせきとめて黄金でかけし木攏ハながれの里の浮しづミ贖身あれバ梳籠あり日に新にして日〻にあらたなる町の夜ミせのにぎはひは 雨かれにてひきたつるよミせのすがゝき チヤンラ〳〵ゴ シ〳〵〳〵【地まハり】 さいもん小ぐり清水のだん へいたハしやてるての姬とある所へ立よりて口說どこそあハれなりづれレン〳〵○いめへましい下踏のはなをゝふんぎつたコレ鐵やこれから西川岸をそゝるべえきを付ろまがりつとにミづッたまりがあるぜへまだかハきやァしめへ【かぶろ】 かうしへかほをおつつけ 山本屋エイ人ゥ〳〵 となたにへすけんの往 【里町】 かうしをのぞ見 コゥ見さつせへァノ如意輪觀音が箔しろのこんりうに出たといふ身でほうづへをして居る女郎ハ扇風か一度かつて揮られた女郎だ【花曉】 フゥなんたかひつてんらしい女郎だのう茶づけ店のならづけといふうすひ櫛に水膠をミるやうな笄をさし

てゐるぜへふめねへあたまだコゥあけぼのへけきざしも一しよにあづけてくりやァよかつたのうこうせへしやまになると（からしの下にねてゐる犬尾をふまれて）へきやん〳〵【花】おきやァがれとんだ氣のきかねへ犬た【里】犬をふんだも今道心しやァねへか【花】わりい〳〵【里】こつちらの初だけのさひといふ色の着ものをきて何かふさいで居る女郎ハにげそくなつて判人の所へさがつたといふつらだ【花】うさァねへァレあくびをすらァ大キな口だぜ【里】かけ硯にもたれかゝつてゐる女郎ハ素人繪の濱むら屋だ（ト花曉ハはやとなりのかうしをのぞいてゐるともしらずやつはりそはにいるとおもひむしやうにしやれる）こつちらの再興めへの二王の腕といふ色の着ものをきてゐるしんハ茄子のさしミをこせへるとつて鍋のふたでおつべしたといふつらたのう（トいへどもあいさつなきゆへふりむいてこれハしらぬ人）ホイこいつァ大わらひた（トゆきすぐる）□（自註ニ日此里丁花曉ハいつれも助六かまたくらをくゝらふといふともからなりこれを唐音にて間走といふ長崎丸山にて手ふりといふ賓はすてをふつてゐるとるゆへ素手振といふあやまりなるよし往古吉原にてハとりんほうと云今ハ素見といふそこで女郎ハすかんといふか○抄此むかふより來る二人の容ハやかたものと見へ）【侍客】見なへどれもうつくしいものでござるの【今一人】なるほどきれいなものじやこう見た所ハ御年始に奥へ出たやうてござる【客】いかさまァノまん中に柏の定紋を付てをる女郎ハよい器量でハござらぬか金田氏の內室に少しにてをる【客】なるほどイヤこちらの黒い衣裳もよくこさる【客】モノ是ハ何屋といふのじや【茶屋男】（つきそのうちからかんはんてうちんをさけてあとの方ニゐたるか）ハイこれハ此新町で一二をあらそふ槌屋と申のでこさりますなんならこゝにおきめなされませさうこ

ういたすうちそろ〳〵よい女郎衆ハあかります【客】イヤもそつと他を見物いたさうト こいつへはなへたきか多しまたすがゝきのおと チヤンラ〳〵 かゝる折しも表のかたそりやけんくへよと立さへくかのむめ川とふかきなしミの龜屋忠兵衛地まハりにけんくわをしかけられたるなり【忠兵衛】むなぐらを取れた手をとつて コリヤアとふするのた トふりはなす【きをい定】あんまりうぬかつらか大きいから此定さまかむしかかつてんしねへハへ【同鉄】うぬかやうな野郎が此土地へへへりこまるからおいらが格子へ立てもすのこんにやくのとやかましい崑崙兒の灸点をミるやうに白イつらをはりまげてやるへへむねつくそのワるい猿唐人しやァねへか【定】へたに齒箱をならしやァかると こうたそ ト大黒のつらへ白毫を入たやらにしゞちうのひやうをうつたくろぬりの丸けたをぬいてふりあくる【忠】其手たしつかとゝりて コリヤアわいらァだれにかたのまれたなァ 〽コロリンシヤン。たそや此夜中にさいたる門をたゝくれたゝくともよもあけじ霄のやくそくなければ トむかふの二かいの琴きこゆる。又【鉄】すきをミて【忠】にふつてかゝる【忠】しつんで身をひねる【鉄】はづミにて天水桶へころひかゝるすかさす【定】又ふつてかゝる【忠】ひらいてよこにはらふ【定】よろ〳〵としてとふへかたあしふミこむ【琴】〽七尺の屏風もおとらバなとか越さらん【定】【鉄】雨ほうより一どにむなぐらをむづとゝる 琴〽羅綾のたもともひかバなとかきれさらん 所へ人〳〵出やい引わくるてうと二かいの琴きれる ○扨此いちやの樓上にハおもてざしきのおいらんむめ川きやく人あつてもはやほん間にとこおさまつてゐる次の間にハ番頭新さうむめ春しかミ火ばちへどひんをかけワろ紙てあをいている 【梅春】しれつてへ火たのうなぜおこらねへのう ト折から廊下にて新造【浮浪】ほんにかへはりさけすね ト何かいひながらかけて此ざしきへ來り むめはるさんへ御つきのものをおあんなんしたか【梅】ウ、おかたじけのちに喰ふと思つてしまつておいたよきやく人わおめへとうした【浮】あいサ聞ておくんなん

しへにくくつてなりヒせんあれからとう〳〵かけたして參りした茶屋からも人をよこしいしたけれともワたくしやァかまいせんひさしいもんでおさりいさァな【梅】おめへもほんにあれほどほれられたかつているものをモゥちつとほれてやれハいゝ【浮】おめへさんさうおつせへすけれ共ワたくしだつてもそねへにやァほれられんせんものを（此さしきのふりしん）【さよ舟】あの人さんもばからしいよくおかけ出しなんすねへ【浮】ホンニいつでもせハをやかせる客人でおざりイすよ（トいひながら長もちのふちをなでゝゐる）【梅】コレ戀路や今いひ付たとをきり〳〵しねへか何をしてゐるのだ【禿】アイ今こゝに【梅】久しいもんだ早くいかねへか（トいふ折ふし本ン間のびやうぶのうちにて手をたゝく）【梅】アレよばつしやるマァあすこへゆきや【禿】アイト（此用をたすらうかにふりしんのこえで）浮なミさん〳〵ちよつとお出なんしツサおいらんでサ【浮】アイ今參りイしやう（トたつ所へ來ろきやく下着のまゝおびたじだらくにむすび今とこから出たといふなりふところ手してはいり口から）【柳嫖】浮なミさんでへぶそれ〳〵するの格子へ地いろでもきたか【浮】よしておくんなんしわたくしらァ色と土用干ハついにしたとがおつせんいろといふものハどんなものだへとこの井戸からわきんすねへ【柳】井戸からハわかねへがへその下からワく虫よこいつにひよつとたかられると女郎衆もしめへだまつ二朱壹歩の小金から喰ひはじめて櫛笄から着物をくひそれから髪をくひきり小指をくひたん〳〵臓腑へくひこんでいろ〳〵な氣をださせとう〳〵命をとりおハん

ぬなんぼうおそろしき物がたりにて候さこれをなづけて死し心中の虫といふはなこいつをよけるにやァ鍋屋のうは氣うせぐすりといふがあるおめへがたもちつと用心にしめなせへ【梅】ぬしも女郎衆にほれられなんすから其虫の部だね【柳】おきやァがれ【そな】ヲホヽヽヽヽトわらふ【浮】たんとおしやべんなんしト出てゆく【梅】ぬしやァなぜそねへに廊下鳶をしなんすへ色でもできなんしたかへ今おつせへした虫にだもなるきかへ【柳】爰の二階ひろしといへど【梅】ぬしたちの相手になるやうな手のある女郎衆はねへといひなんすのかへ【柳】あるといふとさマァ茶ァ一ツくんねへ【梅】ぬしやァ口果報があんなんすよ今丁ど茶を入ヒした【柳】くふものなら口がほうだがこりやァ呑ものだから咽がほうだ【梅】わりいしやれだねコレ小夜舟さんついであげ申シな【舟】アイト火鉢のかげにあつたちやわんをとり中にはいつてゐたしいのミのからをあんどうのだいへすてちやをついで出す【柳】こいつァいヽ茶だコウそこの紙につヽんだ物はなんだトあけてこれは火ばちの灰のかたまりをひろい出しておいたの おきやァがれおらァ又豆こりんかと思つた【舟】わらひながら きついげびざうなこつたねトいふ所へかぶろ来り【禿】山本屋じやァ十二せんのはきれたと申シィすからわきてとつて參りしたトのり入六まいつぎのまきかミを出す【梅】馬鹿らしいこの子ァ柳嫖さんだからいヽけどもあんまりゑんりよがねへぞよちつときをつけや【柳】きをつけすともいヽぞよやつぱりこんだからおいらんノ客人のめへでもかまはす簪は二百はかしィ

せんなまつげのかう〱れたつた二ッ〃うつてよこしいせんと正直にいやョ【梅】馬鹿らしふ
おざりいすれなおぶしやれなんすなわたくしらァそんなげびれしいせん【柳】それでもいろ男
の所へさつまいものむしんをいつてやつたさうだ【梅】うそうおつきなんしだがさうまうしい
したトいふ所へきたるへやもち女郎たの袖で口をかくし右の手にミすかみをもちそへてつまをとるなりハ柒のいたじめのむくにひれちやちりめんのしごきべちやァねへすきざいしきのにしきゑといふゐしやうづけかたあたりを一ッふるわせる【ませが
き】ヲヽつめてへヲャ柳嫖さんでへぶましておざんすねト火ばちのそハへつくばひしだおやきそのわりいたれぞ
すれつておりイしたかへ【梅】なぜへ【ませ】いつそたゝミがあつたけへよトつめで二ッ三ッはじいてすれる【柳】ま
せがきさんかういつちやァそれ鏡らしいがごうせへにされるだせそしてあいけうがこぼれるや
うだかならずそこらへこぼしてくんなさんなひよつとふんづけると氣がもめらァおめへの紋れ
おつなもんだの枝巴かきついものをゑだつきにしたの雷の鉢植じやァあるめへしゑだがしへゑだききやうなどに
ならひてあやまりてまゝゑだたかのはゑたきつこうゑだ七ほうなゝを紋に付るなりこゝが色生の情なるべし【柳】むくのすそもやうもこいつァあんしたあやすきに二
葉葵かべちやァねへ芝居の木戸が蓮池へ身をなげたといふもやうだ【ませ】そんなにわる口を
おつせへすとくりァしんすにへトはこいたのちやほうじをふり上る【柳】コゥあやまつたおりよヲベ野郎のまりだと
思ふさうだおつとまちげへ羽根だとおもふさうだ【梅】ヲホヽヽヽトたばこをすい付て出シぬしやァ今夜
れ誰さんだへ松さんかへ【ませ】いゝへ何此ぢうの松屋からまいりしたうらさ【梅】色おとこ

じやァねへかへ【ませ】後生でおざりィす甘露梅のすくなつたといふいゐのぢいさんでおざりィすよ【柳】イヤごうせいにむつかしくたとへるぜ晦日ばきの鼠いらすじやァあるめへしコウトもちつとなんぞわるくいひてへもんだ トそこらをミまハし 梅さん此びやうぶの虎ハ女郎衆の座しきにやア目出たくねへぜ【梅】なぜへそれでもとらハ千里もちつとのうちにあるくと申ンすから待人がさう早く來るとよふおざんす【柳】それはさうだが又千里もどるといふからわりい【梅】あんまりかへらねへとうちをしくじりんすハ【柳】なるほどこいつァさうだのしたが此虎のつくばつてかたをいからして居る所ハなんの事ハねへたばこやの賃粉切といふ身だ 此むだへけいせいにハおちぬゆへだれもわらハず 梅さん笄をちつとかしな【梅】ぬいてかす【柳】おめへもいゝ年をして酒中花をからミつけてをくこともねへおとなげねへ トミヽのあかを取【梅】馬鹿らしひまだとしがいきませんは【柳】としがいかねへも氣がつゐへおめへとして三ンど斗琉球人にあふだらう【梅】どうしんしたとへ ト二もあまりおちがこず【柳】これさませがきさんされんなさんな耳があぶねへ ト此うちあんどうのわきにふりしんさよ舟いねむつてゐる【柳】ミねへ小夜舟さんがはじめたッレごろうじろ釜ひつくりかへつてたことかハる傘ひつくりかへつて介六とかハる八文〳〵【ませ】【梅】ヲホヽヽヽヽヽ【舟】此こへでめをさまし目をこする【柳】さよ舟さんどうだ氣がついたか トいふところへ朝〳〵とり上られるしきせのふり袖をきたしんざう【初雁】らうかをかけて來て モシへ柳嫖さんにばながてきたから

おいらんがきておまんまをおあんなんしッサヲ、せつねへ　トためいきをつく　「柳」がうせへに鼻息のあらひ子だぜ箱屋のうちへハおかれねへなんぞうめへものがあるか「初」いけへとおざんす「柳」先へいきねへ今いかふ「初」サア早く御出なんしぞしてね百代さんがね此みをごらうじいしと　サトしんぞうの名とミへわるかミへ書たあく筆の名をいだすこれ夜々せのたいくつのまゝのわざくれせ　「柳」とつてひらいてミて　フゥなんだ○一寸巾上りくりうひやうづらにこんやハよくきたなぜ御やくそくのまげいはへのきれをもつてこねへにくいやつだ御うらミにぞんじりく○ぶしやれな文句だサアよめねへ沈金ぼりの唐草をミるやうな字のみだ「初」マアあつちへいつておよミなんし　トむりに引ずつてゆく。此きやくべしてほれられるきもなく又きいたふうのともがらにもあらずたゞむだ口をきいて二かいぢうで心やすだてをされ所々のざしきへあそびにゆくをたのしミに来るきやくなり此風の客まゝあるものなり　「ませ」柳嫖さんのむだかおかしくつてあすびすぎんしたまいりしやう「梅」モゥ一ッぷくおあんなんしな「まさこ」又いつて参りしやう　ト出てゆくあとにハ　「梅」さよ舟さん硯箱を出してくんな　トみた苦か、ろ折からひけ四ツのひやうし木をこつらうかにて　「かぶろまハし」子ども楽寝なさへよくく　トニかいぢうふれる○これなかゐのやくにてかぶろ一しきのせへをやくこれをかぶろまハしといふなり　○下にハ簾をおろす音のきこへ夜廓ひければおちやを挽た妓は大赦にあふた罪人をミるやうなこゝちにて欠をし伸をしながら梯はたくく二かいへ上りハが局々へ散亂するかつかちめへておまんまを喰ふ新造ハ恰も飢たる虎のごく器にのこりし魚の骨ハ化野に異ならずとやかくするうち音もなく右も左もしづまりて此所に海誓山盟あれ

バ彼所に顚鸞倒鳳ありて襄王が夢をむすぶときなりけり○龜屋忠兵衛ハむめ川と深くなじ て金にハつまれど身ハつまらずあげ代かたゝまりて此 かいかとまつてゐればばんとう梅春かはたらきにてねずのばんに金をやりこよひやり手部やのひくろをあいづに下さしきへかくしおく忠兵衛ハ下ざしきくらい所につめたいよぎふとんの中へはいり身をしのびゐる折からむめ川ハざしきのきやくをねごかしてでうづのかほでこゝへ来り

【梅川】さぞきうくつでおさりヒしやうモシみハとゝきいしたかへ【忠兵衛】きのふとゞいてくハしくミた手前もいよ〳〵懐妊にちがひなく近〳〵にひつこミ寮へいつて脫すとのこむかしの身なら相談のしやうもあれど何をいふも金がさきだつしつてのとをり勘當の今の身の上むかしハすれぬ朋友のよしミにて少〻づゝの合力でかすかのくらしはなしにならぬけちなしぎ【梅川】初におめにかゝつたハわすれもしんせん去〻年の三月それから一夜が二夜とたびかさなりじれつたいとあひたいといふ癖を心につけてからとやかくとするうちに【忠】コレサ愚痴な今さらそんなこをいつたとつて借金の云わけにもなるめへ。ミゝをだしや ト何かさゝやく【梅川】わたしもとうから共りやうけん引込で寮へゆけバぬしにハあハれずみのたよりもしにくゝなりんすそれにまだきくさへ怖いおろしぐすりとやらひよつく死ぬまいものでもおざんせんよしや身にけがもなく出勤をしてからが傍輩衆に顏ミらるゝもはつかしふおざんすそれにしつておいでなんすとをりおまへをせいてきやく衆もきれおもだつた馴染もなくあの八右衛門づらの外ハ此ごろのきやくしハミな初ばかりそれにつけてハたん〴〵たゝまるごふく屋のかり所〳〵のか

けとてもつまらぬワけなれバ【忠】そんなら逃るりようけんか【梅川】あたりにきをつけうなづく【忠】そのりやうけんなりやしやうがある實ハむめ春が此智恵を付てくれた聞バあしたァノ八右衛門めがしまつて下の叙へ手めへをつれていくさうだおれをせきてめへにきをもませたかハりあいつがおちどになるやうにいけすからふけるがいゝ宵に地まハりめらがおれにけんくわをしかけたがあれも八右衛門めがたのんだに違ハねへ何かにつけてにくひやつだ折よくあすハ宵闇なればたんぼへ出る庭のうら口おれハさきへまわつてゐやうにげさへすればこつちのものだ折もなく今まではなしもせぬがこゝからハ四里半ワきの田舎二の口村といふ所におれが實のおやご孫右衛門どのといふがあるおちつき所ハまづそこサ【梅川】そんならァノ梅春さんもしやうちで【忠】にがしてくれる注文であの子が胸におさめてゐるあすの手はづもあの子にきゝや【梅川】ホンニ梅はるさんハ戀しりでおざんすよつき出しからぬしがせハについてくんなんしてからワたしが苦勞を身に引うけておなじときに突だしに出た女郎衆より夜具もはやくしなをして又内證のせハも早くはなれ新造出しもはなやかにしてしまひつね〲も客衆のもめ共ほかにちつとも人にひけをとらせずたいこ持や何やかやにも切レはなれがよいとひやうばんされ着ものゝ模様のあんじまで人にこれハとほめられるもそんなぬしのせハゆへでおざんすワたしが逃たら

ばてつきりあとでぬしにうたがひがかゝりんしやうそれぱつかりがわたくしや苦勞でおざんす（ト思ひがけなき次の間より）おいらんへ（トいはれてびつくり）【梅春】さつきにからあすこで始終聞ヒした跡のとへりわたしが呑込でおりゐすからかならずお案じなんすな ひとまづ こゝを立のいて身二ッになつてから忠兵衛さんも勘當のおわびをしなんしておもて向からおいらんの身うけをし日かげのお身にならぬやう目出たく女夫におなんなんしわたくしもかげていのつておりんすにへ（トいふ折からねづのばん八ツのひやうし木をうつてまわろてうちんかた手に茶屋のおとこがさきへ立はやがへりのきやくははしごをおりる○此きやくは風流の人とミへはしごをおりながら即興を口ずさむ）

雞鳴曲

青樓撃レ析唱ニ雞鳴一（ひやうし木をうつて八ツ時をしらする）　夢裡陽臺雲雨清（びやうぶのうちハとぼしのさいちう）

唐突佳人彈レ枕起（びつくりしまくらをゆすつておこす）　無情亦復是多情（うちのしゆびをあんじるこゝろふかし）

（析ハよばんのひやうしぎ也）

【客】駕ハはいつてゐるか【茶屋男】とうにはいつてをります

○第三回

金銀をつかふ客にもかまはず横に行ハ女郎の眞と卵の角道

「世の中ハ道こそなけれおもひ入る山の奥にも鹿ぞ鳴なるとハどつと昔淺草に鹿茶屋のなき時代の哥なりけり今繁花のときなれバ鹽鶊もさミしきとをしらず熊谷の堤で小判をかぞへても氣づかひなしされば人の心もおのづから豁達にて烟花のにぎハひなどハいふもさらなりやぼにハあらぬ水戸尻色と戀との鮲の二かい水の底なる鯉までもうかれうきたつ大さわぎハむめ川がけふのきやく中の嶋の八右衛門といふは金銀まんく\の金貸にて女郎のにくがるにくていづら正めんに大あぐら「八右衛門」コゥかれ野をミハらした所ハどうもいへぬでハねへか「闇（たいこ持）子」左やうでござります「茶屋（てい主）」こゝハ二かいの眺望は妙さ「さよ舟」（ふり袖新ぞう）モシおいらんのとこへお富士さんがミへんすハ「梅川」ほんにノゥト（ふさいでゐる女げいしや）「里吉」觀音さんの塔もミへます「八」なんだかおもしろくねへ日だ「闇」なぜでござへます御酒がしミますめへサァこれではじめましやう「八」いんや猩〻が出番にてやァしめへしさけはかりもはじまらねへ「茶屋（てい主）」まづおいらんがうかねへちつとうかし申さうじやァねへか「梅川」ちつとこゝろもちがわるふおざりいす（番とうしんざう）「梅春」モシおいらんへちつとうきく\しなんしなこゝがしらけんすにへ（トむめ川にさとられるなとめくべせする。たいこもち）「闇」モシ一ッおとしばなしがござります（トゝもんをちよいとつくり袖をひざのうへゝのせ）花櫚梹に紫檀棹の三絃が會所の棚にゐて朋友の象牙の撥にいふにやァ聞バ三河嶋に湯治ができたさうだ芝

居の三ミせんなんさァ土用休の內いつたといふこつたがナントおいらもいつてミやうじやァね
いかと咄すそバに食客の樫棹犬皮の見世ざミせんが聞てゐてモシ湯治をなさるならわたくしも
お供をいたしたうござります三ッ星の膏薬でもとかくなをりませんというから紫檀棹がどふし
たよこねても出來たかといへば鄽三ミせんがハイちとかのさほを痛めましたかこいつァどう
でござります【茶屋てい主】おきやァがれ【梅春】ばからしいねへ【ミな〳〵】ヲホヽヽヽヽヽ
トほどなく日もくれ燭臺など出しミな〳〵八右衛門かきけんたなをさんとうかしたてさと言がめりやすやミ子がおかし身のおとりなどあつてやゝ時うつる　○かくてむめ川ハ忠兵衛がさゝで待と
をならんと心せきざしきのやうすうかゞひてはづして出る庭の面さいはい宵闇折よしと心ハさ
きへ飛石づたひ番頭女郎梅春は萬事に心築山のうしろにしばし立とまり【梅春】小こゑにて モシお
いらんそのうちかけハ人目だつわたしが下着の此小袖を上へきて御出なんし【梅川】ホンニに
げる今になつてまで此おせハしんでもわすれハいたしいせん【梅春】ナンノおれいにをよびん
しやう二の口村へ落付たらやうをくれしく【梅川】みの便で【梅春】かならず待ておりひすに
へあれ〳〵おまへさんをよぶのハたしか八右衛門づらかこゑでおざんすミつけられてハ一
大事と梅川が手をとつて足ばやにはしりゆき庭のしをり戸をしひらけバさぐりよつて【忠兵衛】
梅川か【梅川】忠兵衛さんかトむめ川が思ハず聲をはつすればそバに本を讀居たる梅はるがモ

シおいらん何をひとりごとおつせへすと氣をつけられてきのつくハ夢野の鹿のゆめにハあらでやハり箕輪の別荘に寢そびれしまゝ梅川がとつゝをつゝの胸算用おもひに迫る此時節モシこふしてにげたらばいかゞあらんと心のうちに思ひしハさだめてかくもあるべしとすいりやうしたるは始終筆のゆくまゝかきつゞり色情に終身を謬ともがらのすこしハ戒ともならんかと蔦の唐丸がもとめにまかせ紙くずかごよりひろひ出しそこらこゝらをつゞりあハせてついに小冊となし侍りぬ

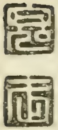
娼妓絹籭終

跋娼妓絹籭後

山東京傳。金馬門にあらぬ。牛糞橋の傍に世を避て。性氣の長き叓。牛の小解のどし。上ハ天人の尻を摘。下ハ閻羅の鼻を撮。滑稽虛を以て實を獲。好て著述をなす。中に娼妓絹籭あり。嫖客と娼妓の風情を細砕て。恰も飛切の慘粉のとし。僕一たび味て其美なるをしる。嗚呼京傳子が筆頭の溲。奇とするに堪たり。須評而求。

寛政辛亥孟陬

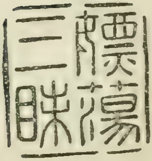
飯顆山　曼鬼武識



後叙

花炮家も身揚をして點して不覽ば不買。膏藥も脚を創て不觀ば不賣。況賣情娼妓においてをや。應馬呼牛なくんばあるべからず。娼妓に瞀の季指なく。自有の盟章もなし。彼に截り。是に誓は。身をたつるの業可憐。高飛の鳥も美食に死。深泉の魚も芳餌に死。娼妓も亦潘安の爲に謬とあり。豈虛のみならん乎。雖然未きかず娼妓に正札附請合賣のあることを。余以爲其實を信ぜず其虛を惡ざるが輙是識趣人歟

京傳艸廬食客
煙花浪子跋



南品傀儡

青海舍主人述

南品傀儡

千里必究
不許翻刻

書肆　梅澤堂

南品傀儡序

諺云。法界恪氣岡燒餅兮。我友有山子者。爲彼燒餅大於大木戸之牡丹餅也。其燒餅之餘澤被於小冊。嘗隱先達之書能鑿北州之魂膽。而未盡南驛之意味。亦是可謂疾人之疝氣於我頭痛矣。於是開口於傀儡以說人旁有無之人情焉。其贅言欣々通々。如無足而猪牙之走品海。似無翼而翟鴐之飛高輪古今筆力鑿山側。新刻招牌掛下坊其校合已成屬予作猶勝已之序。

寛政己亥春　放蕩山人題青海舍

自序

夫兩國の小勾欄ハ。南京操にして。義太夫の扮戲趣を仕組。南國の帑藏ハ。南品傀儡にして。狂蕩の寓言思入を誌す。相似たり。何ゾ答へて曰かれに。三ノ切の愁歎すれば。是に二ノ口の屛語あり。章句牒中に朱をさす也。高輪の小ヲクリにハ。長地にしてウキジなるを。サハリト聞て。ウレイ三重トナル。忍ビ三重の客に。大二重を。ヲクリガヘシ。色有地色あり。今予それが樂屋まで見通しの。手すりにかけて。殺文句をきかする事しかり

時に寛政三ッのとし心ときめく春の永き日花の江戸前に鈴木の鱸をくらつて一盃機嫌にいふものハ月地萬年

橋の西に

青海舎主人戯述

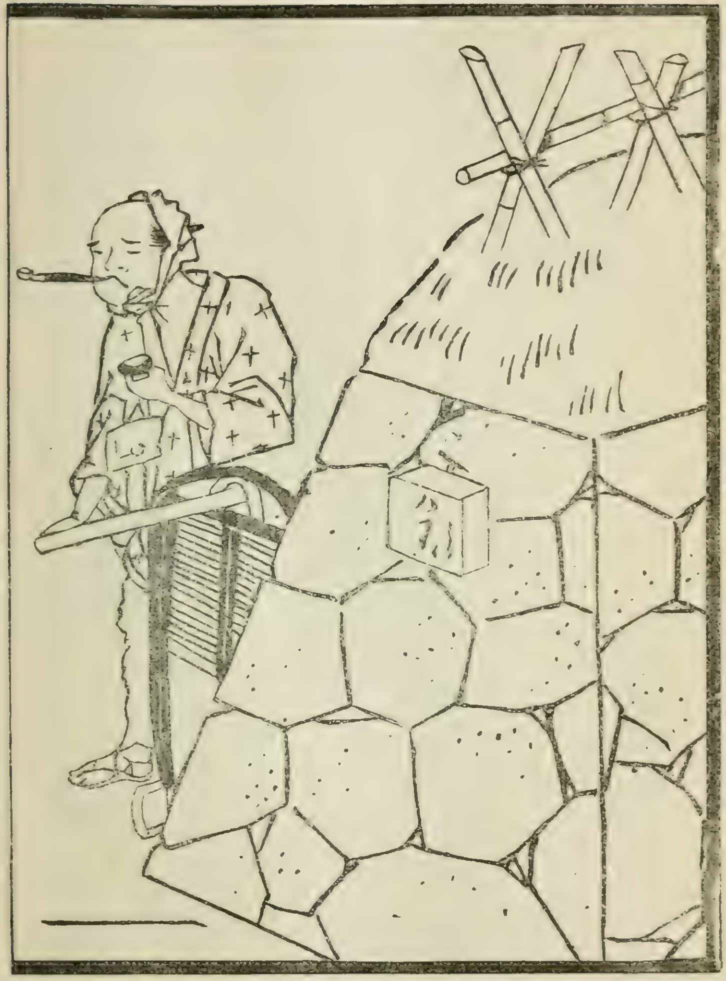
南品傀儡

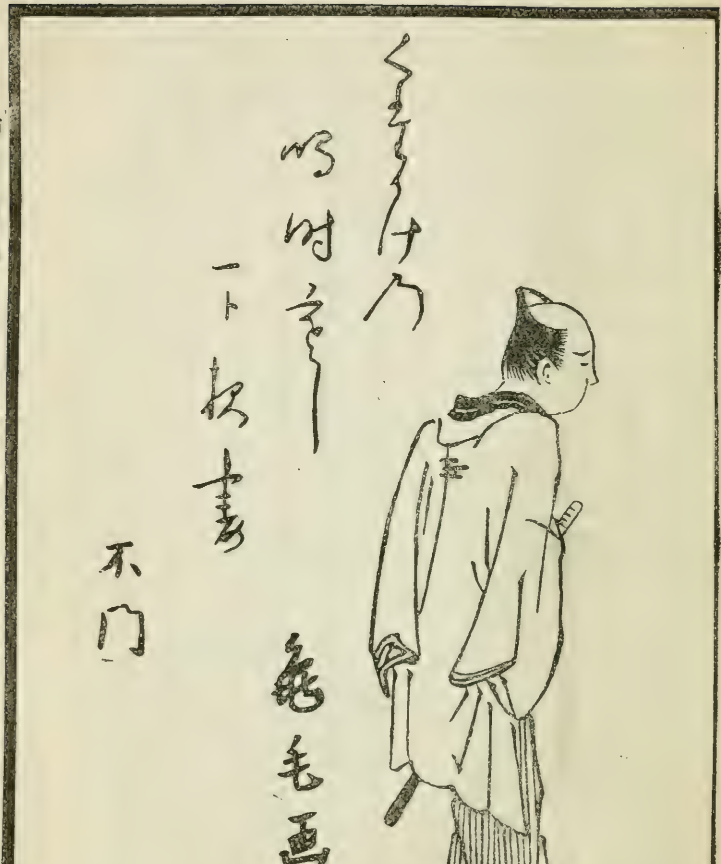
青海舍主人述

○

川柳点にへイのあるとないとが品の客此句の心をかんがみるにかの宗禅寺のはか所の段に侍の文字を分れバ人の寺とこれらより出し滑稽なるか一日南驛に泊して娼婦が艶言をきくにたれかハけふのつまならん仇し浮世の仇し身にも朝がほの盛りハにくしむかひ駕と三縁山の渠洪鐘とともにまだ夜をこめてなく鶏ならで問屋場にいなゝく荷附馬騒〳〵しく玉珂をならし高輪の十八町牛の小便を引て長がく當所のおむかひハ帆かけ舟のとくはやし石橋萬の二階ハ助六がはけの間ともいふべく安房上總を一ト目に見わたし有喜壽の森に一トはけに靉靆朝かすむ御殿山に御てんのなきハ八ッ山の一ッある故かよるへさためぬ旅客の浪枕するをきてハ石に漱といひし唐人も流石なるべし山から里通ひハまたの御けんを結緣してうらやくそくをきめ頭巾鷹すへて行人の淺黃づきんもかふるといふハ禁句ならめ茶屋の女が提たるちやうちんハ二日酔の天窓

のごとくぶらつき袖か浦うさぬれてし提䉤衣干てふ朝日影匂へる山もはや巨船の帆ばしらまてのほつて滄海に映ふさまれ影見世の腰張のごとく泉岳寺の門をてらしいよ〳〵嘩く義士の英名大木戸の牡丹餅三ッくらつて七間ッに休遠騎の供店下に巣をはる蜘介ハ後朝の客を待合の辻〳〵角〳〵己がさま〴〵に別れ行ハくもの子ちらすもかくやあらん夕の袖に殘るうつりか朝に堺屋が藥をもとめて魂しひあと〳〵と反る百萬石もけんぺきもすり違ふたる其中に四國のさる家中しゆと見へて余程よろしき人柄の侍一人連レけふの非番を幸とひざくり毛にむちうちて高輪のなじミの茶屋へきたる【茶傳吉】年の頃廿七八くんないしまの小そでにくろちりめんのわた入はおり紋所ハ丸に桐菊にたきいうおたしみ共にてへつたりとゑひはなかミ袋へもへぎらしやのさんとくをむらさきちりめんのつばくろくちにてつゝミ尤とうじめのついたやつ大小ハぎんの太刀ごしらへ何にもぞうさうどのつか袋をかけたやつ二タ重はなをの中にきをはきたのそばて　此間わ大きにおせ話じやつたとほうかむりつきんのひもときなからはいる　多仲さんサア上り給へな【小嶋多仲】年ハ三十二三中たふきのかミにてゆひたんとまひたやつ黒ちりめんの小袖に同しくわた入はたり白茶とんすの大かぐらのバルやうなはゞの廣き帯しゆさやの大小むらさきの下ゲを八わたくろの四まいうら付をはき　サアさあお先きへ【茶屋男】朝よへおきての番子をふひてあたりしか二人りを見てそうきんをたらいの中へ入てあたまの手ぬくひ取なから　イヤ是ハよふ御出なさりましたサア　おあかんなさゐましモシ　おかミさんへ　エー〳〵とよぶ　【女房】せうじのおぼつつぎの間にあてあしをくひおつつていたりしおかたきいて口をむにや〳〵しなから　これハ〳〵お二人り樣なからうよふいらつしやりましたモシあなたそこハきたなふ御座りますコレ藤七やそこはマアこうしてお火をあげさつせへなモシあなた貞平御住ンなさりまし　トくはかけのあしをくふ藤七ハたすきはづしてはをくんで二人りへ出す【藤七】へイお茶をめし上りまし【二人】




不門
亀毛画

ナニかまわっしやんな〳〵【多仲】此間おぬしハ赤羽根の通りを通ッたかどこへ行たのじやナ
セよらなんだ【藤七】左様で御ざりましたあの日は天氣がおかしゆふ御ざりますしそれに大キ
ニいそぎの用が御座りましたからへエ、どこで御ろうじました【森】あすこの揚弓におつた
【藤七】それでハやつはりおより申てもおるすたハ、、 トそら笑 イヤホンニ これ〳〵 トたつて狀さしの文を 多
仲さまの所へおみかまひつておりました ト多仲にわたす【森】おれが所ロへみハこなんだか【藤】イエ
さんじませなんだッケ【森】ハテな【女房】イエまいりましたはづで御ざります トとたつて狀さしの文を出して森に
ろや【藤七】森さまとかひて御ざるましたからどふもわかりません傳公の氣で見ましたから トいゝわけを
ふい【多仲】しれぬはづ〳〵【女房】あなたがたハ御せんハどふで御座りますなにも御ざりませ
んがさら〳〵とお茶づけハへ【二人】イヤナニ もふ【女房】アノ此間ハちとお遲くハござりませ
なんだかへ【多仲】どふして〳〵けしからずはやかつた見附てあかりのつかぬうちにいきまし
た早い駕であつた にかひよりうちの女あふらかえて手をふき〳〵【女お品】ヲヤようお早クいらつしやりました ねトドへおりて板の間へ行 多仲
さんすこし御めんなされましコウ藤七どん此桶をのけてくだせへ【藤七】何をする【お品】ぬか
をを出すハな【女房】火ばちの引出しからやうじを出してつかひながら けさはけしからずおはやくいらつしやりましたどつち
へぞいらつしやりますのかへ【森】なにさけふは此人もわしも非番ぢやによつて朝から出たの

きもふ多仲さんいかふかこひ【多仲】よからう〳〵 たりふしおもてへ所のげいしやとゝへうへだの小そでにくろ七ゝ子の半ゑりにおしろいのあとのついた小そでにぬか袋を持て湯へ
行と見へかミもひつつめのしまだつげのくしのぎんむねをかけたやつふとのほぐでくしまきのうへをむすんだやつ門ト口にて【げいしやおと吉】お品さんゆふべハおやかましゆう御ざり
やしたらういつそねあの夕べのがもちこしてけさまでぶら〳〵しやす【お品】乙吉さんおあが
んなさいまし湯（ゆ）へお出なさいますかへ【女房】乙吉ッさん一ぷくあがつてお出【乙吉】アイ
客あるていゆへゑんりよして けふはねおしやごしハ 東ぜんじまへよこ丁さゑ町へゆく 休でおざいますッさまたのちにめへりやしやう
トちよこ〳〵と行【女房】さやうならバもういらつしやりますか藤七おつれ申しやれ【二人】太儀ながら
お身いてくりやれ【藤七】かしこまりました 二人ははや氣もそゞろに多仲へ帶しめなをせば森ハせつちんへ行【多仲】どふだ〳〵【森】
ヤレせわしないコレ刀（かたな）ハおひて行ふじやないかい【多仲】イヤ〳〵此間もあそこで組がしらにあ
ふたハ【森】それならさすがよい 御時せつがらじや かミさんおせ話で御ざりました【女房】さよふなら
御きげんよふいらつしやりましそれおはきもの【お品】ハイ【藤七】イヤこんたにやァしれめ
へ トたつて係のわきより出して サァいらつしやりまし【お品】さやうならハ御きげんよふ【女房】モシ森さん
お羽織（はをり）のおゑりが トをつてやる【多仲】【森】おせ話（わ）〳〵 トおもてへ出八ツ山下へさしかゝりおきのかたをながめて【森】ア、アだいぶまた
おきがかすむハへふらねバよいが【多仲】貴公（きこう）ハあすまでゐるであらふ【森】そい〳〵 八ツ山下の上りば
のきわにゐるこじき【こじき】ハイおだんな様からおじひに一ッせん下さりまし【藤七】さきへたつてゐきながら ヤイ〳〵

お客だハエ〳〵【多仲】コレ藤七すこしまちやれ【藤七】ナニナよしになさりましくせになります【多仲】イヤサその事じやないちよつと小便ンするのじや

△まかなひか二階中をおめしをあかりやし〳〵とふれてまハるじふんから女郎のからはらへくる客たいかひしれた遊ひの様子かんしやくをおこすもよくしやれ本にあるやつなればこゝにしるさずかの川柳点にも

〽けいせいのすきはらへくる屋かた者

△なじミの客廻しになつたやつ【女郎】ト【客】の懇丹ハあに品川のミにあらず四里四方のしやれ本に記する所しけゝれハたゞその大がひをしるすたゞ品川へ行ク人情をうがつのミ也

○

そふれ虎の革の褌にはあらで今日ハとらの日毘沙門様の御縁日の夜とて軒毎につるせし挑灯にりんぼうつけしハむさし坊が古跡モあらず飴屋が荷匣輝て傾城のたんすの如くはた一向宗のお持佛に似たりやたいの鮓より人のすし貴賤群集の通り町金杉橋のかたより一ッさんに來る芝口の初音屋の駕一町めの木戸ぎわにておろす（昔にはつねやの隠休む事品川通の知所なり）【初音や駕】ヤットナ旦那モシお羽折がよごれませふ【客】せうち〳〵【捧ぐミ】蠣からがあるのであるきにくゝつてならねへ

【駕】あの長八のへらほうめおれがわらぢをはひてうしやァかつたこいつハあんべへがわりい【捧】サァやらかそうせ【駕】サァ／＼【駕二人】ヤットな（くんじゆの中をおしわけ／＼）ハイお願申やす／＼（ト人こみの中をわけ／＼芝はしのあたりから）【駕】きやつきや／＼とへ飛がとくに三重へはしり行キ正めんェつける【若い者四助】（たれをあけて）イヤ塔さまよう御出被遊ましたサァいらつしやりまし（ト見通しへつれて行）【坊主客塔里】（年ハ二十五六黒ひぢんちりめんの小そてしろむくのちときたのをしたきにしてきめつきんはおりなしおなんと茶しゆすのおひかくほねのあふきをもち駕より正めんの女郎をしりめて見通しへ）ナセ客か【四介】ヘェ今はんハ（トいひながら）子供お茶あげやモシお駕ハどふいたします【塔】ソレ／＼そふいつてくだせへかへりかけに山がくやによつてだれぞにこひとつてそふいひつけて下せへたいきだとつてよ【四介】かしこまりました（ト見世の方へ行）【子供】アイモシお茶をヲヤ塔さんよくおいでなんしたね【塔】どふしためへやけどれいゝか（トちやをとつてのむお定りの硯ふた出し物を持て）【四助】コレ何ニをしてる姉さんにはやくそういはねへかな時にサァ一ッお上りなさりましだいぶおゝそくお出なさりましたねそしてまたとんだ所からお駕にめしましたね（トいふは此客切通しへんのものゆへ芝口の初音屋から来たのを）【塔】ナニけふは八町堀へ用が有ッてかへりにすくにこつちへきたからさ【四助】ヘェどうりでなる程モシはゝかりながら（ト盃をさす折ふし見世にて）【見世にて】四助とん／＼／＼【四助】ヲイ／＼（トへんじをしながら手はた／＼）【見せにて】アイヽ引【子】アイ【四助】（立てゆきながら）それお火かねへそうだ（トいひ捨てゆく）【子】も行【女郎横木の】（年ハ廿二三きりやうもそうおうゆへ客もそうおうにあふてい也ひわ茶ちりめんにわからぬぬひのある小そで同しやうなヲねまきのうへゝき

（てきたのなり）塔さんおそくきなんしたの【塔】客だそうだの久しいもんだ又だきめうかだらふおもし
ろくもねへ（此客せんたいおふきのかすへ久しくきて互ひにまんさらでもなひといふくらひなり）そしててめへどうする氣だ【横木の】ひるからので
どうもそしてェ、モじれつてへよ（トしれろ折から）【子供】（ろうかをとをるを）【横】コレヤたれだちよつときやヲ、
てめへか四助どんをよんで來や【子】アイ【塔】ひるからきてゐると【横木の】まだネ湯をし
まはねへうちからきんしたョ【塔】おほかたよびにやつたらふ【横木の】よしなんしすかねへ
【四助】（いそがしそふにかけて來て）なんで御ざります【横木の】下タの中へ床を一ツとつて下タせへはやくョ
【塔】なんだてめへばかりひとりせうちしてもおらァ今夜ハじきにけへるよ【横木の】アレサ
よしかねこん夜ハちつといつておひた事か有るからあけろといひにくふおざんす今夜ハナゼだ
かおまへハどふもおつだよ【塔】おつもこつもいらねへがいつでもをんなじおきようをよむか
らョ（此客正とく此女郎にのぼてゐるゆへ何をいつてものろくしてゐる）【茶や お増】（高なハの茶や山がくやの女まへだれかけて）ヲヤ塔さんよくきたなしにいらつしやりま
したネ横木のさん此間ハ【塔】はやく來たの萬七ハどふした【横木の】おますどんよくきなん
したの【お増】萬七ハいましがた鰡まで（高輪の横丁二本榎へ出る所）【塔】それでわかり〳〵【横木の】お増ど
ん一ツのミたんしトサス【お増】ちとおゝきへ申ませう【横木の】マア〳〵【お増】いゝお色で
おざいますねお客かへ【横木の】さつしておくれ（トまじめでいふ）【お増】モシせんどハ大きに醉て内へ

かへつてからしかられましてね（折からすたく〳〵）【四助】イヤお増さんねつからおめにかゝりやせんね時にもし塔さんちとあちらといふところにいたしませふ（手をたゝいて子供をよび）コレそこの物を持ッていかつし（トいひながらてうしを取てすいものわんのふたで一ツのむ）【横木の】コレそしてのちよつとみゝを出しや（トみゝに口をつけ）あのゝ座しきのゝ棚のゝそれ物を湯の花さんの所へもつてつてのさつきのやくそくの物ととつけへておくんなんしといや【子供】アイ〳〵（此うち塔ハ一人り何かかんがへてゐる四助とお増ム、そうさおたきにそふさと咄しているゆへ）【塔】ちと遍参しやうかの（トたつて行）【横木の】今いきいすからさきへおいでなんし（みゝに口をつけて）ちよつといつてきいす（ト行）【四助】をつとそれではわつちがもちやせふサア塔さんおいでなさいまし【塔】おさつやいつしよにいかふ（ト子供をつれてゆく）【お増】モシ何にかハわたくしか持ッてまいります【子供】コッチエお出なんし（トド部やのおく土蔵の中のさしきのせうじをあけれハ）【塔】こゝか【子供】アイこゝでざひますよ【お増】（跡より来て）コレアノ子あなたに御ぜんをあげねへ【子供】アイ今マにもつてまいりますよ（ト行女郎二人つれにてせうじの外から）【女郎うわ風】【同下つゆ】塔さん〳〵そこかエ【塔】うわさんかへへんなせへ【お増】こつちへおはいんなさりまし【うハ風】モシ塔さん今夜ハおわるうおざんすね【塔】いつでも此くらひな物さ【下つゆ】丸さんハどふしなんしたへおめへハそれでもじつがあるよコレお増どんナセ丸さんを連レてきなんせん【子供】塔さんおまんまをおあんないまし【塔】なるほどすこし腹が北ばんばだはやく茶をもつて

きや【お増】はやくもつてきねへよ【子供】アイ〳〵トゆく【うわ風】塔さんきせるをかしなんし【下つゆ】お増どんせんどのみをとゞけてくんなんしたろうの【お増】じきにおとゞけ申ましたけども【下つゆ】なぜたのふじれつてへよ【塔】ナニサみをやつても行(ぎやう)のうちだから禁足(きんそく)だ【下つゆ】きよふ（行）タァなんのこつたへ【塔】ぎよふの事サ【下つゆ】ヱ、モぎよふしよふるふ 皆〳〵わらふ【うわ風】ム、ウでへぶ地(ち)口がお上りたね【お増】あの子はお茶ハマァどふすののう トいふ所へやくわんを持て【子供】アイお茶といひながら片手にもち花をもちて【お増】サァ塔さんお上りなひましおめへそりやァなんの花だヱ、もち花だの【皆〳〵】ほんになァ【子供】今あすこでひろひましたよ【下つゆ】お客のだろうに【うわ風】きついくろうせうさ【塔】今ン夜ハなぜかにぎやかだと思つたらあさつてハ正五九月だのァ、此茶ハぬるい〳〵【うわ風】それハおよしなんしコレおしづやァノのざしきに茶びんがあるはづだ持(も)ッてきやお増どんモいつしよにいきなんし【お増】アイ〳〵と行【塔】ほんにあさつてハ目黒だつけわすれてゐた【下つゆ】いゝ氣だねへ【お増】【子供】サァお茶がまいりました【塔】ドレ〳〵トくふ【お増】此もち花でおもひ出しましたがァのおまへさまのお庭(には)に花のさいていた木はなんで御ざりますね【増】どれだ石燈籠(どうろう)のそばのか【お増】さよふで御ざりますれ【塔】アレハさるすべりよ百日紅【お増】へヱへすんならァノ南(みなみ)の仁王様にある妙國寺の事也木とおな

じ花で御ざりますね【塔】それ〳〵おなじ事サ【下つゆ】どんな木だねへ【うわ風】おめへのやうな木だと【下つゆ】へヱ、、、【うわ風】塔さんお休ミなんしョ【お増】マアお咄しなさるましな【うわ風】またのちにまいりやせう【下つゆ】あれさわつちがぞうりをはいてさお増どんけへんなんすときしらせなんしョ（【下つゆ】【うわ風】）塔さんお休（やすみ）なんし（ヨヲと出て行）【お増】わたくしれもうさんじませふ明朝わ左様（さやう）なら何ンどきに【塔】万七がくるだろうの【お増】ハイ萬七をあげます左様なら御機（き）げんよふ【塔】やすまつせへ〳〵

○

【隣座鋪】（わ二人り一座にて下タ町の町人也いつたい小道具しやうばゐの者ト見へけふ目黒へまいつてかへりに品川へとまつたと見へたりふたりながらしんぞうをかひわり床にてねてゐる）【しんぞう なゝの洲】あれぬしれなぜかとおもつたらぱつちをはいていなんすよおとんなんしな〳〵【客清】（おきこばつちをとりながら）コウ豐ぼう〳〵ちとおきて斷（はな）さつせへな【客豐】【しんぞう その花】（だまりんでいるゆへ）【なゝの】ヱ、モまアおきずともいゝにしなんしよ（トむりに床へ引ずりこんでだきついてゐる）【豐】（ねがへりのをとして）清さんなんだでへぶさへるの〳〵【清】さゑるものわ目ばかりだ【豐】そけへいかふか【清】きねへ〳〵【その花】アレサまアこゝにお出なんしよこゝでも咄は出來ますよ【なゝのす】その花さんとつついておいでなんしよ【清】とつつ

かれてハ大そうどふだ【豐】寐てはなしもよかろう【清】隣ッどふしの紀の國大和としやしや
う【なミのす】いつそよしかねわたしらがおきやくはしやれてばかりおいでなんすよ【豐】清
さんおめへをしやれるといふによ【清】鈴が森の馬のほねじやァあるめへしナァ豐ぼう今ン夜
のでかしハ海苔の吸ものだ【豐】そふさ〳〵あァいふ所ハこゝばかりだろう清さんなんだか今
ンやハむしやうにあつたかなばんだの此子たちがそばにいるせへかしらん【清】それもあろう
よそしてこゝハ土藏づくりだ【豐】長太郎があたまとおなじ事だの【清】ム、ヨ土藏をばかに
した【春】土藏の中ざしきハどうだ【清】ム、いゝ〳〵【四人】わらふ【清】コウアノさつき
となりへ來てはなしをした女郎衆ハなんといふ【なミのす】しれやせんハ大イの女郎衆かへ
（拾匁の箒也）【清】大だか小ゥだか袋もぐさかしらねへが黒ちりにねじむめのぬひをしたうハぎをきて
【その花】浪のすさんおゝかたゆの花さんのことでおざんしよふ【清】それ〳〵そんな名だッ
ケ【豐】ソレこそまんざらでもねへ【その花】しつたかいつそしやうわるだヨウ【豐】となり
の客ハなんだろう清さん【清】どふもわからねへ道具だ平甚が角大イへ持ッてきた棒のさきの
こぼしといふあたまだあァしておくハおしい物ンだ【豐】しかしとんだねき物だイヤまらなそ
りやァいゝがおらァ餅花を一本ンなくしたわへ（八ツのかねごをんへとなる）【二人のしん】（いひ合せたるごとく）モシちよつとてうす

にいつてきんすよト出て行【豊】高らいやがこわいろにてハテお断りにやァ及ねへわナ【清】しかし小べんはおそれ〳〵道具やゆへ小便たきらう尤也【豊】をれはときに此もちら花をげびぞうとでよう【清】なる程あした迄はおかれねへ喰へ〳〵なんのこんなにかわずともよかつたトあいもちを二人してくつてゐる所ふたりのしんぞう火入ちやわんへ茶を一ツはいツゝくんでくる此ていを見て【その花】ヲヤ〳〵ト笑ふ【豊】茶を見て妙〳〵清さん茶かきた〳〵【清】きついもんたおめへたちはもうちつとはやくくるととんだうめへ物かあつたに【二人りのしん】お心ざしはお有がたふおざんすそれてたへたもおなし事さ【豊】もふねまつやぶこうじとしようじやァねへか【その花】モシエちつとお休なんし【清】ねませう〳〵【豊】モウなん時だろうの【なミのす】八ツでざゐまいすよ【清】とんださむくなつたノウ

○

【奥二階ノ座鋪】ひろよりきてゐる侍の客二人ン一座のその一人ン此客と女郎の昵合イさして何もかわりし事なけれバこゝに畧す八ツの鐘なるゆへ目をさましてはなしをしてゐる【客森】だれかきたそうな【横木の】ナニサあれはらうかをふくのでおぜへすよ【森】コレ今ン夜の客はほんに坊主か【横木の】ぼうずでいつそすきんせんよトかくとへしらずしてまにうけ【森】どこい坊主じやなにかァの【茶屋男】ハイおむかひて御座ります【森】ひつくりしておきるあつちらへそういふたかイ【茶や】ハイ左様申まし

た（トいふ所へ一座の客）【多仲】サァどふじや〳〵夜ハ明ヶるぞい【合かたうハ風】多仲さんぢつとしていなんし（トはおりのゑりをおつてやる）【粂】（やう〳〵したく出來上りてろうかを出てはしごを）サァゆかふ〳〵（トはしごをおりて見せへ出れバ若イ者ぞうりをあれこれと見て）【若者】イャおかへり遊(あそバ)しますかおはき物ハ（トいひながらあれこれみて）ヘイ（トなをして）左やうならばまたどふぞお近ひうちに【粂】【多仲】イッモ御世話〳〵【茶や男】アイおせ話でこぜへます【二人の女郎】おさらバへ〳〵ぐわら〳〵〳〵【うわ風】（ろうかへきながら首をゑりへすつこませて）是かられ四ッまであきねをしよふ【横木の】またそうしておるひどんにしかられなんし【うハ風】ナニあすハおひる休か有とさつきいゝしたよ【横木の】それじやァ大きに都合(つがふ)がいゝよお休なんし（ト下べやのはしごのおり口にてわかれ）【横木の】（塔か寐ている所へ來て）塔さん〳〵こつちヱきなんし寐なんしたか（トぜやうふのうちへはいり夜きをのけて）サァこつちへきなんしョ【塔】祖父(ぢい)ィくさい所よりこゝかきれいだ【横木の】アレまたあんな事をいひたしたなんすよほんにいゝ氣だのふおめへハ【塔】（いつたいのろき客ゆへいひきだといはれて）よしかマァいごきまわらすとこゝにゐよふさむいにてめへもへへッてねやな【横木の】こゝじやァとふも咄が出來ねへからこつちへきなんしよヱ、モ夜が明ヶるよモウ【塔】イ、わな夜があけても日がくれてもけふハいよふかス【横木の】いなんし〳〵すんならマァこゝにいなんし（ト床へはいる）【塔】コゥてめへそしてあさつてのりくつハとふだ【横木の】そふいひしたよモシほんにゐなんすか【塔】天氣ハどふたいゝか【横木の】よくつてもゐなんし

ナ【塔】どふしやうか【横木の】久しいもんさトだきつく【茶屋男】ハイおむかひで△ッ升【おもてを通る人】一チ夜ながれの仇ゆめもわかれハをしき人心へ徃かふ人の一ト口論りなんのゑきろの鈴ならで浪のうね〳〵見へわたるいさり火ハ羽ねだの浦の朝まだきアレ〳〵見さんせ八ッ山の森にとまりし旅烏が寐ぐらを立ッて思ひ〳〵にカア〳〵〳〵

叙

東都の南に一ッの驛あり旅舍軒をつらね傀儡色をあらそひ一片の雲介地をはしれば旅客の魂天上を飛び山盟海誓御殿山の高にくらべ天王洲の深にたとへ目黒の粟餅に夢の世をさとらず新田の矢に光陰のはやきを思はず千里にかへるも足をとゝめ一錢なきも心をのこす於是親父の顔は妙國寺の仁王の如く怒れと息子の心は小荷駄馬のはしるか如くとゞまらず是傾國の手柄なるべし爰に友人何某か机上に細工せし南品傀儡なるものありこれぞ彼地を守りの神の穴の稻荷の穴までを穿ちもとめし小冊にして奇々妙々といつつべしよりて我も序幕を手傳ひ拙き禿筆のひ

やうしをとりて其機關の緒をとく而已

京傳門人

兎角亭亀毛誌

于時寛政三辛亥歳初春

東都書林

三十間堀五丁目

梅澤茂七

錦の嚢

青樓㊙乃世界錦之裏自序

一日書肆蔦唐丸來て曰。例の小冊の案じはありやなしやと。予答て曰。まだある〳〵と。素癡な道念こる樣に。安請合にうけがひて。ト執笔た所が。無ものれ錢金とよい思案也。蓋妄作の茶表紙も。年〻〳〵歲〻〳〵穴相似て。歲〻年〻趣向新しからざれバ。一ッぐつと捻てみた。青樓の㊙の世界。夜の景色の花美とは。うつて變た案じの小冊。此奴は一ッ新織ならめと。其儘錦の裏と題す而已

觀㆔琉‐球‐人入㆓江戸㆒日

山東 京傳撰

倡門至日

亭午之圖

附言

宋玉ハ好色の賦を作りて色情を戒紫氏ハ五十四帖に艶言を述て色欲を戒む是皆佛の譬諭方便と異なることなし但し虚妄の著述をなし淫蕩を傳ふるに似たれとも必す其戒を忘れす喜怒哀樂の人情を述て勸善懲悪の微意あり遍く諭をとらバ幼童を賺し戒るに餳を以し灸を以てするがとし則餳ハ譬諭方便なり則灸ハ仁義五常なり然れバ此小冊に教訓の二字を冠しむること所以なきといふへからさる乎観人宜察也

青樓晝之世界錦之裏

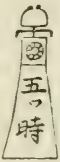
山東京傳戲作

【五更烏】ガア〳〵〳〵〳〵【晨鐘】ボヲウン〳〵〳〵〳〵紙砧の音コト〳〵〳〵〳〵商人の聲油あげ〳〵〳〵〳〵夫神靈矢口渡道行の文句目ならふことなら夜の明ぬ國に生れていつまでもと云ゝ是戀〳〵の常情をよくいひかなへし妙言なり浦島が珠匣硝子の梳皿にハあらねど明けてくやしききぬ〴〵の其情あいは昔から詩哥連誹淨瑠璃小唄談儀說法夜講釋川施餓鬼でなければ廬船へ乘たとなき老仁日蓮記でなければ操芝居も見た事なき姥にいたるまで唐の和の千万人口のすくなる程いひつくして今さらいふも愚癡なれど花炮家と娼家にハ晝といふもの世の中に絕てしなくもすむものなり

爰昔後一條御宇攝州河邊郡神崎之廓吉田屋喜左衛門云有妓家

それが二階の朝景色杯盤狼藉廊下には懸盤に杯臺茶臺のうへに茶碗をのせさも居合ぬきの踏臺のごとく傍には輪切の乳柑の皮の下に杉箸の折二本月に霞れどでごんすといふかたちにすてゝ有帋くずは物日の浴室の三方のごとく重ね上草履は女護の嶋の入口にひとしくならべ小便所の嘔吐は落花のごとくちり假母室の火鉢は螢火ほどに消のこり梯の下には文をならべ門に塩を盛雛妓の鬢差逆に飜り了鬟の前髪横にみだれ長く寢短く臥し昨夜の西施は今朝の無塩鼻のうす疱瘡首蓙の疵あくるけびしきかつらきのかみの毛のうすきまであらはにみへお坐のさめたるその中にも此吉田屋のお職にて∧•のおいらん夕霧ときこへし神崎一の全盛にて木地から磨た面屋の木偶夜光珠の晝見ても光りのうせぬすがたなり朝かへりの客を茶屋まで送てかへりしとみへ【夕ぎり】ヲヽつめた　トはしごを上り後より振袖新造　【そらね】　さむそうなりにてあたまのしらがもとゆひのさき雨ほうを紙にていはえおいらんの中をりの駒げたとしぶんのげたとさげて來る　ヲヤもふそふじかきたさふだいつそ匂ふよ　らゝかにへねずのばん多くのあんとうをならべさうじしてゐる　【夕】起介どんソレ足から血が出るよどふした【ねず】臺のものゝ松の釘でふみぬきをいたしました【夕】ヲヤあぶねへ　ト座敷へはいりしかミの火鉢にかけてありしあかゞねくさいさはを一口のんでみてこほし火ばちの中をかきさがして　コレそらねさん下におきがてきたらうちつともつてきな【そら】アイ　ト下へゆく　【夕】あたりをみまへし次の間の戸だなの戸を四五寸あけて顔さしいれ　さぞ氣づまりでおざりんしやうト　いふ所へやりてのこへするゆへひつくり戸だなの戸をぴつしやりほどなく來る　【やりて】おいらんお早ふござります【夕】へ戸だなに身をよせかけてさあらぬてい　見なんしい

ゝ天氣でおざんすねへ「やり」何さくもつておりますものきのふはモウ大にくたびれましたよ「夕」やう／＼おち付ホン＝堀の内さんはにぎやかでおざんしたかへ「やり」アイ納手ぬぐひはすぐに懸させて参りましたよ「夕」ソリヤアもふおかたじけなふおざんしたモシヘ寸間ミなんし夜舟さんの寐たなりを「やり」ホン＝ねへ トこなたをミれば番頭女郎「川竹」かゞミぶとんの七ツすぎをかしへもちにしてねてゐる其わきにふりしんの「よふね」同しく「あしかの」たゝミの上へじかにねてふとんかぶりまくらをはづし死人のとし「やり」此子たちもなりばつかり大きくつて客人に出ろといへばいやがるしこまつたものでござります「夕」さきつからわからぬ寝言をいつてゐゝすれな「やり」馬鹿らしいねへ トいふ所へ「そらね」は火入へ火を入て持来る○折からうかれかまびすく新たち大ぜいきやくをつかまへてきたる「客」しづかにしてくれげへぶんがわりい 留袖の新「なべづる」氣がちがつたさふさてん／＼がわりいとをしなんして人のしつたとのやうに「客」きのぼせがするはへ ふりしん「うで巻」はたしらはぬしのおかげでくらいうちからひへかたまりいしたは「戀かぜ」いゝむしたァぬしがはじめなんしたらう トロ／＼にわめきてらうかを引てゆく新たちへこれなぐさミ半ぶん世きやくへくものすにかゝつたとんぼうのやうに大きななりをしてちゐもなくづきんはよこつちよにおちかゝりのろきなりにてをく二かい「ぐち里」がざしきへ入られるこのとき中の間の

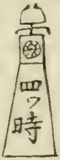


かくて仕着せのふるいふり袖をきせふくろうに小鳥のたかつたやうに新造とりまきむだをいつてちやうす「うで」たばこもなりんせん「なべ」今にぼうさんにしておあげ申ンス「戀」ぬしをぼうさんにしたらどんなだらうノウ「うで」しう／＼だのぼうさんに似てきなんすだらう「なべ」どうかもう氣のせへかぼうさんじミてきさしつたよ「うで戀」ホン＝ねへ「うで」茶やも

にくうおざんすこんちうのれんをはづしてきた時【なべ】あんなに口ひろいとをいつてノウ【戀】マア此町をとめてやりイすがいゝのサ【なべ】戀かせさん竹村のめへゝひきすりをぬぎすてゝきたからとつてきなんしよむだ夕さんわどうしたの【戀】あの子ハ二町めのどぶへふんごミんして下で足をあらつて居なんすヨぬしハわたくしをひつかきなんしたちよつとミなんし血がでんすハ【うで】わたくしが袖をバおやぶんなんすし又お針衆に小言をいはれんすハ　トすきなこといつてゐるきやくハ多勢にぶせいたまりんでゐるところへゐぎとう〳〵としておいらん【ぐち里】來りばからしいおめへがたァしづかになんしへどふでよび巾さねへ客人だからこつちのりやうけんの通りにするまでハぶしつけが有ちやわるふおざんす　ト是よりむつかしくなる茶屋ッいろ〳〵手を入ることいつめとゞ高くて夜具安くて着ものぐらいのいたミと見へるなり北となりの部屋持の女郎今おきたとミへかゞミにむかつておがいつかつて居る所へかぶろ【つなじ】下よりたきて來ス仕着せ布子のよごれて黑光りにひかるやつに板〆ののろまいろになつたほそおびをしめ目をこすり〳〵ねほけたやうなつらなり【車井】つなじか【つな】アイ【車】いゝところへ來たたばこを吸付てくりや【つな】アイ　トまだ此さしきにハ火がなきゆへやりてべやから吸付て來ていだす【車】エヽモべらぼうらしい火がきへたハ　トきせるでたゝく所へ【茶屋男】いそききたりモシおいらん蛙聲様がおたばこ入をおわすれなすつたさうでございます【車】床の中にあるか見ていつてくだせへ【男】ハイ　トさがして爰にございました【車】まだこんたの内に居さつしやるか【男】左様でございます　トまたいそぎゆく所へまた【茶屋女】來りモシおいらんおみをお出しなされまし【車】けふハ人がいくか【女】つかれします【車】そんならちつと

まつてくだせへナコレこんたのとこのいつもの瓜の香〳〵ハもふねへか【女】まだござります
上ヶましやうか【車】そんならみを書うち持て來てくだせへ後生たヨ（扨下に、𤭖をかきにして文字をあいにて吉田屋と筆ぶとにそめ出したる）のうれんをはんぶんまき上ケてありこちらの牛台にハかぶろがたちさうにこしをかけきんかんのほうづきをもちあそびにしながらかもをいつてもらつてゐる○もつともかぶろのかミは男のかミゆひがゆふなり【かミゆひ吉平】コレじ
つとして居ねへか手めへのやうにいごくものハねへ（そばにまつてゐる）【かぶろ】吉平どんおれうハモウ奴
嶋田ハよして針うちにいつてくだせへおいらんがさういハしつた（今一人の）【かぶろ】何のつぎはお
れだよ（今一人の）【かぶろ】あつかましい何きさまなものかおれが先へ來たハ【吉】此子どもいらァ
ようめへ朝〳〵いがミやふちつとしつかにしねへか（又こちらの庭にハ山のしゆくからくろ出入のさかなやはんだいを持こミならべそばにハうハりやうり番の）【文
介】（かろさんをはき立て居ろしたりやうり番の【源七】もゐろ大黒ばしらのきハ上りはなにハていしゆ【喜左衛門】きせるのさきでさしつしてゐる）【さかなや】コリヤおめへさんいゝ鯵で
ござります生姿でなくッちりやァこんな丈長ハとれません【喜】文助すいものざかなハそれで
いゝか【文】ハィ此生貝ハミんな女貝たノゥこいつァいゝ地鮃だ【さかな】いゝ魚でござり
ます【源】だんなさん生海鼠もちつとおとんなさりまし【さかな】此海鼠ハ榎堂でござります
【文】車をちちつと入レさつせへ【喜】なぜ魚がありながらそねへに高ィノゥ【さかな】しけ
のあげくでござりますからやすくござりません

かくて



（二かい【夕ぎり】が座しきにハしんぞうミなく〳〵おきろばんとう【川竹】ハむらさき）の中がた小もんの七ツ半ごろの小袖をき黒こはくの平ぐけくろちりのあつまもやうのこいつもすこしきたつた小袖をうちかけあたまにハけさおきてかミのみたれをかきあげたまゝすぐにさしたとゝへゐつげのくしをちよゐとおつこちそふにさしてゐるこれハこゝの二かいの新そ

らがしらにてよほとさべくかたちなりしかし年ンのあくろもちかけれバ骸骨のすて所にまごつかぬやうにしなトいゝたきふうの女らうなりふり袖【あしかの】【よふね】ミなあいびらうどの油やのざうきんのやうなぬのこほそおびゑりへまつくろおしろい所〳〵に雫のきへのこりたろがごとし【夕きり】ハ無心をいつてやつたきやくのところからきたへんじの文をよんでゐる【川竹】ししんさうじをしかけほうきを持てうしろからのぞいて居る【此所の二人がすがたさゝ女らうのかんざんじつとくのとし】【よふね】ゆふべミへなんだ哥がるたが夜着のそでからでんしたよ【夕】それミなんし【川】おめへかたァきり〳〵湯へはいつて來て床の間やれんじをふきなよ何もかもごミだらけになつて居るハいつでもあすこらがくさらしいョ　トいひながらしかそのはいのかたまりをひろひ出し多がらを引さき火ばちのふちをふいて居る所へかふろ【雫の】來る　【川】雫のや湯にだれが居るミてきや【雫】今見てめへりィしたがそとの人ハだれもおりィせん【川】おいらんお出なんせんかへ【夕】ワたしハもちつとして參ンしやうよりつと今かんがへて居るとがおざんす【川】コレあしかのさんわつちァが湯へいつて來るうちおいらん膳もわつちか膳もしておこうしお茶もワかしておかうかしそれからァノまあ〳〵それをきり〳〵しなんしへ雫のやぬかをいれてゆかたをもつてあゆびやそしてからァノほう〴〵へいつて書付をとつてきや早くしやョらちがあかねへときかねへョおいらんがあんまり氣をはくさつしやるからミんずるくつてなるもんじやァねへ　トいひすてゝゆへゆく○湯へゆくときつとの所へつげのくしをさかさにさすハかみのくせをなをすためなり○そのあとへ小まもの屋あたまへかんざしを二三本さし荷をかたにかけて來りざしきをのぞきミて　【小間物】あたまへさしてゐたつたのつくりものゝかんざしをぬいて　おいらんへ此笄はこんだ挽せやしたがとんだ甲がいゝから取てをきなされませんか　トミせる　【夕】とつて目にすかしミて　ホン　ニこりァいゝよ死ぬほどほしいが今ハちつと相談ができんせん

かさ付といふ事のわけハ前へん四十八手にくわしよつてこゝに註をもらす

からあした迄うれすにゐたら持てお出なんし【小間物】アイ左様ならもしけふ中にうれすれあしたもつて参りましやうおめへさんのきにいらねへとおつしやつた方のしのぎをこつちへつかれさるとやすく上られます【夕】ツリヤア どふともしんしやう トいふ所へ【川】ゆからかへる わたしが此ぢうのかうがい子うきがでんした【小間物】なをして上ケましやう 所へおく二かいよりへや持の女郎来り【あだ崎】モシへ此櫛をついできておくんなんしなどふぞ早くおたのん申ィすよ【小間物】かしこまりました トいふへこいつゆふべいろおとことくぜつしてをられたくしの死がいとミへるなり所へまた【ふりしん】り来 指の輪れまだできんせんかへ【小間物】あすれできます紋所れ と をひよくだつけね【しん】これさしづかに云ておくんなんしナ馬鹿らしい トはづかしかるとしんざうのせいいつぱいのたのしミならん【小間物】ちりよつと浮里さんの所へいかねバならぬ【しん】浮さとさんのとこにれたしか居つゝけが有よ【小間物】ホイ トおくの方へゆく〇【夕】かざしきにハ此うちふりしんはし箱とまき系の八寸を出しちやづけ茶わんをならべる火鉢にかゝりし上ひんのゆへチン／＼とわくそばにハ湖月集の本のうへゝ茶をのせてをきたばこぼんの引出しを引出してをきたばこ入にしてたく【川】コレゆきのやおれがくし箱乃鎖のをりる引出シに金があるから二朱持ていつておあしをかつてきや鍵れ用だんすのひき出しにあるぞよ【雪】アイ ト用だんすの引出しへゆびをたてつけ あいたゝ トゆびをなめ／＼ こゝにやァ鍵はおさりィせんよ【川】ヱヽうそ／＼しめへョ手めへゆふべいれたじやァねへか トかふろがとつてきたかのキのしやの書つけをミてきに入たものへしるしをつけとりにやる 夜舟さん茶だんすにじやぜん豆ととうからしがあつたらうこゝへ出しな【夕】貝のはしらを取にやつて帆立

貝でにやうしやァおさんせんか【川】とりにやりんしやう【夕】行平鍋ハどふしたノゥ【川】だれかとふにわつてしまひッしたあしかのさんけさの惣ざいハなんだ【あし】たしか芋に油揚でござりイすョ【川】おそれるね【夕】あやまりいす（トいろ／＼食ごのこたしてやう／＼あさおまんまをたべてしまひ【夕】ハいろ長くうがひをつかひたばこ二三ぶくのんですくにゆへゆくかぶろハゆかたを持ついて行そのあとへ円まちの）【ごふくや】来り きのふの雛形ハお氣に入りましたか【川】いつそようおざりイすあれにきめんしやう【ごふく】むくハやつパり【川】ともむくにしておくんなんしそしてこんどハ禿物の丈をもちつとながくしておくんなんしへ【ごふく】かしこまりました（トゆく）【川】アヽモシ／＼（トよびかへし）序にわつちがはきかけにするきれをなんぞこつくろつておくんなんしコウ（ト）そして紫鹿子のゑりを一（ト）かけよこしておくんなんし【ごふく】かしこまりました（トいふ所へ）【かふろ】一人来り 八十兵衛さんへおいらんがちよつとお出なんしッサ【ごふく】手めへハどこの子だ【川】車井さんの所の子ッサ（トこふくやへたくへゆく）【夕】（へほどなくゆから上りゆかたでこゝをふき／＼来る）きゝなんしたかへぐち里さんの客人ハつかまつてきなんしたそうだね【川】さうでござりイすとさちやッたァすこんすめへ夜船さん身ごしれへをするやうに何かを出しなんし【夕】あしかのさん髪ゆひのお吉さんが二階へきちやァいねへか見てきてくんなんしお針部屋もこてきなんしよもしまだこざァ下タの中郎の人をたのんで呼にやつてくんなんし（中郎と云ハ内しやうの小づかひをする下男の事也是も此里にかぎりたるとばなり）【川】雪のやおは

（はきかけとへすそまへしのと此里にかぎりしことばなり）

ぐろをとつて來てそれから楓屋のかよひをもつていつて板を一本ッとゐりつけとくことすきと
黑もつてへを取てきやついてにワる紙とたばこもとつてきや夜舟筆楊枝をだしな トいひつけるふでやうじとへおはく
ろ筆の事なり【よふね】へ【夕】と【川】がきやうだいをならべ。くしだとうっはんぞうなどとりそろへるほとなく【雪】へおはぐろをかつてきて火ばちへのせてたく【夕】【川】はんぞうをひざのうへゝのせまづ筆やうじを火ばちのじやうの中にてかきまへしかゞミにむかひ
かねをつけろ○むかふざしきにヽ床の間の上にさかづきをドメでしばつてのせてあろこれまち人のぐへんなるべしとめ袖のしんかんざして少入の火をはさミ火ばちへ入ながら【花哥】モシへどうしてやりんしや
うねへはらがたつてくやしくつてはりさけィす おいらん【板琴】めしつぶだらけなすゞり箱ひきよせ本にとぢた紙を一心にかいて居ながら それだ
つてもおめへ手しやうもミねへ事がなんといはれるものか胸でおさめてゐて氣をつけなんしな
【花】なんでもワつちがすいりやうにちがひおざんせんゆふべのやうすがさふておざりィすも
の トいふハきやくがほかの女郎とのいろ事をけとつたとミへるなりところへふりしんさうかうかへいつてかへりふり袖をはたきながら來り【花】がのんでおいたきせるのをだざめぬやけぎせるのうへヽうつかりと手をつき【げび川】ヲヽアツヽ
く【花】そゝつかしィ子だョ【げび】わたくしハ月水虫がかぶつてなりィせんモシへ今身のう
へを見てもらいんしたがねワるい星にあたつておりィすッサどふしやうノゥいつそくらうだよ
【花】おめへかゝさんがさつきあひにきたしやァねへか【げび】もふかいりんした【琴】ハ
しんに紙を書て居ろ所へまハしかたの【牛吉】來り お茶を一ッくださりまし トちやをくミ兩の手をかけてもちちやわんで手をあたゝめながらあついやつをすゝりく いめへましい
中の町へいつて來たがさつはりかけがよらねへこれじやァ此ものめへハ蜜柑でこせへた猿をミ
るやうに首でもくゝらにやァならねへかけびまのでたもかつこうのわりゐもんだ【げび】ミん

なさう申したつけ〔牛〕人の氣もしらねへでしやれるよなんぼしやれてもまたやきばの道ていきものゝとをらねへおれが水あげをしてやらうといふに〔げび〕（ざらげまき糸のくしでびんをなでつけながら）しつたかむしがいゝゝ〔牛〕何むしがいゝなまびのむしがいゝが聞てあきれらァ〔げび〕わりィ酒だよつたら供部屋へいつで寢さつせへナ〔琴〕げび川さんふうじ紙をもつて來てくんなそしてたんすのかなものもちつと磨てくんなんしョ〔牛〕ホンニちつとミがきなせへ賣藥店と女郎衆のさしきゝ簞笥が光らねへとしんこうがうすい〔琴〕きう吉ッどん男の手てなくつちやァわりィことがあるからのちにみの上書を一ッしてくだせへそして田まちへいくものがあるならしらせてくだせへ治丹坊の三百丸をかつてもらひてへ〔牛〕大かただれぞめへりましやう（行ト）〔琴〕わつちや羚郎さんのとけへ淋病の藥をこせへてやりてへがけふはまにあいンせん（りんびやうのくすりを手製にする事へどこの二かいでもよくするとなり予さるおいらんより此秘法を傳るあまりたわけなればこゝにしるす）○黄蓮○甘艸○丁字○山梔子、○隈篠○燈心○梅干黑燒○阿膠○松子○女陰毛（三スシ黑ヤキ）以上十味等分ニ分煎シ用ユ（三すじだけが大わらひなり）〔琴〕そりやァそうとけふはいつかだのゥ〔花〕いつかでおざんすか〔げび〕わつちもしりィしなイ（折からおもてにへいろ／＼のあきんど通りさま／＼のよびこゑきこへる）▲さんばさう／＼なんきんあやつり▲鏡磨／＼▲さくら草／＼／＼／＼▲針がね／＼〔げび〕モシへあれはりがね／＼かきいしたから十二日でおざんしやうヲヤこもさうがきたよ花哥さんごら

うじいしちよつとりつばなこもそうざんす【花】とれ　ト立てゐるうちにはやしもの方へゆきすぎるゆへそバにあるすがた見をとつておもてのれんしへうつしてみてゐる所へしたより【中郎】来り　たのまれましたる此かんけをちつとおつきなすつて下さりまし　トくわんけ帳をみせる【琴】いくらほどやるのだよ【中】一トすじばかりおつきなさりまし【琴】ウヽ今たさしておかう　ト云所へ来る

【中居】げび川さんこつちの御座敷に皿が一ッ来ておりやしやうぞておくんなせへ【げび】おさりいせん【中居】おめへがたハめへようそんた事をいゝなさる此ちうもこつちに平のふたがござりやしたわたしらがあづかりだがらなくなつちやアめへわくでござりやす馬鹿らしい　ト小言をいひ〳〵ゆく【げび】しつたかしらねへハとはぐらかす折ふし　らうかにてざしき持の女郎【うれき木】すこし心わるいとみへ白ねりのはちまきおはぐろおとしてしらはへすごきかたち【禿】にゝゝこすり【うれ】コレあのゝあきんどやへいつてすゞの香箱との下モの木薬屋へいつて血とめと銀箔をかつてきやそしてかへりにお針部やで綿をちつともらつてきやちつときをきかせやヨ　トこいつばんのしたくとみへるなりつ折からあらひはりやへみのハから来りかし本やへなくした本をせがみ茶わんばち屋へ代ロものをみせ多つかひは形書をうけとり炭屋ハすみのはねてやけどした尻をくらふところへもはや【ゆばん】湯をしまひます〳〵　トニかい中をふれる　こなたの【夕ぎり】お座敷にへ女かみゆひ【お吉】来りかみをゆふ【夕】へかな付のとうしせんをよみながらいわせて居る　大道直如髪春日佳氣多ヲヤばからしい此子ハよくすいつけてくりや【お吉】おいらんまだ塩だちをなされますかへ【夕】おとついで日きりがきれんした【吉】そりやようござります　トいふ所へちや屋の【下女】もとのきれでめむふきながら来り　モシおいらんへ此間の扇を書てくださりましたかたび〳〵客人の方から

とりに参ります【夕】なんぞこのミがあるかノゥ【女】おまへさんのお名さへあれば【夕】なんでもいゝかねへ書(かい)ておきんしやう【女】おたのん申シます トかへる【吉】ぜんてへおめへさんにやァてがらよりしのぶがよく似合(にあい)ます【夕】それでもしのぶにゆうといつでもお茶を挽(ひき)ンすからゑんぎがわるふおざんす ト此うち【川竹】たばこつけて【吉】にやるあぶら手ゆへ紙でもちそへてのむ【川】雫野やこれをこぼしたきや トはんぞうをつき出す「はんぞうの中にへおはぐろのつばきが八ぶんめほどあつてまん中にべにのつべきがふたちよぼありワるがミと見す紙のくづふきがら五ツ六ツあり」れんじにへ小そでかけてほしてあり所〳〵べにいつきたるさらしの手ぬぐひのあらひこくさきキつもほしてあり○ほどなくかこもゆひしまひ【吉】へ外へゆき【川】へてうづにゆきあとにへ【夕】ひとり火鉢のまへにしよんぼりとゑりにかほ半ぶんうづめてものあんじ姿にてゐる杉ばしを火はしにしたやつもへしさりてけぶる此とき中の間の

【夕】へあたりへきをつけたゝんとする所へ【茶屋ノ男】來りモシおいらん晝狐(ちうこ)さんがお出なされましたよ【夕】ホンニか今じきさまいくからマァ雫野を先へつれていつてくだせへ【男】ハイおはやうお出なされまし トいひすて行【川】來る【夕】モシヘ【川】かてゝくわへて馬鹿(はか)らしいねへ【夕】とうしんしやうねへ【川】わたくしがむねにおざんすから氣(き)づかひせすといつて御出なんし夜舟さん着ものをたして上ヶまうしな【夕】へせんかたなくきものきかへろ○上着へ白なゝこにむらさきのふきゑおとしの源氏雲の中に四季の草花を極さいしきの繡仕あげもん所へ藤の丸むらさきのよりいとにてぬひむくへひどんすのどうにへりへとびいろのむぢ八丈におなじめやうをいろ糸にてすがぬひこびちやとんすにひちりめんのうらをつけししごきをしめト姿見にむかつてゑもんをなをした所へどんなこけな判人にミせても七十五匁とミへるおいらん也【夕】ゆきのやとなりの浮里(うきさと)さんの所に居(ゐ)つゞけがあるじやァねへか【雪】おざりイすョ【夕】おれがさふいふとつておめへの所の子ともをかしてゝうしを一ッけへさしておくんなんしといつてきやモシへおた

のん申ッすにへ【川】きづかひなさりィすな【夕】かならづへ トいふ所へてうしをもつて來る【夕】ハちやわんでぐつと一ツのミ其いきほいでいづる中の間にハ【亭主喜左衛門】いろりのそばにかんばん板を本帳へうつしてある○かんばん板といふは女郎のうつたかずをかりにひかへてをくぬり札の事なり△これ也】【夕】をミて おいらんおはやいの トこえをかけるゆへ【夕】そばへゆき だんなさんゆふべハおありがたふおざりイした【喜】すきだときいたからもたしてやつたけふハ何か店の衆の出番か【夕】イ、へ萍屋のきやく衆でおざりイす【喜】フゥちよつとうしろをむいてミせなヲ、てへぶ髪の風が人がらがよくなつたサァ〳〵客人かまつてゐやう早くいきな【夕】いつてまいりイしやう トしんを同道してちや屋へゆく【喜】【夕】がうしろ姿を見をくり 夕霧も頃日ハひれがでへぶついたノゥ【女房】左やうサだん〳〵よくなります 扨臺所のけしきハりやうりばんの一ことのさいちうかまほこをたゝく音井戸ハ車のまハる音とんぶりのわれた音米をつく音かしましくかふろハ大せい長はんだいをとりまいてひろめしをくひ火入をもつて來るふりそでしんざうあれば茶のきうじするひつこミかぶろあり庭にハ臺のものゝ花をもちこミかたへには酒だるの口を立ろありいりざけのにほひはなをつらぬき湯氣ハきりのふかきがとし内證へあそびニきてゐる男【酒好】三河嶋の湯へお出なすつたか【喜】此間めへりやした【酒】おへゝけへハへ【喜】ゆふべ茶屋のてやいをよんで一妓点をいたしやした一突出しの白鞘ものをとりたてゝといふ句をしたがどうだらうね【酒】ゥ、句づくりがおもしれへこいつァいきやしやう トはなしの所へびやうきでおやのもとへあづけてをくともへる女郎の【おや】來る【喜】ヲ、ごさつたかどふだのうちつともいゝかの【おや】とかくどうへんでござりまして【喜】ソリヤアこまつたもんだ早くよくしてへもんだのう【おや】ハイ【喜】マァ飯でもくつていかつせへ 折からのうれんの内へ

さま〴〵の物もらひは入る【天合道心】南無薩婆哋哆伽多韓盧枳帝唵三摩囉三摩囉吽【喜】あの子やそこへしんぜろ ト一文なげ出すそのあとへ【こつしき】四ツ竹「すまふヲ、とりイ、にイ、てしらァふぢイ、げんゥ、だ アチヨコチヨ【らう人】江口クセ〽すいてうこうけいに。枕をならべしいもせもいつのまにかれへだァつらん【喜】ア、うるせへ ト又やろ所へ【やりて】月花さんのかぶろがござりませんどうぞひとりおかしなすつてくださりまし【女房】このぢうとなりからかりた子ハどうしたの【やり】ひつでかへしました【女】こなたのしつた所にやとふかぶろハあるめへかの【やり】きうに心あたりがござりません【喜】どふでけふの間にハあふまい トミせのこうしにハ【かぶろ】貸場やニイ人ゥ引〳〵五色の糸とやうしをもつてきさつせへ トいふへこうか神へぐへんをかけろ女郎のつかひなるべし扮又二かいにハおくの方ニて【女郎】澤邊やァ〳〵【かふろ】アイ〳〵【女郎】コレヨ楓屋へいつてのその二朱と百のたばこ箱を紙でつゝんで水引でいはへてもらつてきや又太神樂をミていめへよ こいつ三両ぐらゐのと二花のかへしとミへるなり【女郎】ハらうか中をふいてゐるところへ【ふりしん】ゆふべの三ミせん番はだれたノゥばぢがミへねへとつてこし元衆がこゞとをいふよ トいふ所へ【夕】いきをきつてかへり【川】がミゝへいたつけ〽モシへけふハ内のしゆびかわりいとつてすぐにけへりイしたよヲ、せつねへ【川】きやく帳たつけてゐたりしが そりやァよかつたねへ【夕】今まで水戸尻の籞におりイしすよ【川】こゑをひそめ モシばんにハかへつて人めが多くなりんすからきうにしやくのおこつた顔で本ッ間へはいつておやすミな

んし【夕】さうしてもようざんしやうかねへ【川】わたくしがいゝようにはからひまゝす　ト人なうかゞひか
の戸棚へかくしおきし色男を出しとう／＼しなをあつかひあはせてしやうぶの中へ入る○そも／＼此いろ男といつぱふぢ屋のひとりむすこ【伊左衛門】といふもの也【夕ぎり】とあひぼれの其ていこうじてぶしやうとなりかんどうのみとなりのはやこのごかしへのうら店ニ
【夕ぎり】がなさけにてかくまひおきしがはふべ人めをうかゞいて二かいへ上げ戸だなへかくせし折わるく出そびれてけふ一日しのばせおきたるなり【伊左衛門】ハしやうぶのうちへはいらひやうしふでのおさまぱつしやりふんでごつくりせしもすねにきず持人心也【夕】
小ごゑにて　さぞたいくつしなんしたでおさりィしやうわたくしが自身にしてハ目にたちんすからい
ひ付てハおきんしたがひもじうハおざんせなんだかへ【伊】ィャ川たけがおり／＼氣をつけて
くれたからひもじくハなかつたそれに小便も氣をきかせて楾へ蒲團の綿をむしつて入レ音の
せぬやうにしてくれたから何から何までこまつたことハなかつた【夕】トいふかほつくぐもて　ホン＝おま
へさんをこういふはかなひ身にしたもミんなわたくしがとがでおざんすかんにんしておくんな
んしへ　トいだき付たるきり／＼すなくより外のことぞなき【伊】愚癡なことをいふものだあまねく世の中の女郎買金の澤山あるう
ち女郎の眞實ハあられれぬこういふ身になつた所を見ついでくれるがまことの心てい　ト此とき中の間の
八ツ時　もはやひるミせ出て中あふミ流の本てうしのすがゝきをひく二かいハしづかになる○折から此となりうき里が次の間にハ新造【江戸まち】【なには】【ミやこ】哥がるたをとつてゐる【夕】その心ハ
とゝいてもとゞきんせんハわたくしが願ひ人目があるから人なミに笑ひ顔もしておんすがおま
へさんの事を思ひ出しんすといつそ死たくなりィす　【降】【ゐど】三條院こゝろにもあらでうき
世にながらへば【ミやこ】戀しかるべき夜半の月かな【なにハ】ヲットこゝにおざりィした

〔ミやこ〕ちらさぬやうにおとんなんしへ〔ゐと〕和泉式部あらざらん此世の外の思ひでに〔伊〕今一たびの勘當のわひもすミ此二かいへもはれて來てあれるゝやうになりたいものじや〔夕〕ホンニまんばんあれれんした時ハたくさんさうにおもひしたか此ごろハ此やうなはかない事さへ大ていの心づかひしやおざんせん〔伊〕さうさのう〔ゐど〕うしとミし世ぞ今ハ戀しさ〔ミやこ〕たしかこゝらにおざりィしたよ〔ゐど〕そこにあるとつておくんなんし藤原義孝君がためをしからさりし命さへ〔夕〕おもひなをしてたまさかにお目にかゝりィすをたのしミにながらへておりんす〔伊〕ハテしんで花實が〔夕〕咲もしんすめへ〔伊〕命あつての物だねサ〔なにハ〕ながくもかなと思ひけるかな〔ゐど〕コレまんがちにしなんすなへ〔夕〕とハ思ひすがまだ丸で八年といふねんなれバ〔ミやこ〕いかに久しきものとかハしる〔夕〕もしそれ迄にひよつとマァ〔ゐど〕右近ワすらるゝ身をばおもハずちかひてし〔夕〕そ

ハテたとへ此うへどのやうに
思ふ二【夕】そりやほん
を思ふとしんにかなしくなりんす【伊】
【なにハ】身をつくしてもあハんとぞ
でおさんすかへ【伊】これさこへが
【ゑど】たかしのはまのあだなミは
【ミやこ】かけしや袖(そで)のぬれもこそす
れへかゝるところへやり手のおよくや
うすハのこらつミとゞけたと聲かけて
屏風(ひやうぶ)引あけ頃日(このごろ)うちあやしいとおも
ふたがけさ程ちらと見つけてをいて
戸棚(とだな)のうちとぼけた顔(かほ)で氣をつけたが
あんにたがハす此しだらわたしかかほをふ
ミつけてなんで役儀(やくぎ)がたつものぞ此とをり内證(ないしやう)へゆきだ
んなさんに申ッすこれワかいしゆや此男めを引ずり出したがよいわいの
とわめくを聞(きゝ)つけわかい者われも／＼とかけ來りにぎりこぶしの雨(あめ)あられむ

ざんやな伊左衛門があたまの上にふりかゝる夕霧なミだもろともに中をへだてゝ身をおしまず伊左衛門が身をかこひ是やむごらしいどふぞいの皆の衆またしやんせ伊左衛門さんにとがれないこの人さんをふつならバまつわたしからさきへぶちころしてしまはんせきゝいれなくハ是こうとそバにありあふ鏡臺のかミそり箱に手をかくるやり手ハあはてをしとゞめ是夕霧さん大事の代物おまへにけがさせてなるものかともぎとる其間に大勢より伊左衛門かたぶさつかんで引出すかゝる折からおもひがけなき次の間の長持のうちよりもャァ〱夕霧どの心底ミへたと十段目の大星もどきに聲をかけふたをしあけてぬつと出たる一人の男若いものゝきゝうでつかんでねぢり上ヶ今一人をバちからにまかせてをしたをしこちらもけるあちらもけるける〱〱とけちらかしてぞ立たるハこゝちよくこそミへにけるやり手ハそれとミるよりもャァお前さんハ浮里さんのお客人いつの間にどふしてマァ其中にといふにもかまハず此男伊左衛門がまへに手をつかへいまだ顔をバおミしりなきゆへ御ふしんに思召ましやうがわたくし事ハ京都の出店に居り番頭を仕る算右衛門と申ものでござります此度用事あつて此地へ出大旦那におめにかゝりうけたまハれハあなたさまハ御かんどうとの事これハしたりおわかい事なれバ一ッたんの御あやまちハしかたなし御心底もなをしならバ御勘當のおわびも申二ッにハ是なる夕霧殿にさほ

どまで御執心なさるゝも是赤縄のむすびしならん心さへたゞしけれバ遊女とてもくるしかるまじ夕ぎりどのゝ心底虚か實をとつくりと正した上にて根引をし目出度祝言させ申ンと扨こそあとの月より隣ざしきの浮里が客となり律義といふかへ名を呼入こミしが猶も實否をたゞさんと今日わざとゐつゞけをし先ほど茶屋に申シふくめかへりしていにもてなして人なき折をさいはいに是なる長持に身をしのび屏風のうちのむつましとをきゝとゞけ夕ぎりどのゝまとの心をミぬいたうへハ今日中にてい主吉田屋喜左衛門に逢ひ身うけの埒をあけ申さん其手附金ハ則こゝにとくわい中よりさいふとり出し伊左衛門が手にわたすうけ取て中をミれば縞の財布の一ばいまし是ハ錦のさいふだけ耳をそろへし五百兩金にそへたる一ッ通ありいぶかしとひらきミればバ何〱其方儀心ていなをりゆよしきこへゆ間今日より勘當ゆるしゆものなりと書しハたしかに親の手跡ァヽかたじけなしありがたしと伊左衛門夕ぎりもろともに手をあはせてふしおがむ 折からてうと中の間の

前路日將レ斜

是より錦の表とへんず夜の景色のはなやかハ今まで多くあり來りの小冊で御ろうじろ

後叙

夫熟大門視バ。實に鬼貫が句の如く。骸骨のうへを粧ふて。花の郭の喜怒哀樂。迷へれ眼中西施を出し。悟ば鼻中臭氣をいだす。迷ふも悟るも。有漏路より。無漏路へ迯る。茶屋か提燈。人間わづかナソレ五十間道。一切の衆生身の用心。さつしやいましやう。

旹寛政三年辛亥春正月

京傳自跋

晬の辭書

粹の筋書叙

關關たる雎鳩。窈窕たる淑女。おとこのおなごを慈しめるハ。もろこしにもかわる事なし。日の本のやまと歌も。ありやうハ戀の媒にして。うつぼ。竹取。紫氏。清女の物がたりも。みな戀てふやさしみを盡せり。戀にかしこき人を粹といふ。また通ともいふなれ。其通に大通あり。小通あるなり。其集る處を花廓といひ。川竹といふ。洒落てハ廓と訓ンし。島と唱ふ。爰に茶屋あり。揚屋といふあり。呼やといふある。太夫あり。白人あり。中品下品。いろ〳〵其品をわかちめ。外題を粹の筋書といふ。舞臺ハ新町。蔦の内。新地。新堀。新やしき。新狂言を新

板の。作者れ浪華の池のへ鷺(サギ)見(ミ)。首(クビ)を延(ノバ)して東西(トウザイ)東西(〳〵)。

大序(ジヨ)のはし書左様にしかいふ

寛政むつとし

むつき吉にち

凡例

○拾貫目つかひといふハ百貫目つかひといふも同じ三拾匁つかひといふハ錢三拾貳文までをいふ其客の品ハおの〱遊びやうの中にこゆ

○すじがきとハいへど戯場のすじにハあらず唯かたちとしなのとりあひ注の趣をかる而已

○せりふの符丁にハ客ハ〔客〕たいこもちハ〔頭〕花車ハ〔花〕の類也見たがふべからず

○近世の書ハおの〱閨中をいふて春画のせりふをつくせりこれハ座敷のことにして閨のあなをいハず

○此書の全体おなじもやうにもあるべけれどたとへバ拾

肆のすじ書　四

貫匁客ハ鯉のすひもの壹〆匁客ハ芹焼二拾匁客ハ鳥なしの茶わんむしとわかる

右の五ケ條御すいもじ可被下候　以上

晫のすじ書

○拾貫目つかひ

むかし百貫匁つかひと藤屋伊左エ門をいふたけれどもいまハ人がかしこいゆへ十〆匁也

爰に和氣長麿といふ客ありそのむかし和氣淸麿が子孫にあらず これもいはひでしれた事なれとも氣がすまぬゆへにいふ この人の青樓にゆくハおゝく振舞の重箱してことハりいふて外の青樓へ戻る事もあり 但し講參會ハなしあつてもだいなしゆかぬ 眞四角な駕籠 當時三人してこれをかく也 草履取一人 わきざし一本きめる緒のかねきんの鞘ぎりのかつぱ着て尻からげ但しかごかきとハ別なり 手にハ草履と風呂敷包を提てゆく 但しふろしきハかいきしま也〆草履ハ二筋はなおのあわぞうり也 夜ハ提灯を持ッ弓張なり胴ふくれて眞中にちいさき紋をしるす 又箱てうちんも用ゆ 高サ六尺の箱てうちん也至て脊ひくきかたちそのかハり紋大也 青樓の門へ來ると臺所まで花車娘出迎ふ お氣に入の仲居ある時ハかならず花車なかゐいでず娘と二人出る也 座敷へ通る こいしゆ莨箱かたづけてさかさまになるりやうり人はちまきとる客ハきよろ〳〵左右を見てしづかに通るだい所にぎハふ なかゐむすめ袴をたゝむ着ものきかへる此所へ花車出てあいさつと一ッにふろしきとく やはりくらはぶたへ也 【花】ゆふべおなか 腹の事也 いたむといひ遊バしたがモゥおよろしひかへ【客】それから直に歸つてツィ寐てけふハよひわいの と薬の下にのをつける 【仲】いやまだそれからはらがいたんだそふなよふきひてゐるぜ とげさくにいふ此口上がお氣に入口とい

ふ但し此なかゐハばんたうにしてとしハ三十八九おきばんのかれともいふなり【客】そんな事たれがいふいのゥ トしんけんでいふきせる手より落る【花】モシあの子がよふきゝだしてくる【仲】きひてきませいで【花】きひてこひでといなァ しぢうなかゐのいふ事なくりかへしいふてとりもつ これわがみ そなたといふ事也 でなひ歟此ぢう 此ことばハ花車にかぎりていふなり ふごのおるするどにおあひもしたい トたかゐしらぬわいといふやうな顔してゐる 此間にげい子來る 但し五人 すひもの出る みそしるにてゆりね也此客のからぶつともゆる【ゲイ】ヨフほたへ遊べすおかた トなにもいはず日でものいふやうにいふ【客】ゆふべのげい子ハなにとやらいふたのゥ【ケイ】しりませぬわいな まのこゑハのどへひいていふ【客】いへャイ【花】モシ齋藤どンをよびにおやり遊べしたかへ これハゐしやのべんけいなり【客】おれハしらぬ【ケイ】ィャおこしなさつたらよびにきてくれといふてじやあつた【客】フゥどこへ【ケイ】モゥきゝなさんな【客】どこへャィ 味なふきゝたがる【ケイ】ヲヽモウ 坂町じやわいなトいふ所へおやまやう〳〵來る ものいはずとんと末座にすへる【客】おはやいな【ケイ】こちらへおこし ト座たゆつる【山】齋藤どンはまだかへ トげい子にいふ【ケイ】まだ〳〵 トさもセんひく 此間にべんけい一人 ひとりが齋藤也今ひとりハ刀師 役者をつれて來る 中の役者なり【齋】夜ぜんハ トさかさまになる【刀】私マアこひと齋藤ど ト皆までいはぬ【役】御きげん トおとなしくいふてさかづきをまつ 此間牽頭來ル 但し一人嶋の玉也【頭】御さかん トたかゐと肩ならべゐる【齋】もふし先頃のお羽織頂戴したがこよひこゝへとられてしまひ升た ト役者たゆざさす【客】ホヽゥ トばかりいふ【齋】なにとぞかハりをてうだい トいふ顔たいこもちきつと見てゐる但し此たいこ齋藤と中わろし【客】サァいかやうとも しんせつたいふ世にこれをよひ人といふなり【齋】ありがたひ【刀】申

いま相生橋ですゝきかんざしを賣ており升がミな銀尺長でしたものそうなあいつをまひてとるといふとかんざしが紙でしたものゆへ損じてしまふひらひやうのありそうな事じや【客】おかひなされ【頭】イヤこりや妙しや【齋】もつたいなひ事を【客】サアはやいがよひ トしきりにいふ やがてもつてくる 先百本 【刀】ミなノ\ふんだらそこね升ぞ【頭】がつてんじやノ\【齋】そこへ二三本のこしてみやげニするわい トあたまをなでる【ケイ】【仲】ヲツ トほつたり ト皆ノ\高からげしてゐる客ハ此間に床の間へ上りてゐる

【刀】ソレとりがちじや トほるけい子仲居小女郎までひらふその間にきやくおヤまにもたれ寐むる傳のやうなり 【ミなノ\】お目さまされませ【客】モウなん時じや

幕(まく) ミじかひ氣しらぬけれどもふ此くらいで作者もたいくつした十〆匁つかひハついねてしまふゆへ座敷ハみじかひものなり其代り寐間ハ長ひ間中のせりふハしらぬ

○五貫目つかひ

但し五〆匁といふハ當時三〆匁より二〆五百匁二〆匁までのきやくをいふなり

爰に家柄(いへがら)あたらしといふ客あり艸履取(ざうりとり)ひとり供(とも)す 但しかつばなし 風呂敷包ミ持す ふろしきハ百貫匁つかひよりよひ嶋也ふろしきと男ハりつばな入口から大聲でわらふてはいる 但しいまげい子にあふたといふよふすなり 臺所(だいどころ)へ上ル【客】ヤレノ\甚くたびれた【花】どちへおこしなさつた【客】寺參りノ\ トいひつゝ座敷にてわきざしをひてほいとほる但しゐんらうハそつとほる【仲】おそふから寺參りか

いな　トはなりたぬがすきるものきかへる下着ハ八丈ゑりがかへるとうハ着になる也　【客】ゆふべ高嶋屋でしばゐのやくそくしたがゑらふきなる来ルといふ事也帶しい〳〵いふ但し帶ハ白はかた嶋　【仲】いつおこしなさる太夫ゐが出來たそふなナア【客】けしからぬはやい事とんと沙汰なしにしてくれ　わさといふ　【仲】いふてこます【客】御免じや〳〵　ト此間にげい子　但し三人　たいこ　但し二人　舞子　しれた事一人　【ゲ】ヨウおこし【頭】旦那　だなといふやうにいふ　ヨウお　トこしまでいわずヨウトばかりいふてさかさまになる　【舞】ヨウおいでなされ　トおとなしふいふ　【ゲ】ヨウおいでなされじやといなァ　トまひこたかあいがる　【客】富八きのふ網ハとれたか【頭】イヤいつかふやくたいヨウ旦那おこしなさらいでよかつたノウ　トひとりのたいこにいふこのたいこしんまいなり　【頭】さよでございにいふ　はやくち　【客】サアひよりが覺束なかつたチ【頭】イヤモウ旦那きついあこがおくろい中〳〵かなわぬぞや【シン頭】ヘヱン　トうなづくやうにする　【ゲ】モシナあミぶねといふものハぐれ〳〵してこわひものナア【客】ナアニゑらひすきで【ゲ】わしやいやじやわへ　此げい子ハ客のいろ也よふものいふ　【頭】アノおまへあなたと　客の事也　いきた事ハないかへあなたハけしからぬおすきじやがナア【ゲ】わしやきらひじやわいなァ【頭】旦那モシきらひじやといふてゞござり升ぜ【客】ふねぎらひなものハむまがすきじや【ゲ】馬ハのつて見たひものナア【頭】おまへむまがすき歟ゑらひおふけなものがすきじやナア【ミな〳〵】アハヽヽヽ　トわらふ客ばかりわらハぬ　【客】富八モウいふなエ　トかんしやくこゑでいふ　【頭】ヘイ　げいこハかほとあへしてかたほでわらふ　【ゲ】サアひこ〳〵　トささせんいまよふ〳〵だす　【頭】サア舞ヲ〳〵ヲヽまひ子

ながきてじやこれハそさう【客】ワハイワイ〳〵 トさいぜんのかわらニ笑ふ これなんぞまへ【ケ】なにまひじや【まひ】なんなりと げいこうたゝ但し哥ハいたこ出じき也【客】ヱ、モ又かい 此あいだきやくのまへばかりさかつきくる【頭】イヤおやの子めヱライ【客】又やかましい【頭】ヘイ トしかられてたいこ所へゆくうちからじゆばんもてきたあのにあひにゆくの也實ハ花二まいましてつけいといふ事也【客】富八ハどこへいた 此所でまひおはる【頭】ハアイ ト肴もつて來る【客】われもなんぞまハぬ歟【頭】ハイむかしでハなひまへ〳〵ハまひもよふまひましたけれといまハまへ〳〵のやうニまひもよふまひませぬ トふるひ事いふ此たいこもちもへたとミへる【ケ】よふあないいへるナア【客】これおれもまふがの【ケ】モウよしになされこれハいろのげいこがいふ【客】サアこい ト二人まふとんと客のまひいかぬきのどくさうに座しらける【客】ゑらふよふて足がやくたいじや トまひ〳〵いふ但しことわけ也 そこのかミいれとつてくれ けい子ほつてやる【客】まひのかわりにやろ ト一歩入たを出す花車出て預る【花】ひとつやり升ぜ【客】イヤ皆やれ〳〵 トまひがわるひゆへ也これたかねでつらはるといふ【頭】ヤレ〳〵けつかうまい一ッまひたいものじや【ケ】うまひ子ナア 客よこにねる但し月ハあひたりふさいだりする此間かミいれわきざしねまへゆく【仲】申〳〵モウおしづまりなさらんか【客】イヤまだ〳〵酒がたらぬ【仲】モウよしになされサアおまへがたもしまひなされ けいこさミせんしまふたいこ一ばんにいにかける【頭】モシ旦那へよろしう

幕 此五〆匁つかひハすいけなしむちやくちや客也但しこれがしんのお客かもしらず

○壹貫目つかひ

但し壹〆匁より五百匁まで也此かぶれ一わり引にしてはらふ

爰に今日部屋住といふ客ありおく嶋にくろつむぎの羽織なり 但しゐん至てちいさし おゝくれしのびて青楼へゆく名代は講参會の外おもてむきでゆく事かなわず 手代あそびともいふけれど少しむすこらしいて違ふ 門口から走りだい所へとんであがる【花】ヲ、おいでなされいま花ゐがとひにおこしてゞあつた【客】いまかへ【花】これきしもと屋へいてあなたがきてござるとしらしておじやサアおくへ御こし 座敷へも走ツて通る若ひあし也【仲】おこし ト二人出る一人はまへだれせず これもふおしつけ角が來るといな ト一人の仲居へいふ【仲】ムウいつへ トなかゐどうしはなしするきやく此間さびしさうにたばこのむ【仲】モシナ 北のしんちは巾の下へナをつける 角がきたらつれていきなさらんか【客】つれていこ トねばくろしふいふ【仲】よしよしいつかに【客】初日から四日目あたり【仲】三日目にしなされいな【客】そんなら三日目【仲】エ、うそじや【客】しんけん【仲】三日目ならよひおきばんじやなけりやよひが 此間けいこ來るなかゐげいこのかとばかりでものいはぬ【ケ】これかどがくるナア【仲】サアいまいふてゐた【ケ】モシナつれていきなさらんか【客】ムウ なかゐわらひかほする【ケ】まづよしうまいわなどゝけつかる トいふ所へ又けいこ來るべて二人になる【ケ】おいでなされ トあれたゞしふすわる【客】ゐらいうつくしいなァ【ケ】さやうさやう トいひつゝさとせん出す此客

へさミせんはやうひかす【客】やれ〳〵酒がのめぬ【仲】ホンニ花ゟおさい事なァ【ケ】ワハイおそいをおさいと【仲】なにぬかすぞい すべて北へとばあらし【客】ほつておけいャイ 心にへゑらふまつてゐる【花】まだ花ゟハこぬそふなこちらへいてじやけれどついおくり升といふてとんとこぬ トいふ所へおやまくる【花】おまへなにしてゐたぞいなと せなかたゝく【山】ついちよつとみちよりしてゐた 外のなじミていてゐたの世それもしれた事よ【花】ちとたしなミ トいふて客の顔ミる客ものいわぬ【花】たれぞよびにやりなされ たいこもちの事也【客】いやモウこん夜はやういなんならぬ【山】マアよひわいな トはじめて客にいふ【客】ハイ〳〵 トいふ所へたいこおしかけて二人來るとおどる【客】これ〳〵そないにおどつてもけふまるハなひぞや【頭】イャまるよりうなぎがくひたひハ トおどる【仲】こいつよひハ【客】うなぎやかせ【仲】手をたゝく コレうなぎいふておいで トたいこもちしづまる【頭】うなぎよひナアこれァノうなぎナ茶づけにしたより酒につけてナそして共酒のむとナ ヤヽあつて よひぜなァ 但し此たいこもちよふてゐるとミへる【ケ】イャわしや茶にいれてくふのがうまひ トいふ所へうなきもつて來るあまりはやひよつてたまやけかもしらず【頭】ヤレ〳〵コップに一二はいのんでそしてうなぎとやるじや 芸わろひ口合也【客】おれハ飯(めし)をくれ【頭】旦那めしじや〳〵【ケ】わしもまゝ【仲】はやうまゝたんともつておいで花ゟあがらん歟【頭】花ゟおきらひじやおれに名代してくれといふてじや しようたいこもちこんな事いふてゐる【仲】そりやまゝが來た トにこ〳〵する【頭】ヤレ〳〵まづ旦那へチョンとよふやけたのを ト皿にもる【客】サアミなくへ〳〵花くわぬ歟【山】わたし

やいや【客】くへといふに【山】それでもいやじやもの【ケ】くひいなァ【仲】ドレよそふて
あげよ トこざらに十切ほどもつてやる【ケ】サアいろどらずにくひそんじや トすゝめるおやまくひとむなそふにしてそならまそふにしてしまふきやくよろこぶ、【花】
モシナおうちよりおむかひがきました【山】けたいな事なァ【客】どれいのふか ねからいにとむなひ【頭】
マアモシよござり升〳〵 トいひツゝめしくてしまふ【客】サアおくつてくれ〳〵 もなノ\よろこんでおくろこれはらお大きなゆへ也但しおやまにかりおくらする
つとかほしてみろ【客】さばへ トおやまにいふ【山】しらぬわいな
此客ハむすこ也ひとあひに十五両もん日のおゝ幕（きく）い月ハきつと壹〆匁からつかふりかうもの也

○百日つかひ

但し金二両より六七拾匁までつかふ也しかし此かぶの茶屋ハ晦日はらひゆへ甚セわし

爰に青浪仁三當餉（あてがい）市治郎といふきやくあり皆三弦をこのミてよふひく客なり茶屋へ來るにわり
あひにてあそぶひとりハ京じまに京おくのはをり市治郎ハるり紺（こん）に茶小紋のはをり 但しちいさきもん岩所紋にして
いとわにわりきゝやうおなこのやうなもんなりはをり至てもじかし尤手ぬぐいかたにかける 茶屋の門口をのぞひてしばらくはいらず あひきやくがあるとわりいふゆへ也か座敷のあいてある
なしをミる はなうたうたふてだい所へとんであがりすぐにこたつへあたる だい所にせんかう場ありおしいれの戸ヒカノ\ひかろ但し二ツかまどあ
かふぬつてある茶棚さいく見事此所六疊敷内壹でうおしいれ也甚せまし【仁】市治郎ハきやセなんだかへ ト花車にいふ【花】仁三日ゆふべおまさん

がおそふ来ておこつていんだ（トはやくちとんときゝわからぬ）【仁】ドレこれ夜わげいこごとりおごろかい【花】ゐらひナ酒あがるかへかんつけよ歟【仁】まあ〳〵肴とつておいでいの【花】コリヤおむすがなにしてけつかるおそひ足じや（見しすねといふト所へむすめもどる）なにしてゐるのじやぞいの（トしかる）【ム】おばさんの所にけんくわがあつたよつてそれ見てゐた【花】どこのおばさんの所に（トせつくりしたがにつきでいふ）【ム】となりうちの【花】だれといの【ム】アコノむすこさんとおばゝとじや（トいふ所へなじみのげいこくる）【ケ】おばさんうちにかへ（トかどくちあけて）ヨヽすかん仁三あんさてかいな（ゆンたアンといふ）いま市ゆにあふたらおまさんよびにゆくてゝひがしへいてゞあつた（きやくおじきによそものになく）【花】フウ（トそしらぬ顔なりよくなれたものじや）【仁】ヨフ〳〵かけあひのおそめゐらかつたぞやいやコレ妙じやゾヤ（トゆふべのさらへかうの事をいふてほめることばの下にやの字を付る）【ケ】すかん人なア【仁】いやもふおそめのやうにあつたしかしあぶらやでれないやうじやじや【ケ】どふでわたしやさるじや（ト客のひざひねる）【仁】アヽいた【ケ】おまへゆョウゆふべぬけていになはつたな酉に又なんじやできたそふなモウいわぬ（酉といふはしんちの事）【仁】なんのいふたがよひゐんりよにおよばぬかといふやうなものじやアコレ茶わんむし二ツいふてやつて（ト花車にいふ）【花】二ツかへ（トかづた又とひかへす）【仁】二ツ〳〵（此所のならひでれないが来る客ごたものくらしてあそぶたトとおもふている）【花】サア〳〵だい所がせまひおくへおいでなされ【仁】ヨツトせうち（ト座敷へゆく六畳敷のすゑにたんすすへてあろうへにいちまにんぎやうかしこまつてゐる床の間にかけものなしたに花いけあり原と猿おさしてある也）【ケ】モシナおまへゆむしのね（虫の名）

睟のすじ書

一六

おぼへてゐなさる歟トさゝせんつぐ【仁】はんぶんほどならふたけれどハヤわすれトミなまでいわぬやうなとばをつかふ【ケ】アイツならをふとおもふてゐるトいふ所へ一治郎来るあとからおやまくろ〻治郎ゑふておとつてはいるおやまむつとかほしてはいる【市】ハアそりや〳〵〳〵トおどる【仁】ゑんのいたゞきせるでたゝきハアまつてゐた〳〵〳〵とゐたちとふしの中よし也【市】おまへとふからきたの【仁】ヲ、きさまエラひまいりじやの【市】いやモウ道でけんくわしたゑらふせりふしてきたけたいがわるひトおやまのかほしりめにかけていふ【山】たいていわるひおかたでないひとふどふかんざしおとした【ケ】どのいなア【山】しんちうの【ケ】そんならたんなひ【山】それでも治郎さんにもらふたのじやよつて【ケ】ム、トいふ所へ花車茶わんむしもつて出る【花】それ〳〵やかましい子やノトぜんに二ツのせて出すねしやうじかたちんばなり【仁】サア〳〵市べくわしやらぬか【市】いや〳〵いま丸をくてそれからあいつとうどんやへいたよふくふやつあんぺい三ぜん【山】うそばつかりいふて【仁】ソレうまひ事してからおれになぜしらさぬコレそんならこれひとつくへトけい子にやる【ケ】茶わんむしもつてすわりたをりおまさんたべんか【山】マアたべ【ケ】ム、のこしておくわへ【山】きんこいやじやぜトいふ所へたいこもち松八といふてじきしい〳〵来る但し此しまにたいこ三人有【頭】ハアこれわどなたも【仁】【市】ヤアきた〳〵トおどるたいこもおどる【山】これ〳〵治郎さんかたの手ぬぐひとりなされミへがわるひトとつてやる【仁】ヤアゑらふゑふたコリヤ松八このちやわんむしくてくれトくひさしをやるけいこもくひさしを又くふ【頭】ヲツトしめたヤアうまひぞ〳〵鳥がのこつてをるトくてゐる後からくる治郎でゞりふたの香をつかんで茶わんの

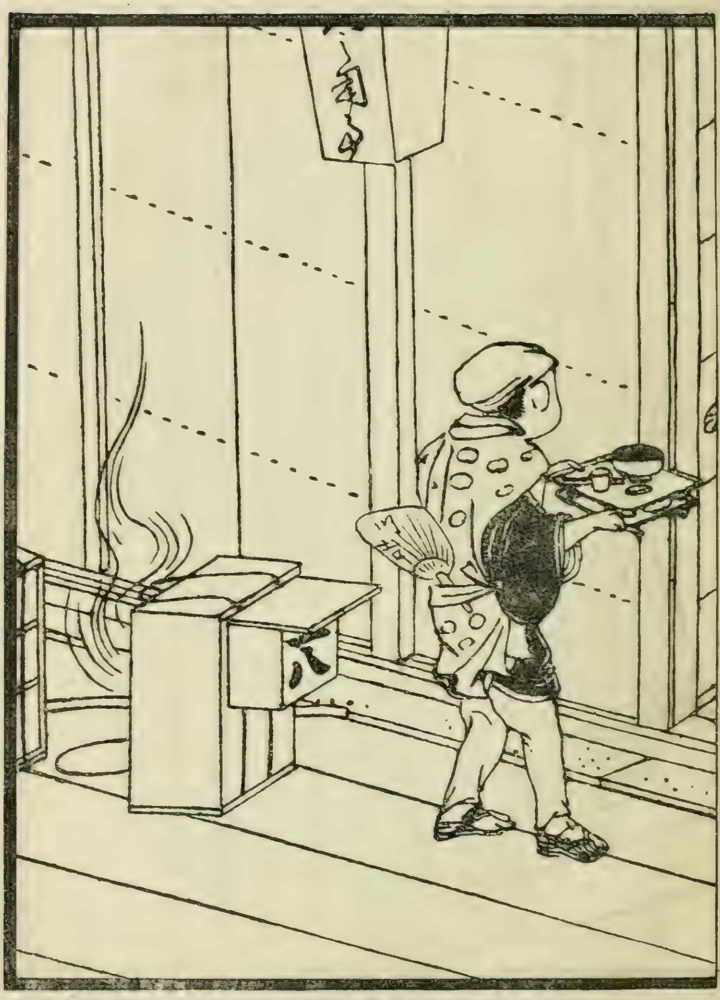
中へ入るげいことめろ又仁三郎酢のものたいれろ茶わんの中へいぬのごきのよし杉八セう事なしにくふ 【山】わるひちやりじや【ケ】よふまああのやうなものくいじやなァ トいふ所へけい子もらひにくる仁三郎ムツトして 【仁】はやひ事ナアよふ〳〵しやミせんしまふて トわろくちいふ 【ケ】コレのちまでゐなされや【仁】クッなんぞいふてかあしたのあさちよつとこゝへよるのじやけい子のあさむかひにいこかしらぬ【ケ】けたいなヱ、すかん ト少しびんとしてすわりさけをちやわんてのむ 【頭】ハアゐらひかんしやくじや【ケ】マァひとつのんてこまそ 又ちやわんにはんぶんのむこれハ仁三郎にしてミせるの也 【ケ】そんなら治郎兵 トいふて仁三郎のかほをミる 【市】ヲ、はやふおいでや【ケ】ハイおまさんいてこふへ【山】ム、はやふもどりへ【仁】あんまりせいてこけいなへ【頭】アハヽヽヽ

幕 此一段仁三郎さミせんひくたいこ上るりかたる市治郎おヤま二かいへあがるまで長けれハりやくす

○三拾匁つかひ

但し三拾匁から十匁二匁九分のわりまで也百目から三十匁へとぶへあいだがあるけれとも此銀玉となし〳〵別目なり

爰に日吉丸文吉檜垣茂右衛門といふ客あり 但しせんだう也 あらひ嶋のはをり もめんのよりいとのひも也 あさぎの紋つきのきるもの 紋ちいさいけれども皆しかくなもん也 これハ又まへのとハちがふてはをりながくきるものみじかしひよりでもげたはいて 但しかごしまげた はな哥うたふ あくびのやうなこゑ也うたハ月ゝ三だのみかづきさまよといふやつ也 ひるの八ツ時から茶屋に入



る【花】ホ文吉ゟ、右衛門ゟいつおのぼりなさつてマァよふおいでたのそしてマァ三四郎ゟわへ【文】アイ三四郎ハ來月の（月をグハツとよむべし）五日にふねうけたがもふハヤきをりそふなものだにまだつかないのウ【花】ム、そんならおのぼりなさるにちがひハないな【も】イ、ヤもふのぼりやるのにちがひハないハサ【花】あなたおのぼりなさるといつてもこちへきておくれる【文】サアこなァにも（こなさんにもといふ事也）よくこゝろへてくれるやうにいゝおりました【も】もはや又きつらふものにノウ（ト文吉にいふ）【文】イ、ヤノウあァつ（あいつといふ事也）よくあきないしをるよつていつかふてあしこにおへなへヨ【花】さてモシお下リのあいだにきつひうつくしい子が出てゞござり升た【文も】やァれいつイノ【花】あの月花の所からかりミせに出てゞござりますツイ此うらのむすめゟでござり升【も】としないくらぞいの【花】もふ廿八九なれどいつかふまだわかふ見へます（此花車へ正直なもの也）【も】そいつよぼふかのウ（ト文吉にいふ）【文】ヲ、かハらぬがゑいにノウ【も】いやァもふなじむといふとそろ〳〵ふねへきやるのでとんだこまらすといふ事にハイヤもふけしからぬものイノ【文】ふねまでむかひにくるとハふかと出かけたせんさくだのふ【花】やはりミつゟよびませうかへ【も】イ、ヤそのしんざうにせうかノ（しんざうとハやはり二十くらいのおゃま也出てあたらしひをしんざうじやと思ふている）【花】文吉ゟどふか【文】イ、ヤおれァよしにセうヨ【も】やァれコレそなたもよんだがゑいそれハつきあひの

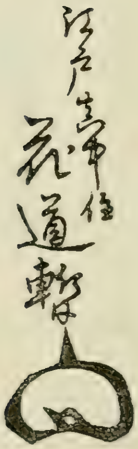
わるひといふものよノ〔文〕なァに室のきゝにハいち夜もせん夜もじや〔も〕むろでとまつた時ハゐらくたかふつひたのふ〔花〕よそへいかずと大坂へきてつかひなされ〔も〕イヽヤのふしもにもゐらひしろものがあるてやノ〔花〕酒のミんか〔文〕酒どふしやるトもへもんにとふ〔も〕ヲヽひさしぶりていつこんやらふでなひかノ〔文〕サァよかろにのゥ〔花〕すしかふてこふかいな〔文〕ヲツトよし〳〵此間文吉ふところからぜに八百文ほど出しておびしなおす茂右衛門もふところから一〆文つなぎ出して十九文でかふたてうせんかゞミでひげぬひてゐるおやまくる〔花〕あなたのそばへいきトおやまを茂右衛門がそばへやる〔山〕おいでなトすハる〔も〕ハアトばかりいふ此ときくびすしひや〳〵とする〔文〕やァれよひひよりだノおやまをほめる事とミへたり〔も〕目のあたりにちと東風がてつたふておるのトわるくちいふ〔文〕ァ、いやうれしがつてなにをいやるあめならぬれがきゝもふさふ此おやまのゐせうハはないろのぬきものにくろぬめのはんゑりおびハつむぎしま也〔も〕コヲレおまへいつから出なさつたゐ〔山〕先日からト笑ふ〔も〕ミつ白おかハりもなひかノよふこゝろへてくなされくれいといふ事わつしもきのふのぼつたトたれもとハぬ事をしんせつにいふ此間茂右エ門はなかむてはなにあらすちりがミて也〔文〕やァれ爰ナこひしめ〳〵ト茂右エ門のかたをたゝきはなかんたかミをにわへホイとほるこれてばなかむくせ也〔花〕ソレ〳〵すしトさけとひとつにもつてでる〔文〕やれ〳〵こちハすしがよひぞトおやまかわねばかりにいふこの文吉ハせんたら中のすい也どれひとつすいなおさかづきいたそふかトおやまへさすこれおまへすしハどふか〔山〕イヽエ〔も〕きらひかの〔山〕イヽエ〔文〕すきかのゥ〔山〕イヽエ〔文〕〔も〕なんの事だ二人ハすしがすくなひよつてきらひかすきかとゝふおやまもはさんたらくふきなれともとふよつてイヽエ〳〵といふ也〔花〕アレこぶまきさう

りにきた 座敷へにしんのこふまきしらしにくる【文】イヽヤもふいゝどれ〳〵コレおりやこれから御堂へいてきおる
ぞや ト茂右エ門にいふ【も】ヲヽそふしやれ【花】マアよひわいな【文】イヽヤついもどりおるハ トいふて
外へ出る但し此もどりハそうかたかふとミゆる【花】さあちとかたづけませう トさけさかなそこにおいてすぐにねまとる【も】マアはやひのに トいゝつゝ口にの
鎰かたづける【山】あなたミつるとおなじミかへ【花】イヽエイナ茂右衛門ないろ〳〵の事をあの子
にいひなさるわいな トいひつゝねましきかミくすひらふ【も】イヽヤのふおいらしらぬぞや トいひなからせうへんにゆく花おちの戸しめる座敷くらふなる
【花】たちんか トおやまにいふ【山】アイ ト立あかる

幕 但し此客夜へしんまちしまのうちへゆく又よこぼりへもゆく也ぞめきばかり也ひるハじまへたてあるとミゆる

睟のすじ書 大尾

わつちが國の通を睟といつて浪華の池のへ主すじ書てふものを著す虚空に妙を盡せし我亦なんにもいハれねへ鷺見ひとつのは湛樂すなハち古月庵において書たのさ



鷺見百首　鷺見先生狂歌をあつむ　近刻

放蕩三客巻　花丸述　近刻

追〻おもしろきよミ本畫本出し申候御求御覧可被下候

浪華　春曙館　藏

北郭雅卿方

北廓雞卵方序

廓に晦日ハ月も出る。また竹むらに名高き最中の月ハありながら。土手の大福餅あつたか。なかつた下拙が知恵。さぐりあつめし小銭の穴。四角四面な雞卵方。義理となさけのはりをもて。廓のふわ／＼むき玉子。その美しき小冊子。予求て見れバ妙なるかな。玉子の勢して其夜の中に筆を一ぽんにきりつめ序がましく書のもヲ、はづかしとしかいふ

寅の春

韓信堂
色人

第一席　誠（まこと）與（と）誠（まこと）

ぬれてあふ夜の新枕
さむさに歸る朝の雪
つもり〳〵て眞切の
紺ハ切てもきれぬ

第二席　縁（えん）與（と）縁（えん）

はれてあふ夜の新枕
うれしく歸る朝日の
出通ひ〳〵して女夫
きハいてもわすれぬ

第三席　惡（あだ）與（と）惡（あだ）

ういてあふ夜の新枕
ふられて歸る朝の雨
たかひ〳〵の心根ハ
緒てもつかれぬ

北廓雛卵方

百一誌著

第一席

春來ぬとまづ梅にきて鶯のものいひ染つ朝より茱手と立派と意氣張と三つかさねし三蓋の松かざりする秋津洲の廓下のをとハ初午のたいこまつしやもつきそひて花の盛や毛せんに一寸ころりとねはん會の枕に香ふ蓬生や耳かまびすき祇園會のはやす童の行去て三五の月や嶋臺に薄尾花も俄なる哥の文句を菊月やもん日もの日もめでたしと祝ふ恵比壽の神祭りかわいらしいと解紐ハすへ迄女子の身の祝ひ餅搗きねの音ならで野山ハとんと打なひて仲の町に雪と見まがふ風俗ハ（嶋田やのけいせい）へ松風（ちりめん茶返し小袖に中かた角つなぎの板〆のがくむく同角つなきのあいぢの下着しごきにてねまき姿としの頃十七八すきとふるかとおもふきりやうなにかふかきものおもひがほにてたてひざにてむねのけむりた書せるよりふいている）

アヽいつそしんきなどふしたらよかろふぞ（トいふ姉女郎）【梅の香】（廓下より來りしやうじたあけ）おまへひさん何をひとりごとをいつてふさひでおいでなんすへ酒でもおあんなんしな【松】さけもいやさんすョ【梅】

そしてふさいでばかりおいでなんしちやァわるふおつすちつとおあんなんしな【松】ありがたふおすがほんにいやでさんす一寸トしたとが氣にかゝりんして心が落つきいせんョ【梅】何ざんすへそんなに苦勞なんす事ァおきかせなんしてわつちにもともにくろうさせておくんなんしな【松】なにちよつとしたとさ【梅】それでもおまひさんのやうすが【松】外のとでもざんせん【梅】あふかた雨杏さんのとさんしやう【松】ァイ【梅】大かたそうだろふとおもいゝしたおまひさんひとりくろうなんすとァおつセんわつちにもはなしておきかせなんしまたお氣のはれるともあるものざんす【松】ほんにぬしがそふまでいつておくんなんすからちからたよりと思ひすにへ今夜ばかりわつちがあんじるでもざんせん此間中雨杏さんがきなんしてもいつもにかわつてふさひでいなんすからわつちがいふにやァなんぞくろうになんすとでもおあんなんすならはなしておきかセなんしと申しいしたらべ迚もききさまにははなしたとてもはじまらねへ事またきかせてくろうさせるもいらねへ事だもしきゝたかァこねへだに來てはなそふといつてお歸へんなんしてこんやきなんす約束ざんすけれども今にお出なんせんからどふなんしたやらそれがいつそくろうでさんすョ【梅】そりよョ苦になんす事ァおつセんたとへ今宵きさつしやらねへとてあすにもしれるとざんすなに物思ひなんすとまた御持病にさわりんすにへ　トさし合にてはなしの中にへかまう

北廓雞卯方

六

仲之町

（ろうかより大きなこへにて）【三芳】モシおいらんへ雨杏さんがおいでなんしたにへ【梅】それごろうじいシうハさそいへバ影がさすとやらそれだからあんまり苦勞になんすなと申しイす事サ（松風みよしがヿたきゝうれしさ半ぶんかなしさ半ぶんにてたつて二足三あしでると）【雨杏】（年二十三せいかつかふすつかりとした白子格黒はぶたへの小袖しろちりめんの下着ニツこんちりめんのじゆばんこび茶糸おりの帯黒なゝこの紋付羽織かむろにじやらだんしながらろうかばた〳〵）【三】アレおよしなんし丈がひくゝなりんすとサ【雨】せいがひくゝなると小人嶋のおいらんにするわへ（トいゝながら松風が顔をみて）なんたさみしいこつたでへぶさへねへ顔つきだかまた積氣か【松】（せんどわかれしより心ならずましこけふハやくそくの夜なれハ霄ゟ部やにひとりの物思ひにて雨杏來りしならハさつそく此間のはなしをと待しなれともまさかかほをこれハいゝだしもせず落つきかほにして）アイいゝへ積といふでもさんせんけれとも二三日ふさひでなりいせん【雨】また何か氣にかゝることをこしらへたの【松】ヲヤぬしやァおかしな事をおいゝなんすくろうをこしらへるものが有物ざんすか【雨】何がおかしひ事があるものか苦勞もふさぐも随分おれがしやうちさ【松】何ざんすへぬしが知ておいでなんすならいつておきかせなんし【雨】そりや後にはなそふ來る〳〵ふさぎやつてもたがへに病のたねだサァ一ッたべやしやう（とこれより酒とあり藝者しんぞふ一坐にてさわきあり時刻もうつりければさしきもひけ直ニ床に廻る）【松】（先へ枕をつけ雨杏の長つゝをひねくりながら）モシねなんした寐ころんで烟草をおあんなんしそして心ねへやうだけれドこの間いゝなんしたのをおきかせなんしいゝ事でもわりいヿでもはやくきゝとふすョなぜかむねがおちつきいせん【雨】（實のヿハあかさぬ積りなれともしぜんにかほにあらわれ松風にだん〳〵たづねられせふヿなしに外のヿであいさつする）そんならいゝやせふこんなヿをいふも恥かしく可笑

しいやうたけれともこねへだ中やうすをきひたりミたりせんどもおちやつたこともあつたがある色男らしいがきておもしろく遊ばセてやるやうすだがこんなあげくにやァ。ヘエヨウニされやうかとおもつてくろふになり手めへもそんなとでふさぐモしれねへ談そふといつたのハ此とよもふこれではなしハなんにもなしさ と心ねへとにてあいさつし眞のくろふをはなすもつまらずひとり思ひのむねにミちくればあしきかほをミせましと鼻の上迄よぎをひきかむりねたふりをして【松】返事もせず雨杏のかほをつくぐ見てなミだをおとししんに男ほとうたぐりぶかひ物ハないと心で思つて口に出さずよほどして雨杏さんぐといへどこたへぬゆへしたゝかに鼻をつまむ【雨】ァ、いたへ何をするのだへ【松】なにをするのでもざんせんマァ目を覺しなんしてわつちのいふとをきいておくんなんし【雨】きゝもしやふがもちつとまつてくんねへまたふさがセるだろふ【松】外めからミると何かおかしきやうなれども松風が眞じつの心よりさつきの雨杏のとはあまりうわきのよふにきこゆる故へ までじやおつセん苦に苦をかけて思ふこゝろも水のあわワつちの言をもきゝなんし昨日やけふのことざんすなら申しいすとァおつせんけれども是程今迄に何かをうち明て申いす又かねて段〴〵におはなし合申いした事も有に今さらなんの浮氣でさつきのよふなとをおいゝなんすほん氣であんなんすなら定めて今迄わつちの苦勞を茶にしてお遊びなんしたろうしたゞしやァあんなこと手にしてきれなんすお心かへ トさもごふはらそふに側に有合杉バシはつちり折てなミだくむ【雨】手まへもむねはれやらぬを松にきかせてくろふさせるもいや也そふしてまた松にうわきものと思われていゝ分もできず松風が眞實のとばをかんじて手めへもでへぶぐちになつたせ烏渡したとを氣にかけ苦にしてそれでつゞく物かながへ間にやァたげへに氣にさわるともあるものださつき

やァほんのおれが外に氣になることも有やさきそれ＝手めへが不意にいゝ出したから間にあわせていつたことだそれを根にしてうたがひを起しかれこれと心細ひことまでをいつておれ迫むねを一へいにさせるぜァ、じれつてへなぜこんなに思わせてくれるぞ　トうわまぶちうすあかくにれたる松風をせぼねのみし〳〵ゆふ程だきしめ顔をつくん、見てこれむねにつもつていることがあるからほんとふを談すがふさひでくれちやァおそれだよ

【松】此間中から雨吝がさへやらぬよふす何か氣がゝりのことあらんとさつせしゆへだん〳〵たづねけれどもさつきのよふなるうわきあひさつゆへどふぞして本心をきゝたくおもひし所ろゆへ　何わつちがふさぎひすものざんすかむねにあることたァなんでもいつておしまひなんしそふなんせんといつ迄もおけへし申ィせんにへ【雨】そんならはなそふが腹をたつめへぜヱ【松】なんのばからしひ腹をたちひしやうおはなしなんし【雨】ァ、はなさじァなるめへかねてはなしやつた通りせわになつたりせわにしたり一生夫婦の契約して今迄何一ッ氣にさわる事ヲいつたこともしたこともねへおれがいゝ出すからにやァよく〳〵のことだと思つてきゝわけて力をつけてもらわにやァならねへぜ

【松】そふぬしやァことをわけていゝなんすからわつちの心に分ることならきらひせふわね

【雨】ム、今さわぎたつたことでもねへがのぜんてへおれにいゝなづけの女が有てとふに引とるのだけれども知つてるとほりおれも二三年みもちもあしい所を親のじひにやァあつちこつちへ頼でいけんをいわせかれ是の掛方ハそれと云ハずにすましてくれるし今年ハいづれ＝ひきとろ

ふと云相談がきよねんのくれからのことよ是をおれが得心さへすりやァ兩しんへ一ッの孝といふものだけれどもいづれにてめへと一生そふ氣だから今迄延〳〵にしたのォさぞはらが立だろふけれどもきかせねへも罪とふからはなそふと思つていたけれどもなるたけ親にも不孝にならぬ樣ニ又手まへを入るつもりだから色〳〵ニしあんしてミても了簡がつかず其内親類からハいづれにも兩親がへんじをまつているとせめられるしほんに理につまつてしかたがねへいつそうき世をやミにしておやにも義理も打すてゝ心まかせにとおもへどもいにしへから五常をかひて一ッでも身のたつたためしもなし誠に是程みにせつなるとハねへ今でハおやたちもおれが返事をまつてござるのさ【松】雨香がことばをきゝくわつとせきたる所をさあらぬかほつきにて聲ふるへて そりやァどふ共自由にしなんし【雨】なんのこつたじゆふにするくれへならはなしもしねへたかゞこねへわな トしばしたがひにことばもなかりしがとかくに松風氣がすまぬゆへ一たんハおかしくいつてミたがだん〳〵雨香がこゝろざしのほどをかんじて【松】もしへ〳〵さぞ宵からぬしの氣にさわりんすと斗り申ィしたろうみんなわつちのむりさんすからかんにんしておくんなんし今と新しく申でもざんせんけれどもわつちのくるわへ身をしづめしもぎりとまことにせめられて泣になかれぬわけゆへに今ハかよふにいやしきつとめ申ィすも恥かしうざんすけれども今年で此里に四年の間多くの客の坐敷へ出ても客の心にしたがわぬわつちの氣性ぬしにハついしたことがいつしかにかさなる緣の枕のち

りもつもり／＼て今になりきつてもきれぬ此中ながらさつきからことヲわけてのだん／＼のお咄し御兩親へのまとのぎり身つまされてぬしさんのお心がおィとしうざんすか樣にぬしにくろうさせ申ィすもミんなわつちのつミでざんす世間にもいくらも有ならひで此身さへなけれバとてしんじうしたりミをしづめたりあんな淺とい心ハざんせん子義理と死との二ッてハしぬほどやすひことァおつせんましてぬし一ッのお心で御りやうしんへも御あんどさせ申ィすに御りやうしんへのぎりも立一ッにや御先祖への御かふ／＼必ずセまいお心をおだしなんすなへ今迠段／＼ぬしさんのお心をさつしてミ申ィしたがおやご衆へ御かふ／＼なんせバ數ならぬワが身への約束がかけそひとげれバおやご樣への御不孝かふと信とを二ッながらたてたいお心がとふらぬゆへ此間中の御心勞けつしてワがみのとハおぼしめさずにいゝなづけのお方をお入申て御兩親衆へ御あんどさせ申なんしそふなんすれバ先だちしわたしの母のいけんとぞんじてあきらへすから一ッハ川竹のながれにすむ私の身のためしんにそふしてお心をおやすめなんし今迠ぬしにくろうさせ申ィしたハにくひやつと こへもふるへて 思召そふがかんにんなんし トいゝつゝ右の手ニてむねをおさへながらはをくひしめむちうになる 【雨】 久しきなじミなれバあざなもせうちにて コレゐゝお筆引／＼氣をたしかにもてェ、三汚か／＼ トうろたゑあわてさわぐゆへかむろもめをさましめをこすりながら 【三】 アヽイヽ トきたりてミてびつくり ヲヤおいらんしやくがおこらつしたよ梅の香さん早く

おいでなんしよ〱 トむめのかたよびたつる 【梅】 さつそくおきて來り ヲヤどふしひせふねへ雨杏さんへいつでも黒ぐわんしがよふざんすから早く上ておくんなんし ト手だんすの小引出しよりこくくわんしを持て來る 【雨】 左の手ニて松風がむねをゝさへ右の手ニて黒丸子をくちにいれさゆをくちうつしに 引くすりやァよくおさまりやしたおふかた今によかろふ梅の香さん一ふくのミなせへ トいふうちウンといつてきがつき 【松】 アヽせつなふざんしたわつちとしたとがぬしにおゝきにくろうさせ申ィしたもふよふおすからサァおやすミなんし梅の香さんおふきにおかたじけよもふねなんしおふきによふおつす三芳も寐やよ トいへどもいまださつはりせぬゆへさへぬかほつきニて もしへあんまりよいからふさぎひしたからのとざんすさぞなんとか思ひなんしやう 此うち梅のかミよしもそれこれとかたづけねてしもふ 【雨】 そふいふ氣だから病もよけへになるよ トとかく心ならぬかほつきにて松風か眞じつらちミへ何ひとつうわきなこともなければわが思ひつめしことをきかセしならハたんきなこともし出さんかと口にハ出さず心でけさがまづわかれになるかとおもへは我しらず涙をながして とかく苦勞の世界だから何もかもうつちやつてくらすがいゝよ 【松】 雨杏が心をさつセしゆへ思ひどほりのしんせつないつてハミたが心も落つかずまことに戀ほどセつるものハなひとこゝろでこゝろをとりなをして 今宵のよふなことばかりも有ィスめへ明日ハいなんしな 【雨】 おれもいてへけれどもあすハぜひけへらにやァならねへいつともいわれねへけれ共またくるわなそしてはなした通りだから己がほうからさたのねへうちやァ人をよこさねへがいゝよ トすこしハなしのときれうちた 【金龍山ノ鐘】 ゴヲン 【茶や男】 ハイおむかひでござります 【雨】 ヲイ今いくよ トいふ内しんぞふはほりかみ入のろいたんすより出し雨杏にわたす 【松】 あさのわかれのなごりおしきハあふてうれしき宵にしもしれしことなれどもまさかにあか月のきぬ〲ハ人の山も入かわろ又さたセぬうちハ便りもするなときゝしむねにふさがるかず〱かねにハセかれいゝたいことハ跡や先さき立るのハなミだ もし

へ今朝はかんにんしておくんなんしわつちはおきひせん　ト床の間のはうをむひて涙をふひている【雨】そんならけへるか
らずいぶん大事にしなせへ　トすぐにろうかへいで　サァいきひしやう　ト新造禿おくつて茶やへかへりける

第貳席

【柳枝】としは廿八九中ぜいにかきばしつた顔つき八丈格子嶋の小袖小納戸八丈の羽おり通ならす野夫ならず中ぐらひの女郎かひにて友人雪枝と一坐ニて亀田ヤのまつ風がもとへ四五會もかよへどもかねて深まの雨杏も有となれは中〳〵柳枝にあまきとばもかけず柳枝は雨杏有事しをしらずたゞ氣高ひ女とこゝろへいつれにふさしめてさんとけふも雪枝をさそいニくる　○　雪枝のすまひ表黒べいニて大戸立つけて有くゞりをあけて【柳】雪枝さん御在宿かね　庭のうへ付坐敷のよふす俗ならす一風有年頃四十ぐらひニミゆれ共本年は三十七ぐらい色白くせいかつかうすつかりとしていやミなしの男てつ小納戸鬼ぶとりの小袖の上着是ニて下着は御さつし立じま八丈のそでなしはをりさらさのしとねの上ニたてひざにして一閑張じたての朱ぬりむじの小卓にあろ小説物をひらひて宣徳七賢人のほりの手あぶりにて竹ざいくのたばこ盆を引よせたばこのんでいる【雪】アレどなたか御出なすつたれ【下女とよ】アイ　とたつてセウヲじをあけて
ヤ柳枝さんでございます【雪】どなたかと思たサア柳枝さんすぐにこつちへ【柳】ゑんがわにて少しなりふりをなほし
御めんなさひましマアごきげんよふ先日萱洲の會後すきと音信を絶しました【雪】イヤ此方からも御ぶいん斗り【とよ】ハイお茶を【柳】アイ　と取て下に置【雪】おれにも一ツくりやアマアたばこ盆をあげや【とよ】アイ　と右に茶を左にたばこぼんをさげて　ハイお茶【雪】なんだぶしよふな女だせイヤ柳枝さん此間會からけへつたばんにとんだ化物か來てきもをつぶしやした【柳】どんな化物へとんだとに
【雪】おめへもミたともあろうツレ箕の輪の息子よ【柳】なるほど出合やアしねへがしつちや

ァおりやす〔雪〕あれがのさる所の娘と一年も馴染ていたそふさ所が娘の親が段〳〵のいけん
もふるくなりいかさま大きにしかつたうへで土藏へいれたそふさ〔柳〕きついお染きどりだね
〔雪〕そふさ所が一念ハおそろしいものだどふしてきたか箕の輪の內へ夜の四ッすぎに日高川
といふ身できていづれに吉にあわにやァならねへといふものだから內でもわけの有とだたァお
もつていたが色〳〵にだまして吉藏ハきのふ出たまゝけへらねへなぞといつてもびく共せず落
つき顏でさよふならお歸り迄待ましやうとおとなしくいふ物だからしかたなしにマァあかつて
いなせへといつて大かた久しくまたせたら退屈してかへるとでもいわふかと思つた所が中〳〵
大ばんぢやく奥でハはゝおやが吉をつらめへて色〳〵聞所が一向今迄內のめへゑハ雨夜の星だ
から吉もす顏でこまりきつていふにやァちつとともだちの戸につひてわけの有女だからわたく
しが逢ませふといふもんだから親もそんならといつて出したそふさ吉がそこへ出るとァノ女が
飛付そふないきほひで齒ぎしりしてなくものだから吉もなにも云出すともならずしかたなし
うちの前もつまらねへからすぐに女をつれのハつちの所へ夜の八ッ半時分に入舟さ〔柳〕そり
やァとんだ狂言だ女かいくつ位でござへセすそしてすミやしたかへ〔雪〕まだすまねへのさ女
が小僧にしちやァとんだ氣位の高ひやつさ吉が親達ハいつれに手ぎりのつもりだけれども女ハ

又いづれに吉にそわにやァならねへといぢばつてとんだ新手をいゝやす鳥渡かゝりやつてしやちでもまけやせん【柳】ご心配といふ中しかしいきな御苦労に時にこんやハどふでごぜへます【雪】いゝねしかし内をあけるもおかしなもんだス【柳】北のかたわへ【雪】此間榎の嶋へいきやした時に隅田川があらァ一ト口きめやしよふしかし何もねへス【柳】あつちへいつてのもふぢやァごせへせんかマタ早ひわなマァ何なしとものミなせへなこれやそのさけを持てきや【ミよ】アイ トすぐに八寸にてふしと盃をのせもち来る【雪】サァ一ッのミやしやう ト一盃のんで はゞかりながら【柳】さよふなら トーツうける【雪】コレミよやなんぞもつて来やな【代】アイ ト梅か香とうわミ才をぼんにのせ持てくる【柳】かつてながらかさねやしやふ ミ代つぐすつとのんで サァおゝさめ と雪枝へさし すぐいきとしやせう【雪】久しひもんさよふいそぐやつだよ トいゝながら身こしらへも出来ければミよ気をつけやといゝつゝ出ゝちくさなし二 ○ 仲の丁蓬莱やへくる【雪】てへぶおいそもしだね【茶や女房】これハ/\御揃でよふいらつしやひましたほんにおとゝひ人をあげましたがおるすだつたそふでござります【雪】何だつけね【女房】なにさきのふちよいといたした花の會がござりました トいふうち【茶若】これハおふたり俱よふこそ トいゝながらたばこ盆をもち来る ○ それこれの内迎ぶた・太夫・芸者【呑太】【樽治】ひきたて余ほどさわぎ酒事有て【柳】サァ都をけへやしよふ【雪】いかさまよかろふ【樽】柳枝さんへおめいさんハこねへだハ龜田やへ清盛さんでごぜへすよ【柳】おいてくれふるひぜ【女房】サァいらつしやるよ

【茶若】（箱てふちんさげかた手にてちよいとかたはしよりしながら）雪枝さんあんたハこねへだの京町のしわくちやをおきゝなせへやしたかへ【雪】なんだの【柳】女郎どふしのたて引のとじやァねへか【若】さよふでこぜへます（ト道中のすてせりふなり）【呑】サァお楼へめへりました【若】（さきにたち）サァいらつしやひましたよ（トすぐに二階ざしきへ通る若ゐよふいらつしやいましたと共に酒事ニなり雪枝ハ相方村風とし十八九みぬ玉照若もかくあらんかとミまがううつくしさあひねずみしゆすの帯つきうちかけハ鶯色しゆすに桜川のぬひ帯ハ龍西にしき柳枝のあひかた松風先にしろす道りのきりやう衣裳もミな）○（じミにて）【松】雪枝さんよく柳枝さんをつれてきておくんなんしたね此間からまちいしたよ【雪】あひさどつちがつれられたかしれねへのさ【呑】おめいさんがたァなんでごぜへますつれたのつれられたのと鯛と蛭子のけんくわをミるよふでごぜへますね【雪】なんだあじにしぐるな【村】柳枝さんはゞかりながら（ト盃をさす）【柳】いたゞきたさもいたゝきてへけれどもマァおゝさへ【村】マァお取あけなんしな【柳】マァいづれ【村】さよふなら（トうけてのむ）○（此間げいしやひきたてゝめりやすいたこにて大さわぎ折から新造）【緑野】（松風の方へむかひて）おひらんにやなぜさへなんせんへ【松】なぜへこれ程さへていゝすものを（といふ折ふしあまりざしきも長ければ）【若】ちとあちらへいらつしやりませんか【雪】（いつもきまつたざしきかつて久しきなじミのことなれハミへもへちまもなしに）いかゐ寐のミも又よかろうさァ〳〵あつちへいきやせふ（とたつてろうかへ出ると緑野雪枝のきせるたばこ入を持て付てゆく）【村】柳枝さんサァおめへさんの所へおいでなんしな（のこへと共にミな〳〵御きげんよふにてざしきをかたづける）【柳】雪枝さんお宿入かねちつとめへつてむかしをかたろふかね【村】サァお出なんしな（柳枝雪枝がざしきへはいる）【柳】雪枝さんなんでごぜへす

ねマァおきなせひな【雪】ィヤもふこねへだではざしきづきやひも氣くたびれがしやすこふなつちやァもうおひこミだぜへ床へ來たらゆふ〳〵としやしたマァ御免なせへ【村】おあんなんしと（すひつけ でだす）【柳】ァィと（一口すう ところへ）【緑】柳枝さんへあつちへお出なんしなおいらんハひとりでおいでなんすにョ【雪】色男になるも又うるせへもんだろうの緑野さんおいらんにそふいゝな柳枝さんハ何もいやらしひとをさせるこつちやァござひませんからおあんじなさんなといつて【緑】雪枝さんなんさんすへおじらしなんすなおいらんにやァしかつておあけなんしな【村】柳枝さんマァあつちへおいでなんしよ緑野さん一所におつれ申な【柳】おひらんにやァわつちをハ軒の下の御犬をミるよふにむしやうにおひ出しなさるのおぼへていなせへくひつくから（といゝつゝ 出てゆく）【村】さよふならおやすミなんしよ（とミとりのゐ共に 松風がところへゆく）【村】もしへこよひハどふしておいでなんしたへ【雪】どふしてとハなぜ【村】それでもおとゆふのおふミに四五日チャァ出られねへといつておよこしなんしたでハおつせんかへ（といゝつゝ寐ころん でよぎをひきかける）乢如此【雪】きつい所をきめるのこふきめるもおふかた今やハひとりねてくれと云どでへじやァねへか【村】ぬしやァ如才もなくおいでなんして人の氣に當ると斗りをいゝなんすよ緑のやもふねやよ【緑】さよふなら雪枝さんおいらんおやすミしよ【村】何かをしまつてくんなんしたか【緑】アィ（といゝつゝ 次の間へ行）【村】

もしへおびをとひてほんとふに寐なんしな（と帯をとくおとす）らく〳〵 これよりこの床のうち寂し〳〵寥〳〵として和樂の夢をむすぶらん

第三席

我とこの枕もいかに思ふらんなんどかゝらぬ夜ハしなけれバとハミぬ世の人の言のはなれど心に今古のへだてなく松風ハ雨杏に別れしよりさへやらぬくもりがちなるうき月日おくりかねたるくろうこそ口〳〵に次第に十寸かゞみうつすかげさへミすぼらしかほのやつれもたれゆへとわするゝひまハ片時もなひてあかせし夜半しのミ【松】もしへなぜだまつて斗りおいでなんすへ【柳】わつちやァぜんてへしづかな事ァきれへだがくるたびとにおめへがふさぐからしかたなしにだまつているのさ【松】そふ思ひなんすもむりともおもひゝせんあつき御心からこそ私のよふなぶきよふものともおしかりもなんせんできておくんなんすお心ハいつそうれしうざんす【柳】そふせじばかりいわづともいゝわなおめへの二世とも契約した色男にハかれてから戀わづらひすると云もとふニ聞ていらァなほへにわつちのこけへくるのハおめへのうさはらしのお相手にでもなろうかと思てさ【松】（くつとふさぎしよふすにて） ほんに人の口にハかないゝせんぬし迄そふ思

てをいでなんすから私のじつを申ィしたとてほんにおきゝなんすめへしかへつてつミがふかくなりィすから申ィすめへそしてそんな事をどこでおきゝなんしたへ【柳】何もきき事もなけれどもいゝかげんにいつたると松風がむねにぎつくりと云様子かほにあらわれければじつをいふも罪がふかくなるもいらねへわな生徳りちぎなおいらに迄かへすおめへの心のもつれがほどけねへひらつたくいゝなせへしなんぼおらんだじやふるりをミるよふにわからねへおいらでもかわいゝ男にあふようにはたらいてあげやしよふ【松】そふいつておくんなんすハうそにもいつそうれしうざんすほんに申ィすもおきゝもなんすめへけれとも人の心程しれにくひものハおつせんよなんのうわきらしいかわいゝ男にわかれてからの戀やミのときはづかしひ斗り聞もけがらわしうおスマァこゝをよくきひておくんなんしわつちのかゝさんハいつたひわかひ時からの持病もちてあんなんしたがきよ年の八月時ぶんから段〻おもき煩の床度〳〵のたよりハごさんしてもついちよつとおそばへ参つて御様子をたづぬる事も不自由にとふ〳〵はなれてのとざんすりやァあんじすごしいす斗りつひその内にはかなくも無常の風にちる命とふミのたよりをきゝしよりぎりもふこうもわきまへて長ひ御病氣の其内に一日なりとも御側ニてせなかなでたりお薬も上てミたひと思ふ心も水のあわやがて年あきおそばニて一日也とたのしミに暮そと思ふかひもなふ長ひわかれになつたと思ひすりやァ心も引入るよふで

一時も氣のはれるとァおつせん【柳】きけハきくほどおめへもよくいろ〳〵なうそをいふぞそふ又おやに迄かづけてかわひゝ男のうしろだてをするこたへねへわな【松】色〳〵にこゝろなきうそをつひてつとめてハきたれども余りのことにじれがきて　ヱヽむづかしひことをいゝなんすそんなら今迄申ィしたのハみんなうそざんすコもふいつそ〳〵おやこ兄弟にかへてもかわいひ二世も三世もと約そくしひした　ちからをいれて　モウいつそ〳〵かわいゝ男にわかれへしてから一日へんしわするゝとこじやァおつせんめにちらつくよふで似たこへがしひすりやァむねにごつくりあたりひすくらひでざんすおわかれ申てこの後もいやな客衆のかず〳〵にどんなうひめもつらひめもかわひゝ男にする苦界とおもひゝすりやァちつともつらくもおもひゝせんぬしのやふないやな客でもつとめるのハみんなかわいゝ男にするくがひでおすもしへ是でおうたがひハそれいしたかへかわひゝ男のうわさをしてもあいたひみたひで寐ても覺てもおられハせんかんにんなんし　とくるりとむいて柳枝にせなかのばんをさせる　【柳】すましてハみたれ共少しむつとして　産をする女か鍛治やの手間とりをみる様にひたへェあせハながさなへがマァおれがいふことをきゝなせへあめざへくのおたふくができのいゝ冬瓜をみるよふになまつ白くおゝきなかほをするが心ハおそろしひもんだぜ是が誠ニ外面似菩薩内心如夜叉とやらだぜ　コケツコウ　アヽもふくだかけとやらがなかァあしたがつらへひと寐入しよふ　とぐつとよこぎおひきかぶる　〇　ほどなく雪枝来る　【雪】サァ　柳枝さんおきな

せへなく／＼おいらんもおつかれとミへるしかしもふおきなせへな【柳】めをさましなせけたあくび三ツ四ツ・ツア引く／＼ア、ねると思ふと夜があけたぞ【松】雪枝さんもふおかへりなんすかへ村風さんハへ【雪】どこへいつたかいやセん（と一ふくたばこをすいつけるところへ）【茶若】これハどなたもおはよふこざりまゝす雪枝さん今あなたのおざしきへめいりましたら【雪】こつちへおいでなすつたかサア柳枝さんいきやせう（トつれた）ちかへろはしごおりる音　ドン　間を置て　ドン　ひとりハドン／＼／＼　○　いづれも客をかはせしあとハきてひつそり松への名にはきかへて明やらぬまどの障子ゝ其まゝにまだうすぐらき屏風のうちおきもやらすたばこをのんでいる【梅】おいらん湯におへエなんしてそしておまんまをおあげなんしな【松】湯にもは入りとふもおつせんまんまもたべとふもおつせんからマアさきへなにかをしまひなんし【梅】アイそふじやァおすがねおまんまもすこしおあんなんしなこなひだじやァ朝斗りじやァおつセん三度が二どながらほんとふにやあがらずそしてつゞいてふさひでばかりおいでなんすしさへなんす日ハ一日もおつセんほんに人ハ氣のもちよふでおすによ思ひ／＼のつもるのがついにハ病の根となつてひよつと見せでも引よふになつてみなんし心と心でやくそくしたかわいゝ男に迮はれてあふ夜もなひよふになりなんすわ【松】梅の香の言を涙ながら聞いたりしがおきなほつてふとんの上にたてひざにて　ほんにいつとてもかわらぬおめへのしんせつ雨杏さんの來なんすじぶんからだん／＼わつちのために多くのくろふしなんすわつちがおめへの身の上のとをいふこそほんとふなれおめへにいわれていゝよふもお

つセんほんにぐちの上ぐちになりわつちの心で心がしれへセん〔梅〕おまいさんまだ他人らしいとばかりおいゝなんす苦勞きがねはこのうへにどのよなとがあろふともちつともつらくハおもひゝせんお前さんぜんてへ平生とてもうちばなお氣也それに人のよふにひとつふさぐとがあつても一ッハうさはらしをしなんしよふといふやうなともなくたゞいちづなお氣だからなをわるうおすョ雨杏さんのかたから一向さたハおつセんかへ〔松〕せんどおわかれ申ィす時に內のよふすもかれ是とむづかしひからいつともいわれねへけれども又おれがくるしいづれにおれがほうからさたのねへうちハ人もよこすなといゝなんした其時ハおかほつきも本とうならずいつもにちがつて隨分身の養生を大じにしろの人ハとかく苦勞の世界にいるから何もかもうつちやつて暮すがいゝのと心ぼそひことばかりいつてお歸りなんしてからさつぱりとさたハおつセんハ〔梅〕なぜだねへたとひおいでなんすことも御ふじゆふなら人でもおよこしなんしそふなもんだねへいつたひがァ、ゆふおきだからもしもせまつたうへからハたとひ男の氣だとてもふりやうけんなことてもしなんせんけりやよふおすね〔松〕なミだをふきながら聲もにごりてほんニそんなとをいつておくんなんすないとゞ思ひにますおもひおもひすごしのそのせひかどふやらもふ一生のわれへセんよふな心になりいすせんどお出なんしたばんもなにか心もはれなんセんよふすだから色

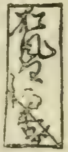
〳〵ときいてもたゞよそ外のことで斗り挨拶しなんすからわつちもついはら立まぎれにむりを申イしたのさあげくのはてにいふことが有から腹をたつなといつておいてだん〳〵のわけもおはなしなんしたが誠にふたすじのぎりにからまつておいでなんすのさ共ばんにもまた何かはなしなんすであつたろふがわつちもしつての通り積がさしこんで手間どりイして少しまどろむと思ふと夜があけイしたわつちどもの身のうへでこんなことをいふもおかしうざんすけれどもほんにいまでハすいたかわひゝよそ外にひとへに雨杏さんのお心がいとしふざんすョたとへ遠國へお出なんしたとても筆のいわせもないといふハさだめてごふじゆなとこにおいでなんしやふョかれ野ゝ身ともなりなんしてごろうじひしほんにおめへさんひとりなんぎ又一ッにハお前さんの思ひなんすほどにもなく雨杏さんハどこやらでたのしみな世界にお出なんすもしれへセん＝

【梅】（心にハおもわねど気をとりなをさせんと）よごと日ことにそふ斗り思ひなんすもよしあしのかたは思ひにあこがれて

【松】そふおもへハ思ひゝすものゝ朝な夕なにいろ〳〵とあんじすごした其時ハはらもたつたり又してハなミだも出たりいろ〳〵の心のもつれかとけへセんほんにこういふしぎになるとハしんに悪縁とやらでおつしやうわすれよふと思ふ程思ひがましてなりィセんほんに雨杏さんがきなんしたらくひついてでもやりてへとおもひゝす（トなミだながらにふししづむ）

【梅】あさから鳥渡いゝ出しィ

しておたがひに何だつたねほんにマァすこしおまんまをおあんなんしな（トいふ所へ）【芳】もしおいらんへ蓬萊やの男衆が一寸お目にかゝりとふおすッサ【梅】三芳なんだへ【芳】なんざんすかおめにかゝりとふおすッサ【松】こつちへよこしてくりやよ【若】（ほどなくきたり）これはおいらんお久しうごぜへますねほんに雨杏さんはおいでなさらずまたいそがしひで大きに／＼御ぶさたになりましたこれは雨杏さんのはふから飛脚でめへりましたからお屆け申ますト



をだす【松】ヲヤ雨杏さんはどこにいなんすへ【若】ハイひきやくの人は常州からめへつたと申ました私アいそがしうござりますからヘイ左様なら（トかへりそふにする）【松】ほんに大きにおせわだつたよそしてつかひの人をちよつとこつちへよこしてくんなんし【若】ハイもふとふにけへりました（ト二行へおりへさう／＼ド）【梅】こふしてまいにちのよふにおうわさせぬ日もないよふでおすから此念がとゞきいしてもたよりがありそふなもんでざんしたね【松】そふさマァどんなことかと（ひらきとれば）

ときたよりにまかせ御なつかしきのまゝ一筆しめしらせまつとや時／＼の御あたりもなふ御くらしなされゆや委しくうけ給り度ぞんじらせわれこともせんし御めもしのせついまか様にいたしおりゆこと迄も御はなし申したくゆへともぬしにもあれまでゆかみとにつきだん／＼の御心づかひもしもうちあけはなしゆれゝたんりよなともあらんかとなにていな

しにあとさきにもつれをつゝむ我むねの内御さつし下されかしせんし御ワかれ申セしゟうちの首尾とてもかねて御しらせの通りまだしんるい内ニ月日を御送るもわが氣しつニ候へハ一時へんしもあいなり申さずあれゟすぐにすこしのゆかりも有候へハ常州のかたへ参り心よりなすかんなんとハ申ながら其いふニ有しにひきかへてさミしき浮世をわたりまいらせ候一寸御きゝもありしなばいなかへゆかずともとおふ勢もあらんなれどもせんし御はるゝあひ申せしとなりのふたおやの心それにつきてはむりならぬ道すじゆへしんるい中のだん〱のいけんたとへ十ヲに六ッの理をもち候とも少しもとふらぬワがことばそれゆへに今のしぎふたおやニもつれのなきよふにし世間てへも節のなき様とおもふゆへのワがはからひか様にいなかへ参るといふもじつハおやのきにさかろふといふものに候へどもいづれにワがみを一旦おとし候ハねば先がたはじめしん類へもたゝぬわけゆへか様の手段にいたしまいらせ候共のち内よりも人も参りだん〱わけ合もつき候まゝ近き内にそのハふへ帰りまいらせ候あざそのふしハさつそくまいり御げんニてくわしきことハ御はなし申まいらせ候と存まいらせ候くどふ申もぐちのよふニハ候へどもせんし御わかれ申ふしもなんのしさいもはなさずさだめて情のうすきものと御くませもあらんとさつしまいらせ候申度ことも數〱のはまの千鳥のたつッい

つ心ハいつそあとやさきかへるかりがねのひきやくだよりに先あらましをちよつとしらせもふし参らせ候筆すへながらミなさまへよろしく御つたへ下されかし梅の香さんへハ別してよろしく御つたへ下されかしまづハあら／＼めでたくかしく

雨　杏　ゟ

松　風　さま

御もとへ

【松】梅の香さんおめへも悦んでくんなんしせんし御わかれ申てから常しうといふ所ニいつておいでなんすッサ【梅】そのくらいなことならハちよつとはなしておいでなんしてもよささふなもんでざんすねおめへさんも猶さらのことお心やすふいたしひしたワたくし迄もあんじすごしいした雨杏さんもいなかへおいでなんしてさぞや氣づまり御ふじゆふにおいでなんしやうちつとも早く御かへりなんしてお目にかゝりとふおすねへ【松】アイサ夫につひても思ひ／＼の念がとゞきいした此お文雨杏さんのお身のうへもしれへしてうれしうおすかふしてとふ／＼へお出なんすとゆへにたよりせぬ内ハ人もよこすなといゝなんしたろふしそふして見ひすりやァ心のけつちやくハとふにきめておきなんしたとゝ見へェしたそれを口にハだしもせず色／＼なこと

できからつてわつちにはらをたゝせたりぬしも氣をもんでおわかれなんしたあのあさのお心ハどんなであんなんしたろふね ト咄し半べへ村風きたる 【村】松風さんけふハどふざんすへちつともお心よふおすかへ 【梅】一ふくすいつけ村風へ出し いつてめへりいしよふね 【松】村風(むらかせ)さんいつも〳〵御しんせつにたづねておくんなんすもふおしつけみせでざんせふねへ トいふうちほとなくひろこせをしらすすゞの音 ガラ〳〵

北廓鷄卯方　尾

北廓鶏卯方後篇

戀の譯知識　全一冊

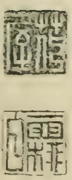
來春可入御覧候

いにしへより滑稽劇談の書夥しといへども皆戀をかひて人の垣を失ふ今ややつはり戀をかひて義理實情のおもしろミをあらハすその實義の根元ハ後篇戀の譯知識にて御覧被下かしと云ミ

北廓鷄卵方跋

いにしへの諺に玉磨ざれば光なしといわ禮しに人も亦性根玉をみかゞねば光所があかつきの鴉のよふに踈まれんこそ恥ならずや余が朋百一子かのかつぎの海士にあらね共胸の魂もて眼睛をば虚言と眞實の中の街にこがく事多年傾城鷄卵方を作る嗚呼美なる哉傾城の玉のやうなる眞直をば磨出したる此冊子たづさへ來て跋を請余もたまく此書を得て瓦のやうな氣玉迄玉らぬ程にこがゝれてあたまをかきくあら玉のとしだまに贈ることとしかり

花屋百排書



青山　茂

大槻正二

大槻尹一

高木好次

校

昭和六年十二月二十五日印刷
昭和六年十二月三十日發行

洒落本大系第七卷

非賣品

著作權所有

編纂者　高木好次
編纂者　山本錬藏
編纂者　渡邊幸

東京市日本橋區吳服橋二丁目五番地
發行者　林平次郎

東京市牛込區矢來町三十六番地
印刷者　本間十三郎

東京日本橋區吳服橋
振替東京二三七一
發行所　六合館

印刷所　清揚社

京傳筆

ゆめのくにも元日
はしに津のゆきら
一えりおゐる
翠人

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 02995 1761